

幌内5遺跡(1)

富里2遺跡

ニタツプナイ遺跡(2)

2010

厚真町教育委員会

幌内5遺跡 (1)
富里2遺跡
ニタツプナイ遺跡 (2)

国営土地改良事業勇払東部(二期)地区
厚幌導水路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3

2010.5

厚真町教育委員会

幌内5遺跡（1）
富里2遺跡
ニタツプナイ遺跡（2）

国営土地改良事業勇払東部(二期)地区
厚幌導水路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3

2010.5

厚真町教育委員会



1. 観内5遺跡 遠景(S→)



2. 観内5遺跡 B地区 Ta-d分布範囲(NE→)

カラー2



1. B地区Yライン削平排土断面(S→)



2. W-26区壁面削平排土断面(S→)



3. 立会区及び丘陵部断面(S→)



4. 丘陵頂部Ta-dテフラ削平範囲(S→)



1. 富里2遺跡 遠景1(NW→)

カラー4



1. 富里2遺跡 遠景2(W→)



2. 富里2遺跡 近景(NE→)



1. 区画遺構〔溝跡・溝状遺構〕完掘(SW→)



2. 溝跡断面1(SE→)



3. 溝跡掘り上げ土断面1(SE→)



4. 溝跡掘り上げ土断面2(NW→)

カラー6



1. 溝跡断面2 (NW→)



2. 整地範囲検出焼土群 (S→)



3. 整地範囲断面 (S→)



1. アイヌ文化期～縄文文化期出土遺物及び動物遺存体



2. ⅢPB-01(右)・02(左)

カラー8



1. ⅢAS-17断面(N→)(○はUs-bテフラ)



2. ⅢAS-15刀出土状態(SE→)



3. ⅢH-06C-D断面(S→)



4. ⅢH-06完掘(S→)

序 文

厚真町は、胆振・日高地区屈指の豊かな水田地帯を有する大いなる田園都市であります。この穀倉地帯を潤す厚真川は夕張山地の南端を源として流れ、農作物への恩恵を授ける大切な河川でもあります。この豊かな厚真川から、農業の町厚真にとって生命線と言える水資源を未来永劫にわたり、田畑へ安定的に供給するため本管総延長 24.5km におよぶ農業用導水管「厚幌導水路」の建設が本格着工されました。

さて、本書はこの厚幌導水路建設と共に、地域に残された埋蔵文化財の記録保存を目的として発掘調査された幌内 5 遺跡、富里 2 遺跡、ニタツナイ遺跡の報告書であります。調査により幌内 5 遺跡では約 5 千 6 百年前の土木工事跡と考えられる場所が見つかっております。富里 2 遺跡では約 1 千年前の祈りの場所と考えられる、台地の先端を溝で区切った区画遺構が見つかっております。そして、約 4 百年前の北海道の先住民族であるアイヌ民族の平地式住居跡も見つかっています。住居跡からはゴザを編む時に使ったと思われる棒状の礫のほか、刀子や古銭など金属製品、ガラス玉、町内で初めての出土例となる播鉢片が見つかっております。ニタツナイ遺跡では平成 19 年に調査した続きから、1 千年前の竪穴式住居跡のほか、5 千 5 百年前の土器がたくさん見つかっております。

これらの発掘成果から、先人たちはこの厚真の自然と共に豊かな文化を育てていたことが克明に分かってきました。

これらの貴重な埋蔵文化財の発見は、厚真町の歴史のみに留まらず、アイヌ民族の歴史、北海道の歴史を考えるうえでも重要な成果と受け止めております。今後は出土品の調査研究は勿論のこと、地域の教育的資源、文化的財産としてより豊かな厚真町を育むための活用を推し進めてまいりたいと思う所存でございます。また、本書が広く埋蔵文化財の保護並びに調査・研究の一助となれば幸いに存じます。

最後となりましたが、発掘調査・整理・報告にあたり御指導、御支援を賜りました関係機関ならびに関係諸氏に、誠に厚く、感謝を申し上げます。次第であります。

厚真町教育委員会
教育長 兵頭 利彦

例言

1. 本書は、平成 21 年度に行った国営土地改良事業勇払東部（二期）地区厚幌導水路建設工事に伴い発掘調査された幌内 5 遺跡（登録番号：J-13-57）・富里 2 遺跡（登録番号：J-13-106）・ニタツブナイ遺跡（搭載番号：J-13-104）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部の委託を厚真町教育委員会が受託した。
3. 調査・整理は以下の体制で行った。

調査担当者：奈良 智法 乾 哲也

調査補助員：山田 和史

測量技能作業員・写図工：海津 孝之 宮崎 美奈子 整備技能作業員：佐伯 憲吾 松本 稔

発掘作業員 11 名 整理作業員 10 名

奈良：金属製品・織文・縄文土器実測、復元・拓影土器撮影、写真図版作成・編集、遺構図作成

山田：礫石器実測・剥片石器実測校正、集石構成礫の実測

乾：統括・渉外

天方博章：発掘・整理業務協力

4. 本書の編集は奈良・乾が行い、各節の執筆は、文末に記す。
5. 関連諸科学の同定分析については、以下の機関および個人に依頼した。

AMS 法 ^{14}C 年代測定：株式会社 加速器分析研究所

動物遺存体同定：千歳市埋蔵文化財センター 高橋 理

炭化種子同定：札幌国際大学 研究員 榎坂 恭代

金属製品保存処理、鋳製品・ガラス製品・漆塗膜片分析：岩手県立博物館 赤沼 英男

石器石材同定：アースサイエンス株式会社 加藤 孝幸

6. 礫石器、集石構成礫、復元織文土器、ガラス玉、金属製品（一部）の写真撮影：
有限会社スタジオクリーク 佐藤 雅彦
7. 剥片石器実測・写真、復元土器実測の一部を株式会社 トラスト技研に委託。
8. 本調査によって得られた資料等は、厚真町教育委員会に保管している。
9. 調査・報告にあたって下記の機関および個人より御指導御協力を頂いた、記して感謝申し上げます。

北海道教育庁生涯学習推進局文化・スポーツ課、国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部、室蘭開発建設部胆振東部農業開発事業所、苫小牧駒澤大学、札幌国際大学、札幌学院大学人文学部、札幌大学、社団法人北海道アイヌ協会、財団法人北海道埋蔵文化財センター、釧路市埋蔵文化財調査センター、千歳市埋蔵文化財センター、苫小牧市博物館、平取町沙流川歴史館、平取町立二風谷アイヌ文化博物館、浦河町立郷土博物館、恵庭市教育委員会、遠軽町教育委員会、白老町教育委員会、上ノ国町教育委員会、新ひだか町教育委員会、せたな町教育委員会、日高町教育委員会、富良野市教育委員会、伊達市噴火湾文化研究所、岩手県立博物館、厚真町富里自治会、厚真町幌内自治会、(有) 佐々木重機、(株) 佐藤組

青野友哉、赤井文人、赤石慎三、秋野茂樹、秋山洋

青野友哉、赤井文人、赤石慎三、秋野茂樹、秋山洋司、阿部明義、天野哲也、荒井章一、荒谷 守、石井 淳、石井 淳平、石川 朗、伊藤昭和、猪熊樹人、白杵 勲、右代啓視、宇田川洋、上屋真一、大沼忠春、岡田路明、長田佳宏、萩野幸男、小野 哲也、柏木大延、加藤 忠、加藤博文、川内谷修、川上 淳、菅野修宏、菊池俊彦、北沢 実、木戸和昭、工藤研治、熊谷仁志、熊木俊朗、講神仁助、児島恭子、越田賢一郎、小山卓臣、斉藤大朋、

斎藤邦典、笹田朋孝、佐藤一夫、佐藤 剛、佐藤 雄生、澤田 健、芝田直人、末光正卓、杉浦重信、鈴木将太、鈴木琢也、鈴木 信、仙庭伸久、高橋和樹、田口 尚、竹内 渉、武永 真、田才雅彦、田中哲朗、種市幸生、田村俊之、千葉英一、塚田直哉、鶴丸俊明、土肥研晶、豊田宏良、中島 積、中田裕香、長沼 孝、長町章弘、西田 茂、西脇対名夫、畑 宏明、広田良成、福井淳一、藤井誠二、藤原秀樹、本田優子、松田淳子、松田宏介、松本建速、丸山浩二、三浦正人、藁島栄紀、宗像公司、森岡健治、福田裕二、藪中剛司、山田 央、山田 哲、山田悟郎、山原敏朗、吉田正明。

凡 例

1. 本書の遺構・遺物等について下記の略号を用いた。なお、層位がこれらの略号に付加している。

〔遺構〕 住居跡：H 住居内のピット：PT 住居の柱穴：HP 土坑：P Tピット：TP 焼土：F
灰集中：AS 杭穴：KP 炭化物集中：CB

〔遺物〕 土器：P 擦文土器：SP 縄文土器：JP 土製品：CP 剥片石器：FT
礫石器：ST フレイク・チップ：FC 礫：S 鉄製品：IP 銅製品：BP
炭化種子：SD 獣骨：B 柱材：W

〔遺物等集中〕 土器片集中：PB 礫集中：SB 獣骨集中：BB フレイク・チップ集中：FCB

2. 地層等について下記の略号を用いた。

〔堆積土〕 樽前 a 砂質降下火山灰：Ta-a 駒ヶ岳 c2 砂質降下火山灰：Ko-c2 樽前 b 降下軽石：Ta-b
有珠 b 降下火山灰：Us-b 白頭山-苫小牧火山灰：B-Tm 樽前 c 砂質降下軽石：Ta-c
樽前 d1 細礫質降下スコリア：Ta-d1 樽前 d2 中礫質降下軽石：Ta-d2.p 恵庭岳 a 降下軽石：En-a
黄褐色粘土質シルト（いわゆるローム）：L 攪乱：KR

〔色調〕 小山・竹原編著（1994）『新版 標準土色帳』に従った。

〔注記〕 土層注記は下記の略号を用いて、左側より混合比率の順列をつけている。また、混入土については（ ）内に粒径（単位：mm）、状態を記載した。

混入土の比率

A + B：A と B が同量比混じる A-B：A を主体に B が多量に混じる

A = B：A を主体に B が少量 A≡B：A を主体に B が微量

φ：粒径（単位：mm） ↓：以下 （状態）：斑状に混じる・均一に混じる

〔層位〕 標準堆積層はローマ数字を用い、遺構覆土や風倒木攪乱などの二次的に堆積したものにはアラビア数字を用いた。また、一覧表中には下記の略号を用いている。

U：上位 M：中位 L：下位

〔焼土〕 被熱による土壌赤色化の度合い等の表現に以下のトーンを用いた。



3. 挿図は基本的に次のように縮尺を統一したが、異なるものについては図中スケールに縮尺を明記している。

基本土層：1/50 遺構周辺図：1/100、1/40 住居跡：1/50 住居跡に付属する柱穴その他の付属遺構：1/20
Ⅲ層土坑：1/20 Tピット：1/40 焼土・灰集中：1/20 炭化物集中：1/20、1/40 集中遺物出土状態：1/10
又は 1/20 土器実測図：1/3 土器拓影図：1/3 剥片石器実測図：1/2 礫石器実測図：1/3、1/4、1/5
金属製品 1/2 又は 1/3 構成礫：1/4

4. 遺構実測図中に以下の線種・トーンを用いている。

[線種] ————— : オーバーハング - - - - - : トレンチ ———— : 攪乱・トレンチによる遺構推定

[柱穴] 平地式住居跡柱穴の断面図において、しまりの強い壁面に斜線を用いている。

[断面]  : 柱穴の壁面周辺が強くしまる部分

5. 土器・石器・金属製品の挿図および写真図版の番号に後続する枝番号は同一個体表記である。

6. 遺物実測図中に以下の略号を用いている。

[断面] V———V : たたき痕 |———| : 剥片石器 微細剥離 / 礫石器 擦り痕・滑沢面

[平面]  : 滑沢面範囲  : 被熱による赤色化/附着物範囲

7. 一覧表中の石材については、山田が肉眼観察で分類した。下記の凡例は第5部第1章第4節で報告された石材同定結果の凡例と同じものである。

[火成岩 他] Obs : 黒曜石 Da : デイサイト (石英安山岩) And : 安山岩 Po : ひん岩

Gb : はんれい岩 Gni : 片麻岩 Bs : 玄武岩 Gbs : 玄武岩 (緑色岩化)

Gdo : ドレライト (粗粒玄武岩, 緑色岩化) Ser : 蛇紋岩 Gra : 花崗岩

[火砕岩 他] Pm : 軽石 LpTf : 火山礫凝灰岩 Tf : 凝灰岩 Wtf : 溶結凝灰岩

[堆積岩] Sa : 砂岩 Mud : 泥岩 Con : 礫岩 Sh : 頁岩 Di-Mud : 珪藻質泥岩

Che : チャート Dsp : 固結蛇紋岩質碎屑物

Aga : メノウ (化学的沈殿岩。晶洞に沈殿したので、周囲の母岩はあるが、置換した原石はない)

[熱水変質岩] Si I : 珪化岩 I (メノウ質頁岩に相当。透明感強い。原岩を置換するが詳細不明)

Si II : 珪化岩 II (透明感にやや乏しい。原岩を置換するが、詳細不明。または沈殿物であるが、透明感に乏しい) Ssh : 珪質頁岩 (原岩が泥質岩)

[変成岩] Amp : 角閃岩 Dio : 閃緑岩 Qu-Sch : 石英片岩 Bl-Sch : 青色片岩 Gsh : 緑色片岩 (片理発達)

Gsh-no : アオトラ型緑色岩 (変成度は緑色片岩相だが片理発達せず。原岩は玄武岩質の粒子からなる凝灰質砂泥質岩)

[その他] Ftr : 木化石 Tul : 滑石

本文目次

カラー図版

- 1-1 梶内5遺跡遠景
- 1-2 梶内5遺跡B地区Ta-d分布範囲
- 2-1 B地区Yライン削平排土断面
- 2-2 W-26区壁面削平排土断面
- 2-3 丘陵頂部Ta-dテフラ削平範囲
- 3-1 富里2遺跡遠景1
- 4-1 富里2遺跡遠景2
- 4-2 富里2遺跡近景
- 5-1 区画遺構〔溝跡・溝状遺構〕完掘
- 5-2 溝跡断面1
- 5-3 溝跡掘り上げ土断面1
- 5-4 溝跡掘り上げ土断面2
- 6-1 溝跡断面2
- 6-2 整地範囲検出焼土群
- 6-3 整地範囲断面
- 7-1 アイヌ文化期～縄文文化期出土遺物及び動物遺存体
- 7-2 III PB-01(右)・02(左)
- 8-1 III AS-17断面
- 8-2 III AS-15刀出土状態
- 8-3 III H-06 C-D断面
- 8-4 III H-06完掘

序文

例言

凡例

第1部 調査の概要

第1章 調査の概要

- 第1節 調査要項と体制…………… 1
 - 1. 調査要項…………… 1
 - 2. 調査体制…………… 1
- 第2節 調査に至る経緯…………… 1
 - 1. 国営土地改良事業勇払東部(二期)地区厚幌導水路建設事業…………… 1

- 2. 厚幌導水路建設事業に係る所在確認調査と試掘調査…………… 3

第2章 厚真町の概要

- 第1節 地理的環境…………… 3
- 第2節 歴史的環境…………… 4
 - 1. 埋蔵文化財包蔵地の概要…………… 4
 - 2. 町内における埋蔵文化財調査の概要…………… 5
 - 3. 歴史時代…………… 5

第3章 出土遺物の分類

- 第1節 土器…………… 12
- 第2節 石器…………… 13

第2部 梶内5遺跡

第1章 調査の概要

- 第1節 調査要項と経緯…………… 15
 - 1. 調査要項…………… 15
 - 2. 発掘調査までの経緯…………… 15
- 第2節 調査の方法…………… 19
 - 1. 調査区の設定…………… 19
 - 2. グリッド設定…………… 19
 - 3. 包含層及び遺構の調査方法と経緯…………… 19
 - 4. 整理作業…………… 21
- 第3節 調査結果の概要…………… 22
 - 1. 平成21年度 III層の調査概要…………… 22
 - 2. 平成21年度 V層の調査概要…………… 22
- 第4節 遺跡の位置と周辺の環境…………… 23
 - 1. 自然地理的環境…………… 23
 - 2. 歴史的環境…………… 24
 - 3. 調査区内の地形と地質…………… 26

第2章 続縄文・縄文文化期の調査

- 第1節 土坑…………… 34
- 第2節 包含層出土遺物…………… 34
 - 1. 石器…………… 34

第3章 縄文時代の調査

- 第1節 整地に伴う削平排土…………… 37
- 第2節 Tピット…………… 39

第3節	炭化物集中	40
第4節	遺物集中	41
1.	フレイク・チップ集中	41
2.	土器集中	41
3.	礫集中	46
第5節	包含層出土遺物	46
1.	土器・土製品	46
2.	剥片石器	56
3.	礫石器	66

第IV章 まとめ

第1節	総括	85
第2節	整地に伴う排土について	85
第3節	土器	86

写真図版

図版	87~106
----	--------

第3部 富里2遺跡

第I章 調査の概要

第1節	調査要項と経緯	107
1.	調査要項	107
2.	発掘調査までの経緯	107
第2節	調査の方法	107
1.	調査区の設定	107
2.	グリッド設定	110
3.	包含層及び遺構の調査方法	110
4.	整理作業	112
第3節	調査結果の概要	112
1.	Ⅲ層の調査概要	112
2.	V層の調査概要	115
第4節	遺跡の位置と環境	115
1.	遺跡の位置と周辺の環境	115
2.	調査区内の地形と地質	120
第II章 アイヌ文化期の調査		
第1節	住居跡	126
第2節	建物跡	135
第3節	杭跡	135
第4節	焼土・灰集中	137

第5節	獣骨集中及び礫集中	141
第6節	包含層出土遺物	145
1.	礫石器	145
2.	金属製品	149

第III章 続縄文・擦文文化期の調査

第1節	区画遺構	156
1.	溝跡	156
2.	溝状遺構	159
3.	整地範囲	159
第2節	土坑・焼土	161
第3節	土器集中	167
第4節	礫集中	170
第5節	包含層出土遺物	170
1.	土器	170
2.	剥片石器	171
3.	礫石器	172

第IV章 縄文時代の調査

第1節	Tピット	174
第2節	包含層出土遺物	176
1.	土器・土製品	176
2.	剥片石器	181
3.	礫石器	182

第V章 まとめ

第1節	総括	183
第2節	区画遺構の構築と周辺の遺構	184

写真図版

図版	187~210
----	---------

第4部 ニタツナイ遺跡

第I章 調査の概要

第1節	調査要項と経緯	211
1.	調査要項	211
2.	工事立会までの経緯	211
第2節	工事立会の経過と概要	213
1.	工事立会の経過	213
2.	遺物回収作業	214
3.	工事立会成果の概要	215

第二章 アイヌ文化期の調査	
第1節	杭跡……………216
第2節	灰集中・炭化物集中・獣骨集中……………216
第3節	礫集中……………220
第4節	包含層出土金属製品……………221
第三章 擦文文化期の調査	
第1節	住居跡……………222
第2節	包含層出土土器……………226
第四章 縄文時代の調査	
第1節	包含層出土遺物……………229
1.	土器……………229
2.	剥片石器……………234
3.	礫石器……………237
写真図版	
図版	……………245～254
第5部 自然科学的分析	
第I章 理化学的分析	
第1節	幌内5遺跡、富里2遺跡、ニタツプナイ遺跡における放射性炭素年代……………255
第2節	富里2遺跡出土ガラス玉・ニンカリ・漆片の自然科学的調査結果……………259
A.	ガラス玉……………259

B.	ニンカリ……………262
C.	漆片……………265
第3節	富里2遺跡出土柱材の樹種同定……………271
第4節	厚真町幌内5遺跡・富里2遺跡他出土の石器石材同定……………274
第二章 動植物遺存体同定	
第1節	北海道勇払郡厚真町厚幌導水路建設事業調査遺跡出土の動物遺存体……………278
1.	北海道勇払郡厚真町幌内5遺跡出土の動物……………278
2.	北海道勇払郡厚真町富里2遺跡出土の動物……………279
第2節	北海道勇払郡厚真町厚幌導水路建設事業調査遺跡出土の炭化種子……………288
1.	厚真町幌内5遺跡から検出された炭化植物種子……………288
2.	厚真町富里2遺跡から検出された炭化植物種子……………292
3.	平成20・21年度厚真町ニタツプナイ遺跡から検出された炭化植物種子……………297
引用・参考文献	
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1部 調査の概要

第I章	
図I-1	厚幌導水路計画路線図(全線)……………2
第II章	
図II-1	厚真町内遺跡分布図……………7
図II-2	幌内地区中流域から富里地区にかけての遺跡分布図……………11
第2部 幌内5遺跡	
第I章	
図I-1	周辺の遺跡分布図……………15
図I-2	周辺の地形図及びグリッド設定図……………16
図I-3	調査範囲及び試掘坑位置図……………18

図I-4	境界杭・グリッド設定基準杭位置図及び施工断面図……………20
図I-5	小グリッド模式図……………20
図I-6	幌内5遺跡関連記事……………25
図I-7	堆積状態実測位置図及びV・IX層調査範囲……………28
図I-8	基本土層柱状図(3遺跡分)……………29
図I-9	旧石器確認調査土層柱状図……………30
図I-10	調査区北壁断面図1……………31
図I-11	調査区北壁断面図2……………32
図I-12	調査区北壁断面図3……………33
第II章	
図II-1	続縄文・擦文文化期遺構分布図……………35

図Ⅱ-2	ⅢP-01 平面及び断面図	36
図Ⅱ-3	縄文・擦文文化期包含層出土土器	36
第Ⅲ章		
図Ⅲ-1	縄文時代遺構配置及び削平排土分布図	38
図Ⅲ-2	T P-01 平面及び断面図	39
図Ⅲ-3	VCB-01～03・VFCB-01 平面及び断面図	42
図Ⅲ-4	VCB-03・VFCB-01 出土土器	43
図Ⅲ-5	VPB-01・VSB-01 平面図	43
図Ⅲ-6	VPB-01 出土土器	44
図Ⅲ-7	VSB-01 出土土器(1)	44
図Ⅲ-8	VSB-01 出土土器(2)	45
図Ⅲ-9	縄文時代包含層出土土器(1)	49
図Ⅲ-10	縄文時代包含層出土土器(2)	50
図Ⅲ-11	縄文時代包含層出土土器(3)・土製品	51
図Ⅲ-12	縄文時代土器接合線図	55
図Ⅲ-13	縄文時代包含層出土剥片石器(1)	60
図Ⅲ-14	縄文時代包含層出土剥片石器(2)	61
図Ⅲ-15	縄文時代包含層出土剥片石器(3)	62
図Ⅲ-16	縄文時代包含層出土剥片石器(4)	63
図Ⅲ-17	縄文時代包含層出土礫石器(1)	70
図Ⅲ-18	縄文時代包含層出土礫石器(2)	71
図Ⅲ-19	縄文時代包含層出土礫石器(3)	72
図Ⅲ-20	縄文時代包含層出土礫石器(4)	73
図Ⅲ-21	縄文時代包含層出土礫石器(5)	74
図Ⅲ-22	縄文時代包含層出土礫石器(6)	75
図Ⅲ-23	縄文時代包含層出土礫石器(7)	76
図Ⅲ-24	縄文時代包含層出土礫石器(8)	77
図Ⅲ-25	縄文時代包含層出土礫石器(9)	78
図Ⅲ-26	縄文時代包含層出土礫石器(10)	79
図Ⅲ-27	縄文時代包含層出土礫石器(11)	80
図Ⅲ-28	縄文時代包含層出土礫石器(12)	81
図Ⅲ-29	縄文時代包含層出土礫石器(13)	82

第3部 富里2遺跡

第Ⅰ章

図Ⅰ-1	調査区設定及び試掘溝位置図	108
図Ⅰ-2	周辺の地形及びグリッド設定図	109
図Ⅰ-3	境界杭・グリッド設定基準杭 及び拡張トレンチ位置図	111

図Ⅰ-4	富里2遺跡周辺の地形と文化的環境	117
図Ⅰ-5	基本土層柱状図	122
図Ⅰ-6	上流側北西壁断面図1	123
図Ⅰ-7	上流側北西壁断面図2	124
図Ⅰ-8	斜面～平坦部断面図	125

第Ⅱ章

図Ⅱ-1	アイヌ文化期遺構配置図	127
図Ⅱ-2	ⅢH-01 平面及び炉跡断面図	128
図Ⅱ-3	ⅢH-01、HF01 及びⅢSB-01 平面図	130
図Ⅱ-4	ⅢH-01、HP 断面図	131
図Ⅱ-5	ⅢH-01 出土遺物	132
図Ⅱ-6	建物跡1・2 平面及び断面図	136
図Ⅱ-7	杭跡分布図及び平面・断面図	138
図Ⅱ-8	ⅢF-12・ⅢAS-01～03 平面及び断面図	142
図Ⅱ-9	ⅢAS-04 平面・断面図及び 周辺獣骨分布図	143
図Ⅱ-10	ⅢBB-01～03・ⅢSB-02 平面 及び遺物分布図	146
図Ⅱ-11	ⅢF-12・ⅢAS-01・02・ ⅢBB-01・03 出土遺物	147
図Ⅱ-12	ⅢSB-02 出土礫石器及び礫	148
図Ⅱ-13	ⅢSB-03 平面図及び出土礫	150
図Ⅱ-14	ⅢBB-01～03 出土礫	151
図Ⅱ-15	アイヌ文化期包含層出土礫石器・ 金属製品	152
図Ⅱ-16	アイヌ文化期上流側遺物分布図	153

第Ⅲ章

図Ⅲ-1	縄文・擦文文化期遺構配置図 ・土器接合線図	155
図Ⅲ-2	区画遺構平面及び断面図	157
図Ⅲ-3	溝跡断面図	160
図Ⅲ-4	ⅢP-01・ⅢF-02～04 平面 及び断面図	162
図Ⅲ-5	ⅢF-05～11 平面及び断面図	163
図Ⅲ-6	ⅢPB-01・02・ⅢSB-04 平面図	168
図Ⅲ-7	ⅢF-02・09・ⅢPB-01・02・ ⅢSB-04 出土遺物	169
図Ⅲ-8	擦文文化期包含層出土土器	171
図Ⅲ-9	縄文・擦文文化期包含層出土土器	173

第IV章

図IV-1	縄文時代遺構配置図・土器接合線図	175
図IV-2	T P-01 平面及び断面図	176
図IV-3	縄文時代包含層出土土器	177
図IV-4	縄文時代包含層出土剥片石器・礫石器	179
図IV-5	縄文時代包含層出土礫石器	180

第V章

図V-1	ⅢX-01 位置図及び平面図	185
図V-2	時期別段丘先端利用推定図	186

第4部 ニタツナイ遺跡

第I章

図I-1	工事立会位置図及びグリッド設定図	212
------	------------------	-----

第II章

図II-1	アイヌ文化期遺構配置図及び 金風製品分布図	217
図II-2	ⅢAS-15～17・ⅢCB-13・ⅢKP-61～65 平面及び断面図	218
図II-3	ⅢSB-08 出土礫	219

図II-4	ⅢAS-15及びアイヌ文化期 出土金属製品	221
-------	--------------------------	-----

第III章

図III-1	擦文文化期遺構配置図及び 土器接合線図	223
図III-2	ⅢH-06 平面図	224
図III-3	ⅢH-06 付属遺構平面及び断面図	225
図III-4	ⅢH-06 及び擦文文化期 包含層出土土器	227
図III-5	ⅢH-06・PT01 出土礫	228

第IV章

図IV-1	縄文時代包含層出土土器(1)	230
図IV-2	縄文時代包含層出土土器(2)	231
図IV-3	縄文時代包含層出土剥片石器	236
図IV-4	縄文時代包含層出土礫石器(1)	240
図IV-5	縄文時代包含層出土礫石器(2)	241
図IV-6	縄文時代包含層出土礫石器(3)	242
図IV-7	縄文時代包含層出土礫石器(4)	243

挿表目次

第1部 調査の概要

第II章

表II-1	厚真町内埋蔵文化財 包蔵地一覧表(1)	8
表II-2	厚真町内埋蔵文化財 包蔵地一覧表(2)	9
表II-3	厚真町内埋蔵文化財 包蔵地一覧表(3)	10

第2部 幌内5遺跡

第I章

表I-1	幌内5遺跡試掘調査一覧表	17
表I-2	幌内5遺跡調査区内訳	20
表I-3	グリッド設定関係杭座標値一覧表	20
表I-4	幌内5遺跡時代別概要一覧表	23
表I-5	幌内5遺跡出土遺物一覧表	23
表I-6	遺構群一覧表	23

第II章

表II-1	ⅢP-01 属性表	36
表II-2	続縄文・擦文文化期包含層出土 石器属性表	36

第III章

表III-1	縄文時代遺構群一覧表	37
表III-2	T P-01 属性表	40
表III-3	V CB-01～03・V FCB-01 属性表	43
表III-4	V CB-03・V FCB-01 出土石器属性表	43
表III-5	V PB-01 出土石器属性表	45
表III-6	V SB-01 出土石器属性表	46
表III-7	縄文時代包含層出土土器属性表(1)	52
表III-8	縄文時代包含層出土土器属性表(2)	53
表III-9	縄文時代包含層出土土器(3)・ 土製品属性表	54
表III-10	縄文時代包含層出土 剥片石器属性表(1)	64

表Ⅲ-11	縄文時代包含層出土 剥片石器属性表(2) ……………	65
表Ⅲ-12	縄文時代包含層出土礫石器属性表(1)	83
表Ⅲ-13	縄文時代包含層出土礫石器属性表(2)	84

第3部 富里2遺跡

第1章

表I-1	富里2遺跡試掘調査一覧表 ……………	109
表I-2	グリッド設定関係杭座標値一覧表 ……	111
表I-3	富里2遺跡出土遺物一覧表 ……………	113
表I-4	富里2遺跡時代別概要一覧表 ……………	114
表I-5	遺構群一覧表 ……………	114
表I-6	富里2遺跡周辺の埋蔵文化財包蔵地 ……	117
表I-7	富里2遺跡周辺の自然 及び文化的環境 ……………	118

第2章

表II-1	アイヌ文化期遺構群一覧表 ……………	126
表II-2	ⅢH-01 属性表 ……………	129
表II-3	ⅢH-01 付属が属性表 ……………	130
表II-4	ⅢH-01 柱穴属性表 ……………	131
表II-5	ⅢH-01 出土遺物・柱材属性表 ……………	133
表II-6	ⅢSB-01 礫属性表 ……………	134
表II-7	建物跡1・2 柱穴属性表 ……………	137
表II-8	杭跡属性表 ……………	140
表II-9	ⅢF-12・ⅢAS-01~04 属性表 ……………	142
表II-10	ⅢBB-01~03 属性表 ……………	148
表II-11	ⅢF-12・ⅢAS-01・02・ⅢBB-01・03・ ⅢSB-02 出土遺物属性表 ……………	149
表II-12	ⅢSB-02 礫属性表 ……………	149
表II-13	ⅢSB-03 礫属性表 ……………	150
表II-14	ⅢBB-01 礫属性表 ……………	151
表II-15	ⅢBB-02 礫属性表 ……………	151
表II-16	ⅢBB-03 礫属性表 ……………	151
表II-17	アイヌ文化期包含層出土礫石器・ 金属製品属性表 ……………	152

第3章

表Ⅲ-1	縄文・擦文文化期遺構群一覧表 ……	154
------	-------------------	-----

表Ⅲ-2	区画遺構属性表 ……………	161
表Ⅲ-3	ⅢP-01 属性表 ……………	166
表Ⅲ-4	ⅢF-02~11 属性表 ……………	167
表Ⅲ-5	縄文・擦文文化期遺構出土 遺物属性表 ……………	169
表Ⅲ-6	ⅢPB-01・02 出土土器属性表 ……………	170
表Ⅲ-7	ⅢSB-04 礫属性表 ……………	170
表Ⅲ-8	擦文文化期包含層出土土器属性表 ……	171
表Ⅲ-9	縄文・擦文文化期包含層 出土石器属性表 ……………	172

第4章

表IV-1	縄文時代遺構一覧表 ……………	174
表IV-2	T P-01 属性表 ……………	176
表IV-3	Tピット逆茂木属性表 ……………	176
表IV-4	縄文時代包含層出土土器属性表 ……………	178
表IV-5	縄文時代包含層出土剥片石器属性表 ……	181
表IV-6	縄文時代包含層出土礫石器属性表 ……	181

第4部 ニタツナイ遺跡

第1章

表I-1	工事立会調査経過 ……………	214
表I-2	ニタツナイ遺跡出土遺物一覧表 ……	215
表I-3	遺構群一覧表 ……………	215

第2章

表II-1	ⅢAS-15~17・ⅢCB-13 属性表 ……………	219
表II-2	柱穴属性表 ……………	219
表II-3	ⅢSB-08 出土礫属性表 ……………	219
表II-4	ⅢAS-15 及びアイヌ文化期 出土金属製品属性表 ……………	221

第3章

表Ⅲ-1	ⅢH-06 属性表 ……………	224
表Ⅲ-2	ⅢH-06 付属遺構属性表 ……………	226
表Ⅲ-3	ⅢH-06 柱穴属性表 ……………	226
表Ⅲ-4	ⅢH-06 及び擦文文化期 包含層出土土器属性表 ……………	227
表Ⅲ-5	ⅢH-06・PT01 出土礫属性表 ……………	228

第四章

- 表IV-1 縄文時代包含層出土土器属性表(1)・232
表IV-2 縄文時代包含層出土土器属性表(2)・233

- 表IV-3 縄文時代包含層出土剥片石器属性表・237
表IV-4 縄文時代包含層出土礫石器属性表・244

写真目次

第2部 横内5遺跡

- 図版 1-1 B地区斜面断面…………… 87
図版 1-2 A地区斜面断面…………… 87
図版 1-3 調査区頂部断面…………… 87
図版 1-4 調査区頂部 Ta-d テフラ堆積状態…………… 87
図版 1-5 A地区斜面調査状況…………… 87
図版 1-6 B地区調査状況…………… 87
図版 1-7 B地区斜面調査状況…………… 87
図版 1-8 調査区頂部旧石器確認調査…………… 87
図版 2-1 III P-01 完掘…………… 88
図版 2-2 III P-01 断面…………… 88
図版 2-3 T P-01 完掘…………… 88
図版 2-4 T P-01 断面…………… 88
図版 2-5 VCB-01 検出…………… 88
図版 2-6 VCB-01 断面…………… 88
図版 2-7 VCB-02 検出…………… 88
図版 2-8 VCB-03 検出…………… 88
図版 3-1 VFCB-01 検出…………… 89
図版 3-2 VPB-01・VSB-01 検出…………… 89
図版 3-3 VPB-01・VSB-01 出土状態…………… 89
図版 3-4 VPB-01 出土状態…………… 89
図版 3-5 B地区斜面遺物出土及び
排土分布状態…………… 89
図版 4-1 削平確認 TR1 断面…………… 90
図版 4-2 削平確認 TR2 断面…………… 90
図版 4-3 削平確認 TR4 断面…………… 90
図版 4-4 削平確認 TR5 断面…………… 90
図版 4-5 削平確認 TR6 断面…………… 90
図版 4-6 削平確認 TR7 断面…………… 90
図版 4-7 削平確認 TR8 断面…………… 90
図版 4-8 頂部旧石器確認 TR 断面…………… 90
図版 5-1 統縄文・擦文文化期包含層出土石器…………… 91

- 図版 5-2 VCB-03・VFCB-01 出土石器…………… 91
図版 5-3 VPB-01 出土石器…………… 91
図版 6-1 VSB-01 出土石器…………… 92
図版 7-1 縄文時代包含層出土石器(1)…………… 93
図版 8-1 縄文時代包含層出土石器(2)…………… 94
図版 9-1 縄文時代包含層出土石器(3)・土製品…………… 95
図版 10-1 縄文時代包含層出土剥片石器(1)…………… 96
図版 11-1 縄文時代包含層出土剥片石器(2)…………… 97
図版 12-1 縄文時代包含層出土剥片石器(3)…………… 98
図版 13-1 縄文時代包含層出土剥片石器(4)…………… 99
図版 14-1 縄文時代包含層出土礫石器(1)…………… 100
図版 15-1 縄文時代包含層出土礫石器(2)…………… 101
図版 16-1 縄文時代包含層出土礫石器(3)…………… 102
図版 17-1 縄文時代包含層出土礫石器(4)…………… 103
図版 18-1 縄文時代包含層出土礫石器(5)…………… 104
図版 19-1 縄文時代包含層出土礫石器(6)…………… 105
図版 20-1 縄文時代包含層出土礫石器(7)…………… 106
図版 20-2 畑地造成時出土金属製品
(平成3年)…………… 106

第3部 富里2遺跡

- 図版 1-1 下流側斜面北壁断面…………… 187
図版 1-2 下流側平坦面北壁断面…………… 187
図版 1-3 上流側北壁断面…………… 187
図版 2-1 調査区近景…………… 188
図版 2-2 調査状況1〔下流側斜面〕…………… 188
図版 2-3 調査状況2〔発掘実習〕…………… 188
図版 2-4 調査状況3〔遺物点測量〕…………… 188
図版 3-1 III H-01 完掘…………… 189
図版 3-2 III SB-01 出土状態1…………… 189
図版 3-3 III SB-01 出土状態2…………… 189
図版 3-4 III H-01、HF01 被熱層検出…………… 189

図版 3-5	Ⅲ H-01. HF01 断面	189	図版 7-10	Ⅲ KP48 断面	193
図版 4-1	Ⅲ H-01 柱穴列	190	図版 7-11	Ⅲ KP52 断面	193
図版 4-2	Ⅲ HP09 断面	190	図版 7-12	Ⅲ KP53 断面	193
図版 4-3	Ⅲ HP09 完掘	190	図版 7-13	Ⅲ KP60 断面	193
図版 4-4	Ⅲ HP10 断面	190	図版 7-14	Ⅲ KP63 断面	193
図版 4-5	Ⅲ HP10 柱材	190	図版 7-15	Ⅲ KP67 断面	193
図版 4-6	Ⅲ HP12 断面	190	図版 8-1	Ⅲ BB-01 検出	194
図版 4-7	Ⅲ HP12 柱材	190	図版 8-2	Ⅲ BB-02 検出	194
図版 4-8	Ⅲ HP16 断面	190	図版 8-3	Ⅲ BB-03(奥)・Ⅲ SB-02 検出	194
図版 4-9	Ⅲ HP16 断面	190	図版 8-4	Ⅲ BB-03 下顎	194
図版 4-10	Ⅲ HP17 断面	190	図版 8-5	Ⅲ BB-03 鉄鍋片出土状態	194
図版 4-11	Ⅲ HP21 断面	190	図版 8-6	Ⅲ SB-02 検出	194
図版 4-12	Ⅲ HP50(左)・Ⅲ HP51(右)断面	190	図版 8-7	Ⅲ SB-03 検出	194
図版 5-1	建物跡 1 完掘	191	図版 8-8	上流側集中遺物出土状態	194
図版 5-2	Ⅲ KP33 断面	191	図版 9-1	溝跡推定範囲	195
図版 5-3	Ⅲ KP30 断面	191	図版 9-2	溝跡検出	195
図版 5-4	Ⅲ KP31 断面	191	図版 9-3	溝跡断面 1	195
図版 5-5	Ⅲ KP32 断面	191	図版 9-4	溝跡断面 2	195
図版 5-6	Ⅲ KP34 断面	191	図版 9-5	溝跡 TR 4 断面	195
図版 5-7	Ⅲ AS-01(左)・02(右)検出	191	図版 10-1	溝状遺構検出	196
図版 6-1	Ⅲ AS-01 検出	192	図版 10-2	区画遺構(溝跡・溝状遺構)完掘	196
図版 6-2	Ⅲ AS-01 断面	192	図版 10-3	溝状遺構断面 1	196
図版 6-3	Ⅲ AS-02 検出	192	図版 10-4	溝状遺構断面 5	196
図版 6-4	Ⅲ AS-02 断面	192	図版 10-5	Ⅲ KP47・溝状断面	196
図版 6-5	Ⅲ AS-03 検出	192	図版 10-6	溝状 TR 3・溝状遺構検出	196
図版 6-6	Ⅲ AS-03 断面	192	図版 10-7	溝状 TR 3・溝状遺構断面	196
図版 6-7	Ⅲ AS-04 検出	192	図版 11-1	溝跡 TR 1	197
図版 6-8	Ⅲ AS-04 断面	192	図版 11-2	溝跡 TR 2	197
図版 7-1	Ⅲ KP01~08 完掘	193	図版 11-3	溝跡 TR 3	197
図版 7-2	Ⅲ KP01 断面	193	図版 11-4	溝跡 TR 4	197
図版 7-3	Ⅲ KP05 断面	193	図版 11-5	整地範囲内Ⅲ P-01・ Ⅲ F-06~09 検出	197
図版 7-4	Ⅲ KP06 断面	193	図版 12-1	Ⅲ F-02 検出	198
図版 7-5	Ⅲ KP20 断面	193	図版 12-2	Ⅲ F-02 断面	198
図版 7-6	Ⅲ KP23 断面	193	図版 12-3	Ⅲ F-06 検出	198
図版 7-7	Ⅲ KP27 断面	193	図版 12-4	Ⅲ F-06 断面	198
図版 7-8	Ⅲ KP36 断面	193	図版 12-5	Ⅲ F-07 検出	198
図版 7-9	Ⅲ KP41 断面	193			

図版 12-6	Ⅲ F-07 断面	198
図版 12-7	Ⅲ F-08(左)・09(右)検出	198
図版 12-8	Ⅲ F-08 断面	198
図版 13-1	Ⅲ F-09 断面	199
図版 13-2	Ⅲ F-09 ニンカリ出土 1	199
図版 13-3	Ⅲ F-09 ニンカリ出土 2	199
図版 13-4	整地範囲断面	199
図版 13-5	Ⅲ P-01 完掘	199
図版 13-6	Ⅲ P-01 断面	199
図版 13-7	Ⅲ F-03 検出	199
図版 13-8	Ⅲ F-04 検出	199
図版 13-9	Ⅲ F-03 断面	199
図版 13-10	Ⅲ F-04 断面	199
図版 14-1	Ⅲ F-05 検出	200
図版 14-2	Ⅲ F-05 断面	200
図版 14-3	Ⅲ F-10 検出	200
図版 14-4	Ⅲ F-10 断面	200
図版 14-5	Ⅲ F-11 検出	200
図版 14-6	Ⅲ PB-01 出土状態	200
図版 14-7	Ⅲ PB-02 出土状態	200
図版 14-8	Ⅲ SB-04 出土状態	200
図版 15-1	I-21 区 播鉢出土状態	201
図版 15-2	J-22 区 刀子出土状態	201
図版 15-3	F-18 区 鉄鍋出土状態	201
図版 15-4	カワシンジュガイ殻皮出土状態	201
図版 15-5	カワシンジュガイ・古銭出土状態	201
図版 15-6	古銭壁面出土状態	201
図版 15-7	擦文土器壁面出土状態	201
図版 15-8	J・K-23 区擦文土器出土状態	201
図版 16-1	T P-01 完掘	202
図版 16-2	T P-01 断面	202
図版 16-3	T P-01 逆茂木跡検出	202
図版 16-4	縄文晩期遺物出土状態	202
図版 16-5	M-24 区遺物出土状態	202
図版 16-6	黒曜石石核出土状態	202
図版 16-7	旧石器トレンチ調査状態	202
図版 16-8	旧石器 TR 2 断面	202

図版 17-1	Ⅲ H-01 出土遺物	203
図版 17-2	Ⅲ H-01・Ⅲ SB-01 出土礫	203
図版 18-1	Ⅲ AS-01・02・Ⅲ SB-02 ・Ⅲ BB-01・03 出土遺物	204
図版 19-1	Ⅲ SB-02(左)・03(右)出土礫	205
図版 19-2	Ⅲ BB-01(中)・02(左)・03(右)出土礫	205
図版 20-1	アイヌ文化期包含層出土 礫石器・金属製品	206
図版 21-1	Ⅲ F-02 出土遺物	207
図版 21-2	Ⅲ PB-01(左)・02(右)出土土器	207
図版 21-3	Ⅲ SB-04 出土礫	207
図版 22-1	統縄文・擦文文化期 包含層出土土器・石器	208
図版 23-1	縄文時代 包含層出土土器	209
図版 24-1	縄文時代包含層出土土器	210

第4部 ニタツブナイ遺跡

図版 1-1	現道下盛土除去状況	245
図版 1-2	平成20年度作業状況	245
図版 1-3	火山灰除去後	245
図版 1-4	基本層序	245
図版 1-5	Ⅲ AS-16 検出	245
図版 1-6	Ⅲ AS-17 検出	245
図版 1-7	Ⅲ KP-61 断面	245
図版 1-8	Ⅲ KP-62 断面	245
図版 1-9	Ⅲ KP-63 断面	245
図版 1-10	Ⅲ KP-65 断面	245
図版 2-1	Ⅲ H-06 断面 1	246
図版 2-2	Ⅲ H-06 断面 2	246
図版 2-3	Ⅲ H-06 断面 3	246
図版 2-4	Ⅲ H-06 堀り上げ土断面	246
図版 2-5	Ⅲ H-06、HF01 検出	246
図版 2-6	Ⅲ H-06、HF01 断面	246
図版 2-7	Ⅲ H-06、PT01 集石出土状態	246
図版 2-8	Ⅲ H-06 屋根土及び礫出土状態	246
図版 3-1	Ⅲ H-06 完掘	247
図版 3-2	屋根土及び炭化材断面	247

図版 3-3	ⅢH-06 床面炭化材	247	図版 5-2	ⅢH-06.PT01 出土礫	249
図版 3-4	ⅢHP-02 断面	247	図版 6-1	縄文時代包含層出土土器(1)	250
図版 3-5	ⅢHP-03 断面	247	図版 7-1	縄文時代包含層出土土器(2)	251
図版 3-6	平成 21 年度遺物回収状況	247	図版 8-1	縄文時代包含層出土剥片石器	252
図版 4-1	アイヌ文化期出土金属製品	248	図版 9-1	縄文時代包含層出土礫石器(1)	253
図版 4-2	ⅢSB-08 出土礫	248	図版 10-1	縄文時代包含層出土礫石器(2)	254
図版 5-1	ⅢH-06 及び擦文文化期 包含層出土土器	249			

第1部
調査の概要

第1章 調査の概要

第1節 調査要項と体制

1. 調査要項

事業名：国営土地改良事業勇払東部（二期）地区 厚幌導水路建設用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部

受託者：厚真町教育委員会

調査遺跡：幌内5遺跡（J-13-57）、北海道勇払郡厚真町字幌内1032-5ほか、調査面積854㎡
（この他、工事立会700㎡）

富里2遺跡（J-13-106）、北海道勇払郡厚真町字富里389-1、調査面積770㎡

ニタツナイ遺跡（J-13-104）、北海道勇払郡厚真町字富里299-1ほか、遺物回収

受託期間：平成21年4月1日～平成22年3月31日

2. 調査体制

以下の調査体制は幌内5遺跡および富里2遺跡に共通する。

厚真町教育委員会 教育長 兵頭 利彦

生涯学習課社会教育グループ

参事 佐藤 照美 主査 森田 正樹 学芸員 乾 哲也（調査担当者）

嘱託職員 奈良 智法（調査担当者）・山田 和史（調査補助員）・佐々木 都（事務員）

臨時職員 海津 孝之・宮崎 美奈子（測量技能作業員および写真工）

〃 松本 稔・佐伯 憲吾（整備技能作業員）

〃 発掘作業員 11名 整理作業員 10名（乾）

第2節 調査に至る経緯

1. 国営土地改良事業勇払東部（二期）地区 厚幌導水路建設事業

町内を縦貫する厚真川中下流域には約3,000ha以上もの水田、畑作地帯が広がる胆振日高管内随一の穀倉地帯で、農業が厚真町の基幹産業となっている。これらの水田は流域沿いの沖積低地に形成されているため厚真川の洪水による冠水被害が生じている。さらに近年では一部の地域で農業用水が不足する事態も発生しており営農に深刻な影響が及んでいる。このため洪水調整や農業用水確保などを兼ね備えた多目的ダム「厚幌ダム」建設工事が平成14年度より着工された。

本遺跡の発掘調査原因となった国営土地改良事業勇払東部（二期）地区 厚幌導水路建設事業は国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部が進める農業農村整備事業である。北海道で事業を進めている厚幌ダム建設事業と連動し、平成7（1995）年に北海道と厚真町との間で締結された「厚真川総合開発事業厚幌ダム建設工事に関する基本協定」に含まれ、厚幌ダムから安定的かつ効率的な農業用水の供給を目的として地下埋設の大口径パイプライン方式の農業用導水管である。導水管の直径は最大で2.2mあり、幌内地区厚幌ダムから厚真町南部の鯉沼地区までの総延長は約24.5kmに達し、埋設施工のため最大で上幅約17.5mの掘削幅が発生する。導水管方式は、厚幌ダムから高低差を利用し、経営体育成整備事業により大規模化した水田の代かき期間の短縮化及び深水灌漑対応等を行うために採用された方式である。自然流下を維持するために河岸段丘等の高地に分水施設を設

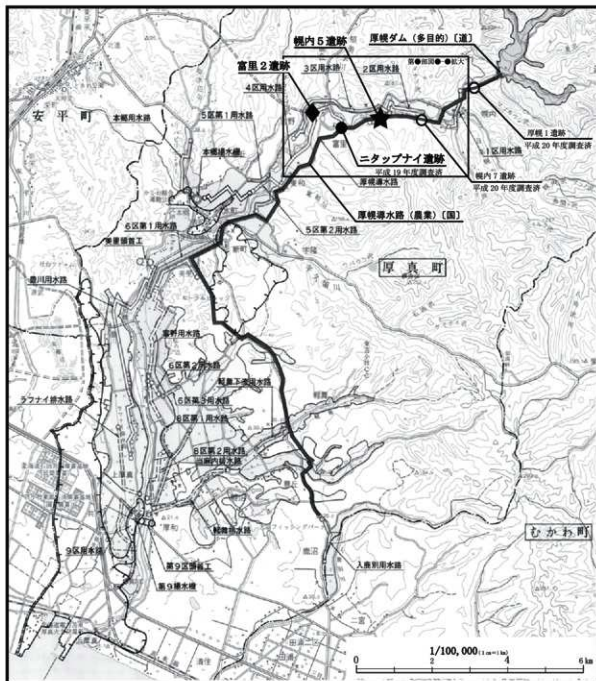


図 I-1 厚幌導水路計画路線図 (全線)

を設置する必要性があり、沖積低地と丘陵部にまたがる計画路線となっている。また、計画路線は維持管理を考慮し、道路沿線や地籍境界を選択し、かつ最短距離で送水する設計となっている。このため段丘縁辺部等に立地する埋蔵文化財包蔵地を避けることが不可能に近い部分が生じている。また、これと同時に支線用水路の整備も進め、地域用水機能の維持、増進も図り、厚幌ダム建設と連動した総合的な灌漑事業となっている。本格着工は平成18年より開始され、これに伴う埋蔵文化財発掘調査は平成19年度から着手し、厚真川中流域の富里地区ニタツプナイ遺跡で行われた(厚真町教育委員会2009b)。

2. 厚幌導水路建設事業に係る所在確認調査と試掘調査

厚幌導水路建設工事に伴う発掘調査は、前述の厚幌ダム建設事業の本格化を踏まえ、平成15年10月に国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部（以下、室開建）より厚真町教育委員会（以下、町教委）経由で北海道教育委員会（以下、道教委）宛に「埋蔵文化財保護のための事前協議書」（室建企第73号 平成15年10月15日付）が提出されたことに始まる。

協議を進めるにあたり、所在確認調査は道教委で実施し、事務連絡調整等については担当部署の室開建胆振東部農業開発事業所（以下、開発事業所）と町教委で行うこととなった。しかし、室開建より幌内地区から富里地区にかけての3.2km区間について、早急な所在確認調査実施の要望があり、この区間に限り町教委が実施した（平成15年12月10日付）。町教委は所在確認調査報告を道教委へ提出し、4地点の「要試掘調査」の回答がされた（平成15年12月17日付け教文第4779号）平成19年度に発掘調査したニタツナイ遺跡（厚真町教育委員会2009b）や、平成20年度に調査した幌内7遺跡（厚真町教育委員会2010）の新規登載や本書所収の幌内5遺跡の位置変更の端緒となった。

導水路計画路線のほぼ全線の所在確認踏査は、平成17年4月に道教委によって実施され、15ヶ所の「要試掘調査」が回答された（平成17年6月13日付 教文第78号）。富里2遺跡に係る支線用水路の計12条、延長63.1kmについても平成16年11月29日付け室建企第95号で事前協議書が提出された。本線支線ともに施工路線が確定次第、所在確認踏査や試掘調査が道教委によって行われ、これまでに試掘調査は10回以上実施され、13地点の要発掘調査・要工事立会が回答され、新規登載が8遺跡、周知の遺跡が5遺跡となっている。これらの要発掘調査面積は約12,670㎡、工事立会が約4,270㎡（平成22年3月1日現在）となっており、平成19年度から平成21年度にかけて発掘調査等の終了面積は、発掘調査が4,963㎡、工事立会が1,882㎡となり発掘調査面積で、全体の要発掘調査面積の39.2%が終了している。（乾）

第II章 厚真町の概要

第1節 地理的環境

厚真町は石狩低地帯南部の東縁、北海道胆振支庁の東部に位置し、夕張山地南部から太平洋に注ぐ二級河川厚真川水系に水田地帯が広がる、人口4,888人（平成22年2月28日現在）の農業の町である。町域の総面積は404.56k㎡で、流路52.3kmの二級河川厚真川流域を中心に広がり南北32.5km、東西17.3kmと細長く、南部は約6.5kmにわたって太平洋に面し、勇払平野の東端に位置している。北海道の空の玄関口である新千歳空港から車で35分、海上物流の拠点である苫小牧港からは40分と現代社会においても利便性に恵まれた位置でもある。町域を縦貫する厚真川は源流部から河口までの1河川流域で厚真町域のみを流下し、全国においても1河川流域を有する自治体は数少ない。行政区域の北部は、夕張市や由仁町と接し、夕張山地南端城の標高200～600mの山地が続き、総面積の約70%を山林が占めている。東には夕張山地から続く低い山地を挟んでむかわ町と接し、北西には標高100m前後の山地性丘陵を挟んで安平町、西は厚真町域を含む苫小牧東部工業地帯（以下、苫東地区）で苫小牧市と接している。厚真の語源は3説ほどあるが、最も有力な説として「アットマム」（at-to-mam「向こうの湿地帯」）で、南部に広がる湿地帯に付けられたものが転訛したと

言われている（厚真村 1956）。

町内は大きく4つの地区に分かれ、厚真川下流域の浜厚真・上厚真地区、中流域の厚真市街地周辺、中流から上流域の幌内地区があり、むかわ町と接する入鹿別川流域の鹿沼地区がある。本節では幌内5遺跡、富里2遺跡が位置する厚真町北部を中心に概略を述べる。なお、町内の概要についてはニタツナイ遺跡の調査報告書（厚真町教育委員会 2009b）を参考とされたい。

幌内5遺跡の所在する幌内地区は厚真川流域沿いの沖積地最奥部から夕張山地の南部にかけての範囲で、本流とシュルク川、幌内川の3河川の合流点に市街地が形成され、厚真川の河口から約28.5km、厚真町中心市街地より北東に約11kmの位置にある。厚真川下流域、南部の太平洋岸地域とは異なり年間の寒暖差が大きい内陸性の気候でもある。幌内市街地より下流側は厚真川流域に沖積低地が広がり左岸には河岸段丘が発達する中流域の地形を呈する。市街地より上流側は新第三紀の堆積岩を基盤とする山地が続き、厚真川本流域、支流域には狭小な河岸段丘が発達する谷状地形を呈する上流域である。この幌内市街地は厚真川の上流域と下流域の結節地点であり、厚真川流路延長のおおそ中間地点でもある。周辺の山地は標高400m以上の頂部は少ないが、小河川の浸食により比較的急峻な山稜を呈している。厚真川は夕張市、由仁町との1市2町の境界線付近、標高500m付近の夕張山地南城が源流部となっている。（乾）

第2節 歴史的環境

1. 埋蔵文化財包蔵地の概要

厚真町内には平成22年3月1日現在で127ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が確認されており、後期旧石器時代から近世アイヌ文化期に至るまでである（図Ⅱ-1、表Ⅱ-1～3）。遺跡の分布傾向として、開発行為の多寡に左右されるが、南部の苫東地区や厚真川下流域左岸から入鹿別川流域右岸にかけての仮称厚和台地や仮称鯉沼台地、厚真川中流域の支流河川沿い、北部の高丘地区および幌内地区にやや集中する傾向がある。遺跡の立地は、南部において湿地と隣接する台地縁辺部や湧水地付近、中部では厚真川沿い或小河川との合流点付近の河岸段丘縁辺部に多い。北部の山間部では、顔美宇（はびう）川流域の高丘地区や幌幌ダム水没地域内に多く分布する。これらは安平町安平地区や夕張市滝之上地区、むかわ町徳別・豊田地区に抜ける山越えのルート上の遺跡と考えられる。

時期的には、町内最古の遺跡として上幌内モイ遺跡で札滑型細石刃核を伴う石器集中が1ヶ所検出されており、AMS法炭素年代測定の結果、補正年代3点の平均で14,591.69±60yrB.P.が得られている（厚真町教育委員会 2006a）。縄文時代の最も古いものでは豊沢4遺跡の試掘調査で早期前半の物見台系貝殻土器片1点が出土し、時期が下って浜厚真3遺跡で東剣路Ⅱ式土器がややまとまって出土している（北海道埋蔵文化財センター2003）。遺跡数の増加や規模の拡大は縄文時代前期前半の縄文尖底土器群の時期と考えられ、多量の被熱礫や哺乳網の焼骨片が出土する遺跡が厚真町南部から北部に至るまで多数確認されている。これ以降、漸移的に遺跡数が増加し、中期末葉から後期初頭の北筒・余市式期の遺跡数でピークを迎える。縄文時代後期中葉から後葉にかけて遺跡数が激減し、晩期前葉以降、続縄文文化期に再び増加し、擦文文化期前期は遺跡数が再び減少する傾向にある。この様な各時期における遺跡数の偏りは苫小牧市の傾向と概ね一致している。苫小牧市との差異として擦文文化期中期から中世アイヌ文化期にかけてはやや遺跡数が増加する傾向がある。

2. 町内における埋蔵文化財調査の概要

町内における埋蔵文化財の調査・研究の始まりは、大正5年、現在の朝日遺跡と思われる地点から出土した縄文土器を教材として学校に保管する許可書が発行されたことである（厚真村郷土研究会1956）。以後現在まで大きく3期に別けることが可能で、概要のみを記す。

第1期は昭和20年代後半から40年代中頃にかけての厚真村(町)郷土研究会による資料収集、調査研究が活発に行われ、昭和31年には『厚真村古代史』（厚真村郷土研究会1956）が刊行されている。現在の埋蔵文化財保護の基礎資料である「埋蔵文化財包蔵地カード」にも研究会の記載が多く、その功績は多大なものである。活動の中心的存在で、長く会長を務めていた故亀井喜久太郎氏は厚真村長にも就任しており、現在、厚真町の名誉町民として町民からも功績が讃えられている。

第2期は昭和48年から54年にかけて苫小牧市埋蔵文化財調査センターによって苫小牧東部工業地帯の開発に伴う大規模な試掘調査、発掘調査が行われた。厚真町域にかかるもので新規登録14遺跡、調査着手11遺跡があり、縄文時代早期～擦文文化期までの資料が得られている（苫小牧市教育委員会1986・1987・1990・1992）。厚真1遺跡では、この地域で初めてのTピットが確認され、縄文時代中期中葉の「厚真1式土器」（赤石1999）の標識遺跡ともなっている（苫小牧市教育委員会1986）。共和遺跡では苫東地区内で唯一の擦文文化前期の堅穴式住居跡2軒が調査されている（苫小牧市教育委員会1987）。整理・報告後の出土遺物等は平成13年度に厚真町教育委員会へ返却されている。

なお、昭和54年9月に北海道教育委員会による「埋蔵文化財包蔵地資料整備の一般分布調査」が行われ、52遺跡の包蔵地カードが作成された。

第3期は平成10年以降、民間の開発事業に伴う試掘調査や工事立会調査が増加した（厚真町教育委員会2001a・b、2005、2006b、2008）。平成14年以降は厚幌ダム建設事業、平成19年からの厚幌導水路建設事業等の大型公共事業に伴う発掘調査が進められ、約50,000㎡の調査終了面積となっている（北海道埋蔵文化財センター2003、厚真町教育委員会2004、2006a、2007、2009a・b、2010）。

これらの大規模開発に伴う埋蔵文化財発掘調査は、平成27年度まで継続される予定である。

3. 歴史時代

厚真周辺の記録として、1643（寛永20）年に編纂された北海道最古の文書とされる『新羅之記録』（松前1643）によると、「松前以东は賑川西は與依地迄人間往古する事、右大将頼朝脚進発して奥州の泰衡を追討し御ひし節、糠部津軽より人多く此国に逃げ渡つて居住す。」とあり12世紀末葉には東北部の和人が厚真周辺域まで進出していたことが伺われる。

厚真町とほぼ特定できる最初の記述は、1692（元禄5）年に書かれた『蝦夷記』（野澤1692）にシャクシャインの戦い（1669・寛文9年）に関連して「於多久見具印住處阿津摩ニテ討取ル」とある。関連するものとして厚真町中部に位置する桜丘チャシ跡が想定されていたが、平成21年度のトレンチ調査により樽前bテフラより1～2cm程度黒色土を被覆することが判明し、より古い中世アイヌ文化期のチャシ跡であることが判明している。この時期の遺跡は厚真川上中流域の厚幌ダムや厚幌導水路建設関連の発掘調査で多数の遺構遺物が検出されており、今後も増加するものと思われる。

これ以降の記録として、1700年の『松前家臣支配所持名前帳』には鳥屋支配所として「志古津ノ阿津満」と記され、2ヶ所の鷹打場が設けられている。シャクシャインの戦いに係わる『津軽一統志』の調査報告中に、「あつまへつ〜川有、戸田義兵衛 商場」と記されているが、産物や周辺のコタンについてなどの記述は見られない（相坂兵右衛門1731）。1739年頃に成立した『蝦夷商賣開書』に

は義経伝説を交えた記述の中に「右之山奥ニアツマト申所二城跡ト申而松柏之古木沢山ニ繁リテアリ〜」や1785年の「三国通覽図説蝦夷国全図」に「アツマ」と記載があり、注記に「鬼シノ出処」と記されている（林子平1785）。また、寛政から文化年間（18世紀末〜19世紀初）の『東蝦夷地道中記』（1791）や『蝦夷記行』（谷元且1799）、『拾遺北日本地図全図蝦夷地産出交通略図』などの紀行文や古地図に僅かな記述にすぎず、1800年に八王子千人同心等、数名の和人が浜厚真に移り住むが定住することはない。近世アツマ場所や明治期の産物として干鮭や椎茸、シナ縄、鹿皮が挙げられているが、詳細な記述はなく、以降の紀行文や測量日誌にも交通路であった勇払と鷗川間の厚真川河口周辺の簡単な記述に留まっている。本町の和人定住者として、明治3（1870）年に新潟県人の青木与八が厚真川河口に渡船場を開業したことが始めとされている（厚真村1956）。

内陸部までの詳述は、松浦武四郎による『戊午安都麻日誌』（松浦・吉田1962、松浦・秋葉他1985）で、1857（安政5）年6月に苫小牧市勇払から厚真川河口を経てトンニカ（現富里）にて2泊している。蝦夷地探検の6回目、町内には6ヶ所のコタンが記録されている。この中で比較的規模の大きいコタンでは、粟、稗、隠元、蕪などの畑作が盛んに行われているが、直前に襲った厚真川の洪水によって、畑地のほとんどが流出したことも記され、かつてより氾濫の多い河川であったことが伺える。宿泊したトンニカコタンのイカシユ（乙名板藏）の家中について「西同所の土人等とは大に違ひ、凡行器の三十も有、耳盥のセツハツ、筐のヰツ計、蝦夷太刀の二十五六振も懸、また此余短刀の七八本も有るよし語りけるなり。」（松浦・秋葉他1985）とあり漆器や刀剣類の宝物が多く、その裕福さに驚いている。この他、猟犬としての北海道犬厚真系の活躍についても記述している（松浦・吉田1062）。上流部に関しては聞き取りによる記述で、3穴の吊耳鉄鍋の残置伝承があるカニシユウ（現幌内・一里沢遺跡）も記述されている。苫小牧駒澤大学 葦島栄紀氏は、これらの松浦武四郎の記録から古交通路について論じており、トンニカコタンの記述や上流の上幌内モイ遺跡の搬入系遺物の出土量から鷗川水系やタ張水系へのルートが存在についても述べている（葦島2005）。

これらの記録以前のアイヌ文化期については、厚幌ダム建設に係わる発掘調査で確認された厚幌1遺跡（厚真町教育委員会2004）、上幌内モイ遺跡（厚真町教育委員会2007a・2009a）、オニキシベ2遺跡（平成19・20年度調査）、ヲチャラセナイチャシ跡・ヲチャラセナイ遺跡（平成20・21年度調査）の他、試掘調査でも上幌内2遺跡、一里沢遺跡がある。これらの遺跡では平地式住居跡敷軒が調査され、12世紀から13世紀代の年代測定結果を得ている例もある。平成17年に発見されたヲチャラセナイチャシ跡は、20年度に調査され、AMS法炭素年代測定の結果や調査段階の層位的所見から、13世紀の可能性もある。また、オニキシベ2遺跡からは4基の中世アイヌ墓が検出され、AMS法炭素年代測定の結果や副葬品の漆製品のスタンプ文様から14世紀前半の可能性が高い。また、副葬品として、ガラス玉やメノウ製管玉など大陸産と思われる遺物も出土しており、擦文土器文化の終焉以降、継続してこの地域における人の営みを迎えることができている。

厚幌導水路建設事業関連の発掘調査では厚真川中流域のニタツナイ遺跡（厚真町教育委員会2009b）や幌内7遺跡（厚真町教育委員会2010）、本書の富里2遺跡がある。ニタツナイ遺跡は樽前もテフラ（1667年降下）の直上直下の集落跡が調査されており、シャクシャインの戦い（1669年）に係わる重要な成果が得られている。その他、試掘調査で層位的確認がされた新町遺跡のほか、厚和1遺跡、幌内5遺跡では近世アイヌ墓が単独で発見されている。近年の発掘調査によってアイヌ文化期の遺跡が新たに発見されており、今後も資料の増加が期待される。

表Ⅱ-1 厚真町内埋蔵文化財包蔵地一覧表(1)

登録番号	種別	名称	時代	文献等
1	遺物包蔵地	上厚真遺跡	縄文中～後期・統縄文・擦文	1
2	遺物包蔵地	軽舞遺跡	縄文中期・統縄文	1
3	遺物包蔵地	朝日遺跡(文献1:振老)	縄文後～晩期・統縄文・擦文	1,2,31
4	遺物包蔵地	幌里1遺跡(文献1:仁達幌)	縄文中・晩期・統縄文	1
5	遺物包蔵地	新町遺跡(文献1:上振内)	縄文中期・統縄文・擦文・アイヌ期	1,4,6
6	遺物包蔵地	高丘1遺跡(文献1:顔美宇)	縄文中期・統縄文	1
7	遺物包蔵地	幌内1遺跡	縄文中期・統縄文	1
8	集落跡	共和遺跡(文献1:西周文)	縄文晩期・擦文	1,8
9	遺物包蔵地	浜厚真遺跡	縄文?	
10	溝穴遺構	厚真10遺跡	縄文中・晩期	3,8
11	遺物包蔵地	厚真11遺跡	縄文晩期	
12	遺物包蔵地	豊沢1遺跡(文献1:当麻内)	統縄文	1
13	遺物包蔵地	東和遺跡(文献1:東老軽舞)	縄文・統縄文	1
14	集落跡	オニキシベ1遺跡(文献1:オニキシベ)	縄文中～後期・アイヌ期?	1
15	遺物包蔵地	高丘3遺跡	縄文中期	
16	チャシ跡	桜丘チャシ跡	中世アイヌ期	4,6
17	遺物包蔵地	桜丘1遺跡	縄文晩期	
18	遺物包蔵地	高丘2遺跡	縄文?	
19	集落跡	高丘10遺跡	縄文?	
20	集落跡	厚真1遺跡	縄文中期	8,13
21	溝穴遺構	厚真2遺跡	縄文中期?	8
22	溝穴遺構	厚真3遺跡	縄文早・中～晩期・統縄文	10
23	集落跡	厚真4遺跡	縄文	
24	遺物包蔵地	厚真5遺跡	縄文前～晩期・統縄文・擦文	
25	集落跡	厚幌1遺跡	縄文早～晩期・統縄文・擦文・アイヌ期	18
26	集落跡	厚真7遺跡	縄文早・中～晩期・統縄文・擦文	9
27	集落跡	厚真8遺跡	縄文中～晩期	8
28	遺物包蔵地	美里2遺跡	縄文早・中期	
29	墳墓	厚真12遺跡	縄文中・晩期・擦文	10
30	遺物包蔵地	上幌内1遺跡(田幌内3遺跡)	縄文中期	
31	遺物包蔵地	高丘4遺跡	縄文	
32	遺物包蔵地	高丘5遺跡	縄文?	
33	遺物包蔵地	高丘6遺跡	縄文?	
34	遺物包蔵地	高丘7遺跡	縄文?	
35	遺物包蔵地	高丘8遺跡	縄文?	
36	遺物包蔵地	高丘9遺跡	統縄文	
37	遺物包蔵地	富里1遺跡(文献1:楯山)	縄文中～晩期	1
38	遺物包蔵地	幌内4遺跡	縄文中期?	
39	遺物包蔵地	テコマナイ遺跡	縄文?	
40	遺物包蔵地	幌里2遺跡	縄文中期	
41	遺物包蔵地	本郷1遺跡	縄文中・晩期	
42	遺物包蔵地	本郷2遺跡	縄文後期	
43	遺物包蔵地	宇降1遺跡	縄文・中世アイヌ期	16
44	遺物包蔵地	宇降2遺跡	統縄文	
45	遺物包蔵地	美里1遺跡(文献1:振内)	縄文中期	1
46	遺物包蔵地	豊沢2遺跡	擦文	
47	遺物包蔵地	豊沢3遺跡	統縄文	
48	遺物包蔵地	鯉沼1遺跡(文献1:上岡文?)	縄文	1
49	遺物包蔵地	鹿沼2遺跡(文献5:鹿沼B)	縄文中期	5
50	遺物包蔵地	鹿沼1遺跡(文献5:鹿沼A)	縄文	5
51	遺物包蔵地	厚和1遺跡(文献5:周文)	縄文中期・アイヌ期	1,4,6
52	遺物包蔵地	鹿沼3遺跡	縄文中・晩期	
53	溝穴遺構	厚真13遺跡	縄文早～中・晩期・統縄文・擦文	10
54	遺物包蔵地	本郷3遺跡	縄文?	
55	遺物包蔵地	高丘11遺跡	縄文晩期	
56	遺物包蔵地	高丘12遺跡	縄文	
57	墳墓	幌内5遺跡	縄文前・後期・アイヌ期	本書
58	溝穴遺構	豊沢4遺跡	縄文早・中～後期	
59	遺物包蔵地	厚和2遺跡	縄文中期	
60	遺物包蔵地	厚和3遺跡	縄文後期	

表II-2 厚真町内埋蔵文化財包蔵地一覧表(2)

登録番号	種別	名称	時代	文献等
61	遺物包蔵地	厚和4遺跡	縄文中期	
62	遺物包蔵地	鹿沼4遺跡	縄文	
63	遺物包蔵地	厚和5遺跡	縄文	
64	遺物包蔵地	新町2遺跡	縄文中期	
65	遺物包蔵地	鹿沼5遺跡	縄文後期	
66	遺物包蔵地	厚和6遺跡	縄文前期	
67	遺物包蔵地	浜厚真2遺跡	縄文早期	
68	溝穴遺構	鯉沼2遺跡	縄文中期	14
69	遺物包蔵地	豊丘遺跡	縄文中期	
70	集落跡	厚和7遺跡	縄文後期	
71	集落跡	豊川1遺跡	縄文前・後～晩期	15
72	遺物包蔵地	浜厚真3遺跡	縄文早・後期	17
73	遺物包蔵地	ニタツポロ沢遺跡	縄文後・晩期	
74	遺物包蔵地	幌里神社遺跡	縄文早・後期	
75	溝穴遺構	入鹿別沼遺跡	縄文中期?	
76	溝穴遺構	幌里3遺跡	縄文	
77	遺物包蔵地	オニキシベ2遺跡	縄文中～後期・統縄文・檜文・中世アイヌ期	
78	遺物包蔵地	オニキシベ3遺跡	縄文後期	
79	集落跡・墳墓	上幌内モイ遺跡	旧石器・縄文早・中～後期・統縄文・檜文・中近世アイヌ	19,21,22,2 4,26,27,28
80	遺物包蔵地	一里沢遺跡	縄文前～中期・アイヌ期	4,5,21
81	集落跡	シロロマ1遺跡	縄文前・後期	
82	遺物包蔵地	東ニタツポロ1遺跡	縄文中・晩期	
83	遺物包蔵地	東ニタツポロ2遺跡	縄文中・晩期	
84	遺物包蔵地	浜厚真4遺跡	縄文中期	
85	溝穴遺構	鯉沼3遺跡	縄文前～後期	20,23,25
86	溝穴遺構	鯉沼4遺跡	縄文後期	
87	遺物包蔵地	イクバンドユクチセ遺跡	縄文後期	
88	遺物包蔵地	厚幌2遺跡	縄文前期	
89	遺物包蔵地	オニキシベ4遺跡	縄文	
90	遺物包蔵地	オニキシベ5遺跡	縄文中期	
91	溝穴遺構	上幌内2遺跡	縄文・アイヌ期	
92	遺物包蔵地	シロロマ2遺跡	縄文中期	
93	溝穴遺構	幌里4遺跡	縄文	
94	集落跡	厚和8遺跡	縄文中～後期	
95	遺物包蔵地	厚和9遺跡	縄文中期	
96	遺物包蔵地	鹿沼6遺跡	縄文	
97	遺物包蔵地	豊川2遺跡	統縄文・檜文	
98	遺物包蔵地	幌内6遺跡	縄文後期	
99	溝穴遺構	鹿沼7遺跡	縄文早～晩期	
100	チャシ跡	ワチャラセナイチャシ跡	中世アイヌ期	
101	遺物包蔵地	ワチャラセナイ遺跡	縄文早～後期・統縄文・檜文・中世アイヌ期	
102	遺物包蔵地	吉野1遺跡	縄文中・晩期	
103	遺物包蔵地	幌内7遺跡	縄文晩期・檜文	
104	集落跡	ニタツナイ遺跡	縄文前～後期・統縄文・檜文・近世アイヌ期	本書,29
105	遺物包蔵地	宇路3遺跡	縄文中期	
106	遺物包蔵地	富里2遺跡	縄文後・晩期・統縄文・檜文・中近世アイヌ期	本書
107	遺物包蔵地	オコッコ1遺跡	縄文前・中・後期・檜文	
108	遺物包蔵地	軽舞2遺跡	縄文前期・統縄文	
109	遺物包蔵地	豊沢5遺跡	縄文後期	
110	溝穴遺構	厚和10遺跡	縄文早・中・後期	
111	遺物包蔵地	豊丘2遺跡	縄文早期	
112	遺物包蔵地	豊丘3遺跡	縄文中期	
113	遺物包蔵地	東和2遺跡	縄文晩期	
114	遺物包蔵地	浜厚真5遺跡	縄文後期	
115	遺物包蔵地	豊沢6遺跡	縄文早・中・後期	
116	遺物包蔵地	東和3遺跡	縄文早期	
117	遺物包蔵地	桜丘2遺跡	縄文中・後期	
118	遺物包蔵地	オニキシベ6遺跡	縄文後期	
119	溝穴遺構	イクバンドユクチセ2遺跡	縄文後期	

表Ⅱ-3 厚真町内埋蔵文化財包蔵地一覧表(3)

登録番号	種別	名称	時代	文献等
120	遺物包蔵地	イクバンドクチセ3遺跡	縄文中・後期・統縄文	
121	遺物包蔵地	シヨロマ3遺跡	統縄文	
122	遺物包蔵地	シヨロマ4遺跡	縄文	
123	遺物包蔵地	上幌内3遺跡	縄文中・後期	
124	遺物包蔵地	上幌内4遺跡	縄文中期	
125	溝穴遺構	上幌内5遺跡	縄文	
126	遺物包蔵地	豊沢7遺跡	縄文中・後期	
127	遺物包蔵地	豊沢8遺跡	縄文後期	

関連文献

1: 厚真村郷土研究会 1956『厚真村古代史』 2: 亀井喜久太郎 1957「厚真出土の土偶」『先史時代3』 3: 苫小牧市教育委員会 1974『苫小牧東部工業地帯内埋蔵文化財分布調査報告書』 4: 亀井喜久太郎・池田実 1976『厚真の旧地名を尋ねて』 5: 釧路町教育委員会 1977『釧路町遺跡分布報告』 6: 亀井喜久太郎・池田実 1978『統厚真の旧地名を尋ねて』 7: 松浦武四郎(高倉新一郎校訂) 1985『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』 8: 苫小牧市教育委員会 1986『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅰ』 9: 苫小牧市教育委員会 1987『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅱ』 10: 苫小牧市教育委員会 1990『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅲ』

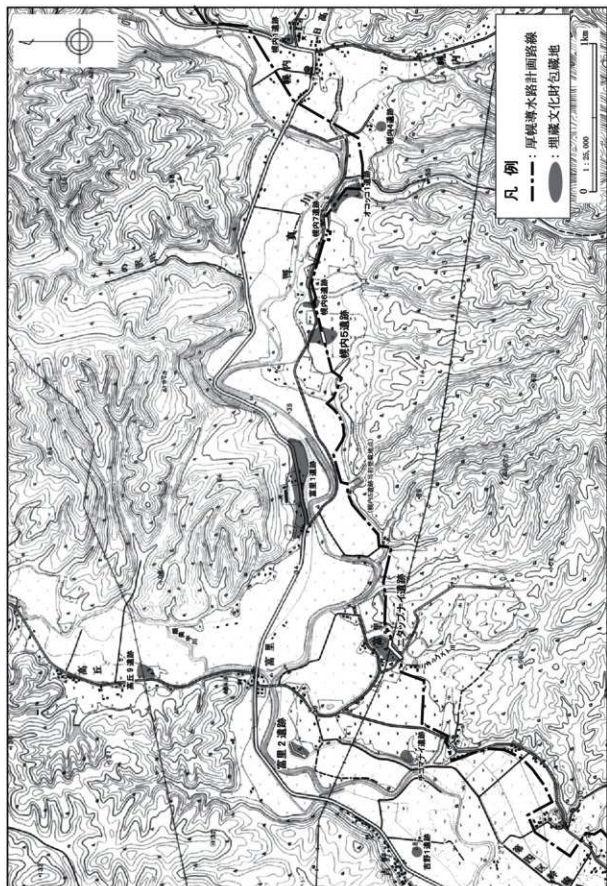
11: 苫小牧市教育委員会 1992『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅳ』 12: 苫小牧市教育委員会 1995『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅴ』 13: 赤石慎三 1999「苫小牧地方の内筒上層式について」『苫小牧市埋蔵文化財調査センター所報1』 14: 厚真町教育委員会 2001『鯉沼2遺跡』 15: 厚真町教育委員会 2001『豊川1遺跡』 16: 鈴木 信 2001「IV-4 北海道の中世陶磁器」『千歳市エカンボシC15遺跡(4)』財北海道埋蔵文化財センター159 17: (財)北海道埋蔵文化財センター 2003『厚真町浜厚真3遺跡』 18: 厚真町教育委員会 2004『厚幌1遺跡』 19: 厚真町教育委員会 2005『上幌内モイ遺跡発掘調査概要報告書』 20: 厚真町教育委員会 2005『鯉沼3遺跡』

21: 渡島栄紀 2005「松浦武四郎の旅程からみた胆振東部・日高西部の古交通路」『近代アイヌ民族における交通路の研究(胆振・日高Ⅰ)』 22: 厚真町教育委員会 2006『上幌内モイ遺跡(1)』 23: 厚真町教育委員会 2006『鯉沼3遺跡(2)』 24: 厚真町教育委員会 2007『上幌内モイ遺跡(2)』 25: 厚真町教育委員会 2008『鯉沼3遺跡(3)』 26: 出穂雅実他 2008『論集忍路子Ⅱ』 27: 関根達人 2008「平泉文化と北方交易2-蝦夷期の銅鑄をめぐって-」『平泉文化研究年報8』 28: 厚真町教育委員会 2009『上幌内モイ遺跡』発掘調査報告書(3)』 29: 厚真町教育委員会 2009『ニタツナイ遺跡(1)』 30: 厚真町教育委員会 2010『厚幌1遺跡(2)・幌内7遺跡(1)』

31: 北海道大学附属図書館HP北方資料データベース

明治維新後、廃藩置県までは高知藩所管の時代があり、1873(明治6)年以降に開拓使苫小牧出張所や勇払郡役所の所管となる。現在の厚真町が行政単位として1897(明治30)年4月1日に苫小牧外6ヶ村から分離独立し、厚真村戸長役場が現桜丘地区の専厚寺境内に設置されたことによる。

内陸部の和人開拓は明治20年代からで、ほぼ同時期に手摺りによる石油掘削も始められ、明治21年には開拓使から農事指導員が派遣され西老軽舞(現吉野地区)へ集住させられたアイヌ民族への勸農政策も実施されている。1892(明治25)年には鉄道室蘭線が開通し、近隣である厚真の内陸部も開拓移住者が増加した。これらは明治19年の国有未開地の開放によって北海道開拓の促進を図る「北海道土地地下規則」が制定されたことにもよる。以後、開拓移住者の増加が続き現在の農業の町厚真の礎が確立されていくと同時に、この地域の長い歴史を担ってきたアイヌ民族の文化は徐々に衰退していったことは、非常に残念に思う。(乾)



図II-2 幌内地区中流域から富里地区にかけての遺跡分布図

第三章 出土遺物の分類

第1節 土器

縄文時代早期から擦文文化期までの土器をローマ数字に群別し、アルファベットで時期や系統、器種に細分した。

第I群土器 縄文時代早期に属する土器群

A類 貝殻痕文土器

B類 早期後半の東鋸路式土器群 絡糸体圧痕文、組紐圧痕文などを施すもの

B1類 東鋸路Ⅱ式に相当するもの

B2類 東鋸路Ⅲ式、コックロ式に相当するもの

B3類 中茶路式に相当するもの

B4類 東鋸路Ⅳ式に相当するもの

第II群土器 縄文時代前期に属する土器群

A類 縄文丸底・尖底土器群

A1類 美沢3式、網文式、春日町に相当するもの

A2類 トビノ式、静内中野式に相当するもの

A2類 a：胎土に滑石を含むもの

A2類 b：胎土に繊維を多量に含み厚手で重い

B類 円筒下層式系土器群

B1類 円筒下層 a 式ないし b 式、虎杖浜 2 式に相当するもの

B2類 円筒下層 c 式ないし d 式、植苗式、大麻 V 式に相当するもの

第III群土器 縄文時代中期に属する土器群

A類 中期前半の円筒上層式土器群

A1類 円筒上層 a 式または b 式に相当するもの

A2類 円筒上層 c 式または d 式、厚真 1 式に相当するもの

B類 中期後半から末葉の土器群

B1類 萩ヶ岡 1・2 式、天神山式に相当するもの

B2類 柏木川式に相当するもの

B3類 a：北筒式に相当するもの

B3類 b：煉瓦台式に相当するもの

第IV群土器 縄文時代後期に属する土器群

A類 後期初頭の土器群

円形刺突文の有無に関わらず、貼付帯や地文縄文が多段の羽状構成の土器

A1類 a：古手の余市式

A1類 b：IVA1 土器に並存する沈線文系土器の非在地系土器

A2類 新しい段階の余市式、タブコブ式の古手階段状の器表面や斜め下方からの刺突文や縄端圧痕文が施される土器

B類 後期前葉の土器群

B1類 新手のタブコブ式、靱位の棒状貼付帯縄線文や地文縄文のみが施されるもの

B2類 手稲砂山式に相当するもの

B3類 入江式、大津式、白坂 3 式に相当するもの

C類 後期中葉の土器群

C1類 ウサクマイ C 式に相当するもの

C2類 手稲式に相当するもの

C3類 鯉淵式に相当するもの

D類 後期後葉の土器群

D1類 堂林式、御殿山式に相当するもの

第V群土器 縄文時代晩期に属する土器群

A類 晩期前葉の土器群

A1類 爪形文や刺突文を施すもの

A2類 大洞 B・BC 式に相当するもの

B類 晩期中葉の土器群

B2類 縄線文や円弧文を施すもの 美々 3 式、ママチ I・II 群に相当するもの

B2類 大洞 C1・C2 式に相当するもの

C類 晩期後葉の土器群

C1類 ママチ III・IV・V 群に相当するもの

C2類 大洞 A・A' 式に相当するもの

第VI群土器 続縄文文化期に属する土器群

今回の調査では出土していない

第VII群土器 擦文文化期に属する土器群

A類 初頭に位置付けられるもので、十勝茂寄式および北大 III 式相当

B類 壺形

B1類 擦文「前期」に相当するもの

主に胸部上半に横走沈線のみを施す一群

B1類 a：軽い段により頸部を形成した無文もしくは数条の横走沈線を廻らすもの

- B1 類 b: 横走沈線を施すもの
 B2 類 擦文「中期」に相当するもの
 主に口縁部文様帯が未形成もしくは単調な刻みのみの一群
 B2 類 a: 横走沈線を地文とし刻文を重ねるもの
 B2 類 b: 刻文のみのもの B2 類 c: 無文のもの
 B3 類 擦文「後期」に相当するもの
 主に口縁部文様帯を形成した一群
 B3 類 a: 横走沈線を地文とするもの
 B3 類 b: 綾杉文主体のもの
 B3 類 c: 斜位、あるいは縦位の沈線で磨面状文、「X」字状文等を施すもの
 B3 類 d: 胴部文様帯を3段以上に区画した上でB3 類 a～cの文様要素を施したものの
 B3 類 e: 無文のもの

- B3 類 f: 口縁部文様帯に数条の沈線を廻らせたもの
 C 類 環形
 C1 類 台部を有さないもの
 C2 類 平底の低い台部を有するもの
 C3 類 平底の高台部を有するもの
 C3 類 a: 口縁部に沈線を有するもの
 C3 類 b: 体部に刻文を施すもの
 C4 類 上げ底の高台部を有するもの
 D 類 壺形
 E 類 ロクロ成形土器
 E1 類 甕形 E2 類 壺形 E3 類 鉢形
 E3 類 a: 軟質で内面黒色処理を施さないもの
 E3 類 b: 軟質で内面黒色処理を施すもの
 E3 類 c: 硬質で酸化炭焼成のもの
 E3 類 d: 硬質で還元炭焼成のもの
 E4 類 坏形 (奈良)

第2節 石器

石器の分類については、石器・製作技術・石材の関連性を考慮し、3大別（剥片石器群、石斧石器群、礫石器群）を基準として分類した。また、Ⅲ層の石器の器種分類は、『上幌内モイ遺跡(1)』・『上幌内モイ遺跡(2)』の分類基準を踏襲し、適時対応させることとした。

Ⅲ層

火打石

メノウ、チャート、石英を石材とし縁辺部等に微細刻痕が観察できるもの。

V層

剥片石器群

石鏃

重量4.0g未満。形態で分類した。

- A 細身で薄手のもの
 B 無茎鏃 [基端] 1: 平基 2: 凹基 3: 凸基
 C 有茎鏃 D 不明瞭な茎をもつもの
 [平面形] 1: 柳葉形 2: 木葉形 3: 菱形
 E 未成品 F 欠損品

石槍

重量4.0g以上。形態で細分した。

- A 有茎のもの [基部の抉入] 1: なし 2: あり
 B 不明瞭な茎をもつもの [平面形] 1: 柳葉形 2: 木葉形
 C 未成品 D 欠損品

石鏃

滑沢面ある礫

素材礫の形状を変えず、滑沢面を有するもの。線条痕はほとんど観察できない。

「鏃部」を作出したもの。形態で分類した。

- A 剥片の一部に鏃部が作出されたもの
 B 棒状のもの C 他石器からの転用 D 欠損品
 [柄と鏃部の区別] 1: 不明瞭 2: 明瞭

つまみ付きナイフ

「つまみ部」を作出したもの。器体調整で分類した。

- A 「つまみ部」に対して刃部が縦～斜位のもの
 B 「つまみ部」に対して刃部が横位のもの C 欠損品
 [器体調整] 1: 素材縁辺 2: 片面全体 3: 両面全体
 4: 端部に搔器状の刃部が施されたもの

スクレイパー

- A 「ラウンド・スクレイパー」
 B 「エンド・スクレイパー」
 (a: 周縁調整 b: 部分調整 c: 刃部調整のみ)
 [長幅比] 1: 1.0～2.0未満 2: 1.0未満 3: 2.0以上

C 「サイド・スクレイパー」

〔長幅比〕 1: 2.0未満 2: 2.0以上

D 「コンケーブ・スクレイパー」 E 「挟入石器」

〔挟入数〕 1: 1ヵ所 2: 対になるもの

〔器体整形〕 a: なし b: あり

F 再加工品

ピエス・エスキュー

対向する縁辺に両極剥離による圧縮型の剥離痕が
集積するもの。または、両極剥離の特徴である剪断
面がみられるもの。

RF・UF

縁辺に 1/2 以下の二次的な剥離痕が認められるものを
「RF」、刃こぼれ状の微細剥離痕が認められるものを「UF」
として区別し、両者を一括した。また、定型石器の破片と
思われるもので、分類が困難なものも含めた。

石核

2 単位以上の目的剥片が剥離されているもの。

- A 単設打面石核 B 両設打面石核 C 回転多打面石核
D 求心状石核 E 両極石核 F 欠損品

石斧石器群

石斧

- I 磨製石斧
II 未成品 1: 剥離・敲打調整により、成品に近い形状ま
で整形されたもの
III 未成品 2: 自然面を残し、擦切・剥離・敲打調整によ
り素材礫形状が不明瞭なもの
IV 未成品 3: 剥離・敲打調整が部分的に施され、素材礫
形状を大きく残すもの

石斧片

石斧石材として使用される緑色片岩などの石材で、磨製
石斧の製作時や再加工時に剥離されたと考えられる、背面
に研磨痕を有する剥片。

石斧原材

石斧石材として使用される緑色片岩などの石材で、自然
礫・加工痕ある礫・二次加工ある剥片など石斧の原材と考
えられるもの。

礫石器石器群

たたき石

敲打痕が観察される重量 2.0 kg未満のもの。素材礫形状
で分類し、敲打痕位置で細分した。計測は最大値で行い、
以上は↑、以下は↓の記号を用いた。

- I 「葉状」礫素材 (幅/長 0.66 ↓、厚/幅 0.66 ↓)
II 「柱状」礫素材 (幅/長 0.66 ↓、厚/幅 0.66 ↓)
III 「盤状」礫素材 (幅/長 0.66 ↑、厚/幅 0.66 ↓)
IV 「球状」礫素材 (幅/長 0.66 ↑、厚/幅 0.66 ↑)
V 礫片を素材とするもの
VI 他石器からの転用品 VII 破片

〔敲打位置〕 A: 平坦面(片面) B: 平坦面(両面)

C: 端部・側面・側縁 D: A~C が並存

すり石

- I 断面三角形礫の後にすり面があるもの
II 断面楕円形礫の後にすり面があるもの
III 扁平礫の側縁にすり面があるもの
IV 北海道式石冠 V 転用品 VI 破片

砥石

同一方向の擦痕が観察されるもの。素材礫の円磨度で分
類し、砥面の位置で細分した。

- I 角～亜角礫素材 II 亜円～円礫素材 III 破片
〔砥面位置〕 A: 片面 B: 両面 C: 対面しない2面以上

石皿

設置による使用が考えられる大型のもので、素材の平坦
面に多方向の擦痕、すり面が観察されるもの。または、台
石と併用されるもので、擦痕・すり面が主体のもの。素材
礫形状で分類した。

- I 角～亜角礫素材 II 亜円～円礫素材 III 破片

台石

設置による使用が考えられる大型のもので、素材の平坦
面に敲打痕が観察されるもの。または、石皿と併用される
もので、敲打痕が主体のもの。素材礫形状で分類した。

- I 角～亜角礫素材 II 亜円～円礫素材 III 破片

石鋸

縁辺の研磨により、刃部が作出されたもの。

石鏃

対となる「挟り」が観察されるもの。

加工痕ある礫 二次的な剥離痕が観察されるもの。

(山田)

第2部

幌内5遺跡

第I章 調査の概要

第1節 調査要項と経緯

1. 調査要項

遺跡名：幌内5遺跡（J-13-57）

所在地：北海道勇払郡厚真町字幌内1032-5

調査面積：854㎡（ほか工事立会700㎡）

調査期間：（発掘）平成21年5月14日～平成21年7月16日

（整理）平成21年11月1日～平成22年3月16日

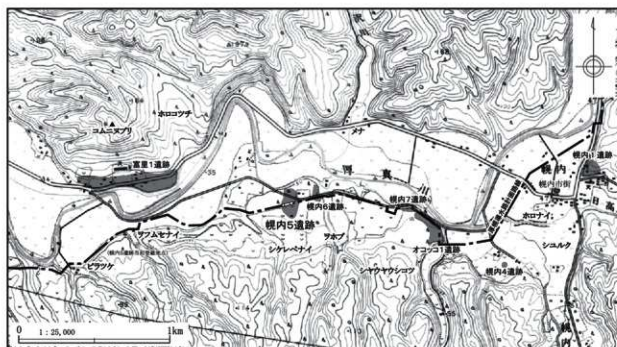
調査体制：第1部 第I章 第1節2に同じ。

2. 発掘調査までの経緯

今回の発掘の端緒となった平成15年10月に提出された事前協議書で幌内5遺跡周辺の導水路設計路線は、厚真川の左岸に発達する河岸段丘の縁辺部に並行する町道幌内左岸線に隣接したものであった。協議範囲内には周知の埋蔵文化財包蔵地は記載されていなかったものの、平成15年12月に町教委が実施した所在調査で、本遺跡周辺は半島状に突出した尾根状地で湧水地点に隣接していたことから、包蔵地の「可能性地」として報告書を提出した（平成15年12月10日付 厚教生号）。

道教委からの回答は、同じ段丘面で厚真川上流方向に位置する協議範囲の設計起点（現幌内7遺跡）からの延長1,140mの「要試掘調査」となった（平成15年12月17日付 教文第4779号）。なお、所在確認調査の当初路線では導水路設計路線が町道幌内左岸線に並行し、現在の幌内5遺跡の尾根状地の先端部を横断する路線計画であったが、地形的に埋蔵文化財包蔵地の可能性が高く、良好な保存状態が想定されたことから、開発事業所は既に畑地造成で削平されている部分に設計センターを南側へ20mほど移動する変更を行った。

試掘調査はこの変更路線で平成16年10月に道教委によって実施され、周辺のトレンチ4ヶ所の



図I-1 周辺の遺跡分布図



図 I-2 周辺の地形図及びグリッド設定図

うち1ヶ所から縄文時代前期の土器や被熱礫等が出土し、埋蔵文化財包蔵地であることが判明した。しかし、日程上の都合により試掘調査は協議範囲の全延長まで達せず、詳細範囲確定に至らなかったため、幌内5遺跡周辺における試掘調査の回答は「再協議」となった（平成16年12月1日付け教文第4641号）。なお、幌内5遺跡は平成3年5月に畑地造成中に登載された埋蔵文化財包蔵地であるが、平成15年の所在調査時点では、約1km西の地点に登載されていた。試掘調査中に周辺住民より平成3年頃に行った畑地造成時にアイヌ人骨と蝦夷太刀が出土していたことを聞き取り、登

載カードの土地所有者氏名が本地点と同一であること、旧登載地点は水田造成のみの沢地形内部であることなどから、試掘調査地点が既に登載されていた幌内5遺跡であることが判明した。

試掘調査では周辺を含め12ヶ所の試掘溝が掘開され、うちトレンチ№1と11の2ヶ所から遺物が出土した。いずれも縄文時代の遺物包含層であるV層からの遺物出土で、土器は出土しなかったものの、被熱破砕礫が主体であったことから、縄文時代前期の遺物包含層が想定された。今回の発掘調査では、過去の近世アイヌ墓の検出からⅢ層の一部も調査の対象としたが、人工遺物は得られず、試掘調査の結果と矛盾しない。

なお、地点変更等の包蔵地カードの記載変更手続きは平成16年12月に試掘調査結果と合わせて町教委が行った(平成16年12月17日付け厚教生号)。

発掘調査範囲は、平成17年4月の第二次試掘調査で確定した。要発掘調査範囲は畑地造成による削平範囲の工事立会区40mを挟み、東側(導水路流水上流側)に30m、西側(流水下流側)に20mの合計50mで、さらに東西両方向に20mの工事立会区で回答された(平成17年6月13日付教文第786号)。発掘調査では厚幌導水路流水上流側である東部をA地区、下流側の西部をB地区とした。また、発掘調査範囲と立会調査範囲については、表土を除去したところ、西側において黒色土範囲が立会区域に若干広がっていることが確認されたため、図I-3に黒色土残存範囲を示している。

発掘調査は、厚幌導水路工事計画に従い施工前年度に行うことで進められており、平成21年度は幌内5遺跡を着手することとなった。次いで、周辺地域で用水路施工計画がある富里2遺跡があったことから、この2ヶ所の発掘調査を平成21年度に実施することとなった。

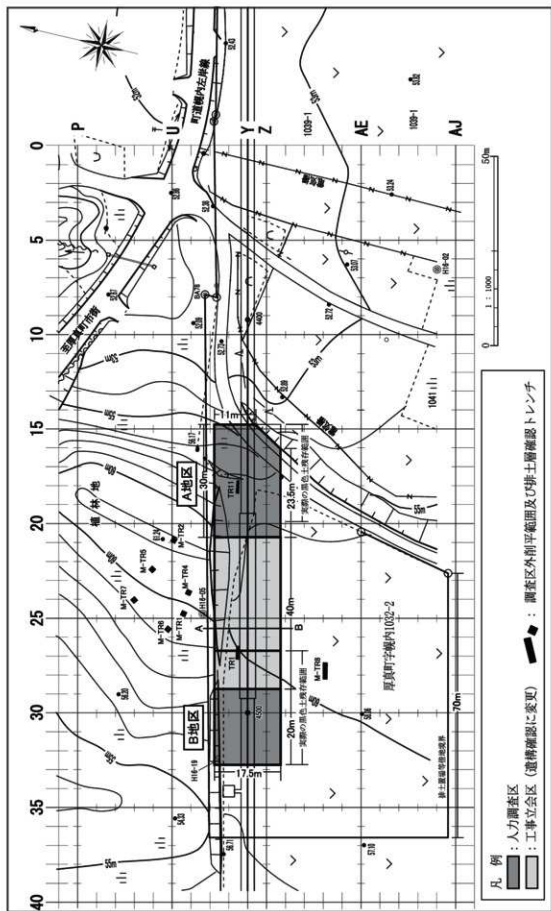
発掘調査区は、開発事業所作成の厚幌導水管埋設施設設計図面に従った最大掘削幅の上端範囲とし、設計センター延長50m×幅17.5mで、一部盛土の高低差から安全性を考慮し、854㎡の調査面積となった。なお、道教委からの「平成21年度埋蔵文化財発掘調査の実施について(通知)」(平成21年3月3日付教文第3756号)によって町教委が受託することとなった。

その後、開発事業所との現地協議や室開建用地課への調査計画書等の提出を進め、平成21年4月1日付けで、幌内5遺跡・富里2遺跡発掘調査業務、ニタツナイ遺跡工事区の遺物回収作業と平成20年度に発掘調査整理業務を行った厚幌1遺跡と幌内7遺跡の調査報告書刊行業務を含めた「国営土地改良事業勇払東部(二期)地区 幌内5遺跡外用地内埋蔵文化財発掘調査」の委託業務契約を室蘭開発建設部長と厚真町教育委員会教育長との間に取り交わした(平成21年4月1日付室建用第72号)。なお、発掘調査委託契約の締結に先立ち、文化財保護法94条第1項の規定により「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について(通知)」が室開建より町教委を経て道教委へ提出されている(平成21年3月23日付室建用第937号)。

発掘調査は町職員調査担当者1名、嘱託職員調査担当者1名、嘱託調査補助員1名、嘱託事務員1名と発掘調査作業員等19名の調査体制で5月14日から7月16日までの期間で行った。(乾)

表I-1 幌内5遺跡 試掘調査一覧表

調査日	TR. No.	遺構		遺物										合計	
				土器		石器		剥片類		礫		他			
				Ⅲ層	V層	Ⅲ層	V層	Ⅲ層	V層	Ⅲ層	V層	Ⅲ層	V層		
平成17年4月	1	なし	削平跡土層	-	-	-	1	-	-	-	7	-	-	8	8
	11	なし	なし	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	2	2
合計		-	-	0	0	0	1	0	1	0	8	0	0	10	10



第2節 調査の方法

1. 調査区の設定

幌内5遺跡の発掘調査範囲は、導水路管理工事で掘削施工される幅17.5m、延長50mで、道教委によって回答された「要発掘調査」は導水路設計センターの延長に基づいている。調査区幅等は開発事業所施工設計図面にに基づき、現地での発掘区境界杭6点の設定を有限会社幅田測量に委託した。境界杭設置の結果、施工設計図と若干異なり北側の丘陵部にまで、施工掘削が及ぶことが判明した。

発掘調査区上流側のA地区は遺物が出土した試掘トレンチ位置を中心として東西に15mとした。A地区の上流側から設計センターに従い、道教委回答の発掘調査区と工事立会区とに符合させた。なお、B地区との間の工事立会区については、開発事業所から施工時の立会であるものの遺構調査や遺物回収が生じた場合、工事の支障となることから工事着手前に埋蔵文化財に係る不確定要素を可能な限り除外しておく必要性、要望があった。このため包含層残存範囲の境界確認も含め、本調査に合わせてバックホーで耕作土の除去を行い、遺構確認調査とすることで開発事業所と調整を進めた。これにより道教委回答の工事立会区の出土遺物も本書に一括して掲載している。

なお、発掘調査区内東側のA地区に未舗装の農道が所在していることから、農道部分の調査は他の調査区が終了し、2週間で農道復旧を行える工程で農道利用農家と調整を図った。調査期間中は、隣接する農家の敷地内を迂回路として御協力を頂いたことから、仮設路敷設等の作業縮減ができた。

2. グリッド設定

グリッドは世界測地系公共座標に従い、調査区北東の湧水地点より西側で厚真川本流に面する河岸段丘縁辺部も含めた地形上の範囲を幌内5遺跡の推定包蔵地とし、これを網羅する範囲とした。グリッド設定の基軸はX軸を厚幌導水路設計センターラインとし、直交するY軸を設計センター測点杭4500とした。全体のグリッド網基点は、調査区東北東コーナーよりXライン上の東北東へ約73m、Yライン上の北北東に約110mの地点に図面上のA-0杭を設け、これを起点とし、X軸をアルファベット系列、Y軸をアラビア数字系列とした。これらの結果、XY軸の起点となった設計センター上の測点4500はY-30杭となった。なおY軸は真北より12度3秒西に傾く。各グリッドは5m四方とし、その起点、グリッド呼称杭を北東コーナーに打設した杭とした。

発掘区内におけるグリッド杭の打設は、測量会社に設計センター上の基準杭Y-30杭（測点4500）とYライン（設計センター）上で15m西側にY-33杭の設置を委託し、この2点から光波式トータルステーションを用いて調査員が火山灰除去に障害とならない地点に控杭を打設し、除去後の発掘区内のⅢ層黒色土上面に10m四方で設置した（図I-3）。

なお、発掘調査時点では使用していないが、報告書の遺構等の平面図において、位置関係を示すために、1m四方の小グリッドを設けている（図I-5）。

絶対高は、調査区の北側に隣接する3級基準点H16-05より調査区境界杭等の8本に委託業務で移設した。調査にあたり基準杭から各グリッド杭への移設も行った。

3. 包含層および遺構調査の方法と経緯

幌内5遺跡はアイヌ文化期の土坑墓も検出されていたことから、Ⅲ層と試掘調査で新たに判明した縄文時代のV層の上下2層の黒色土を調査対象として積算し、室蘭開発建設部と契約した。調査区内の現況地目は畑地であり障害物はなかったものの、畑地造成時の北側カッティングに数本の樹木があり、伐採作業を行った。枝葉等の処理を行い、土地所有者の指示の延長に切り揃え、引き渡

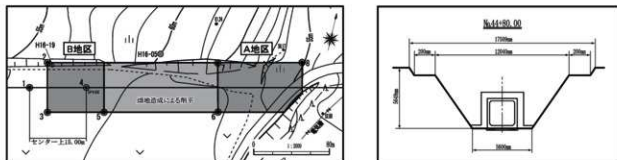


図 I-4 境界杭・グリッド設定基準杭位置図及び施工断面図

表 I-2 境内5遺跡 調査区内訳

調査区	延長×幅(m)	面積(m ²)
発掘調査区1	30×11.0=330	503.9
	(23.5+30)×6.5÷2=173.875	
発掘調査区2	20×17.5	350
発掘調査区 小計		853.9
工事立会区	40×17.5	700
工事立会区 小計		700

表 I-3 グリッド設定関係杭座標値一覧表

杭名	X座標	Y座標	Z座標
H16-05	-138332.559	-24239.271	60.095
HN5-1(Y-33)	-138354.599	-24281.512	56.727
HN5-2	-138344.599	-24277.174	56.393
HN5-3	-138361.639	-24273.190	57.453
HN5-4(Y-30)	-138350.046	-24262.037	56.303
HN5-5	-138357.086	-24253.715	57.883
HN5-6	-138347.980	-24214.766	57.735
HN5-7	-138330.940	-24218.750	60.154
HN5-8	-138324.110	-24189.538	54.535

※ 世界測地系公共座標(平成15年度 十勝沖地質調査報告書)

した。その後、バックホーによる丘陵部の表土や火山灰除去の後、カッティングの被覆土の除去を行った。調査区主体を占めるA地区の農道部分および耕作地については、農道部分以外の耕作土、盛土、火山灰の除去作業を行いⅢ層上面の検出作業を行った。発掘調査終了後、現状復旧のため耕作土は畑地基盤の盛土と区別し、キャリアダンプで運搬し借地内に堆積した。これらの伐採から遺物包含層の上面までの火山灰除去等の準備工は調査員の立ち会いのもと進めた。

バックホーによる火山灰除去は1～3cm程度残し、人力でジョレンによる火山灰除去作業を行った。また同時に調査補助員と測量技能作業員等がオートレベルを用いて地形測量を行い、合わせて攪乱、畑地造成範囲も記録した。これらの作業終了後にⅢ層上面で遺跡近景を撮影した。なおこの時点においてB地区で耕作土除去後に削平された丘陵部裾の境界層を確認し、縄文時代前期の遺物を伴う削平による排土層と思われる樽前dテフラの再堆積層を検出している。

Ⅲ層の包含層調査は、上層のⅢa層は調査区全面を調査した。中世アイヌ文化期から擦文文化期にかけての遺物包含層であるⅢb層は25%調査を行い、B地区で極少量の獣骨や礫が出土したグリッドを中心に追加で範囲を拡張した。しかし、出土遺物の広がりはなく、Ⅲ層調査を終了した。

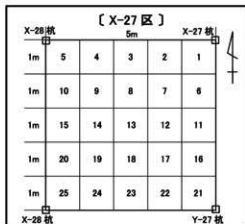


図 I-5 小グリッド模式図(境内5遺跡参考)

残存部分のⅢ層と層厚約14cmの樽前cテフラⅣ層は、調査員立会のもとバックホーと人力併用作業で除去した。なおⅣ層除去後のⅤ層上面で再設置したグリッド杭名はⅢ層上面で打設した杭と同一名称となることから、Ⅴ層のグリッド杭名の末尾に「B」を記入して区別した。

縄文時代の遺物包含層であるⅤ層は、まず、耕作面で確認した排土層の堆積状態を確認するため、発掘区の北側に樽前dテフラまでの幅1.5mのトレンチを掘開した。合わせてこのトレンチ壁面で包含層の堆積状態を記録している(図I-10~12)。この結果、Ⅴ層中の樽前dテフラの再堆積層は縄文時代の排土層であることが判明し、この面的な検出作業から着手した。調査中に排土層の供給源を検討した結果、丘陵頂部付近に樽前dテフラが堆積せず、Ⅴ層黒色土が恵庭aテフラに被覆している堆積状態を確認し、これを供給源と推定した(図I-11 カラー2-4)。排土層と遺物の分布状態がほぼ一致しており、排土層の西側縁辺部を検出する作業に重点を置いた調査に切り替えた。排土層より西側の29ライン以西のⅤ層は包含層中位までを全面調査した結果、出土遺物が極端に減じたことから、包含層の下位は25%の人力調査とした。残存部分のⅤ層下位についてはバックホーで除去し、漸移層上面で遺構確認精査を行った(図I-7)。

丘陵頂部の出土遺物が少量にとどまった。狭小な調査区であったことから樽前dテフラの削平範囲を平面的にとらえることは不可能であった。合わせて畑地造成の崖面を利用して恵庭aテフラ下層の旧石器確認を16.6㎡行ったが、遺物は出土していない。

発掘区東側のA地区は最大仰角約6度の傾斜地でありながら多量の遺物が出土した。しかし、樽前dテフラを主体とする排土層の堆積はない。なお、今回の発掘調査で唯一のTピットが傾斜地のX-16区で検出している。A地区は畑地造成時の盛土造成がされており、南側の壁面で遺物出土面からの層厚が約3mとなったため、安全対策上、法面勾配を確保し調査区幅が約1m減じている。また、調査区の3方が1m以上の壁面となったため、斜面上方の調査終了部分をバックホーで掘削し、調査排土捨て場を確保し作業の効率化を図った。

今回の発掘調査で検出した縄文時代前期前葉の整地範囲を伴う排土層は、調査例が少ないことから、土地所有者や原因者の了解を得て、調査区外にも範囲確認のトレンチを掘開している。詳細な結果は第三章第1節に記載している。

これらの排土層範囲や遺構の平面位置の記録は全て光波式トータルステーションで行っており、公共座標位置と標高を有している。また、出土遺物の取り上げはⅢ層、Ⅴ層共に全点に遺物番号を付番し、調査員による層位と種別を確認したうえで、光波式トータルステーションとデータコレクターによるXYZ座標(世界測地系公共座標)の位置情報をデジタル記録で取り上げた。この時、手簿(日付・グリッド・層位・遺物名等)の記載も行い、データ入力ミスの補完を行っている。

撮影記録は、堆積状態などの調査要所において35mm一眼カメラのモノクロフィルムとデジタルカメラで行っている。

4. 整理作業

一次整理は、発掘調査期間中から雨天日や10月の日没後の時間に水洗、注記作業、フローテーション作業を行った。整理期間では遺構や包含層遺物の各担当調査員が調査区遺構名や層位、種別、細分類、材質等の台帳確認作業を行った。また並行してフローテーション処理後の二次選別作業も行った。

二次整理は遺構堆積図や遺物出土状態等の実測図のスキヤニング作業、「遺跡管理システム」による平面図データの変換、遺構平面図と堆積図の照合作業、各種遺物の接合・復元・実測・拓本等の作業等を

行った。遺構遺物のトレース作業・編集については、パソコン(0s Windows Adobe IllustratorCS)で行った。なお剥片石器の撮影・実測は㈱トラスト技研、礫石器の撮影については(南写真事務所)に委託した。その他の遺物写真撮影は35mm一眼レフデジタルカメラで行い、パソコン(0s Windows Adobe Photoshop7.0)での等倍化、陰影等の切り抜き作業、コントラスト補正等を行っている。報告書掲載図や写真図版、一覧表の編集・版組みも上記のソフトで行い、本文のMicrosoft Word文書と合わせて印刷所へデジタル入稿している。

遺物の収納保管は報告書掲載遺物を図版毎に行い、それ以外のは分類および調査区毎にコンテナに収納し町内の廃校舎に収蔵している。(乾)

第3節 調査結果の概要

1. 平成21年度 III層の調査概要

本遺跡は平成3年に畑を造成する際、アイヌ墓が1基検出されているため墳墓として搭載されている。樽前bテフラと樽前cテフラに狭在するIII層からは、A・B地区ともにほとんど遺物が出土せず、アイヌ文化期、擦文文化期を示す資料は出土していない。遺構は土坑1基、遺物は石器類7点、礫21点、フレイク・チップ12点、B地区斜面に獣骨が7点出土するのみであった。(奈良)

2. 平成21年度 V層の調査概要

樽前cテフラと樽前dテフラに狭在する黒色腐植土のV層からは、縄文時代早期、前期、後期の土器が出土している。先述したように調査区中央の丘陵部分は、現代の畑地造成のため削平されている。

調査区は中央部分(立会工事区域)を挟んで上流側をA地区、下流側をB地区と定めている。遺構はTピット1基、炭化物集中3ヶ所、フレイク・チップ集中1ヶ所、土器集中1ヶ所、礫集中1ヶ所検出している。遺構については殆ど検出されていないが、B地区斜面においてTa-dバミスを少量から多量に含む土層を確認した。このTa-dバミスを含む層を便宜的にVbm層として分層している。Vbm層はVb層とVc層の間、もしくはVc層間に堆積しており、供給源は段丘頂部を削平したTa-dバミスであると考えられ、遺物の約40%はこのVbm層から出土している。

また、範囲を確認するために調査区外ではあるが、地権者と原因者の了解を得て丘陵の頂部から斜面及び調査区南側にトレンチ7ヶ所を掘削し、Ta-dバミスが含まれる地点とTa-dが堆積していない地点の範囲確認調査を行った。詳細はIII章で述べるが、丘陵頂部にプライマリーな堆積が認められない地点があることから、このような堆積の在り方を丘陵部分の整地、削平として捉え、結果的に斜面へ投棄された土砂であると解釈している。

A地区は同時期の遺物が多く出土しているが、Ta-dバミスの堆積が認められず、主にB地区側(西側)に削平した排土を投棄していたと考えられる。

V層から出土した遺物は総数12,400点で、内訳は土器1,141点、礫石器1,641点、剥片石器745点、礫6,532点、剥片類2,340点。その他1点である。主体となる土器の時期は縄文時代前期前葉の尖底土器群の春日町式、静内中野式土器である。そのほか、本遺跡で特徴的なものとしては礫石器の多さが挙げられ、中でもたたき石は1,081点と礫石器全体の約66%出土している。(奈良)

表 I-4 幌内5遺跡時代別概要一覧表

項目	Ⅲ層	V層	合計
	原文化期・ 続縄文文化期	縄文時代	
発掘調査面積(m ²)	854		854
土坑	1	-	1
Tピット	-	1	1
炭化物集中	-	3	3
礫集中	-	1	1
土器集中	-	1	1
フレイク・チップ集中	-	1	1
遺物点数	40	12,400	12,440
表探遺物点数	20		20
遺物総点数			12,460

表 I-5 幌内5遺跡 出土遺物一覧表

層位	細分類						計
	土器	礫石器	剥片石器	土製品	礫	剥片類	
Ⅲ層	-	6	1	-	21	12	40
V層	1,141	1,641	745	1	6,532	2,340	12,400
表探	2	3	2	-	-	13	20
	1,143	1,650	748	1	6,553	2,365	12,460

表 I-6 遺構群一覧表

遺構名	時期	規模(cm)		グリッド	層位	付属・関連遺構	備考
		長軸	短軸				
ⅢP-01	原文化期・ 続縄文文化期	102	101	Z-30	VI	-	縄文遺構調査中に検出
VCB-01	縄文時代	94	73	Y-27	VbM	-	
VCB-02	縄文時代	63	48	W-18	Vc	-	
VCB-03	縄文時代	78	67	Y-27	VbM	-	クルミ多く出土
VFCB-01	縄文時代	470	272	Y-17・18	VbL	-	
TP-01	縄文時代	119	60	X-16	VI	-	
VPB-01	縄文時代	55	33	W-26	VbM	-	削平に伴う排土から出土
VSB-01	縄文時代	170	141	W-26	VbM	-	削平に伴う排土から出土

第4節 遺跡の位置と周辺環境

1. 自然地理的環境

幌内5遺跡は厚真町幌内地区に所在し、厚真川河口から約25km、厚真町市街地から直線で東北東に約7kmの厚真川上流域左岸に位置し、標高54~61mの河岸段丘上に舌状に突出した高位段丘先端部付近に立地する。本遺跡が立地する河岸段丘は厚真川流域に形成されている段丘面の中でも広域に形成されたもので、東西方向に流下する厚真川に平行して上流側の支流オッココ沢川から、字幌内1032-1周辺の無名川付近までの約1.5kmにわたって一定の傾斜度を保つ河岸段丘面が続く。背後の低平な山地性丘陵までの奥行きは遺跡周辺で約350mあり、広域に形成されたほぼ平坦な河岸段丘面であることから日照条件に恵まれているものの、北西の季節風や南風にもさらされる地形でもある。現在は平成元~3年にかけての大規模な造成事業により、広大な畑作地域として利用されている。

厚真川流域の河岸段丘については、「上幌内モイ遺跡(1)」に報告されており、現河床面のT₀から比高差が50m以上のT₆まで区分されている(出穂2006)。遺跡周辺では厚真川との比高は20mほどあり、幌内5遺跡が立地する丘陵状地形の高位段丘面はさらに約10m高い。低位段丘面は厚真川との比高から幌内7遺跡(厚真町教育委員会2010)と同じ段丘面と考えられ、恵庭aテフラ降下(En-a 19,000-21,000BP)前後の離水形成時期と思われる。テフラの堆積状態を考慮すると、上流域に位置する上幌内モイ遺跡のT₄面以上に相当する。本遺跡が立地する高位段丘面はより古い時期に離水しており、支笏降下軽石(Spfa-1 40,000BP)が堆積しておりT₆面以上の相当面と思われる(出穂2006)。なお、この特殊な地形については後節にて詳述する。

河岸段丘の基盤層は周辺の山体も含め第三紀堆積岩の「振老層」(石田・松野1960)で、周辺の露

頭で砂岩泥岩の互層が観察できる。本遺跡付近における厚真川河川敷では5cm前後の砂岩、泥岩の転礫を主体としているが、中流域なので縄文時代の礫石器素材となりうる転礫自体を採集できる地点は限定される。転礫以外の砂岩は当時の厚真川の流路にもよるが、厚真川等の浸食による周辺の段丘崖で容易に採集できる。現在は護岸工事が進み確認できないが、遺跡に隣接する湧水地点からの浸食崖でも採集できたものと思われる。現在最も近い浸食崖は本遺跡より北西に130mの地点で露頭を確認できる。なお本遺跡出土の石器類石材で特筆すべき白濁したメノウは、約2.4km西の頗美宇川との合流点に突出した砂岩基盤層中に層状に挟在した状態や段丘堆積物の礫層中に産出する。

幌内5遺跡の周辺地形では、小規模な小沢が開析しているが、いずれも流路幅が1m以下であり、厚真町の河川台帳にも登録されていない無名沢である。本遺跡からも300m以上離れており、遺跡の立地に直接かかわるものではない。これらの小沢についての詳述は後に記す。直接的に幌内5遺跡の立地に係るものとして北東約60mにある湧水地点が挙げられる(図I-2・3)。本遺跡の東側の地形図等高線から埋没した沢状地形が読み取れ、現在の町道幌内左岸線によって、本来の湧水地点は埋め立てられている可能性があり、遺跡形成当時はより南側の本遺跡に隣接した地点にあった可能性がある。遺跡の主体時期である縄文時代前期前葉の町内における包蔵地の分布傾向として、湧水地点周辺に立地している例が多々あり、当時の生業との関連が想定できる。

なお、厚真川沿いの沖積低地は水田に利用され、対岸は河岸段丘の発達が弱く、沖積低地から山地性丘陵が続き、標高約170mの無名山(アイヌ語地名:コムヌプリ)がある。

2. 歴史的環境

A 先史時代

幌内5遺跡が立地している厚真川左岸の河岸段丘上には、上流側からオコッコ1遺跡、幌内7遺跡(厚真町教育委員会2010)、幌内6遺跡、幌内5遺跡の4ヶ所が所在している。うち本遺跡を除く3遺跡は厚幌導水路建設事業の試掘調査で新規登載された包蔵地である。

本遺跡より950mの東に位置するオコッコ1遺跡は、厚真川とオコッコ沢川の合流点に張り出す標高55~60mの舌状台地に立地している。試掘調査では、本遺跡とほぼ同時期か1型式新しい時期と思われる、縄文時代前期前葉の盛土遺構が確認されている(註1)。オコッコ1遺跡も人為的に動かされた樽前dテフラに陸棲哺乳類の焼骨片を含み、被熱によって破碎した礫が多量に出土している。本遺跡から1km西方の厚真川対岸に位置する富里1遺跡からも試掘調査において少量の静内中野式土器片と多量の被熱礫が出土している。厚真川中流域では本遺跡より西へ2.3kmの位置に、平成19年度に発掘調査したニタツプナイ遺跡がある(厚真町教育委員会2009b)。1型式ないしは2型式ほど新しい段階の遺跡であるが多量の被熱礫と焼骨片を伴う不明瞭な人為堆積層を確認している。厚真町内において、上流域ではシヨロマ2遺跡、厚幌2遺跡の試掘調査で静内中野式土器と多量の被熱破碎礫が出土している。下流域でも鹿沼7遺跡で焼骨片と被熱破碎礫を伴う盛土層が確認されており、縄文時代前期前半に遺跡数が急増する傾向にある。

幌内6遺跡は、本遺跡より東へ約250mの地点に位置し、本遺跡群が立地する河岸段丘の中央部を開析する無名沢(アイヌ語地名:ヲホフ)の左岸に立地している。厚真川本流に面した縁辺部から150mほど内陸に入った地点の試掘調査で、縄文時代後期初頭の余市式土器が数点出土している。包蔵地範囲の縁辺部または小規模な包蔵地と思われる。厚真川本流に面した段丘縁辺部に広がる可能性があるものの、範囲は確認できていない。

小規模なコタンが点在していたことが伺える。

その後の記録として幌内自治会記念誌『幌内のあゆみ』（厚真町幌内自治会 1997）によると、1890（明治 23）年頃の幌内地区の戸数として 3 軒のアイヌ民族が狩猟を中心に生活していた記録が残されている。幌内地区の和人による農業開拓は 1895（明治 28）年に約 20 戸の移入が始まりで、翌 1896 年の作付けは水田 3 反歩、畑 15 町歩となっている。幌内 5 遺跡周辺には 1907（明治 40）年に木戸市左エ門が入地し、水稻栽培を始めている。血縁者の木戸市次郎氏が中心となって、厚真川左岸城の灌漑用水整備を行うため 1914（大正 3）年に「木戸用水組合」を設立し、1910（明治 45）年に設立された「幌内用水組合」とともに、現在の幌内地区の美田の礎を築きあげている。幌内 5 遺跡の東に隣接する農家（講神家）は 1919（大正 8）年に富山県より幌内に入地している。入地当初は南側の山地性丘陵部裾に入地していた開拓者の支援を受け、現在の地点には 1920（大正 9）年に住居を構えている。講神仁助氏からは「井戸掘削における地下水脈の有無がこの場所への選定理由」と伺っており、埋没谷の存在が想定できる。

また、現在の町道幌内左岸線が舗装化されたのは昭和 62 年で、幌内 5 遺跡周辺部の大規模な畑地造成は平成元年から 3 年にかけて行われたものである。この時、近世後半から末期にかけてと思われる蝦夷太刀 3 振等を伴うアイヌ墓 1 基が発見されている（図 I-6 北海道新聞 1991 年 5 月 19 日記事 図版 20-2-1～3）。

今回の発掘調査の結果、既に畑地造成された区域外へ縄文時代前期の排土層が続くことが判明し、相当数の被熱礫も伴っていたものと考えられる。しかし、現在の耕作地の踏査や調査区内の盛土等の除去に立ち会ったものの採集できた遺物は数点にすぎない。畑地造成時の切土土砂の埋め立て方法等の後世の条件も関連するが、調査区より 20m 南に掘削したトレンチ No.8 においても出土遺物が少ないことから内陸部へ向かうにつれ遺物密度が薄くなる可能性もある。（乾）

註 1：試掘調査での確認であり、削平整地範囲とのセット関係は不明であるが、立地地形や再堆積の樽前 d テフラの検出位置から幌内 5 遺跡と共通しており、盛土遺構よりも削平を伴う排土層の可能性もある。

3. 調査区内の地形と地質

A 地 形

先述のとおり調査区は大規模な農地造成によって本来の地形を留めていないが、調査区の北側は開発を免れ、原地形が残っている。調査区内の本来の地形はこの延長上と思われる。

まず、東西方向の長軸 90m、南北に短軸 17.5m の調査区内の現状として、調査区中央部の 19～27 ラインにかけての約 40m の延長で畑地造成による削平部分があり、河岸段丘堆積物の砂層が露出している。耕作土および現代の造成盛土除去後の調査区内の標高は 57m で、北側原地形の高位段丘面頂部から約 3m が削平されていた。調査区は盛土によって埋め立てられており、A 地区東端部の南側壁面で約 3m、B 地区西端部の北側壁面で約 1m の層厚であった。盛土下には樽前 b テフラ等が堆積し、表土から良好な保存状態であった。高位段丘面を削平し、東西両側の沢状地形を埋め立てている状態が判断できる。高位段丘面から低位段丘面への傾斜は、樽前 d テフラ上面での仰角で A 地区が 16.8°、B 地区は 13.7° を測り、A 地区はやや急傾斜の東向きの段丘崖を形成しているのに対し、B 地区の傾斜は緩く調査区外の現地表面地形を考慮すると、やや広い沢頭状の地形であった可能性がある。なお、A 地区の傾斜角は、上流側の基盤層侵食崖を反映している可能性がある。

基盤層の堆積状態は地形形成に大きく起因することから、段丘堆積状態と合わせここに記述する。

観内5遺跡の立地する河岸段丘は高位面と低位面があり、遺跡は高位面と低位面にかけての斜面に形成されている。高位および低位段丘面に共通する最下層の堆積物は恵庭aテフラであり、降下年代の約20,000年前には離水している。高位段丘面において調査区北側の崖面を利用した旧石器確認トレンチでは、恵庭aテフラより下層に水成堆積層である段丘堆積物を確認している。A地区のV層調査時に掘開した排土置場の壁面において層厚約3m以上の支笏降下軽石層(Spfa-1)を確認しており、高位段丘面にはさらに古く約40,000年前に離水していたことが想定される。しかし、高位段丘面頂部付近の旧石器確認深掘りのテストピットでは恵庭aテフラより25cm下層で水成堆積と思われる堆積層を確認している。この堆積層は上層から灰褐色粘土質シルト層、淘汰の良い砂層と支笏降下軽石再堆積層の互層堆積層と下層に粗砂を基質とする長軸1~2cmの角礫状の泥岩類を含む堆積層で水成堆積物の1ユニットを構成している。

このことから、高位段丘面は支笏降下軽石層(Spfa-1)の降下以前に形成された河岸段丘面で、その後、一時的に河川堆積物が堆積する環境にあった。この堆積過程は上観内モイ遺跡のT₁面と類似しており、「厚真川が下刻を継続している時期に形成された浸食(性的)段丘」(出穂2006.P126)と同類の段丘面と考えられ、いわば特異な地形面と言える。

B 地質

段丘堆積層より上層の調査区内の標準土層について記述する。

調査区内の本来の基本層序は、沢状地形部分では畑地の大規模造成に伴う盛土層や営農の耕作土(0層)があり、以下近世中期から近現代にかけての旧表土(Ⅰ層)以下が良好な堆積状態で遺存している。高位段丘面の頂部では植林作業等でⅣ層の樽前cテフラまで削平された状態である。なお、A地区においては近現代の抜根跡が数ヶ所認められる。

沢状地形では旧表土(Ⅰ層)があり、近世火山噴出物(Ⅱ層)の樽前aテフラ(Ⅱa層 砂質降下火山灰 Ta-a 1739年降下)や樽前bテフラ(Ⅱd層 中礫質降下軽石 Ta-b 1667年降下)、有珠bテフラ(Ⅱe層 シルト質降下火山灰 Us-b 1663年)が安定的に堆積している。また、駒ヶ岳C2テフラ(Ⅱc層 砂質降下火山灰 Ko-c2 1694年降下)を斑状に確認することができる。過去に調査した厚真川流域の遺跡の中でも、駒ヶ岳C2テフラの堆積が弱く、これを挟在する近世前期から中期にかけての砂質腐植土層(Ⅱb層 美沢川流域の遺跡群の0B層相当)の堆積も認められない。本遺跡の発見の端緒となった近世アイヌ墓はⅠ層ないしはⅡ層中に形成されていたものと思われる。

縄文時代晩期後葉から近世アイヌ文化期にかけての遺物包含層であるⅢ層は、樽前bテフラと樽前cテフラ(Ⅳ層 砂質降下軽石 Ta-c、約2,500年前降下)に挟在する黒色腐植土層で、Ⅲa~Ⅲc層に分層した。主体層を成すⅢb層はやや粘性を有する黒色土層で、Ⅲc層は均質にⅣ層を含む黒褐色から暗褐色の砂質土層であり、沢状地形での発達が顕著である。Ⅲb層とⅢc層との層境には白頭山苦小牧火山灰(シルト質降下火山灰 B-Tm 10世紀前半降下)が部分的に堆積しており、A・B両地区の斜面部分に比較的良好な堆積状態が確認できる。

縄文時代晩期中葉の土器編年等に効果的な準鍵層となる樽前cテフラは連続した堆積層であるものの、堆積土壌性質から植物等の攪乱によりⅢc層の貫入が顕著である。

縄文時代早期から晩期中葉にかけての遺物包含層であるV層黒色腐植土層もa~cの3層に分層した。Va層はⅣ層と斑状に堆積し、Vb層は粘性が強い黒色土層である。Vc層はⅦ層起源の樽前dテフラが均質に混入している。Ⅵ層はV層とⅦ層が植物痕跡等により斑状に堆積する漸移層であ

る。概ねVa層は縄文時代晩期、Vb層は縄文時代中期・後期、Vc層は縄文時代前期、VI層は縄文時代早期の遺物包含層と考えられる。なお、B地区の斜面25～28ラインにかけてVb層下位からVc層上位にかけて樽前dテフラを多量に含む縄文時代前期前葉の削平排土層の堆積が認められる(図III-1)。排土層はバミス混入の度合から幾つかのブロックが認められるが、平面的な調査での廃棄単位の確認までは至らなかった。

V層黒色土とVII層樽前dテフラとの漸移層であるVI層は、斜面部分において一定の堆積で認められるものの、沢状地形ではVc層が大きく落ち込む部分がある。

VII層は樽前dテフラ(Ta-d 細～中礫質降下スコリア 約8,000年前)で、上下2層に分層できる。下層は樽前d2テフラで、中礫質の発泡性の高いスコリアでA地区では40～50cm前後の安定的な堆積である。上層は細礫質スコリアの樽前d1テフラで、保水性に乏しく顕著に乾燥する。堆積状態は薄く不連続である。

なお、高位段丘面頂部ではVII層とVc層の堆積が認められず、Vb層がVI層や恵庭a風化ローム(IX層)に被覆している部分が確認できた。これが縄文時代前期の削平整地部分の堆積状態で、B地区の斜面において確認した排土層の供給源範囲と考えられ、層位的整合がある。

IX層は恵庭aテフラの風化ローム層で上下2層に分層した。IXa層は上面にて炭化物をブロック的に含むやや腐植質の褐灰色シルト層である。苫小牧市や千歳市の「III B層」に相当するが、発達は極めて弱く遺物は出土していない。現在のところ、町内の発掘調査においてこの層からの確実な出土遺物はない。X層(En-a 中礫質降下軽石 約20,000年前降下)下層のXI層ローム質土は、砂質土を含むa～cの互層堆積で、軽石・砂・小礫の互層堆積のX層と一連の離水過程に堆積するシルト層の可能性がある。X層は淘汰が良く、ラミナが発達した水成堆積層である。今回の調査で確認できた最下層には支笏第1降下軽石層(Spfa-1 約41,000年前)で、約3mまでの掘削を行ったが層厚の確認までは至っていない。(乾)

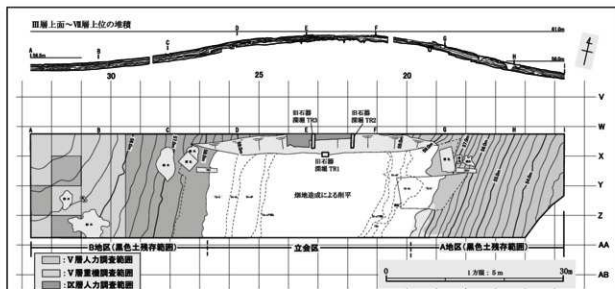
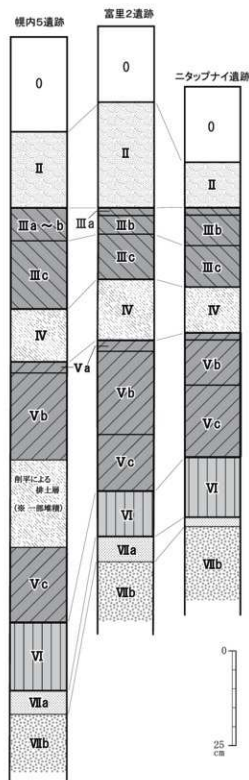


図 I-7 堆積状態実測位置図及びV・IX層調査範囲

〔各遺跡 基本土層〕



- 0層：攪乱・耕作土
- I層：近現代表土 7.5YR3/1 黒褐色砂質土
- II層：近世火山噴出物及び黒色砂質腐植土
 a：樽前 a テフラ (Ta-a) 10YR6/4 にぶい黄橙色 砂質降下火山灰 1739 年降下。耕作により部分的に堆積。層厚 8cm 前後。
 b：黒色砂質腐植土層 10YR2/1 黒色 新千歳空港（美沢川流域の遺跡群）の調査における 0 黒層相当。
 c：駒ヶ岳 c2 テフラ (Ko-c2) 10YR8/3 浅黄橙色 砂質降下火山灰 1694 年降下。II b 層中において部分的に堆積している。
 d：樽前 b テフラ (Ta-b) 2.5YR7/3 浅黄色 細粒質降下軽石 1667 年降下。層厚 20 ～ 30cm 前後。
 e：有珠 b テフラ (Us-b) 2.5YR6/1 黄灰色 シルト質降下火山灰 1663 年降下。層厚数 mm, IIIa 層上面に堆積。
- III層：黒色腐植土
 a：砂質シルト 7.5YR2/1 黒色 II d-e 層を斑状に含む。層厚 1cm 前後。やや赤味あり。近世初頭遺物包含層。
 b：シルト 10YR1.7/1 黒色 やや粘性あり。層厚 10cm 前後。上位から中位が中近世アイヌ文化期遺物包含層。下位が擦文文化期包含層。IIIb 層と IIIc 層との層境に白頭山苫小牧火山灰 (B-Tm シルト質降下火山灰 10c 前半降下) が部分的に堆積する。
 c：砂質シルト 10YR2/3 黒褐色 層厚 10cm 前後。縄文晩期後半の包含層。
- IV層：樽前 c テフラ (Ta-c) 10YR6/6 明黄褐色 砂質降下軽石 B. P. 2,500 年前後降下。層厚 10cm 前後。I 層のフォーメット。
- V層：黒色腐植土
 a：シルト 10YR3/2 黒褐色 層厚 2cm 前後。縄文晩期前半の遺物包含層。
 b：シルト 10YR1.7/1 黒色 層厚 25cm 前後。縄文中・後期の遺物包含層。
 c：シルト 10YR2/3 黒褐色 層厚 15cm 前後。縄文前・中期の遺物包含層。
- VI層：漸移層 2.5YR4/6 褐色 暗褐色シルト。層厚 10cm 前後。縄文早期の遺物包含層。
- VII層：樽前 d テフラ B. P. 8,000 年前後降下。
 a：樽前 d1 テフラ (Ta-d1) 5G4/1 暗緑灰色 細粒質降下スコリア (φ5↓) 層厚 10cm 前後。
 b：樽前 d2 テフラ (Ta-d2) 5YR4/8 赤褐色 中粒質降下スコリア 層厚 100cm 前後。部分的に水成風化による粘土化も有る。

※削平による排土層は境内5遺跡のB地区に一部堆積が認められる

図 I-8 基本土層柱状図 (3遺跡分)

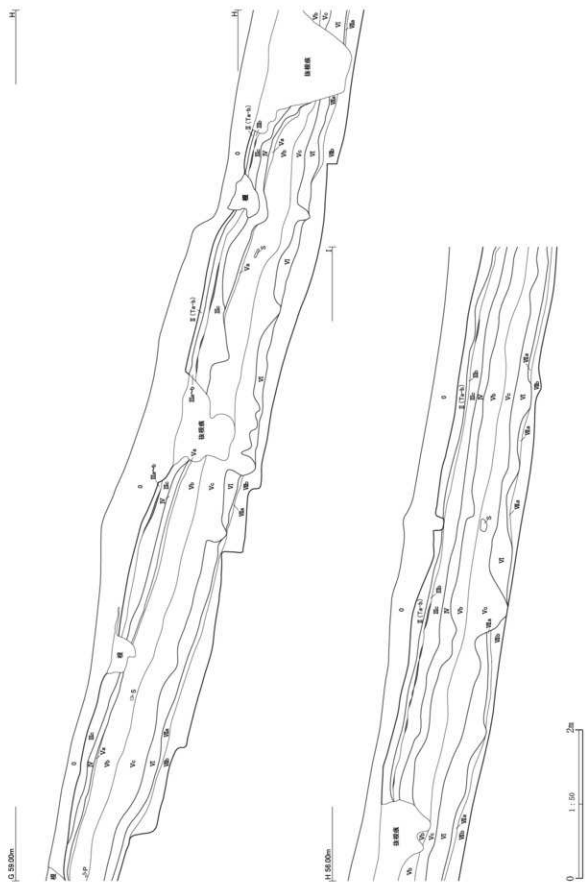


図 I-12 調査区北壁断面図3

第Ⅱ章 続縄文・擦文文化期の調査

本章で取り扱う遺構及び遺物はTa-bテフラとTa-cテフラに狭在する黒色腐植土から出土する資料で、遺構はB地区に土坑1基のみ確認している。遺物は石鏃が1点と礫石器が6点、礫21点、剥片類12点の総計40点である。

本遺跡は平成3年に現代の畑地造成の際、アイヌ墓が1基検出されていることから墳墓と記載されているが、今回の調査地点からはアイヌ文化期の遺構、遺物は見つかっていない。また、本章は続縄文文化期に特徴的な片岩製の石鏃が1点出土していることから、続縄文・擦文文化期と時代区分を広げて報告を行うものである。

Ⅲ層上面で出土する未被熱のシカ獣骨7点は、出土・分布状態から動物等により遺跡内に持ち込まれた可能性が高いと思われる。(奈良)

第1節 土坑

ⅢP-01 (図Ⅱ-2 図版2-1)

位置：Z-30 規模：102×101×22cm

確認・調査：Ⅵ層上面遺構確認調査で、Ⅲ層を主体とする黒褐色土の円形プランを検出した。土層堆積状態を観察するため、斜面勾配に沿って半截したところ、坑底面及び立ち上がりを確認し、土坑として調査した。平面形は不整な円形、坑底面は平坦で、立ち上がりはやや急である。覆土はⅢ層を主体とし、Ⅳ層が均一に混入する。坑底面直上ではⅥ～Ⅶ層が混入するⅤ層起源の黒色土が堆積する。土層断面ではブロック状の堆積が確認できることから、埋め戻しと考えられる。なお、Ⅲ層調査時及びⅣ層上面遺構確認調査時には土坑の上位に倒木痕があったことから、プランは確認できなかった。

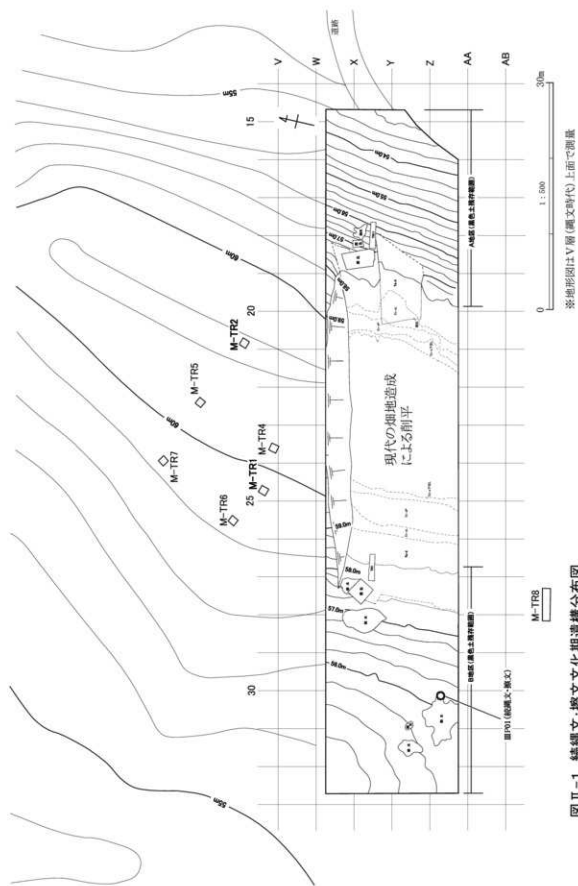
時期：覆土の特徴から構築面はⅢ層中と考えられるが、詳細時期は不明である。(山田)

第2節 包含層出土遺物

1. 石器 (図Ⅱ-3 図版5-1)

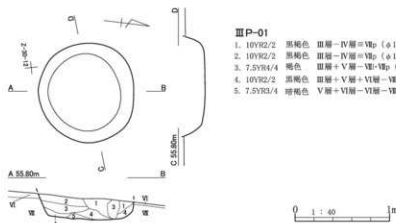
Ⅲ層包含層からは剥片石器1点、礫石器6点、剥片12点、礫21点が出土した。剥片石器は石鏃である。礫石器はたたき石4点、台石1点、加工痕ある礫1点である。石鏃は片岩、剥片は黒曜石、メノウ、緑色片岩、礫石器は砂岩、礫は砂岩、珪化岩である。

1は石鏃である。大型、厚手の三角鏃で、直線的な縁辺の表裏面には器体整形時の微細剥離痕が観察される。2・3はたたき石である。2は器体長軸上に2ヶ所の弱い敲打痕が観察される。素材礫は棒状の円礫と考えられるが、片面が欠損しており、本来の器体形状は不明である。3は左側縁に二次加工が施された扁平な礫片を素材とする。器体表面の中央には、中心がすり鉢状に凹む円～楕円形の敲打単位の重複が観察される。4は台石である。器体の半分以上が欠損するが、大型、板状の角礫素材のものと思われる。平坦面に擦痕とすり面、部分的な敲打痕が観察される。5は加工痕ある礫である。扁平円礫の長軸端に両面調整による剥離痕が観察される。礫石器はいずれも砂岩製で被熱痕が認められる。(山田)



図II-1 続縄文・擦文文化期遺構分布図

III-P-01



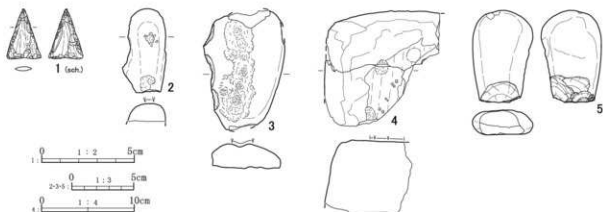
III-P-01

1. 10YR2/2 黒褐色 III層-IV層=Ⅴp (φ10 ↓ 均-) しまり中 粘性中
2. 10YR2/2 黒褐色 III層-IV層=Ⅴp (φ10 ↓ 均-) しまり中 粘性強
3. 7.5YR4/4 褐色 III層+V層=Ⅵ-Ⅶp (φ10 ↓ 均-) しまりやや弱 粘性強
4. 10YR2/2 黒褐色 III層+V層+VI層=Ⅶ-Ⅷp (φ10 ↓ 均-) しまりやや弱 粘性強
5. 7.5YR4/4 褐色 V層+VI層-VI層=Ⅷ-Ⅷp (φ20 ↓) ブロック しまり弱 粘性極強

図II-2 III-P-01 平面及び断面図

表II-1 III-P-01属性表

挿図 番号	図版 番号	遺構名	グリッド	調査 面層 位	平面形		調査面規模(cm)		坑底面規模(cm)		深さ (cm)	長軸方向	調査面 長短比	坑底面 長短比	備考
					調査面/坑底面	長軸	短軸	長軸	短軸						
II-2	2-1	III-P-01	Z-30	VI	円形/円形	102	101	80	73	22	N-73° E	1.0	1.1		



図II-3 続縄文・擦文文化期 包含層出土石器

表II-2 続縄文・擦文文化期 包含層出土石器属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	グリッド	遺物 番号	遺物名	分類	層位	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
II-3-1	5-1-1	-	Y-30	327	石 鏃	B2	IIIc	27.2	18.3	2.6	1.1	BI-Sch.	石材同定No.1
II-3-2	5-1-2	-	X-28	477	たつき石	VI	IIIc	68.3	35.3	12.6	40.0	Sa.	被熱
II-3-3	5-1-3	-	W-28	1967	たつき石	V	IIIc	93.5	65.4	20.4	(140.0)	Sa.	被熱
II-3-4	5-1-4	-	Z-25	48	台 石	III	IIIc	(117.8)	(120.5)	(78.4)	(1310.0)	Sa.	被熱
II-3-5	5-1-5	-	W-17	7460	加工痕ある礫	-	IIIc	74.4	46.3	19.7	100.5	Sa.	被熱

第三章 縄文時代の調査

本章で取り扱う遺構及び遺物は Ta-c テフラ下層の黒色腐植土及び漸移層から出土したものである。発掘区は大部分が現代の畑によって削平されており、以前の丘陵部は現代の畑地造成によって Spfa-1 テフラまで削平が及んでいるため遺構・遺物の検出は認められない。調査はこの丘陵部を境に東西斜面に残る黒色土を対象として行い、上流側をA地区、下流側をB地区と定めた。遺構はTピット1基、炭化物集中3ヶ所、フレイク・チップ集中1ヶ所、土器集中1ヶ所、礫集中1ヶ所検出している。遺物は土器1,143点、礫石器1,644点、剥片石器747点、礫6,532点、剥片類2,353点、土製品1点出土しており、時期は殆どが縄文時代前期前葉に帰属する。椀内5遺跡で特徴的なものとしては、B地区の斜面にTa-dバミスを多く含む層が平均20cmの厚さで確認された事が挙げられる。このTa-dバミスを多く含む層はVb層とVc層の間に認められ、同層中からは前期前葉の土器や被熱礫、礫石器等が多く出土している。本遺構の性格については第1節で詳細を述べるが、丘陵頂部を削平した際に斜面部へ廃棄した削平排土層と考えられる。(奈良)

第1節 整地に伴う削平排土 (図III-1)

確認・調査: B地区斜面の縄文時代の包含層、Vb層下位とVc層、もしくはVc層に狭在する形でTa-dバミスを少量から多量に含む層を確認した。当初は盛土に係わる土層と想定していたが、丘陵頂部にVII層(Ta-d)が堆積していないことから縄文時代前期前葉の整地に伴う削平が考えられた。Ta-dバミスを多く含む層については便宜的にVbm層という名称を付けて、各表に記載している。Vbm層は調査区壁面で確認すると、25~28ラインの間で約12.5m分布しており、Ta-dバミスの濃淡によってA~Hブロックに細分している。このブロックは削平単位を把握するための目安に分層を行ったものであるが、土層単位の平面对応は不可能であった。調査はTa-dバミスを含む層を面的に検出し、出土遺物と合わせて遺物出土状態の撮影を行った。平面はTa-dバミスの濃淡により線引きをし、図化、遺物の取り上げを行って調査終了とした。調査区外については、全ての調査を終了した後、地権者の了解を得て7ヶ所のトレンチ(M-TR1・2・4~8)を設定し堆積状態の確認を行った。丘陵頂部の調査は人力で1m×1mの範囲をVII層及びVbm層が確認できるまで掘削を行った。トレンチ調査の結果M-TR6・7にVbm層が認められM-TR1・4は標準堆積であった。整地に伴う削平はTa-dバミス削平推定ライン(図III-1 破線)部分から南西側で行われ、B地区(西側)斜面に土を廃棄したと考えられる。こうした排土の移動は、縄文時代前期の土地利用の在り方を考える資料となる。今回の報告に関しては丘陵のトレンチ調査も不十分で、全体像も不明瞭であるため今後このような土の動きに注目して調査を行いたい。

表Ⅲ-1 縄文時代 遺構群一覧表

遺構名	時期	規模(cm)		グリッド	層位	付属・関連遺構	備考
		長軸	短軸				
VCB-01	縄文時代	94	73	Y-27	VbM	-	
VCB-02	縄文時代	63	48	W-18	Vc	-	
VCB-03	縄文時代	78	67	Y-27	VbM	-	クルミ多く出土
VFCB-01	縄文時代	470	272	Y-17・18	VbL	-	
TP-01	縄文時代	119	60	X-16	VI	-	
VPB-01	縄文時代	55	33	W-26	VbM	-	整地による排土から出土
VSB-01	縄文時代	170	141	W-26	VbM	-	整地による排土から出土

遺物出土状態：調査区全体で出土する遺物はVbU-L層が264点、VbM層が435点、Vc層が341点、VI層82点、その他21点が縄文時代前期の約38%がVbM層から出土する土器になる。遺物はTa-dパミスが中量含まれる層中から最も多く出土する傾向にある。出土する土器は前期前葉の春日町式系土器、狭義の静内中野式に含まれる土器群である。こうした土器群は今回の調査では、層位ごとの把握は困難であったため、取り上げた後に包含層の土器と合わせて分類し、第5節の包含層出土土器で掲載を行っている。

II群A2a類の滑石を多く含む土器群については整理事業で精査したところVbM層、Vc層の両層から出土しているため、層位的な前後関係は捉えることができなかった。またトレンチ調査を行ったM-TR6からは図Ⅲ-9-12・13、Ⅲ-10-14と同一個体の土器および半個体が出土していたが、調査区外であったため現地に埋め戻したままである。炭化物集中などの遺構はTa-dパミスが多く含まれるVbM層で検出しているが、焼土ではなく、焼骨片が僅かに認められるのみであった。（奈良）

第2節 Tピット

TP-01 (図Ⅲ-2 図版2-3)

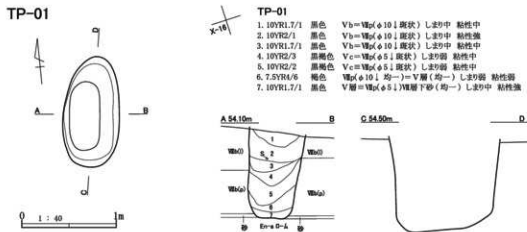
位置：X-16 規模：119×60×92cm

確認・調査：調査区東側斜面のVI層上面で黒色土の長楕円形プランを検出した。短軸方向で半截し、土層堆積状態を観察したところ、坑底面と壁面の立ち上がりを確認し、壁面の崩落と流れ込みの堆積状態からTピットとして調査した。坑底面は平坦で、壁面はやや急角度で立ち上がり、坑底から坑口の幅はほぼ一定である。杭跡は検出していない。規模は長軸約1.2m、深さ約1mである。厚真町で従っている分類基準(佐藤・大泉1987)ではC1型(「長短比が4未満のもので、楕円形から円形に近い」もので、「杭穴がないもの」)に該当する。等高線と並行して位置しており、配列は不明である。

堆積状態：覆土はしまりが弱～中のVb～Vc層が主体でVI～VII層が斑状に混入する。最下層のみ粘性の強いV層起源の腐植土が堆積する。2～6層は壁面の崩落土と流入土、7層は自然堆積土と考えられる。

出土遺物：覆土2層から砂岩の礫1点が出土している。

(山田)



図Ⅲ-2 TP-01 平面及び断面図

表Ⅲ-2 TP-01属性表

挿図 番号	図版 番号	平面形		グリッド	調査 面層 位	調査面規模(cm)		坑底面規模(cm)		深さ (cm)	長軸方向	杭跡	調査面 長短比	坑底面 長短比	備考
		調査面/坑底面				長軸	短軸	長軸	短軸						
Ⅲ-2	2-3	楕円/楕円		X-16	VI	119	60	72	31	92	N-10° E	-	2.0	2.3	

第3節 炭化物集中

VCB-01 (図Ⅲ-3 図版2-5)

位置：Y-27 規模：(94)×73×10cm

確認・調査：Y-27 区でVbM層を調査中、炭化物を多量に含む範囲を確認した。肉眼でクルミと判断できる資料が多く、周辺より密な分布を示していたため炭化物集中範囲として調査を行った。写真撮影、平面図、断面図の記録をとって調査終了とした。なお、炭化物範囲は全てサンプルとして採取し、フローテーションを行って炭化物を回収した。

本集中はVbM層の検出で、範囲内及び周辺からは削平排土層に伴う土器、石器等が多く出土しているが、遺物は包含層出土の資料と合わせて第5節で掲載している。炭化物は全てクルミで61g回収されている。本集中範囲はTa-dパミスの多い層から検出されているため、削平排土と同時期に廃棄されたブロックであると考えられる。時期は検出層位から縄文時代前期前葉に帰属する。(奈良)

VCB-02 (図Ⅲ-3 図版2-7)

位置：W-18 規模：63×48cm

確認・調査：W-18 区のV層調査中、Ve層より炭化物範囲を確認した。規模は63×48cmと比較的小規模であったが、周辺と分布状態が異なることから炭化物範囲として調査を行った。写真撮影、平面図の記録をとった後に半載したが層厚が1cm以下であったため断面の記録は行っていない。集中範囲はサンプルを採取し、フローテーションを行って炭化物を回収した。炭化物は全てクルミで15g回収されている。

本集中はA地区斜面で検出しているが、検出層位と周辺の遺物分布状態、内容物がクルミ主体であることから、B地区で検出した炭化物集中と同時期の縄文時代前期前葉に帰属すると考えられる。

(奈良)

VCB-03 (図Ⅲ-3・4-1 図版2-8)

位置：Y-27 規模：78×67cm

確認・調査：Y-27 区でVCB-01の西側約1m地点で検出した。本遺構も他の炭化物集中と同様にクルミを多く含むブロックであったため集中範囲として調査を行った。写真撮影、平面図の後に半載したが層厚が1cm以下であったため断面図の記録は行っていない。

集中範囲は同様にサンプルを採取しフローテーションによって炭化物を回収した。B地区の炭化物集中は比較的大きなクルミの破片を視認できたが、半割状態で廃棄されているなどの特徴は認められなかった。

(奈良)

出土遺物：1はスクレイパー、打点部が残る剥片を素材とする。刃部は背面側のみの二側縁に施されているが、腹面側にも微細剥離痕が観察される。材質は黒曜石である。

(山田)

第4節 遺物集中

1. フレイク・チップ集中

VFCB-01 (図Ⅲ-3・4-2～7 図版3-1)

位置：X-Y-17-18 規模：470×272cm

確認・調査：A地区斜面を調査中、Vb層下から黒曜石製のフレイク・チップがまとまって出土する地点を確認した。規模は470×272cmの不整形で、斜面に沿って長軸方向を示している。周辺に遺構は認められず、遺物はフレイク・チップ以外に土器、礫石器が周辺から出土している。調査は写真、平面の記録をし、親指の爪程度までのフレイクを機械で取上げた。最後に土壌ごと遺物回収を行い調査終了とした。微細遺物についてはウォーターセパレーションによって回収を行っている。

本集中からは剥片石器が8点、フレイク・チップが379点、82.43gが回収されている。内訳は黒曜石が356点の70.77g、メノウが9点の4.99g、メノウ質頁岩が3点の1.32g、頁岩が4点の5.35gで黒曜石が主体となっている。フレイク・チップは1mm以下の碎片から50mm程度まで認められる。

(奈良)

出土遺物 (図Ⅲ-4-2～7 図版5-2)：剥片石器8点、フレイク・チップ379点、礫石器2点、礫22点が出土した。剥片石器の内訳は石鏃4点、石錐1点、スクレイパー1点、RF・UF2点である。礫石器の内訳は石斧片2点である。剥片石器は珪質頁岩1点を除きすべて黒曜石、礫石器は緑色片岩である。剥片は黒曜石361点、珪質頁岩4点、メノウ10点、珪化岩3点、緑色片岩1点である。礫は砂岩である。剥片が微細であることから、石鏃等の細部調整が施された際の剥片と考えられる。2～4は石鏃、5は石錐、6はスクレイパー、7はRFである。5が珪質頁岩、7が珪化岩、他は黒曜石である。2・3は無茎鏃、いずれも縁辺が直線的で、基端は内湾する。4は両面調整が施された歪な形態のもので、縁辺調整による尖頭部の整形がみられることから、石鏃未製品もしくは失敗品と考えられる。5は裏面に素材腹面が残る。器体および錐部の整形は交互剥離によるもので、腹面側は平坦剥離、背面側は急角度剥離が施されている。錐部断面は三角形状で、稜上には磨滅光沢が観察される。6は岩屑面が残る小型剥片の下端にやや凹凸のある円形の刃部が施されている。刃部は腹面の平坦剥離痕を打面として、背面への急角度剥離により作出されている。刃縁の摩耗は著しくないが、背面側への微細剥離痕が観察される。7は下端が欠損する剥片の表裏面に上縁からの剥離痕がみられる。

(山田)

2. 土器集中

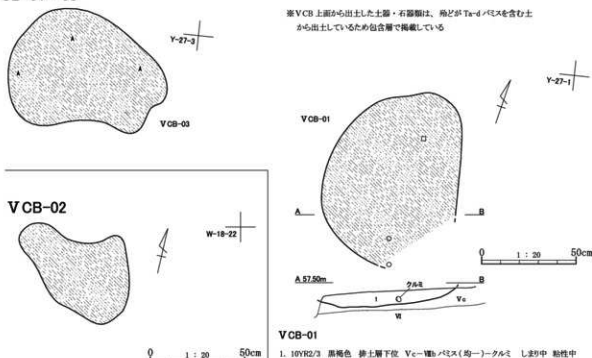
VPB-01 (図Ⅲ-5・6 図版3-2～4・5-3)

位置：W-26 規模：55×33cm

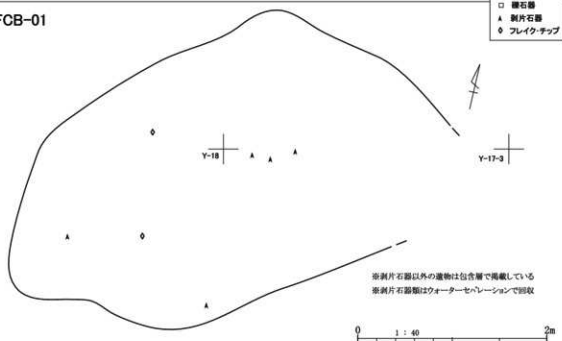
確認・調査：B地区斜面を調査中、比較的大きな土器片がVbM層からまとまって出土した。第1節で触れたようにB地区にはTa-dパミスを多〜少量含む整地による排土層が確認されている。同集中もTa-dパミスを多く含む層から出土し、東側には石皿や台石が主体のVSB-01を検出している。調査はVSB-01とともに写真撮影、微細図の記録をとり遺物の取り上げを行っている。取り上げの際、土器は脆く崩れやすかったために、5%～10%に希釈したバインダー溶液を数回にわたって塗布し強化を行った。遺物の検出層位から、整地に伴う削平排土層から出土する遺物であるが、周辺に出土する遺物との新旧関係は不明である。時期はII群A1類で縄文時代前期前葉に位置する。

出土遺物：1・2ともにⅡ群A1類に分類される土器である。1は胴部復元個体で、底部付近から胴部上半に向かって外傾している。地文はLR斜行縄文のみで、縄文施文後に器表面と内面をナデ整形しており、比較的丁寧な調整である。2は同一個体と考えられる口縁部片で、口唇部はナデ調整が施され、内側が丸状、外側が角状に整形されている。地文は口縁部直下から縄文を横位に施文している。胎土は繊維と砂粒を少量含み、比較的軽量である。
(奈良)

VCB-01・03



VFCB-01



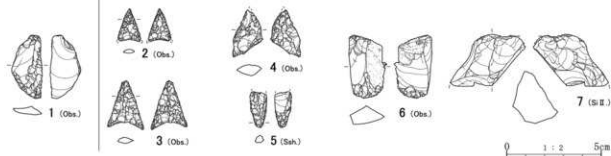
図Ⅲ-3 VCB-01～03・VFCB-01 平面及び断面図

表Ⅲ-3 VCB-01~03・VFCB-01属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模(cm)			備考
						長軸	短軸	厚さ	
Ⅲ-3	2-5	VCB-01	Y-27	VbM	不整形	(94)	73	10	
Ⅲ-3	2-7	VCB-02	W-18	Vc	不整形	63	48	-	
Ⅲ-3	2-8	VCB-03	Y-27	VbM	不整形	78	67	-	
Ⅲ-3	3-1	VFCB-01	X・Y-17・18	VbL	不整形	470	272	-	

VCB-03

VFCB-01

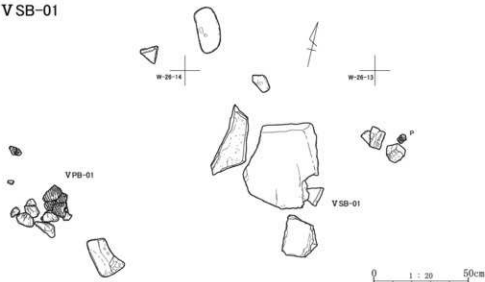


図Ⅲ-4 VCB-03・VFCB-01 出土石器

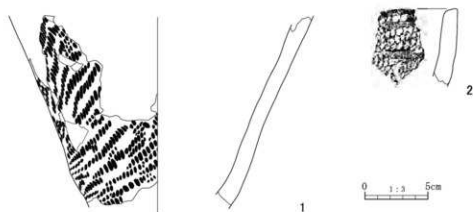
表Ⅲ-4 VCB-03・VFCB-01出土石器属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	グリッド	遺物番号	遺物名	分類	層位	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
Ⅲ-4-1	5-2-6	VCB-03	Y-27	8163	スクレイパー	C2b	VbM	33.5	16.3	3.7	1.79	Obs.	
Ⅲ-4-2	5-2-7	VFCB-01	-	12200	石鏃	B2	V	17.1	12.0	2.3	0.35	Obs.	
Ⅲ-4-3	5-2-8	VFCB-01	Y-17	5219	石鏃	B2	VbL	24.9	19.1	4.4	1.23	Obs.	
Ⅲ-4-4	5-2-9	VFCB-01	-	12205	石鏃	E	V	25.6	13.8	5.5	1.47	Obs.	
Ⅲ-4-5	5-2-10	VFCB-01	-	12220	石鏃	D	V	(18.9)	8.7	4.6	(0.94)	Ssh.	石材測定No.2
Ⅲ-4-6	5-2-11	VFCB-01	Y-18	5222	スクレイパー	B1	VbL	33.2	19.8	11.5	5.91	Obs.	
Ⅲ-4-7	5-2-12	VFCB-01	Y-17	5220	R・F	A	VbL	38.0	42.0	15.7	15.29	SII.	石材測定No.3

VPB-01・VSB-01



図Ⅲ-5 VPB-01・VSB-01 平面図



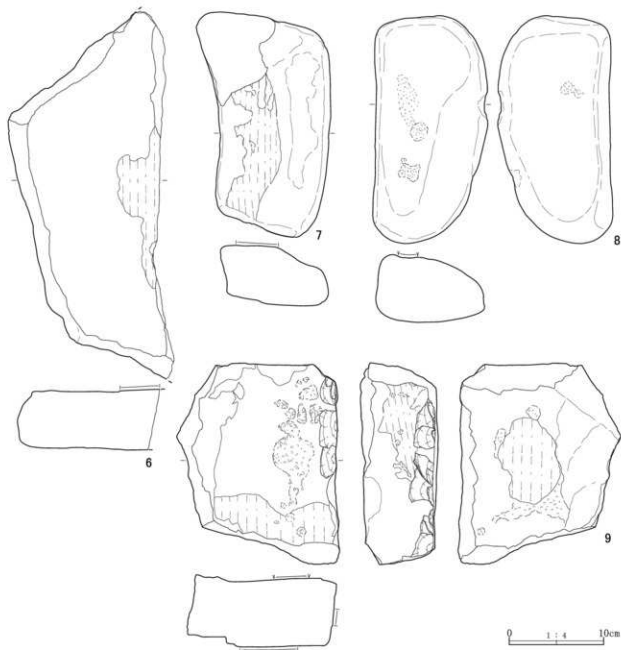
図Ⅲ-6 VPB-01 出土土器



図Ⅲ-7 VSB-01 出土土器 (1)

表Ⅲ-5 VPB-01出土土器属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	分類	部位	遺物番号/調査区 /層位	器形等	文様	胎土	備考
						口縁-口唇/胴部/底 側面/-変換点-底面	口唇-口縁-内面/ 胴部-内面/底側面-内面		
Ⅲ-6-1	5-3-13	JP13A	ⅡA1	胴部	7727~7734/W- 26/VbM	外傾	LR斜行縄文・弱いナデ/弱い ナデ	砂粒少量 繊維少量	
Ⅲ-6-2	5-3-14	JP13B	ⅡA1	口縁部	7722/W-26/VbM	平縁・直立・隅丸角状	LR縄文(横走)	砂粒少量 繊維少量	



図Ⅲ-8 VSB-01 出土石器 (2)

3. 礫集中

VSB-01 (図Ⅲ-5・7・8 図版3-2・3・6)

位置: W-26 規模: 170×141cm

確認・調査: 調査区西側の北壁に近い斜面部で、整地排土層に相当するVbM層を掘り下げているところ、約1.7×1.4mの範囲で大型の石皿を中心とする礫石器のまとまりを確認したことから礫集中として調査した。礫石器は砥石・石皿・台石で構成され、ほぼ同一面での検出である。礫集中の範囲を検出後、諸記録を作成し調査を終了した。隣接して土器集中1を検出していたことから、関連遺構に注意し周囲を掘り下げたが、焼土や土坑などは検出されなかった。

出土遺物: 剥片石器2点、礫石器8点、剥片1点、礫14点が出土した。剥片石器の内訳は石鏃1点、スクレイパー1点である。石鏃は欠損品であるが、B2F類に含まれる。礫石器の内訳は砥石4点、石皿2点、台石2点である。剥片石器・剥片は黒曜石、礫石器・礫は砂岩である。1は一側縁加工のサイドスクレイパー(C1b類)である。長幅比1.0程度のもので、左側縁に刃部が作出されている。2～4は砥石である。2は亜円～円礫を素材とし、片面に砥面が形成されたもの(1B類)。扁平礫の表面にわずかな範囲の砥面が形成されている。3・4は破片(1C類)である。3は表面に平滑な砥面がみられる。4は表面にやや窪む縦長の砥面がみられる。5～7は石皿である。いずれも角～亜角礫を素材とする(1類)。5は約50cm四方ある大型で扁平な亜角礫を素材とした石皿である。表面には面的な敲打痕と全面に亘る平滑なすり面がみられる。6は扁平な角礫素材のもので器体右半が欠損している。器体中央付近に縦長のすり面がみられる。7は盤状の亜角礫素材のもので上端左側の一部が欠損している。表面には平滑なすり面が見られる。8・9は台石である。8は亜円～円礫素材のもの(II類)で、表裏面の平坦面にやや窪む敲打痕がみられる。9は角～亜角礫素材のもの(1類)である。石皿と併用されており、表面下半、右側面、裏面にすり面が形成されている。(山田)

表Ⅲ-6 VSB-01出土石器属性表

押図番号	図版番号	グリッド	遺物番号	遺物名	分類	層位	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
							長軸	短軸	厚さ			
Ⅲ-7-1	6-1	W-26	6351	スクレイパー	C1b	VbL	27.2	22.3	9.2	4.8	Obs.	
Ⅲ-7-2	6-2	W-26	7717	砥石	1B	VbM	63.4	115.5	23.3	(250.0)	Sa.	被験 石材測定No.4
Ⅲ-7-3	6-3	W-26	6353	砥石	1C	VbM	(39.9)	(56.1)	(27.4)	(90.0)	Sa.	石材測定No.5
Ⅲ-7-4	6-4	W-26	7713	砥石	1C	VbM	(83.1)	(82.3)	(75.6)	(680.5)	Sa.	石材測定No.6
Ⅲ-7-5	6-5	W-26	7714	石皿	I	VbM	(4250.0)	(5170.0)	114.6	(2904.0)	Sa.	
Ⅲ-8-6	6-6	W-26	7718	石皿	I	VbM	390.0	(190.0)	80.2	(5440.0)	Sa.	石材測定No.7
Ⅲ-8-7	6-7	W-26	7721	石皿	I	VbM	240.1	140.5	60.5	(2520.0)	Sa.	石材測定No.8
Ⅲ-8-8	6-8	W-26	7719	台石	II	VbM	241.0	130.8	80.0	2960.0	Sa.	石材測定No.9
Ⅲ-8-9	6-9	W-26	7716	台石	I	VbM	215.0	17.2	67.3	3900.0	Sa.	石材測定No.10

第5節 包含層出土遺物

1. 土器・土製品 (図Ⅲ-9～11 図版7～9)

梶内5遺跡から出土した土器は総数で1,143点、内訳はI群B3類22点、II群A1類・II群A2b類776点、II群A2a類303点、IV群A1類9点、IV群B1類18点、V群B1類4点、不明破片11点出土している。

主体となる時期はII群A類の縄文時代前期前葉の春日町式、静内中野式の尖底土器群である。

今回Ⅱ群の分類では、口唇部の調整が丁寧なものと粗雑なものが認められたため、口唇部の調整がより丁寧で角状になされているものを春日町式系土器群として、それ以外を狭義の静内中野式土器として報告している。

Ⅱ群 A2a 類は胎土に滑石を多量に含む土器群で、前期土器群全体での重量比率は 1 (2, 219g) : 9 (13, 849g) とⅡ群 A2a 類は少量である。重量による比較はⅡ群 A2a 類の土器が軽量であるという点から個体数の比較をするべきであるが、本類の土器については破断面も丸味を帯びるほど風化が激しく、接合は殆どできないため実際の比率は不明である。また厚真町では初めて胎土に撚り糸が混入している土器片も認められている。第 1 節で述べた削平排土層から出土した土器も本節で掲載を行っているが、A 地区・B 地区で出土する土器の接合関係も認められる (図Ⅲ-12) ことから空間的な相違は認められないと思われる。その他 1 点時期不明の土製品が出土している。

以下に分類ごとの概略を記載し、掲載土器の詳細については表Ⅲ-7~9 を参考とされたい。

I 群 B3 類 (図Ⅲ-9-3~9)

本群は中茶路式に分類される土器群である。3 は細い軸に撚糸を巻いたものを原体として、交差するように施文した胴部片である。4・5 は水平に微隆起線文が付された後に 4 は絡条体圧痕文で、5 は短縄文で微隆起線間を充填している。6 は一部波状に付された微隆起線文間に異原体による羽状縄文が施文されている。7 は LR 斜行縄文のみの資料である。胎土はいずれも砂粒から砂礫を中量~少量含んでいる。8・9 は底部で、8 は器表面が全面剥落しており底部からの立ち上がりのみ確認できる。9 は底面の資料で胎土から本群に含めている。

Ⅱ群 A1 類 (図Ⅲ-9-1・10~13・10-14~23)

本群は春日町式系と分類した土器群である。主に口唇部の調整が角~隅丸角状に成形され、内面もナデによって丁寧に調整されている。地文は単節斜行縄文または横走気味の縄文が主体で、少数の資料としては結節、複節などがある。

1・10・11 は同一個体の資料で、10 の口唇部は外側が角、内側が隅丸角状に成形され、内面は幅約 1 cm の工具で横方向にナデ調整がなされている。地文は横走縄文のみで施文は器表面のみである。1・11 は胴部から胴部下半の資料で、内面は横位、斜位方向にナデ調整されている。地文は 10・11 が横走縄文で胴部下半になるとやや斜行縄文気味になる。胎土は繊維少量、砂粒を中量含む。12~14 は M-TR6 から出土した一括個体で、口縁部から胴部下半まで出土している。12 の口唇部は外側が角、内側が隅丸角状に成形され、内面は強く横方向にナデが認められる。口縁部直下には補修孔が 1ヶ所認められる。13・14 は胴部から胴部下半にかけての資料で、内面の調整は口縁部付近ほど顕著ではなく、弱いナデのためやや凹凸が認められる。胎土は繊維を多量に含んでいるが焼成は比較的良好である。なお、現地のトレンチ内に残してきた土器と合わせると復元個体になると思われるが、底部は確認できていない。15~23 は胴部片で、15・16・19・20 は地文縄文施文後に器表面をナデ調整しており節が潰れている。16 は横走する R 無節、17 は横走する LR 縄文でいずれも器表面にナデが認められる。19 は今回出土した資料の中で、唯一の結束縄文が認められる資料で、器表面のナデ調整は 20 とともに丁寧で、同一個体と思われる。18 は地文 LR 斜行縄文の胴部片で、内面は弱いナデ調整がされている。15・17・19・20 の焼成は良好で、胎土に繊維を少量から中量、17・20 は砂粒を少から極少量含む。16・18 は色調も灰白色で、破断面が磨耗し焼成温度が低い土器と考えられる。胎土は繊維を多量から中量含む。21 は無文で器表面を弱くナデ調整している。22・23 は LRL 複節斜

行縄文で、今回の調査では殆ど出土していない。器表面は砂質が強く剥落している。胎土に繊維を含むが、他の土器とは異なり径3mm程度の円礫を中量含んでいる。

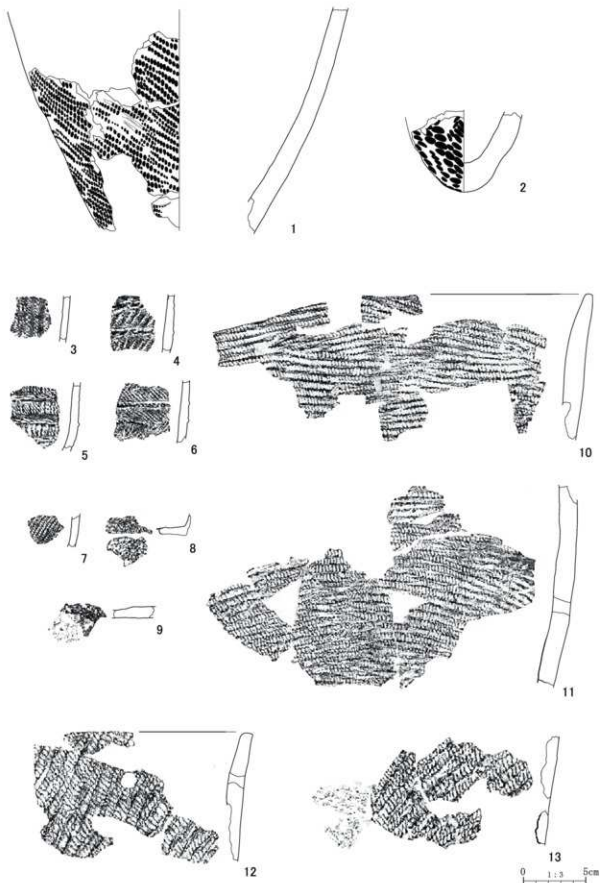
II群 A2a 類 (図Ⅲ-10-24~27)

本群は胎土に滑石を含む土器群である。色調は黒色を呈し、器表面はやや光沢を帯びており手触りはヌメヌメとしている。本資料は胎土に滑石を多く含み、破断面の角が丸く磨耗している資料が多いため復元には至らないが、破片数は303点出土している。24は口縁部で口唇部は隅丸角状に整形されている。25~27は胴部片でほぼ直立に立ち上がる。地文はLR斜行縄文のみで、27は内面も施される。本群の土器片を観察すると表面の剥落が顕著であるため、輪積みで製作した後に厚みをもたせるため、器表面に粘土を貼り付けていた可能性も考えられる。

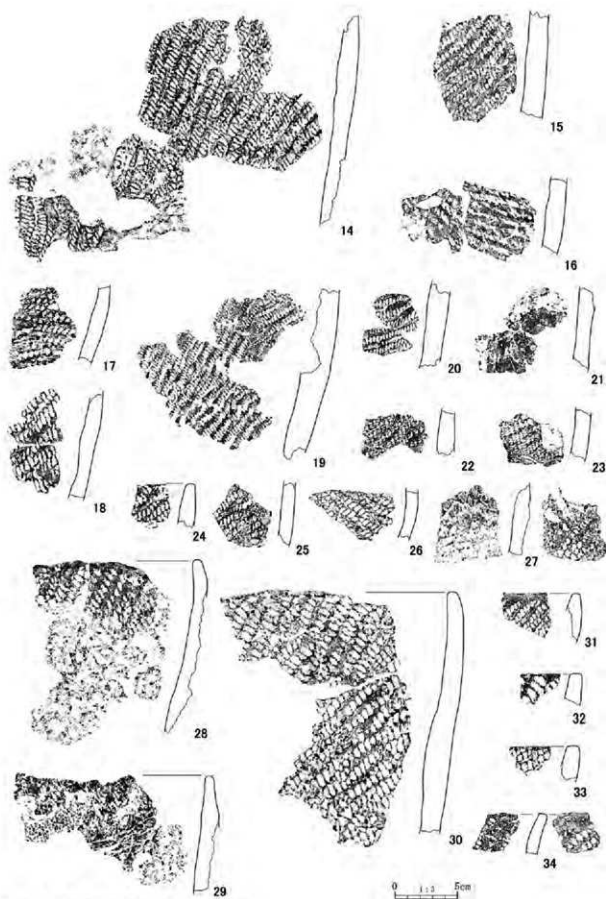
II群 A2b 類 (図Ⅲ-9-2・10-28~34・11-35~54)

本群は静内中野式土器に含まれる土器群である。28~43は口唇部が丸状または隅丸角状で、II群 A1 類に分類した資料よりもやや粗雑であると判断したため本群で報告している。

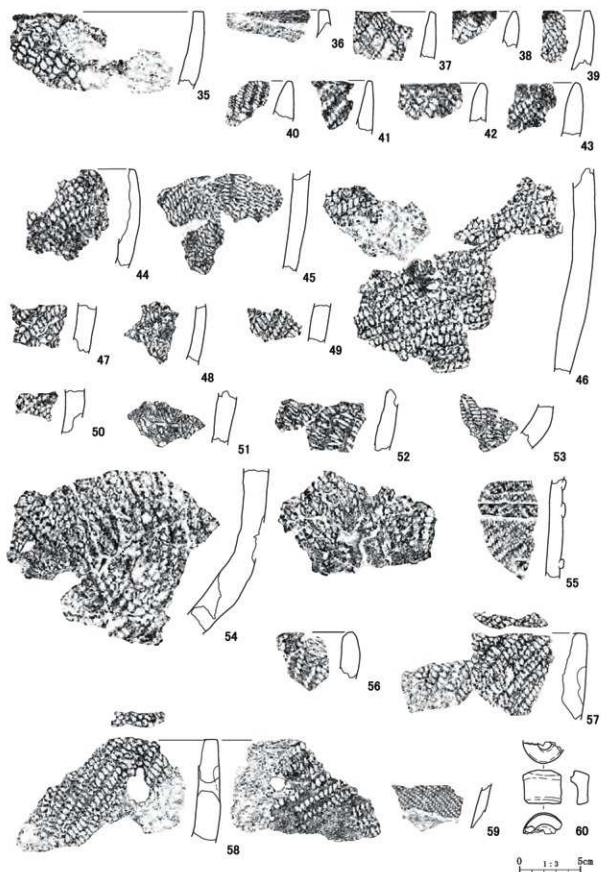
28・29は口縁部から胴部にかけての資料で、直立からやや内湾して立ち上がる。口唇部はナデによって丸状に整形しているが、凹凸が目立ち粗雑である。内面は一部ヘラ状工具で横方向にナデている痕跡が認められるが判然としない。口縁部直下の内面は指頭による粗雑な調整である。地文はLR斜行縄文が縦気味に施されるが、29は剥落が激しく不明瞭である。胎土はφ5mmの円礫及び砂粒、赤色岩片、摺糸を中量から多量に含んでいる。胎土に摺糸を含む土器は本町で初出土となり、破片数は少量である。摺糸の方向は横方向に多いように見えるが、個体数が少なく破片であることから傾向を見出すことはできない。30は口縁部から胴部の資料でやや外傾から直立して立ち上がる。口唇部は隅丸角状でヘラまたは棒状工具によって調整されているが、幅が一定ではなくやや粗雑である。地文は筋が太いLR斜行縄文のみで、内面は弱くナデ調整されているが、工具痕は胴部下半に縦方向の痕跡が僅かに認められるのみである。胎土には繊維のほか、径5mm程度の垂角礫を少量、白色砂粒を極少量含んでいる。31~44は口縁部片で口唇部は丸状・隅丸角状・角状に整形されている。これら口縁部資料は口唇部をナデ整形しているが、II群 A1 類に分類したものより粗雑であるため本群に含めている。31・37~41・44は口唇部調整によって面を作出しているが、口縁部に向かって器厚が薄くなるため断面形状が丸状から尖状になる。32~36は口縁部まで同じ器厚で立ち上がり、断面角状に整形されているが、口唇部上に僅かな凹凸が認められ調整が粗雑な印象を受ける。42・43は口唇部が丸状で殆ど調整が行われていない。器形は35・36・39・44がやや内湾し、34がやや外反、そのほかはほぼ直立に立ち上がる。地文は31~35・37~39・41~43はLR斜行縄文のみ、40は縦走するLR縄文が施される。36は口縁部直下剥落のため不明であるが、口縁部形態から35と同一個体と考えられる。内面は34のみLR斜行縄文が認められ、39が比較的平滑にナデ調整されているが、他の資料はやや凹凸があり調整が粗雑である。胎土は32・34・36・38・43・44に繊維を少量から中量、31は繊維のほか赤色岩片を少量含む。35・39・40・42は繊維のほか砂粒を少量、33・37・41は砂礫を少量から極少量含んでいる。45~52は胴部片である。器形はいずれもほぼ直立に立ち上がり、46以外は地文にLR斜行縄文が施文されている。46は横走するLR縄文とLR斜行縄文が重複し施文される。45・52は施文後にナデが認められるが、52は一部施文とナデが繰り返されているため、縄の単位が不明瞭である。内面は45~49・51にナデ調整で比較的平滑であり、51は幅約1cmの棒状工具で斜位に調整されているのが僅かに確認できる。50・52もナデ調整されているが凹凸が目立ちやや粗雑である。



図Ⅲ-9 縄文時代包含層出土土器 (1)



図Ⅲ-10 縄文時代包含層出土土器 (2)



図Ⅲ-11 縄文時代包含層出土土器 (3)・土製品

表Ⅲ-7 縄文時代包含層出土器属性表(1)

属性を記載において、下記の記載のもとに行っているが、「部位」は「器形」・「胎土」の記載については、相对比较によるもので観察者の主観による。

〔器体名様〕 同一器体にアラビア数字、破片資料にアルファベットを付番した。

〔分類〕 「第1部 第Ⅰ節 1. 土器」に記載している。

〔器形等・文様〕 各部位毎の形態を示した。「口縁」は口縁器器表面、「底部側面」は底部器表面、「変換点」は底部と底面との状態を記載した。

〔器形等〕 「外区」は反る状態、「外傾」は直線的に開く状態を示している。

〔文様〕 以下の認識で記載した。

認識順序: 部位の口縁→胴部; 口縁部→胴部; 口縁部→胴部への記載順、部位の底→胴部; 底部→胴部への記載順となっている。

記号: +; 文様要素の重複面文 ; 文様要素の重複面構成

文様要素

2段基原体羽状溝文; 襷りの異なる2段の突起体(LR・RL)による羽状溝文

吸引文; 器面に対し施文工具が斜め方向に突き刺され、水平方向に連続して動く、文様の観察としては、圧痕が深く施文が連続している。

押し文; 器面に対し施文工具が垂直方向に押し当てられ、水平方向に連続して動く、文様の観察としては、圧痕が浅く施文が連続している。

半載竹管工具による施文; ()内は器面に当てた工具名を記載している。(内)は半載竹管の内側、(外)は竹管の外側を用いて施文されたもの。

細線文; 器表面に対し、2段以上の溝原体の圧痕。 細線文; 貼付帯や口唇等の面に対し、直交あるいは斜位に圧痕するもの。

貼付帯1A: 口唇直下の幅広の貼付帯 貼付帯1B: 口唇直下の幅の細い貼付帯 貼付帯2: 直付帯以外の胴部に傾斜する貼付帯。

重複溝文; 襷りの異なる原体を重畳して施文する。文様の観察としては、条が交差状に見られる。

〔胎土〕 組織: 硬断面や斜断面に観察できる「収状の平行な割れ目」組織。(花園 1992)

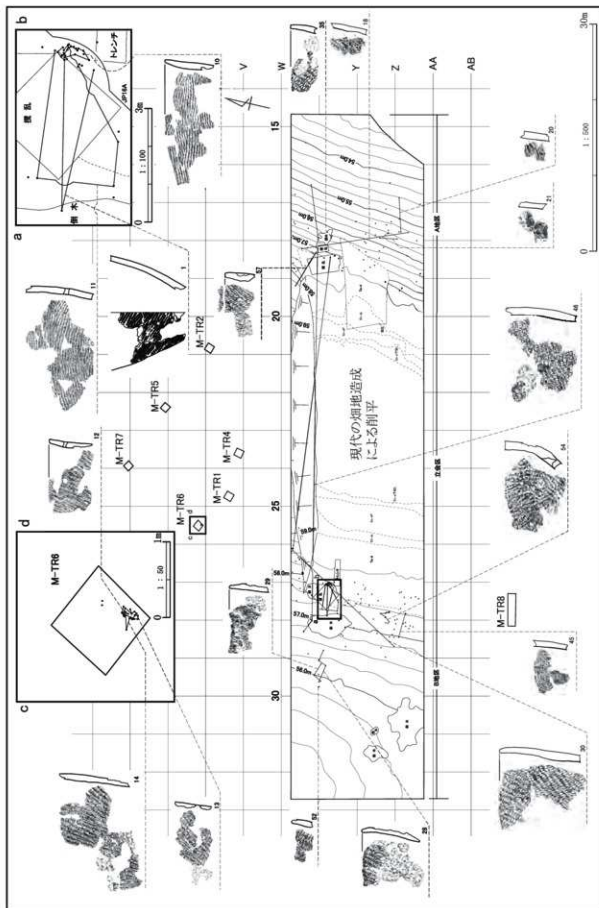
神図 番号	図版 番号	器体 名称	分類	部位	遺物番号/調査区/層位	器形等		文様	備考
						口縁-口唇/胴部/ 底側面-変換点-底面	口唇-口縁-内面/胴部-内面/ 底側面-内面		
Ⅲ-9-1	7-1	J19C	II A1	胴部下平	79.1947.4696.8710.8711.8722. 8726.8738/X-27/VbJ.bM.c	外傾	LR斜行溝文(横走気味) - 弱いV字ギ	繊維少量 砂粒中量 繊維少量	
Ⅲ-9-2	7-2	JP20	II A2b	底部	10782/V-27/VbM	外傾-尖底	LR斜行溝文	繊維少量 砂粒中量 繊維少量	
Ⅲ-9-3	7-3	JP04	I B3	胴部	1421/W-26/Vc	やや外傾	縞赤文	繊維少量 砂粒中量 繊維少量	
Ⅲ-9-4	7-4	JP01	I B3	胴部	5404/W-27/VbM	やや外傾	縞赤文	繊維少量 砂粒中量 繊維少量	
Ⅲ-9-5	7-5	JP02	I B3	胴部	7303/W-18/Vc	やや外傾	縞赤文	繊維少量 砂粒中量 繊維少量	
Ⅲ-9-6	7-6	JP03	I B3	胴部	10323/W-16/Vc	やや外傾	縞赤文	繊維少量 砂粒中量 繊維少量	
Ⅲ-9-7	7-7	JP06	I B3	胴部	8519/W-18/V1	直立	LR斜行溝文(小波状)+真原体羽状溝文	繊維少量 砂粒少量 砂粒少量	
Ⅲ-9-8	7-8	JP07	I B3	底部	9984/X-27/Vc	平底-角状	LR斜行溝文	繊維少量 砂粒少量 砂粒少量	
Ⅲ-9-9	7-9	JP05	I B3	底部	4698.4745.6232.6320.8780.他5点 /X-26.27.Z-27/VbM	平底	ナゾ-R斜行溝文(横走気味) - 弱いV字ギ /R斜行溝文(横走気味)	繊維少量 砂粒中量 繊維少量	
Ⅲ-9-10	7-10	JP19A	II A1	口縁部→胴部	1191.2124.4703.4711.4695.4699. 6234/X-27/Va.bJ.bJ.bM	平縁-外傾 - 隅丸角状	LR斜行溝文(横走気味) - 弱いV字ギ	繊維少量 砂粒中量 繊維少量	
Ⅲ-9-11	7-11	JP19B	II A1	胴部	12106.12118.12134.12140/MO- TR6/VbM	外傾	ナゾ-R斜行溝文(横走気味) - 弱いV字ギ	繊維少量 砂粒中量 繊維少量	
Ⅲ-9-12	7-12	JP69A	II A1	口縁部→胴部	12081.12092.12094.12096.12109 ~12111.他3点/MO-TR6/VbM.c	平縁-やや外傾 - 隅丸角状	ナゾ-R斜行溝文-ナゾ(強)	繊維多量 砂粒中量 繊維多量	
Ⅲ-9-13	7-13	JP69C	II A1	胴部		やや外傾	LR斜行溝文-ナゾ(強)	繊維多量	

表III-8 縄文時代包舍層出土土器属性表(2)

種目 番号	図版 番号	器体 名称	分類	部位	遺物番号/調査区/層位	器形等		文様		胎土	備考
						口縁-口唇/胴部/ 底面	底面-炎発点-底面	口唇-口縁-内面/胴部-内面/ 底面-内面	文様		
III-10-14	7-14	JF69B	II A1	胴部	12107, 12150, 12123, 12127~ 12130, 4655, MO-TR6/VbM	やや外傾		LR斜行縄文-ナデ(弱)		織維多量	
III-10-15	8-15	JF21A	II A1	胴部	6390/V, CU-01/V, bM	やや外傾		LR斜行縄文-ナデ		織維中量	
III-10-16	8-16	JF53	II A1	胴部	6392, 6393/X-18/V, bM, bL	やや外傾		R無節(横走), ナデ		織維多量	
III-10-17	8-17	JF27	II A1	胴部	10660/Y-27/V1	やや外傾		LR縄文(横走気味), ナデ		織維多量	
III-10-18	8-18	JF30	II A1	胴部	7986, 9738/X-17, W-18/V, c	外傾		LR斜行縄文-弱いナデ		砂礫少量	
III-10-19	8-19	JF63A	II A1	胴部	3531, 17761/Z-27, 28/V, bM	外傾		LR斜行縄文-弱い横線気味-ナデ-ナデ		織維中量	
III-10-20	8-20	JF25	II A1	胴部	9285, 10236/Z-16, 17/V, c	外傾		LR斜行縄文-ナデ		織維中量	
III-10-21	8-21	JF29A	II A1	胴部	7216, 8415/Y-17, Z-17/V, c	やや外傾		ナデ-弱いナデ		砂礫少量	
III-10-22	8-22	JF23	II A1	胴部	424/W-19/V, bL	やや外傾		LR, 浅節斜行縄文		完成粘土塊	
III-10-23	8-23	JF24	II A1	胴部	1468/W-26/V, bU	やや外傾		LR, 浅節斜行縄文		織維少量	
III-10-24	8-24	JF67	II A2a	口縁部	894/W-17/V, c	平縁-直立-隅丸角状		LR斜行縄文		織維少量	
III-10-25	8-25	JF64	II A2a	胴部	11757/Z-17/V1	直立		LR斜行縄文		滑石多量	
III-10-26	8-26	JF65	II A2a	胴部	7242, 7243/X-18/V, c	直立		LR斜行縄文		滑石多量	
III-10-27	8-27	JF66	II A2a	胴部	8323/Z-28/V, bM	直立		不明-LR斜行縄文		滑石多量	
III-10-28	8-28	JF17A	II A2b	口縁部	2223, 2250, 7951, 10846/W-29, X- 28, 29/V, bL, V, c, V1	平縁-直立~やや内湾-丸状		LR斜行縄文		砂礫少量	
III-10-29	8-29	JF17B	II A2b	口縁部~胴部	2300, 4858, 5445/W-X-29/V bM, bL	緩やかな波状, やや内湾-丸状		指頭状圧痕-LR斜行縄文		砂礫少量	
III-10-30	8-30	JF16a	II A2b	口縁部~胴部	3418, 6327, 6329, 6330, 6331, 8549/ W-26, Y-28/V, bL, V, c, V1	平縁-直立-隅丸角状/やや外傾		弱い, ナデ-LR斜行縄文/LR斜行縄文		織維中量	
III-10-31	8-31	JF36	II A2b	口縁部	6229/X-27/V, bM	平縁-直立-隅丸		ナデ-LR斜行縄文		織維中量	
III-10-32	8-32	JF39	II A2b	口縁部	11954/W-17/V1	平縁-直立-隅丸角状		ナデ-LR斜行縄文		織維中量	
III-10-33	8-33	JF35	II A2b	口縁部	834/W-17/V, c	平縁-直立-隅丸角状		ナデ-LR斜行縄文		砂礫少量	
III-10-34	8-34	JF28A	II A2b	口縁部	2063/W-28/V, bM	平縁-やや外反-角状		ナデ-LR斜行縄文-LR斜行縄文		織維少量	
III-11-35	8-35	JF32	II A2b	口縁部~胴部	7097, 8097/X-17/V, c	平縁-直立-角状-やや外傾		ナデ-LR斜行縄文		織維中量	
III-11-36	8-36	JF41	II A2b	口縁部	7574/X-18/V, c	平縁-直立-角状(やや外傾)		ナデ		砂礫少量	

表Ⅲ-9 縄文時代包含層出土器(3)・土製品属性表

神岡 番号	国産 番号	銅体 名称	分類	部位	遺物番号/調査区/層位	形状等		文様		胎土	備考
						口縁-口唇/側部/ 底側面-突起点-底面	口唇-口縁-内面/側部-内面/ 底側面-内面				
III-11-37	8-37	JP44	IIA2b	口縁部	11738/N-15/Vc	平縁-やや外傾-丸状(外部)	ナデ-LR斜行縄文	織漉少量 砂粒少量			
III-11-38	8-38	JP42	IIA2b	口縁部	10406/N-16/Vbl.	平縁-直立-尖状	LR斜行縄文	織漉少量			
III-11-39	8-39	JP71A	IIA2b	口縁部	1541/W-18/Vc	平縁-やや内傾-隅丸角状	ナデ-LR斜行縄文	織漉少量 砂粒少量			
III-11-40	8-40	JP40	IIA2b	口縁部	8248/Z-27/Vbm	平縁-直立-隅丸	ナデ-LR斜行縄文	織漉少量 砂粒少量			口縁にのみつて書い
III-11-41	8-41	JP34	IIA2b	口縁部	7544/W-18/Vbl.	平縁-直立-隅丸	ナデ-LR斜行縄文	織漉少量 砂粒極少量			
III-11-42	8-42	JP43	IIA2b	口縁部	4687/X-27/Vbm	平縁-直立-丸状	強いナデ-LR斜行縄文	織漉少量 砂粒少量			2次被熱
III-11-43	8-43	JP31	IIA2b	口縁部	962/W-18/Vc	平縁-直立-尖状	LR斜行縄文	織漉少量			
III-11-44	8-44	JP33	IIA2b	口縁部	7783.7785/Z-27/Vbm	平縁-直立-隅丸角状(内角外丸)	ナデ-LR斜行縄文	織漉少量			
III-11-45	8-45	JP55A	IIA2b	胴部~底部	3530.5807.5808/Z-27.28/Vbm. Vbl.	外傾	LR斜行縄文-ナデ-ミガキ	織漉少量			JP13と同-の可能性
III-11-46	9-46	JP15	IIA2b	胴部	5415.7927.7987.7700.10205/W- 16.17-W-27.28/Vbm.Vbl.Vc.	外傾	LR斜行縄文-強いナデ(細花一部重複させている)	織漉少量 砂粒少量			
III-11-47	9-47	JP76	IIA2b	胴部	3380/W-26/Vbm	外傾	LR斜行縄文-強いナデ	織漉少量 砂粒少量			
III-11-48	9-48	JP26	IIA2b	胴部	4193/Z-27/Vbm	やや外傾	LR斜行縄文-ナデ-ナデ	織漉少量 砂粒極少量			
III-11-49	9-49	JP74	IIA2b	胴部	7872/Y-28/Vc	やや外傾	LR斜行縄文-ナデ	織漉少量 砂粒少量			
III-11-50	9-50	JP72	IIA2b	胴部	7654/Y-17/Vc	やや外傾	LR斜行縄文-強いナデ	織漉少量 砂粒少量			
III-11-51	9-51	JP73	IIA2b	胴部	10976/W-15/Vbl.	やや外傾	LR斜行縄文-ミガキ?	織漉少量 砂粒少量			
III-11-52	9-52	JP22A	IIA2b	胴部	2251.2252/W-27.29/Vbl.	やや外傾	LR斜行縄文-ナデ	織漉少量 砂粒少量			
III-11-53	9-53	JP75A	IIA2b	胴部下半~ 底部	10746/Z-27/Vbl.	やや外傾	LR斜行縄文-ナデ	織漉少量			
III-11-54	9-54	JP18A	IIA2b	胴部~底部	3568.4015.4026.5949.3983.5944 ~5946/Y-27.28/Vbm.bl.	外傾-尖直	LR斜行縄文-LR斜行縄文(底部付注まで)	織漉少量 砂粒少量			
III-11-55	9-55	JP10	IV1a	胴部	4397/W-17/Vbl.	やや外傾	裏面体羽状縄文+趾付帯2+裏面体羽状縄文	砂粒少量			
III-11-56	9-56	JP09	IV11	口縁部	5582/W-18/Vbl.	平縁-直立-隅丸角状	LR斜行縄文-ナデ-LR斜行縄文	砂粒少量			
III-11-57	9-57	JP08A	IIA2b	口縁部	417.032/W-18.20/Vbl.	平縁-やや外傾-隅丸角状	LR斜行縄文-縄原体側面の片縄文	砂粒多量			
III-11-58	9-58	JP08B	IIA2b	口縁部	416/W-20/Vbl.	平縁-やや外傾-隅丸角状	LR斜行縄文-縄原体側面の片縄文-LR斜行縄文	砂粒多量			
III-11-59	9-59	JP12	V A1	胴部	10917/N-15/a	やや外傾	LR斜行縄文	砂粒少量			土製品
III-11-60	9-60	JP11	-	-	2604/Z-28/Vbl.	-	-	砂粒少量			



図Ⅲ-12 縄文時代土器接合線図

胎土は全てに繊維を少量から中量、46・49・50 は径2mm以下の亜角礫を少量含む。46は焼成、胎土から33と同一個体と思われる。2・53・54は底部もしくは底部付近の資料である。2は尖底部分でやや丸味を有する。地文は底部であるためLR斜行縄文がやや縦位に施文されている。53・54は底部立ち上がり部分で、底部から胴部下半の変換点で直立気味に立ち上がるかと推定される。地文は53がLR斜行縄文、54はRL斜行縄文で内面も同一原体で施文されるが、粗雑で不明瞭である。胎土はいずれも繊維、砂粒を少量から中量含む。底面などに黒曜石等の埋め込みは認められない。

IV群 A1a 類 (図Ⅲ-11-55)

本群は余市式土器に分類した土器で、出土点数も9点と少ない。55は胴部片で多段の貼付帯を有し、異原体羽状縄文が施される。

IV群 B1 類 (図Ⅲ-11-56~58)

本群はタブコブ式土器に分類した土器群である。いずれも口縁部資料で56は口唇部を丸状に整形しており、器表面はLR斜行縄文施文後にナデ調整が認められる。内面は不明瞭であるが同一原体のLR斜行縄文で施文していると思われる。57・58は口唇部、器表面にLR斜行縄文が施文され、口縁部直下に長さ約3cmの縄原体側面を利用した圧痕文が施される。58は内面上部に同一原体の施文と補修孔が1ヶ所認められる。57は剥落のため不明であるが、胎土、焼成から判断して58と同一個体と考えられる。胎土はいずれも径5mm程度の円～亜角礫を多量に含んでいる。

V群 B1 類 (図Ⅲ-11-59)

本群は晩期中葉に分類した土器群である。破片数は4点で全てA地区から出土している。59は地文がRL斜行縄文の胴部片で、胎土に砂粒を少量含み焼成は良好である。

土製品 (図Ⅲ-11-60)

今回の調査で唯一出土した土製品である。高さ27mm、推定直径35mmの円柱状で、やや括れる形状を呈している。現存するのは約半分と推定され、両面から刺突が認められるが貫通していない。

胎土は砂粒を少量含んでいる。形状から耳栓を想像するが、今回の発掘調査では後・晩期の遺物が殆ど出土していないため、用途、所属時期は不明である。

(奈良)

2. 剥片石器 (図Ⅲ-13~16 図版10~13)

V層包含層からは剥片石器742点、剥片1,816点が出土した。剥片石器の内訳は石鏃189点、石槍13点、石錐46点、つまみ付きナイフ130点、スクレイパー156点、石核9点、RF・UF199点である。石材は黒曜石570点、珪質頁岩70点、珪化岩15点、メノウ85点、緑色片岩2点である。剥片の石材は黒曜石1,499点、珪質頁岩46点、珪化岩82点、メノウ177点、チャート11点、不明1点である。珪化岩の一部及びメノウは在地石材と考えられ、つまみ付きナイフやスクレイパー、石核、RF・UFに利用されており、黒曜石や珪質頁岩の補完的な資源であったと推察される。

石鏃 (1~26)

石鏃は無茎三角鏃(B2類)が90%以上を占めており、基部形態で細分すると、凹基、平基、凸基の順に多く、凸基は数点である。このうち凹基は挟入深度によって浅いものから深いものまでa~fに6細分でき、挟入深度が1mm未満の平基に近いもの、1~2mm以下のものが多い。挟入深度が5mm以上のものは基部の一端が長い特徴がある。器体の側縁調整は錯向剥離のもの、両面剥離のものがあ、基部は両面剥離により整形されている。一部の石器で基部整形時の交互剥離がみられるが主体的ではない。1・2は細身・薄手のもの(A類)で、黒曜石製である。1は柳葉形(A1類)で基

端が欠損する。尖頭部の整形後、器体下半を調整し柳葉形に整形している。2は木葉形(A2類)で、素材剥片の背腹面が残る。素材の打楯付近に平坦剥離を施したのち、周縁調整により器体を整形している。3～23は無茎のもの(B類)。3・4は平基無茎鎌(B1類)で、3は調整が粗雑な小型のもので、表面に素材剥片の背面が残る。4は器体周縁を調整した大型のもので、調整は裏面、表面の縁辺を調整した後、基端裏面→表面の順で行われている。いずれも黒曜石である。5～22は凹基無茎鎌(B2類)で、9はメノウ、17は珪質頁岩、他は黒曜石である。基端の挟入深度により6類に細分した。5～11は深さ1mm以下のもの(B2a類)で、ほぼ平基に近い。8～11は素材面を残すもので、11は身部が不整形である。12～16は深さ2mm以下のもの(B2b類)である。12・13は素材面を残す。17・18は深さ3mm以下のもの(B2c類)で、17は素材面を残す。19・20は深さ4mm以下のもの(B2d類)で、20は素材面を残す。21は深さ5mm以下のもの(B2e類)で、身部はやや丸味を帯び左側基端が長い。22は深さ6mm以下のもの(B2f類)で、B2e類と同様に基端の一方が長い。形態的にはB2a・b類は正三角形～二等辺三角形に近い小型のもの、B2c類は二等辺三角形の小型・大型のもの、B2d類は二等辺三角形の大型のもの、B2e・f類は片側基端が長くなるやや小型のものを主体とする。器体調整は全面を調整するものと、器体周縁のみを調整するものがある。身部は直線的なものが少なく、わずかに外湾するものが多い。23は凸基無茎鎌(B3類)である。身部は外湾し、基端の調整は希薄である。形態が至なことから石鎌未成品及び失敗品の可能性がある。24は有茎鎌(C1類)で、身部はわずかに内湾し逆刺は強い。身部の突端部及び基端部は尖る。25は不明瞭な茎を持つ菱形のもの(D3類)で、腹面側ののち、背面側の身部、基端の順で調整が施されている。26は未成品及び失敗品(E類)である。薄手の剥片の端部に尖頭部が作出されている。

石槍 (27～31)

石槍は無茎、有茎ともに少数である。材質は無茎が頁岩製、有茎が黒曜石製を主体とする。無茎は柳葉形尖基、柳葉形平基、菱形平基がみられる。有茎は身部凸基・基端平基がみられる。27・31は黒曜石、他は珪質頁岩である。27は有茎のもの(A類)で、裏面に素材剥片の腹面が残る。尖頭部の整形後に逆刺の明瞭な茎部が作出されている。尖頭部の整形は平坦剥離により裏面を調整した後、表面側へのやや急角度の剥離によるもので、身部はわずかに外湾する。茎部は裏面からの調整により整形されている。28～31は不明瞭な茎のもの(B類)で、28～30は柳葉形のもの(B1類)で、いずれも両面剥離により整形されるが、28・30は尖頭部側と基端側で打面を入れ替えている。尖頭部側は裏面を打面に、基端側は表面を打面とし、29は右側縁のみ裏面を打面とする。左側縁は28・30と同様の手順で整形されている。この結果28・29の左側縁、30の側縁は器体軸に対し斜位となる。31は木葉形のもの(B2類)で、裏面中央に素材剥片の腹面が残る。側面観は腹面側へやや湾曲する。表裏面とも両面剥離により器体全面に及ぶ平坦剥離で器体調整が施されたのち、尖頭部及び基端側が調整され、平面が菱形に近い木葉形に整形されている。縁辺は直線的である。

石錐 (32～43)

石鎌、石槍、スクレイパーに形態が類似するものもあるが、先端部の摩耗の有無、交互剥離、錯向剥離による器体調整および錐部の作出を判別基準とした。形態は不定形剥片に錐部を作出したものの、棒状のもの、他石器からの転用品があり、材質は黒曜石が主体である。転用品とみられるものは、全てつまみ付きナイフが利用され、身部先端を錐部として使用したもの、再加工により錐部を作出したものがある。32～35は剥片の一部に錐部を作出したもの(A類)で、33は珪質頁岩、他は

黒曜石である。32・33は柄が不明瞭なもの(A1類)で、34・35は柄が明瞭なもの(A2類)である。34は素材剥片の打面側、35は末端側を錯向剥離により錐部が作出され、断面が菱形に近くなるよう整形されている。摩耗はみられない。36～42は棒状のもの(B類)で、36はメノウ、37・40は珪質頁岩、他は黒曜石である。36～40は柄が不明瞭なもの(B1類)で、36は器体がほとんど調整されず、錐部のみが作出されている。38は錐部左側縁稜と剥離痕に磨滅及び器体短軸方向の擦痕が観察される。41・42は柄が明瞭なもの(B2類)、43はつまみ付きナイフからの転用品(C類)で、器体は風化度が異なる剥離痕が観察される。材質は全て黒曜石で、肩部先端に錐部が作出されている。転用前のつまみ付きナイフの形態はA1類に相当すると考えられ、腹面の縁辺から器体中央付近には側縁と並行する擦痕が明瞭にみられるほか、縁辺は磨滅によりやや丸みを帯びている。擦痕は錐部整形時の剥離痕に切られていることから、転用以前のものである。錐部先端は背面側からの調整で断面菱形に整形されている。

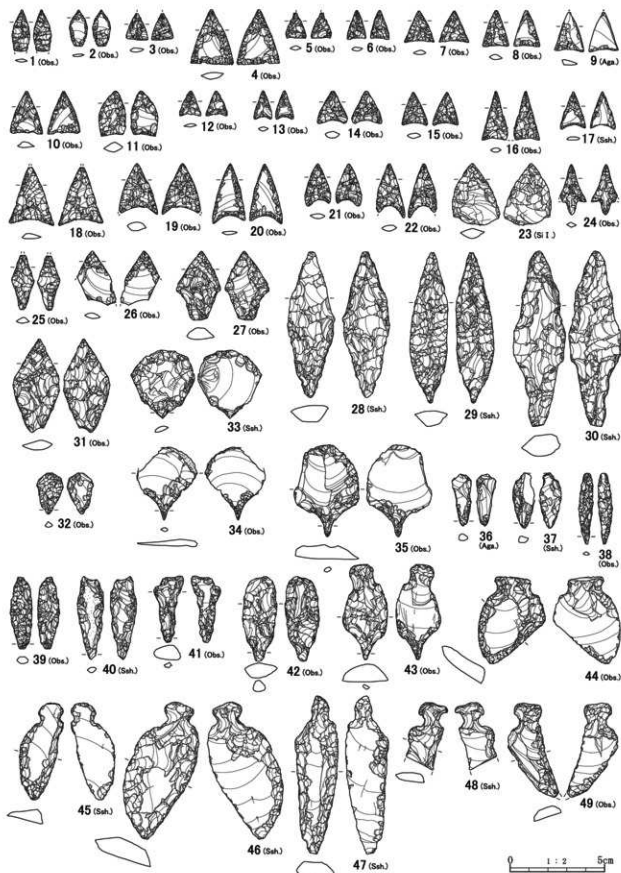
つまみ付きナイフ(44～64)

材質ごとに形態的特徴が異なる傾向がある。頁岩製は部分調整、周縁調整、片面全面調整の順に多い。珪化岩はいずれも少ないが各類に認められ、つまみ部が太く、調整が粗雑である。黒曜石製は刃部調整、部分調整、片面全面調整、周縁調整の順に多く、刃部が横位に位置するものは黒曜石製に限定される。剥片の縁辺に刃部のみを作出した素材変形度の低いものが多い。刃部は急角度で、外湾するもの、直線的なものがある。44～62は縦～斜刃のもの(A類)、63・64は横刃のもの(B類)である。44～57は素材の縁辺に刃部が施された素材変形度が低いもの(A1類)である。調整の程度により3細分される。44～47は器体周縁を調整するもの(A1a類)である。44のみ黒曜石で、他は珪質頁岩である。つまみ部は45のみ素材剥片末端側、他は打面側に作出されている。44・45・47は背面のみ、46は裏面右側縁にも調整が施されている。また、44は左側縁稜が磨滅して丸みがあり、腹面側の縁辺には磨滅光沢が観察される。一方、右側縁の刃部となる剥離痕は風化度が異なることから刃部を再加工したものと思われる。48～51は部分的な器体調整を施すもの(A1b類)で、A1aとA1cの中間的なものである。48・50は珪質頁岩、51は珪化岩Ⅱ、49は黒曜石である。いずれも素材打面を残した状態で、打面側につまみ部が作出されている。48・49は薄手で器体幅が狭く、刃部調整のほか、腹面右側縁に部分的な調整が施されている。50・51は厚手、幅広で、背面左側縁に部分的な調整が施されている。48・49は被熱により鈍い光沢を放ち、48は器体下半を欠損し、49ではつまみ部付近にクラックが観察された。50の腹面には節理面がみられる。52～57は刃部調整のみのもの(A1c類)で、52～54は黒曜石、55は珪質頁岩、56はメノウ、57は珪化岩Ⅰである。素材剥片は薄手、小型のものが主体で、礫面を残すものが多く、52は円礫面、53・56は岩面が残る。素材変形度が低いため、形態は不定形である。つまみ部の位置は52・55が素材打点側、53・54・56・57が素材末端側に作出されている。つまみ頭部は未調整で素材打面を残すものが多く、53のみ円形に整形されている。刃部調整が施されていない片側縁辺も使用したと考えられ、微細剥離痕がみられる。58～61は片面全体に器体整形時の剥離痕が及ぶもの(A2類)で、素材変形度が高いものである。58・59は黒曜石、60は珪質頁岩、61は珪藻質泥岩である。58は刃部再生により肩部が寸詰まりとなったものである。腹面側の剥離痕が背面側の剥離痕に切られている。被熱により表面の光沢が失われている。59は肩部が左側に湾曲した歪な形態のものである。60は裏面に古い調整痕を残すもので、素材は両面体が考えられる。61は両側縁からの器体調整により肩部が木葉形に整形されたもので、

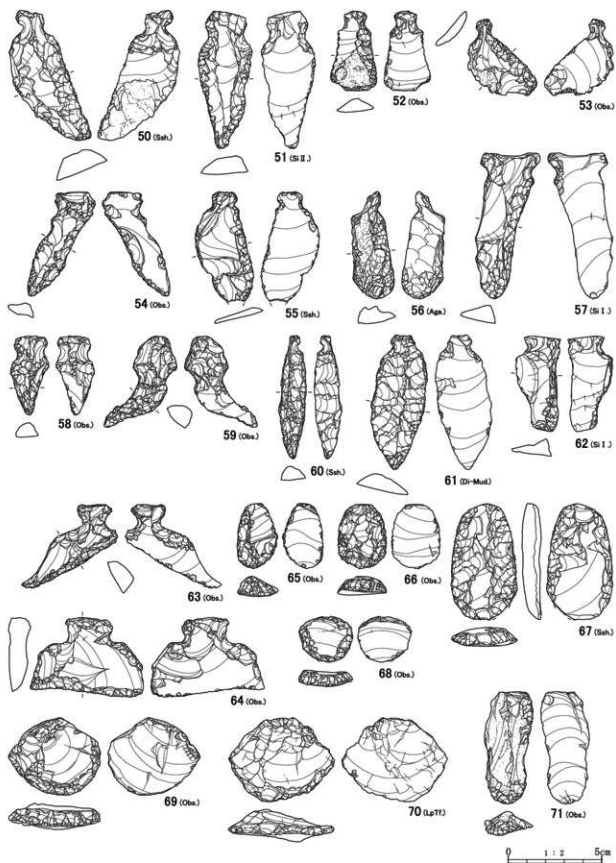
両側縁に微細剥離痕が観察される。60 以外は素材剥片の腹面が残る。62 は端部に搔器状の刃部が施された (A4 類) 珪化岩 I で、端部の剥離痕は背腹面の調整痕を切っている。主要な刃部は背面右側縁のものとみられるが、左側縁にも微細剥離痕と刃縁の摩耗が観察される。63・64 は黒曜石で刃部のほかに器体に部分調整が施されたもの (B1b 類) である。素材面を大きく残し、64 はつまみ部に円礫面が残置している。いずれも刃部に微細剥離痕が観察されるが、刃縁の摩耗はほとんどみられない。素材形状から推察すると刃部再生が行われている可能性が高い。

スクレイパー (65~93)

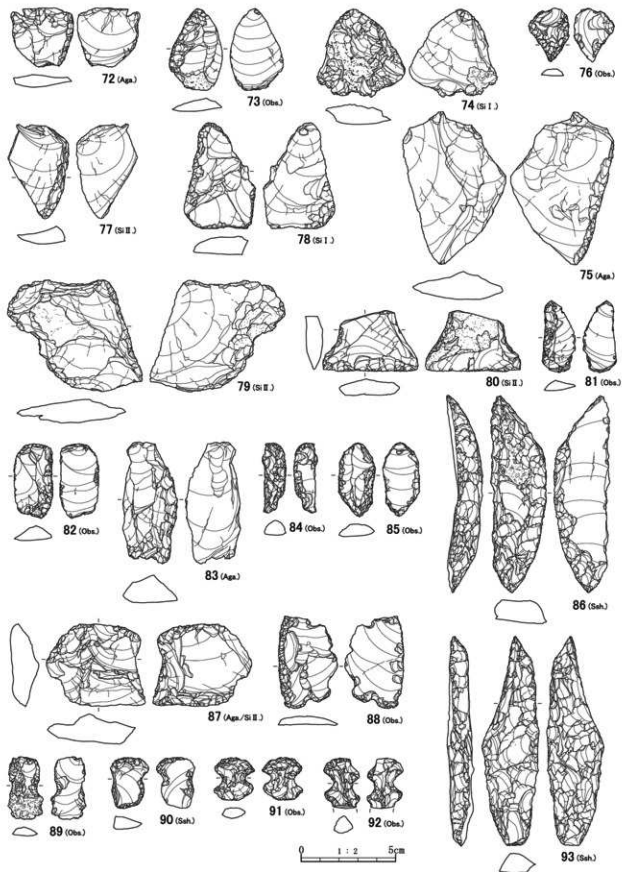
エンド、サイド・スクレイパーが多く出土している。エンド・スクレイパーは円形に近いもの、幅広、縦長のものがある。頁岩製には楕円形で片面全体と裏面縁辺から器体短軸方向に調整を施したものがあ。サイド・スクレイパーは不定形なものが主体で、縦長のものもみられる。不定形なもの材質ではメノウが多く、小型~大型剥片を素材としている。縦長のものは黒曜石が 90% 以上である。なお、剥離痕が器体を全周するラウンド・スクレイパー (A 類) は出土していない。65~71 はエンド・スクレイパー (B 類) である。65・66・68・69 は黒曜石、67 は珪質頁岩、70 は流紋岩質の火山礫凝灰岩である。65~67 は長幅比 1.0~2.0 未満のもの (B1 類) である。やや縦長の剥片端部に円形の刃部が作出されている。65 は器体左側縁と端部、66・67 は両側縁と端部が調整されたもので、67 は裏面の基部側に平坦剥離調整が施されたものである。68~70 は長幅比 1.0 未満のもの (B2 類) である。器体の整形は希薄で、幅広の剥片端部に円形の刃部が作出されている。71 は長幅比 2.0 以上のもの (B3 類) で、亜角礫の岩屑面を残す黒曜石の剥片を素材とし、素材剥片の打点側に円形の刃部が作出されている。器体調整は右側縁上半のみにみられる。72~86 はサイド・スクレイパー (C 類) である。72・75・83 はメノウ、73・76・81・82・84・85 は黒曜石、74・78 は珪化岩 I、77・79・80 は珪化岩 II、86 は珪質頁岩である。72~80 は長幅比 2.0 未満のものである。72~75 は一側縁加工 (C1a 類) で、72~74 は背面側、75 は腹面側の片側縁に刃部が作出されている。76~79 は二側縁加工 (C1b 類) で、76・77 は尖頭形の刃部、78 は末端幅広の剥片を素材とし、両側縁に刃部が作出され、下縁には微細剥離痕が観察される。79 は幅広の剥片を素材とし、両側縁に刃部が作出されている。80 は三側縁に加工が施されたもの (C1c 類) である。岩屑面を残す幅広の剥片を素材とし、両側縁に内湾する刃部、下縁に直線的な刃部が作出されている。81~86 は長幅比 2.0 以上のものである。81~83 は一側縁加工 (C2a 類) で、81・82 は円礫面を残す。81 は薄手、83 はやや厚手で、いずれも素材剥片形状に沿った刃部が作出されている。84~86 は二側縁加工 (C2b 類) で 84 は小型になり、岩屑面を残す剥片の両側縁に刃部が作出された素材変形度が高いものである。腹面側の平坦剥離を打面とし、背面側に刃部が作出されている。85 は背面の刃部作出後、腹面側の調整が施されている。86 は円礫面を残す大形の剥片を素材とし、腹面側の平坦剥離を打面とした背面側への側縁調整により長軸両端が尖頭形に整形され、左側縁には内湾する刃部が作出されている。左側縁の刃部は急角度で、刃縁に微細剥離痕が観察される。87 はコンケープ・スクレイパー (D 類) である。メノウ/珪化岩 II である。幅広の剥片を素材とし、背面左側縁、腹面左側縁・下縁に調整が施され、腹面左側縁に内湾する刃部が作出されている。88~92 は挟入石器 (E 類) で、88・89・91・92 は黒曜石、90 は珪質頁岩である。88 は挟入調整が 1 ヶ所のもの (E1 類) で、薄手の剥片を素材とした一側縁加工のサイド・スクレイパーの下縁に深い挟入調整が施されている。89 は器体未調整で挟入調整が対のもの (E2a 類) で、円礫面が残る薄手の剥片に浅い挟入調整が施されている。90~92 は器体調整が施さ



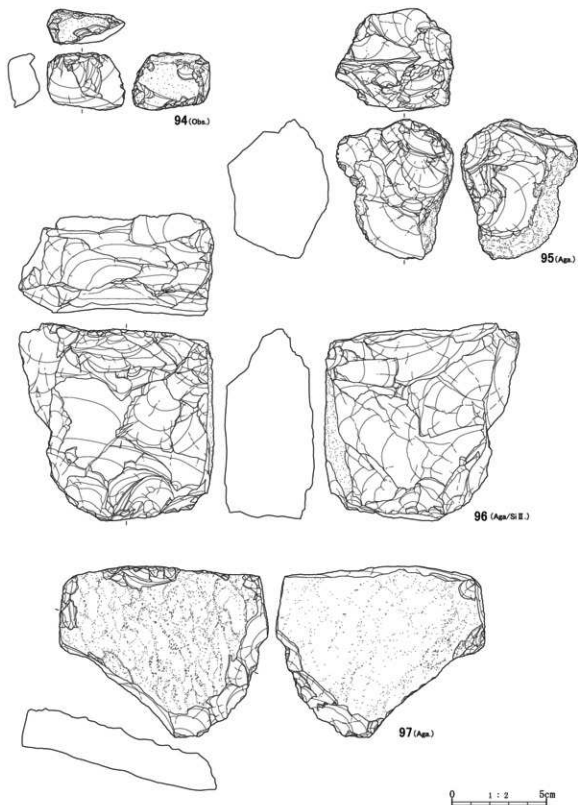
図Ⅲ-13 縄文時代 包含層出土剥片石器 (1)



図Ⅲ-14 縄文時代 包含層出土剥片石器 (2)



図Ⅲ-15 縄文時代 包含層出土剥片石器 (3)



図Ⅲ-16 縄文時代 包含層出土剥片石器 (4)

表Ⅲ-10 縄文時代包含層出土剥片石器属性表(1)

神岡 番号	図版 番号	グリッド	遺物 番号	遺物名	分類	層位	計測値(mm)			重量 (g)	材質	備考
							長軸	短軸	厚さ			
Ⅲ-13-1	10-1	Z-27	1640	石鏃	A1	VⅢ	(21.8)	9.3	2.4	0.399	Obs.	
Ⅲ-13-2	10-2	Y-17	8887	石鏃	A2	VⅢ	19.2	9.5	1.6	0.34	Obs.	
Ⅲ-13-3	10-3	Z-18	7207	石鏃	B1	Vc	13.8	11.5	2.3	0.33	Obs.	
Ⅲ-13-4	10-4	Y-18	6991	石鏃	B1	VⅢ	28.8	22.2	2.9	1.66	Obs.	
Ⅲ-13-5	10-5	X-16	9628	石鏃	B2a	VⅢ	(13.4)	10.7	2.6	0.273	Obs.	
Ⅲ-13-6	10-6	X-18	2480	石鏃	B2a	VⅢ	15.1	9.6	2.5	0.27	Obs.	
Ⅲ-13-7	10-7	X-18	6890	石鏃	B2a	VⅢ	16.4	15.4	3.3	0.51	Obs.	
Ⅲ-13-8	10-8	W-27	6176	石鏃	B2a	VbⅢ	19.0	13.6	2.9	0.58	Obs.	
Ⅲ-13-9	10-9	X-26	6323	石鏃	B2a	VbⅢ	20.5	15.6	2.7	0.77	Agg. 石材同定No.11	
Ⅲ-13-10	10-10	Y-17	11968	石鏃	B2a	VI	24.2	17.1	3.3	0.91	Obs.	
Ⅲ-13-11	10-11	Y-18	7625	石鏃	B2a	Vc	23.0	14.1	5.4	1.60	Obs.	
Ⅲ-13-12	10-12	X-17	10453	石鏃	B2b	VI	13.1	11.1	2.3	0.25	Obs.	
Ⅲ-13-13	10-13	W-19	908	石鏃	B2b	VⅢ	15.0	9.4	2.1	0.22	Obs.	
Ⅲ-13-14	10-14	X-18	6799	石鏃	B2b	VⅢ	17.4	13.3	3.3	0.53	Obs.	
Ⅲ-13-15	10-15	W-18	7997	石鏃	B2b	Vc	17.0	15.9	4.9	0.90	Obs.	
Ⅲ-13-16	10-16	Y-18	7626	石鏃	B2b	Vc	25.8	(13.3)	3.0	0.723	Obs.	
Ⅲ-13-17	10-17	W-17	7798	石鏃	B2c	Vc	19.3	13.1	2.9	0.49	Sch. 石材同定No.12	
Ⅲ-13-18	10-18	X-18	7344	石鏃	B2c	Vc	(32.6)	23.5	4.7	(1.96)	Obs.	
Ⅲ-13-19	10-19	W-26	5742	石鏃	B2d	VbⅢ	28.1	(20.2)	5.0	(1.77)	Obs.	
Ⅲ-13-20	10-20	Z-19	3211	石鏃	B2d	VⅢ	31.8	17.2	2.2	1.02	Obs.	
Ⅲ-13-21	10-21	W-16	10327	石鏃	B2c	Vc	24.2	13.6	3.1	0.73	Obs.	
Ⅲ-13-22	10-22	W-26	6352	石鏃	B2f	VbⅢ	28.9	(14.1)	3.5	(1.01)	Obs.	
Ⅲ-13-23	10-23	Y-17	9307	石鏃	B3	VⅢ	32.2	24.6	5.9	0.46	Si I. 石材同定No.13	
Ⅲ-13-24	10-24	W-16	621	石鏃	C1	VⅢ	26.5	(13.6)	3.0	0.623	Obs.	
Ⅲ-13-25	10-25	W-16	11904	石鏃	D3	Vc	(28.7)	12.0	3.6	0.943	Obs.	
Ⅲ-13-26	10-26	W-23	912	石鏃	E	Vc	(29.8)	(15.7)	3.3	(1.29)	Obs.	
Ⅲ-13-27	10-27	X-16	9591	石鏃	A	VⅢ	36.4	23.5	7.5	4.86	Obs.	
Ⅲ-13-28	10-28	W-16	9817	石鏃	B1	VⅢ	77.5	25.1	10.6	16.98	Sch. 石材同定No.14	
Ⅲ-13-29	10-29	Y-27	6386	石鏃	B1	VbⅢ	79.6	19.3	8.3	13.33	Sch. 焼熱 石材同定No.15	
Ⅲ-13-30	10-30	Z-27	8287	石鏃	B1	VbⅢ	93.0	27.4	12.6	28.23	Sch. 石材同定No.16	
Ⅲ-13-31	10-31	X-17	4336	石鏃	B2	VⅢ	49.6	24.8	6.9	6.06	Obs.	
Ⅲ-13-32	10-32	Y-18	3171	石鏃	A1	VⅢ	21.6	13.6	6.7	1.72	Obs.	
Ⅲ-13-33	10-33	W-26	1423	石鏃	A1	VⅢ	35.8	33.7	7.2	8.06	Sch. 石材同定No.17	
Ⅲ-13-34	10-34	X-26	4592	石鏃	A2	VbⅢ	(38.7)	30.6	5.8	(3.11)	Obs.	
Ⅲ-13-35	10-35	Z-27	10560	石鏃	A2	Vc	48.6	34.9	10.2	11.60	Obs.	
Ⅲ-13-36	10-36	Y-27	2652	石鏃	B1	VⅢ	27.6	10.1	4.9	1.40	Agg. 石材同定No.18	
Ⅲ-13-37	10-37	Y-28	1741	石鏃	B1	VⅢ	29.4	(11.0)	6.1	(1.88)	Sch. 石材同定No.19	
Ⅲ-13-38	10-38	W-27	4949	石鏃	B1	VbⅢ	37.7	7.4	4.3	0.95	Obs.	
Ⅲ-13-39	10-39	W-18	7315	石鏃	B1	Vc	37.9	11.5	6.9	2.82	Obs.	
Ⅲ-13-40	10-40	Y-27	67	石鏃	B1	VⅢ	44.0	12.7	6.6	1.95	Sch. 石材同定No.20	
Ⅲ-13-41	10-41	X-28	1143	石鏃	B2	VⅢ	35.7	15.8	3.8	3.06	Obs.	
Ⅲ-13-42	10-42	Z-27	10539	石鏃	B2	VbⅢ	45.0	17.9	9.8	7.93	Obs.	
Ⅲ-13-43	10-43	X-16	9571	石鏃	C	VⅢ	50.4	24.5	10.5	10.13	Obs.	
Ⅲ-13-44	10-44	Y-28	3603	つばみ付きナイフ	A1a	VbⅢ	46.5	34.8	8.6	13.38	Obs.	
Ⅲ-13-45	10-45	W-17	905	つばみ付きナイフ	A1a	Vc	52.4	19.6	8.3	6.35	Sch. 石材同定No.21	
Ⅲ-13-46	10-46	X-17	9559	つばみ付きナイフ	A1a	Vc	73.9	33.1	13.4	30.02	Sch. 石材同定No.22	
Ⅲ-13-47	10-47	Y-27	3978	つばみ付きナイフ	A1a	VbⅢ	83.7	22.7	10.2	21.14	Sch. 石材同定No.23	
Ⅲ-13-48	10-48	X-18	6755	つばみ付きナイフ	A1b	Vc	(34.9)	17.7	6.5	(3.62)	Sch. 石材同定No.24	
Ⅲ-13-49	10-49	Z-19	5040	つばみ付きナイフ	A1b	Vc	(32.6)	18.2	6.3	(6.55)	Obs.	
Ⅲ-14-50	11-50	W-27	392	つばみ付きナイフ	A1b	VⅢ	77.6	29.6	11.3	22.87	Sch. 石材同定No.25	
Ⅲ-14-51	11-51	Y-25	12100	つばみ付きナイフ	A1b	Vc	72.0	29.6	9.1	21.58	Si II. 石材同定No.26	
Ⅲ-14-52	11-52	Y-28	4030	つばみ付きナイフ	A1c	VⅢ	42.7	24.7	6.4	5.45	Obs.	
Ⅲ-14-53	11-53	Y-28	3310	つばみ付きナイフ	A1c	VⅢ	47.0	27.7	6.4	6.97	Obs.	
Ⅲ-14-54	11-54	Y-27	4796	つばみ付きナイフ	A1c	VbⅢ	63.4	22.2	8.0	9.17	Obs.	
Ⅲ-14-55	11-55	Y-28	3309	つばみ付きナイフ	A1c	VⅢ	(39.5)	26.7	4.0	(6.93)	Sch. 石材同定No.27	
Ⅲ-14-56	11-56	W-27	6188	つばみ付きナイフ	A1c	VbⅢ	57.6	22.1	11.8	13.06	Agg. 石材同定No.28	
Ⅲ-14-57	11-57	Y-18	6993	つばみ付きナイフ	A1c	Vc	80.6	30.1	14.5	29.04	Si I. 石材同定No.29	
Ⅲ-14-58	11-58	Z-19	4393	つばみ付きナイフ	A2	VⅢ	42.8	20.3	11.0	8.05	Obs.	
Ⅲ-14-59	11-59	W-26	5756	つばみ付きナイフ	A2	VbⅢ	58.4	33.0	16.8	15.61	Obs.	
Ⅲ-14-60	11-60	W-26	2027	つばみ付きナイフ	A2	VⅢ	65.6	14.0	7.2	7.00	Sch. 石材同定No.30	
Ⅲ-14-61	11-61	W-17	529	つばみ付きナイフ	A2	VⅢ	71.8	28.0	8.3	13.30	Di-Mud. 石材同定No.31	
Ⅲ-14-62	11-62	Z-18	6684	つばみ付きナイフ	A4	Vc	50.8	23.0	8.0	10.34	Si I. 石材同定No.32	
Ⅲ-14-63	11-63	W-26	5834	つばみ付きナイフ	B1b	VbⅢ	52.3	56.3	9.4	10.79	Obs.	
Ⅲ-14-64	11-64	W-27	10577	つばみ付きナイフ	B1b	VI	40.3	60.5	8.7	22.79	Obs.	

表Ⅲ-11 縄文時代包含層出土剥片石器属性表(2)

種別 番号	図版 番号	グリッド	遺物 番号	遺物名	分類	層位	計測値(mm)			重量 (g)	材質	備考
							長軸	短軸	厚さ			
Ⅲ-14-65	11-65	X-30	1871	スクレイパー	B1	Vbl.	34.1	22.4	9.9	6.19	Obs.	
Ⅲ-14-66	11-66	X-15	11684	スクレイパー	B1	Vc	33.7	25.6	9.8	9.76	Obs.	
Ⅲ-14-67	11-67	W-17	7151	スクレイパー	B1	Vc	61.2	35.2	9.7	26.24	Sh.	石材測定No.33
Ⅲ-14-68	11-68	Z-27	8277	スクレイパー	B2	Vbl.	24.5	28.9	7.5	5.61	Obs.	
Ⅲ-14-69	11-69	Z-19	6876	スクレイパー	B2	Vc	40.3	49.3	12.4	26.73	Obs.	
Ⅲ-14-70	11-70	X-16	9703	スクレイパー	B2	Vbl.	45.2	57.0	13.8	29.19	lgHf.	石材測定No.34
Ⅲ-14-71	11-71	W-18	1513	スクレイパー	B3	Vc	60.3	24.5	10.1	15.40	Obs.	
Ⅲ-15-72	12-72	Z-19	7372	スクレイパー	C1a	Vl	31.5	32.4	8.2	8.36	Agp.	石材測定No.35
Ⅲ-15-73	12-73	Z-19	8530	スクレイパー	C1a	Vl	43.0	47.8	9.7	7.80	Obs.	
Ⅲ-15-74	12-74	X-17	5681	スクレイパー	C1a	Vbl.	47.3	43.7	11.5	18.85	Si I.	石材測定No.36
Ⅲ-15-75	12-75	X-26	6321	スクレイパー	C1a	Vbl.	80.6	50.2	19.2	61.39	Agp.	石材測定No.37
Ⅲ-15-76	12-76	W-16	9096	スクレイパー	C1b	Vbl.	26.7	21.1	5.1	2.65	Obs.	
Ⅲ-15-77	12-77	Z-28	2661	スクレイパー	C1b	Vbl.	49.9	30.5	14.7	14.43	Si II.	石材測定No.38
Ⅲ-15-78	12-78	Y-27	5976	スクレイパー	C1b	Vbl.	58.0	39.0	10.7	20.43	Si I.	石材測定No.39
Ⅲ-15-79	12-79	Z-28	8316	スクレイパー	C1b	Vc	78.2	58.3	15.2	77.08	Si II.	石材測定No.40
Ⅲ-15-80	12-80	X-29	2296	スクレイパー	C1c	Vbl.	31.7	50.3	8.7	15.12	Si II.	石材測定No.41
Ⅲ-15-81	12-81	Z-18	11400	スクレイパー	C2a	Vc	38.2	17.1	4.9	2.52	Obs.	
Ⅲ-15-82	12-82	Y-27	8370	スクレイパー	C2a	Vbl.	39.1	20.3	8.1	6.11	Obs.	
Ⅲ-15-83	12-83	W-18	7317	スクレイパー	C2a	Vc	65.1	28.9	16.3	29.65	Agp.	石材測定No.42
Ⅲ-15-84	12-84	Y-27	5988	スクレイパー	C2b	Vbl.	37.0	11.9	7.9	3.78	Obs.	
Ⅲ-15-85	12-85	Y-27	10512	スクレイパー	C2b	Vc	39.0	19.2	9.4	6.37	Obs.	
Ⅲ-15-86	12-86	X-27	6266	スクレイパー	C2b	Vbl.	104.9	28.8	14.5	53.76	Sh.	石材測定No.43
Ⅲ-15-87	12-87	W-26	3376	スクレイパー	D	Vbl.	43.6	51.3	14.8	31.25	Agp/Si II.	石材測定No.44
Ⅲ-15-88	12-88	Z-27	8278	スクレイパー	E1	Vbl.	49.0	31.0	3.1	6.89	Obs.	
Ⅲ-15-89	12-89	Z-28	3522	スクレイパー	E2a	Vbl.	33.1	18.6	4.6	2.69	Obs.	
Ⅲ-15-90	12-90	X-27	3885	スクレイパー	E2b	Vbl.	25.7	20.1	6.8	3.18	Sh.	石材測定No.45
Ⅲ-15-91	12-91	W-28	127	スクレイパー	E2b	Vbl.	22.5	30.7	5.9	2.48	Obs.	
Ⅲ-15-92	12-92	X-27	8735	スクレイパー	E2b	Vbl.	28.1	18.6	8.6	3.73	Obs.	
Ⅲ-15-93	12-93	Z-27	5818	スクレイパー	F	Vbl.	110.6	32.0	12.8	41.80	Sh.	石材測定No.46
Ⅲ-16-94	13-94	X-17	8447	石 槌	A	Vbl.	30.0	41.7	31.6	21.78	Obs.	被熱
Ⅲ-16-95	13-95	Y-17	9156	石 槌	A	Vbl.	73.2	63.7	57.4	250.00	Agp.	石材測定No.47
Ⅲ-16-96	13-96	Y-29	1830	石 槌	B	Vbl.	113.3	102.5	57.7	830.00	Agp/Si II.	石材測定No.48
Ⅲ-16-97	13-97	X-16	9800	R・F	A	Vc	96.7	112.0	26.6	330.00	Agp.	石材測定No.49

れた挟入調整が対のもの(E2b類)で、90は素材変形度の低いもので、浅い挟入調整が施されている。91は上縁に調整が施された素材変形度の高いもので、深い挟入調整が施されている。92は裏面に素材剥片の腹面をわずかに残す素材変形度は高い。下端が欠損するが、2対の深い挟入調整が施されている。93は再加工されたもの(F類)で、珪質頁岩である。両面調整が施された尖頭形を呈する大型のもので、作出された刃部と器体の剥離痕とで風化が異なることから、石槍からリダクションしたサイドスクレイパーと考えられる。先端部には縁辺が磨滅光沢を放つ桶状剥離痕がみられる。再調整は表面上半の両側縁、裏面下半の右側縁にみられる。表面左側縁の急角度の剥離により器体長軸長の1/2に達する内湾する刃部が作出されている。刃縁は微細剥離痕が観察される。

石 槌 (94~96)

遺跡内への素材の搬入から剥片剥離過程を示せるほどの点数は出土していないが、メノウ及び珪化岩系の材質は、礫面が残る大型のものや、小型の原石が含まれており、遺跡周辺から持ち込まれたと推定することができる。近傍では頗美宇川の downstream、厚真川との合流点付近の段丘礫層で人頭大の乳白色～淡褐色を呈するメノウの産地が知られており(厚真町教委 2009b)、肉眼観察では遺跡内で出土するものと類似が認められ、95・96が該当する。

94・95は単設打面のもの(A類)、96は両設打面のもの(B類)で、94は黒曜石、95はメノウ、96は珪化岩である。94は垂円礫素材である。上面を打面とし、腹面側で剥片が剥離されている。打点

は右から左へと移動する。剥離された剥片は幅広で寸詰まりのものと考えられるが、中央の剥片剥離の際に、打点部直下でステップフラクチャーを生じ、整った剥片は剥離されなかったとみられる。頭部調整はみられない。95は左側縁から下縁・右側縁にかけて岩屑面を残すものである。上面に打面を形成し、表面側で剥片が剥離されている。表面左側縁及び裏面左側縁の剥離痕は石核調整痕と考えられる。剥離作業面に残る剥離痕の形状からみると、整ったものは剥離されていない。打角は鈍角である。頭部調整はみられない。95は右側面に岩屑面を残す大型の原石を素材とし、裏面は石核整形段階の周縁からの剥離痕が残る。上下面は表面側からの剥離によって、平坦な複剥離打面が作出されている。剥離作業は上下の打面から、表面側を作業面として剥片が剥離されている。上下間の剥離痕に切合いはみられない。剥離された剥片は幅広で寸詰まりのものが多く、ステップ及びヒンジフラクチャーを生じている。頭部調整は入念だが、打点移動はやや不規則で、打角は鈍角である。

RF・UF (97)

石核と同様に、岩屑面が残るメノウのものは遺跡近傍で採集されたと考えられる。剥片の端部に二次加工が施されたものはメノウと黒曜石が多い。97は両面に岩屑面が残る板状のメノウを素材とする。メノウ部分は白色半透明で、一見良質であるが、微細な不純物が多く観察され、剥離痕の表面は波打つ。素材下縁に交互剥離による連続的な調整痕がみられる。縁辺の剥離単位は大きく、凹凸があることからスクレイパーの刃部とは異なる。(山田)

3. 礫石器 (図III-17~29 図版14~20-1)

V層包含層からは礫石器1,610点、礫6,532点が出土した。礫石器の内訳は石斧40点、石斧片152点、石斧原材11点、たたき石1,066点、すり石66点、砥石151点、石皿58点、台石46点、石鋸7点、石錘2点、加工痕ある礫11点である。礫石器の石材は砂岩1,391点、礫岩4点、安山岩4点、花崗岩4点、泥岩17点、片麻岩3点、メノウ1点、緑色片岩173点、片岩1点、青色片岩10点、蛇紋岩1点、チャート1点である。礫の石材は砂岩6,304点、泥岩16点、安山岩6点、メノウ114点、チャート10点、礫岩41点、炭化木1点、片麻岩1点、花崗岩24点、軽石1点、緑色片岩13点、不明1点、石斧・石斧片・石斧原材は緑色片岩(アオトラ型緑色岩を含む)、他の器種は砂岩が多く、わずかに安山岩、花崗岩、片麻岩などがみられる。礫も同様の傾向で、他にチャート、メノウなどの破片が含まれる。

石斧・石斧原材 (1~17)

磨製石斧、磨製石斧未成品、石斧原材が出土した。磨製石斧は全面研磨で調整痕を残さないものが多いが、石斧未成品の中に剥離・敲打調整が施されたものがあることから、これらの過程から製作されているものもあると考えられる。擦切痕を残すものは1点のみである。石斧の平面形態は刃部側が幅広になる撥形が多い。刃部形態は片刃刃、両刃刃が多く直刃は少ない。断面形態では側縁を面取りした断面四角形となるものは少なく、側縁に稜が形成された楕円～扁平楕円状のものが主体である。素材は扁平な小型の亜円礫を素材とする変形度の低いもの、亜角～亜円礫面を残す大型の剥片素材のものが主体である。完形品は少なく、ほとんどが刃部及び基部片で、胴部片は少ない。材質は1・4が緑色片岩、2・3・5~14・15・17はアオトラ型緑色岩・16はドレライトである。1~7は磨製石斧(Ⅰ類)で、1は擦切石斧である。右側縁両面の擦切後、全体の研磨調整により器体を整形している。刃縁は使用によるものか、摩耗によって丸味を帯び主に表面側には長軸方向に

走る明瞭な線条痕が観察される。2・3は薄手、小型であるが刃部が作出され、2は裏面に素材腹面が残る薄手の剥片のほぼ全面、3は礫面が残る剥片の両面に研磨調整が施されたものである。4・5は厚手でほぼ全面に研磨調整が施されたもの。4は裏面が平坦、断面が台形状となるもので、被熱による焼けはじけがみられる。5は側縁稜が形成された断面レンズ状のもので、基部側を欠損する。6・7は研磨調整以前の剥離調整痕が残るものである。6は側面の面取りが見られるが、断面はレンズ状に近いもので、両面に器体整形時の剥離痕がみられる。また基部側の欠損面からの剥離痕がみられる。7は被熱により割れた2点が接合したもので、色調は白色化している。側面は面取りされず、断面は楕円形である。わずかではあるが、表面側の刃部に器体整形時の剥離痕が残る。8～13・14は未成品(Ⅱ・Ⅲ類)で、8は器体の両面にわずかな素材面を残す大型の剥片素材と考えられ、研磨痕に切られた器体側縁からの剥離痕が残る。刃部側が欠損しているためⅡ類に含めた。また、9は素材形状を残し、全面研磨には至らないという点で未製品に含めた。礫片の端部に刃部のみが作出されている。刃縁には微細な剥離痕が観察される。10・11は剥離調整が施されるが、刃部の作出に至らないものである。10は礫面が残る剥片に剥離調整が施されたもので、研磨痕はみられない。11は表裏面の刃部作出が不完全で、下端に礫面が残されている。器体にも研磨が施されたものと考えられるが、研磨後の剥離調整が施されている。12・13は剥離・敲打調整が施されたものである。礫面が残る大型剥片を素材とし、剥離・敲打調整による器体整形後、器体表裏面にわずかな研磨調整が施されている。13は刃部側が欠損している。14は扁平礫の側縁に敲打調整が施されたもので部分的な研磨がみられるもの。素材礫形状を大きく残すことからⅢ類に含めた。15～17は石斧原材で、15は扁平礫の側縁に敲打調整が施されたもので2点が接合した。側縁稜は幅が狭く、器体両面には敲打調整による剥離痕がみられる。16は上下端に敲打調整、側縁から剥離調整が施されたもので、器体中程で欠損した2点が接合した。下半部は欠損面からの剥離痕もみられる。17は礫面が残る大型剥片の側縁に敲打調整、上面から剥離調整による器体整形が施されたものである。15～17はたたき石としての分類も可能だが、13・14のような事例があることから石斧原材に含めた。

たたき石 (18～85)

たたき石の素材礫は大きく、葉状・柱状・盤状・球状・礫片・他器種転用の6細分され、葉状・柱状・礫片利用のものが多く出土し、円磨度では直角～亜円礫が主体を占める。敲打痕は面的・線状・円形・鼠歯状のものがみられ、面的で浅いもの、円形ですり鉢状に窪むものが多くみられる。敲打痕位置は器体表裏面のほか、側面・縁、端部など複数箇所の敲打痕を持つものが多く、使用頻度が高かったことを示している。ただし、端部に幅広の敲打痕を持つもの(72)は少ない。敲打痕範囲は単発的なものと器体長軸方向に沿って重複して溝をなすものがあり後者が多い。接合資料は5個体あり、すべて敲打痕上で欠損している。材質は38が花崗岩の他は全て砂岩である。18～30は葉状の礫を素材とするもの(Ⅰ類)で、19・20は片面敲打(ⅠA類)、19は浅く平坦、20は面的な敲打がみられるものである。21～25は両面敲打(ⅠB類)で、21・23は浅く平坦なもの、22・24・25は深く窪むものである。24は2点が接合した。いずれも表裏面の同一箇所敲打痕が形成されている。18・26～30は平坦面と側面・縁及び端部を敲打するもの(ⅠD類)。18は平坦面と右側面、26・27は表裏面と右側縁、28は平坦面と左側縁、29は平坦面と両側面、30は平坦面と両側縁、上端にみられる。26・28は浅く平坦なもの、18・27・29・30は深く窪むものである。31～42は柱状の礫を素材とするもの(Ⅱ類)である。31～33は片面敲打(ⅡA類)で、やや浅く窪むもの、34・35は両面敲打(ⅡB類)で

34・35ともに深く窪むものである。36・38は側面及び端部のみ(ⅡC類)で36は両側面、38は長軸両端に敲打痕がみられる。37・39~42は平坦面と側面・縁及び端部に敲打痕がみられるもの(ⅡD類)で、37は平坦面と両側面、39は平坦面と両側面、長軸両端、41は平坦面と左側縁、下端である。43~50は盤状の礫を素材とするもの(Ⅲ類)である。43~45は片面敲打(ⅢA類)で、43・45は浅く、44は深く、46は両面敲打(ⅢB類)で深く窪む。47・48は側面及び端部のみ(ⅢC類)で、47は下端と左側縁上端、48は右側縁に敲打痕が形成されている。49~51は平坦面と側面・縁及び端部に敲打痕が形成され(ⅢD類)、49は平坦面と左側縁、50は両面と右側縁、51は全面に敲打痕が形成されている。52~54は球状もしくは方形状の礫を素材とするもの(Ⅳ類)で、52は片面敲打(ⅣA類)で浅く小さい単位の敲打、53は端部のみ(ⅣC類)で下端に小さい単位の敲打痕が形成されている。54は平坦面と側面・縁及び端部に敲打痕が形成されているもの(ⅣD類)で、両面と左側面、上端に敲打痕がみられる。55~80は礫片を素材とするもの(Ⅴ類)で、55~63は片面敲打(ⅤA類)で、55~58は扁平、59~63は柱状である。60は鼠歯状の敲打痕がみられる。64~71は両面敲打(ⅤB類)で、いずれも表裏面の同一位置に敲打痕が形成されている。72は端部のみ(ⅤC類)で、大型の柱状垂角礫の稜上に幅広の平坦な敲打痕が形成されている。73~80は平坦面と側面・縁及び端部を敲打するもの(ⅤD類)で、73は平坦面と右側面、74は平坦面と両側面、上下端、75~77は両面と下端、78は両面と下端、右側面、79は両面と左側面、80は表裏左右上面の5面に敲打痕が形成されている。73は右側縁の敲打に沿って裏面が欠損している。74の裏面は古い破断面である。81~85は他器種からの転用品(Ⅵ類)である。いずれも砥石の破片からの転用で、81は表面、84は裏面、82・83・85は表裏面に砥面が残る。敲打位置は81が両面、左側縁から下縁、82が両面と右側縁上端、左側縁下端、83・84が両面、85が片面である。

すり石(86~90)

他器種に比べて点数が少ない。素材礫形状は断面三角形の垂円礫が主体ですべて砂岩である。86~89は断面三角形礫の稜にすり面が形成されているもの(Ⅰ類)で、いずれも垂円礫を素材とする。86・87はすり面のみが形成されているもので、いずれもすり幅約1cmと狭い。86は小型で2点が接合、87は大型で下縁からの剥離痕がみられる。88・89はすり面と端部の敲打痕が形成されているもの。88は小型ですり幅約2cm、長軸上の端部に平坦な敲打痕がみられる。89は大型ですり幅約3~4cmと幅広で、左側端部と上面に平坦な敲打痕が形成されている。右側縁にはすり面形成後の剥離痕がみられる。90は扁平礫の側縁にすり面が形成されているもの(Ⅲ類)で、すり面は左側縁から下縁に4面、表裏面に各1面みられる。すり面幅は約3~4cmで、側縁のすり面は左側縁から下縁に向かって新しい。

砥石(91~107)

91~97は角~垂角礫素材で1面の砥面がみられるもの(ⅠA類)で、91~95は表面に平坦な砥面、96・97は浅く窪む砥面が形成されている。91は表面に上側が下側を切る2面の砥面がみられる。92は扁平なもの、93・94はそれぞれ2点が接合し1個体となったもの、95は5点が接合したもの、96は表面に敲打痕がみられるもの、97は大型で表面には下側から順に新しくなる4面の砥面が形成されている。器体に残る剥離は風化のため、自然破砕か人為的なものか判然としない。98~105は角~垂角礫素材で対面する2面の砥面がみられるもの(ⅠB類)である。98・99・103はやや内湾する砥面、100~102・104・105は平坦な砥面である。98・99は扁平なもの、100・101は厚手のもの、102~105

は大型のものである。98・99 はいずれも表面の砥面が浅く窪み、砥面形成以前の敲打痕も観察される。100・101 は線条痕が明瞭なもの、100 は表裏面、101 は表面にみられる。102・105 は幅広、扁平なもので102 は3点が接合した。103 は表裏面に3面の砥面がみられるもの。104 は2点が接合したものである。106 は対面しない2面以上の砥面がみられるもの（ⅠC類）である。2点が接合した砥面は表裏面と上面に形成され、砥面を切る側縁からの敲打痕及び剥離痕も観察される。107 は亜円～円礫素材のもの（ⅡA類）、裏面側は欠損している。表面中央に溝状に浅く窪む弱い砥面が形成されている。

石皿（108～113）

108～111 は角～亜角礫素材のもの（Ⅰ類）で、108 は表面に敲打痕、裏面にすり面が残る。109・110 は表面のみにすり面がみられ、111 は3点が接合し、両面にすり面がみられる。112・113 は亜円～円礫素材のもの（Ⅱ類）で、ともに大型、厚手で、表面にすり面が形成されている。112 はすり面に切られた敲打痕がみられ、台石として利用されていたことがわかる。表面は平滑で、113 は2点が接合し、すり面範囲は中央が浅く窪んでいる。

台石（114～120）

114～117 は角～亜角礫素材のもの（Ⅰ類）である。114～116 は石皿の破片を素材としたもので、114 は表面のすり面を切る浅く窪む敲打痕がみられる。115 は表裏面に面的な敲打痕がみられる。裏面には敲打痕に切られたすり面が残る。116 は表面に敲打痕、裏面にすり面がみられる。117 は大型のもので、表面の広い範囲に面的な敲打痕が形成されている。左側面には砥面がみられる。118 は亜円～円礫素材のもの（Ⅱ類）で、表面の曲面に面的な敲打痕が形成されている。左右の上端にもわずかな敲打痕がみられ、たたき石としても使用されていた可能性がある。119・120 は破片（Ⅳ類）である。119 は表面に面的な敲打痕がみられ、中央が溝状に窪む。120 は3点が接合した大型のもので、表面にはすり面を切る面的な敲打痕がみられる。

石鏃（121・122）

121・122 ともに砂岩製砥石の再加工品で、刃部が形成されている。いずれも欠損面の稜線が磨滅していることから完形と考えられる。121 は左側面に砥石の砥面が残り、器体下縁に形成された刃部は幅約1.5 cmで、稜が摩擦して丸くなっている。122 は2点が上下で接合したもので、元は砥石及びたたき石として利用されており、敲打痕に沿って割れていることから、2個体に分割した後にそれぞれ刃部が作出されたものと考えられる。上下とも刃部作出以前の剥離調整がみられる。刃部平面形は下の個体が直線的、上の個体が外湾している。刃部幅は約2～3 cmで、稜線がわずかに残るが、摩擦して丸くなっている。

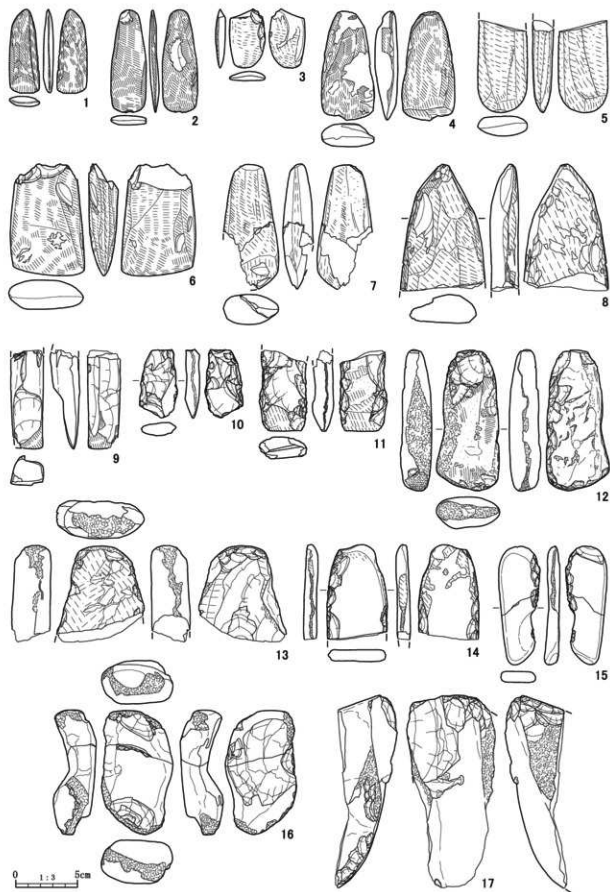
石鏃（123）

扁平亜円礫の長軸端に対となる抉入剥離が施されている。剥離は裏面を先とし、表面の細かい単位の剥離で整形されている。左側縁はさらに裏面が調整され、抉りは右側縁が深い。砂岩である。

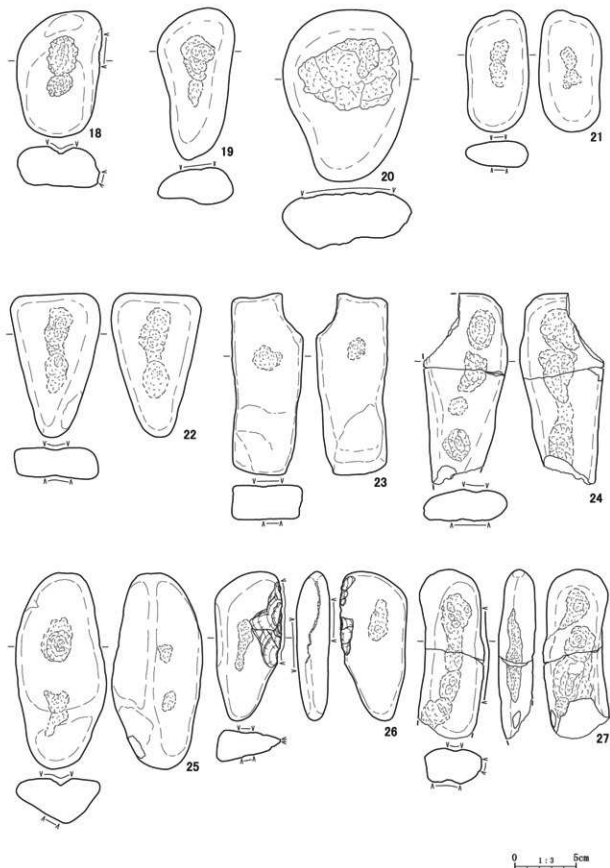
加工痕ある礫（124・125）

124・125 ともに縁辺に剥離痕が連続する。124 は砥石及びたたき石の再加工で、盤状の亜角礫の表面に砥面、裏面に円形の敲打痕が残り、加工痕は左側縁に施されている。125 は不整な亜円礫の上端の両面に加工痕が施され、下端は欠損している。いずれも剥離単位が大きく、縁辺に凹凸がみられる。124 は砂岩、125 は泥岩である。

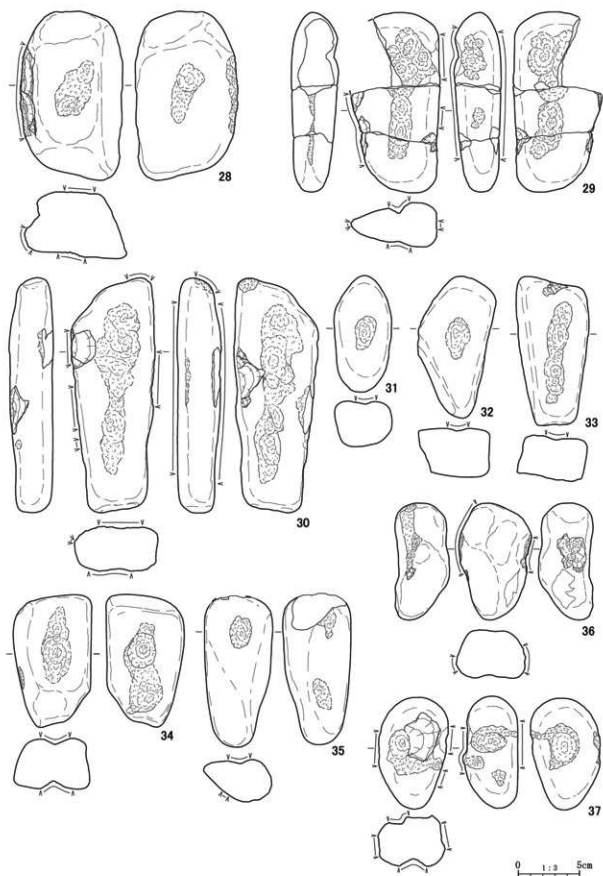
（山田）



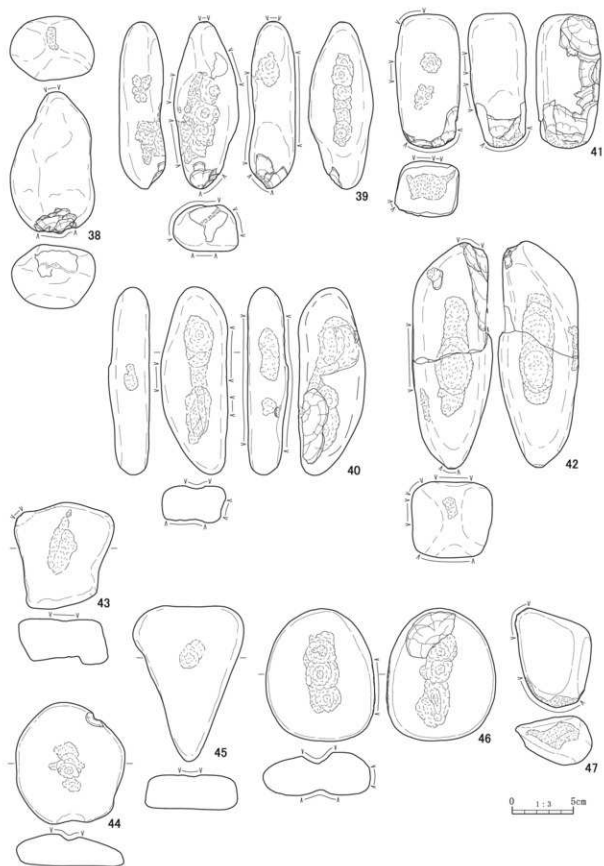
図Ⅲ-17 縄文時代 包含層出土礫石器 (1)



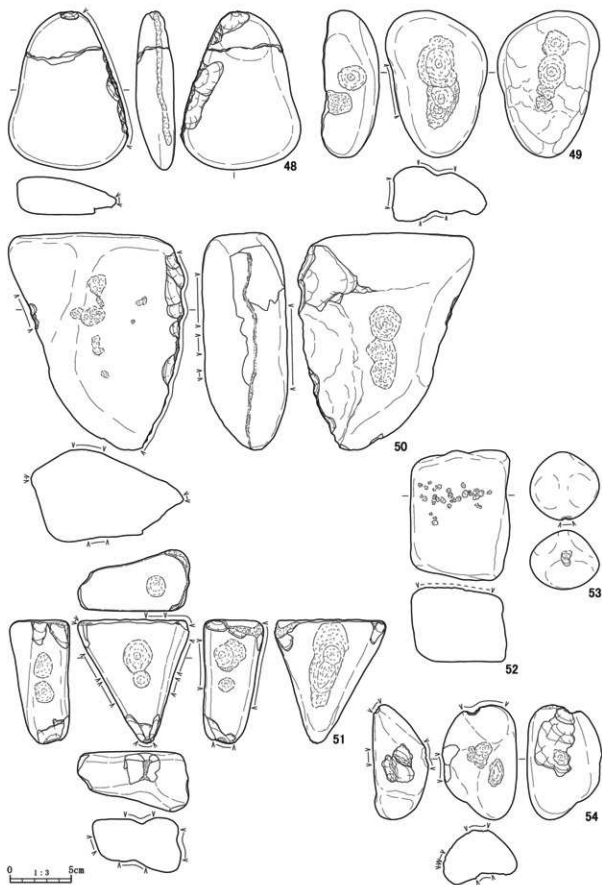
図Ⅲ-18 縄文時代 包含層出土礫石器 (2)



図Ⅲ-19 縄文時代 包含層出土礫石器 (3)



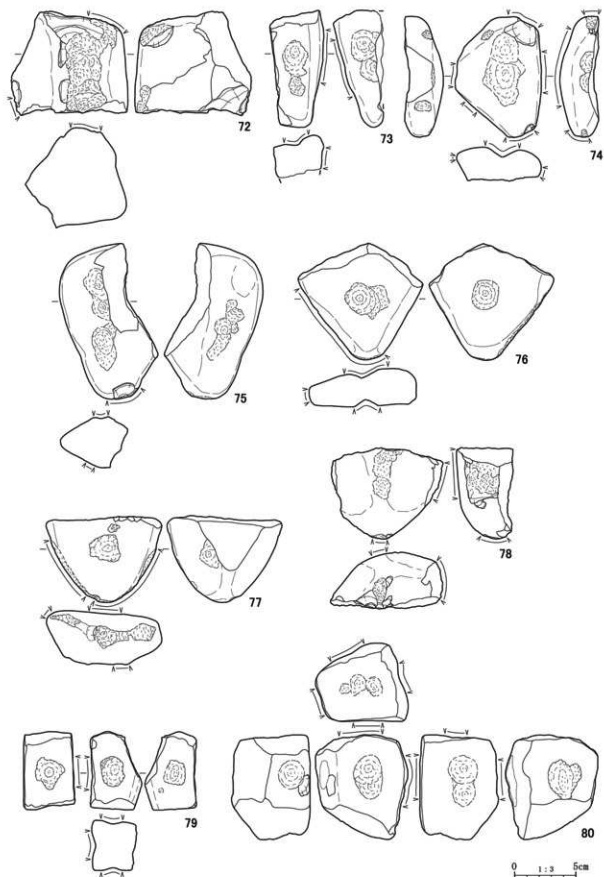
図Ⅲ-20 縄文時代 包含層出土礫石器 (4)



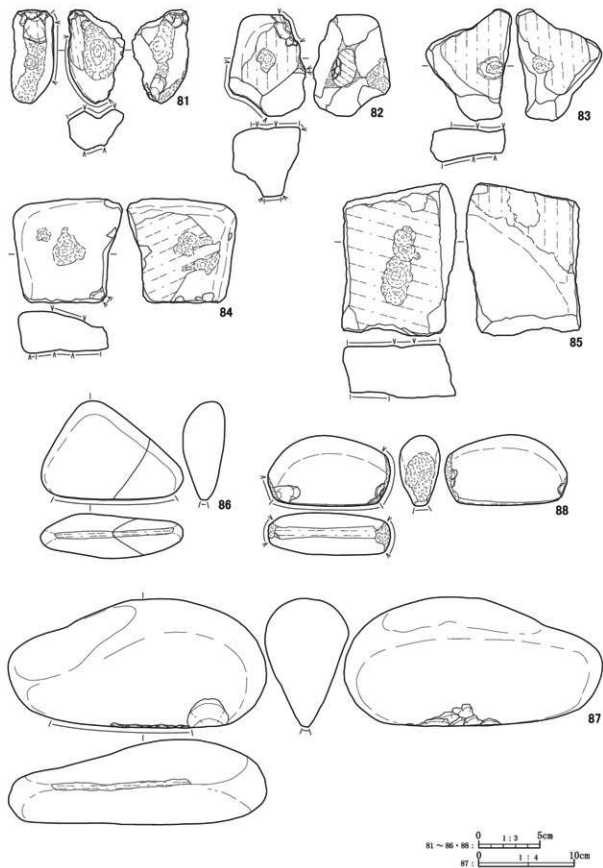
図Ⅲ-21 縄文時代 包含層出土礫石器 (5)



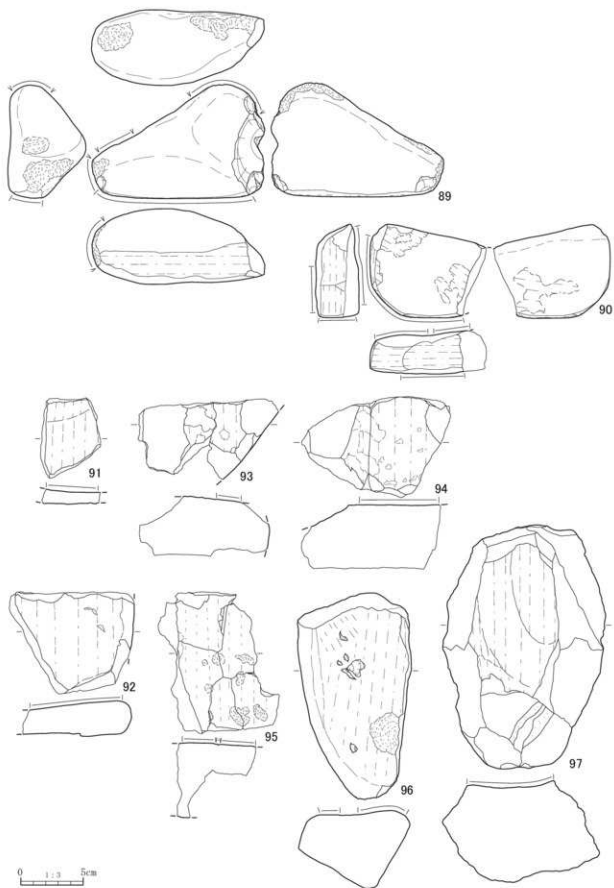
図Ⅲ-22 縄文時代 包含層出土礫石器 (6)



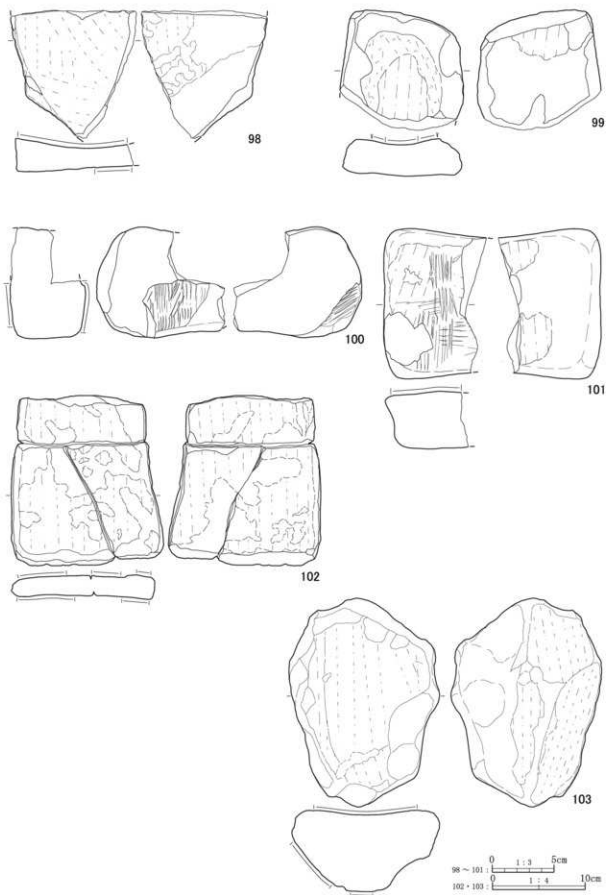
図Ⅲ-23 縄文時代 包含層出土土礫石器 (7)



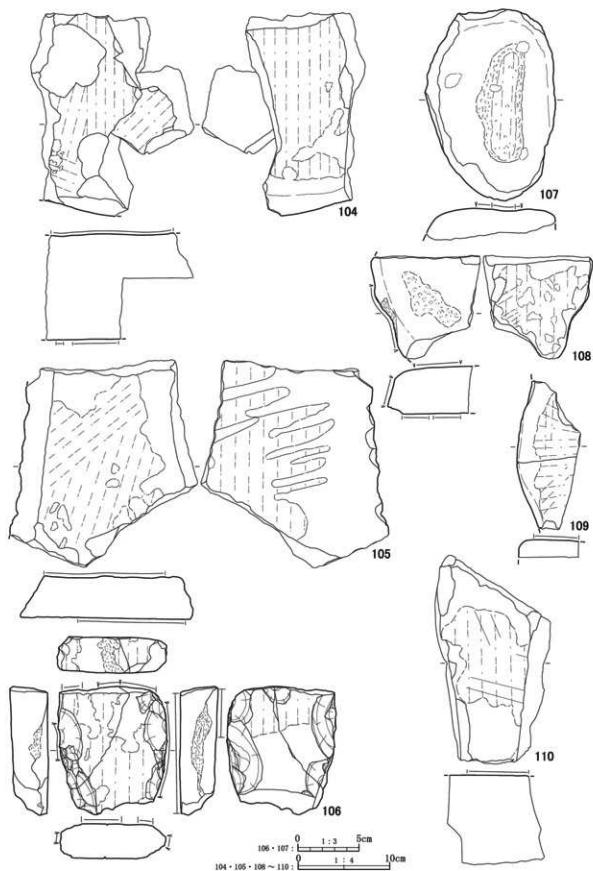
図Ⅲ-24 縄文時代 包含層出土礫石器 (8)



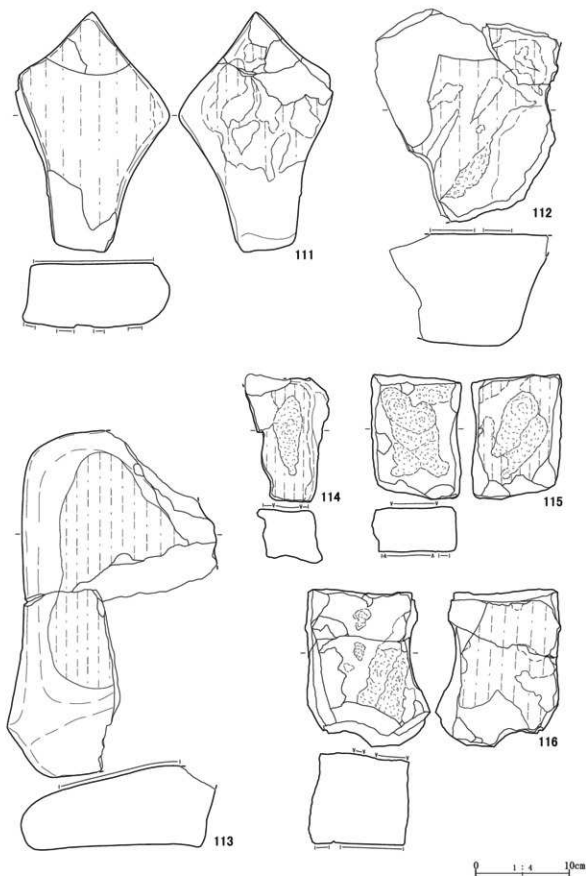
図Ⅲ-25 縄文時代 包含層出土礫石器(9)



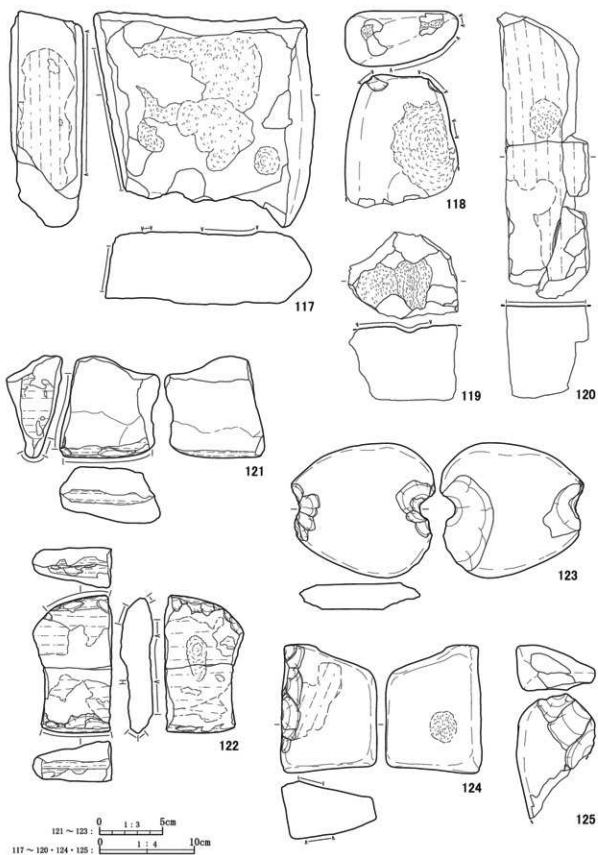
図III-26 縄文時代 包含層出土礫石器 (10)



図Ⅲ-27 縄文時代 包含層出土燧石器 (11)



図Ⅲ-28 縄文時代 包含層出土礫石器 (12)



図Ⅲ-29 縄文時代 包含層出土礫石器 (13)

表III-12 縄文時代包含層出土礫石器属性表(1)

神宮 番号	図版 番号	個体 名称	グリッド	遺物番号	遺物名	分類	層位	計測値(mm)			重量 (g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
Ⅱ-17-1	14-1	-	Y-17	6000	石 斧	I	Vc	67.2	23.8	8.2	18.8	Gsh.	石材同定No.50
Ⅱ-17-2	14-2	-	W-26	6354	石 斧	I	Vc	82.5	28.5	6.8	25.8	Gsh-ss.	石材同定No.51
Ⅱ-17-3	14-3	-	Z-18	11385	石 斧	I	Vc	47.8	28.8	7.6	13.6	Gsh-ss.	石材同定No.52
Ⅱ-17-4	14-4	-	X-17	7922	石 斧	I	Vc	87.7	42.7	48.9	82.5	Gsh.	被熱 石材同定No.53
Ⅱ-17-5	14-5	-	W-26	6333	石 斧	I	Vc	(72.5)	39.9	15.8	(76.5)	Gsh-ss.	石材同定No.54
Ⅱ-17-6	14-6	-	X-27	8693	石 斧	I	VbM	90.0	58.8	24.2	194.4	Gsh-ss.	
Ⅱ-17-7	14-7	VST01	X-27-Y-28	2922,8240	石 斧	I	VbM-VbL	100.8	39.5	25.2	110.0	Gsh-ss.	被熱
Ⅱ-17-8	14-8	-	Y-17	8391	石 斧	Ⅱ	Va	(104.9)	66.0	22.7	(235.0)	Gsh-ss.	石材同定No.55
Ⅱ-17-9	14-9	-	X-18	7864	石 斧	Ⅱ	Vc	(80.0)	24.5	22.9	(98.0)	Gsh-ss.	石材同定No.56
Ⅱ-17-10	14-10	-	Y-18	7616	石 斧	Ⅱ	Vc	85.0	30.4	11.0	25.8	Gsh-ss.	
Ⅱ-17-11	14-11	-	X-28	1128	石 斧	Ⅱ	VbJ	65.0	37.1	16.6	66.1	Gsh-ss.	石材同定No.57
Ⅱ-17-12	14-12	-	W-23	871	石 斧	Ⅱ	VbL	103.6	50.0	24.7	215.0	Gsh-ss.	
Ⅱ-17-13	14-13	-	Z-18	5481	石 斧	Ⅱ	VbU	(78.7)	73.0	31.7	(260.0)	Gsh-ss.	石材同定No.58
Ⅱ-17-14	14-14	-	W-16	11335	石 斧	Ⅲ	Vc	(73.0)	50.0	10.6	(78.4)	Gsh-ss.	石材同定No.59
Ⅱ-17-15	14-15	VST04	Z-16	8891,11764	石斧原材	-	Vl	94.8	33.6	9.8	50.3	Gsh-ss.	
Ⅱ-17-16	14-16	VST02	Z-18	3199,6670	石斧原材	-	VbU	97.0	58.0	20.8	250.0	Gdo.	石材同定No.60
Ⅱ-17-17	14-17	-	Y-17	9157	石斧原材	-	VbL	115.0	49.0	65.4	550.0	Gsh-ss.	石材同定No.61
Ⅱ-18-18	15-18	-	X-18	1276	たたく石	I D	VbU	103.7	69.0	34.5	320.0	Sa.	
Ⅱ-18-19	15-19	-	X-28	3459	たたく石	I A	VbL	123.5	60.7	30.9	290.0	Sa.	被熱
Ⅱ-18-20	15-20	-	W-16	9074	たたく石	I A	VbU	139.5	104.5	41.8	820.0	Sa.	被熱
Ⅱ-18-21	15-21	-	Y-27	3961	たたく石	I B	VbL	99.0	51.2	23.9	180.0	Sa.	被熱
Ⅱ-18-22	15-22	-	Z-18	5089	たたく石	I B	VbL	116.7	72.8	25.6	310.0	Sa.	
Ⅱ-18-23	15-23	-	W-15	11133	たたく石	I B	VbU	149.8	59.6	30.5	420.0	Sa.	
Ⅱ-18-24	15-24	VST13	Y-17-Z-19	4389,6498	たたく石	I B	VbL-Vc	(155.3)	67.9	35.1	(390.0)	Sa.	
Ⅱ-18-25	15-25	-	X-29	7939	たたく石	I B	Vl	100.6	72.1	44.2	500.0	Sa.	
Ⅱ-18-26	15-26	-	X-15	8094	たたく石	I D	Vc	123.9	56.6	27.5	181.9	Sa.	
Ⅱ-18-27	15-27	VST29	X-17	4325,7049	たたく石	I D	VbL-Vc	(137.0)	49.5	31.8	(270.0)	Sa.	
Ⅱ-19-28	15-28	-	X-29	2264	たたく石	I D	VbL	132.2	84.0	53.0	830.0	Sa.	
Ⅱ-19-29	15-29	VST33	W-26-X-28	1150,6049, 8588	たたく石	I D	VbL-VbM	148.8	72.2	37.8	390.5	Sa.	
Ⅱ-19-30	15-30	-	Z-16	8394	たたく石	I D	Va	195.0	67.7	37.0	770.0	Sa.	
Ⅱ-19-31	15-31	-	W-26	4902	たたく石	ⅡA	VbM	95.8	46.2	39.1	248.0	Sa.	被熱
Ⅱ-19-32	15-32	-	Z-17	9190	たたく石	ⅡA	VbL	114.8	56.9	40.4	360.0	Sa.	
Ⅱ-19-33	15-33	-	W-17	4298	たたく石	ⅡA	VbL	123.6	57.4	39.4	410.0	Sa.	
Ⅱ-19-34	15-34	-	X-27	8686	たたく石	ⅡB	VbM-VbL	104.2	64.2	43.0	390.0	Sa.	
Ⅱ-19-35	15-35	-	Z-28	1644	たたく石	ⅡB	VbU	123.0	54.0	42.0	290.0	Sa.	
Ⅱ-19-36	15-36	-	Z-19	4382	たたく石	ⅡC	VbL	95.0	56.8	47.0	250.0	Sa.	被熱
Ⅱ-19-37	15-37	-	Y-28	3385	たたく石	ⅡD	VbL	91.1	53.1	45.0	265.0	Sa.	
Ⅱ-20-38	15-38	-	Z-17	10871	たたく石	ⅡC	VbL	115.2	69.1	46.6	520.0	Gra.	
Ⅱ-20-39	15-39	-	W-17	7893	たたく石	ⅡD	Vc	136.2	50.9	36.2	290.0	Sa.	
Ⅱ-20-40	15-40	-	X-15	11687	たたく石	ⅡD	Vc	153.6	54.4	32.6	365.0	Sa.	
Ⅱ-20-41	15-41	-	Y-28	2781	たたく石	ⅡD	VbL	108.4	50.5	46.8	380.0	Sa.	
Ⅱ-20-42	15-42	VST18	Y-18	3175,7651	たたく石	ⅡD	VbU	185.7	65.9	57.5	925.0	Sa.	被熱
Ⅱ-20-43	16-43	-	Y-27	5925	たたく石	ⅢA	VbM	83.4	78.2	38.4	250.5	Sa.	
Ⅱ-20-44	16-44	-	Y-27	10762	たたく石	ⅢA	VbM	99.3	91.5	25.4	260.0	Sa.	
Ⅱ-20-45	16-45	-	W-15	10957	たたく石	ⅢA	VbL	128.9	86.6	23.8	360.0	Sa.	
Ⅱ-20-46	16-46	-	X-27	4742	たたく石	ⅢB	VbM	107.2	89.4	36.4	360.0	Sa.	
Ⅱ-20-47	16-47	-	X-15	12030	たたく石	ⅢC	Vc	78.0	65.1	38.9	200.0	Sa.	
Ⅱ-21-48	16-48	VST34	Z-16	11054,11558	たたく石	ⅢC	VbL	128.4	97.7	31.2	400.0	Sa.	
Ⅱ-21-49	16-49	-	Y-27	3959	たたく石	ⅢD	VbM	121.0	83.2	43.6	485.0	Sa.	被熱
Ⅱ-21-50	16-50	-	Y-27	6278	たたく石	ⅢD	VbM	169.0	139.0	64.4	1760.0	Sa.	
Ⅱ-21-51	16-51	-	X-17	5670	たたく石	ⅢD	VbL	101.4	91.3	47.6	400.0	Sa.	
Ⅱ-21-52	16-52	-	W-28	1292	たたく石	ⅣA	VbU	106.3	78.4	62.3	883.0	Sa.	
Ⅱ-21-53	16-53	-	Z-18	8584	たたく石	ⅣC	Vl	53.6	51.8	48.7	152.0	Sa.	
Ⅱ-21-54	16-54	-	X-26	8151	たたく石	ⅣD	VbM	91.8	61.5	43.3	250.0	Sa.	
Ⅱ-22-55	16-55	-	Y-19	6912	たたく石	V A	Vc	70.3	51.9	22.8	120.0	Sa.	被熱
Ⅱ-22-56	16-56	-	X-28	3761	たたく石	V A	VbL	73.1	62.3	25.8	150.0	Sa.	被熱
Ⅱ-22-57	16-57	-	X-28	2916	たたく石	V A	VbL	74.6	72.3	16.3	110.0	Sa.	被熱
Ⅱ-22-58	16-58	-	Y-28	1703	たたく石	V A	VbU	71.9	82.7	20.4	170.0	Sa.	被熱
Ⅱ-22-59	16-59	-	Z-28	4852	たたく石	V A	VbL	92.0	51.8	43.2	230.5	Sa.	
Ⅱ-22-60	16-60	-	T-25	12103	たたく石	V A	VbM	83.9	62.2	49.1	430.0	Sa.	
Ⅱ-22-61	16-61	-	Y-16	10058	たたく石	V A	Vc	92.4	77.5	52.4	420.0	Sa.	
Ⅱ-22-62	16-62	-	Y-16	10057	たたく石	V A	Vc	104.2	75.9	38.8	230.5	Sa.	
Ⅱ-22-63	16-63	-	X-15	8386	たたく石	V A	Va	113.6	68.6	57.2	713.0	Sa.	

表Ⅲ-13 縄文時代包含層出土礫石器属性表(2)

種別 番号	図版 番号	個体 名称	グリッド	遺物番号	遺物名	分類	層位	計測値(mm)			重量 (g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
22-64	16-64	-	W-16	10209	たたき石	VB	Vbl.	70.4	44.4	29.5	140.0	Sa.	
22-65	16-65	-	W-16	10207	たたき石	VB	Vbl.	67.0	59.4	27.9	140.0	Sa.	被熱
22-66	16-66	-	W-28	457	たたき石	VB	Vbl.	69.7	60.6	32.1	170.0	Sa.	被熱
22-67	16-67	-	Y-18	6413	たたき石	VB	Ve	71.6	64.2	23.0	210.5	Sa.	被熱
22-68	16-68	-	X-16	9926	たたき石	VB	Vbl.	101.3	71.6	33.6	260.0	Sa.	
22-69	16-69	-	X-17	7953	たたき石	VB	Ve	91.3	69.1	27.6	190.0	Sa.	
22-70	17-70	-	Y-28	2992	たたき石	VB	Vbl.	74.2	85.2	39.1	290.5	Sa.	
22-71	17-71	-	Y-28	2983	たたき石	VB	Vbl.	69.5	68.0	33.5	150.5	Sa.	被熱
23-72	17-72	-	W-27	4983	たたき石	VC	VbM	81.0	100.5	78.3	730.5	Sa.	被熱
23-73	17-73	-	X-28	3783	たたき石	VD	Vbl.	95.3	47.3	39.7	150.5	Sa.	
23-74	17-74	-	Z-27	8272	たたき石	VD	VbM	98.5	71.2	29.0	220.0	Sa.	
23-75	17-75	-	W-28	3317	たたき石	VD	Vbl.	121.9	59.9	44.0	340.5	Sa.	被熱
23-76	17-76	-	Y-27	6300	たたき石	VD	VbM	83.9	92.6	32.1	310.0	Sa.	
23-77	17-77	-	X-28	1299	たたき石	VD	Vbl.	67.3	94.9	41.9	300.0	Sa.	
23-78	17-78	-	W-16	10417	たたき石	VD	Vbl.	80.6	92.5	45.7	300.0	Sa.	
23-79	17-79	-	Y-27	2658	たたき石	VD	Vbl.	61.5	37.2	41.7	160.5	Sa.	
23-80	17-80	-	W-16	10318	たたき石	VD	Vbl.	71.7	82.6	65.9	470.0	Sa.	
24-81	17-81	-	Z-16	11399	たたき石	VI	Ve	78.5	49.8	33.3	120.0	Sa.	
24-82	17-82	-	X-17	10444	たたき石	VI	VI	81.0	67.5	36.6	300.0	Sa.	被熱
24-83	17-83	-	Z-27	10550	たたき石	VI	VbM	90.3	79.0	32.8	170.0	Sa.	
24-84	17-84	-	W-18	7322	たたき石	VI	Ve	90.2	84.3	37.8	355.0	Sa.	
24-85	17-85	-	W-27	3683	たたき石	VI	Vbl.	115.6	92.1	48.2	815.0	Sa.	
24-86	17-86	VST39	W-15	10972,11345	すり石	I	Vbl.-Ve	80.0	115.9	33.9	369.0	Sa.	
24-87	17-87	-	X-17	5678	すり石	I	Vbl.	140.0	270.0	70.5	1,570.0	Sa.	
24-88	17-88	-	Z-18	7378	すり石	I	VI	95.6	56.1	34.8	290.0	Sa.	被熱
25-89	17-89	-	W-26	653	すり石	I	Vbl.	91.4	143.2	60.6	810.0	Sa.	
25-90	17-90	-	S-22	12075	すり石	II	Vbl.	73.0	90.5	32.8	278.0	Sa.	被熱
25-91	18-91	-	Y-18	6615	砥石	IA	Ve	69.1	55.5	12.2	50.0	Sa.	
25-92	18-92	-	X-17	7496	砥石	IA	VI	81.1	100.5	27.5	270.0	Sa.	
25-93	18-93	VST43	X-28	1217-1222	砥石	IA	Vbl.	62.99	(114.3)	49.2	3947.0	Sa.	
25-94	18-94	VST07	X-17	5595-8906	砥石	IA	Vbl.	78.90	122.7	54.8	550.0	Sa.	
25-95	18-95	VST12	Y-15	11444,11452, 11453,11719, 12009	砥石	IA	Ve	112.9	79.0	68.3	562.0	Sa.	
25-96	18-96	-	X-17	9331	砥石	IA	Ve	100.8	88.5	67.4	935.0	Sa.	
25-97	18-97	-	X-18	7238	砥石	IA	Ve	200.1	120.0	76.1	2160.0	Sa.	
26-98	18-98	-	W-26	7715	砥石	IB	VbM	(110.1)	99.1	26.4	310.0	Sa.	
26-99	18-99	-	Y-27	6298	砥石	IB	VbM	95.6	99.3	32.3	350.0	Sa.	
26-100	18-100	VST44	W-16-Z-28	4426,10413	砥石	IB	VbM-Vbl.	90.0	(102.0)	53.0	(420.5)	Sa.	
26-101	18-101	-	Y-27	6292	砥石	IB	VbM	119.8	(70.0)	50.1	(714.0)	Sa.	
26-102	18-102	-	Z-27	7749-1	砥石	IB	VbM	190.0	160.4	24.8	1065.0	Sa.	
26-103	18-103	-	Y-27	8856	砥石	IB	VbM	230.0	160.3	85.0	3040.0	Sa.	
27-104	19-104	VST16	Y-28	2763,4521	砥石	IB	VbM-Vbl.	220.9	(160.4)	118.4	(4695.0)	Sa.	被熱
27-105	19-105	-	X-15	11118	砥石	IB	Vbl.	230.0	200.5	45.6	2900.0	Sa.	
27-106	19-106	VST14	W-26-27	403,6311	砥石	IC	VbM-Ve	103.4	87.9	30.9	397.0	Sa.	
27-107	19-107	-	Y-28	4548	砥石	IIA	VbM	160.0	104.7	26.5	525.0	Sa.	
27-108	19-108	-	Y-27	10790	石皿	I	VbM	(118.6)	120.4	56.4	923.0	Sa.	
27-109	19-109	VST46	Y-15	10910,11437	石皿	I	Vbl.-Ve	(160.3)	65.7	19.2	265.0	Sa.	
27-110	19-110	-	Z-19	6470	石皿	I	Ve	220.8	120.5	98.2	3080.0	Sa.	
28-111	19-111	VST21	X-29-Y-28	2270,3416, 4848	石皿	I	Vbl.	257.0	147.0	68.2	3070.0	Sa.	
28-112	19-112	VST19	W-29	132,179	石皿	II	Vbl.-Vbl.	224.0	195.1	123.1	4980.0	Sa.	
28-113	19-113	VST45	Y-28-Z-18	3414,10986	石皿	III	Vbl.	(370.0)	213.3	109.3	(6460.0)	Sa.	
28-114	20-114	-	Z-28	3267	台石	I	Vbl.	132.0	99.6	61.3	378.0	Sa.	
28-115	20-115	-	Y-28	3413	台石	I	Vbl.	129.5	96.8	52.1	1070.0	Sa.	
28-116	20-116	VST22	X-29	1375,2269, 4833	台石	I	Vbl.-Vbl.	170.2	113.1	102.8	2980.0	Sa.	被熱
29-117	20-117	-	Z-17	8412	台石	I	Ve	230.7	220.4	74.7	5460.0	Sa.	
29-118	20-118	-	W-16	9067	台石	II	Vbl.	139.2	121.0	58.2	1163.0	Sa.	
29-119	20-119	-	Y-27	3983	台石	IV	VbM	96.2	113.9	82.4	900.0	Sa.	被熱
29-120	20-120	VST08	Y-17-18 Z-17	6702,9439, 9766,9833	台石	IV	Vbl.-Ve	306.0	(120.9)	87.1	(3780.0)	Sa.	被熱
29-121	20-121	-	W-27	291	石鏝	-	Vbl.	81.1	71.5	38.9	226.0	Sa.	
29-122	20-122	VST49	W-18-Y-15	7991,11436	石鏝	-	Ve	106.7	60.8	29.8	235.0	Sa.	
29-123	20-123	-	X-17	9332	石鏝	-	Ve	113.3	106.5	19.9	310.0	Sa.	
29-124	20-124	-	Y-18	3176	加工痕ある礫	-	Vbl.	134.6	100.1	65.2	1115.0	Sa.	
29-125	20-125	-	Z-18	3209	加工痕ある礫	-	Vbl.	132.5	83.2	48.2	450.0	Mud.	

第IV章 まとめ

第1節 総括

観内5遺跡は厚真川左岸の標高60～55mの地点に立地している。本来の地形は標高約60mある小高い丘陵を挟んで東西に沢地が形成されていたことが推察できる。

縄文時代の遺構はTピット1基のほか、フレイク・チップ集中、炭化物集中を検出しているが、住居跡や土坑、焼土といった生活に関連する遺構は見つかっていない。遺物に関しては第三章で述べたように、A・B地区両側の斜面に12,460点出土し、そのうちB地区斜面には5,760点と約半数出土している。遺物出土量はA地区が多いが、遺物出土密度を比較すると、B地区は29ラインまでまとまって出土しているため、濃い分布域を示している。遺物が密集して出土する地点及び層位については、第三章第1節で述べたようにVb層下位からVc層にかけてTa-dパミスを少量から多量に含むVbm層が確認されている。出土する土器については縄文時代前期前葉の尖底土器群が主体で、器面や口唇部の調整から春日町式系土器、静内中野式土器に分類される。また、これら土器に伴って被熱した破砕礫も出土し、礫石器は755点（B地区）と多く出土していることも本遺跡の特徴である。

B地区に分布するTa-dパミスとV層の混土については、供給源が丘陵頂部と推定でき、こうした分布状態については、丘陵頂部のTa-dパミス堆積状態から整地に伴う削平が考えられる。以下に整地に伴う削平について若干の考察を述べる。

第2節 整地に伴う排土について

B地区斜面の25～28ラインのおよそ10～12mの範囲で、V層中にTa-dパミスを多く含む層（Vbm層）を確認した。V層包含層中にTa-dが混入することは、倒木や掘り上げ土などの影響を想定できるが、遺物の出土状態から倒木痕とは無関係であることがわかる。そこで、住居掘り上げ土の分布も考慮したが、周辺から住居跡及び土坑のような掘り上げ土を伴う遺構は検出されていない。また、遺物を大量に伴う遺構で盛土遺構の可能性も考えられたが、以下の所見から整地に伴う排土層と考え報告を行っている。

1. Vbm層が斜面に沿って堆積している。

堆積から盛るという行為よりは、斜面に投棄しているという状態であり、主目的が土を盛ることではなく丘陵部を削ることと考えられる。丘陵部を削平した排土は、丘陵縁辺部に沿ってB地区側に投棄され、トレンチ調査の結果では46mの範囲にわたってVbm層が認められる。この2次堆積するVbm層は幅約10m、厚さ0.2m前後で、斜面に一定量以上の堆積は認められない。

2. 調査区中央の丘陵頂部にTa-dが堆積していない地点が認められる。

B地区斜面に堆積するTa-dパミスの供給源を考える上で、重要な堆積を示している。先述したように掘り上げ土を伴う遺構が認められないことから、供給源は丘陵頂部のTa-dであることが想定される。幅およそ8.2mの範囲でTa-dの堆積が5～15cmと薄くなり、一部はV層下位がIX層になっている地点も認められる。

これらの堆積状態から丘陵頂部のVc層・VI層・VII層（Ta-dパミス含む）を削平した排土が、Ta-dパミスを少量から多量含む結果となってB地区（西側）斜面に投棄した可能性が考えられる。

3. 調査区外のトレンチ

VbM層の分布範囲を確認する目的で調査区外の丘陵部分に6ヶ所、調査区南側の畑地に1ヶ所のトレンチ調査を行っている。

調査の結果ではM-TR6・7にTa-dパミスを多く含むVbM層を確認しており、整地に伴う排土層が標高約59mラインでより北側に延びることが確認されている。しかし、Ta-dの供給源と推定された地点に位置するM-TR1・4にはTa-dが40cm以上認められる標準堆積を示しており、部分的な削平が行われているか、削平地点から外れていたかの詳細は不明である。可能性としては現代の畑地造成により削平された地点から供給されたことも考えられるが、あくまでも想像の域を超えないものである。また、M-TR8にもVbM層の堆積が確認されていることから、丘陵部の整地は南側まで範囲が延び、かなり広範囲にわたって行われていた可能性も考えられる。

以上の事から本遺構については盛土という用語を用いず、主目的が整地をすることであったと理解しているため、2次的に堆積するVbM層は結果的に斜面に堆積した排土層と捉えている。時代的には縄文時代前期前葉の尖底土器群（春日町式、静内中野式）で、VbM層の基底面もVc層中またはVc層上に位置しているのが矛盾していない。土器についてはやや時期差が確認されるが、今回の調査では出土層位ごとに区分するまで至っていない。

第3節 土器

梶内5遺跡の調査では縄文時代前期前葉の尖底土器が主体的に出土している。今回の報告では口唇部の特徴（調整）や文様調整から春日町式系土器と静内中野式土器に分類して報告している。

分類にあたっては現場段階での層位的所見も考慮したが、V層からVI層にかけて前期土器群が混在して出土し、B地区で検出したTa-dパミスを含む排土層からも特徴的な出土状態は認められない。

縄文時代前期の土器分類については以下の特徴で報告を行った。

春日町式系土器（Ⅱ群A1類）

- ・口唇部 内側が隅丸角状、外側が角状で丁寧に整形されている。ミガキに近いナデ整形。
- ・口縁部～胴部 横位の単節縄文構成が認められる。器表面も縄文施文後にナデ調整されている。
- ・内面の調整 工具調整され凹凸が少なく丁寧。
- ・胎土 繊維、砂粒、砂礫を含むが、捺糸は認められない。
- ・その他 結束、複節が認められる。

静内中野式土器（Ⅱ群A2b類）

- ・口唇部 丸状から隅丸角状に整形されるがやや粗雑で凹凸が目立つ。口唇部に向かって薄くなる。
- ・口縁部～胴部 単節斜行縄文が主体。
- ・内面調整 弱いナデ整形で凹凸が目立つ。
- ・胎土 繊維、砂粒、砂礫のほか捺糸を含む。

今回は静内中野式土器より一段階古いトピノ式土器に分類を行っていない。口縁部の調整が角状に整形され、地文に結束が認められるなど共通の特徴は認められるが、羽状縄文は出土しておらず、型式設定が安定していないため、道南で時期編年が確立している春日町式土器と対比させ、本遺跡の前期における位置づけを行った。

（奈良）

幌内5遺跡(1)

写真図版

図版1



1. B地区斜面断面(S→)



2. A地区斜面断面(SE→)



3. 調査区頂部断面(S→)



4. 調査区頂部Ta-dテフラ堆積状態(S→)



5. A地区斜面調査状況(N→)



6. B地区調査状況(NW→)



7. B地区斜面調査状況(NE→)



8. 調査区頂部旧石器確認調査(W→)

図版2



1. III P-01完掘(N→)



2. III P-01断面(N→)



3. TP-01完掘(SW→)



4. TP-01断面(S→)



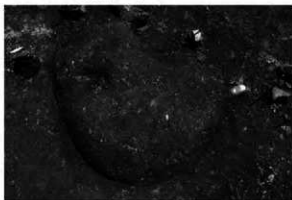
5. VCB-01検出(SE→)



6. VCB-01断面(S→)



7. VCB-02検出(NW→)



8. VCB-03検出(NW→)

図版3



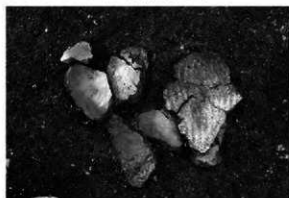
1. VFCB-01検出(NE→)



2. VPB-01・VSB-01検出(NE→)



3. VPB-01・VSB-01出土状態(SW→)



4. VPB-01出土状態(S→)



5. B地区斜面 遺物出土及び埴土分布状態(SW→)

図版4



1. 削平確認TR1断面(S→)



2. 削平確認TR2断面(S→)



3. 削平確認TR4断面(S→)



4. 削平確認TR5断面(S→)



5. 削平確認TR6断面(SW→)



6. 削平確認TR7断面(SW→)



7. 削平確認TR8断面(N→)

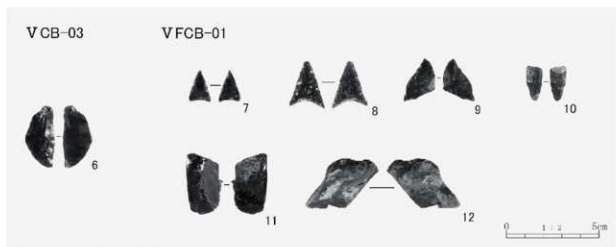


8. 頂部旧石器確認
TR断面(S→)

図版5



1. 続縄文・擦文文化期包含層出土石器



2. VCB-03・VFCB-01出土石器



3. VPB-01出土土器

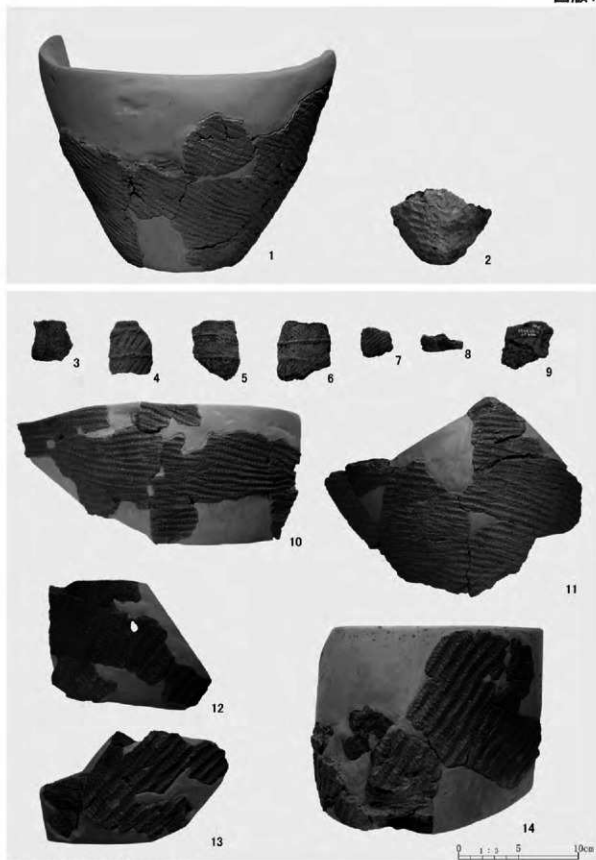


図版6



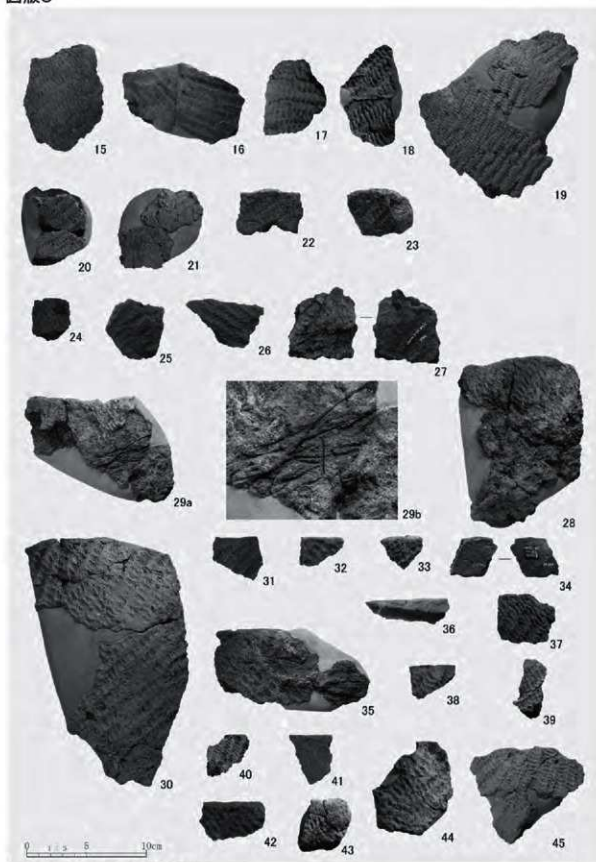
1. VSB-01出土石器

図版7



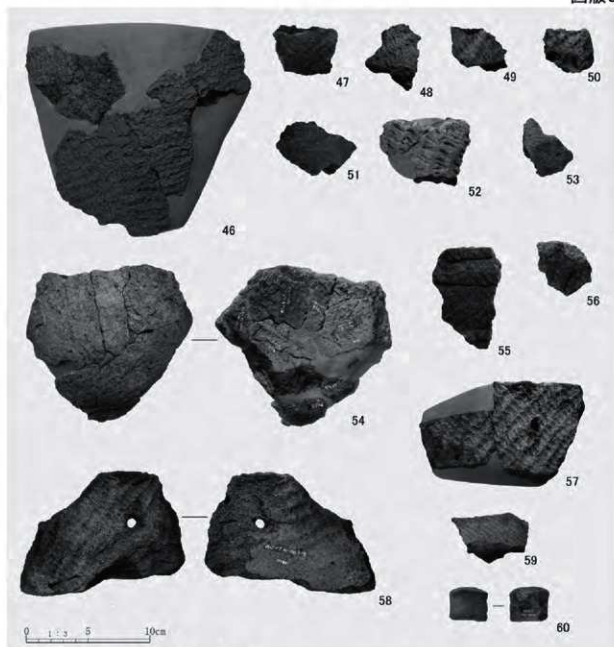
1. 縄文時代包含層出土土器(1)

图版8



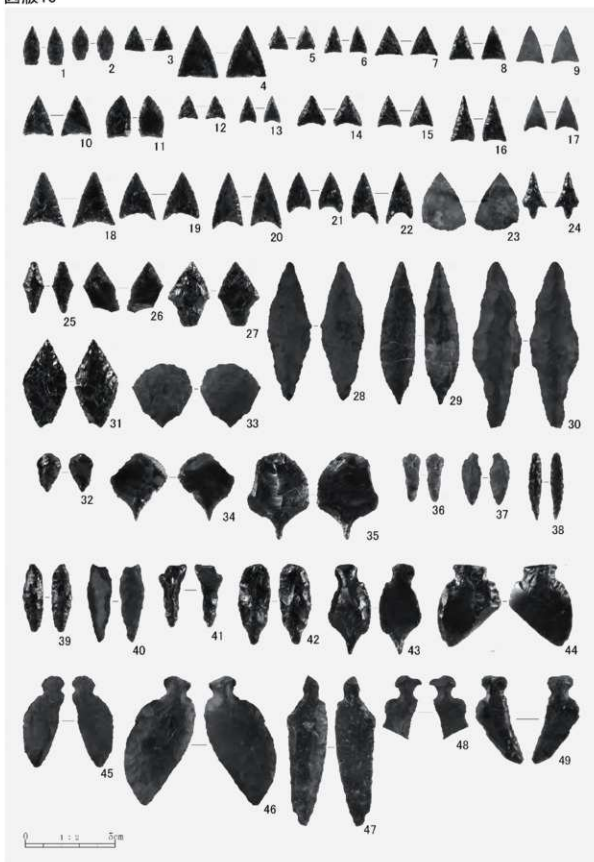
1. 縄文時代包含層出土土器(2)

図版9



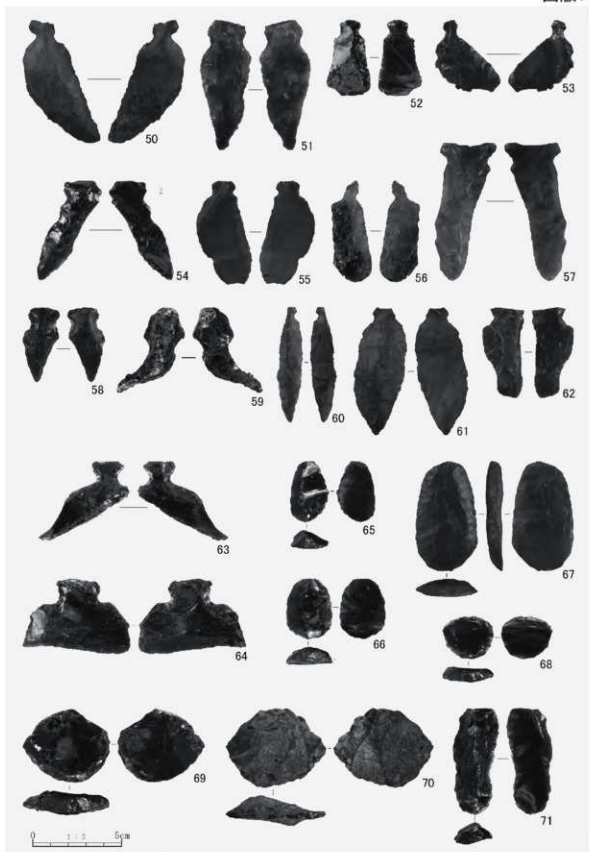
1. 縄文時代包含層出土土器(3)・土製品

図版10



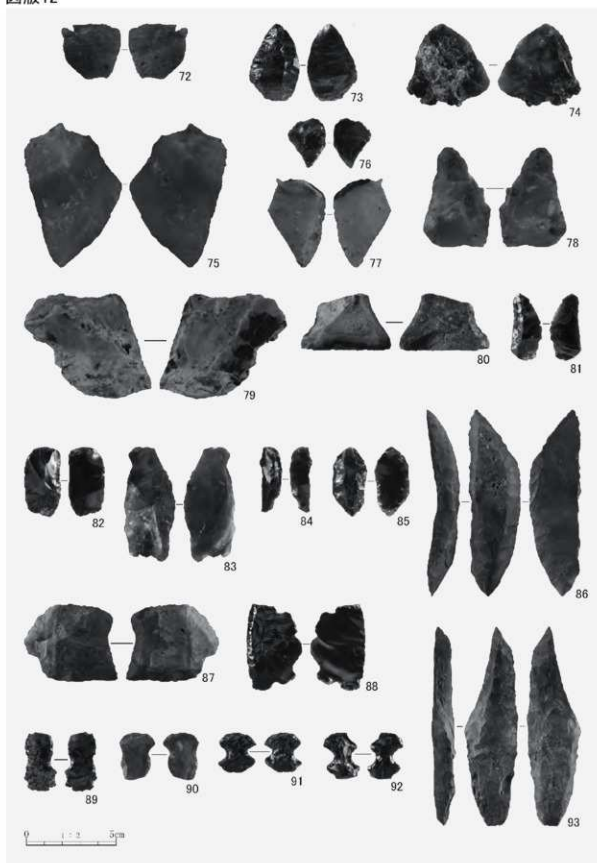
1. 縄文時代 包含層出土剥片石器(1)

図版11



1. 縄文時代 包含層出土剥片石器(2)

図版12



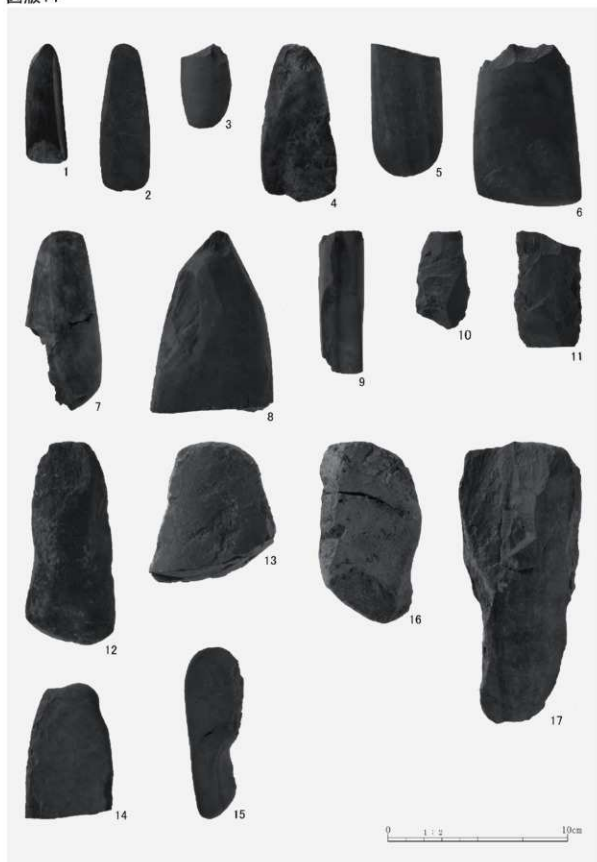
1. 縄文時代 包含層出土剥片石器(3)

図版13



1. 縄文時代 包含層出土剥片石器(4)

図版14



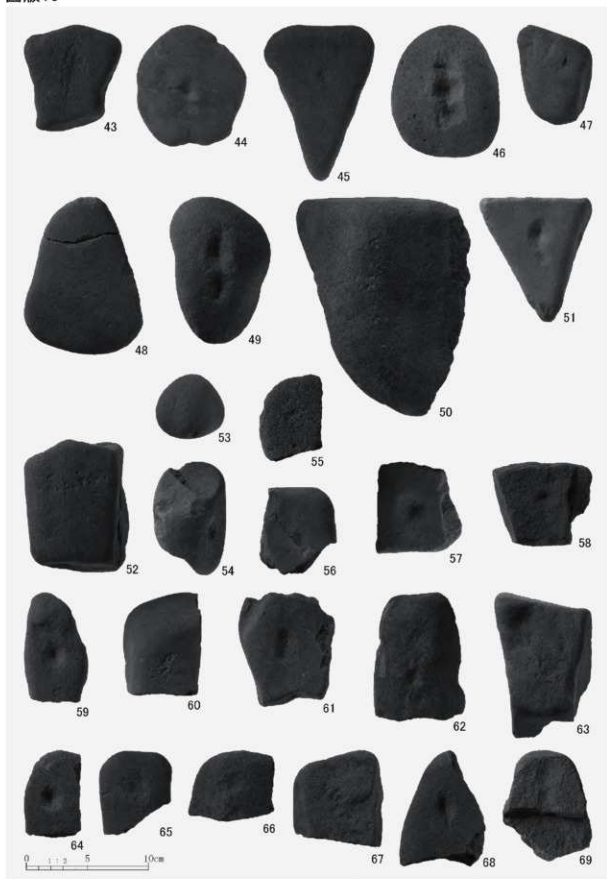
1. 縄文時代 包含層出土石器(1)

図版15



1. 縄文時代 包含層出土礫石器(2)

図版16



1. 縄文時代 包含層出土燧石器(3)

図版17



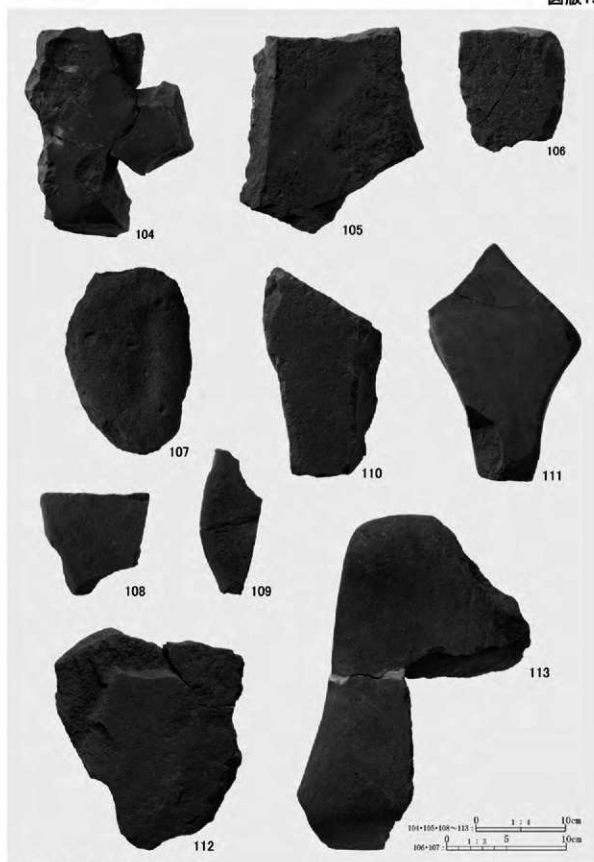
1. 縄文時代 包含層出土燧石器(4)

図版18



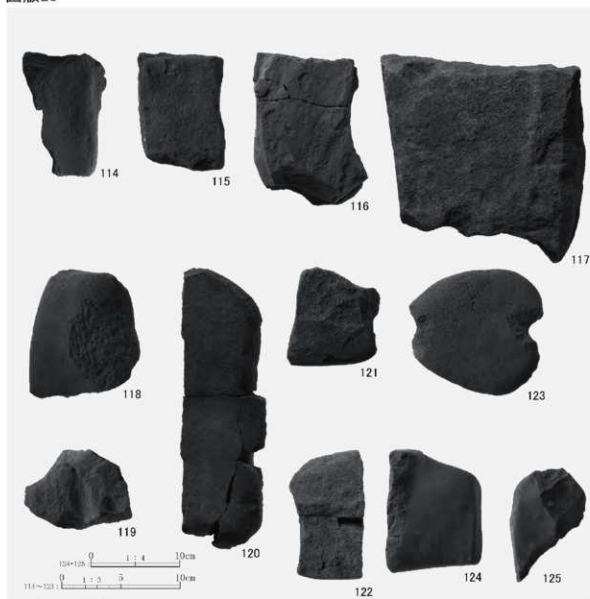
1. 縄文時代 包含層出土礫石器(5)

図版19



1. 縄文時代 包含層出土燧石器(6)

図版20



1. 縄文時代 包含層出土礫石器(7)



2. 畑地造成時出土金属製品(平成3年)

第3部

富里 2 遺跡

第1章 調査の概要

第1節 調査要項と経緯

1. 調査要項

遺跡名：富里2遺跡（J-13-106）

所在地：北海道勇払郡厚真町字富里389-1

調査面積：770㎡

調査期間：（発掘）平成21年7月17日～平成21年10月30日

（整理）平成21年11月1日～平成22年3月16日

調査体制：第1部第1章第1節2に同じ。

2. 発掘調査までの経緯

富里2遺跡は、平成16年度に開発事業所によって富里地区の厚真川左流域左岸、沖積低地との比高差約4mの河岸段丘上に4区用水路を切替敷設する路線で設計されたことから始まる。平成17年4月に道教委によって所在確認調査が実施され、厚真川左岸の河岸段丘上の約160mにわたって「要試掘調査」の回答がされた（平成17年6月13日付教文第786号）。試掘調査も道教委によって平成18年4月20日に実施され、8ヶ所のトレンチが掘開されうち6ヶ所から集石や獣骨（Ⅲ層）と縄文後期土器片（Ⅴ層）が出土した（図I-1表I-1）。回答は導水路設計センターの延長で150mの要発掘調査となった（平成18年4月25日付教文第333号）。合わせて新規発見の包蔵地であることから、登載手続も道教委によって、富里2遺跡と登載された（平成18年4月25日付教文第305号）。試掘調査の結果から開発事業所とルート変更の協議をおこなった。4区用水路のうち本区域は直径60cmのパイプライン方式で調圧施設を建設することから、台地上の建設用地が不可欠で設計変更は不可能であり、発掘調査による記録保存とすることで合意した。調査面積の概算は用水路敷設施工の掘削幅2.9mとして、延長150mの435㎡の調査範囲が計画された。

発掘調査年度は、開発事業所と4区用水路の敷設工事計画を踏まえた上での協議を進め、平成20年度以降に敷設工事着工となった。その後、着工計画は未定であるが、比較的近位置にある幌内5遺跡の施工計画に合わせた発掘調査を平成21年度に行うことから、あわせて調査を実施することとなった。詳細設計の結果、調査面積は幅3.2m、延長150mで、長軸19.6m、短軸16.6mの調圧施設部分を含めた約735㎡となった。

これに続き文化財保護法94条第1項の土木工事の通知が室開建より町教委を経て道教委へ提出された（平成21年3月23日付室建用第937号）。

第2節 調査の方法

1. 調査区の設定

富里2遺跡の発掘調査区は平成18年4月に実施された試掘調査結果、道教委からの回答通知に従い、4区用水路と付随する調圧施設の掘削範囲を含むものである。なお掘削範囲は現地表面での法面上端ラインである（図I-1）。現地における調査区の設定は、伐採、表土除去前に開発事務所の設計に従い（有）幅田測量設計へ委託した。委託設置杭は13本で、世界測地系XY座標とZ座標の移設も行っている（図I-3表I-2）。

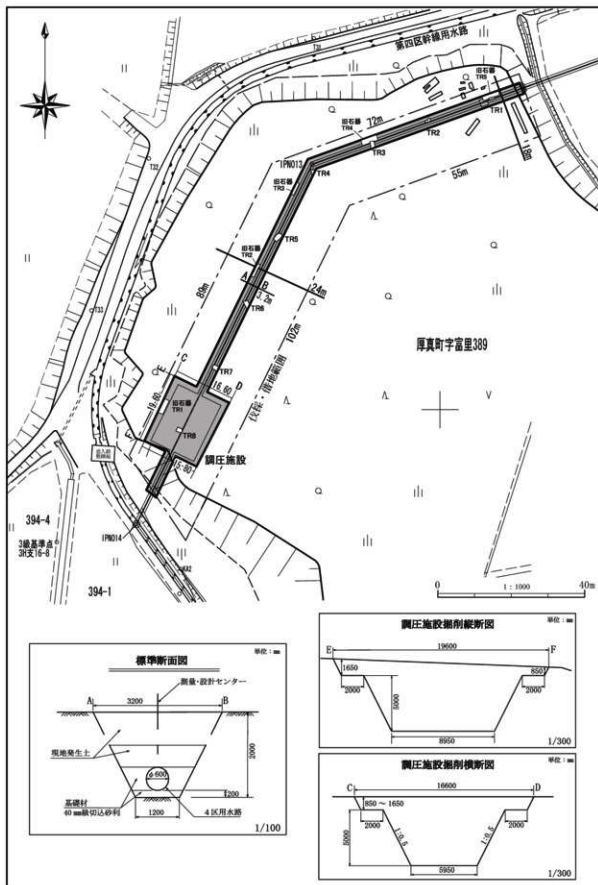


表 I-1 富里2遺跡 試掘調査一覧表

調査日	TR. No.	遺構		遺物										合計		
		Ⅲ層	Ⅴ層	土器		石器		剥片類		礫		他			小計	
				Ⅲ層	Ⅴ層	Ⅲ層	Ⅴ層	Ⅲ層	Ⅴ層	Ⅲ層	Ⅴ層	Ⅲ層	Ⅴ層		Ⅲ層	Ⅴ層
平成18年4月	1	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	1	-	1
	2	礫集中	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	獣骨	1	1	2
	3	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	1	1	2
	4	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	3	-	3
	5	-	-	-	4	-	-	-	1	1	-	-	-	1	5	6
	6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
	7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
	8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
合計	-	-	-	5	1	-	-	1	7	-	-	-	7	7	14	

は現地に遺物埋め戻し

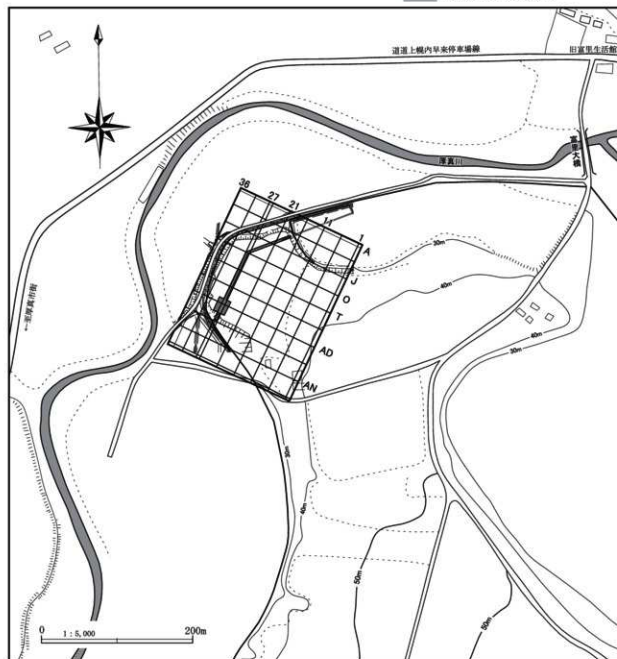


図 I-2 周辺の地形及びグリッド設定図

2. グリッド設定

全体のグリッド網は調査区下流側の西部壁面ラインをY軸のセンターラインとし、X軸は設計中心線の変換点である IP No.13 をグリッド網の設定基点とした。なおY軸は真北より3度51秒西に傾き、X軸はおおむね北北東-南南西、Y軸は東南東-西北西方向となった。グリッドは5m×5m四方を通常の単位とし、グリッド網は富里2遺跡が立地している河岸段丘の範囲を網羅する規模で検討し、基点 IP No.13 より東へ130m、北へ70mの位置に地図上の起点A-1を設けた(図I-2)。グリッド呼称はX軸ラインを南南西方向へA・B・C…のアルファベット列で、Y軸ラインを西北西方向へ1・2・3…のアラビア数字列とした。各グリッドの呼称は全体のグリッド網の起点同様に、グリッドに対し東側に位置する杭名称としている。この結果、グリッド網設定の基点である IP No.13 の40cm北西側に杭名O-27が設定された。

現地でのグリッド設定は、O-27杭から20m南南西の地点となるS-27杭の2点から実施した。控え杭を火山灰除去で影響の無い段丘縁辺部に設置し、火山灰除去後、Ⅲ層上面に5m四方のグリッド杭を調査補助員および測量技能作業員が光波式トータルステーションを用いて打設した。なお、報告書中に焼土等の遺構位置を示すため視内5遺跡と同様に机上の小グリッドを設けている(第2部 図I-5)。

絶対高(Z座標)は調査区の南北にある3級基準点3H支16-07-08から算出されたもので、各グリッド杭へは測量技能作業員がオートレベルを用いて移設した。

なお、Ⅲ層調査終了後、Ⅳ層(Ta-cテフラ)をバックホーで除去するため、ほとんどのグリッド杭を撤去した。このためV層上面で再設置したグリッド杭は平面XY座標値において完全な復元位置で打設できたが、絶対高は除去したⅣ層の層厚分、低い標高値となっており3次元での同じ点位置には復旧できていない。Ⅲ層のグリッド杭との混同を避けるため名称末尾に「B」を付記した。

3. 包含層および遺構の調査方法

調査開始前に第4区用水路上に進入路の敷設鋼板を敷設するため、土地改良区や水組合に承諾を頂いた。遺跡の現況は、カラマツなどの針葉樹や広葉樹が繁茂する林地であり、調査区も含む借地境界内の伐採作業から開始し、下流側の調圧施設部分に針葉樹と広葉樹に分別し切り揃えた幹を仮置きした。当初、開発事業所側で搬出する予定であったが、調査開始時期に間に合わないことから最も近い町有地までの搬出を行った。このため、調査区の表土火山灰除去作業は上流側の用水路延長と調圧施設の西側半分までとなり、搬出後の2回に分けて実施することとなった。

表土・火山灰除去は調査区の上流側から調査員立会のもとバックホーで行った。この際、調査区内の切株を残しながらの除去作業となった。また、この時点で未被熱の獣骨群や灰集中、I-21区付近にⅢ層上面で樽前bテフラの溝状の落ち込みを確認した。

包含層調査は遺物密度が高い北東側から層位毎に調査を開始した。なお、Ⅲ層中の溝跡などの区画遺構は、類例が乏しく、本遺跡においても明確な時期等が不明であったことから、遺構の調査がほぼ終了した段階で、道教委に現地確認を受けている。この時、開発事業所担当者も同席し、今回の調査区以外の範囲は表土掘削工事を行わないこと、また溝跡などの遺構平面形を確認するため、調査区外でのトレンチ調査を行うことで合意した。なお、この区画遺構がアイヌ文化期のチャシの成立に係る遺構の可能性があることやアイヌ文化期の平地式住居跡を検出していたことから、道教委より財団法人北海道アイヌ協会への報告も行われた。出土遺物はⅢ層、V層共に光波式トータル

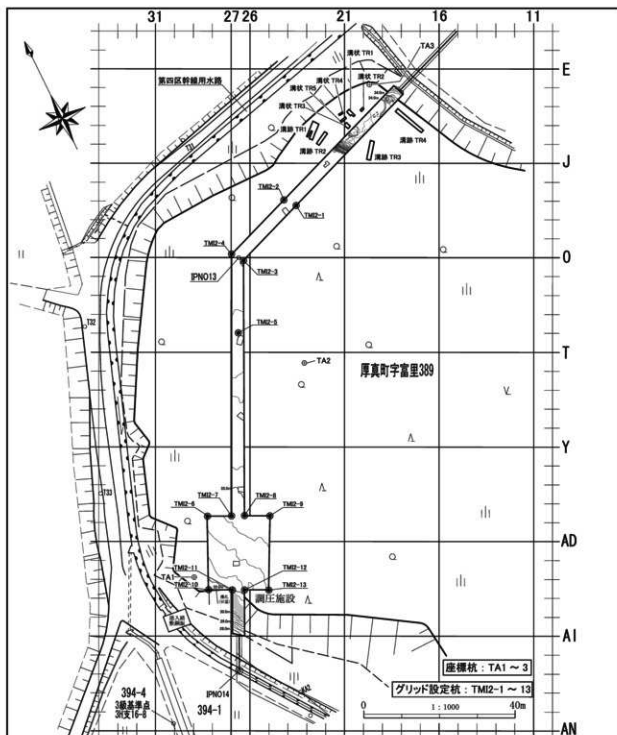


図 I-3 境界杭・グリッド設定基準杭及び拡張トレンチ位置図

表 I-2 グリッド設定関係杭座標値一覧表

杭名	X座標	Y座標	Z座標	杭名	X座標	Y座標	Z座標
TA1	-138294.488	-27082.702	32.347	TM2-6	-138191.216	-27072.410	-
TA2	-138166.366	-27031.345	33.873	TM2-7	-138194.160	-27066.392	-
TA3	-138107.526	-26983.025	34.335	TM2-8	-138195.566	-27063.517	-
TM2-1	-138127.668	-27014.822	-	TM2-9	-138198.510	-27057.499	-
TM2-2	-138125.100	-27017.128	-	TM2-10	-138208.994	-27086.662	-
TM2-3	-138134.470	-27033.630	-	TM2-11	-138211.782	-27075.002	-
TM2-4	-138131.902	-27035.936	-	TM2-12	-138213.168	-27072.128	-
TM2-5	-138151.152	-27043.571	-	TM2-13	-138133.186	-27034.783	-

※ 世界測地系公共座標(平成15年度 十勝沖地質補正結果)

ステーションで全点の出土位置情報（XYZ座標）や層位を個々に記録して取り上げた。

遺構はⅢ層上面で確認した溝跡等のほか、Ⅲc～Ⅳ層上面およびⅥ層で柱穴、土坑、Tピットを検出し、調査した。焼土や灰集中、各種遺物集中は層位面ごとの包含層調査にて検出した時点で、周囲の伴う遺物を検討し、平面図および断面図の記録を行った。遺構堆積状態の分層、土層注記は調査員、調査補助員が行い、実測図化は測量技能作業員が行った。なお、焼土燃焼面や灰集中はフローテーション処理を目的として全量をサンプリングし、土壌乾燥及び水洗作業を調査期間内に行った。二次選別は整理業務期間に行い、回収した動物遺存体及び炭化種子の同定は椀内5遺跡を含め、外部に委託している（第5部 第2章 第1・2節）。

遺構等の記録写真は全て35mm一眼レフデジタルカメラで撮影し、一部は6×7中盤カメラを用いた。また未被熱の動物遺存体は個々に骨番号を付けてコンパクトデジタルカメラで撮影した。

V層の調査終了後、樽前dテフラより下層の遺物包含層の確認を目的に5ヶ所にバックホーでトレンチを掘開した。旧石器遺物包含層の可能性のある土層については移植ゴテによる調査を行ったが、遺物は出土していない。一部で河岸段丘の形成時期を把握するため段丘堆積層まで人力による掘削確認作業も行った。

4. 整理作業

整理作業は第2部の椀内5遺跡と共通する手順で行っており省略する。本遺跡ではアイヌ文化期の各種金属製品や柱材などの脆弱遺物が出土した。これについては、パソコン上で写真実測を行い、掲載している。なお、金属製品は岩手県立博物館赤沼英男氏に保存処理および分析を委託した（第5部 第1章 第2節）。その他、年代測定や炭化種子、樹種、動物遺存体同定、漆膜分析を外部に委託し、遺跡の総合的究明に対し関連諸科学からの援用を図っている。（乾）

第3節 調査結果の概要

1. Ⅲ層の調査概要

A アイヌ文化期

本遺跡のアイヌ文化期の遺構および遺物は、樽前bテフラより下層の黒色土を1～2cm掘り下げたレベルから検出しているため近世アイヌ文化期に帰属する。主な検出遺構は平地式住居跡1軒、建物跡2軒、灰集中4ヶ所、焼土1ヶ所、礫集中3ヶ所、獣骨集中3ヶ所が挙げられる。

遺跡の保存状態は現況が林地であり、樽前bテフラが20～30cm堆積しているため黒色腐植土の保存状態は良好であった。遺構及び遺物の出土状態は樽前bテフラ除去後、黒色土を精査もしくは1cmほど掘り下げたⅢa層から灰集中や獣骨等を検出している。また、Ⅲb層上位からも連続的に金属製品、棒状礫などの遺物が出土しており、近世アイヌ文化期段階にもやや時期差が認められそうである。遺構については平地式住居跡を1軒検出しているが、殆ど調査区外に広がるため規模は不明である。方位は北西-南東軸で、炉跡は近接した地床炉が2ヶ所認められている。炉跡には黒色土を約1cm被覆しているため、ⅢAS-04より古い近世アイヌ文化期の住居跡と捉えている。住居の柱穴からは柱材が3本検出され、うち1本の一部を樹種同定したところナナカマド属であるという結果を得ている（第5部 第1章 第3節）。住居範囲内からは、町内で初めての出土となる播鉢片が1点出土し、肉眼鑑定では瀬戸・美濃産と考えられる（図Ⅱ-5-1）。その他、建物跡1とした遺構は北西側トレンチに炉跡を検出しているため住居跡の可能性が高い。遺構、遺物分布については段丘上

流側に集中する傾向にあり、変換点から下流側には礫集中が1ヶ所検出されるのみであった。このような分布状態からアイヌ文化期において段丘上流側は厚真川と支流である頗美宇川の合流点と、周辺で一番標高の高いコムヌブリを一望できる場所であるため意識的に利用していた可能性が考えられる。アイヌ文化期の遺跡としては、同じ富里地区に平成19年に調査を行ったニタツナイ遺跡(厚真町教育委員会 2009b)がある。この遺跡は樽前bテフラ降下直前直後の集落跡であったため、近世アイヌ文化期の中でも時間差が認められることがわかってきた。(奈良)

B 続縄文・擦文文化期

擦文文化期と続縄文文化期を同じ章で取り扱っていることについては、ⅢF-02の上面から検出される焼骨片の在り方や、Ⅲc層から黒曜石製の剥片石器が出土するためである。土器については斑状に堆積するB-Tmの上位から擦文土器が出土しており、擦文中期後半に帰属すると思われる。遺構は区画遺構〔溝跡1・溝状遺構1〕1ヶ所、焼土10ヶ所、土坑1基、土器集中2ヶ所、礫集中1ヶ所検出している。遺物は土器210点出土しているが、集中個体を除くと35点と少なく、時期を示す資料としては乏しい結果となっている。今回特筆すべき点として挙げられるのは区画遺構の検出である。調査区上流側に上幅1.8mの溝跡と内側5m地点に溝状遺構を検出した。遺構の性格と年代を考慮すると、アイヌ文化期成立にかかわる遺構の可能性が高く、北海道教育委員会に調査指導依頼を行った(平成21年9月1日付 厚教社号)。内容は溝跡及び溝状遺構が広がると推察される地点にトレンチを設定し、範囲確認をすることであった。そのため調査区外のトレンチは地権者と原因者の了解を得て、溝跡は4ヶ所の推定される地点を人力で樽前bテフラまで除去し、Ⅲ層上面での地形図を記録し、一部完掘を行ったのち埋め戻した(溝跡TR4)。溝状遺構に関しては5ヶ所をⅢc層まで掘削して確認を行ったが溝状TR3で一部確認されたのみであった。

調査区外トレンチの結果で段丘上流側の先端を弧状に区画する溝跡と、その内側に幅20cm程の溝状遺構が馬蹄形に廻る遺構で、更に上流側には整地した後に焼土を3~4ヶ所検出していることが明らかとなった。焼土からは焼骨片などは殆ど検出されず、溝跡の内側からは礫集中が1ヶ所確認されるだけで遺物は殆ど出土しない。こうした溝で土地、または空間を区画する行為は儀礼的様相が強いと考えられ、当該期の精神文化を理解する上で重要な発見となった。また、帰属時期に関しては断面観察から、掘り上げ土がB-Tmより上位にあること、掘り上げ土の上位に黒色土が3~4cm堆積していることから擦文文化期から中世アイヌ文化期として捉えている。類似する遺構としては、町内の上幌内モイ遺跡で円形周溝遺構(ⅢX-01)が検出されており(厚真町教育委員会 2007a)、近い時期であると推測されることから同様の存在意義があったことが示唆される。また、区画をするという行為は後のアイヌ文化期の象徴でもある「チャシ」に繋がる可能性があるため、アイヌ文化期の成立に係わる重要な遺構であると考えられる。遺構、遺物の分布を見てもアイヌ文化期の分布と重なり、一部土器集中2個体が下流側から出土している地点があるが、周囲に焼土や他の遺物も出土していないため主に上流側が利用空間であったことがわかる。(奈良)

表I-3 富里2遺跡 出土遺物一覧表

層位	細分類										計	
	土器	陶器	礫石器	剥片石器	鉄製品	銅製品	錫製品	礫	剥片類	木製品		その他
Ⅲ層	208	1	53	18	29	2	1	1,401	88	3	4	1,808
V層	112	-	17	13	-	-	-	181	27	-	-	350
表採	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1
	320	1	70	31	29	2	1	1,583	115	3	4	2,159

表 I-4 富里2遺跡 時代別概要一覧表

項目	Ⅲ層		V層	合計
	アイヌ文化期	縄縄文・弥文文化期	縄文時代	
発掘調査面積(m ²)	770			770
平地式住居跡	1	-	-	1
建物跡	2	-	-	2
杭 跡	31	-	-	31
土 坑	-	1	-	1
焼 土	1	10	-	11
灰集中	4	-	-	4
Tピット	-	-	1	1
溝 跡	-	1	-	1
溝状遺構	-	1	-	1
獣骨集中	3	-	-	3
縄集中	3	1	-	4
土器集中	-	2	-	2
遺物点数	1,808		350	2,158
表採遺物点数	1			1
遺物総点数				2,159

表 I-5 遺構群一覧表

遺構名	時期	規模(cm)		グリッド	層位	付属・関連遺構	備考
		長軸	短軸				
ⅢH-01	アイヌ文化期	(440)	(447)	I-21・J-21・22	ⅢbU	HF01 ⅢSB-01	
建物跡1	アイヌ文化期	(2.6)	(2.3)	G-19・20	Ⅲc	ⅢF-12	
建物跡2	アイヌ文化期	1.9	1.5	F-18	IV		
ⅢF-01	アイヌ文化期	(61)	(60)	J-21	ⅢbU		ⅢH-01, HF01に変更
ⅢF-02	縄縄文文化期	72	45	G-19	ⅢbL	ⅢP-01	上層にⅢBB-04
ⅢF-03	弥文文化期	62	17	K-23	ⅢbL		
ⅢF-04	弥文文化期	83	(75)	K-22	ⅢbL		
ⅢF-05	弥文文化期	58	(42)	L-24	ⅢbL		
ⅢF-06	弥文文化期	-	(35)	F・G-19	ⅢbL		整地範囲内焼土
ⅢF-07	弥文文化期	75	47	F-18・19	ⅢbL		整地範囲内焼土
ⅢF-08	弥文文化期	77	55	G-18・19	ⅢbL		整地範囲内焼土
ⅢF-09	弥文文化期	102	38	G-19	ⅢbL		整地範囲内焼土
ⅢF-10	弥文文化期	50	47	I・J-21	ⅢbL		
ⅢF-11	弥文文化期	(24)	22	F-18	ⅢbL		
ⅢF-12	アイヌ文化期	-	-	G-20	ⅢbU		調査区外トレンチ
ⅢAS-01	アイヌ文化期	(112)	(160)	M-25	ⅢbU		ホタテガイ
ⅢAS-02	アイヌ文化期	(48)	(80)	M-25	ⅢbU		
ⅢAS-03	アイヌ文化期	41	20	L-24	ⅢbU		
ⅢAS-04	アイヌ文化期	59	50	I-21	ⅢbU		
ⅢBB-01	アイヌ文化期	480	(167)	J・K-22	ⅢbU		
ⅢBB-02	アイヌ文化期	361	(161)	J-22	ⅢbU		
ⅢBB-03	アイヌ文化期	390	(180)	G-19・20	ⅢbU	ⅢSB-02	
ⅢSB-01	アイヌ文化期	(440)	-	I-21・J-21・22	ⅢbU	ⅢH-01	
ⅢSB-02	アイヌ文化期	200	79	H-19	ⅢbU		
ⅢSB-03	アイヌ文化期	270	160	S-26	ⅢbU		
ⅢSB-04	弥文文化期	261	163	G-19・20	ⅢbL		
ⅢPB-01	弥文文化期	130	70	AD-26	ⅢbL		
ⅢPB-02	弥文文化期	64	62	AE-25	ⅢbL		
ⅢP-01	縄縄文文化期	99	89	G-19	ⅢbL		
溝 跡	弥文文化期 ?	(2900)	(1950)	I-20-21	ⅢbL		弥文～中世アイヌの可能性有
溝状遺構	弥文文化期 ?	(600)	(250)	G-19・H-19・20	ⅢbL		弥文～中世アイヌの可能性有
TP-01	縄文時代	(101)	102	Y-26	Vc		

2. V層の調査概要

縄文時代の遺構はTピット1基が壁面にかかる状態で検出しているだけである。遺物は段丘の変換点付近と上流側に少量分布を示すのみで、全体に散漫である。遺物は土器が112点、礫石器17点、剥片石器13点、礫181点、フレイク・チップ27点の合計350点と少ない。

時期は縄文時代晩期中葉と後期後葉の堂林式土器が主体で、中期中葉の柏木川式土器が1%以下で出土する。晩期中葉土器は美々3式に分類される資料であるが、個体数は殆どない。

石器についてはS-26区付近で拳大の黒曜石製石核が1点出土しているが、周囲に墓などの遺構は確認されていない。分布状態から縄文時代の段丘縁辺部分は、殆ど利用されていなかったと考えられる。(奈良)

第4節 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置と周辺環境

A 自然地理的環境

富里2遺跡は、厚真川河口より24kmほど遡った厚真川中流域の左岸、北から流れ込む顔美宇(ハビウ)川との合流点に舌状に張り出した標高34m前後の河岸段丘上に立地し、厚真町市街地より直線距離にして北東方向に4.7kmに位置する。厚真川は富里2遺跡付近で大きく流路方向を南西方向へ転換し、本遺跡の立地している段丘はその転換点に張り出した位置にある。

遺跡の立地する富里地区は顔美宇川との合流点でやや広域な沖積低地を形成し水田地帯が広がる。合わせて河岸段丘も広域に形成され、大規模な農地造成により厚真町内でも畑作が盛んな地域でもある。これらの地形に面し、標高約170mの無名山(地域称:楯山、アイヌ語地名:コムヌプリ)を見上げる位置にある。富里地区の気候条件としては内陸性気候と海浜性気候との中間的な地点で、6月頃の海霧の侵入は少なく、冬季の積雪量は厚真町市街地よりは多く、幌内地区よりは少ない。厚真町内において中間的な気候地域と言える。

富里地区の旧地名は昭和32年の字名地番改正までは当仁加(富仁加)と称し、アイヌ語地名のトンニカが語源で、厚真村史によると「トンニ・カ カシワの林の・かみ の意」という。先述のコムヌプリも「コム・ウシ・ヌプリ ドングリの実・群在する・山 の意。ナラ山。」と記されており、河岸段丘や丘陵性山地はコナラ属が主体を占める森林地帯であった可能性がある。一方、現在水田地帯となっている沖積低地には、樹高20~30mのヤチダモやハルニレ、ハンノキを主体とする森林が広がっていたことが確認されており、明治の開拓期以前は多様で豊かな森林が広がっていたものと思われる(岡崎2003)。

本遺跡が立地する河岸段丘は厚真川流域に形成されている段丘面の中でも最下流域に形成されたもので、標高29~30mの沖積低地との比高差は約3~4m程度である。これより下流域は山地性丘陵や第四紀更新世以前の旧汀線を示す海成段丘、支笏火山噴出物の台地となる。本遺跡が立地する河岸段丘は火山噴出物の堆積状態より、上幌内モイ遺跡のT₂面(出穂2009)に相当するもので、最下層に樽前dテフラが堆積しており、約8,000年前に離水形成した段丘面である。背後には広く河岸段丘面が形成され、本遺跡から南南東方向への奥行は約1kmに達する。南東方向約1kmに位置する標高46m前後のニタツナイ遺跡(厚真町教育委員会2009b)では志庭aテフラの堆積が確認されており、上幌内モイ遺跡のT₁面ないしT₂面に相当の河岸段丘面である。しかし、大規模な畑地造

成のため、明瞭な段丘を把握することが困難である。これらを踏まえると富里地区には複数面の河岸段丘が存在していたものと思われる。これに対し対岸の厚真川右岸は山地性丘陵が発達し、河岸段丘の形成は極一部に限られる。なお、本遺跡周辺の沖積低地は樽前 a テフラ (1739 年降下) より上層に水成堆積シルト層が確認されており、近現代まで低湿地性の氾濫原であったと思われる。

富里地区は広域の河岸段丘面が形成されているが、開析する小河川はほとんどなく遺跡周辺には全く存在しない。しかし、厚真川沖積低地への段丘直下での湧水地点が確認されており、本遺跡から南に約 200m の地点で確認できる (図 I-4-⑥)。

厚真川を挟んで対岸の地域は山地性丘陵が発達し、頗美宇川との合流点付近での浸食崖では基盤層の新第三紀に形成された「萌別層」(松野・石田 1960) の砂岩泥岩層を確認できる。この砂岩泥岩層中には白濁したメノウが層状に挟在している (図 I-4-②)。

B 歴史的環境

(1) 先史時代

本遺跡周辺の富里地区や高丘地区の一部には他に富里 1 遺跡、ニタツナイ遺跡 (厚真町教育委員会 2009b)、チコマナイ遺跡、高丘 9 遺跡の計 4 遺跡が存在している (図 I-4 表 I-6)。うち本遺跡とニタツナイ遺跡は厚幌導水路建設事業の試掘調査で新規登録された包蔵地である。

ニタツナイ遺跡は、平成 19 年度に厚幌導水路建設に伴う発掘調査が行われている (厚真町教育委員会 2009b)。縄文時代前期前葉末期から中葉にかけてと擦文文化期、近世アイヌ文化期前葉の集落跡で、各時期において重要な成果が得られている。縄文時代の成果については第四章に記載するので割愛するが、本遺跡に関連する擦文文化期後半期と近世アイヌ文化期の概略について記載する。擦文文化期では楕円形の焼土 2 基が直線上に並ぶ平地式住居跡 1 軒と地床炉を伴う竪穴式住居跡 2 軒を検出した。特筆すべき遺物として、ロシアのパクロフカ文化期 (9～13 世紀) ナデジンスコエ遺跡 (アムール川中流域) 出土品と類似した鉄鏃 (菊池 2009) やガラス玉が出土している。前者の鉄鏃は形態的特徴の他、成分分析においても銅の含有量が 9% 以上の数値を示し、他の鉄製品の 2% 以下と全く異質なものである (赤沼 2009)。この形態の鉄鏃の出土例は全国においても初例で、ガラス玉と同様に擦文文化期後頃から中近世アイヌ文化期の活発な北方交易の萌芽の時期である可能性が示唆される。富里 2 遺跡は擦文土器の器形、文様からニタツナイ遺跡より古い時期であるが、この地区における前段階からの人の痕跡は重要な成果となる。

アイヌ文化期では、樽前 b テフラ (1667 年降下) 直下の平地式住居跡 2 軒と樽前 b テフラから駒ヶ岳 c2 テフラ (1694 年降下) の間に時期を限定できる平地式住居跡 4 軒を検出した。2 期の住居跡群は、シャクシャインの戦い (1669 年) の時期に合致し、当該期に限定できる集落跡の調査例としては道内初例である。また、樽前 b テフラ直下で調査範囲 6 m² からシカの頭蓋骨 25 頭分の集中を検出し、シカ送りなどの動物儀礼も示唆された。出土遺物でも多量の金属製品が出土しており、ほぼ形態がわかる銅製銚子の出土は全国でも東京都沙留遺跡脇坂大名屋敷跡 (東京都埋蔵文化財センター 2000) に次いで 2 例目となっている。これらの成果はシャクシャインの戦いの直前期、初期場所制度におけるアイヌ民族と和人との関係を検討するうえでも極めて重要な資料体と思われる。

富里 1 遺跡はコムヌプリ (図 I-4-①) の南斜面の裾に形成された厚真川右岸の河岸段丘上に立地し、縄文時代を主体とする包蔵地である (厚真村郷土研究会 1956)。平成 17 年に実施した厚幌導水路に付随する用水路敷設工事に伴う試掘調査では、幌内 5 遺跡やニタツナイ遺跡、オコッコ

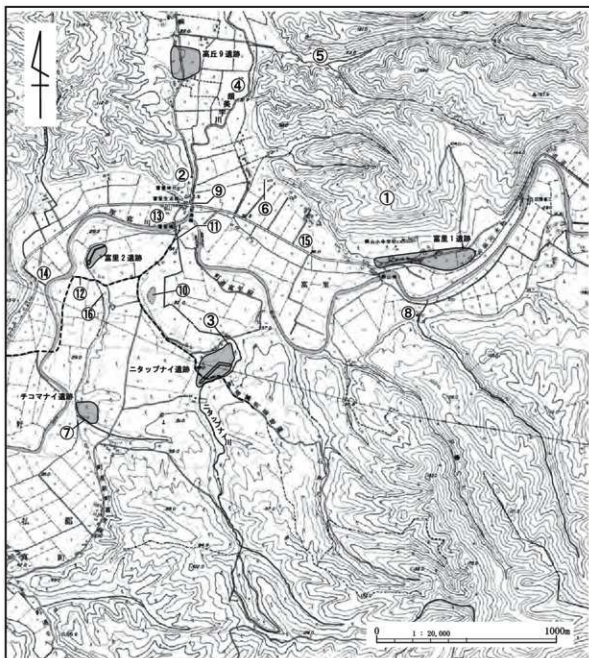


図1-4 富里2遺跡周辺の地形と文化的環境

表1-6 富里2遺跡周辺の埋蔵文化財包蔵地

遺跡名(登録番号)	時期	型式名等	標高	備考
ニタツナイ遺跡 (J-13-104)	縄文前～後期・統縄文・ 擦文・近世AⅡ文化期	静内中野式、円筒下層a式並 行、円筒下層a式、柏木川式、 北筒式、余市式、後北C ₁ -D式、 擦文後期	45-47m	本書。
高丘9遺跡(J-13-36)	統縄文文化期	後北式	35-40m	
富里1遺跡(J-13-37)	縄文時代前・中・後期	静内中野式、円筒上層式、 ホッケマ式	45-60m	厚幌導水路関連試掘調査
チコマイ遺跡(J-13-38)	不明	-	30-40m	
富里2遺跡(J-13-106)	縄文後・晩期・統縄文・ 擦文・近世AⅡ文化期	堂林式、タンネウL式	32-35m	本書。

表 I-7 富里2遺跡周辺の自然及び文化的環境

① コムヌプリ	松浦武四郎「戊午東西蝦夷山川取調日誌 戊午安都摩日誌」の古地図上にも記載。アイヌ語で「コム・ヌプリ」＝「ドングリの・群生する・山」(厚真村1956)。山頂の標高は約170mで周辺域では最も高い山体。頂上は展望台として整備され太平洋も眺望できる。厚真町北部地域のランドマーク的の山体。
② メノウ産地	昭和40年代の道道工事のための盛土用土砂採取時に段丘礫層中から人頭大の乳白色から淡褐色のメノウ原石、砂岩泥岩層中より白濁した板状のメノウが産出する。
③ チノミシリ可能性地	ニツプナイ沢が開折する段丘先端部の段丘崖上位に約2m×4mのテラス状の造成痕がある。聞き取り調査でも近年のものではなく、明治期以前の造成痕と思われる。現地からの視認物として厚真川の沖積低地を挟み「三角山」や「コムヌプリ」が正面に所在する。
④ 頗美宇川	カモメ伝承が残るアイヌ語地名。「ハビウ」(松浦・吉田1962、永田1972、松浦・高倉・秋葉1985)で、イナウを記る。「カモメの天使」(厚真村1956)。現高丘地区の旧字名。
⑤ トコマ沢	トコマカリ「神々の輪投げ」伝承の沢(松浦・吉田1962、松浦・高倉・秋葉1985)。シャクシヤインの戦いに係わる伝承「紅すずらん」がある(厚真村1956)。
⑥ トニカ三角山	義経伝説(厚真村1956)が残る独立丘。比高差約10m。造成痕等是不明瞭。トコマカリ「是往昔此の川の此方彼方にて、神様が輪うけをなし玉ひしとかや。其輪うけと今子供等はトコマカリシチノと云り。」(松浦・秋葉)の伝承の小山に比定(亀井・池田1976・1978)。
⑦ チボマナイ	恐ろしい「変化物」伝承(松浦・吉田1962、松浦・高倉・秋葉1985)。
⑧ ヲフムセナイ	人家三軒(松浦・吉田1962)。フシココタンで煙のみ残る(松浦・秋葉1985)。段丘崖下に沖積礫堆積物の微高地が発達している。埋蔵文化財包蔵地としては未登録。
⑨ 松浦武四郎之碑	昭和32(1957)年 厚真来訪100年を記念して、宿泊地の富里地区に厚真村郷土研究会ほか地元有志により建立。碑には「えみしらも しらぬ深山に 分ければ ふみまよふべき 道だにもなし」と武四郎の短歌が刻まれている。昭和57(1982)年厚真町記念物に指定。隣接する頗美宇川の道道橋梁名称は「松浦橋」。
⑩ シカ落としの沼	明治期以前の伝承として地元に残るシカの追い込み猟の逸話。河岸段丘上からシカを沼地に追い込み穴で射止めていた。現在は町道改良の埋め立てにより消失。
⑪ 熊送り地点	昭和30年代初頭まで地域のアイヌ民族による熊送りが行われていた地点。
⑫ 明治期の古道	明治29年製版5万分の1地形図「ライカルマイ」に記載されている古道。富里～吉野～桜丘地区へ通じる古道で、恐らくは幕末期以前まで遡る可能性がある。この道は桜丘チャン跡直下を通り、早来～千歳へ続く。吉野～桜丘間は昭和58年まで町道吉野桜丘線として利用されていたが現在は廃道。
⑬ 富里市街	高丘地区との分岐点で林産資源などの集結地として発展。大正年間から馬車鉄道のトニカ駅が開設され市街地を形成する。昭和23年の廃線後もガソリンスタンドや商店、運送会社、林業会社事務所が所在していた。
⑭ キウシナイ	「其村にて(は)小舟が有て、是を以て此方彼方と往来はすれども、是にて浜に下る等の事なし。それは倒れ木多きに依て也。」と記されている(松浦・秋葉1985)。
⑮ 沖積低地の森林跡	1995年2月、水田造成工事中に大小の切株100個を検出。切り口直径が最大100cm強。推定で樹高20～30mのヤチダモやハルニレ、ハンノキを主体とする森林が広がっていたことが判明(岡崎2003)。
⑯ 湧水地点	平成21年度発掘調査で作業用水に活用した湧水地点。

1 遺跡と同様に縄文前期尖底土器群と共に多量の被熱破砕礫が出土している。この他、地域住民より古銭の出土情報を得ており、アイヌ文化期の包含層も存在するものと思われる。

トコマナイ遺跡は地域住民によって遺物が採集されているが、現在遺物を確認することができず詳細は不明である。頗美宇川流域の高丘9遺跡は、包蔵地カードによると後北式土器が採集されているものの遺物の確認には至っていない。このことは町内各包蔵地の踏査の徹底による詳細時期の把握を課題とし、包蔵地の保護と各時期における遺跡の立地等の調査研究を進めなければならない。

なお、頗美宇川流域には9地点の埋蔵文化財包蔵地が確認されており、現在の安平町安平地区へ山越えのルート上の遺跡と考えられている。

富里2遺跡の調査成果を踏まえても、頗美宇川との合流点に面した広域な河岸段丘面や湧水地点などの諸環境は先史時代から生産、交換、交易、消費の多様な歴史を育んだものと思われる。

(2) 歴史時代

本遺跡周辺の記録は第1部第1章第2節の記述の通り、1857（安政5）年6月に厚真を訪れた松浦武四郎によるものが最も古い記録となっている。「戊午東西蝦夷山川取調日誌 戊午安都麻日誌」によるとユウフツ（現苫小牧市勇払地区）からトンニカ村（現厚真町富里地区）に入り、2泊している。滞在中には高丘地区や幌内地区周辺の探検を行い、地名等を記録している（松浦・秋葉1985）。富里地区には「トンニカ村」に人家4軒、「ニタツナイ」に人家3軒の記録が残され、いずれの家も粟や稗、隠元などを栽培し生計を立てている。しかし、これらの畑や人家が洪水によって泥水に冠水し、甚大な被害を受けており、当時の日常生活領域が河川の氾濫原周辺の低地であったことがわかる。幕末期の集落や畑地の立地を記す貴重な資料であり、今後、沖積地に隣接する微高地も近世アイヌ文化期末期の様相を探るうえで、遺跡の有無について十分に注意しなければならない。また集落には高齢者や女性、病人、子供が残り、いわゆる働き盛りの世代は「雇」に出ている。雇先の記述はないものの、海岸部のイワシ漁場等の労働が想定され、コタンの疲弊が同われる。洪水被害と重なったこの惨状に武四郎はこれらの家々に玄米や味噌などを分け与えている。

その一方で武四郎が宿泊したイカシユ（乙名板藏）の家中について「西同所の土人等とは大に違ひ、凡行器の三十も有、耳盪の七ツ八ツ、篋の武ツ計、蝦夷太刀の二十五六振も懸、また此余短刀の七八本も有るよし語りけるなり。」（松浦・秋葉1985）とあり、極めて裕福な地域であったことも注目に値する。

トンニカ村周辺の記述としては顔美宇川の下流の「キウシナイ」には「其村にて（は）小舟が有て、是を以て此方彼方と往来はすれども、是にて浜に下る等の事なし。それは倒れ木多きに依て也。」と記されている（松浦・秋葉1985）。丸木舟の記載として、注目される。武四郎は陸路、徒歩でトンニカまで来ており、この当時の厚真川が丸木舟の航行に不向きであったことが記されている。倒木や寄木（流木？）が多いことは先述した沖積低地に広がる森林地帯を厚真川が流下していたことから肯定的なものである。なお、キウシナイの比定地は現在の吉野地区と富里地区の地番境界付近の小河川とされている（亀井・池田1976・1978）。この地点は明治29年発行の地形図でトンニカから吉野地区への古道が記されており、厚真川を渡る丸木舟に利用されていた可能性もある。

松浦武四郎は周辺地域も含めた踏査や聞き取りを行い、3日目にトンニカ村を出発するにあたり、自らの馬を馬士イシランに託し、勇払会所へ水害を報告している。松浦武四郎の記録は、厚真町にとっても極めて重要な記載が多く地域の歴史的文化的価値は極めて高いと思う。今後、地域の歴史教材としても活用を図るべき記録でもある。

この他、アイヌ文化の伝承についても多く残る地域で、顔美宇川の神の使いの鷗（松浦・秋葉1985、厚真村1956）や紅すずらん（厚真村郷土研究会1959、厚真村1956）の闘争伝承、三角山の義経伝説（厚真村1956）、神々の輪投げ（松浦・秋葉1985）がある。

これらの伝承は、富里地区に連綿としたアイヌ民族の伝統文化が語り継がれた証拠でもあり、昭和30年頃まで熊送りが行われており、地域の高齢者たちからは熊祭りに関する貴重な話を聞くことができる。伝統的平地式住居、チセも昭和30年代中頃まで複数軒が存在しており、厚真のアイヌ文化の拠点的地域であったことがわかっている。この前提となる樺文文化期以降の多様な考古資料は、この地域が鶴川・沙流川流域と千歳方面や苫小牧勇払や安平方面への交通路の拠点的地域であったことが指摘されている（藪島2005）。

しかし、昭和30年代の急速な社会変革により、厚真のアイヌ民族、アイヌ文化、その歴史は急速に衰退し、現在ではこれらの事実が忘れ去られようとしている。

現在に至る明治時代以降の農業入植の歴史は、1884（明治17）年に千歳村美々から移住した山本栄三郎、鉄太郎が始まりである。1894（明治27）年頃から水稻栽培が行われ、現在では町内でも有数の美田地帯となっており、天皇家献上米も産出している。1897（明治30）年の厚真村の開村に伴って、浜厚真とトンニカより2名の総代を選出しており、アイヌ文化の拠点的地域は和人の内陸部における農業開拓の出発点ともなった。この開拓入植の初期において先住民族であるアイヌ民族と入植者たちとの関係を理解することは、現在では困難な状況にあるが重要な示唆を与えてくれる可能性もあり、考古資料に限らず、連続と続く地域の歴史を謙虚に学ぶことが、新たな展望への発展を秘めているものと思われる。その1つとして、厚真川と頗美宇川の合流点付近に、武四郎が厚真を訪れた100周年を記念して1957（昭和32）年に厚真村郷土研究会が中心となって建立した「松浦武四郎之碑」（厚真町記念物第7号）が形として残っている。（乾）

2. 調査区内の地形と地質

A 地形

富里2遺跡が立地する河岸段丘は現地表面で標高33～34mの南西向きの緩斜面を形成している。これは厚真川の流路方向と一致しており、河岸段丘の特徴的な傾斜である。当段丘面は先述の通り樽前dテフラ（約8,000年前降下）によって離水、形成した河岸段丘である。狭小な調査区であるが、調査区内の堆積状態とⅢ層上面の等高線から調査区および隣接地の地形を記述する。

遺跡の立地する河岸段丘上は表土Ⅰ層において図中の分層を略したが、10～20cmの耕作土が部分的に堆積している。耕作深度や聞き取り調査から戦前戦後に耕作地であったと考えられる。耕作範囲以外はほぼ標準堆積を示し、ほぼ原地形を留めている。

本遺跡は段丘先端部に立地しており周囲は段丘崖が形成され、上流側のⅢ層上面で44.1°、下流側で21.4°の傾斜角を測り、河川浸食の圧力、速度が現れている。段丘崖の安定化は、上流側の浸食崖が倒木痕や根穴攪乱により不明瞭な部分が多いが、倒木痕覆土に樽前cテフラが混入していないことからV層の倒木痕の可能性があり、樽前cテフラ降下以前の早い時期に段丘が安定していた可能性がある。ただし、上流側については水田と隣接していることから段丘崖下位まで確認することができなかつたため、詳細な形成過程を確認するに至っていない。

下流側は浸食崖の浸食攻撃面とは異なり傾斜も緩いことから堆積層が発達している。標高30m付近の段丘崖下位まで樽前cテフラが堆積しており、ほぼ同じ標高ラインより下位に水成シルト質の黒色土V層が堆積する。下流側段丘面では、この標高30mラインが樽前cテフラ降下時点の水位面の可能性がある。なお、下流側の段丘崖堆積状態では、樽前bテフラより上層に水成堆積シルト層が80cm以上堆積している。テフラの流出が観察されないことから、シルトが供給される程度の流速が極めて遅い氾濫原性の低湿地が広がっていたものと思われる。

河岸段丘上の調査区内の地形は、沢状地形等は一切なく、ほぼ平坦な地形で典型的な河岸段丘地形を示している。調査区屈曲点より上流側は標高33mでほぼ平坦な地形を呈し、屈曲点より下流側は徐々に傾斜角を増し、調圧施設部分では傾斜角が13°の南西向きの緩斜面となる。調査区が狭小であるため断定できないが、U・V-26区とZ・AA-26区付近の2条が近接する等高線は離水過程の微地形を示す可能性もありうる。

B 地質

基盤層は新第三紀の砂岩泥岩層と思われるが、段丘堆積物（礫層）まで確認した。旧石器包含層確認トレンチを5ヶ所掘開し、現地表下約3mまで確認した（図I-1・8右下）。この結果、恵庭aテフラ（En-a）の堆積は認められない。このような堆積状態は上幌内モイ遺跡のT₂面とT₃面に相当する。T₃面は樽前dテフラの下層に斜面堆積物があり、離水後、樽前dテフラ降下までに時間的経過が考えられることや河川との比高差から、本段丘面はT₂面に相当すると思われる。1ユニットはIXcないしはIXd～XI層までと思われる。IXcおよびIXdはローム質土を主体とするが砂粒を含み粘性が弱いことから離水過程の最終段階と思われる。なお、段丘堆積物中の礫、礫層は極めて淘汰が悪い。

IXaとIXb層は風成堆積層の可能性がある堆積物で、砂粒や礫の混入がなく粘性が極めて強い。IXa層は少量の有機質を含み黒色化が進み、上面に炭化材を少量含む。苫小牧市や千歳市南部において「III B層」と報告されている堆積層に相当する。

VII層の樽前dテフラ（Ta-d）は発泡性スコリアのd2層が主体で平均的に1m前後の安定した堆積で、中位より上層は赤褐色を呈し、下層は黄灰色を呈する。また、不規則に下位からの粘土化層を確認できるが、IX層のローム質土が不透水層となり下層から供給される水分の凍結融解によって白色溶脱変質したクリオターペーションと思われる。上位に堆積する樽前d1テフラは部分的に堆積し、d2テフラやVI層と混在した状態である。幌内地区の遺跡よりも不安定な堆積である。

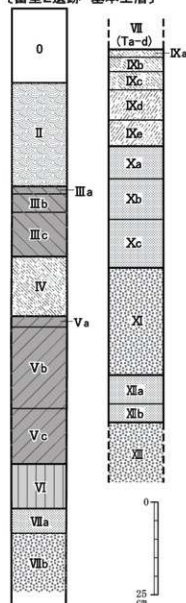
縄文時代前期から晩期中葉にかけての遺物包含層であるV層や樽前cテフラ（Ta-c）を挟んで上層の1667年までのIII層も安定的な層序を示し、Vb層とVc層、IIIb層とIIIc層も明瞭に分層できる。

IIIb層とIIIc層の境界に堆積する白頭山苫小牧火山灰（B-Tm）は、斑状の堆積ではあるものの、調査区のほぼ全域にわたってほぼ同一レベルで堆積しており、遺構遺物の鍵層として有効な堆積状態であった。10世紀中葉以降の掠文文化期から中世末、近世初頭にかけてのIIIb層も5～10cm程度の層厚で、平均6～8cm程度の安定的な堆積状態であった。このことは焼土燃焼面等のIIIb層の被覆状態や下層の堆積層厚から年代の新旧を想定する重要なデータとなった。富里2遺跡のアイヌ文化期の検出遺構や出土遺物は樽前bテフラを直接被覆するニタツナイ遺跡のIII層アイヌ文化期（厚真町教育委員会2009b）や上幌内モイ遺跡（III BB-51・厚真町教育委員会2009a）と厚幌1遺跡（III AS-01・02 厚真町教育委員会2004）の最も新しい段階の遺構とは異なりIIIa層中ないしはIIIb層上面で検出している。

段丘形成過程から遺物包含層に至るまでの堆積層序からの樽前dテフラ降下以降、特にIII層の堆積状態は後世の人為的層序改変がない限り、相対的な年代推定に有効な安定的な堆積層序と思われる。

（乾）

〔富里2遺跡 基本土層〕



- 0層：擾乱・耕作土
- I層：近現代表土 7.5YR3/1 黒褐色砂質土
- II層：近世火山噴出物及び黒色砂質腐植土
- a；樽前 a テフラ (Ta-a) 10YR6/4 にぶい黄褐色 砂質降下火山灰 1739 年降下。耕作により部分的に堆積。層厚 8cm 前後。
- b；黒色砂質腐植土層 10YR2/1 黒色 新千歳空港（美沢川流域の遺跡群）の調査における 0 層厚相当。
- c；駒ヶ岳 c2 テフラ (Ko-c2) 10YR8/3 浅黄褐色 砂質降下火山灰 1694 年降下。II b 層中において部分的に堆積している。
- d；樽前 b テフラ (Ta-b) 2.5YR7/3 浅黄色 細礫質降下軽石 1667 年降下。層厚 20 ～ 30cm 前後。
- e；有珠 b テフラ (Us-b) 2.5YR6/1 黄灰色 シルト質降下火山灰 1663 年降下。層厚数 mm。IIIa 層上面に堆積。
- III層：黒色腐植土
- a；砂質シルト 7.5YR2/1 黒色 II d-e 層を斑状に含む。層厚 1cm 前後。やや赤味あり。近世初頭遺物包含層。
- b；シルト 10YR1.7/1 黒色 やや粘性あり。層厚 10cm 前後。上位から中位が中近世アイヌ文化期遺物包含層。下位が弥文文化期包含層。IIIb 層と IIIc 層との層境に白頭山苫小牧火山灰 (B-Tm シルト質降下火山灰 10c 前半降下) が部分的に堆積する。
- c；砂質シルト 10YR2/3 黒褐色 層厚 10cm 前後。続縄文～縄文晩期後半の包含層。
- IV層：樽前 c テフラ (Ta-c) 10YR6/6 明黄褐色 砂質降下軽石 B.P. 2,500 年前降下。層厚 10cm 前後。1 層のフォルム・ユニット。
- V層：黒色腐植土
- a；シルト 10YR3/2 黒褐色 層厚 2cm 前後。縄文晩期前半の遺物包含層。
- b；シルト 10YR1.7/1 黒色 層厚 25cm 前後。縄文中・後期の遺物包含層。
- c；シルト 10YR2/3 黒褐色 層厚 15cm 前後。縄文前・中期の遺物包含層。
- VI層：漸移層 2.5YR4/6 褐色 暗褐色シルト。層厚 10cm 前後。縄文早期の遺物包含層。
- VII層：樽前 d テフラ B.P.8,000 年前降下。
- a；樽前 d1 テフラ (Ta-d1) 5G4/1 暗緑灰色 細礫質降下スコリア ($\phi 5 \downarrow$) 層厚 10cm 前後。
- b；樽前 d2 テフラ (Ta-d2) 5YR4/8 赤褐色 中礫質降下スコリア層厚 100cm 前後。部分的に水成風化による粘土化も有る。
- IX層：段丘堆積物
- a；10YR4/3 にぶい黄褐色 粘性極強粘土＝炭化物 ($\phi 10 \downarrow$) しまり中。
- b；10YR4/6 褐色 粘土＝礫 ($\phi 30 \downarrow$ 亜円～円)・炭化物 しまり中 粘性極強。
- c；10YR4/6 褐色 粘土＝砂・礫 ($\phi 50 \downarrow$ 亜円～円) しまりやや弱 粘性強。
- d；10YR6/2 灰黄褐色 粘土＝砂・礫 ($\phi 50 \downarrow$ 亜円～円) しまり硬 粘性弱＝En-ap ($\phi 20 \downarrow$)。
- e；10YR5/4 にぶい黄褐色 IXd-礫 ($\phi 10 \sim 100 \downarrow$ 亜角～円) 水成堆積層。
- X層：7.5Y2/2 オリーブ黒色 青灰色砂・礫 しまり硬 粘性なし ($\phi 10 \sim 100 \downarrow$ 亜円～円)。
- a；7.5YR6/8 棕色 En-ap の再堆積 Xa と互層堆積 しまり硬 粘性なし。
- b；10YR5/8 黄褐色 En-ap ($\phi 5 \downarrow$)＝青灰色砂・礫 ($\phi 30 \downarrow$ 亜円～円) しまり硬 粘性極弱。
- c；水成堆積層 7.5YR4/4 褐色 しまり硬 粘性なし 礫層。
- XI層：水成堆積層。
- XII層：10YR4/3 にぶい黄褐色 細砂 しまり中 粘性極弱。
- a；10YR4/3 にぶい黄褐色 しまり中 粘性弱。
- b；細砂-礫 ($\phi 5 \downarrow$ 亜円～円)。
- XIII層：Xa に類似 礫層 ($\phi 10 \sim 100 \downarrow$ 亜円～円)＝青灰色砂。

図 I-5 基本土層柱状図

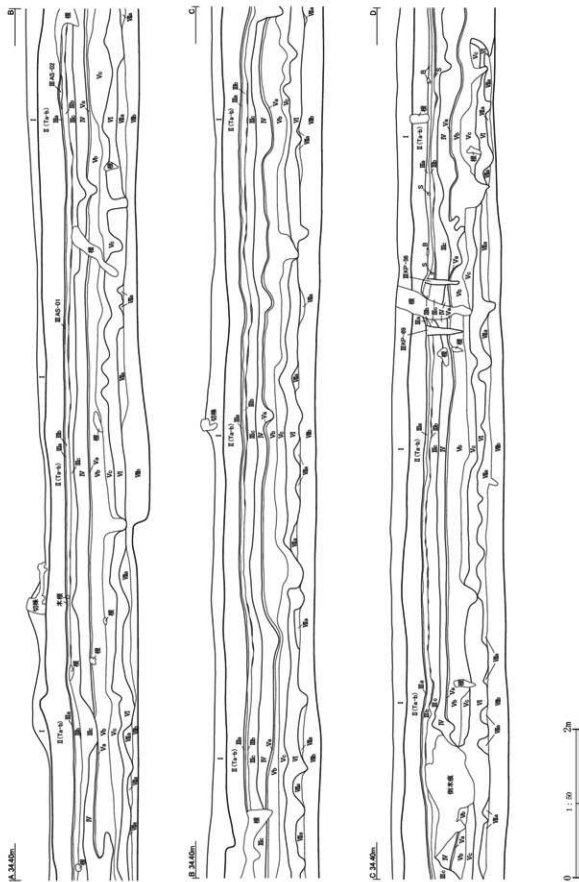


図1-6 上流側北西壁断面図1

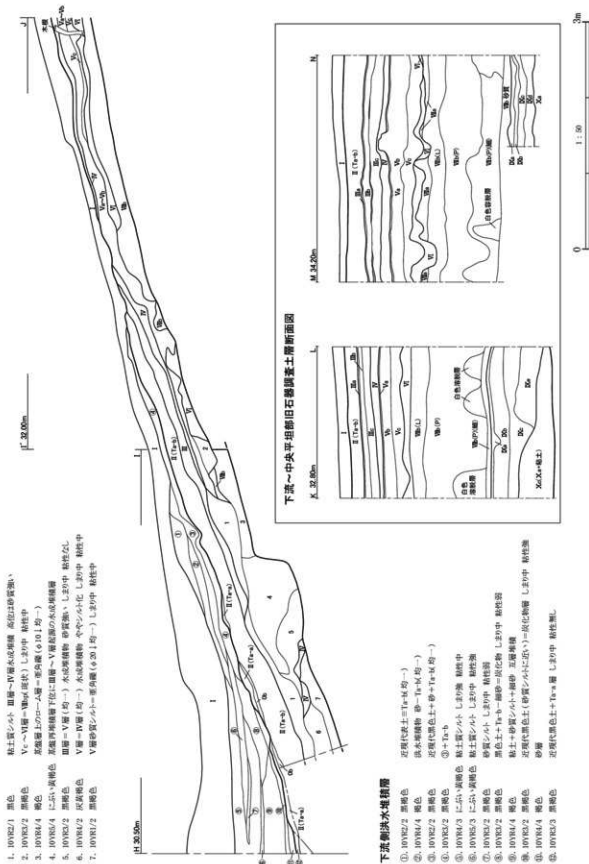


図 I-8 斜面～平坦部断面図

第二章 アイヌ文化期の調査

本章で取り扱うアイヌ文化期の遺構及び遺物は、Ta-b テフラ下層のⅢa層からⅢb層上位にかけて検出したものを対象とし、検出層位から近世アイヌ文化期に帰属する資料である。遺構は平地式住居跡1軒、建物跡2軒、焼土（炉跡）1ヶ所、灰集中4ヶ所、獣骨集中3ヶ所、礫集中3ヶ所検出している。遺物は播鉢片1点、礫石器15点、金属製品32点、礫735点、ガラス玉2点、漆塗膜片2点、平地式住居跡柱材3本の総計788点出土している。遺構・遺物が出土する地点は、次章の擦文文化期においても同様で段丘の北東側（厚真川上流側）に集中している。播鉢（陶器）は厚真町で初めて出土し、産地については道内で陶器が多く出土する上ノ国町の資料と比較を行った結果、瀬戸・美濃産の可能性が高く、太平洋側では同産地の出土例はないため厚真町の交易の幅広さ、物流の要所で貴重な品を取り入れるだけの資源の豊富さを物語る資料である。播鉢の産出地に関しては担当者の肉眼鑑定で報告を行ったものなので産地はあくまでも推定である。このような時期・産地の特定できる資料に関しては、今後の資料増加に伴って分析を行いたい。（奈良）

第1節 住居跡

1号平地式住居跡〔ⅢH-01〕（図Ⅱ-2～5 カラー7-1 図版3・4）

位置：I-21・J-21・22 規模：(440)×(447)cm

長軸方向：N-63° W 付属遺構：炉跡（HF01）・ⅢSB-01

確認・調査：Ⅲa層からⅢb層上位を調査中、溝跡の窪みより西側で棒状礫と獣骨の集中範囲を検出した。溝跡の窪みより西側は礫、金属製品、獣骨が散在しており、明らかに他の地点より密度が濃い様相を示していた。中でもTR2の地点は試掘段階で礫集中があることがわかっており、周辺からも同様の形態をもつ棒状礫が出土していたため、Ⅲb層上位まで全体の掘り下げを行った。結果、炉跡1ヶ所と灰集中1ヶ所を確認し、炉跡と棒状礫の出土層位、位置から住居跡の可能性が高いと考えられた。調査は個別に写真撮影を行い、礫と周辺獣骨の微細図、炉跡の平面、断面図の記

表Ⅱ-1 アイヌ文化期 遺構群一覧表

遺構名	時期	規模(cm)		グリッド	層位	付属・関連遺構	備考
		長軸	短軸				
ⅢH-01	アイヌ文化期	(440)	(447)	I-21・J-21・22	ⅢbU	HF01 ⅢSB-01	
建物跡1	アイヌ文化期	(260)	(230)	G-19-20	Ⅲc	ⅢF-12	
建物跡2	アイヌ文化期	190	150	F-18	IV		
ⅢF-01	アイヌ文化期	(61)	(60)	J-21	ⅢbU		ⅢH-01.HF01に変更
ⅢF-12	アイヌ文化期	-	-	G-20	ⅢbU		調査区外トレンチ
ⅢAS-01	アイヌ文化期	(112)	(160)	M-25	ⅢbU		ホタテガイ
ⅢAS-02	アイヌ文化期	(48)	(80)	M-25	ⅢbU		
ⅢAS-03	アイヌ文化期	41	20	L-24	ⅢbU		
ⅢAS-04	アイヌ文化期	59	50	I-21	ⅢbU		
ⅢBB-01	アイヌ文化期	480	(167)	J-K-22	ⅢbU		
ⅢBB-02	アイヌ文化期	361	(161)	J-22	ⅢbU		
ⅢBB-03	アイヌ文化期	390	(180)	G-19-20	ⅢbU	ⅢSB-02	
ⅢSB-01	アイヌ文化期	(440)	-	I-21・J-21・22	ⅢbU	ⅢH-01	
ⅢSB-02	アイヌ文化期	200	79	H-19	ⅢbU		
ⅢSB-03	アイヌ文化期	270	160	S-26	ⅢbU		

録をとってⅢc層下位で柱穴確認作業に移った。柱穴の調査は棒状礫の取上げ後、炉跡範囲を台状に残し、周辺をⅢc層からⅣ層まで掘り下げながらスタッフを用いてプランの確認を行った。柱穴の平面、断面の記録後に炉跡と合わせて完掘写真を撮って調査終了とした。伴う遺物はⅢb層上位で住居跡範囲内から出土したものを住居跡出土遺物として取り扱っている。

付属炉 (図Ⅱ-2)：灰層を伴う炉跡を1ヶ所検出している。炉跡は調査区南壁面に延びており、壁面で断面を確認したところ、2ヶ所の被熱層に不整形に広がる灰層が被覆している。灰層は約4cm、被熱層はⅢc層まで達している。灰層に被覆する黒色土は平均で2～3cm、平坦部分の堆積は1cm程度であるため、検出層位からも近世アイヌ文化期の所産であることに矛盾しない。

柱穴 (図Ⅱ-4)：柱穴として認識できたのは主体部で11本、付属部で8本の合計19本である。本住居跡は主体部の約半分が調査区外に広がるため、柱穴の本数はその限りではない。柱穴の間隔は主体部で235cm、付属部で171cmである。深さは主体部で平均が37cm、付属部で平均が24cmであり、主体部側がより深く打ち込まれている。柱穴の傾きは基本的に「外踏ん張り」をしており、構築方法はⅢHP-10の断面で観察すると、ある程度の深さまで掘削した後に杭を打ち込んでいることがわかる。住居の柱穴からは3本柱材が出土しており、B-72で硬化した後に取り上げを行っている。

構成礫 [ⅢSB-01] (図Ⅱ-3)：棒状礫は炉跡周辺の他、住居北側コーナー及び柱穴ラインに沿って比較的まとまって出土している。棒状礫の長短比は3.3～0.9で平均は2.2であるため楕円から長楕円の礫を意識的に持ち込んでいると思われる。礫の規模は長軸が約5～13.6cmと幅広いが、平均では7.2cmで標準偏差が2cm前後と比較的類似する礫が持ち込まれている。

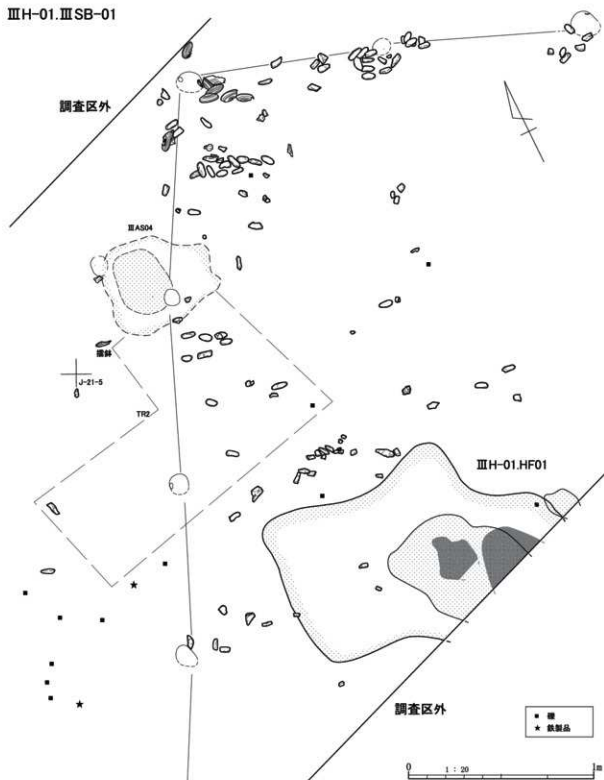
遺物出土状態：住居内から出土する遺物の殆どは棒状礫で、先述したように北側コーナーにまとまって出土するほか、付属部に礫が散在している。また、獣骨については棒状礫とともに主体部に散在している状態であるが、住居内にこうした分布を示すのはやや考えづらく、ⅢAS-04と合わせて住居廃絶後の資料と考えられる。カワシンジュガイ殻皮はニタツナイ遺跡で同様の分布状態を示していたことから伴うものと考えられる。播鉢片、金属製品、ガラス玉、漆塗膜片については現場段階で包含層出土の遺物として取り上げを行い、整理段階で住居内に含まれることが分かったために住居跡出土の遺物に加えている。播鉢はⅢAS-04の西側10cmの地点に出土しているが、ⅢAS-04からはガラス玉や縫い針などの微細遺物が出土していないことと、ⅢAS-04に伴うにはやや距離があることから住居出土の遺物として取り扱っている。

出土遺物 (図Ⅱ-5)：1は播鉢の口縁部片である。口縁部は直立からやや内湾し、体部はやや外傾して立ち上がる。口唇部は角状に整形され、口縁部直下には鐮状の段差が一段認められ、下から上に向かって調整されている。内面は卸し目が6本認められるが、軸が入り込んでいるため明瞭ではない。釉については色調から錆釉と推定され、明るい部分が2.5Y5/6の明赤褐色、暗い部分が5YR3/1の暗赤灰を呈している。破断面の色調は7.5Y7/3にぶい橙色で、器表面はややざらつき、2～5mmの亜角礫が少量混入している。産地については上記の特徴から瀬戸・美濃産であると考へら

表Ⅱ-2 ⅢH-01属性表

押図 番号	図版 番号	遺構名	グリッド	層位	長軸方向	規模(cm)				柱穴			付属遺構
						主体部		付属部		本数			
						長軸	短軸	長軸	短軸	主体	付属	その他	
Ⅱ-2	3-1	ⅢH-01	I-J-21 J-22	ⅢbU	N-63° W	(440)	(447)	(290)	(318)	(11)	(8)	-	HF01 ⅢSB-01

ⅢH-01.ⅢSB-01



図Ⅱ-3 ⅢH-01.HF01及びⅢSB-01平面図

表Ⅱ-3 ⅢH-01付属炉属性表

挿図 番号	図版 番号	遺構名	グリッド	層位	タイプ	平面形	規模(cm)			灰・骨片 の有無	備考
							長軸	短軸	厚さ		
Ⅱ-2・3	3-4	ⅢH-01. HF01	J-21	ⅢbU	地床炉	不整形	(61)	(60)	8	有	火床2ヶ所

ⅢH-01.HP

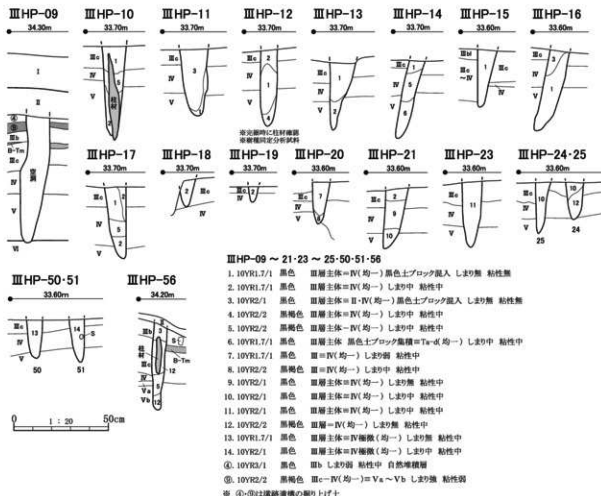
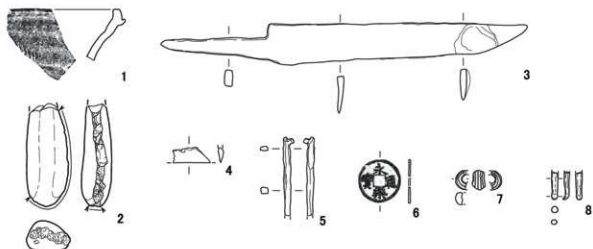


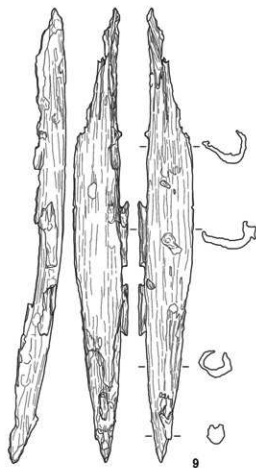
図 II-4 ⅢH-01.HP断面図

表 II-4 ⅢH-01柱穴属性表

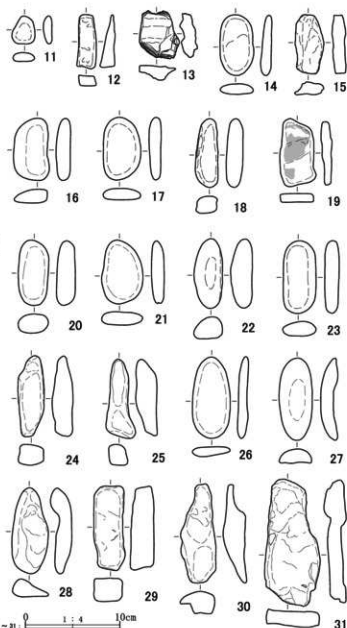
挿図 番号	図版 番号	遺構名	規模(cm)			傾き(度)	タイプ	備考
			上端	下端	深さ			
Ⅱ-4	4-2	ⅢHP-09	12	2	70	4°	打込み	
Ⅱ-4	4-4	ⅢHP-10	13	0	50	0°	打込み	柱材検出
Ⅱ-4	-	ⅢHP-11	15	2	35	3°	打込み	
Ⅱ-4	4-6	ⅢHP-12	8	0	40	0°	打込み	柱材先端検出
Ⅱ-4	-	ⅢHP-13	14	0	35	5°	打込み	
Ⅱ-4	4-8	ⅢHP-14	8	0	48	13°	打込み	
Ⅱ-4	-	ⅢHP-15	10	0	30	6°	打込み	
Ⅱ-4	4-9	ⅢHP-16	10	0	44	16°	打込み	
Ⅱ-4	4-10	ⅢHP-17	11	0	38	7°	打込み	
Ⅱ-4	-	ⅢHP-18	8	0	14	2°	打込み	
Ⅱ-4	-	ⅢHP-19	5	0	8	0°	打込み	
Ⅱ-4	-	ⅢHP-20	10	0	22	7°	打込み	
Ⅱ-4	4-11	ⅢHP-21	13	0	33	10°	打込み	
Ⅱ-4	-	ⅢHP-23	10	0	34	2°	打込み	
Ⅱ-4	-	ⅢHP-24	8	0	27	3°	打込み	
Ⅱ-4	-	ⅢHP-25	9	0	19	2°	打込み	
Ⅱ-4	4-12	ⅢHP-50	9	2	20	3°	打込み	
Ⅱ-4	4-12	ⅢHP-51	8	2	23	4°	打込み	
Ⅱ-4	-	ⅢHP-56	7	2	44	4°	打込み	柱材検出



ⅢHP-10 柱材



ⅢH-01.ⅢSB-01



ⅢHP-12 柱材



圖Ⅱ-5 ⅢH-01 出土遺物

表Ⅱ-5 ⅢH-01出土遺物・柱材属性表

棟図 番号	図版 番号	グリッド/ 遺構名	遺物 番号	遺物名	分類	層位	計測値(mm)			重量 (g)	材質	備考
							長軸	短軸	厚さ			
Ⅱ-5-1	カラー7-1	ⅢSB-01	972	播鉢	-	Ⅲa	-	-	6.6	24.49	Cr.	瀬戸・美濃
Ⅱ-5-2	17-1-1	ⅢSB-01	868	たたき石	ⅡD	Ⅲa	80.6	32.7	23.8	80.00	Sa.	被熟
Ⅱ-5-3	17-1-2	J-22	21	刀子	-	Ⅲa	177.0	25.0	4.4	34.75	Fe.	
Ⅱ-5-4	17-1-3	ⅢSB-01	5	刀子片	-	Ⅲa	20.0	11.0	3.2	0.69	Fe.	
Ⅱ-5-5	17-1-4	I-21	1068	棒状鉄製品	-	ⅢbL	41.0	3.0	3.8	1.83	Fe.	根穴
Ⅱ-5-6	17-1-5	I-21	3	古銭	-	Ⅲa	23.0	23.0	0.8	1.58	Cu.	永楽銭
Ⅱ-5-7	カラー7-3	I-21	4	ガラス玉	-	Ⅲa	10.4	(5.8)	6.7	0.54	G.	コバルトブルー
Ⅱ-5-8	17-1-6	HF01	2190	骨角器	-	-	(14.3)	3.4	3.2	0.20	B.	
-	17-1-7	HF01	2189	骨角器	-	-	(9.0)	4.0	4.0	0.10	B.	
-	-	I-21	974	漆塗膜片	-	Ⅲa	14.4	4.4	0.1<	0.1<	JP.	未掲載
Ⅱ-5-9	17-1-8	ⅢHP10	-	ⅢHP10柱材	-	-	(360.0)	(48.0)	(14.4)	-	W.	
Ⅱ-5-10	17-1-9	ⅢHP12	-	ⅢHP12柱材	-	-	(55.8)	(14.7)	(10.2)	-	W.	

れ、口唇部の形態は大塚福年の4期に相当し、年代も1590～1640年と矛盾しない。2は側縁に剥離、端部に敲打痕をもつ砂岩製のたたき石である。棒状礫を素材とする資料で、比較的脆い素材を用いている。端部が平坦になるほど敲打を行っていないため、一時的に使用した石器の可能性も考えられる。住居内からは他の石器は出土していない。

3～6は金属製品で、3は完形の刀子である。断面は茎部分が隅丸角状、刃部分は断面逆三角形の形状をしている。棟区は明瞭であるが、刃区は変換点がなく不明瞭、目釘孔等の痕跡は認められない。刃部はやや内湾気味であるため使用による目減りの可能性も考えられる。4は不明板状鉄製品であるが、断面形態がV字状を呈することから刀子の破片であると考えられる。5は不明棒状鉄製品で断面は角状を呈し、一端が二股に変形している。所見では針と異なり、別な金属製品の付属物であったかと思われる。6は永楽通寶の古銭で単体の出土である。方形の孔には紐擦れなどの痕跡は認められない。7はガラス玉で半分ほど欠損している。色調はコバルトブルーを呈し、成分は鉛ガラスである(第5部 第1章 第2節)。表面は風化が激しく、巻き付け単位ごとに剥れが進行し、破断面の観察から4回巻きつけていることが分かる。8は炉跡(ⅢH-01.HF01)のフローテーションから回収した骨角器で、断面は丸状、先端はヘラ状に成形されている。一端を欠損しており、残存部分で14mmと短いため全体の形状は不明である。また、面取りを行っただけの骨角器も1点図版17-1-7に掲載している。9・10は柱穴から出土した柱材である。9は長さ36cmある柱材で、先端部分は僅かに面取りを行っている部分が確認できる。断面は最大幅4.8cmあるが、腐食が激しく材の中身は空洞化しているため、形状は判別できない。10は先端部と考えられる資料だが、腐食が激しく殆ど原形をとどめていない。また、ⅢHP-56にも同様の柱材を確認しているが、柱材の外側のみ残存しているだけなので図示していない。これら柱材は10をサンプルとして樹種同定を行い、紅葉樹のバラ科ナン亜科で、北海道ではナナカマド属であるという結果を得ている(第5部 第1章 第3節)。11～31は構成礫で、13は石灰塊と考えられ、それ以外は砂岩主体の棒状礫である。この他、掲載していないが住居範囲内から漆塗膜片が出土している。色調は内面が黒色、外面は2.5YR4/8の赤褐色を呈している。

時期: 炉跡(ⅢH-01.HF01)から採取した炭化物のAMS年代測定法では16c～17c前半という結果を得ており、炉跡検出層位と黒色土の現場所見と一致し近世アイヌ文化期に帰属する。(奈良)

表Ⅱ-6 ⅢSB-01礫屬性表

採回 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	層位	状態	計測値(mm)				長短比	重量 (g)	被熱	材質	備考			
						長軸	標準 偏差	短軸	標準 偏差						厚さ	標準 偏差	
-	17-2	-	885	ⅢB	亮形	68.9	-3.4	32.0	-3.1	20.0	2.7	2.2	0.0	47.0	-	Sa	
-	17-2	-	892	ⅢB	亮形	87.3	15.2	28.3	-6.2	21.4	4.1	3.1	0.9	71.5	-	Sa	
-	17-2	-	884	ⅢB	亮形	64.6	-7.7	40.9	5.8	18.9	1.6	1.6	-0.6	73.9	-	Sa	
Ⅲ-5-30	17-2	-	950	ⅢB	亮形	105.3	33.0	35.7	0.5	24.7	7.4	3.0	0.8	73.3	-	Sa	
-	17-2	-	931	ⅢB	亮形	75.0	2.7	31.3	-3.9	17.3	0.0	2.4	0.2	38.3	-	Mod	
-	17-2	-	938	ⅢB	亮形	49.3	-23.0	19.0	-16.2	21.7	4.4	2.6	0.4	23.6	-	Mod	
Ⅲ-5-13	17-2	-	952	ⅢB	亮形	48.9	-23.4	42.8	7.6	15.0	-2.3	1.1	-1.0	32.2	-	Ptr	
-	17-2	-	849	ⅢB	亮形	68.3	-14.0	56.8	21.6	12.0	-5.3	1.0	-1.1	31.3	-	Sa	
-	17-2	-	854	ⅢB	亮形	73.1	0.8	38.0	2.9	23.2	5.9	1.9	-0.2	80.8	-	Sa	
-	17-2	-	934	ⅢB	亮形	94.7	22.4	58.0	22.9	20.2	2.9	1.6	-0.5	96.5	-	App	石村同定No.74
Ⅲ-5-21	17-2	-	855	ⅢB	亮形	66.6	-5.7	43.5	8.4	14.5	-2.8	1.5	-0.6	50.2	-	Sa	
-	17-2	-	853	ⅢB	亮形	77.2	4.9	36.4	1.2	12.7	-4.6	2.1	0.0	47.5	●	Sa	
Ⅲ-5-14	17-2	-	847	ⅢB	亮形	64.0	-8.3	35.9	0.7	12.0	-5.3	1.8	-0.4	46.0	-	App	石村同定No.70
Ⅲ-5-18	17-2	-	874	ⅢB	亮形	72.2	-0.1	23.3	-11.9	17.8	0.5	3.1	1.0	40.5	-	Sa	
-	17-2	-	880	ⅢB	亮形	61.6	-10.7	68.1	33.0	16.6	-0.7	0.9	-1.3	45.7	-	Sa	
-	17-2	Ⅲ501	880	ⅢB	亮形	67.5	-4.8	34.8	-0.4	17.9	0.6	1.9	-0.2	60.9	-	Sa	955融合
-	17-2	-	927	ⅢB	亮形	79.4	7.1	37.2	2.0	15.5	-1.8	2.1	0.0	66.6	-	Sa	
-	17-2	-	886	ⅢB	亮形	84.6	12.3	31.5	-3.6	16.3	-1.0	2.7	0.5	57.5	-	Sa	
-	17-2	-	916	ⅢB	亮形	53.4	-18.9	38.8	3.6	19.6	2.3	1.4	-0.8	54.6	-	Sa	
-	17-2	-	924	ⅢB	亮形	49.0	-23.3	26.0	-9.1	16.7	-0.6	1.9	-0.3	17.3	-	Sa	
-	17-2	-	862	ⅢB	亮形	71.3	-1.0	29.3	4.1	21.8	4.5	1.8	-0.3	84.8	-	Sa	
Ⅲ-5-12	17-2	-	935	ⅢB	亮形	96.7	-15.6	17.0	-18.1	18.1	0.8	3.3	1.2	19.0	-	Sa	
-	17-2	-	943	ⅢB	亮形	61.0	-2.2	23.1	-4.2	13.8	-5.1	2.6	-0.4	54.8	-	Mod	
-	17-2	-	863	ⅢB	亮形	79.4	7.1	36.8	1.7	18.0	0.7	2.2	0.0	57.1	-	Sa	
-	17-2	-	866	ⅢB	亮形	79.5	7.2	31.2	-3.9	16.4	-0.9	2.5	0.4	48.4	-	Sa	
Ⅲ-5-26	17-2	-	911	ⅢB	亮形	85.7	13.4	40.0	4.9	10.1	-7.2	2.1	0.0	46.1	-	Sa	
-	17-2	-	881	ⅢB	亮形	77.0	4.7	41.7	6.6	12.8	-4.5	1.8	-0.3	79.7	-	Sa	
-	17-2	-	880	ⅢB	亮形	76.0	3.7	36.3	-8.9	11.0	-6.3	2.9	0.7	27.7	-	Sa	
Ⅲ-5-25	17-2	-	893	ⅢB	亮形	83.8	11.5	31.3	-3.8	23.4	6.1	2.7	0.5	51.7	-	Sa	
Ⅲ-5-17	17-2	-	910	ⅢB	亮形	65.5	-6.8	39.5	4.3	12.0	-5.3	1.7	-0.5	51.0	●	Sa	
-	17-2	-	904	ⅢB	亮形	60.1	-12.2	30.9	-4.3	17.3	0.0	1.9	-0.2	59.5	-	Sa	
-	17-2	-	930	ⅢB	亮形	73.7	1.4	30.4	-4.7	17.0	-0.3	2.4	0.3	36.4	●	Sa	
Ⅲ-5-20	17-2	-	850	ⅢB	亮形	69.2	-3.1	33.0	-2.1	21.6	4.3	2.1	-0.1	65.0	-	Sa	
-	17-2	-	861	ⅢB	亮形	69.0	-0.3	29.6	-5.2	18.2	0.9	2.2	0.2	52.0	-	Sa	
Ⅲ-5-23	17-2	-	890	ⅢB	亮形	76.7	4.4	34.5	-0.6	15.9	-1.4	2.2	0.1	73.8	-	Sa	
-	17-2	-	919	ⅢB	亮形	93.6	21.3	34.5	-0.7	15.8	-1.5	2.7	0.6	59.0	-	Sa	
Ⅲ-5-29	17-2	-	909	ⅢB	亮形	90.0	17.7	30.0	-5.1	25.3	8.0	3.0	0.8	133.5	-	Sa	
-	17-2	-	852	ⅢB	亮形	70.0	-2.3	42.2	7.1	13.2	-4.1	1.7	-0.5	52.0	-	Sa	
-	17-2	-	905	ⅢB	亮形	77.9	5.6	29.2	-5.9	23.0	5.7	2.7	0.5	65.7	-	Sa	
-	17-2	-	860	ⅢB	亮形	60.3	-12.0	30.7	-4.5	15.6	-1.7	2.0	-0.2	45.7	-	Sa	
-	17-2	-	954	ⅢB	亮形	70.7	-1.6	28.3	-6.9	16.6	-0.7	2.5	0.3	42.3	●	Sa	
-	17-2	-	898	ⅢB	亮形	80.1	-13.2	45.7	10.5	32.9	15.6	1.3	-0.9	109.7	-	Grn	
-	17-2	-	917	ⅢB	亮形	47.5	-24.8	46.7	11.6	16.8	-0.5	1.0	-1.1	41.3	-	Sa	
-	17-2	-	937	ⅢB	亮形	70.1	-2.2	41.1	6.0	13.8	-3.5	1.7	-0.4	74.7	-	App	
Ⅲ-5-16	17-2	-	887	ⅢB	亮形	65.9	-6.4	35.4	0.3	14.9	-2.4	1.9	-0.3	48.7	-	Sa	
-	17-2	-	906	ⅢB	亮形	72.8	6.5	42.6	7.5	9.0	-8.3	1.7	-0.4	35.0	●	Sa	
-	17-2	-	902	ⅢB	亮形	84.0	11.7	26.6	-8.5	17.1	-0.2	3.2	1.0	43.1	-	Sa	
-	17-2	-	897	ⅢB	亮形	71.3	-1.0	33.0	-2.1	14.4	-2.9	2.2	0.0	47.2	●	Sa	
-	17-2	-	877	ⅢB	亮形	74.4	2.2	36.5	1.4	20.1	2.8	2.0	-0.1	75.5	-	Sa	
-	17-2	-	870	ⅢB	亮形	74.5	2.2	40.0	4.9	19.2	1.9	1.9	-0.3	72.2	-	Sa	
-	17-2	-	921	ⅢB	亮形	73.0	0.7	35.8	0.7	12.5	-4.8	2.0	-0.1	29.4	●	Sa	
-	17-2	-	900	ⅢB	亮形	77.2	4.9	34.3	-0.8	9.6	-7.7	2.3	0.1	29.2	-	Sa	
Ⅲ-5-22	17-2	-	928	ⅢB	亮形	72.5	0.2	31.3	-3.8	24.0	2.1	2.3	0.2	63.0	●	Sa	
-	17-2	-	942	ⅢB	亮形	53.7	-18.6	24.8	-10.3	19.4	2.1	2.2	0.0	25.5	-	Sa	
Ⅲ-5-11	17-2	-	914	ⅢB	亮形	30.0	-42.3	24.7	-10.9	9.3	-7.9	1.2	-0.9	18.6	-	Sa	
-	17-2	-	951	ⅢB	亮形	41.8	-30.5	27.0	-8.1	17.7	0.4	1.5	-0.6	23.5	-	Sa	
Ⅲ-5-15	17-2	-	936	ⅢB	亮形	61.7	-10.6	30.1	-5.0	14.1	-3.2	2.1	-0.1	29.9	-	Sa	
-	17-2	-	964	ⅢB	亮形	56.7	-15.6	17.7	-17.4	11.1	-6.2	3.2	1.0	11.2	●	Sa	
Ⅲ-5-19	17-2	-	878	ⅢB	亮形	71.6	-0.7	36.6	1.4	10.2	-7.1	2.0	-0.2	39.8	●	Sa	
-	17-2	-	867	ⅢB	亮形	73.8	1.5	40.3	5.2	15.0	-2.3	1.8	-0.3	56.7	-	Sa	
-	17-2	-	865	ⅢB	亮形	89.8	17.6	43.6	8.5	11.2	-6.1	2.1	-0.1	54.4	-	Sa	
-	17-2	-	883	ⅢB	亮形	72.8	0.5	32.3	-2.8	20.4	3.1	2.3	0.1	64.5	-	Sa	
-	17-2	-	891	ⅢB	亮形	87.4	15.1	44.1	8.9	17.0	-0.3	2.0	-0.2	82.1	-	Sa	
Ⅲ-5-28	17-2	-	858	ⅢB	亮形	89.5	17.2	37.9	2.8	19.2	1.9	2.4	0.2	65.1	●	Sa	
-	17-2	-	857	ⅢB	亮形	73.9	1.6	28.8	-6.3	17.0	-0.3	2.6	0.4	40.0	-	Sa	
-	17-2	-	864	ⅢB	亮形	70.5	-1.8	24.3	-10.9	21.4	4.1	2.9	0.8	58.3	-	Sa	
-	17-2	-	873	ⅢB	亮形	76.2	3.9	38.1	3.0	19.5	2.3	2.0	-0.2	68.8	-	Sa	
Ⅲ-5-24	17-2	-	879	ⅢB	亮形	84.7	12.4	28.2	-7.0	21.1	3.8	3.0	0.9	58.7	-	Sa	
-	17-2	-	956	ⅢB	亮形	87.1	14.8	36.9	1.8	29.4	12.1	2.4	0.2	110.5	-	Sa	
Ⅲ-5-27	17-2	-	958	ⅢB	亮形	85.8	13.5	34.6	-0.5	15.8	-1.5	2.5	0.3	56.5	-	Sa	
Ⅲ-5-31	17-2	-	966	ⅢB	亮形	136.0	63.7	57.7	22.6	24.9	7.6	2.4	0.2	170.7	●	Sa	
亮形合計						5132.4		2493.0		1227.5		152.9		3963.0			
亮形平均値						72.3		35.1		17.3		2.2		55.8			
遺物重量																	5372.2

第2節 建物跡

建物跡1 (図II-6 図版5-1~6)

位置：G-19・20 規模：(260) × (230)cm

確認・調査：調査区北側、IIIb-03、IIIb-02を検出・調査後、IIIc層上面で遺構確認を行ったところ、10cm程の円形プランを検出した。半載した結果、覆土がIIIc層を主体とする柱穴であることを確認した。組み合わせとなる柱穴が検出される可能性があることから周囲を精査し、調査区北壁に向かって直角に交わる4基の柱穴を検出したことから、建物跡として調査した。柱穴の半載は、「外踏張り」を想定し、建物跡の長短軸方向で半載した。諸記録を行い、調査を終了した。

規模は2.6×2.3m程あるが、調査区壁際での検出であり、調査区外に広がる可能性がある。また、溝状遺構の規模を確認する目的で、建物跡から北側2m程に設けた調査区外トレンチ（溝状TR1）のIIIb層から獣骨と灰層が伴う炉跡（III F-12）を1基検出した。屋内炉と考えられることから、検出した建物跡は平地式住居跡の一部を構成する可能性がある。

柱穴：5基検出した。覆土はしまり、粘性ともに弱いIII層が主体である。すべて打込みで、いずれも内側に傾斜が認められる「外踏張り」のものである。柱穴間は約1.0mの間隔である。

時期：III F-12が伴う可能性が高いこと、覆土の特徴及び周辺遺構の時期から近世アイヌ文化期の時期が考えられる。

建物跡2 (図II-6 図版7-2・4・13)

位置：F-18 規模：190×150cm

確認・調査：調査区東側のIV層上面遺構確認調査で10cm程の円形プランを複数基検出し、半載して柱穴であることを確認した。建物跡の可能性があるので、組み合わせとなる柱穴を検出するため周囲を精査した。このうち4基が組み合わせとなることを確認し、建物跡として調査した。柱穴は建物跡の長短軸方向で半載し、土層断面を観察した。規模及び柱穴間は1.9×1.5mあり、平面形は方形、4本柱の構造であることから「倉庫」等の可能性が考えられる。内側に柱穴1基を検出したが中央に位置しないことから、建物跡2には伴わないものと考えられる。

柱穴：4基検出した。覆土はIV層が多く混入するIIIc層を主体とし、しまり、粘性ともに弱い。すべて打込みで、内側に傾斜が認められる「外踏ん張り」のものである。

時期：周辺の遺構の時期から近世アイヌ文化期と考えられる。

(山田)

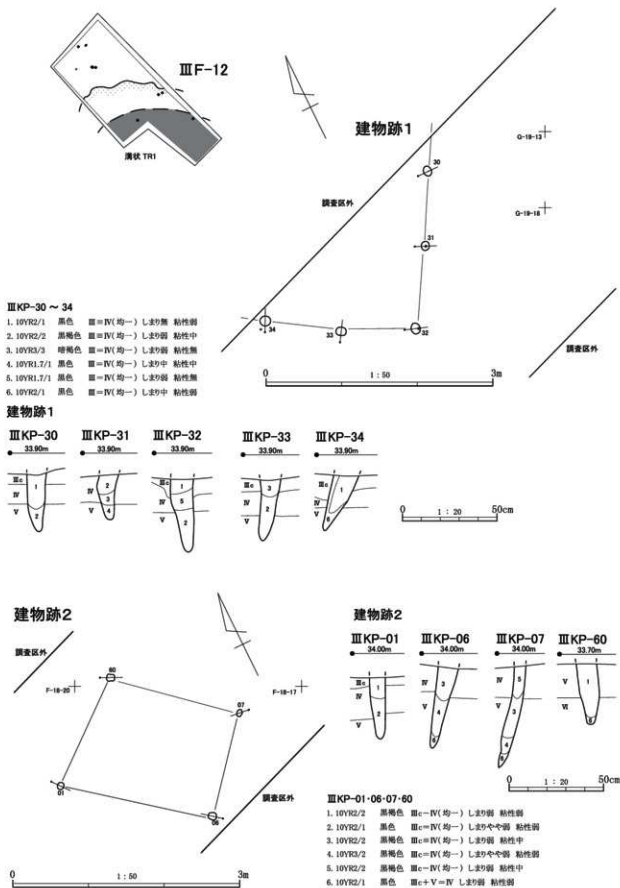
第3節 杭跡

平地式住居跡、建物跡のように組み合わせが認められない、単独あるいは列として検出したものを「杭跡」として扱った。

杭跡 (図II-7 図版7-3・5~12・14・15)

位置：F-18・G-18・19・H-19・20・I-20・21・J-21・22・K-22

確認・調査：平地式住居跡、建物跡調査時に検出したもののほか、多くはIIIc~IV層上面遺構確認調査で検出し、計30基を杭跡として調査した。空間的には5ヶ所のまとまりとして捉えられ、調査区東側から順に建物跡2と重複するもの、建物跡1の周辺、建物跡1から溝跡までの間、平地式住居跡の周辺、獣骨集中1と重複するものがある。掘方を持つものは認められず、いずれも打込みのものである。柱穴覆土はいずれもIIIc層が主体である。遺構周辺に分布しているが、建物跡2と



図Ⅱ-6 建物跡1・2 平面及び断面図

表II-7 建物跡1・2柱穴属性表

建物跡1 [2.6m×2.3m]

棟号	図版番号	遺構名	規模(cm)			傾き(度)	タイプ	備考
			上端	下端	深さ			
II-6	5-3	IIIKP30	10	0	30	3°	打込み	
II-6	5-4	IIIKP31	10	0	24	1°	打込み	
II-6	5-5	IIIKP32	12	0	38	6°	打込み	
II-6	5-2	IIIKP33	11	0	32	6°	打込み	
II-6	5-6	IIIKP34	13	0	31	19°	打込み	

建物跡2 [1.9m×1.5m]

棟号	図版番号	遺構名	規模(cm)			傾き(度)	タイプ	備考
			上端	下端	深さ			
II-6	7-2	IIIKP01	8	2	32	2°	打込み	
II-6	7-4	IIIKP06	10	0	48	9°	打込み	
II-6	-	IIIKP07	6	0	54	12°	打込み	
II-6	7-13	IIIKP60	11	4	32	7°	打込み	

重複するものを除き、各遺構との関係は不明である。

IIIKP-3～5・8・28・29：調査区東側、建物跡2周辺で6基検出した。このうち、建物跡2に重複する3・5を含む3～5・8は並んで検出した。8は規模が若干異なる。28・29は近接して検出しており、規模、覆土の特徴、傾きが類似することから28・29は関連するものと考えられる。

IIIKP-47・52・61～63：建物跡1周辺で4基検出した。52・61～63はV層調査時に検出したものである。47は溝状遺構より新しいことを断面で確認した。63は建物跡1と重複して位置する。

IIIKP-36～41・48・64・65：建物跡1から溝跡までの範囲で9基検出した。36～41・48はIIIc層上面、64・65はVII層上面で検出した。36・37・64・65は近接して列をなすことから関連すると考えられる。

IIIKP-42～44・49・53・54：平地式住居跡周辺で6基検出した。42～44は溝跡の縁に並んで検出し、溝跡より新しいことを確認した。53・54は平地式住居跡を構成するものの可能性がある。49は平地式住居跡の出入口部の柱穴に近接しており、付属する可能性がある。

IIIKP-22・26・27・45・46：獣骨集中1周辺で5基検出した。22・26・27は約1.5mの間隔で並んでおり、関連すると思われる。また、新旧関係不明ながら22・26・27・45・46は獣骨集中1と重複もしくは近接している。平地式住居跡と獣骨集中1の関係性が不明であるが、どちらかに関連するものと考えられる。

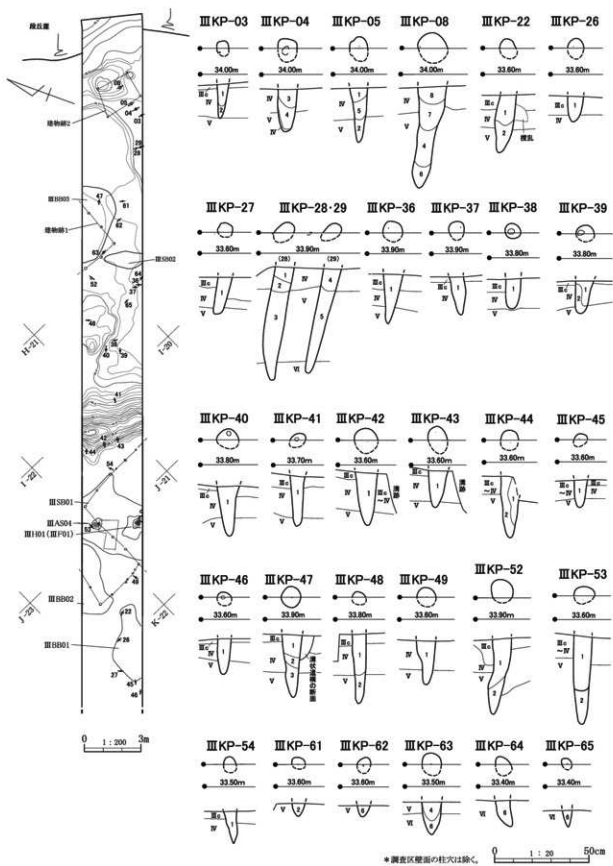
時期：杭跡の覆土はIIIa～IIIb層主体のもの、IIIc層主体のものが認められる。IIIa～IIIb層主体のものは深度が深く、しまり、粘性ともに弱い特徴がある。一方、IIIc層主体のものは深度が浅く、しまり、粘性がややあることから、IIIa～IIIb層主体のものよりIIIc層主体のものが古いと考えられる。いずれも近世アイヌ文化期に収まることから、近世段階での時期差が想定される。(山田)

第4節 焼土・灰集中

III F-12 (図II-8・11)

位置：G-20 規模：-

確認・調査：本遺構は次章で述べる区画遺構の範囲確認を行った際に検出したものである。調査区外のトレンチは溝状TR1～5、溝跡TR1～4の9ヶ所を調査し、III F-12は溝状TR1で確認されている(図I-3)。調査区外はトレンチ調査であるが、周囲の遺物出土状態からアイヌ文化期の遺構・遺物が濃いことが予想されたため、通常の包含層調査と同様にTa-bテフラを除去した後に移植ゴテで掘り下げを行った。IIIa層では獣骨を検出したため平面の記録をとって取り上げた後、IIIb層上位まで掘り下げ灰層を検出した。平面の記録後、東側壁面を断面観察したところ地山被熱層を確認したため炉跡と判断した。この際、炭化種子及び微細遺物を回収する目的で灰層のサンプリングを行った。III F-12は灰層の残存状態から住居跡など屋内の炉跡に関連するものと考えられ、第



図Ⅱ-7 杭跡分布図及び平面・断面図

III KP 土層注記

III KP-03 ~ 05-08-61 ~ 65

1. 10YR2/2 黒褐色 III=IV(均一)しまり弱 粘性弱
 2. 10YR2/1 黒色 III=IV(均一)しまりやや弱 粘性弱
 3. 10YR2/2 黒褐色 III=IV(均一)しまり弱 粘性中
 4. 10YR3/2 黒褐色 III=IV(均一)しまりやや弱 粘性弱
 5. 10YR2/1 黒色 III=IV(均一)ブロック状
 しまり弱 粘性弱
 6. 10YR2/1 黒色 III+V=IV しまり弱 粘性弱
 7. 10YR2/2 黒褐色 III=IV(均一)しまり弱 粘性中
 8. 10YR3/4 暗褐色 IV=III<(均一)しまり中 粘性弱

III KP-22

1. 10YR2/1 黒色 III層主体=IV(均一)しまり強
 粘性中
 2. 10YR2/2 黒褐色 III層主体=IV(均一)しまり中
 粘性弱

III KP-26

1. 10YR2/2 黒褐色 III層主体=IV(均一)しまり強
 粘性中

III KP-27

1. 10YR2/2 黒褐色 III=IV(均一)しまり強 粘性中

III KP-28-29

1. 10YR3/4 暗褐色 III=IV(均一)しまり中 粘性無
 2. 10YR4/2 灰黒褐色 IV=III(均一)しまり中 粘性無
 3. 10YR2/2 黒褐色 III=IV(均一)しまり中 粘性中
 4. 10YR2/1 黒色 III=IV(均一)しまり中 粘性中
 5. 10YR2/3 黒褐色 III=IV(均一)しまり弱 粘性中

III KP-36

1. 10YR2/1 黒色 III=IV(均一)しまり強 粘性中

III KP-37

1. 10YR1.7/1 黒色 III=IV(均一)しまり強 粘性中

III KP-38

1. 10YR2/1 黒色 III層主体=IV層級(均一)しまり強
 粘性中

III KP-39

1. 10YR2/2 黒褐色 III=IV(均一)しまり弱 粘性弱
 2. 10YR3/3 暗褐色 IV=III(均一)しまり強 粘性弱

III KP-40

1. 10YR2/1 黒色 III層主体=IV層級 しまり無、もろい
 粘性中

III KP-41

1. 10YR2/1 黒色 III=IV(均一)しまり弱 粘性中

III KP-42

1. 10YR2/1 黒色 III=IV(均一)しまり弱 粘性弱

III KP-43

1. 10YR2/1 黒色 III=IV層級(均一)しまり中 粘性中

III KP-44

1. 10YR2/1 黒色 III=IV(均一)しまり無 粘性中
 2. 10YR2/1 黒色 III=IV(均一)しまり弱 粘性中

III KP-45

1. 10YR2/1 黒色 III=IV(均一)しまり中 粘性中

III KP-46

1. 10YR2/1 黒色 III=IV(均一)しまり弱 粘性中

III KP-47

1. 10YR2/1 黒色 III=IV(均一)しまり中 粘性中
 2. 10YR2/3 黒褐色 IV+III(均一)しまり中 粘性無
 3. 10YR2/2 黒褐色 III=IV(均一)しまり中 粘性中

III KP-48

1. 10YR2/1 黒色 III=IV(均一)しまり弱 粘性中
 2. 10YR2/1 黒色 III=IV(均一)しまり中 粘性中

III KP-49

1. 10YR2/1 黒色 III=IV(均一)しまり中 粘性中

III KP-52

1. 10YR1.7/1 黒色 III=IV(均一)しまり弱 粘性中
 2. 10YR2/1 黒色 III=IV(均一)しまり中 粘性中

III KP-53

1. 10YR2/1 黒色 III=IV(均一)しまり無 粘性中
 2. 10YR2/1 黒色 III=IV(均一)しまり中 粘性中

III KP-54

1. 10YR1.7/1 黒色 III=IV(均一)しまり中 粘性中

2節の建物跡1は住居の柱穴である可能性が高い。断面図等は時間的制約と調査区外の調査であったため記録していないが、灰層に黒色土を約1cm被覆しており近世アイヌ文化期の所産であると思われる。また、上位から出土した獣骨は黒色土を挟むことから近世アイヌ文化期の中でもやや新しい時期に帰属すると思われる。

出土遺物 (図II-11-1)：フローテーションより破損したガラス玉を1点回収した。1は青色を呈する蜜柑玉の欠損品でおよそ半分程度残存している。成分分析は行っていないが、表面が銀化しており、風化の度合いから鉛ガラスと考えられる。

時期：検出層位から近世アイヌ文化期(建物跡1に伴ない住居跡の可能性あり)。(奈良)

III AS-01 (図II-8・11 図版5-7・6-1・18-1)

位置：M-25 **規模**：(112) × (160) × (6) cm

確認・調査：本遺構は火山灰除去を行っている際、III層上面で確認したものである。調査は灰層中心部と想定される部分にベルトを設定し、灰層の広がりを確認して検出写真、平面図の記録を行った。範囲記録後はサンプルを採取しながら断面観察と記録を行った。本遺構の範囲内には焼土ブロックが認められているが、断面観察では地床炉がなくIIIb層上位の黒色土に廃棄された灰層であることが分かったため、灰集申として報告している。このIII AS-01はやや盛り上がった状態で廃棄されているため頂部黒色土の堆積は薄い、平坦な部分を観察すると1cm程度黒色土が堆積していることから、Ta-bテフラ直下ではない近世アイヌ文化期に帰属すると思われる。

出土遺物 (図II-11-2)：2はフローテーションから回収した縫い針である。両端が欠損しているが現存の長さで27.2mm、断面は約1.8mmの丸状を呈している。先端はやや曲がった状態で、基部には僅かだが目通しの孔が認められる。この他、灰層中からはホタテガイ、シカを中心とする獣骨の動物遺存体が出土しており、炭化種子はヒエ98粒、ブドウ科12粒と遺跡内では比較的多量に出

表Ⅱ-8 杭跡属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	グリッド	規模(cm)			傾き(度)	タイプ	備考
				上端	下端	深さ			
Ⅱ-7	-	ⅢKP03	G-18	7	0	18	4°	打込み	
Ⅱ-7	-	ⅢKP04	G-18	10	4	22	1°	打込み	
Ⅱ-7	7-3	ⅢKP05	F-18	9.5	0	28.5	3°	打込み	
Ⅱ-7	-	ⅢKP08	F-18	16	0	54	8°	打込み	
Ⅱ-7	-	ⅢKP22	J-22	9	1	30	7°	打込み	
Ⅱ-7	-	ⅢKP26	J-22	9	0	14	2°	打込み	
Ⅱ-7	7-7	ⅢKP27	K-22	8	3	20	9°	打込み	
Ⅱ-7	-	ⅢKP28	G-18	11	2	60	6°	打込み	
Ⅱ-7	-	ⅢKP29	G-18	10	2	57	14°	打込み	
Ⅱ-7	7-8	ⅢKP36	H-19	10.5	0	26	6°	打込み	
Ⅱ-7	-	ⅢKP37	H-19	8	0	20	7°	打込み	
Ⅱ-7	-	ⅢKP38	H-20	8.5	2	16	1°	打込み	
Ⅱ-7	-	ⅢKP39	H-20	10	2	17	7°	打込み	
Ⅱ-7	-	ⅢKP40	H-20	12	1	26	6°	打込み	
Ⅱ-7	7-9	ⅢKP41	I-20	8.5	0	26.5	1°	打込み	
Ⅱ-7	-	ⅢKP42	I-21	12.5	0	28	5°	打込み	
Ⅱ-7	-	ⅢKP43	I-21	10	0	19	0°	打込み	
Ⅱ-7	-	ⅢKP44	I-21	9.5	0	33	3°	打込み	
Ⅱ-7	-	ⅢKP45	K-22	7	2	15	2°	打込み	
Ⅱ-7	-	ⅢKP46	K-22	7	1	19	3°	打込み	
Ⅱ-7	-	ⅢKP47	G-19	10	0	33	0°	打込み	
Ⅱ-7	7-10	ⅢKP48	H-20	7	0	37	0°	打込み	
Ⅱ-7	-	ⅢKP49	J-22	10.5	2	23	0°	打込み	
Ⅱ-7	-	ⅢKP52	H-20	10	0	40	8°	打込み	
Ⅱ-7	-	ⅢKP53	I-21	9	1	46	9°	打込み	
Ⅱ-7	-	ⅢKP54	I-21	7	0	17	6°	打込み	
Ⅱ-7	-	ⅢKP61	G-19	7	0	7	0°	打込み	
Ⅱ-7	-	ⅢKP62	G-19	7	0	6	1°	打込み	
Ⅱ-7	7-14	ⅢKP63	G-19	10	0	17	2°	打込み	
Ⅱ-7	-	ⅢKP64	H-19	8	0	15	5°	打込み	
Ⅱ-7	-	ⅢKP65	H-20	5.5	0	9	4°	打込み	

土している。動植物遺存体同定の詳細については第5部第2章第1・2節で述べている。

時期：検出層位から近世アイヌ文化期。

(奈良)

ⅢAS-02 (図Ⅱ-8・11 図版5-7・6-3・18-2・3)

位置：M-25 規模：(48) × (80) × (8) cm

確認・調査：ⅢAS-01の北東側約3m地点を調査中、Ⅲb層上位で灰層を確認した。検出状態から調査区外に延びることが想定されたため、ベルトを設定せずに灰層の広がりを確認した。検出層位からⅢAS-01と同時期の所産と考えられ、平面、断面及びサンプルを採取して調査終了とした。

断面観察からⅢb層上位に廃棄された灰層であることがわかり、灰集中内からは骨角器が4点出土している。今年度の発掘は調査区幅が3.2mと狭いために周辺の遺構分布状態が不明であるが、灰集中に比べ炉跡の数が少ないため周辺には屋外炉、もしくは住居跡があるものと考えられる。

出土遺物(図Ⅱ-11-3)：微細遺物として回収できた骨角器は合計4点で2点掲載している。3は獣骨素材で一端が尖るように面取りがなされ、加工痕も比較的に明瞭に認められる。図版18-3は僅かに加工痕が認められるが、被熱しているため不明瞭である。炭化種子はⅢAS-01と同様にブドウ科が12粒出土しているほか、ヒエが8粒出土している。出土量は少ないが、組成は近世アイヌ文化期から出土するものと類似する。動植物遺存体同定結果については第5部第2章第1・2節で詳細を述べている。

時期：検出層位から近世アイヌ文化期。

(奈良)

IIIAS-03 (図II-8 図版6-5)

位置: L-24 規模: 41×20×3 cm

確認・調査: IIIb層上位を調査中にL-24区で不整形に広がる灰層を確認した。調査は広がりとし断面を確認する目的でベルトを設定した後に、灰層直上まで掘り下げた。平面の記録を行った後にサンプルを採取しながら断面確認を行なった。規模は41×20cmで厚さ3cm程度の灰集中であった。フローテーションを行なったが微細遺物は回収されず、炭化種子からはヒエが1点出土しているのみである。

時期: 検出層位から近世アイヌ文化期。(奈良)

IIIAS-04 (図II-9 図版6-7)

位置: I-21 規模: 59×50×3 cm

確認・調査: I-21区周辺では獣骨が多く出土しているためIIIa層で精査を行なっていたところ、獣骨と重なる灰層を確認した。中心と思われる地点にベルトを設定し灰層範囲の確認を行なった。検出写真、平面図の記録後に半載して断面の観察、記録を行って調査終了とした。サンプルについては、他の灰集中と同様に採取しフローテーションを行なった。規模は59×50×3cmと不整な円形を呈しており、灰層の層厚が薄いことから1度のみの廃棄も考えられる。本遺構については南側にIIIH-01の炉跡を確認しているが、住居跡の柱穴上面に灰集中が形成されていること、同一面に獣骨が分布していたことから住居跡より新しい時期の近世アイヌ文化期に帰属する遺構と考えられる。また、灰層上面に被覆している黒色土もTa-bテフラ混じりで1cm未満であることから時期的な矛盾はないと思われる。遺物は出土していないが、植物遺存体の炭化種子よりヒエ属、ブドウ科が多く出土しており、アイヌ文化期の特徴をよく示している(第5部 第2章 第2節)。

時期: 検出層位から近世アイヌ文化期(IIIH-01より新しい)。(奈良)

第5節 獣骨集中及び礫集中

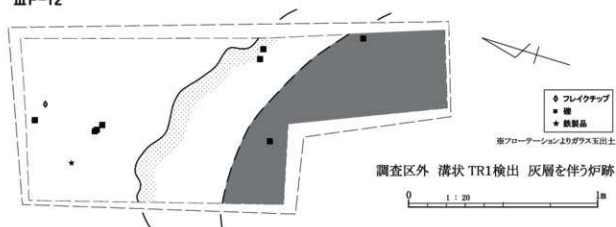
アイヌ文化期の遺構・遺物は調査区の変換点から上流側にかけて多く出土している。獣骨の分布も溝跡の窪地周辺で密度が増し、幅3.2mに511点の座標点を記録している。出土する獣骨は殆どがシカと思われ、四肢骨が主体を占め、次いで下顎骨が出土している。獣骨の部位については第5部 第2章 第1節で報告を行っているので参照されたい。こうした獣骨の分布は重複を示すほど密には出土していないが、中でもややまとまりを示す3ブロックについてIII BB-01~03の番号を与えて微細図等の記録を行っている。獣骨を取り上げる際には、酢酸ビニル樹脂(木工用ボンド)を希釈して数回に渡って塗布し硬化処理を行なった後取り上げている。(奈良)

III BB-01 (図II-10・14-1~4 図版8-1・18-4~7・19-2)

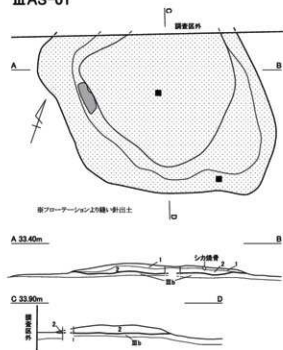
位置: J・K-22 規模: (480)×(167)cm

確認・調査: Lラインから上流側にかけてIIIa層を掘り下げたところ、シカを主体とする未被熟獣骨が多く分布していた。III BB-01は包含層に散在する獣骨よりややまとまっており、範囲内から板状鉄製品も出土していることから他の分布状態とは異なると判断し集中範囲として調査を行った。主要部位は四肢骨で、分布状態から南側調査区外にも延びると考えられる。本集中区に限らず今回出土している獣骨は黒色土を1cm程被覆しているため、原位置から動いている可能性が高い。

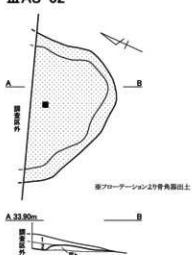
ⅢF-12



ⅢAS-01



ⅢAS-02



ⅢAS-01

1. 10YR3/1 黒褐色 土層化した灰層上位=炭化物・焼骨片(炭状) しまり中 粘性強
2. 10YR5/2 灰黒褐色 灰層=焼骨=未焼熟シタ骨多 炭化物縁辺に焼土粒混じる しまり中 粘性強

ⅢAS-02

1. 10YR3/2 黒褐色 土層化した灰層=炭化物(炭状) しまり強 粘性中
2. 10YR5/3 にぶい黄褐色 灰層 しまり中 粘性強

ⅢAS-03

1. 10YR2/3 黒褐色 土層化した灰層=炭化物(炭状) しまり中 粘性強
2. 10YR5/8 黄褐色 灰層=焼骨・焼土粒(炭状) しまり中 粘性中
3. 10YR4/5 にぶい黄褐色 灰層=焼骨(炭状) しまり中 粘性強

ⅢAS-03



図Ⅱ-8 ⅢF-12・ⅢAS-01～03平面及び断面図

表Ⅱ-9 ⅢF-12・ⅢAS-01～04属性表

押図番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模(cm)			灰・骨片の有無	備考
						長軸	短軸	厚さ		
Ⅱ-8	-	ⅢF-12	G-20	ⅢbU	-	-	-	有	調査区外トレンチ	
Ⅱ-8	6-1	ⅢAS-01	M-25	ⅢbU	円形	(112)	(160)	(6)	有	ホタテガイ
Ⅱ-8	6-3	ⅢAS-02	M-25	ⅢbU	円形	(48)	(80)	(8)	有	
Ⅱ-8	6-5	ⅢAS-03	L-24	ⅢbU	不整形	41	20	3	有	
Ⅱ-9	6-7	ⅢAS-04	I-21	ⅢbU	不整形	59	50	3	有	

出土遺物 (図Ⅱ-11-4～7・14-1～4) : 4～7は板状鉄製品で、いずれも三角から方形の不整形な形状を呈している。厚さは2.8mm～6.2mmで、5・6は錆により一部膨張しているが、器表面は平坦であったと思われる。細片により元の素材は不明であるが、同時期の出土遺物で鉄鍋片が出土しているため、破損した鉄鍋片の可能性も考えられる。

時期 : 検出層位から近世アイヌ文化期。 (奈良)

ⅢBB-02 (図Ⅱ-10-14-5 図版8-2・19-2)

位置 : J-22 **規模** : (361) × (161) cm

確認・調査 : ⅢBB-01の北側に分布し、比較的大型の部位が残存する範囲である。主体部位は四肢骨で、肩甲骨などの部位が目立って出土している。集中区としては密度が低いが、周辺の小さな破片から比べるとやや異なる組成であったため集中範囲として調査を行っている。本集中区はⅢH-01の付属部分と重複する形で分布しているが、検出層位から住居跡より新しくⅢAS-04とその周辺から出土する獣骨と同時期の所産と考えられる。本集中については周辺より獣骨がまとまっているという以外、特に儀礼的な様相は認められない。

時期 : 検出層位から近世アイヌ文化期。 (奈良)

ⅢBB-03 (図Ⅱ-10-11・14 図版8-3・18-8～18-19-2)

位置 : G-19-20 **規模** : (390) × (180) cm

確認・調査 : ⅢBB-03はⅢH-01より更に上流側のG-19-20区でⅢa層を調査中に検出している。本集中区は下顎骨及び下顎歯列が多く、同一範囲内からは金属製品が7点、礫石器が4点出土しており、獣骨に伴って道具を廃棄した可能性も考えられる。南西側にはⅢSB-02が出土しており、被熱した礫・礫石器が多く出土している。周辺には焼土や灰集中といった痕跡は認められていないがⅢSB-02の焼けた礫石器、礫の出土状態と合わせて段丘先端を意識した廃棄場所または送り場であった可能性も考えられる。

出土遺物 (図Ⅱ-11-8～18-14-7) : 8～10はたたき石で、いずれも砂岩製である。両面に敲打痕が認められる資料で9・10は被熱している。8は中央部に浅く敲打痕が認められる。9は角柱状の礫を素材とし、2ヶ所敲打痕が認められる面は破断面付近の敲打が明瞭である。10は扁平礫を素材とし、浅い敲打が3ヶ所認められる。敲打痕が2ヶ所認められる面は、敲打した後にすり石として用いられている。11は滑沢面のある礫で、板状の砂岩礫を素材としており、両面に滑沢が認められる。このような滑沢面のある礫は、町内の遺跡でも出土しており、擦痕が顕著にならないような柔らかいモノ(毛皮など)が対象物であったと考えられる。12～18は金属製品である。12～14は鉄鍋片で、12・13は口縁部片、14は底部片である。12・13は口唇部直下約2.8cmに段差を有し、ほぼ直立して立ち上がる。口唇部は内削気味で、厚さは2.6mm程度と薄い。破片資料のため内耳等の痕跡は不明である。14は同一個体と考えられる底部片で、僅かであるが脚と思われる凸部分が確認できる。15は鉤状鉄製品で、断面は方形を呈し側面には溝らしき痕跡も認められることから、自前で加工した可能性が考えられる。16・17は一端が折り返されている棒状鉄製品で、断面は方形を呈する。16は弧状に湾曲しており、中央付近では重ね合わせたためか厚みが増している。折り返された内面には擦り減りのような痕跡は認められない。18は永楽通宝で縁部分と文字以外は風化により剥落している。

時期 : 検出層位から近世アイヌ文化期。 (奈良)

IIIb-02 (図II-10・12 図版8-6・18-19~24・19-1)

位置: H-19 規模: 200×79cm

確認・調査: IIIb層調査で獣骨集中3に近接して小規模な礫の集中範囲を検出し、礫集中として調査した。獣骨集中3との関係に注意しながら周囲を面的に浅く掘り下げ、全体を検出した後、諸記録を作成、遺物を取り上げ、調査を終了した。礫は調査区中央から南壁にかけて出土した。検出面は獣骨集中3よりわずかに下位であるがほぼ同一面に近い。礫片に被熱による赤色化が認められたことから、焼土の有無に注意したが検出してはいない。規模は長軸2m、幅0.79mである。

出土遺物: 礫石器 28点、礫 27点が出土した。構成礫は礫石器の破片及び礫の破片を主体とし、「棒状礫」に相当する小円礫が出土していない点が決定的に異なる。礫石器の石材はデイサイト(石英安山岩) 17点、砂岩 6点、石英片岩 5点である。礫の石材はすべて砂岩である。19・20は砥石である。素材は砂岩で、19が扁平礫、20が柱状礫である。砥面は19が片面(IA類)、20は表面と左側面(IIA類)に形成されている。19は4点が接合し1個体となったが、器体中央に形成された敲打痕の衝撃で割れた可能性がある。21~23は滑沢面ある礫である。いずれも被熱による赤色化がみられる。素材は21が砂岩の亜円礫が自然破砕したもの、22・23がデイサイト(石英安山岩)の亜角~亜円礫が自然破砕のものである。22は5点、23は12点の被熱破砕片が接合したもので、石質が類似するが両者の接合関係は認められなかった。21は表裏の平坦面、22・23は表面の曲面に滑沢面が形成され、21・23は一部弱い線条痕が観察される。24は加工痕ある礫である。石英片岩の破片4点が接合し完形となった。柱状礫を素材とし、表裏の右側縁に剥離痕が観察される。剥離痕は不連続かつ縁辺が潰れており、使用による衝撃剥離と考えられることから「火打石」の可能性はある。25・26は礫である。25は蛇紋岩の柱状亜角礫が風化したもの、26は石英片岩の扁平亜円礫である。

時期: 「棒状礫」が出土していないことから、擦文文化期の可能性もあるが、検出面及び位置関係が獣骨集中3に近いことから関連する可能性があり、近世アイヌ文化期と考えられる。(山田)

IIIb-03 (図II-13 図版8-7・19-1)

位置: S-26 規模: 270×160cm

確認・調査: III層の遺構分布密度が薄いLラインより西側のIIIb層調査で礫の集中範囲を検出し、礫集中として調査した。検出面に注意しながら全体を面的に浅く掘り下げ、規模を確認した後、諸記録を作成、遺物を取り上げ、調査を終了した。規模は長軸2.7m、短軸1.6mで、密度は低い。

出土遺物: 礫 108点が出土した。構成礫は「棒状礫」が主体で、砂岩の円礫と泥岩の亜角礫がみられ、泥岩がやや多い。被熱礫が含まれている。

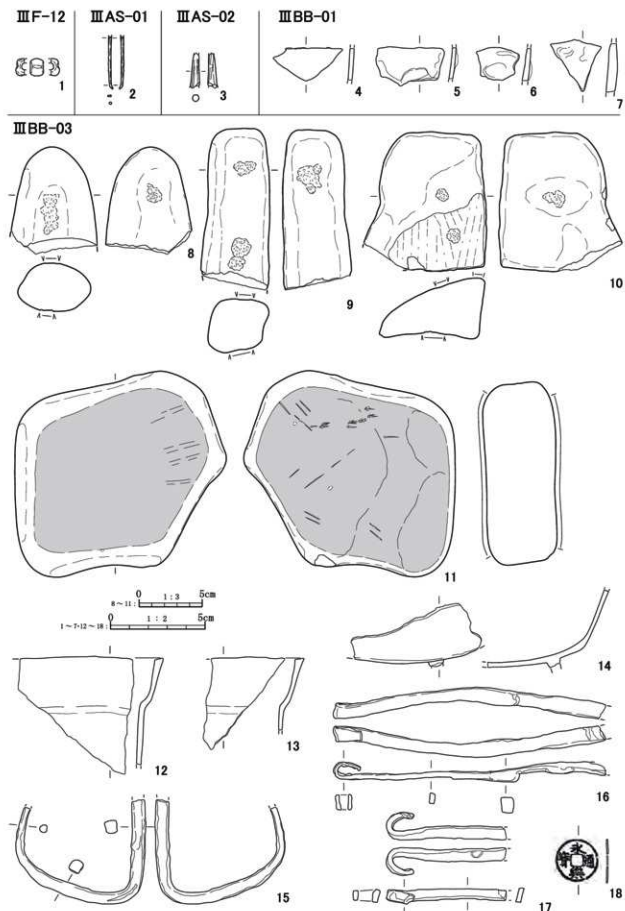
時期: 検出面及び構成礫の特徴から近世アイヌ文化期と考えられる。(山田)

第6節 包含層出土遺物

1. 礫石器 (図II-15-1・2)

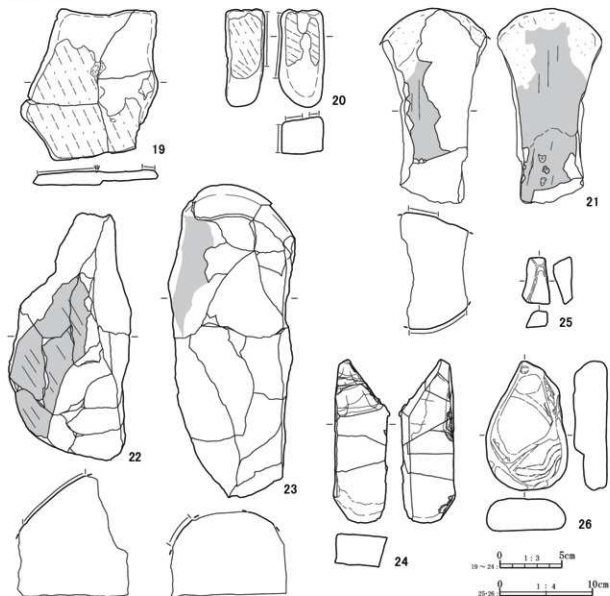
IIIa~IIIb層出土遺物が対象である。礫石器2点が出土した。内訳はたつき石1点、滑沢面ある礫1点である。石材はいずれも砂岩である。

1はたつき石である。粗粒な砂岩で、断面三角形の円礫が素材である。敲打痕は平坦面2面に形成され、表面中央にすり鉢状に凹む円形の敲打、裏面に浅い敲打痕が観察される。特に、表面の



図II-11 III F-12・III AS-01・02・III BB-01・03 出土遺物

ⅢSB-02



図Ⅱ-12 ⅢSB-02 出土礫石器及び礫

表Ⅱ-10 ⅢBB-01～03属性表

押図 番号	図版 番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模(cm)		主体 部位	被熱の 有無	関連 遺構	備 考
						長軸	短軸				
Ⅱ-10	8-1	ⅢBB-01	J・K-22	ⅢbU	不整形	(480)	(167)	四肢	未被熱	-	
Ⅱ-10	8-2	ⅢBB-02	J-22	ⅢbU	不整形	(361)	(161)	四肢	未被熱	-	
Ⅱ-10	8-3	ⅢBB-03	G-19	ⅢbU	不整形	(390)	(180)	下顎	未被熱	ⅢSB-02	鉄製品出土

表II-11 ⅢF-12・ⅢAS-01・02・ⅢBB-01・03・ⅢSB-02出土遺物属性表

挿図 番号	図版 番号	遺構名	個体 名称	グリッド	遺物 番号	遺物名	分類	層位	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
									長軸	短軸	厚さ			
Ⅱ-11-1	カー44	ⅢF-12	-	G-20	2188	ガラス玉	-	ⅢbU	9.7	(5.3)	7.3	(0.71)	G.	
Ⅱ-11-2	18-1	ⅢAS-01	-	M-25	2196	鎌い針	-	ⅢbU	(27.2)	1.9	1.8	(0.23)	Fe.	
Ⅱ-11-3	18-2	ⅢAS-02	-	M-25	2194	骨角器	-	ⅢbU	(19.2)	4.7	4.3	(0.36)	B.	
-	18-3	ⅢAS-02	-	M-25	2193	骨角器	-	ⅢbU	(5.7)	4.7	(3.8)	(0.05)	B.	
Ⅱ-11-4	18-4	ⅢBB-01	-	J-22	22	板状鉄製品	-	Ⅲa	37.0	18.0	2.8	5.63	Fe.	
Ⅱ-11-5	18-5	ⅢBB-01	-	J-22	546	板状鉄製品	-	Ⅲa	35.0	15.0	3.8	10.78	Fe.	
Ⅱ-11-6	18-6	ⅢBB-01	-	J-22	547	板状鉄製品	-	Ⅲa	23.0	15.0	5.6	4.07	Fe.	
Ⅱ-11-7	18-7	ⅢBB-01	-	J-22	548	板状鉄製品	-	Ⅲa	30.0	28.0	6.2	7.53	Fe.	
Ⅱ-11-8	18-8	ⅢBB-03	-	G-19	771	たたき石	ⅡB	Ⅲa	(125.5)	52.2	45.5	(430.00)	Sa.	被熱
Ⅱ-11-9	18-9	ⅢBB-03	-	G-19	759	たたき石	ⅡB	Ⅲa	(84.0)	68.3	38.7	(260.00)	Sa.	
Ⅱ-11-10	18-10	ⅢBB-03	-	G-19	764	たたき石	ⅢD	Ⅲa	(108.7)	102.0	52.1	(665.00)	Sa.	被熱
Ⅱ-11-11	18-11	ⅢBB-03	-	G-19	770	滑沢面ある礫	-	Ⅲa	165.3	150.1	61.1	2680.00	Sa.	
Ⅱ-11-12	18-12	ⅢBB-03	-	G-19	356	鉄鋼片	-	Ⅲa	61.0	59.0	2.7	47.41	Fe.	
Ⅱ-11-13	18-13	ⅢBB-03	-	G-19	354	鉄鋼片	-	Ⅲa	48.0	40.0	2.6	19.03	Fe.	
Ⅱ-11-14	18-14	ⅢBB-03	-	G-19	355	鉄鋼片	-	Ⅲa	77.0	71.0	4.2	68.80	Fe.	被熱
Ⅱ-11-15	18-15	ⅢBB-03	-	G-19	357	鉤状鉄製品	-	Ⅲa	68.0	57.0	3.3	25.49	Fe.	
Ⅱ-11-16	18-16	ⅢBB-03	-	G-19	352	棒状鉄製品	-	Ⅲa	162.0	11.0	3.5	16.71	Fe.	
Ⅱ-11-17	18-17	ⅢBB-03	-	G-19	353	棒状鉄製品	-	Ⅲa	63.0	15.0	2.3	7.54	Fe.	
Ⅱ-11-18	18-18	ⅢBB-03	-	G-19	1727	古銭	-	Ⅲa	23.0	23.0	0.7	0.94	Cu.	未確認
Ⅱ-12-19	18-19	ⅢSB-02	ⅢST-03	H-19	703.704, 723.734	砥石	I A	ⅢbU	125.3	110.0	11.6	180.00	Sa.	
Ⅱ-12-20	18-20	ⅢSB-02	-	H-19	724	砥石	ⅡC	ⅢbU	(81.0)	40.1	29.1	(150.00)	Sa.	被熱
Ⅱ-12-21	18-21	ⅢSB-02	-	G-19	743	滑沢面ある礫	-	ⅢbU	(155.6)	80.2	82.2	(1440.00)	Sa.	被熱
Ⅱ-12-22	18-22	ⅢSB-02	ⅢST-04	G+H-19	698.699.73 9.742.744	滑沢面ある礫	-	ⅢbU	199.0	97.0	102.8	1880.00	Da.	被熱 石材同定No.71
Ⅱ-12-23	18-23	ⅢSB-02	ⅢST-05	G+H-19	701.302.70 5.715.721 他7点	滑沢面ある礫	-	ⅢbU	270.0	104.0	87.0	2520.00	Da.	被熱 石材同定No.72
Ⅱ-12-24	18-24	ⅢSB-03	ⅢST-06	H-19	726.727. 728.730	加工痕ある礫	-	ⅢbU	(131.1)	42.9	25.5	(228.00)	Qr-Sch.	被熱 石材同定No.73

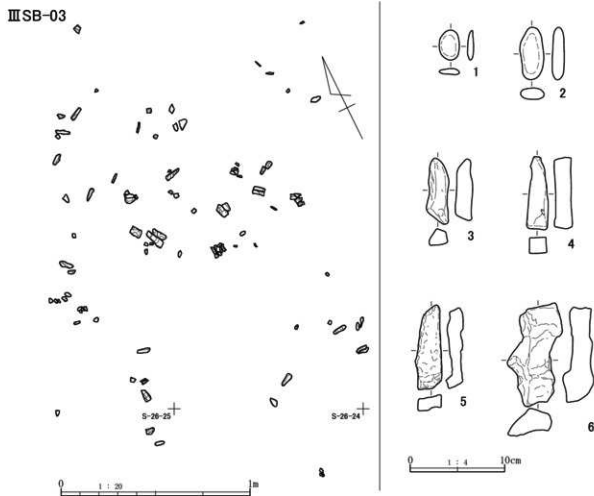
表II-12 ⅢSB-02礫属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	層位	状態	計測値(mm)				長短比	長短比 標準 偏差	重量 (g)	被熱	材質	備考		
						長軸	標準 偏差	短軸	標準 偏差							厚さ	標準 偏差
Ⅱ-12-25	19-1	-	732	ⅢbU	完形	50.0	44.3	30.3	28.8	20.8	-7.4	1.7	0.0	31.6	-	Ser.	石材同定No.76
Ⅱ-12-26	19-1	-	733	ⅢbU	完形	138.7	44.3	87.9	28.8	35.5	7.4	1.6	0.0	635.0	-	Qr-Sch.	石材同定No.77
完形合計						188.7		118.2		56.3		3.2		666.6			
完形平均値						94.3		59.1		28.2		1.6		333.3			
標準偏差														5661.6			

敲打内は磨滅しており、使用頻度が高かったと考えられる。下端が欠損する。2は滑沢面ある礫である。細粒砂岩の盤状礫を素材とし、表面全面に滑沢面、擦痕、ひも状痕が観察され、擦痕は斜位方向、ひも状痕は器体長軸方向にみられる。(山田)

2. 金属製品 (図II-15-3~10)

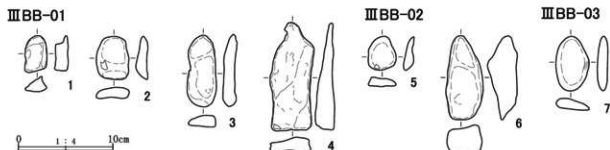
包含層出土の金属製品は全部で8点である。出土位置はⅢa層からⅢb層上位にかけてで、4以外は調査区上流側から出土している(図II-16)。3・4は刀子で、3は平棟で区は不明瞭である。目釘孔は認められない。4は下流側斜面で検出し、目釘孔部分で接合した資料である。平棟で区部分は不明瞭で、刃部は使用または廃棄後の風化により刃こぼれが激しく凹凸が顕著である。本資料は断面で見ると棟部分が僅かに潰れその下位に溝が出来ている。このような痕跡は町内の遺跡からも出土しており、刀子の棟を敲打具とした利用法も考えられる。5は接合した鉄鋼で、器高10.8cm、推定口径は24cmである。口唇部は内削で角状に成形され、口唇部直下2.9cmで段差を有しほぼ直立



図II-13 III SB-03 平面図及び出土陶

表II-13 III SB-03 陶器属性表

種別 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	層位	状態	計測値(mm)				厚さ	標準 偏差	長短比	長短比 標準 偏差	重量 (g)	被熱	材質	備考
						長軸	標準 偏差	短軸	標準 偏差								
-	19-1	-	473	ⅢbU	完形	28.4	-39.8	17.0	-17.7	7.3	-10.3	1.6	-0.9	3.9	-	Sa.	
-	19-1	-	570	ⅢbU	完形	31.7	-34.5	118.2	83.5	9.7	-7.9	0.3	-2.1	5.6	-	Sa.	
II-13-1	19-1	-	469-1	ⅢbU	完形	31.1	-35.1	21.0	-13.7	6.5	-11.1	1.5	-0.9	4.9	-	Sa.	
-	19-1	-	474	ⅢbU	完形	27.7	-38.5	25.1	-9.6	5.6	-12.0	1.1	-1.3	4.4	-	Sa.	
-	19-1	-	470	ⅢbU	完形	41.9	-24.3	25.1	-9.6	6.3	-11.3	1.7	-0.7	7.6	-	Sa.	
-	19-1	-	596	ⅢbU	完形	49.9	-16.3	35.8	1.1	16.1	-1.5	1.4	-1.0	24.6	-	Mod.	
-	19-1	-	458	ⅢbU	完形	53.0	-13.2	29.9	-4.8	6.4	-11.2	1.8	-0.6	12.8	-	Sa.	
II-13-2	19-1	-	460	ⅢbU	完形	54.7	-11.5	25.4	-9.3	12.2	-5.4	2.2	-0.3	23.4	●	Sa.	
-	19-1	-	480	ⅢbU	完形	65.1	-1.1	20.2	-14.5	11.2	-6.4	3.2	0.8	23.4	-	Mod.	479と接合
II-13-3	19-1	-	477	ⅢbU	完形	70.3	4.1	23.9	-10.8	19.3	1.7	2.9	0.5	26.6	-	Mod.	478と接合
-	19-1	-	552	ⅢbU	完形	61.5	-4.7	27.9	-6.8	24.4	6.8	2.2	-0.2	68.5	-	Mod.	
-	19-1	-	597	ⅢbU	完形	56.8	-9.4	53.3	18.6	15.2	-2.4	1.1	-1.3	41.0	-	Mod.	
-	19-1	-	569	ⅢbU	完形	73.1	6.9	33.8	-0.9	17.0	-0.6	2.2	-0.2	44.0	-	Mod.	
-	19-1	-	524	ⅢbU	完形	77.7	11.5	28.5	-6.2	8.9	-8.7	2.7	0.3	28.2	-	Mod.	497と接合
-	19-1	-	501	ⅢbU	完形	76.8	12.5	25.2	-9.5	15.1	-2.5	3.1	0.7	34.5	-	Mod.	
II-13-4	19-1	-	503	ⅢbU	完形	76.2	9.9	17.0	-17.7	20.5	3.9	4.5	2.1	38.1	-	Mod.	
II-13-5	19-1	-	516	ⅢbU	完形	90.2	24.0	17.9	-16.8	28.0	10.4	5.0	2.6	43.6	-	Mod.	
-	19-1	-	476	ⅢbU	完形	79.3	13.1	22.2	-12.5	35.6	18.0	3.6	1.2	48.6	-	Mod.	
-	19-1	-	459	ⅢbU	完形	74.0	7.7	31.7	-3.0	23.7	6.1	2.3	-0.1	50.9	-	Sa.	
-	19-1	-	495	ⅢbU	完形	70.5	4.2	44.2	9.5	17.6	0.0	1.6	-0.8	68.0	-	Mod.	
-	19-1	-	490	ⅢbU	完形	86.1	19.8	39.0	4.3	22.9	5.3	2.2	-0.2	47.9	-	Mod.	
II-13-6	19-1	-	491	ⅢbU	完形	114.5	48.3	46.5	11.8	39.9	22.3	2.5	0.1	135.8	-	Mod.	
完形合計						1396.2		728.4		369.2		50.6		778.3			
完形早期値						66.2		34.7		17.6		2.4		37.1			
遺物総重量														2938.3			



図II-14 III BB-01～03出土礫

表II-14 III BB-01礫属性表

標国 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	層位	状態	計測値(mm)				長短比	長短比 標準 偏差	重量 (g)	被熱	材質	備考		
						長軸 標準 偏差	短軸 標準 偏差	厚さ 標準 偏差	長短比 標準 偏差								
-	19-2	-	805	ⅢaU	完形	36.4	-30.7	32.2	-2.9	17.0	-1.3	1.1	-0.8	6.3	-	Mud.	
II-14-1	19-2	-	819	ⅢaU	完形	38.5	-50.8	23.3	-29.1	16.2	-21.0	1.7	-0.2	11.9	-	Mud.	
-	19-2	-	815	ⅢaU	完形	35.0	-64.3	29.8	-22.7	19.8	-17.3	1.2	-0.7	17.0	-	Mud.	
II-14-2	19-2	-	783	ⅢaU	完形	45.3	-21.8	33.9	-1.2	11.8	-6.5	1.3	-0.6	22.3	-	Sa.	
II-14-3	19-2	-	290	ⅢaU	完形	75.9	8.8	31.4	-3.7	17.0	-1.3	2.4	0.5	44.2	-	Sa.	
-	19-2	-	789	ⅢaU	完形	74.6	7.5	30.2	-4.9	17.4	-0.9	2.5	0.6	31.9	-	Mud.	
-	19-2	-	763	ⅢaU	完形	77.3	10.2	33.3	18.2	23.0	4.7	1.5	-0.4	59.9	-	Sa.	
-	19-2	-	790	ⅢaU	完形	73.8	6.7	33.5	-1.6	23.4	5.1	2.2	0.3	47.1	-	Mud.	
-	19-2	-	784	ⅢaU	完形	98.8	31.7	41.5	6.4	16.3	-2.0	2.4	0.5	80.9	-	Sa.	
II-14-4	19-2	-	791	ⅢaU	完形	115.2	48.1	42.4	7.3	20.9	2.6	2.7	0.8	96.5	-	Mud.	
完形合計						670.8		351.5		182.6		18.9		420.0			
完形平均値						67.1		35.1		18.3		1.9		42.0			
遺物総重量														1166.0			

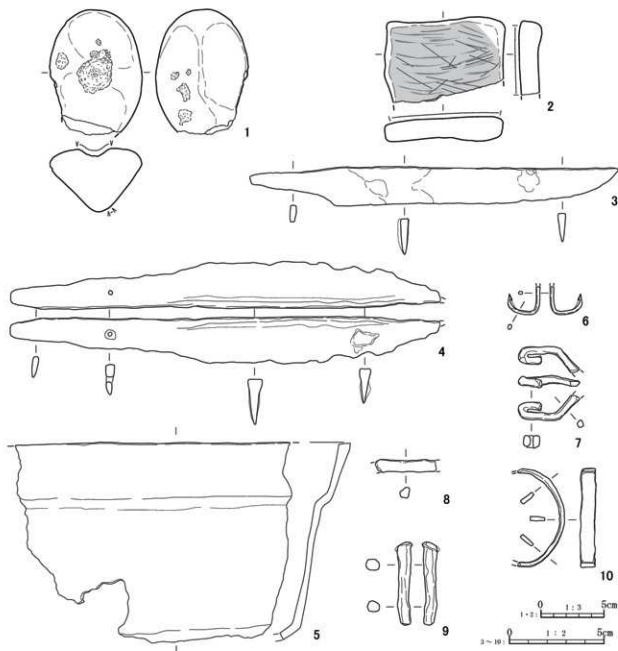
表II-15 III BB-02礫属性表

標国 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	層位	状態	計測値(mm)				長短比	長短比 標準 偏差	重量 (g)	被熱	材質	備考		
						長軸 標準 偏差	短軸 標準 偏差	厚さ 標準 偏差	長短比 標準 偏差								
-	19-2	-	840	ⅢaU	完形	34.2	-38.3	22.2	-9.1	14.4	-5.4	1.5	-0.7	16.7	-	Ser.	
II-14-5	19-2	-	841	ⅢaU	完形	35.9	-36.6	29.1	-2.2	11.3	-8.5	1.2	-1.0	16.3	●	Sa.	
-	19-2	-	825	ⅢaU	完形	69.0	-3.6	26.3	-5.0	16.3	-3.5	2.6	0.4	37.2	●	Sa.	
-	19-2	-	824	ⅢaU	完形	79.1	6.6	30.5	-0.8	20.5	0.7	2.6	0.4	71.0	-	Sa.	
II-14-6	19-2	-	829	ⅢaU	完形	87.9	15.4	38.9	7.6	32.4	12.6	2.3	0.0	124.0	-	Sa.	
-	19-2	S03	827	ⅢaU	完形	129.0	56.5	41.0	9.7	24.1	4.3	3.1	0.9	158.2	-	Sa.	829と接合
完形合計						435.1		188.0		119.0		13.4		411.4			
完形平均値						72.5		31.3		19.8		2.2		68.6			
遺物総重量														624.1			

表II-16 III BB-03礫属性表

標国 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	層位	状態	計測値(mm)				長短比	長短比 標準 偏差	重量 (g)	被熱	材質	備考		
						長軸 標準 偏差	短軸 標準 偏差	厚さ 標準 偏差	長短比 標準 偏差								
-	19-2	-	769	ⅢaU	完形	98.9	9.7	39.0	-13.5	23.6	-13.5	2.5	0.7	125.4	●	Sa.	
-	19-2	-	758	ⅢaU	完形	149.8	60.6	106.4	55.9	98.8	61.6	1.4	-0.5	1700.0	-	Sa.	
-	19-2	-	782	ⅢaU	完形	51.4	-37.9	27.4	-25.1	14.1	-23.1	1.9	0.0	16.6	-	Mud.	
II-14-7	19-2	-	754	ⅢaU	完形	57.0	-32.3	35.0	-17.4	12.1	-25.0	1.6	-0.2	217.0	-	Sa.	
完形合計						357.0		209.7		148.5		7.4		2059.0			
完形平均値						89.3		52.4		37.1		1.9		514.8			
遺物総重量														684.0			

して立ち上がる。内耳、湯口等は認められない。6は釣針でX線観察では先端の返し部分は明瞭である。7～9は棒状鉄製品で、7は一端が折り返され、本体も折れ曲がっている。断面は丸状に近く捻じれ等は認められない。8は出土位置から7と同一個体の可能性も考えられる。9は断面丸状の不明製品で、一端が潰れている。10は板状鉄製品で、調査区外のⅢF-12付近から出土した資料である。断面は方形状で薄く、鉤のような形状をしているがおよそ半分を欠損している。(奈良)



図II-15 アイヌ文化期 包含層出土礫石器・金属製品

表II-17 アイヌ文化期 包含層出土礫石器・金属製品属性表

神図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	クワッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
II-15-1	20-1	-	89	たたき石	IVA	IIbU	G-19	(99.0)	75.0	51.1	(380.00)	Sa.	被熱
II-15-2	20-2	-	1808	滑沢面ある礫	-	IIaU	G-20	95.3	(62.4)	20.4	(201.00)	Sa.	
II-15-3	20-3	-	6	刀子	-	IIa	G-19	190.0	19.0	3.4	27.38	Fe.	
II-15-4	20-4	-	1588	刀子	-	IIa	AH-26	(227.0)	25.0	4.0	(77.30)	Fe.	1709と接合
II-15-5	20-5	-	7	鉄 鏃	-	IIa	F-18	108.0	146.0	3.2	285.49	Fe.	358と接合
II-15-6	20-6	-	341	釣 針	-	IIa	G-19	(15.0)	17.0	2.8	(0.56)	Fe.	
II-15-7	20-7	-	1066	棒状鉄製品	-	IIbU	H-20	43.0	0.1	40.0	3.12	Fe.	
II-15-8	20-8	-	1067	棒状鉄製品	-	IIbU	H-20	(32.3)	7.1	4.9	(0.96)	Fe.	
II-15-9	20-9	-	10	棒状鉄製品	-	IIa	F-19	43.0	10.0	7.4	8.34	Fe.	
II-15-10	20-10	-	1820	板状鉄製品	-	IIbU	G-20	50.0	(9.0)	2.6	(5.90)	Fe.	
-	-	-	239	漆塗膜片	-	IIa	H-20	-	-	-	-	-	第5遺層1号2部分析

第三章 続縄文・擦文文化期の調査

本章で取り扱う遺構及び遺物は、Ⅲb層下位からⅢc層にかけて検出したものを対象としている。本章に続縄文文化期を含めたのは、Ⅲc層において剥片石器が出土すること、ⅢF-02のフローテーション内容物が町内で検出された続縄文文化期の形態に類似することが挙げられたためである。

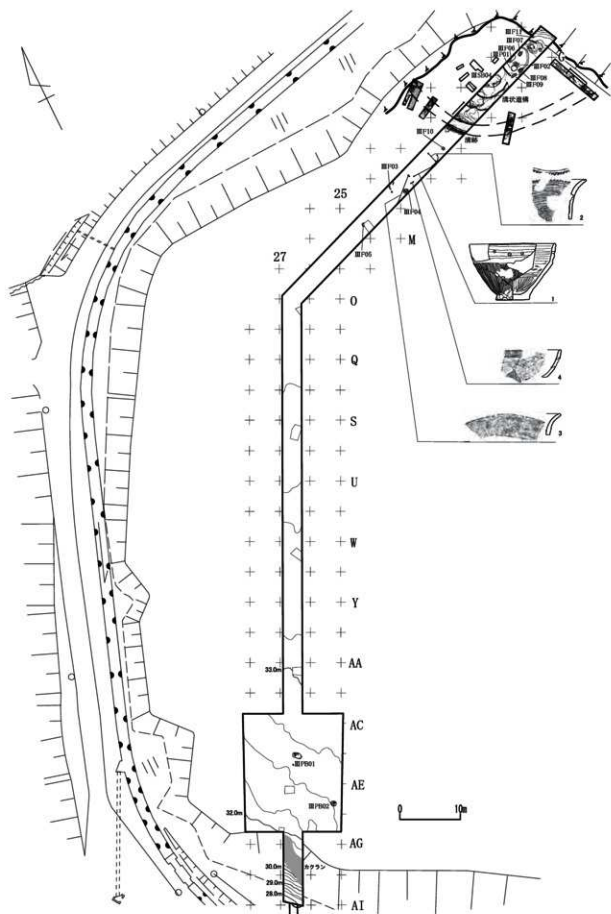
擦文文化期の遺構・遺物の分布状態はアイヌ文化期と同様に段丘の上流側を主に利用していることがわかった。遺構は区画遺構（溝跡1条、溝状遺構1条）1ヶ所、土坑1基、焼土10ヶ所、土器集中2ヶ所、礎集中1ヶ所検出している。今回の発掘で特筆すべき点は、段丘上流側先端に検出した区画遺構が挙げられる。このような日常生活と性格を異にする遺構の検出は道内でも類例がなく、町内の上幌内モイ遺跡で類似する遺構が検出されているのみである（厚真町教育委員会 2007a）。

遺物に関しては下流側で土器集中が2個体、上流側で坏や甕が35点出土しているが、遺構に伴う出土状態ではなく区画遺構の内側からは土器が出土していない。出土する土器はB-Tmより上から検出されており、擦文中期後半の資料に相当する。また、擦文文化期と推定される焼土（ⅢF-09）上位から黒色土を挟んで錫製品（ニンカリ）が出土している。出土状態から擦文文化期より新しく近世アイヌ文化期より古い中世段階も考えられるが、面的に捉えることができなかったために、中世段階の資料も本章で掲載している可能性が考えられる。

こうした遺物出土状態から判断すると区画遺構や周辺の焼土は中世段階から擦文文化期にかけて幅広い時間軸を有することになるが、今回の報告では現場所見と科学的分析を考慮して報告を行うものである。（奈良）

表Ⅲ-1 続縄文・擦文文化期 遺構群一覧表

遺構名	時期	規模(cm)		グリッド	層位	付属・関連遺構	備考
		長軸	短軸				
ⅢF-02	続縄文文化期	72	45	G-19	Ⅲbl	ⅢP-01	
ⅢF-03	擦文文化期	62	17	K-23	Ⅲbl		
ⅢF-04	擦文文化期	83	(75)	K-22	Ⅲbl		
ⅢF-05	擦文文化期	58	(42)	L-24	Ⅲbl		
ⅢF-06	擦文文化期	-	(35)	F-G-19	Ⅲbl		
ⅢF-07	擦文文化期	75	47	F-18-19	Ⅲbl		
ⅢF-08	擦文文化期	77	55	G-18-19	Ⅲbl		
ⅢF-09	擦文文化期	102	38	G-19	Ⅲbl		
ⅢF-10	擦文文化期	50	47	I-J-21	Ⅲbl		
ⅢF-11	擦文文化期	(24)	22	F-18	Ⅲbl		
ⅢSB-04	擦文文化期	261	163	G-19-20	Ⅲbl		
ⅢPB-01	擦文文化期	130	70	AD-26	Ⅲbl		
ⅢPB-02	擦文文化期	64	62	AE-25	Ⅲbl		
ⅢP-01	続縄文文化期	99	89	G-19	Ⅲbl		
溝跡	擦文文化期 ?	(2900)	(1950)	I-20-21	Ⅲbl		擦文～中世アイヌの可能性有
溝状遺構	擦文文化期 ?	(600)	(250)	G-19-H-19-20	Ⅲbl		擦文～中世アイヌの可能性有



図Ⅲ-1 続縄文・擦文文化期 遺構配置図・土器接合線図

第1節 区画遺構

1. 溝跡 (図Ⅲ-2・3 カラー5 図版9)

位置：I-20・21 規模：(2900) × (1950) × 33

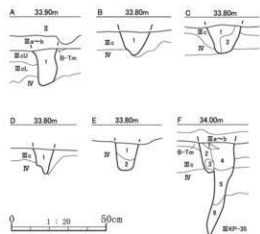
確認・調査：Ta-b テフラを重機によって除去したところ、I-20 区付近で Ta-b が帯状に落ち窪む範囲を確認した。Ta-b の落ち窪みから近世アイヌ文化期以前の構築物であることが予想できたため、Ⅲa 層上面で一度平坦に精査を行い、Ta-b 堆積状態の記録写真を撮影した。その後帯状に落ち窪む Ta-b を除去し、Ⅲa 層上面で地形図の記録を行った。調査は発掘区が幅 3.2m であることから面的に掘り下げを行っても窪みの断面は確認できると判断し、包含層と同様にアイヌ文化期の調査から始めている。Ⅲa 層を除去したところ、窪みの上流側(内側)で掘り上げ土を確認したため、北西側壁面に幅 50cm のトレンチを設定し Ta-c テフラまで掘り下げた。断面観察をしたところ、坑底面が V 層上面まで達する深さ約 30cm 程度の浅い溝であることが判明した。帰属時期については掘り上げ土の状態から擦文文化期から中世アイヌ文化期に相当すると判断した。溝跡はアイヌ文化期の調査が終了した後に完掘を行って、内側に分布する掘り上げ土と合わせて写真、平面、断面の記録を行った。このような溝跡は年代的にアイヌ文化期の成立に係わる遺構と認識され、北海道教育委員会に調査指導依頼をしたところ(第1章3節)、調査区外に溝跡が広がる可能性が高いため、予想できる範囲4ヶ所にトレンチを設定し溝跡の範囲確認を行うよう指導を受けた。トレンチ調査については幅 1m × 4m で Ta-b を除去した後に、Ⅲa 層上面の Ta-b 落ち窪みで判断を行った。溝跡 TR 1～4 はそれぞれ溝状に落ち窪みが確認でき、Ta-b 除去後地形図の記録を行った。溝跡 TR 4 については段丘の縁辺部であったため、掘り上げ土の範囲と堆積を確認する目的で完掘し、平面、断面の記録を行った。トレンチ調査の結果、段丘先端に溝跡が弧状に廻ることが推定できたため、溝状遺構のトレンチと合わせて完掘写真を撮って調査終了とした。

堆積状態：調査区内の溝跡は Vb 層上面まで掘り込まれ、⑥、⑦層のⅢc 層とⅣ層を主体とした掘り上げ土が流入している。その後、⑤層は掘り上げ土を基層とする土砂が溝跡内側から流れ込み、溝跡内には 10～15cm の堆積が認められる。④はⅢb 層と考えられる自然堆積層で、溝跡内には 5～10cm の堆積が認められる。④層の上位に①～③層といった V 層にⅢc 層、もしくはⅢc 層にⅣ層といった掘り上げ土の堆積が認められるが、これは④層の堆積から、後世のアイヌ文化期で整地された際に埋め戻された土砂と考えられる。⑧～⑪層は溝跡掘り上げ土で、基本的には溝跡内側にしか堆積していない。⑧、⑨層といったⅢ層、Ⅳ層主体の層は下位に、⑩、⑪層といった V 層主体の層は上位に堆積することから溝を掘って内側に盛る過程は矛盾していない。掘り上げ土の基底面については、B-Tm に黒色土を約 5cm 挟んで堆積しており、平坦部分では掘り上げ土上位に黒色土が約 5cm 堆積している。溝跡 TR-4 については位置が離れているため別途注記を行っているが、基本的には同様の堆積を示している。

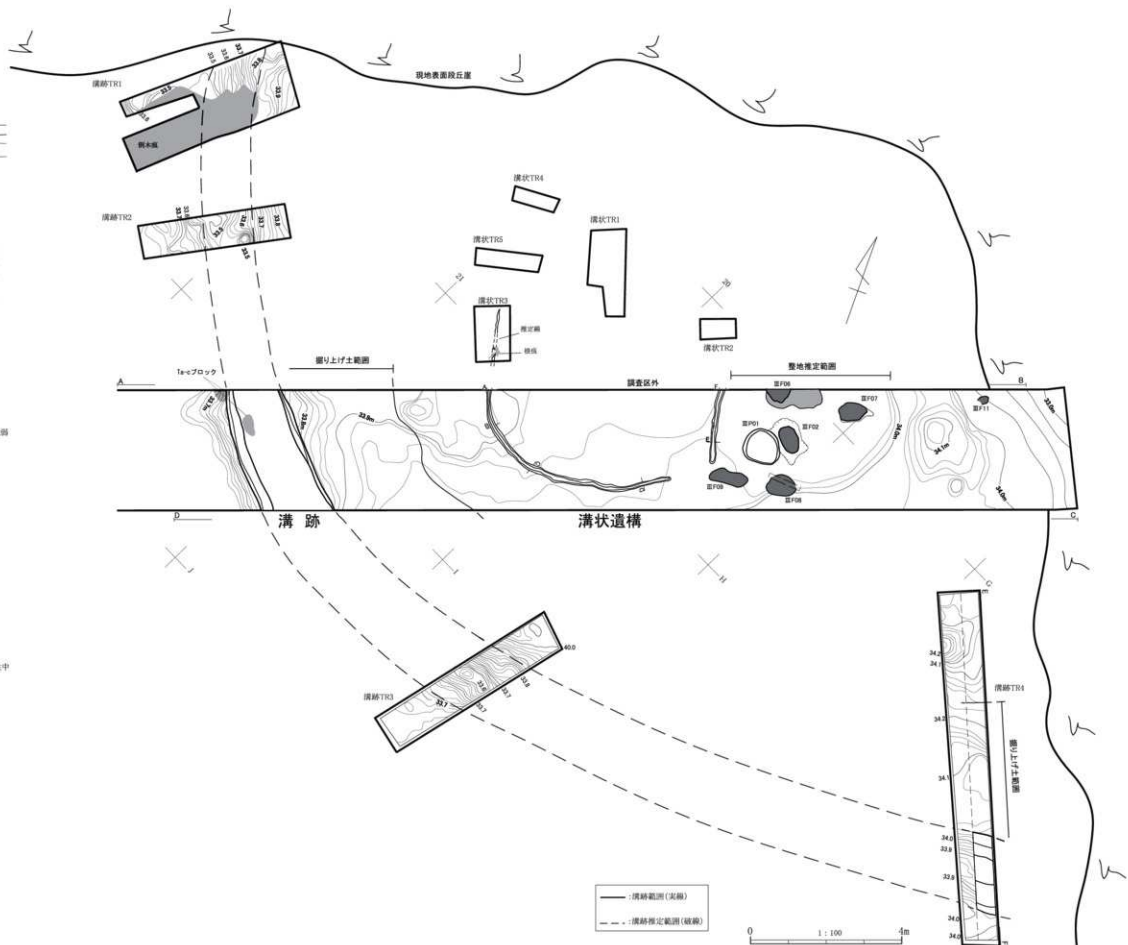
形状：調査区外試掘トレンチにより上幅 180cm、下幅 130cm、深さ 33cm の溝が、段丘先端を弧状に 2900cm 廻り、先端までの距離が 1950cm であることが推定される。溝跡の形状は V 層上面でほぼ平坦につくられ、比較的直立して立ち上がる。掘り上げ土は溝跡の内側に幅約 2.5m の範囲で認められる。内側の盛土の高さは溝跡よりやや幅が広がって堆積しているため、構築時の盛土の高さは 30cm 前後であったと思われる。

時期：遺物や遺構を直接伴っていないが、掘り上げ土の基底面から B-Tm 降下以降であること

溝状遺構断面



- 溝状遺構断面 A**
1. 10Y91.7/1 黒色 Ⅲ=IV(薄膜) しまり中 粘性弱
- 溝状遺構断面 B**
1. 10Y91.7/1 黒色 Ⅲ=IV(均一)⇒Ⅷ-Ⅹブロック しまり中 粘性弱
- 溝状遺構断面 C**
1. 10Y92/2 黒褐色 Ⅲ=IV(均一) しまり中 粘性中
2. 10Y91.7/1 黒色 Ⅲ層黒色土ブロック しまり強 粘性中
- 溝状遺構断面 D**
1. 10Y92/2 黒色 Ⅲ=IV(均一) しまり中 粘性弱
- 溝状遺構断面 E**
1. 10Y92/2 黒褐色 Ⅲ=IV(均一) しまり中 粘性無
2. 10Y92/3 黒色 Ⅲ=IV(均一) しまり中 粘性中
- 溝状遺構断面 F**
1. 10Y92/3 黒褐色 IV=Ⅲ(均一) しまり中 粘性無
2. 10Y92/1 黒色 Ⅲ=IV(均一) しまり中 粘性無
3. 10Y92/4 緑褐色 IV=Ⅲ(均一) しまり中 粘性無
4. 10Y91.7/1 黒色 Ⅲ全体⇒Ⅷ-Ⅹ 沢色層(高沢) しまり中 粘性中
5. 10Y92/2 黒褐色 Ⅲ=IV(均一) しまり中 粘性中
6. 10Y91.7/1 黒色 Ⅲ=IV(均一) しまり強 粘性中



図Ⅲ-2 区画遺構 平面及び断面図

は確認しており、黒色土の堆積より擦文文化期から中世アイヌ文化期と考えられる。

2. 溝状遺構 (図Ⅲ-2 カラー5-1 図版10)

位置：G・H-19・20 規模：(600) × (250) × 18

確認・調査：Ⅲc層からⅣ層上位にかけて柱穴確認をしていたところ、溝跡の内側約5mの地点に幅約20cmの細長いプランが馬蹄形に廻る範囲を確認した。精査を行ったところ南東側で一部途切れるが、溝状のプランは調査外に延びている事が明らかとなった。調査区北側壁面で断面を確認したところ、明瞭ではないがⅢb層で掘り込みが認められたことから擦文文化期に帰属する遺構として掘え調査を行った。本遺構については、溝跡に比べ細いことから溝状遺構という名称を付し調査を行っている。調査はⅢc層上面で検出写真を撮った後、壁面以外に4ヶ所のトレンチを設定し断面写真、図の記録を行った。完掘後に平面図、完掘写真を撮って調査終了とした。溝状遺構については北海道教育委員会から溝跡と同様に範囲確認の指導を受けたため、溝状遺構が延びると想定される地点に5ヶ所のトレンチを設けた。調査区外のトレンチ調査はⅢc層まで掘り下げ、溝を確認することを目的に行ったが、溝状TR3で長軸140cmの溝状遺構の続きを検出したのみである。このような結果については、調査区外に溝が殆ど延びていない、違う方向、途中で途切れている、溝状TR1・2・4・5で溝の掘り込みがⅢb層中でとまっているなどの要素が考えられる。溝跡と合わせて完掘写真を撮り調査終了とした。

形状：上幅20cm×下幅15cm×深さ18cmで馬蹄形に廻る。南東側は幅1m程途切れており、段丘に並行するように延びている。

堆積状態：A、Fの壁面で観察するとⅢb層から掘り込んでいられると思われるが、明瞭な掘り込み面は不明である。また、Fの断面でアイヌ文化期に帰属するⅢKP-35と新旧完形が認められることから、近世アイヌ文化期より古い事は明らかである。また、BではⅢ層にⅣ層が微量に混入する層にB-Tmブロックを含むことから再流入と考えられ、溝状遺構はB-Tm降下以降に構築された遺構と考えられる。

時期：溝状遺構の内側にはB-Tmの堆積が認められないことから、B-Tm以降の擦文文化期から中世アイヌ文化期に帰属すると考えられる。(奈良)

3. 整地範囲

整地範囲内の焼土群について

確認・調査：溝状遺構の更に上流側先端部に、ⅢbL層～Ⅲc層にかけてⅢF-02、ⅢF-06～09の焼土群を確認した。整地範囲は焼土群の調査を終了した後、調査区壁面でⅢc層が5cmと薄く堆積し、断面がやや皿状を呈する地点を確認したことから、焼土がこの窪みに形成された遺構であると判断した。Ⅲ層上面の地形図で判断すると、整地推定範囲と地形図が円形に廻る範囲はほぼ一致し、この範囲内にⅢb層下位からⅢc層上位を除去して、Ⅲb層被覆層厚が薄い焼土群が形成されている。この掘り上げ土については整地範囲とした北東側でB-Tmより上位で確認されているため時期的には擦文文化期から中世アイヌ文化期に相当すると考えられる。整地範囲内にある焼土群については次節で詳細を述べるが、段丘先端部が溝跡や溝状遺構など儀礼的な様相を示す遺構群であることから、ⅢP-01と燃焼面に獣骨が多量に含まれるⅢF-02は統縄文文化期に帰属する可能性が高い。

時期：溝跡も含め、区画遺構の内側にはB-Tmが認められないこと、範囲内から検出される焼土のAMS年代測定から10世紀後半～13世紀と考えられる。(奈良)

表Ⅲ-2 区画遺構属性表

棟図 番号	図版 番号	遺構名	グリッド	調査面 層位	平面形	規模(cm)		溝幅(cm)		深さ (cm)	備考
						長軸	短軸	調査面	溝底面		
Ⅲ-2	9-1	溝跡	I-20・21	ⅢbL	弧状	(2900)	(1950)	180	130	33	段丘上流側を区画
Ⅲ-2	10-1	溝状遺構	G-19 H-19・20	ⅢbL	馬蹄形状	(600)	(250)	20	15	18	溝跡の内側

溝跡北壁・南壁土層注記

- ①. 10YR2/1 黒色 V-Ⅲc・Ⅳ(均一) しまりやや強 粘性強 ④⑤ アイヌ期に築地された掘り上げ土
- ②. 10YR2/1 黒色 V-Ⅲc・Ⅳ(均一) しまりやや弱 粘性強
- ③. 10YR3/3 暗褐色 Ⅲc-Ⅳ(均一) しまり中・粘性無し 掘り上げ土再整地層 アイヌ期
- ④. 10YR6/4 におい黄褐色 Ⅳ主体 しまり弱 粘性無し 掘り上げ土の再整地層 アイヌ期
- ⑤. 10YR3/1 黒色 Ⅲb しまり弱 粘性中 自然堆積層
- ⑥. 10YR3/2 黒褐色 V-Ⅲc・Ⅳ(均一) しまり弱 粘性弱 掘り上げ土流入又は再整地層 ③④⑤の流入
- ⑦. 10YR2/2 黒褐色 Ⅲc=Ⅴa-Ⅴb(起伏)Ⅳ(均一) しまり強 粘性中 掘り上げ土流入又は再整地層 ③④⑤の流入
- ⑧. 10YR6/4 におい黄褐色 Ⅳ(Ta-c)主体 しまり中 粘性無し Ⅳ層流入土・自然堆積土
- ⑨. 10YR3/2 黒褐色 Ⅳ-Ⅲc(均一) しまり中 粘性弱 掘り上げ土④に対応
- ⑩. 10YR2/2 黒褐色 Ⅲc-Ⅳ(均一)=Ⅴa-Ⅴb しまり強 粘性弱 二次堆積土 B-Tm ブロック状を含む⑤⑥対応
- ⑪. 10YR2/1 黒色 V-Ⅲc・Ⅳ しまり強 粘性中
- ⑫. 10YR2/2 黒褐色 V=Ⅲc・Ⅳ しまり強 粘性中
- ⑬. 7.5Y5/6 明褐色 黄土ブロック しまり弱 粘性弱

溝跡断面 (TR-4)

1. 10YR2/3 黒褐色 Ⅲc主体=Ⅴ(均一) しまり中 粘性中 6. 10YR2/1 黒色 V=Ⅲ(均一) しまり強 粘性中
2. 10YR2/2 黒褐色 Ⅲc=Ⅲb 黒色土・B-Tm ブロック(起伏)・V Ta-d(均一) しまり中 粘性中 7. 10YR2/3 黒褐色 Ⅲ-Ⅳ・Ⅴ(起伏) しまり強 粘性弱
3. 10YR1.7/1 黒色 プライマー=Ⅲ層 自然堆積 8. 10YR2/1 黒色 Ⅲ+Ⅴ(均一)=Ⅳ(均一) しまり中 粘性中
4. 10YR2/2 褐色 Ⅲc=Ⅳ=Ⅴ(均一) しまり強 粘性弱 9. 10YR1.7/1 黒色 V-Ⅲ(均一)=Ⅳ(均一) しまり強 粘性中
5. 10YR1.7/1 黒色 Ⅲ=Ⅳ(均一) しまり強 粘性中 10. 10YR2/1 黒色 V-Ⅲc・Ⅳ しまり強 粘性中
- ①. 10YR2/1 黒色 Ⅲc=Ⅳ(均一)=Ta-b(起伏) しまり中 粘性中 11. 10YR2/2 黒褐色 V=Ⅲc・Ⅳ しまり強 粘性中
- ②. 10YR2/3 黒褐色 Ⅲc+Ⅳ(起伏)=Ta-b(起伏)
- ③. 10YR1.7/1 黒色 Ⅲc=Ⅳ

①~③層は Ta-b の流入や層の乱れから根による風化を受ける

第2節 土 坑・焼 土

本節では続縄文文化期から擦文文化期の遺構を掲載しているが、このうち整地範囲に関連すると思われる焼土はⅢF-06~09である。また、図Ⅲ-4のⅢP-01・ⅢF-02に示したⅢBB-04は、Ⅲa層まで浮遊したⅢF-02の焼骨片範囲であることから、同図に範囲のみ掲載している。

ⅢP-01 (図Ⅲ-4 図版13-5)

位置：G-19 規模：99×89×27cm 平面形：円形

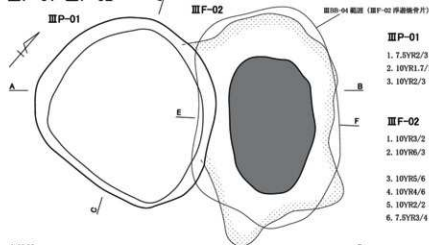
確認・調査：Ⅲa層上位を精査したところ、G-19区で浅い窪みを確認した。周辺には焼骨片が散在しており、焼土との重複も想定されたためベルトを設定し断面確認を行った。最初に設定したC-Dラインでは焼土が検出されず、直交するA-Bラインのトレンチを設定したところ北東側でⅢF-02を検出した。断面ではⅢF-02の焼骨片を含む層が土坑内にやや流れ込んでいるが、燃焼面の切り合いは認められず、新旧関係は不明である。土坑は断面、平面の記録後に、ⅢF-02と合わせて完掘写真を撮り調査終了とした。

堆積状態：土坑はⅤ層上面まで掘り込まれており、比較的平坦な坑底面でほぼ直立に立ち上がる。坑底面にⅢc層を主体とする3層が約12cm、その上位にⅢb層主体の黒色土が約10cm堆積している。1層はⅣ層を含むことから整地掘り上げ土が流入した可能性も考えられる。

時期：ⅢF-02との関係から続縄文文化期に帰属すると考えられる。

(奈良)

ⅢP-01・ⅢF-02

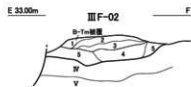
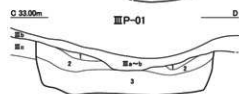


ⅢP-01

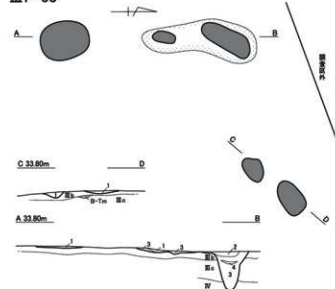
- | | | |
|-----------------|---------------|----------|
| 1. 7.5YR2/3 暗褐色 | Ⅳ-Ⅲ(炭状)しまり弱 | 粘性弱 |
| 2. 10YR1.7/1 黒色 | Ⅲb=Ⅳ(炭状)しまり中 | 粘性中 |
| 3. 10YR2/3 黒褐色 | Ⅲc=Ⅳ(炭状)Ⅲ(均一) | しまり中 粘性中 |

ⅢF-02

- | | | |
|-------------------|-----------------------|-----------|
| 1. 10YR3/2 暗褐色 | Ⅲb ₁ +B-Tm | しまり弱 粘性中 |
| 2. 10YR6/3 にぶい黄褐色 | Ⅲc=焼土ブロック(均一) | しまり弱 粘性なし |
| 3. 10YR5/6 黄褐色 | Ⅲc 被熱層 | しまり中 粘性無し |
| 4. 10YR4/6 褐色 | Ⅲc 被熱層 | しまり中 粘性無し |
| 5. 10YR2/2 黒褐色 | Ⅲc=Ⅳ層(炭状) | しまり中 粘性無し |
| 6. 7.5YR3/4 暗褐色 | Ⅲc 被熱層=焼骨(均一) | |



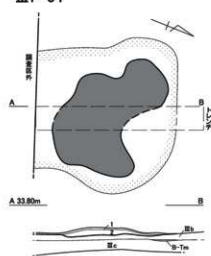
ⅢF-03



ⅢF-03

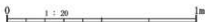
- | | | | | |
|----------------|-----------------|-----------------|---------------|------|
| 1. 10YR3/4 暗褐色 | Ⅲb 弱い被熱層=焼骨(燻燻) | 3. 10YR1.7/1 黒色 | Ⅲb 層 | しまり弱 |
| 2. 10YR4/4 褐色 | 弱い被熱層=焼骨 | 4. 10YR2/3 黒褐色 | 弱い被熱層(焼土ブロック) | |

ⅢF-04

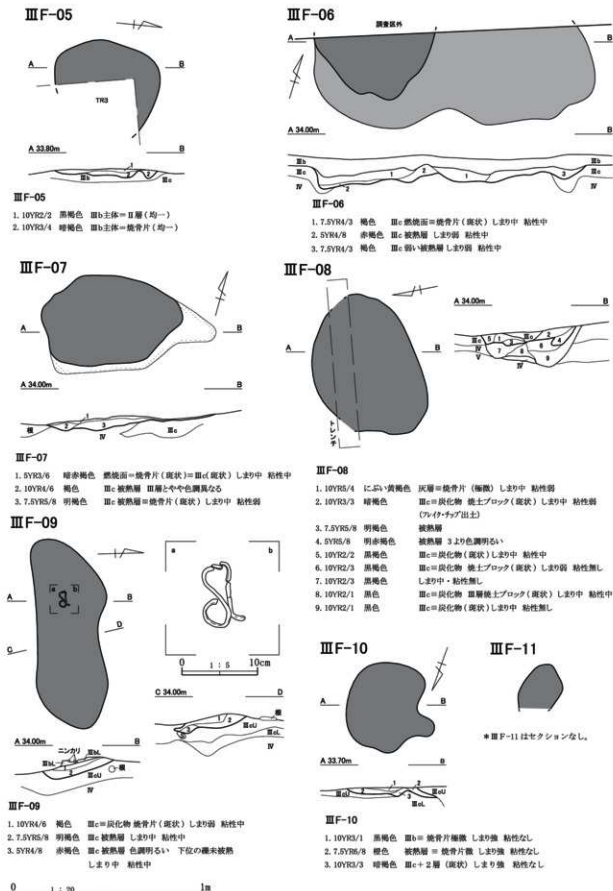


ⅢF-04

- | | |
|----------------|-------------|
| 1. 10YR3/3 暗褐色 | Ⅲb=焼骨(均一) |
| 2. 10YR3/3 暗褐色 | Ⅲb 弱い被熱層=焼骨 |



図Ⅲ-4 ⅢP-01・ⅢF-02～04 平面及び断面図



ⅢF-02 (図Ⅲ-4・7-1～3 図版12-1・21-1-1～4)

位置: G-19 規模: 72×45×15cm

確認・調査: G-19区で灰層に獣骨を多量に含む範囲を確認した。獣骨は浮遊しているものがⅢa層で認められたため(ⅢBB-04)範囲をとってサンプリングを行った。ⅢF-02はⅢP-01のトレンチによって北東側で確認された。重複は認められなかったため、ⅢP-01を完掘した後に焼土の検出を行った。調査は焼骨片の分布範囲を記録した後、被熱層範囲を確認するため周辺を掘り下げた。被熱層の記録をした後、E-Fラインで半載し、断面の記録を行って調査終了とした。

ⅢF-02については焼土上面に焼骨片が非常に多く、町内の上幌内モイ遺跡で調査を行った統縄文文化期の焼土組成と類似することから、本遺構も統縄文文化期に帰属する可能性が高い。

遺物は出土していないが、フローテーションサンプルから哺乳綱の焼骨が203.8g回収されており、炭化種子はヒエ属が1点、出土しているのみである。上位の焼骨片からはタデ科やミズキ属が検出されているが、浮遊した焼骨片から回収しているため、アイヌ文化期に帰属する可能性も考えられる(第5部 第2章 第1・2節)。(奈良)

出土遺物: 剥片石器5点、剥片1点、礫1点が出土した。剥片石器の内訳は石錐2点、スクレイパー1点、RF・UF2点である。剥片石器・剥片はすべて黒曜石、礫は珪化岩である。1・2は石錐である。柄と錐部の区別が不明瞭なもの(A1類)で、1は被熱、2はパティナがみられる。3はエンド・スクレイパー(B1類)である。素材打面を残す剥片の背面側縁に調整を施し、末端部にやや急角度の刃部が作出されている。(山田)

時期: 焼骨片の出土状態から統縄文文化期と考えられる。また、AMS年代測定法で炭化材から年代を求めたが、13世紀前半から後半の結果を得ている。これは隣のⅢF-08とほぼ同じ結果であるため資料の混入が原因と考えられる(第5部 第1章 第1節)。(奈良)

ⅢF-03 (図Ⅲ-4 図版13-7)

位置: K-23 規模: 62×17×2cm

確認・調査: 溝跡外側のⅢb層下位で微量に焼骨片を伴う焼土を確認した。ブロックは大きく3つに分けられ、A-Bラインの北側ブロックは焼土周辺に焼骨が僅かに認められるが、根跡により一部攪乱を受けている。被熱層の平均は2cm程度と薄く何度も繰り返して使用された形跡は認められない。調査は焼土範囲の平面、断面の記録を行った後にサンプルを回収して終了とした。

遺物は出土していないが、動物骨のフローテーションサンプルからサケ科の椎骨、魚網が出土し、炭化種子からシソ属が1点出土している(第5部 第2章 第1・2節)。

時期: AMS測定法で10世紀から11世紀の結果を得ている(第5部 第1章 第1節)。(奈良)

ⅢF-04 (図Ⅲ-4 図版13-8)

位置: K-22 規模: 83×(75)×3cm

確認・調査: ⅢF-03の南東側、Ⅲb層下位掘削中に微量の焼骨片を確認した。精査を行うと不整形を呈する赤色範囲を確認した。短軸で断面を確認したところレンズ状の堆積で、焼骨片も僅かに確認できたことから焼土として調査を行った。平面、断面の記録を行い調査終了とした。本遺構については被熱層の厚さや、出土内容物が認められないことからⅢF-03同様繰り返し使用されていないと考えられる。

時期: 検出層位から擦文文化期と考えられる。(奈良)

III F-05 (図III-5 図版14-1)

位置:L-24 規模:58×(42)×4 cm

確認・調査: L-24 区のIIIb層下位を調査中、TR3にかかる様に焼土を検出した。色調は暗褐色を呈し、トレンチで確認すると僅かに焼骨片を確認できたためIII F-05 と付番して調査を行った。被熱層の範囲を確認した後に平面の記録を行った。断面はトレンチ壁面を利用し、最大長が記録できるよう設定を行い、焼土面上位のサンプリングをして調査終了とした。フローテーションからは哺乳網のほか、コイ科、サケ属など魚骨が多く出土している。炭化種子ではキビが4粒と多く出土する(第5部 第2章 第1・2節)。

時期: AMS 測定法で13世紀前葉～後葉の結果を得ている(第5部 第1章 第1節)。(奈良)

III F-06(図III-5 図版12-3)

位置:F-G-19 規模:-×(35)×5.5cm

確認・調査: 区画遺構内側のIIIb層下位を調査中、調査区北壁で焼骨片が認められる範囲を検出した。周辺の精査を行ったところ、長軸144cmの範囲に焼骨片が分布し、赤褐色を呈する被熱層が確認された。検出層位から整地に伴う焼土であると推定されたため、周囲の掘り下げも同様に行い、結果的にIII F-07～09 と合わせて検出写真を撮影している。平面図や断面図などは個別に記録し、サンプリングを行って調査終了とした。フローテーションサンプルからは哺乳網のほか僅かながら魚骨が検出されている。炭化種子は不明が1点で他の出土はない(第5部 第2章 第1・2節)。

時期: 検出層位から擦文文化期と考えられる。(奈良)

III F-07 (図III-5 図版12-5)

位置:F-18-19 規模:75×47×7 cm

確認・調査: III F-06の東側約50cm地点に焼骨片を伴う楕円形のプランを確認した。検出層位からIII F-06 と同時期の遺構群で整地に伴う焼土群であると考えられる。調査は他の焼土と同様に平面及び断面の確認を行った後サンプリングをし、調査終了とした。地山被熱層はIIIc層からIV層まで達しており、焼土面に焼骨片を少量含む1層が確認される。フローテーションからは哺乳網が2.08g出土し、炭化種子はアワが1粒出土している(第5部 第2章 第1・2節)。

時期: AMS 測定法で11世紀～12世紀の結果を得ている(第5部 第1章 第1節)。(奈良)

III F-08 (図III-5 図版12-7)

位置:G-18-19 規模:77×55×9 cm

確認・調査: III F-06、07 と同様に区画遺構内側のIIIb層下位で検出した。プランは楕円形を呈しており、平面の記録後に半載して断面の記録を行った。断面は1・2層が灰層、焼土ブロックを含み、3・4層が地山被熱層である。6～9層は炭化物や焼土ブロックを含むが、土坑のように明瞭な立ち上がりや坑底面が認められないことから、根による攪乱を受けていると考えられる。調査は平面、断面の記録をとった後にサンプリングを行って終了とした。フローテーションサンプルからは哺乳網と僅かにサケ属の椎骨が出土している。炭化種子はキビ2粒、ニワトコ属1点検出している(第5部第2章 第1・2節)。

時期: AMS 測定法で13世紀中葉～後葉の結果を得ている(第5部 第1章 第1節)。(奈良)

III F-09 (図III-5・7-4 図版12-7)

位置:G-19 規模:102×38×6 cm

確認・調査：ⅢF-06～08と同様に区画遺構内側のⅢb層下位を調査中、ⅢF-08の南西側1.2m地点に長軸102cmの長楕円形を呈する焼土を検出した。ⅢF-09は1層に極僅か焼骨片を含んでおり、被熱層も明褐色を呈していることから焼土として調査を行った。調査は平面の記録をとるため、被熱層の検出を行ったが、その際黒色土を1～2cm挟んで鋳製品(ニンカリ)が出土している。当初、焼土にともなう遺物と考えていたが、遺物が溶解していないこと、黒色土を挟んで上位から出土している状態を考えるとニンカリは焼土より新しい時期の遺物と推察される。ニンカリは出土した時点で破損しており、そのまま取り上げることは不可能であったため、B-72を5%に希釈したものを塗布し、段階において濃度を上げ最終的に30%まで硬化させた。ニンカリは微細図で出土状態を記録した後取り上げ、その後焼土の断面を記録して調査終了とした。燃焼面のサンプリングを行なったが、フローテーションでは部位不明の哺乳網が僅かに認められるだけであった(第5部第2章第1節)。

出土遺物：(図Ⅲ-7-4)4は鋳製のニンカリである。形状はΩ形を呈しており、規模は長軸8.1cm、短軸5.5cmと比較的大きい。断面形は丸状で径は0.6cmある。カリンバ2遺跡(恵庭市教育委員会2000)で同様の形態を示すニンカリが出土しているが、本資料は恵庭の資料と比べても2周りほど大きい。またX線写真で確認したところ孔などは認められない。成分等の分析については第5部第1章第2節で詳細を述べている。

時期：検出層位より擦文文化期と考えられる。(奈良)

ⅢF-10 (図Ⅲ-5 図版14-3)

位置：I・J-21 **規模：**50×47×5cm

確認・調査：区画遺構の外側であるI・J-21区のⅢb層下位を調査中、焼骨片を含む不整形なプランを検出した。平面形の記録後、半截して断面を確認したところ、西側は根により一部不整形な断面形を呈しているが、東側はレンズ状堆積を示し焼骨片を微量に含んでいる。断面の記録をした後、他の焼土と同様にサンプリングをして調査終了とした。

時期：検出層位より擦文文化期と考えられる。(奈良)

ⅢF-11 (図Ⅲ-5 図版14-5)

位置：F-18 **規模：**(24)×22×2cm

確認・調査：調査区東側、調査範囲杭下位の壁面で被熱層を確認した。被熱層はⅢbL層で確認され、擦文文化期の焼土と判断し、調査範囲杭の除去後、ⅢbL層まで掘下げた。被熱範囲の検出後、長軸方向で半截し、諸記録を作成、調査を終了した。平面形は24×22cmの楕円形で規模は小さく、被熱は弱い。土層断面は被熱層1層からなり、下面は水平で明確な燃焼面及び地山被熱層は観察されなかった。また、骨片、炭化物も見られなかった。これらのことから、焼土は原位置で形成されたものではなく、二次堆積のものと考えられる。(山田)

表Ⅲ-3 ⅢP-01属性表

押図 番号	図版 番号	遺構名	グリッド	調査 面層 位	平面形		調査面規模(cm)		坑底面規模(cm)		深さ (cm)	長軸方向	調査面 長短比	坑底面 長短比	備考
					調査面/坑底面	長軸	短軸	長軸	短軸						
Ⅲ-4	13-5	ⅢP-01	G-19	ⅢbL	円形/円形	99	89	83	78	27	N-90° W	1.11	1.06		

表Ⅲ-4 ⅢF-02~11属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模 (cm)			灰・骨片の有無	備考
						長軸	短軸	厚さ		
Ⅲ-4	12-1	ⅢF-02	G-19	ⅢbL	楕円形	72	45	15	有	焼骨多量。 続縄文の可能性有
Ⅲ-4	13-7	ⅢF-03	K-23	ⅢbL	不整形	62	17	2	有	
Ⅲ-4	13-8	ⅢF-04	K-22	ⅢbL	不整形	83	(75)	3	有	
Ⅲ-5	14-1	ⅢF-05	L-24	ⅢbL	-	58	(42)	4	有	
Ⅲ-5	12-3	ⅢF-06	F・G-19	ⅢbL	長楕円形	-	(35)	5.5	有	
Ⅲ-5	12-5	ⅢF-07	F-18-19	ⅢbL	楕円形	75	47	7	有	焼骨微量
Ⅲ-5	12-7	ⅢF-08	G-18-19	ⅢbL	楕円形	77	55	9	有	焼骨微量
Ⅲ-5	12-7	ⅢF-09	G-19	ⅢbL	長楕円形	102	38	6	有	焼骨微量
Ⅲ-5	14-3	ⅢF-10	I・J-21	ⅢbL	不整形	50	47	5	有	焼骨微量
Ⅲ-5	14-5	ⅢF-11	F-18	ⅢbL	楕円形	(24)	22	2	無	

第3節 土器集中

ⅢPB-01 (図Ⅲ-6・7-5 カラー7-2 図版14-6・21-2-5)

位置：AD-26 規模：130×70cm

確認・調査：下流側にあたるAD-26区のⅢb層下位で擦文土器の集中個体を確認した。周辺の精査を行い分布範囲を確認したところ約130cm×70cmに1個体分の甕を出土した。出土層位はⅢb層下位であるが、B-Tmが斑状に分布しており層位的にはB-Tmより上位から出土した資料である。また、これは復元された土器型式からも矛盾しない層位でもある。本集中区の周辺には次に述べるⅢPB-02しか出土しておらず、遺構、遺物の主体はあくまでも上流側であると思われる。調査は写真撮影後、微細図をとり可能な限り単点で取り上げを行って終了とした。

出土遺物：(図Ⅲ-7-5) 5は復元されたⅦB2群の甕である。器高は現存する部分で23.7cmを測る。文様構成はやや特異で、ハケメで器表面を整形した後、胴部文様帯に横走沈線を施文する。3本1対の縦方向の貼付帯はシメトリーになるように4方向貼り付けている。その後貼付帯には刻み、横走沈線地の上には鋸歯状の刻みが3段連続して施文される。口唇部と胴部文様帯には刻文が1条連続して付されている。内面は底付近まで縦、胴部文様帯まで横方向のミガキによって調整されている。

(奈良)

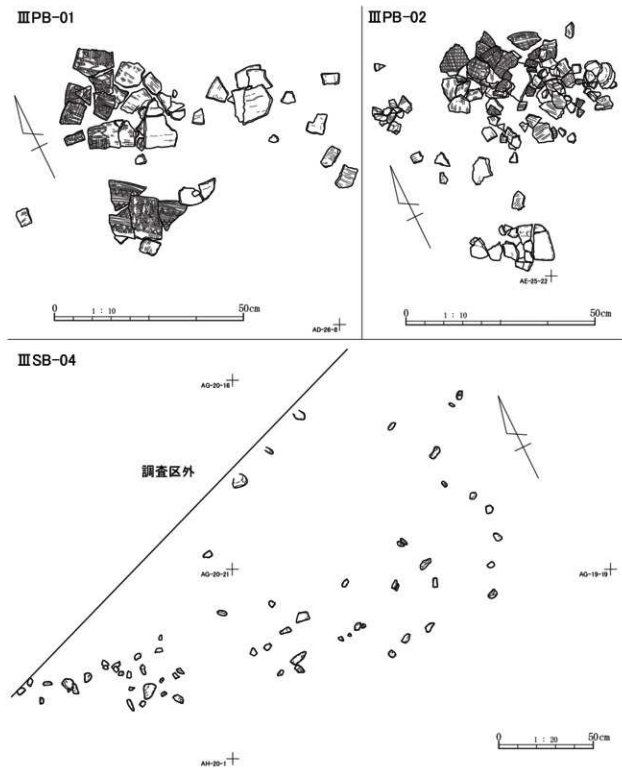
ⅢPB-02 (図Ⅲ-6・7-6 カラー7-2 図版14-7・21-2-6)

位置：AE-25 規模：64×62cm

確認・調査：ⅢPB-01の南側約9m地点に64×62cmの範囲で土器の集中個体を確認した。土器は狭い範囲にまとまり底部まで出土している。周辺の精査を行い写真撮影後、微細図の記録を行って土器を取り上げて調査終了とした。出土層位はⅢPB-01と同じくⅢb層下位で、上下関係は明瞭ではないがB-Tmより上位から出土している。

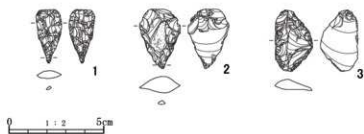
出土遺物：(図Ⅲ-7-6) 6は底部まで復元されたⅦB2群の甕である。器高は22.5cmを測る。文様構成は口縁部が横走沈線地に刻みが3段施され、胴部文様帯は横走沈線地に鋸歯状沈線が連続して施文される。胴部文様帯下位には刻みが1条廻り、文様帯を区画している。胴部から底部にかけては縦方向にハケメ調整される。内面は胴部下半まで横方向のミガキ調整が顕著に認められる。

(奈良)

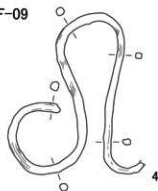


図Ⅲ-6 III PB-01・02・III SB-04 平面図

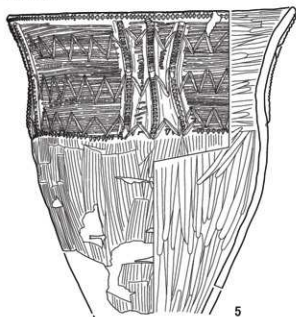
ⅢF-02



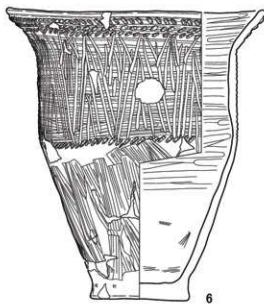
ⅢF-09



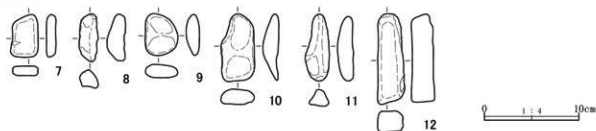
ⅢPB-01



ⅢPB-02



ⅢSB-04



図Ⅲ-7 ⅢF-02・09・ⅢPB-01・02・ⅢSB-04 出土遺物

表Ⅲ-5 続縄文・擦文文化期 遺構出土遺物属性表

挿図 番号	図版 番号	遺構名	グリッド	遺物 番号	遺物名	分類	層位	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
Ⅲ-7-1	21-1	ⅢF-02	G-19	648	石 錐	A1	Ⅲc	28.4	13.4	5.0	1.52	Obs.	被熱
Ⅲ-7-2	21-2	ⅢF-02	G-19	651	石 錐	A1	Ⅲc	31.3	21.4	8.3	4.61	Obs.	
Ⅲ-7-3	21-3	ⅢF-02	G-19	650	スライバー	B1	Ⅲc	32.6	19.9	5.9	3.45	Obs.	
-	21-4	ⅢF-02	G-19	2195	骨角器	-	Ⅲc	16.0	8.0	0.6	0.20	B.	
Ⅲ-7-4	カラー7-6	ⅢF-09	G-19	1237	銅製品	-	Ⅲbl.	81.0	55.0	6.0	19.23	Sn.	

表Ⅲ-6 ⅢPB-01・02出土土器属性表

挿図 番号	図版番号	遺構名	個体 名称	分類	遺物番号	グリッド	層位	器種	部位	器面調整		点数	備考
										内側	外側		
Ⅲ-7-5	カラー7-2・ 21-2-5	ⅢPB-01	SP01	VIII2	1474.1482.1485. 1488.1489.1494. 1502～1505 他 47点	AD-26	ⅢbL	甕	口縁部～ 胴部下半	ミガキ	ハケメ ミガキ	57	
Ⅲ-7-6	カラー7-2・ 21-2-6	ⅢPB-02	SP02	VIII2	666.16271630.1 631.1642.1643.1 649.1678.1683.1 684 他72点	AE-25	ⅢbL	甕	口縁部～ 底部	ミガキ	ハケメ ミガキ	82	

表Ⅲ-7 ⅢSB-04磑属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	層位	状態	計測値(mm)					長短比	長短比 標準 偏差	重量 (g)	被熱	材質	備考	
						長軸	標準 偏差	短軸	標準 偏差	厚さ							標準 偏差
Ⅲ-7-9	21-3	-	1436	ⅢbL	完形	36.9	-21.6	20.8	-9.6	12.3	-6.2	1.8	-0.2	12.7	-	Sa.	
-	21-3	-	1438	ⅢbL	完形	37.5	-21.0	32.5	2.1	16.1	-2.4	1.2	-0.8	19.6	-	Mod.	
Ⅲ-7-7	21-3	-	1376	ⅢbL	完形	45.4	-13.1	29.2	-1.2	10.4	-8.0	1.6	-0.4	21.6	-	Sa.	
-	21-3	-	1394	ⅢbL	完形	46.7	-11.8	30.4	0.0	12.2	-6.2	1.5	-0.4	18.0	-	Sa.	
-	21-3	-	1432	ⅢbL	完形	44.5	-14.0	30.7	0.3	20.6	2.2	1.4	-0.5	34.1	●	Sa.	
-	21-3	-	1412	ⅢbL	完形	52.2	-6.3	28.6	-1.8	21.4	2.9	1.8	-0.1	28.6	-	Mod.	
Ⅲ-7-8	21-3	-	1379	ⅢbL	完形	50.0	-8.5	20.8	-9.6	16.3	-2.1	2.4	0.4	21.3	-	Sa.	
-	21-3	-	1418	ⅢbL	完形	46.4	-12.1	25.5	-4.9	18.5	0.1	1.8	-0.1	27.2	-	Sa.	
-	21-3	-	1535	ⅢbL	完形	50.8	-7.7	26.5	-3.9	18.9	0.4	1.9	0.0	27.2	-	Sa.	
-	21-3	-	1426	ⅢbL	完形	44.3	-14.2	34.9	4.5	15.0	-3.5	1.3	-0.7	28.5	●	Sa.	
-	21-3	-	1533	ⅢbL	完形	46.6	-11.9	41.6	11.2	23.8	5.4	1.1	-0.8	48.4	-	Sa.	
-	21-3	-	1381	ⅢbL	完形	63.6	5.1	27.8	-2.6	17.8	-0.6	2.3	0.3	33.7	-	Sa.	
Ⅲ-7-10	21-3	-	1526	ⅢbL	完形	71.1	12.6	35.4	5.0	16.8	-1.7	2.0	0.0	44.3	●	Sa.	
Ⅲ-7-11	21-3	-	1383	ⅢbL	完形	70.5	12.0	25.7	-4.7	17.7	-0.8	2.7	0.8	31.6	-	Sa.	
-	21-3	-	1423	ⅢbL	完形	61.9	3.4	35.1	4.7	12.8	-5.6	1.8	-0.2	30.6	-	Sa.	
-	21-3	-	1430	ⅢbL	完形	89.5	22.0	30.9	0.5	29.3	10.9	2.6	0.6	54.1	-	Sa.	
-	21-3	-	1434	ⅢbL	完形	77.8	19.3	39.0	8.6	23.8	5.3	2.0	0.0	92.2	-	Sa.	
-	21-3	-	1406	ⅢbL	完形	89.3	30.8	34.5	4.1	22.9	4.4	2.6	0.6	106.7	-	Sa.	
Ⅲ-7-12	21-3	-	1525	ⅢbL	完形	95.0	36.5	27.7	-2.7	23.9	5.4	3.4	1.5	112.4	-	Mod.	
完形合計						1110.8		577.4		350.0		37.3		786.7			
完形平均値						58.5		30.4		18.4		2.0		41.4			
遺物総重量														2446.7			

第4節 磑集中

ⅢSB-04 (図Ⅲ-6・7-7～12 図版14-8・21-3)

位置：G-19・20 規模：261×163cm

確認・調査：ⅢbU層調査で磑数点が出土していたため、下位の磑集中の存在が予測された。ⅢbU層は獣骨が多く出土しており、磑集中は獣骨取り上げ後、1～2cmの黒色土を挟んだⅢbL層で検出した。規模は長軸261cm、短軸163cmで北壁に接しており、調査区外に続くものと思われる。

出土遺物：RF・UF1点、剥片1点、磑84点が出土した。RF・UFは黒曜石である。磑は棒状磑が主体で、砂岩72点、泥岩12点である。(山田)

第5節 包含層出土遺物

1. 土器 (図Ⅲ-8 図版22-1～4) 1はVIC類と分類した器高9cmある復元個体の坏である。口縁部は3.3cm幅でほぼ垂直に立ち上がり、体部は外傾し底部は平底である。文様は口縁部直下に幅広の浅い沈線文が3条認められ、体部はハケメ、底部変換点はミガキ調整されている。口縁部には3ヶ所の補修孔が認められる。内面は底から体部に向かって縦方向のミガキ調整された後、体部上半から横方向の調整が認められる。本資料は便宜的に坏に分類しているが鉢のような形態を示し



図Ⅲ-8 擦文文化期 包含層出土土器

表Ⅲ-8 擦文文化期 包含層出土土器属性表

神図 番号	図版 番号	個体 名称	分類	遺物番号	グリッド	層位	器種	部位	器面調整		点数	備考
									内側	外側		
Ⅲ-8-1	22-1	SP03	ⅦC	1264.1301.1374. 1450.1451.1452. 1458.1459他8点	J-21・22	Ⅲbl.	坏	口縁部 ～底部	ミガキ	ハケメ ミガキ	16	
Ⅲ-8-2	22-2	SP04	ⅦB2a	1266.1303	J-21・22	Ⅲbl.	甕	口縁部	ミガキ	ハケメ ミガキ	2	口唇に横走沈線
Ⅲ-8-3	22-3	SP05	Ⅶ B2c	1261.1262.1733	J-22・K-23	Ⅲbl.l.bl.	甕	口縁部	ミガキ	ハケメ ミガキ	3	炭化物付着
Ⅲ-8-4	22-4	SP06	Ⅶ E4b	1283.1372	K-22	Ⅲbl.c	坏	口縁～ 体部	ミガキ	ミガキ	2	黒色処理

ている。2・3は甕の口縁部片とともに外反する資料である。2は口唇部に横走沈線が施され、刻みが連続して付される。口縁部は横走沈線のみで下半に刻みが認められる。3は無文でハケメ調整後弱くミガキ調整している。4はⅦE4b類と分類した土師器の坏で、体部からやや外傾して立ち上がる。内面はミガキの黒色処理が施されている。(奈良)

2. 剥片石器 (図Ⅲ-9-1～4 図版22-5～8)

統縄文・擦文文化期の包含層からは剥片石器9点、礫石器17点、剥片75点、礫910点が出土した。石器は統縄文文化期の包含層に相当するⅢc層から出土したものが多く、統縄文土器の出土がないため、時期は不明である。剥片石器の内訳は石槍2点、スクレイパー4点、石核2点、RF1点で、石材はすべて黒曜石である。礫石器の内訳は石斧1点、たたき石3点、砥石12点、台石1点で、石材は青色片岩1点、花崗岩1点、砂岩7点、溶結凝灰岩8点である。剥片の石材は黒曜石73点、メノウ1点、片岩1点である。礫の石材は緑色片岩1点、花崗岩3点、砂岩628点、泥岩262点、片麻岩1点、メノウ2点、チャート1点、溶結凝灰岩1点、珪化岩1点、蛇紋岩?4点、凝灰岩1点、不明5点である。

スクレイパー (1・2)

1・2はスクレイパーで、いずれも黒曜石である。1は長幅比1.0未満の二側縁加工のものである(C1b類)。背腹両面の剥離痕が同方向の薄手の剥片を素材とし、背面側への側縁調整で、V字状の刃部が作出されている。腹面側の両側縁には連続した微細剥離痕が観察される。2は長幅比1.0以上の二側縁加工のものである(C2b類)。裏面側を先とする両面剥離により器体が整形され、表面の両側縁及び裏面の左側縁に刃部が作出されている。器体は先端部の右側縁がわずかに内湾する尖頭形を呈する。下半が欠損する。

石核 (3・4)

3・4は石核で、いずれも黒曜石である。3は両極剥離のもの(E類)で、素材形状は不明であるが、厚手の剥片もしくは小型の原石が考えられる。縦断面はレンズ状で、両面体のような形状であるが、打点となる端部にステップフラクチャーが集積していることから、両極剥離による石核である。剥離作業は短軸上の後、長軸上の剥片が剥離されている。器体に残る剥離痕の形状から、剥離された剥片はやや内湾した薄手・小型の剥片と考えられ、石礫・RF等に充当された可能性が想定される。4は求心状剥離のもの(D類)で、裏面に凹面が残る剥片の腹面を剥離作業面として、周縁から器体中心に向かって幅広い剥片が剥離されている。

3. 礫石器 (図Ⅲ-9-5～10 図版22-9～14)

たたき石 (5～7)

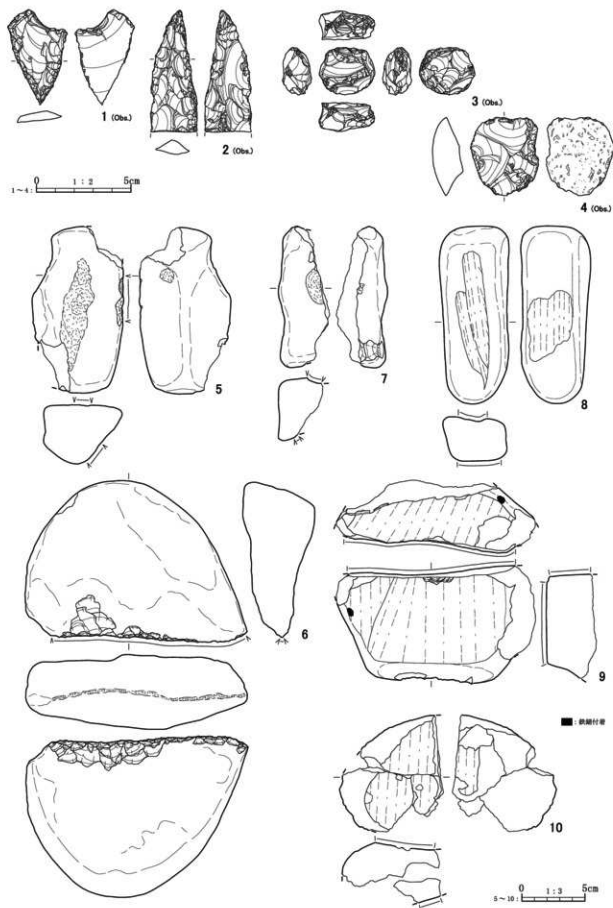
5・7は砂岩の柱状亜角礫、6は花崗岩の円礫が自然破砕した断面三角形のものである。敲打痕の位置は、5が両面と側縁(ⅡD類)、6が縁辺部のみ(ⅢC類)、7は破片で両面(Ⅶ類)に敲打痕が見られる。5は表面の器体長軸上の平坦面に敲打痕の重複がみられ、溝状の敲打範囲が形成されている。特に中央の敲打痕はすり鉢状に窪んでいる。6は断面三角形の礫の稜線上に敲打痕が連続し、幅5mm程の敲打範囲が形成されている。表裏面には敲打時の剥離痕がみられる。7は表面に形成された敲打痕の中心から器体の右半分が欠損したものである。敲打による欠損と考えられる。敲打痕は3カ所みられ、表面は円形に窪む敲打痕、裏面の同じ位置に浅い敲打痕、裏面側端の稜線上に敲打痕が形成されている。表面の円形の敲打範囲内は、潰れが顕著で凹凸が少ないことから、高頻度の使用が考えられる。

砥石 (8～10)

8・9は砂岩、10は溶結凝灰岩である。8は柱状の亜円礫を素材とし、表裏面に砥面が形成されている。表面は溝状の砥面が2単位認められ、裏面は平坦である。9は盤状の亜円礫を素材とし、表面と上面に砥面が形成されている。上面の砥面は緩く湾曲している。砥面の端にわずかな鉄錆が付着している。10は5点が接合した。砥面は両面に形成され、表面は緩く湾曲している。8・10は器体長軸方向、9は短軸方向の擦痕が観察される。(山田)

表Ⅲ-9 続縄文・擦文文化期 包含層出土石器属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	グリッド	遺物 番号	遺物名	分類	層位	計測値(mm)			重量 (g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
Ⅲ-9-1	22-5	-	G-19	690	スクレイパー	C1b	Ⅲc	48.8	31.0	5.6	6.5	Obs.	
Ⅲ-9-2	22-6	-	G-17	2136	スクレイパー	C2b	ⅢbJ	64.3	24.8	8.1	13.2	Obs.	
Ⅲ-9-3	22-7	-	F-18	639	石核	E	Ⅲc	29.3	25.7	15.3	11.6	Obs.	
Ⅲ-9-4	22-8	-	G-19	348	石核	D	Ⅲ	41.5	35.8	16.2	21.8	Obs.	
Ⅲ-9-5	22-9	-	G-19	1221	たたき石	ⅡB	Ⅲc	131.3	72.6	52.5	(476.0)	Sa.	
Ⅲ-9-6	22-10	-	G-19	1540	たたき石	ⅢC	Ⅲc	177.0	122.5	58.3	1404.0	Gra.	
Ⅲ-9-7	22-11	-	J-22	1256	たたき石	ⅦA	ⅢbL	100.7	(58.4)	38.3	(243.0)	Sa.	
Ⅲ-9-8	22-12	-	H-20	1148	砥石	ⅡA	ⅢbL	140.1	53.0	55.1	450.5	Sa.	
Ⅲ-9-9	22-13	-	G-19	2140	砥石	ⅡA	Ⅲc	90.5	(152.3)	48.2	(840.0)	Sa.	被熱
Ⅲ-9-10	22-14	ⅢST-01	H-19	1321,1329, 1331,1333, 1334	砥石	ⅡB	Ⅲc	(105.0)	(75.5)	42.3	(68.4)	Wtf.	図版No.78



図Ⅲ-9 続縄文・擦文文化期 包含層出土石器

第四章 縄文時代の調査

本章で取り扱う遺構及び遺物はTa-cテフラとTa-dテフラに狭在する黒色腐植土層から出土したものである。遺構は下流側に杭跡が残るTピット1基検出したのみである。遺物は段丘変換点の付近から上流側にかけて分布している。主な時期は縄文時代後期後半・晩期中葉の資料で遺物総数362点出土している。内訳は土器112点、石器類32点、フレイク・チップ25点、礫193点で出土量としては少ない。遺物の分布を見ると縄文晩期の土器がS-26区付近でまとまっているが、縄文後期の遺物は上流に向かってまばらに分布しているのみである。これらの遺構・遺物出土状態から縄文時代には段丘の本流側に面する地点はあまり利用されていなかったと考えられる。(奈良)

第1節 Tピット

TP-01 (図IV-2 図版16-1)

位置：Y-26 規模：(101)×102×130cm 長軸方向：N-31° W

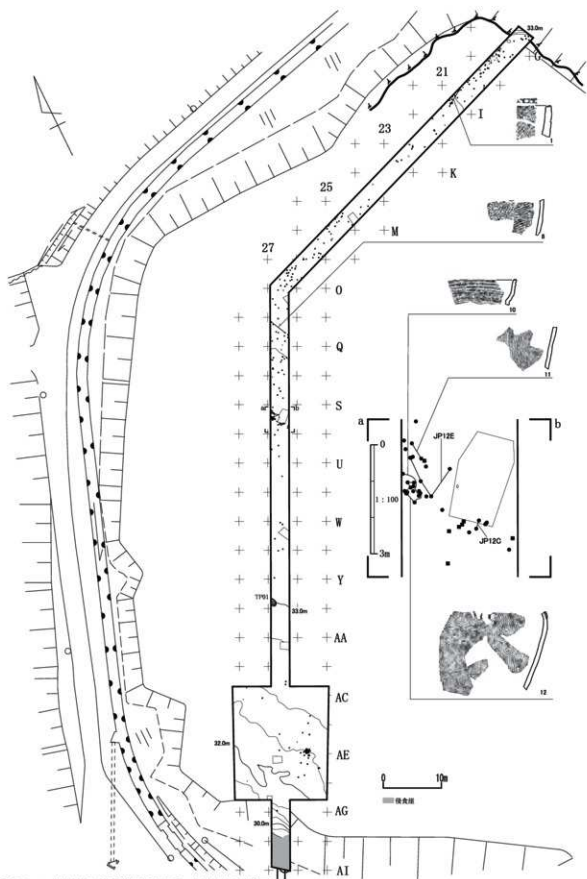
確認・調査：Vc層遺構確認精査で、西壁にかかる黒色土の楕円形プランを検出した。壁面際に沿って半掘したところ、坑底面と壁面の立ち上がり、土層断面で壁面崩落土の流入堆積がみられたことからTピットと判断し調査した。坑底面で杭跡2基を検出したことから、土層堆積状態の記録後、杭跡の調査に移行した。杭跡は長軸方向で半載し、堆積状態を記録した。杭跡完掘後、平面形とエレベーションを記録して調査を終了した。平面は長楕円形、坑底面は平坦で、壁面の立ち上がりは急であるが、坑口部に向かって緩やかに開く。規模は坑口部幅が102cm、坑底面幅が29cm、深さは130cmで、楕円形タイプのTピットとしては細長く、浅いものである。全体の平面形を検出していないため不明な点があるが、厚真町で従っている分類基準(佐藤・大泉1987)ではC2型(「長短比が4未満のもので、楕円形から円形に近い」)に該当する可能性がある。

堆積状態：覆土1～4・10層はVc層、5～8・14層はVI層、9・11～13層はVII層を主体とし、いずれもTピット壁面の崩落堆積土である。15層はV層起源のしまりの弱い褐色土で、腐植の進行していない自然堆積土と考えられる。堆積傾斜から考えると4・6・9・11・13層は右壁面から、5・9・7・10・12層は左壁面からの崩落土とみられ、断面形態からも特に右壁面の崩落が顕著である。詳細な埋没過程を明示できないが、14・15層が自然堆積して短期間のうちに、11・13層が右壁面から崩落、後に左右の壁面が崩落し、埋没したと想定される。

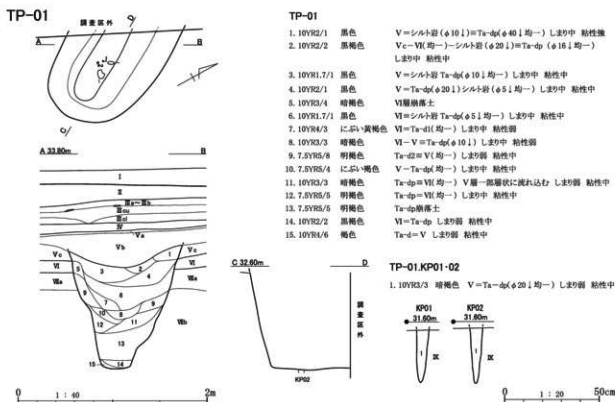
KP-01・02：2基検出した。長軸方向に並んで位置し、杭間は約10cmと近接している。平面は不整な円形で2基とも深さ約30cmである。覆土は崩落したTa-dパミスが多く混入する黒色土であり、比較的短期間のうちに埋没した可能性がある。(山田)

表IV-1 縄文時代遺構一覧表

遺構名	時期	規模(cm)		グリッド	層位	付属・関連遺構	備考
		長軸	短軸				
TP-01	縄文時代	(101)	102	Y-26	Vc		



図IV-1 縄文時代遺構配置図・土器接合線図



図IV-2 TP-01 平面及び断面図

表IV-2 TP-01属性表

神洞 番号	図版 番号	遺構名	平面形		グリッド	調査 面層 位	調査面規模(cm)		坑底面規模(cm)		深さ (cm)	長軸方向	坑底	調査面 長短比	坑底面 長短比	備考
			調査面/坑底面	グリッド			長軸	短軸	長軸	短軸						
IV-2	16-1	TP-01	-	Y-26	Vc	(101)	102	(80)	29	130	N-31° W	2	-	-		

表IV-3 Tピット逆茂木属性表

神洞 番号	図版 番号	遺構名	平面形		グリッド	規模(cm)			傾き (度)	タイプ	備考
			調査面/坑底	グリッド		上端	下端	深さ			
IV-2	16-3	TP-01	KP01	円形/-	Y-26	6	1	28	0°	打込み	
IV-2	16-3		KP02	円形/-	Y-26	6	0	29	0°	打込み	

第2節 包含層出土遺物

1. 土器 (図IV-3 図版 23-1~14)

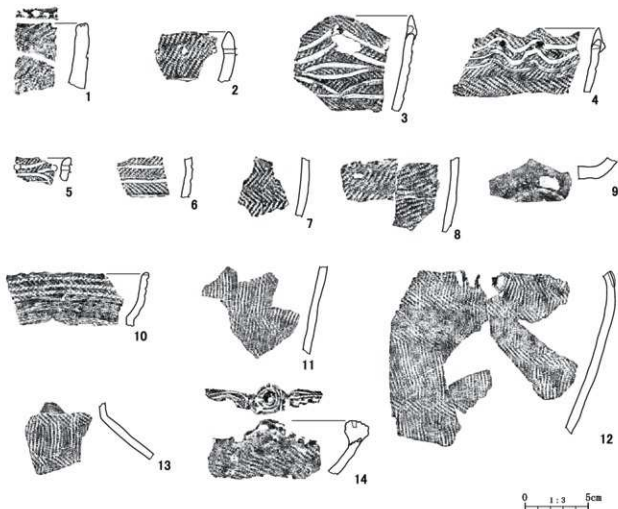
本遺跡より出土した縄文時代の土器は総数 112 点、Ⅲ群 B2 類 2 点、Ⅳ群 D1 群 67 点、Ⅴ群 B1 類 43 点である。時期的にはⅣ群 D1 類に分類される堂林式土器が多いが、全体の出土点数は少なく出土傾向も特異な分布は認められない。

以下に分類ごとの概略を記載し、掲載土器の詳細については表IV-4を参考とされたい。

Ⅲ群 B2 類 (図IV-3-1) 本群は柏木川式土器に分類される土器群で、出土点数は全部で 2 点である。1 は口縁部資料で直立して立ち上がり、口唇部は隅丸角状を呈する。文様は口唇部に中空工具によって連続的に刺突文が施され、口縁部は LR 斜行縄文で胎土に繊維少量と、砂粒を中量含む。

IV群 D1 類 (図IV-3-2~9) 本群は堂林式土器に分類される土器群である。2~5は口縁部片で2は平縁、3・4は波状、5は緩やかな波状を呈する。口縁部はいずれも直立し、2~4は口唇部が尖状、5は隅丸角状を呈している。文様は2がLR斜行縄文に突瘤が連続し、突瘤下位の破断面付近に横走沈線が1条認められる。3~5はRL斜行縄文後、浅い沈線文を弧状に施文している。突瘤は沈線文上に連続的に施される。いずれも内面はミガキによって丁寧に調整されている。6~8は胴部片である。6はやや内湾、7・8は直立して立ち上がる。文様は6・7が異原体羽状縄文で、6は横走沈線が3条認められる。8はLR斜行縄文のみである。いずれも内面はミガキによって丁寧に調整されている。9は上げ底の底部片で、外傾して立ち上がる。胎土については2・7が砂礫を少量、3・6が砂礫、砂粒を中量、4・5・8・9が砂粒を少量含む。

V群 B1 類 (図IV-3-10~14) 本群は晩期中葉に分類される土器群である。14以外はS-26区の集中する範囲からの出土で、個体数も少ない。10は平縁の口縁部片で、直立して立ち上がる。口唇部の一部には連続した刻みが施され、口縁部直下には浅くRL斜行縄文施文後、縄線文を3条付している。縄線文の下位は横方向のナデ整形によって無文帯が形成されている。11~13は10の同一個体と考えられる胴部片で11~13はRL縄文を縦位または斜位に施文し、12は棒状工具による押し文が一部に認められる。13は壺形土器の肩部分と推定され、無文の頸部が垂直気味に立ち上がる。



図IV-3 縄文時代 包含層出土土器

表IV-4 縄文時代包含層出土土器属性表(1)

属性表記載において、下記の要項のみを行っているが、「部位」、「胎土」の記載については、相对比较によるもので観察者の主観による。

〔胎土名称〕 同一個体にアラバキ数字、破片資料にアラバキ数字を付番した。

〔分類〕 「第1節 第四章 第1節 1. 土器」に記載している。

〔胎形等・文様〕 各部位毎の形態を示した。「口縁」は口縁部器表面。「底部側面」は底部器表面。「変換点」は底部面と底面との状態を記載した。

〔胎形等〕 「外反」は反る状態。「外傾」は直線的に傾く状態を示している。

〔文様〕 以下の認識で記載した。

記載順序: 部位の口縁→胴部→口縁部→胴部への記載順、部位の底→胴部→胴部への記載順となっている。

記号: +; 文様要素の重複施文 *; 文様要素の複合ないしは充實構成

文様要素

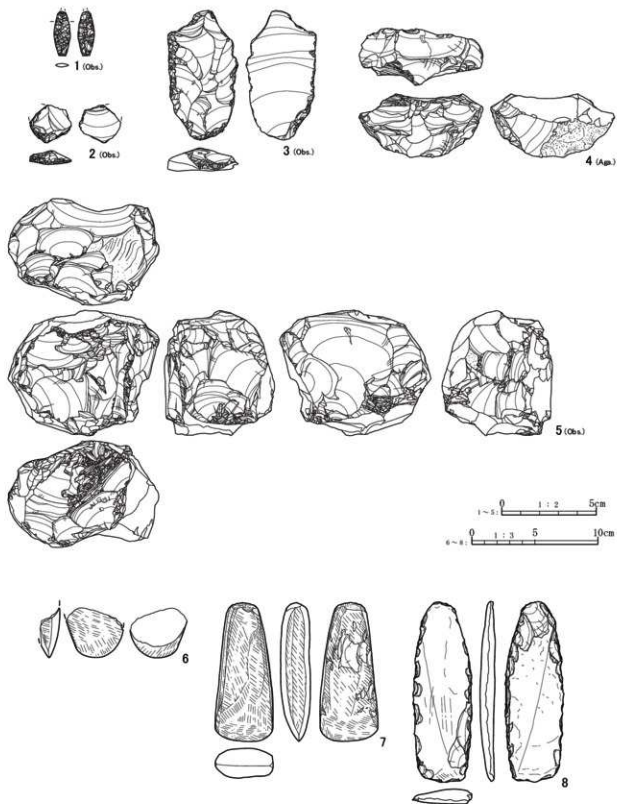
2段異原体羽状調文: 捲りの異なる2段の原体(LR・RI)による羽状調文

調刻文: 胎土以上の彫原体の圧痕。

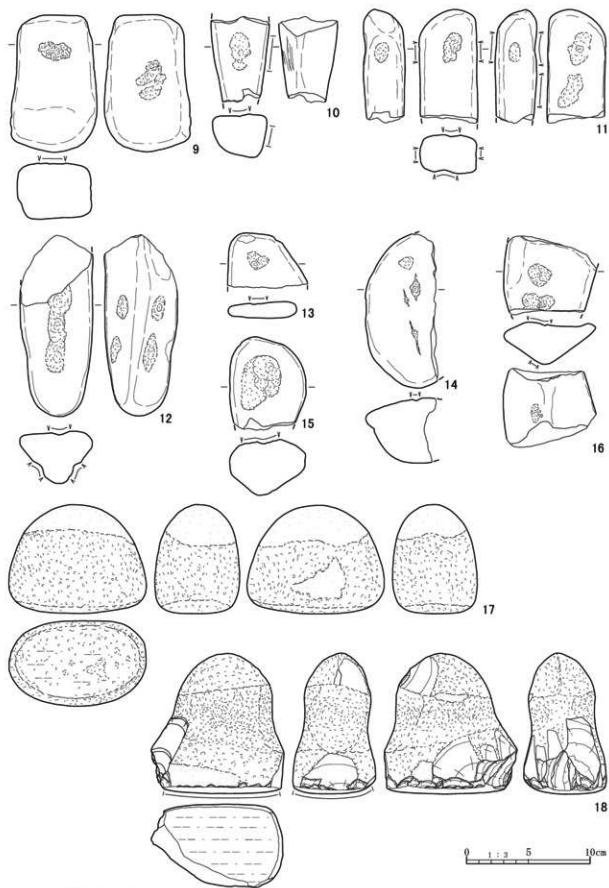
調刻文: 器表面に対し、2段以上の彫原体の圧痕。

〔胎土〕 組織: 縦断面や斜断面に観察できる「板状の平行な割れ目」組織。(花園 1992)

標頭番号	図版番号	製体名称	分類	部位	遺物番号/調査区/層位	胎形等		文様	胎土	備考
						口縁-口唇/胎部/底面	口唇-口縁-内面/胎部-内面/底面-内面			
IV-3-1	23-1 JP01	III B2 口縁部	D1	口縁部	1717/2157/H/20/V bl.	平縁-直立-隅丸角状	口唇-口縁-内面/胎部-内面/底面-内面	中空工具による半突列-IR斜行調文-弱いナデ	織津梅散砂粒少量	
IV-3-2	23-2 JP02IV	DI 口縁部	D1	口縁部	1838/N-26/V b L	平縁-内湾-尖り(内傾)	IR斜行調文-横走花線文(外)+IO突揃-ミガキ	砂粒少量		
IV-3-3	23-3 JP03AIV	DI 口縁部	D1	口縁部	1999/O-26/V b U	波状-直立-尖り(内傾)	RI羽状調文・強い弧状花線文(外)+IO突揃-強いミガキ	砂粒・砂量中量		
IV-3-4	23-4 JP04AIV	DI 口縁部	D1	口縁部	1997/O-26/V b U	波状-直立-尖り(内傾)	RI羽状調文・強い弧状花線文(外)+IO突揃-ミガキ	砂粒・砂量中量		
IV-3-5	23-5 JP05BIV	DI 口縁部	D1	口縁部	1924/S-26/V b U	緩やかな波状-直立-隅丸角状	RI羽状調文・弧状花線文(外)+IO突揃-ミガキ	砂粒少量		内面凹化物付着
IV-3-6	23-6 JP06AIV	DI 胴部	D1	胴部	1915/S-26/V b U	やや内湾	異原体羽状調文-横走花線文(外)-弱いミガキ	砂粒~中量		内面凹化物付着
IV-3-7	23-7 JP08IV	DI 胴部	D1	胴部	2004/P-26/V b U	直立	異原体羽状調文-ミガキ	砂粒少量		
IV-3-8	23-8 JP10IV	DI 胴部	D1	胴部	2000.2001.2006/P-26/V b U	直立	IR斜行調文-ミガキ	砂粒少量		
IV-3-9	23-9 JP07IV	DI 底面	D1	底面	1854/M-25/V b L	上野底-丸-外傾	ナデ	砂粒・赤色		
IV-3-10	23-10 JP12A	VAI 口縁部	VAI	口縁部	1884.1891/S-26/V a	平縁-直立-隅丸角状	刻み-RI斜行調文・横線文・ナデ-ナデ	砂粒・赤色		
IV-3-11	23-11 JP12D	VAI 胴部	VAI	胴部	1895.1921.2178/S-26/V a, V bl.	やや外傾	RI縦走調文-ナデ	砂粒・赤色		
IV-3-12	23-14 JP12B	VAI 胴部~胴部下半	VAI	胴部	1889.1890.1883.1887.1899.1900.1902.1919/S-26/V a, V bl.	内湾-胴部強凸出し	RI縦走調文・横線文・ナデによる押引文(縦)-ミガキ	砂粒・赤色		底?
IV-3-13	23-12 JP14	VAI 頸部~胴部	VAI	頸部	2176/T85/V	外反-直立	ナデ/RI斜行調文・IR調文縦走-ナデ	砂粒・赤色		
IV-3-14	23-13 JP11	VAI 口縁部	VAI	口縁部	1773/G-19/V b L	平縁-突起-外傾-角状	突起-横線文による刻み・同心甲状溝赤圧痕 口唇-化線赤-RI斜行調文・刻み-ナデ	白色岩片・砂粒少量		浅鉢



図IV-4 縄文時代 包含層出土剥片石器・礫石器



図IV-5 縄文時代 包含層出土礫石器

表 IV-5 縄文時代 包含層出土剥片石器属性表

採回 番号	図版 番号	グリッド	遺物 番号	遺物名	分類	層位	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
							長軸	短軸	厚さ			
IV-4-1	24-1	AD-25	2068	石 核	A1	Va	23.8	8.5	2.4	0.40	Obs.	
IV-4-2	24-2	G-19	1781	スクレイパー	B1	VbU	21.6	20.4	6.8	2.80	Obs.	
IV-4-3	24-3	AB-27	2166	スクレイパー	B3	VbL	66.1	36.4	8.6	17.30	Obs.	
IV-4-4	24-4	H-19	1585	石 核	A	VbU	35.7	65.9	32.2	55.90	Agp.	石材同定No79
IV-4-5	24-5	T-26	1710	石 核	C	VbU	123.7	102.2	91.0	1160.00	Obs.	

表 IV-6 縄文時代 包含層出土礫石器属性表

採回 番号	図版 番号	グリッド	遺物 番号	遺物名	分類	層位	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
							長軸	短軸	厚さ			
IV-4-6	24-6	AC-27	2026	石 弁	I	VbU	37.9	43.5	13.0	20.3	Gch-ss.	石材同定No60
IV-4-7	24-7	J-22	2070	石 弁	I	VbL	107.3	45.3	23.5	190.5	Gch-ss.	石材同定No81
IV-4-8	24-8	I-21	1236	石 弁	II	IIIaU	141.8	44.9	10.8	90.5	Bl-Sch.	鹿跡層上土出土 石材同定No82
IV-5-9	24-9	G-19	1827	たたき石	II B	VbL	109.0	66.8	50.9	572.0	Sa.	
IV-5-10	24-10	K-23	1732	たたき石	II B	VbL	64.8	40.5	38.5	150.0	Sa.	石材同定No83
IV-5-11	24-11	AB-25	2032	たたき石	II D	VbU	96.8	45.9	33.5	220.5	Sa.	被熱
IV-5-12	24-12	F-19	1791	たたき石	II D	VbU	139.7	55.4	44.1	370.0	Sa.	
IV-5-13	24-13	O-26	1995	たたき石	VA	VI	43.0	32.8	12.3	50.0	Sa.	被熱
IV-5-14	24-14	Q-26	1939	たたき石	VA	VbL	129.9	55.7	56.3	440.0	Sa.	被熱
IV-5-15	24-15	G-19	1542	たたき石	VA	Va	73.2	61.0	45.0	230.0	Sa.	
IV-5-16	24-16	G-19	1714	たたき石	VB	VbL	63.3	72.0	34.9	150.0	Sa.	
IV-5-17	24-17	M-25	1861	すり石	IV	Vc	86.5	110.8	70.7	1070.0	Sa.	
IV-5-18	24-18	M-24	1862	すり石	IV	VbL	112.3	104.6	65.8	970.5	Sa.	石材同定No84

胎土はいずれも砂粒と赤色岩片を少量含んでいる。14は浅鉢の口縁部片で、口唇部は内削ぎの尖状を呈し突起が認められる。突起は中心に刺突文と同心円状のR燃糸が施される。口唇部にはR燃糸が2条施され、口縁部はRL斜行縄文と連続した刻みが施される。(奈良)

2. 剥片石器 (図IV-4-1~5 図版24-1~5)

V層包含層からは剥片石器13点、剥片27点が出土した。内訳は石鏃3点、スクレイパー3点、石核2点、RF・UF5点である。石材は黒曜石12点、メノウ1点である。剥片はすべて黒曜石である。石鏃(1)

1点が出土した。1は先端を欠損する、薄手・細身の柳葉形のもの(A1類)で、黒曜石製である。表面の後、裏面側が調整されている。側縁の微細剥離痕は縁辺調整と考えられる。

スクレイパー(2・3)

2・3はエンドスクレイパー(B類)である。2は長幅比1.0~2.0未満のもの(B1類)、3は長幅比2.0以上のもの(B3類)である。いずれも黒曜石である。2は薄手の剥片の末端に、急角度の刃部が作出されている。刃部平面形は直線的な二辺の刃部が交差して凸形となる。器体上半が欠損している。3は薄手・幅広の剥片の打点側に急角度の刃部が作出されている。刃部は背面の下縁から側縁にかけて連続していたとみられるが、下縁左半からは腹面側へ刃部が作出されており、刃部再生が施されたと考えられる。

石核(4・5)

4・5は石核である。4はメノウ、5は黒曜石である。4は単設打面石核(A類)、5は回転多打面石核(C類)である。4は裏面に岩屑面が残る厚手の剥片を素材とする。表面下半に素材剥片の腹面が残る。上面は背面側及び腹面側から剥片が剥離され、打面が作出されている。打面作出後、素材剥片の腹面側から目的剥片が剥離されている。剥離作業面に残る剥離痕は、ステップもしくはヒンジフラクチャーが生じていることから、剥離された剥片は小型で寸詰まりのものと考えられる。5は上面と左側面に岩屑面を残す大型の石核である。剥離作業面は6面にみられ、90°打面を転移

させ、打面と作業面を入れ替えながら剥片剥離が進行している。剥離過程ははじめ上下面を打面とし、表裏面で剥片を剥離している。次に表裏面を打面とし、左右側面の剥片を剥離している。正面には再度、上面からの剥離痕がみられる。最終的な残核形態は各面の打面と剥離面のなす角度が鈍角となるサイコロ状を呈する。

3. 礫石器 (図IV-4-6～8・IV-5-9～18 図版 24-6～18)

V層包含層からは礫石器 17 点、礫 181 点が出土した。内訳は石斧 3 点 (うち 1 点はⅢaU 出土)、石斧片 3 点、たたき石 8 点、すり石 2 点、台石 1 点、加工痕ある礫 1 点である。石材は緑色片岩 5 点 (青トラ型緑色岩含む)、砂岩 12 点である。礫の石材は、砂岩 164 点、安山岩 7 点、メノウ 2 点、蛇紋岩 5 点、珪化岩 1 点、礫岩 1 点、不明 1 点である。蛇紋岩は、緑色片岩に含まれる可能性がある。

石斧・石斧片 (6～8)

6～8は石斧である。6・7は青トラ型緑色岩、8は青色片岩である。6・7は磨製石斧 (Ⅰ類) で、6は刃部片である。研磨調整が施され、側縁が面取りされた両刃円刃のもの。7は裏面に剥離調整痕、上端に敲打調整痕を残し、全面に研磨調整が施されている。面取りされた両側面にもわずかに敲打調整痕が残る。器体平面は撥形、断面は四角形を呈する。8は部分的な研磨調整が施されたもの (Ⅱ類) である。全体が磨滅している。素材は表面に礫面、裏面に風化した破砕礫面を残す薄い扁平礫で、表裏面の両側縁及び刃部の剥離調整により器体が整形されている。研磨調整はほとんど観察されないが、表面に器体長軸方向の擦痕がわずかに観察される。

たたき石 (9～16)

9～12は柱状礫を素材とする (Ⅱ類)。9・10は両面に敲打痕が形成されているもの (ⅡB類) である。9は両面とも浅く平坦な敲打がみられる。10は器体の上下が欠損している。表面に浅く窪む敲打、裏面左側面に線条痕がみられる。11・12は両面と側面・縁に敲打痕が形成されているもの (ⅡD類) である。11は下半が欠損している。表裏左右の面に敲打痕が形成され、いずれも対面する同一位置に浅く窪む敲打がみられる。12は表裏面の計3面に敲打痕が形成されているもので、器体上端が欠損している。深く窪む敲打が観察される。13～16は礫片を素材とするもの (Ⅴ類)。13～15は片面に敲打痕が形成されているもの (ⅤA類) で、13は扁平礫、14は柱状礫の平坦面に敲打痕が形成されている。13は浅く平坦な敲打、14はやや散発的な敲打、15は浅く窪む敲打である。16は両面に敲打痕が形成されているもの (ⅤB類) である。表裏面の同一位置に浅く窪む敲打がみられる。すべて砂岩である。

すり石 (17・18)

17・18は北海道式石冠 (Ⅳ類) である。いずれも砂岩である。17は不整な円礫を素材とし、上面の礫面を残して器体のほぼ全面に敲打による器体整形が施されている。器体を一周する浅い敲打により把握部の作出を兼ねた器体整形が施されたのち、下面の敲打が施されている。下面はわずかにすり面が形成されている。18はほぼ全面敲打による器体整形とすり面が形成された後、下面からの剥離痕がみられるものである。器体整形は器表面、表裏面の把握部、側面の把握部の順で観察される。器体整形後、下面には1面のすり面が形成されている。表面左側縁、裏面右側縁にみられる下面からの剥離痕は使用による衝撃剥離と考えられる。

(山田)

第V章 まとめ

第1節 総括

富里2遺跡の調査では、調査幅が3.2mと幅狭いながらも擦文文化期からアイヌ文化期にかけて遺構、遺物が検出されている。本遺跡は厚真川左岸標高33~34mの河岸段丘上に立地しており、Ⅲ層（統縄文・擦文文化期、アイヌ文化期）は主に段丘上流側（北東側）に遺構群を形成している。段丘先端（上流側）からは厚真川の支流である顔美宇川（はびうがわ）と周辺で一番標高のあるコムヌブリ（アイヌ語地名）が一望できる。アイヌ文化期では住居跡をはじめ、灰集中や獣骨集中が検出されており、検出層位から近世アイヌ文化期に帰属する。同遺跡が所在する富里地区は「トンニカ」と呼ばれ、アイヌコタンがあったことが知られている（厚真村史1956）。平成19年度に発掘調査を行ったニタツナイ遺跡では、Ta-bテフラ直前直後に集落跡の存在を確認している（厚真町教育委員会2009b）。

アイヌ文化期になると金属製品が多く流通してくるが、金属製品の出土量を2遺跡と比較すると、ニタツナイ遺跡は1,768㎡でⅢ層アイヌ文化期から96点、富里2遺跡は770㎡で32点である。100㎡あたりの頻度はニタツナイ遺跡で5.4点、富里2遺跡で4.1点と比較的近い数値になる。もちろん種別や個体数の違いによって出土頻度の割合は流動するものであるが、他の遺跡と比較を行う際の一つの目安となり、集落の豊かさや性格を知る指標となる。

擦文文化期においては区画遺構とした段丘上流側に、溝跡と溝状遺構と整地範囲で特異な空間を形成している地点を確認した。調査開始時にはTa-bテフラが帯状に落ち窪む範囲を確認していたが、完掘及び断面確認を行ったところ、掘り上げ土の基底面がB-Tmに黒色土を挟んで上位にあることが確認され、擦文文化期から中世アイヌ文化期に帰属する遺構であることが明らかとなった。また、区画遺構の範囲については道教委の指導の下、溝跡、溝状遺構が推定できる範囲にトレンチを設定し、規模を確認したところ段丘先端を弧状に区画していることが判明した（図Ⅲ-2）。溝で区画した段丘先端の範囲は推定で約400㎡である。溝跡の内側5m地点には溝状遺構が馬蹄形に認められ、より上流側には皿状に整地した範囲に焼土が数ヶ所形成されている。詳細な時期については溝跡及びその内側から土器、金属製品といった時期を推定できる資料が乏しいが、中世アイヌ文化期以前の構築物であることは推定できる。年代については擦文中期以降から中世アイヌ文化期の間であると想定されるが、年代的にアイヌ文化期のチャシ成立年代の問題に係わる遺構である。溝の深さや立地、形態は異なるが、土地または空間を区画するという行為は、利用目的は異なるとしても「チャシ」の発生に繋がる可能性も考えられる。

本遺構に類似する遺構は、町内の上幌内モイ遺跡で検出した円形周溝遺構（ⅢX-01）が挙げられる（図V-1）。規模はやや異なるが、

1. 2重の溝で周囲と空間を隔絶する。
2. 内側に焼土を形成している。
3. 内側から遺物が殆ど出土しない。
4. 段丘の先端（後背が段丘崖である）に形成される。

などの点から同意義の価値観をもった人々が構築した遺構であると考えられる。年代については上幌内モイ遺跡のⅢX-01がB-Tmより新しく、焼土からサンプリングした堅果類のAMS年代測定で10c

後半から11c前半で擦文文化期に相当する年代結果を得ている。

このような溝跡は地表面では殆ど窪みが確認されないため、現在まであまり注目視されていなかったが、今回の報告で存在が注目されることによって全体像がより明らかになってくると考えられる。以下に区画遺構について若干の考察を述べる。

第2節 区画遺構の構築と周辺の遺構

はじめに溝跡と溝状遺構の同時期性については明確な共存関係が認められないが、検出層位から同時期と判断して報告している。

本節では区画遺構の形成から廃絶過程までについて、自然科学的な年代測定法の結果と現場所見を考慮して若干の考察を述べるものである。

溝跡の構築時期についてはIII章で詳細を記しているが、B-Tmと黒色土の堆積状態から擦文文化期から中世アイヌ文化期であると述べている。

ここで溝跡の構築時期を考察するにあたり、区画遺構内とその周辺から検出した擦文文化期と推定される焼土のAMS年代測定法から図V-2のようなステージ1から3の過程を想定した。

ステージ1は溝跡構築時と同時に形成されたと考えられる焼土群である。年代測定サンプル採取焼土はIII F-03-07であり、10c後半から12c前半で11c中頃と考えられる。他の焼土については年代測定を行なうだけの試料は採取できていないため、検出層位からステージ1に含めている。このステージ1の段階で整地範囲内に形成された焼土と合わせて区画遺構が機能していたと考えられる。

ステージ2は擦文文化期から近世アイヌ文化期への移行期と推定される年代である。区画遺構が埋没してゆく過程で、周辺より地形が窪んでいる状態であったと考えられる。次のステージ3に繋がる年代として、III F-05-08は13c中葉～後半の年代が得られている。調査区内の区画遺構範囲内にはほとんど痕跡が認められないが、III F-09の上位から検出した鋳製ニスカリの時期にあてはまる年代と考えられる。本報告ではステージ2までを統縄文・擦文文化期と報告を行なっている。

ステージ3は近世アイヌ文化期で年代はTa-bテフラから近世初頭であることが分かっていたが、III H-01の炉跡サンプルから年代測定を行なったところ16c中葉から17c中葉の結果を得ているので、現場所見との矛盾はない。ステージ3では、区画遺構は20cm以上溝跡に掘り上げ土主体の土砂が埋没しており、黒色土が自然堆積している。つまり黒色土が堆積するまでは利用されていなかった空間となる。そして近世段階で内側に広がる掘り上げ土を浅く窪んでいる溝跡内に埋め戻している。この埋め戻しは、整地のように平坦な面を作るということが目的ではなく、内側に盛り上がっている土を「窪みに寄せた」程度と考えられ、上流側に住居跡などを構築していったものと推定される。

以上のように本遺跡では中世段階ではあまり利用されておらず、擦文文化期、近世アイヌ文化期に活発であったことが推察される。間を担う中世段階の人々の動きが気になるが、今後の発掘によって人々の動きが理解されてくると思われる。

(奈良)

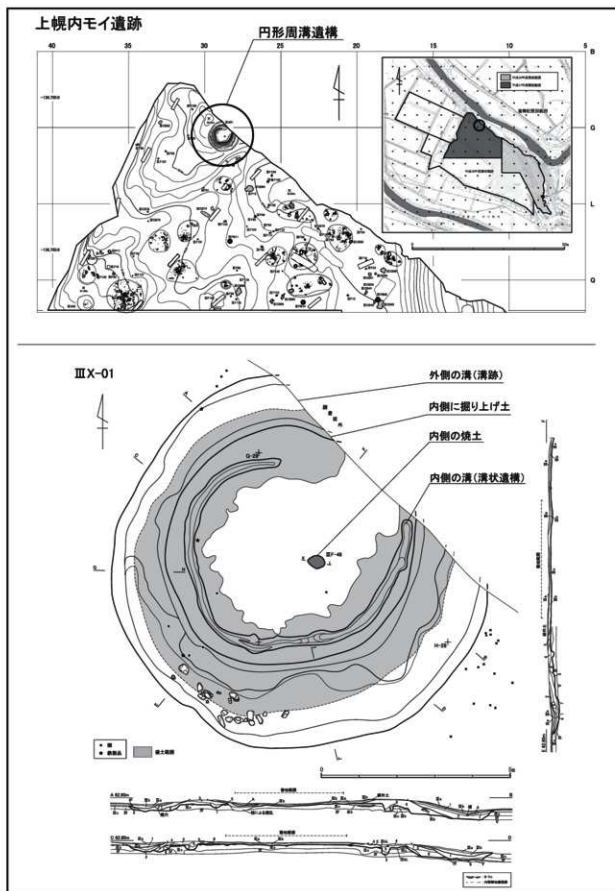
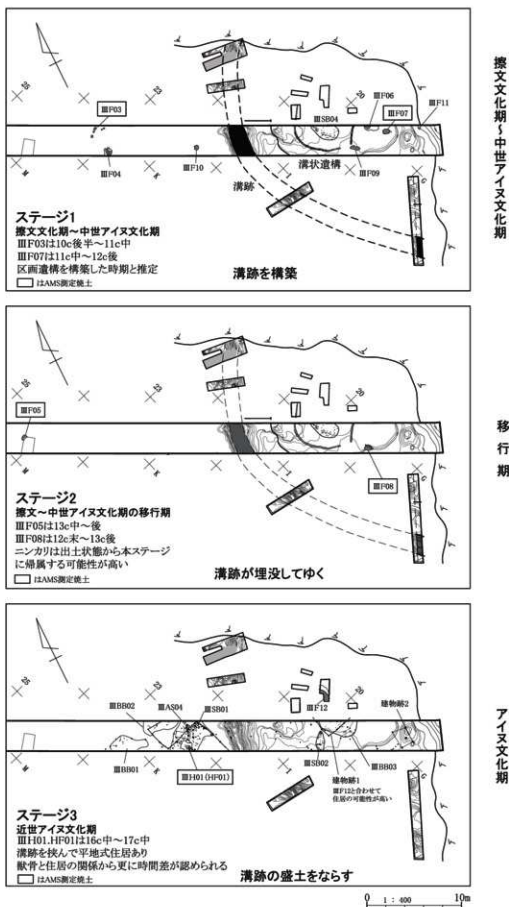


図 V-1 III X-01位置図及び平面図



図V-2 時期別段丘先端利用推定図

富里2遺跡

写真図版

図版1



1. 下流側斜面北壁断面(SE→)



2. 下流側平坦面北壁断面(SE→)



3. 上流側北壁断面(S→)

図版2



1. 調査区近景(E→)



2. 調査状況1[下流側斜面](SW→)



3. 調査状況2[発掘実習](E→)



4. 調査状況3[遺物点測量](SW→)

図版3



1. ⅢH-01完掘(SW→)



2. ⅢSB-01出土状態1(SW→)



3. ⅢSB-01出土状態2(W→)



4. ⅢH-01.HF01被熱層検出(N→)



5. ⅢH-01.HF01断面(NW→)

図版4



1. ⅢH-01柱穴列(SW→)



2. ⅢHP09断面(NW→)



3. ⅢHP09完掘(NW→)



4. ⅢHP10断面(NE→)



5. ⅢHP10柱材(NE→)



6. ⅢHP12断面(NE→)



7. ⅢHP12柱材(NE→)



8. ⅢHP14断面(SW→)



9. ⅢHP16断面(SW→)



10. ⅢHP17断面(NE→)



11. ⅢHP21断面(SW→)



12. ⅢHP50(左)・ⅢHP51(右)断面(N→)

図版5



1. 建物跡1完掘(SW→)



2. III KP33断面(E→)



3. III KP30断面(S→)



4. III KP31断面(S→)



5. III KP32断面(S→)



6. III KP34断面(E→)



7. III AS-01(左)・02(右)検出(SW→)

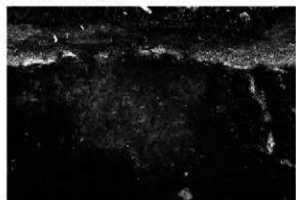
図版6



1. IIIAS-01検出(SE→)



2. IIIAS-01断面(SE→)



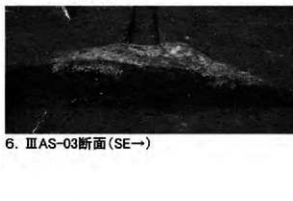
3. IIIAS-02検出(SE→)



4. IIIAS-02断面(W→)



5. IIIAS-03検出(S→)



6. IIIAS-03断面(SE→)



7. IIIAS-04検出(SW→)



8. IIIAS-04断面(NE→)

図版7



1. ⅢKP01~08完掘(SW→)



2. ⅢKP01断面(SW→)



3. ⅢKP05断面(SW→)



4. ⅢKP06断面(NE→)



5. ⅢKP20断面(NE→)



6. ⅢKP23断面(SW→)



7. ⅢKP27断面(W→)



8. ⅢKP36断面(NE→)



9. ⅢKP41断面(SE→)



10. ⅢKP48断面(NW→)



11. ⅢKP52断面(E→)



12. ⅢKP53断面(NE→)



13. ⅢKP60断面(SE→)



14. ⅢKP63断面(SW→)



15. ⅢKP67断面(NE→)

図版8



1. III BB-01検出(NW→)



2. III BB-02検出(SW→)



3. III BB-03(奥)・III SB-02検出(SW→)



4. III BB-03下顎(S→)



5. III BB-03鉄鍋片出土状態(SW→)



6. III SB-02検出(SW→)



7. III SB-03検出(S→)



8. 上流側集中遺物出土状態(SW→)

図版9



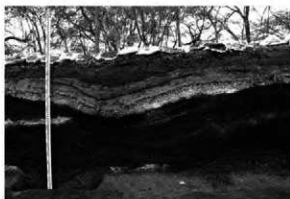
1. 溝跡推定範囲(SW→)



2. 溝跡検出(E→)



3. 溝跡断面1(SW→)



4. 溝跡断面2(NW→)



5. 溝跡TR4断面(W→)

図版10



1. 溝状遺構検出 (SW→)



2. 区画遺構〔溝跡・溝状遺構〕完掘 (SW→)



3. 溝状遺構断面1 (S→)



4. 溝状遺構断面5 (SE→)



5. ⅢKP47・溝状断面 (E→)



6. 溝状TR3・溝状遺構検出 (N→)



7. 溝状TR3・溝状遺構断面 (NW→)

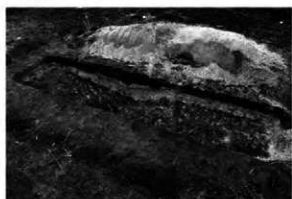
図版11



1. 溝跡TR1 (SE→)



2. 溝跡TR2 (SE→)



3. 溝跡TR3 (NW→)



4. 溝跡TR4 (S→)



5. 整地範囲内ⅢP-01・ⅢF-06～09検出 (SW→)

図版12



1. III F-02検出(SE→)



2. III F-02断面(NW→)



3. III F-06検出(S→)



4. III F-06断面(SW→)



5. III F-07検出(SE→)



6. III F-07断面(SE→)



7. III F-08(左)・09(右)検出(NW→)



8. III F-08断面(W→)

図版13



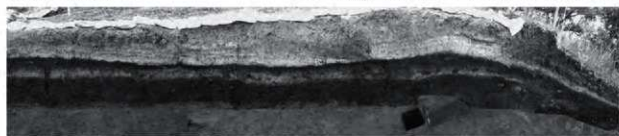
1. III F-09断面(W→)



2. III F-09ニンカリ出土1



3. III F-09ニンカリ出土2



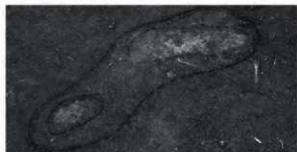
4. 整地範囲断面(SW→)



5. III P-01完掘(SE→)



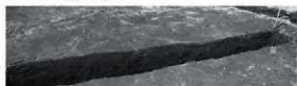
6. III P-01断面(SE→)



7. III F-03検出(E→)



8. III F-04検出(NE→)



9. III F-03断面(E→)



10. III F-04断面(E→)

図版14



1. III F-05検出(E→)



2. III F-05断面(E→)



3. III F-10検出(N→)



4. III F-10断面(N→)



5. III F-11検出(S→)



6. III PB-01出土状態(S→)



7. III PB-02出土状態(SE→)



8. III SB-04出土状態(SW→)

図版15



1. I-21区 播鉢出土状態(SE→)



2. J-22区 刀子出土状態(NE→)



3. F-18区 鉄鍋出土状態(N→)



4. カワシンジュガイ 殻皮出土状態(SE→)



5. カワシンジュガイ・古銭出土状態(N→)



6. 古銭壁面出土状態(NW→)



7. 擦文土器壁面出土状態(N→)



8. J・K-23区 擦文土器出土状態(N→)

図版16



1. TP-01完掘(S→)



2. TP-01断面(S→)



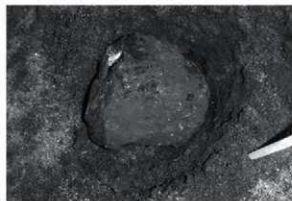
3. TP-01逆茂木跡検出(SE→)



4. 縄文晩期遺物出土状態(SE→)



5. M-24区 遺物出土状態(NE→)



6. 黒曜石核出土状態(E→)

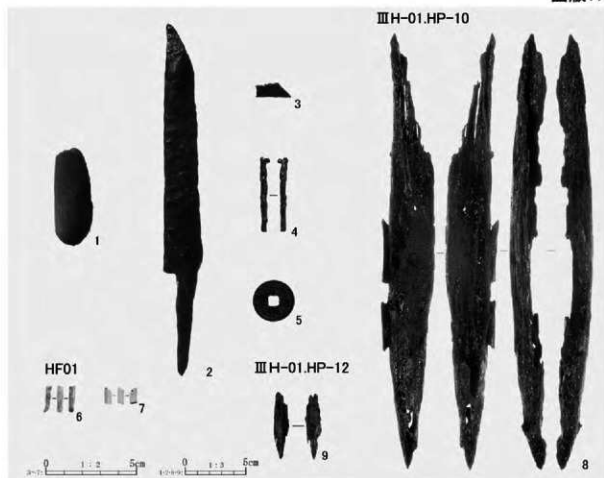


7. 旧石器トレンチ調査状態(SE→)



8. 旧石器TR2断面(NE→)

図版17



1. III H-01出土遺物



2. III H-01. III SB-01出土礫

図版18



1. IIIAS-01・02・III SB-02・III BB-01・03出土遺物

図版19



1. III SB-02(左)・03(右)出土礫

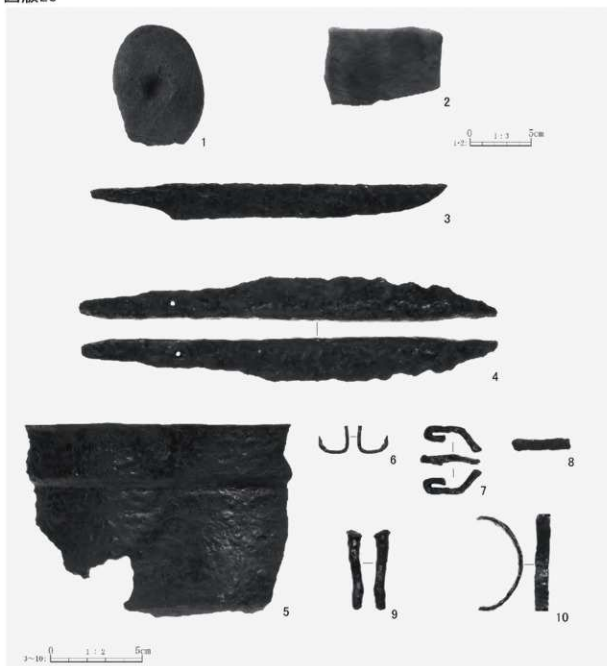
中尾登編尺



2. III BB-01(中)・02(左)・03(右)出土礫

中尾登編尺

図版20



1. アイヌ文化期 包含層出土礫石器・金属製品

図版21



1. III F-02出土遺物

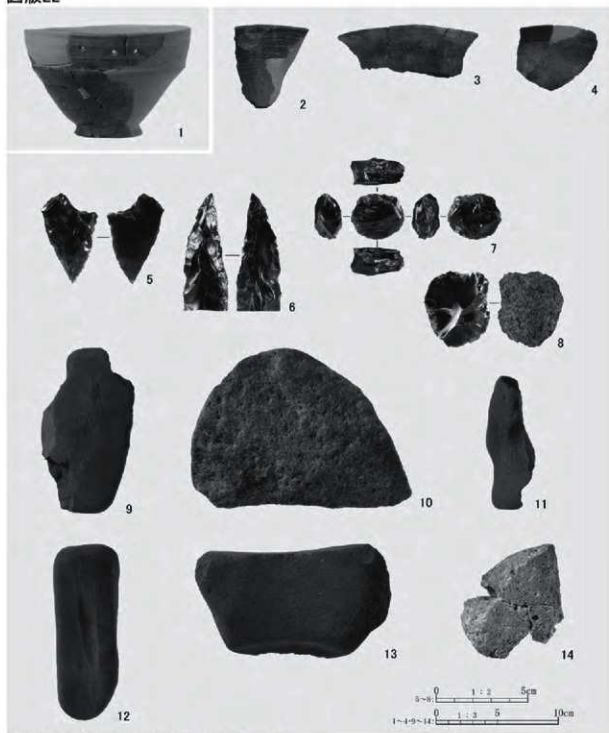


2. III PB-01(左)・02(右)出土土器



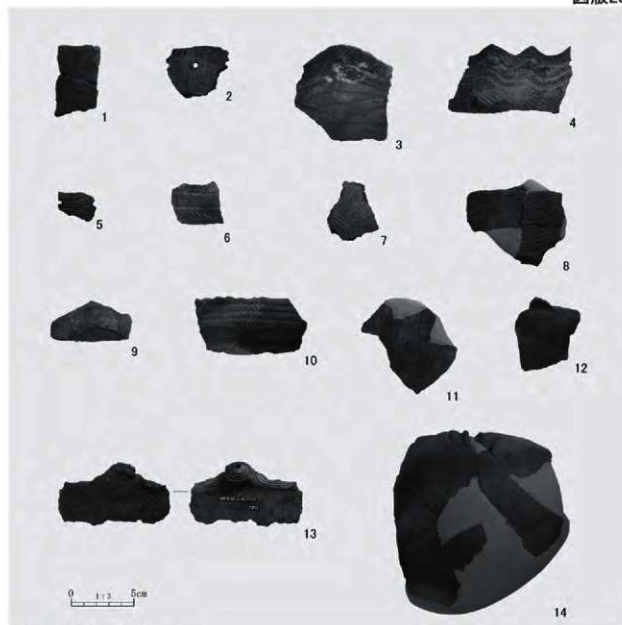
3. III SB-04出土礫

図版22



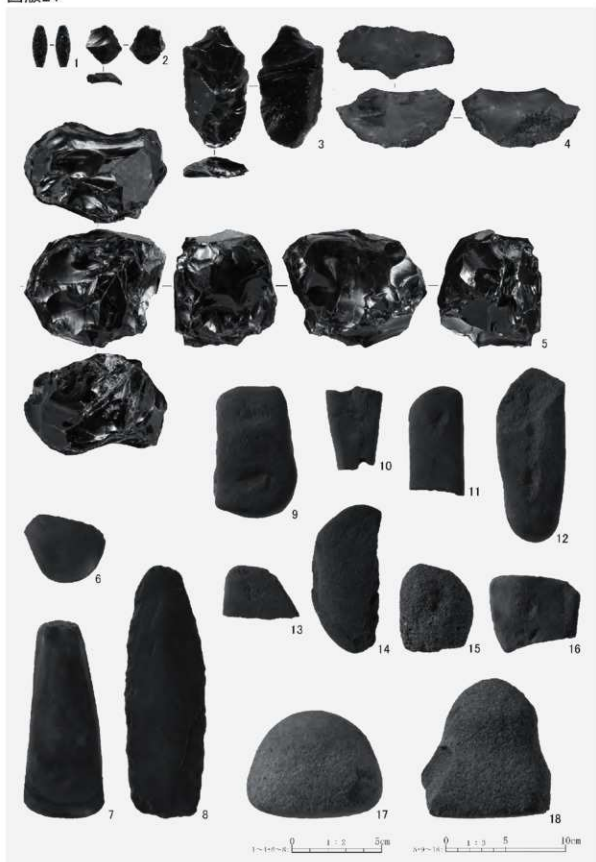
1. 縄文・埴文文化期 包含層出土土器・石器

図版23



1. 縄文時代 包含層出土土器

図版24



1. 縄文時代 包含層出土石器

第4部

ニタツプナイ遺跡（2）

第1章 調査の概要

第1節 調査要項と経緯

1. 調査要項

遺跡名：ニタツナイ遺跡（J-13-104）

所在地：北海道勇払郡厚真町字富里 299-1

調査面積：95 m²

調査期間：工事立会 平成20年11月12日～平成20年11月21日

遺物回収作業 平成21年7月17日～平成21年10月30日（うち8日間）

整理作業 平成22年2月24日～3月16日

調査体制：平成20年度 工事立会担当者 乾 哲也

平成21年度 整理作業担当者 奈良智法 ほか第1部 第1章 第1節2に同じ。

施工担当：株式会社 高橋建設（虻田郡洞爺湖町洞爺町37番地） 工事現場責任者 高野満範

2. 工事立会までの経緯

ニタツナイ遺跡は、平成19年度に厚幌導水路建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査を行った遺跡である（厚真町教育委員会2009b）。翌20年度に、発掘調査区に隣接する町道富里団地線の現道下の敷設工事に伴って埋蔵文化財確認の立会調査、平成21年度に遺物回収作業及び整理作業を行った。本篇はその報告である。周辺環境やグリッド設定等は平成20年度刊行の『ニタツナイ遺跡(1)』を参考とされたい。

立会に至る経緯は、ニタツナイ遺跡の発見経緯から始まる。本遺跡は平成15年11月に町教委によって所在確認踏査を行い、地形上の判断から町教委によって要試掘調査と回答を受けた（平成15年12月17日付 教文第4779号）。試掘調査は町教委によって平成17年4月に実施され、縄文時代前期と晩期の遺跡として要発掘調査40mと要工事立会10mの回答がされた（平成17年6月13日付 教文第586号）。その後、導水路設計路線の変更が生じ、新たな設計路線で平成18年4月に2回目の試掘調査が実施され、要発掘調査160mと要工事立会10mの回答を得ている（平成18年4月25日付 教文第333号）。

平成19年度の発掘調査は新設計路線の延長160m、幅約11mで実施した1,768m²である。本書の工事立会範囲は平成17年、18年のいずれの回答で扱われている延長10m、幅約11mの現道下の部分である。立会範囲に係る試掘調査は平成17年4月に町教委によって実施された。この時、町教委の調査員も同行している。町道下及び道路側溝部分のトレンチ掘削は不可能であり、町道を挟んで西側のIPNo.82やコンクリート堆肥場に隣接する位置に試掘トレンチを掘削した。使用重機が0.25m³の小型バックホーで行ったため、現地表面から2mの深さまでの掘削に留まり、攪乱層のみの検出で遺物包含層の確認に至らなかった。包蔵地に隣接した範囲で試掘調査において厳密な確認ができなかったことや現道は現地表面より高いことから、包蔵地が続く可能性もあり町道下の範囲は「要工事立会」の回答となった。この回答については、町教委調査員も内容を確認している。

発掘調査は町教委が平成19年5月8日から10月31日までの期間で実施し、調査区の南端部、町道隣接部分まで縄文時代前期、中期と樽前bテフラ直下の近世アイヌ文化期の遺構遺物を検出している。この調査区は町道に付随する側溝の外側までの調査に留めているが、現道路面の標高と遺物

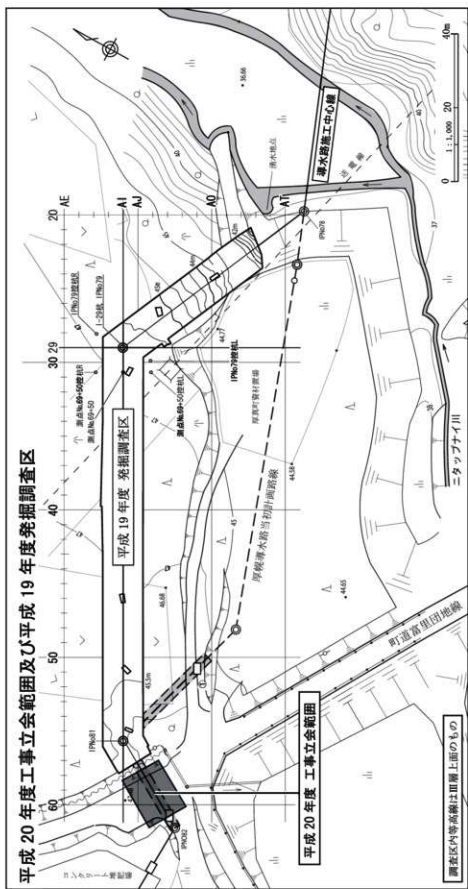


図 I-1 工事立会位置図及びグリッド設定図

包含層の標高から縄文時代の遺物包含層が道路下へ続くことが推定された。調査期間中においても出土状況等については道教委や開発事業所に口頭にて報告している。

平成20年度に調査終了部分と町道及びコンクリート敷きの堆肥場下部分の導水路本線の施工工事を7月より着手することとなり、平成20年4月の契約時点で開発事業所から工事立会の協議があった。これに伴い町教委は、施工業者確定後にバックホーの提供を受け、再度試掘調査を実施したが、遺物包含層の検出には至らなかった。周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の通知は町道下の施工部分の面積100㎡について、平成20年11月4日付け室建技管第73号で室蘭開発建設部長より町教委、胆振教育局を経て道教委文化課へ提出された。道教委からは同年12月9日付け教文ス第3057号で工事立会の実施が通知された。

施工業者との工事立会協議は10月から進め、21年度の発掘調査終了後の11月中旬以降の着手で工程計画の調整を進めて頂き、最長5日間の調査で工事計画に組み込まれた。降雪等の懸念から町道迂回路の完成とともに開始し、立会期間は平成20年11月12日～平成20年11月21日である。

第2節 工事立会の経過と概要

1. 工事立会の経過

11月12日より1.0^mのバックホー1台で町道のアスファルト舗装の撤去、路盤砂利の除去作業を開始した。午前中の作業で立会範囲のほぼ全面に遺物包含層が良好に残存していることが判明し、堅穴住居跡(ⅢH-06)の方形の窪み1ヶ所を検出した。これにより、工事立会期間が予定日数を上回る可能性が高くなったことから、道教委へ報告した。合わせて室蘭建用地課や開発事業所へ調査費用等の協議も行っている。この結果、作業員賃金等の掛かる経費については設計変更による増額の承諾を頂き、工事立会を進めることとなった。午後からは、厚幌導水路発掘事業で雇用している作業員5名を動員し、遺構遺物の記録のため、調査区の周辺に平成19年度の控杭から援用した測量仮杭を設置し、立会範囲等の記録と火山灰除去作業を実施した。人力による火山灰作業で灰集中のほか未被熱の動物遺存体、刀剣類等の金属製品が出土した。なお、調査区内のグリッド杭の打設は省略し、整理作業で作成した位置図から導き出したものである。

翌日からは1日平均7名の作業員を動員し、通常発掘調査に近い精度での調査に変更した。

ⅢH-06窪み内と周囲の近世アイヌ文化期の包含層調査を行った。包含層調査については、擦文文化期の遺物包含層であるⅢb層中位まで行き、アイヌ文化期の灰集中、ⅢH-06地床炉や床面からフローテーションを目的に土壌回収のサンプリングも行った。Ⅲc層上位にてジョレン精査による柱穴等の検出、確認調査を行った。ⅢH-06の調査は焼失住居であったことや柱穴精査に日数を費やしてしまい、導水路工事の工程上、Ⅲ層の包含層と住居跡調査の終了とともに立会調査を終了した。なお、堅穴式住居床面や包含層の倒木痕揚げ土V層中から縄文時代前期の遺物が多量に出土していたが、工事の工程上、人力による回収を断念しバックホーによる遺物包含層の回収作業となった。なお、V層は現地表面より1.5m低く、導水管埋設の掘削幅も7.2mであることから、この掘削幅でバックホーによるV層除去を行った。その後のVI層で人力による遺構確認精査を行い小土坑と思われるものを3基検出したが、現地での十分な検討を行うことはできなかった。

樽前cテフラ下層のV層縄文時代の遺物を含む掘削回収土砂は約100^m³となり、本来ならば近隣の町有地への搬出を行うべきであるが、多量の遺物を含むことから遺物及び包蔵地の散逸の危険性

表I-1 工事立会調査経過

日時	作業内容	日時	作業内容
11月7日	打ち合わせ 高橋建設富里現場事務所	11月16日	ⅢH-06・東西堆積図作成、調査・遺物取り上げ 炭化材の検出、ⅢH-06・PT01SB堆積図
11月12日	路盤材除去立会	11月17日	ⅢH-06・炭化材散骨測量・堆積ベルト除去 遺物取り上げ ⅢKP調査・実測
	道教委・室開建 報告協議連絡 基準杭設置・Ⅲ層上面清掃・測量板杭設置	11月18日	ⅢH-06 生活面完照撮影・生活面層サンプリング 柱穴精査・HF01撮影測量
	ⅢH-06 周辺単点計測 調査区攪乱計測、Ⅲa層調査 ⅢAS-15・未被熱散骨計測取り上げ	11月19日	ⅢH-06 柱穴精査、HF01・柱穴堆積図実測 PT01SB取り上げ・機材等搬送
11月13日	Ⅲa層、Ⅲb層下位調査、 ⅢH-06 調査・遺物取り上げ ⅢAS-16・17調査 ⅢAS-15・未被熱散骨計測取り上げ	11月20日	ⅢH-06 柱穴精査・実測・完照状況撮影 重機0.45、ダンプ2台 V層除去・運搬 13:00～17:00 重機運搬 V層遺構調査、VI層上面精査・調査区近景撮影
	11月14日		Ⅲa層調査、ⅢH-06 調査・遺物取り上げ 焼土ブロック・炭化材の検出→焼失住居と判明 未被熱散骨計測取り上げ・ⅢAS-16・17調査
11月15日	ⅢH-06・南北堆積図作成、調査・遺物取り上げ ⅢH-06、PT01SB 検出・調査 焼土ブロック・炭化材の検出 Ⅲb層下位調査	11月21日	

と運搬費等の諸経費節減を考慮し、厚幌導水管理設工事が終了したニタツプナイ遺跡の平成19年度調査区に地権者の大岩滋雄氏の御承諾を頂き堆積した。堆積土砂からの遺物回収は、多量の遺物混入から相当数の作業量となり、冬季に向かうにつれ土壌凍結の影響が大きくなる事が懸念された。また設計変更や作業員公募などの事務手続きの増加もあり室開建用地課、開発事業所との協議の結果、次年度の発掘調査費に遺物回収作業と整理作業を含めること、報告書刊行は平成22年度とすることで合意を得た。

平成20年度工事立会費用は、作業員賃金や包含層の掘削回収の重機や土砂運搬費、金属製品の保存処理費等を含め約95万円となったが、遺物回収作業を翌年度に繰り越したため当初予定の立会報告書の刊行費用や平成19年度の金属製品保存処理単価の入札減により、当初の計画費用内での設計変更となった。

工事立会報告書は、一次整理の遺物水洗作業や遺構図の整理等を終えた平成20年12月19日付けで道教委へ提出した。合わせて、包蔵地カードの記載変更も行っている。

これら一連の工事立会作業では、氷点下の低温や降雪、調査面の凍結などの悪条件の中、町教委所属の調査員である小野哲也、奈良智法、天方博章の各氏に休日等の公務時間外に自発的協力を受け、町民にもご協力を頂き、また、幸いにも現地施工の株式会社高橋建設の最大限の工程調整によって、工事立会でありながらここまでの記録を為し得たものである。

2. 遺物回収作業

平成21年度調査した富里2遺跡からは車両で5分程度距離にあり、調査期間中の樽前c火山灰除去や空撮のため調査を着手できない日などを利用して、ジョレンを用いた人力による遺物回収作業を実施した。このため、期間をおいての回収作業となり、堆積場の地権者から多大なるご協力を頂いた。また期間中には、小学校や一般町民の体験発掘にも活用した。回収後の排土は、平成19年度に調査した範囲内に均平化して堆積している。

3. 工事立会成果の概要

平成20年度の工事立会面積は最終的に95㎡となった。検出した遺構遺物はⅢ層上面の近世前葉アイヌ文化期、擦文文化期後期、縄文時代中期後葉、前期前葉から中葉にかけての形成年代である。

検出された遺構は12基、出土遺物は平成20年度立会調査と21年度遺物回収作業との合計で8,793点である(表I-2)。なお、Ⅲ層は全面を人力調査したのではほとんどの遺物を回収できているが、数点のみV層遺物回収土砂から出土しており、倒木痕の巻き込みによる混入遺物と思われる。

アイヌ文化期の遺構遺物は樽前bテフラ直下からⅢa層中の検出である。礫集中、灰集中、獣骨集中を検出している。出土遺物は礫の他、金属製品や漆塗膜片が出土している。平成19年度の調査と同様に未被熱のシカを主体とする陸棲哺乳類の獣骨もやや多く出土した。分布はⅢH-06の窪み内とAK-58区、立会区西端のAK-60区に偏る。

擦文文化期は住居跡1軒の検出で、出土遺物も少ない。擦文文化期の層位であるⅢb層下位で取り上げた遺物は338点である。ⅢH-06は北側のコーナーが擾乱により遺失しているが、ほぼ完形に近い堅穴住居跡で、白頭山苫小牧火山灰(B-Tm)の降灰より新しい段階のものと考えられる。平面規模は505×411mの概ね長方形のプランで、周囲に掘り上げ土を伴っている。構築面から30cmを掘り込まれた床面中央には長軸115cmの長楕円形の炉跡が1基検出され、柱穴は壁立ち上がりの変換点に打ち込み柱6本を検出している。なお、覆土下位から床面にかけて炭化した材や樹皮、ブロック状の焼土などを検出し、焼失住居であることが判明している。住居内に伴うものとしては南コーナーに集石を伴う楕円形の土坑1基が構築されていた。全体形状等からも道央部の擦文文化期の住居形態から特異なものである。

縄文文化期は平成19年度調査成果とほぼ同類の内容で、樽前dバミスが混じるVc層中に焼骨片を多量に含み、被熱破砕礫を主体に縄文時代前期中葉の遺物が多量に出土した。整理作業における土器の接合、同一個体識別から19年度の調査区と一連の遺物集中区と思われる。遺構については、VI層での確認であり、掘り込みの浅い小規模な土坑は遺失している可能性があるものの、住居跡などの大型のものは検出していない。(乾)

表I-2 ニタツナイ遺跡出土遺物一覧表

層位/種別	土器	礫石器	剥片石器	金属製品	銅製品	礫	剥片類	その他	合計
Ⅲ層	53	10	6	5	2	299	33	-	408
V層	356	267	77	-	-	7,522	163	-	8,385
合計	409	277	83	5	2	7,821	196	-	8,793

表I-3 遺構群一覧表

遺構名	時期	規模(cm)		グリッド	層位	付属・関連遺構	備考
		長軸	短軸				
ⅢH-06	擦文文化期	505	411	AJ-AK-57-58	ⅢbL	HP01-PT01	
ⅢAS-15	アイヌ文化期	340	164	AK-AL-60-61	ⅢaU		
ⅢAS-16	アイヌ文化期	216	196	AK-58-59	ⅢaU		
ⅢAS-17	アイヌ文化期	32	28	AK-59	ⅢaU		
ⅢCB-13	アイヌ文化期	220	59	AJ-57-58	ⅢaU		住居上層に廃棄
ⅢSB-08	アイヌ文化期	190	90	AK-60	ⅢaU		
ⅢBB-07	アイヌ文化期	210	200	AJ-AK-57-58	ⅢaU		住居上層に廃棄

第二章 アイヌ文化期の調査

本章で取り扱う遺構及び遺物は Ta-b テフラ直下から出土する近世アイヌ文化期の資料である。本遺跡は平成 19 年度に発掘調査を行い、立会区域に隣接する 57 ライン周辺からⅢAS-09 やⅢCB-08-09 が検出されている。遺構はⅢAS-15～17、ⅢCB-13、ⅢSB-08、ⅢBB-07 が検出され、遺物は金属製品 7 点、礫 21 点が出土している。今回の発掘によりアイヌ文化期の遺構、遺物がより南西側に広がる事が明らかとなった。また、95 m²という狭い範囲であるが金属製品が 7 点出土するのは、前回の調査同様に金属製品の豊富さを物語る結果となった。

各遺構番号については、平成 19 年度に調査を行った番号の続きから使用している。 (奈良)

第1節 杭跡

ⅢKP-61～65 (図Ⅱ-2 図版1-7～10)

位置：AL-59・AK-60 検出数：5基

確認・調査：Ⅲc層で柱穴を確認したところ、60 ラインより南西側でⅢ層主体の円形プランを 5ヶ所検出した。半截を行い断面確認したところ全てV層中位まで達する打ち込み杭であったため、柱穴番号を付番して杭跡として調査を行った。杭跡は断面の記録後に完掘、平面の記録を行い調査終了とした。杭跡完掘後に配列を確認したが、不規則な配列であったため杭跡として報告している。

時期：ⅢAS-15 の分布図と合わせると近世アイヌ文化期もしくは、ⅢKP-65 の様に灰集中下位から検出している杭跡もあるので、近世アイヌ文化期初頭と思われる。 (奈良)

第2節 灰集中・炭化物集中・獣骨集中

ⅢAS-15 (図Ⅱ-2・4-1～4 図版4-1)

位置：AK・AL-60・61 規模：340×164cm

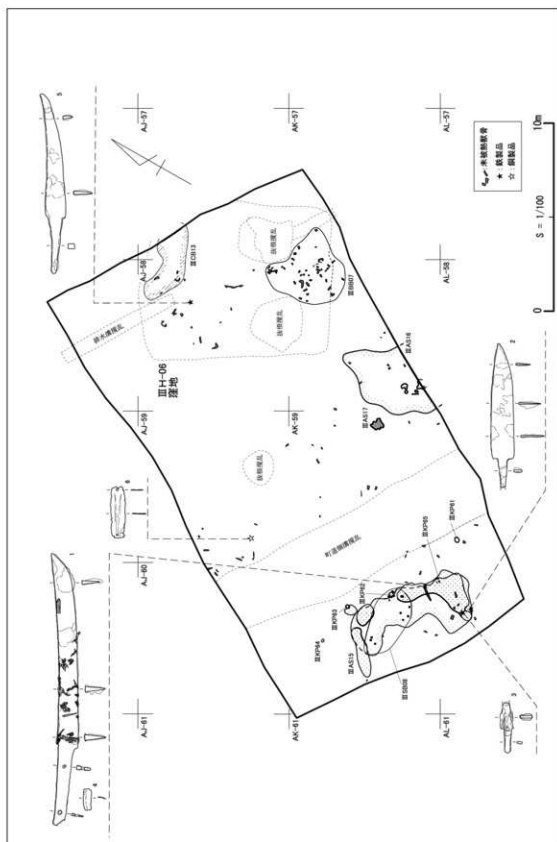
確認・調査：ⅢaU層の精査中、AK・AL-60・61で灰層ブロック、焼骨片、焼土粒、炭化物が不整形に広がる範囲を検出した。範囲内には灰層が多く認められることから灰集中として取り扱いⅢAS-15を付番して調査を行った。精査を行った結果、焼骨片や炭化物の混入割合からA～Eブロックに分けられた。立会工事であったため、平面の記録とサンプルを採取して調査終了とした。

このような炭化物や焼土粒を含む集中は、平成 19 年度の調査で特に南西側で認められる傾向にあった。また、礫集中に刀剣類が伴って出土するという事例 (ⅢSB-03) も前回の調査と共通する事項である。

各ブロックの時間差については間に黒色土を挟まないことから、連続的に投棄されたと考えられる。灰集中上位にはⅢSB-08 が出土しており、ほぼ同時期であるが灰層中ではなかったため次節で掲載している。

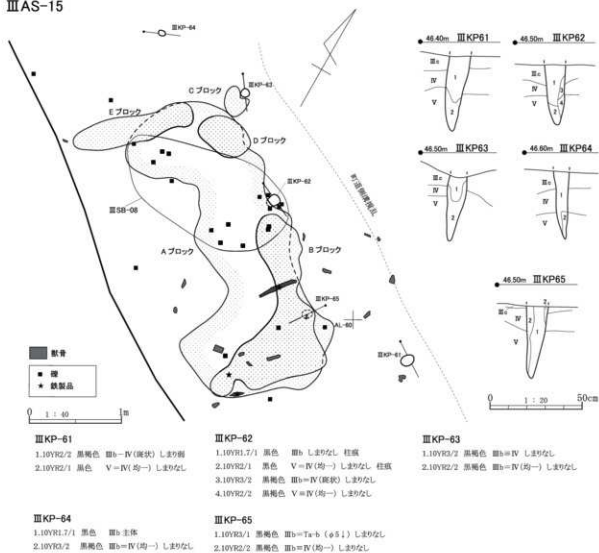
出土遺物 (図Ⅱ-4-1～4)：1は長軸 43.1cmある刀で、中央部分にやや反りが認められる。平棟の両区で、茎部分には目釘孔が2ヶ所認められる。棟は中央から茎方向にかけて潰れが認められることから、日常的に用いられていた可能性も考えられる。

出土層位はⅢAS-15よりやや上であるが、時間差は殆どないと考えられる。2は長軸 15.3cmある両区が明瞭に認められる刀子である。平棟で茎を一部欠損し目釘孔は認められない。刃部は厚さ 2

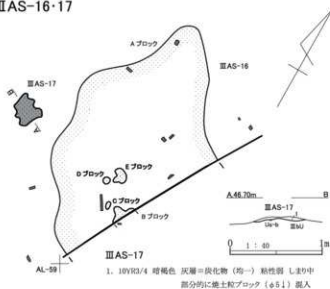


図II-1 アイヌ文化期遺構配置図及び金属製品分布図

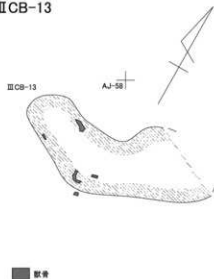
ⅢAS-15



ⅢAS-16・17



ⅢCB-13



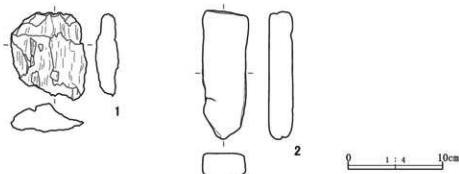
図Ⅱ-2 ⅢAS-15～17・ⅢCB-13・ⅢKP-61～65平面及び断面図

表Ⅱ-1 ⅢAS-15~17・ⅢCB-13属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模(cm)			灰・骨片の有無	備考
						長軸	短軸	厚さ		
Ⅱ-2	-	ⅢAS-15	AK・AL-60	ⅢaU	不整形	340	164	-	灰・骨片	
Ⅱ-2	1-4	ⅢAS-16	AK-58-59	ⅢaU	不整形	216	196	-	灰・骨片	
Ⅱ-2	1-5	ⅢAS-17	AK-59	ⅢaU	不整形	32	28	4	灰・骨片	
Ⅱ-2	-	ⅢCB-13	AJ-57-58	ⅢaU	不整形	220	59	-	骨片	

表Ⅱ-2 柱穴属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	規模(cm)			傾き(度)	タイプ	備考
			上端	下端	深さ			
Ⅱ-2	1-7	ⅢKP-61	12	0	50	10°	打込み	
Ⅱ-2	-	ⅢKP-62	12	0	32	4°	打込み	
Ⅱ-2	1-8	ⅢKP-63	10	0	36	10°	打込み	
Ⅱ-2	-	ⅢKP-64	8	0	36	7°	打込み	
Ⅱ-2	-	ⅢKP-65	11	0	38	8°	打込み	



図Ⅱ-3 ⅢSB-08出土礫

表Ⅱ-3 ⅢSB-08出土礫属性表

挿図番号	図版番号	個体名称	遺物番号	層位	状態	計測値(mm)				長短比標準偏差	重量(g)	被熱	材質	備考			
						長軸	標準偏差	短軸	標準偏差						厚さ	標準偏差	長短比
-	4-2	-	45043	ⅢaU	完形	121.4	7.7	41.3	-14.3	25.9	-2.2	2.9	0.7	198.5	-	Sa	
Ⅱ-3-2	4-2	-	45042	ⅢaU	完形	134.0	20.3	48.4	-7.2	24.8	-3.3	2.8	0.6	2400.0	-	Sa	
-	4-2	-	45050	ⅢaU	完形	109.8	-3.9	56.6	1.0	31.2	3.1	1.9	-0.3	2240.0	-	Sa	
Ⅱ-3-1	4-2	-	45059	ⅢaU	完形	89.6	-24.1	76.0	20.4	30.5	2.4	1.2	-1.0	50.6	-	Pts	4材料番号No.85
完形合計						451.8		222.3		112.4		8.8		4889.1			
完形平均値						113.7		55.6		28.1		2.2		1222.3			
遺物総重量														5559.1			

mmと比較的薄く作出されている。区の形状から近世の資料と判断できる。3は木質が付着する茎部分で、断面形は方形を呈する。4は板状銅製品で僅かに折れ曲がり、両端に孔が認められる。本資料は1を土ごとに取り上げた中から出土しているため刀の装飾部であった可能性もあるが、1の刀には銅製品が付着していた痕跡は認められなかった。

時期：検出層位から近世アイヌ文化期。

(奈良)

ⅢAS-16・17 (図Ⅱ-2 カラー8-1 図版1-5・6)

〔ⅢAS-16〕位置：AK-58・59 規模：216×196cm

〔ⅢAS-17〕位置：AK-59 規模：32×28×4cm

確認・調査：ⅢaU層精査中AK-58・59で不整形に広がる灰層を検出した。周辺の精査を行うと、色調が暗褐色を呈する灰集中と、灰白色を呈する灰集中が認められた。それぞれⅢAS-16・17と付番し、平面形の記録を行なった。規模が32×28cmの不整形を呈するⅢAS-17は断面を確認したところ灰層下位にUs-bが認められたため、1663-1667年の間に形成された灰集中であることがわかる。ⅢAS-16はⅢAS-15とほぼ同様の内容物を示し、焼土粒や炭化物も含まれている。ⅢAS-16は堆積が薄いために断面の記録は行っていない。平面、断面の記録をとった後サンプルを採取して調査終了とした。

時期：検出層位から近世アイヌ文化期。(奈良)

ⅢCB-13 (図Ⅱ-2)

位置：AJ-57・58 規模：220×59cm

確認・調査：堅穴の窪みと推測される地点のTa-bテフラを除去し、ⅢaU層を精査したところ炭化物が集中する不整形な範囲を検出した。範囲は調査区北東側に延びていたが、検出状態から堅穴の窪みに流れ込んだ炭化物集中と判断し、ⅢCB-13と付番して調査を行った。調査は平面の記録を行って、サンプルを採取して調査終了とした。フローテーションからは酸化状態のアサガ32粒と多量に出土している(第5部第2章第2節)。

時期：検出層位から近世アイヌ文化期。(奈良)

ⅢBB-07 (図Ⅱ-1)

位置：AJ・AK-57・58 規模：210×200cm

確認・調査：ⅢCB-13と同じく、堅穴の窪みと推測される地点のⅢaU層を精査したところ、未被熱の獣骨がまとまって出土する地点を検出した。集中範囲内から出土する獣骨は四肢や下顎骨など統一性が認められない。本集中については窪みを利用した投棄としては量が少なく、まとまりがないため包含層の獣骨が流れ込んだものと考えられる。調査は範囲と獣骨の輪郭を取り込み調査終了とした。

時期：検出層位から近世アイヌ文化期。(奈良)

第3節 磔集中

ⅢSB-08 (図Ⅱ-1・3 図版4-2)

位置：AK-60 規模：190×90cm

確認・調査：ⅢAS-15を調査中、周辺とその上位から棒状礫が出土している。出土層位からⅢAS-15に伴う可能性もあるが、礫が灰層中からの出土ではないことから本節で記載している。しかし、分布や出土層位からすると时期的には殆ど変わらない近世アイヌ文化期の所産であると考えられる。

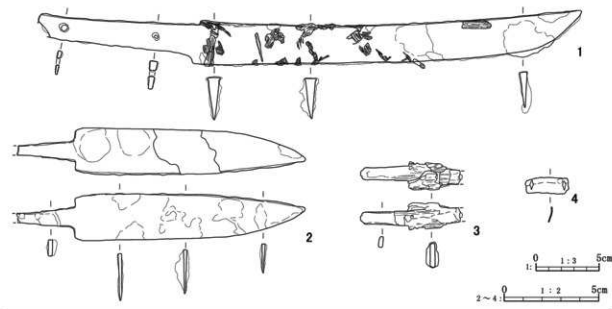
出土遺物 (図Ⅱ-3)：完形品は4点で、長短比の平均が2.2であることから長楕円形に近い形状が利用されている。うち2点を掲載しており、1は軽石製で砥石として遺跡内に持ち込まれた可能性が高い。2は断面角状の棒状礫で長軸が13.4cmあり比較的大型の礫が利用されていることがわかる。(奈良)

第4節 包含層出土金属製品

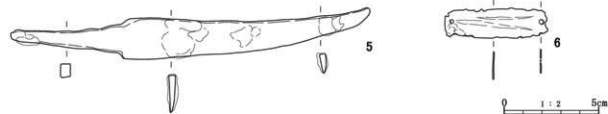
金属製品 (図II-4-5・6 図版4-1-5・6)

5は長軸19cmある刀子である。平棟で刃部先端にやや反りが認められ、棟区は茎に向かって不明瞭な変換点しかもたない。刃部は刃縁に向かって薄くなる断面逆三角形の形状をしており、厚さは3.2mmあり比較的厚手の刀子である。茎は断面形態が方形形状に近く、目釘孔は認められない。6は板状銅製品で0.5mmと薄く両端に孔が認められる。(奈良)

IIIAS-15



包含層



図II-4 IIIAS-15及びアイヌ文化期出土金属製品

表II-4 IIIAS-15及びアイヌ文化期出土金属製品属性表

挿図番号	図版番号	遺構名/ グリッド	遺物番号	遺物名	分類	層位	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
							長軸	短軸	厚さ			
II-4-1	4-1	IIIAS-15	45001	刀	-	IIIaU	431.0	37.0	13.0	433.00	Fe.	
II-4-2	4-2	IIIAS-15	45061	刀子	-	IIIaU	153.0	25.0	2.0	25.27	Fe.	
II-4-3	4-3	IIIAS-15	45060	刀子茎	-	IIIaU	54.0	15.0	7.0	5.22	Fe.	
II-4-4	4-4	IIIAS-15	45401	板状製品	-	IIIaU	23.0	9.0	0.5	0.59	Cu.	45001の下から出土
II-4-5	4-5	AJ-58	45290	刀子	-	IIIaU	190.0	22	3.2	38.72	Fe.	
II-4-6	4-6	AJ-59	45002	板状製品	-	IIIaU	54.0	15.0	0.5	2.63	Cu.	

第三章 擦文文化期の調査

本章で取り扱う擦文文化期の遺構及び遺物は主にⅢb層下位で出土する資料を対象としている。今回の調査では調査区北東側に竪穴式住居跡1軒を検出しているほか、包含層から土器53点、礫278点出土している。擦文文化期の竪穴式住居跡については、平成19年に調査を行った際に2軒検出しているが、いずれも調査区壁面にかかり住居の全体像は不明であった。しかし、今回の調査により中央に炉をもち、カマドを持たないタイプの住居であることがわかってきた。また、本遺跡では平地式住居跡も1軒検出していることからこれが時間差であるのか、環境によるものなのか検討する必要がある。住居番号は平成19年度の続きから使用している。(奈良)

第1節 住居跡

6号竪穴式住居跡〔ⅢH-06〕

(図Ⅲ-2・3・4-1・2 カラー8-3・4 図版2・3-1～5・5-1-1・2)

位置：AJ・AK-57・58 規模：505×411×40cm

付属遺構：炉跡(HF01)・土坑(PT01)

確認・調査：調査区北側にTa-bの残存する範囲を確認した。Ta-bが残る状態で写真撮影をした後、皿状に窪む竪穴式住居であることが想定されたため十字にベルトを設定し、アイヌ文化期の調査から行った。上層の調査が終了した後、Ⅲb層下位でⅣ層主体の住居掘り上げ土を確認したために、範囲確認を行って平面図の記録をした。同時に住居の立ち上がりと床面を確認する目的で、ベルトに沿ってトレンチの掘削をし、床面を確認しながら十字ベルトを残して完掘を行った。断面の記録をした後ベルトを外して全体の完掘状態を撮影し、平面図等の記録を行った。

本遺構については床面に炭化材が多く検出され、焼失住居の可能性が高かったことから、炭化材の範囲や屋根土の範囲などの記録も合わせて行っている。炉跡や土坑、柱穴などの付属遺構はこの時合わせて調査を行い、最後に柱穴の確認をして最終的な完掘状態を撮影して調査終了とした。本遺構は北側が攪乱によって一部不明であるが、505cm×411cmの隅丸形状のカマドをもたない住居がほぼ完全に近い状態で検出されている。

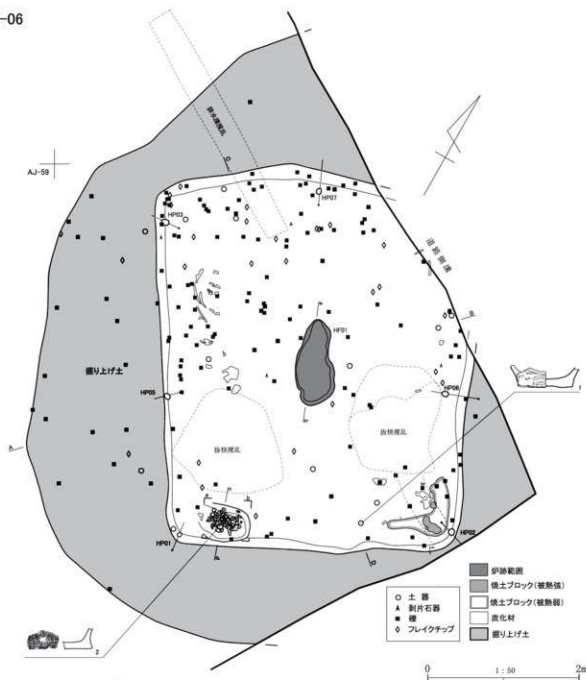
ニタツプナイ遺跡では平成19年度に発掘を行った2軒の住居跡があるが、同様の形態をもつことが示唆される。

堆積状態：5層は三角堆積を示す黒色土で、この上位に屋根土を含む2b層が堆積している。壁面付近には3・4a・4bの崩落層が堆積する。その後、掘り上げ土が混じる1層が流れ込み、Ⅲ層黒色土が自然堆積する。住居周辺に確認される掘り上げ土基底面は、Ⅲb層に黒色土を2～3cm挟んで堆積しており、B-Tmは認められないため10世紀前半以降の構築であることがわかる。また、住居南東隅に樹皮(炭化)と屋根土と焼土ブロックが認められることから、本住居跡は焼失住居であったことがわかり、床面には炭化材も検出されている。

付属炉(図Ⅲ-3 図版2-5・6)住居床面のほぼ中央に110×50cmの長楕円形を呈する地床炉を確認した。炉跡の軸は住居長軸方向と同じ北西-南東で、被熱層は約10cmと厚く形成されている。

1層には焼骨片が微量に認められ、サンプルをフローテーションした結果、オオムギ、キビ、アワ、シソ属などが検出された(第5部 第2章 第2節)。

ⅢH-06

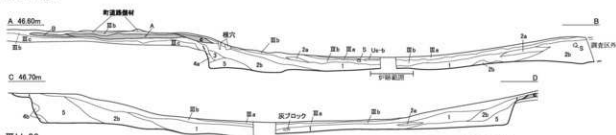


図Ⅲ-2 ⅢH-06 平面図

表Ⅲ-1 ⅢH-06属性表

挿図 番号	図版 番号	グリッド	層位	長軸方向	規模(cm)				付属遺構	備考	
					上端		下端				深さ
					長軸	短軸	長軸	短軸			
Ⅲ-2・3	カラー 8-3-4 2・3	AJ・AK -57・58	ⅢbL	N-28° W	505	411	479	390	40	HF01・PT01	

ⅢH-06

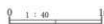


ⅢH-06

1. 10YR2/1 黒色 Ⅲb=Ⅳ(均-)⇒Ⅴa(均-)-V
2. 10YR2/2 黒褐色
3. 10YR3/3 暗褐色 Ⅳ~Ⅴa(Ⅴa状)⇒Ⅴ(Ⅴa状)・Ⅴa 層根土 しまりなし
4. 2.5YR4/4 に近い黄褐色 Ⅳ崩落層
5. 10YR3/1 黒褐色

ⅢH-06 掘り上げ土

- A. 10YR3/3 に近い黄褐色 Ⅳ=Ⅲb(Ⅴa状)
- B. 10YR3/2 黒褐色 Ⅲb=Ⅳ(均-)
- C. 10YR2/2 黒褐色 V=Ⅳ(均-)



ⅢH-06.HF01

a. 46.20m



ⅢH-06.HF01

1. 5YR3/2 暗赤褐色 V=Ⅳ(均-) ⅢH-06 床土 土 被褥層(Ⅴa状)=鏡骨片
2. 5YR5/8 明赤褐色 V層地山被褥層 破線より上段はⅢH-06 掘り上げ土被褥層
3. 5YR4/4 褐色 ⅢH-06 埋土被褥層(Ⅴa状)

ⅢH-06 屋根土

a. 46.50m



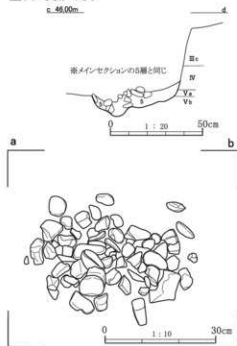
ⅢH-06 屋根土断面

1. 7.5YR4/6 褐色 Ⅲb=Ⅳ(崩落土) 埋土
2. 10YR2/1 黒色 Ⅲb=Ⅳ



ⅢH-06.PT01

x. 46.00m



HP01

1. 10YR2/1 黒色 Ⅲb=Ⅳ(均-) しまりなし
2. 10YR2/2 黒褐色 Vc Lしまりなし

HP02

1. 10YR2/1 黒色 V=Ⅳ(均-) しまりなし

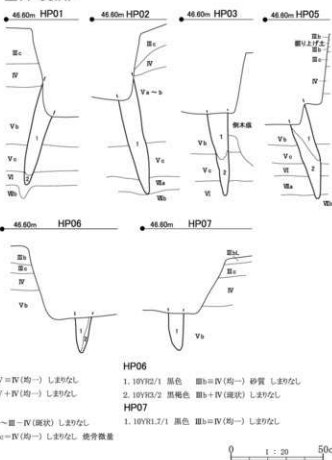
HP03

1. 10YR3/1 黒色 V=Ⅳ(均-) しまりなし

HP05

1. 10YR2/3 黒褐色 V~Ⅳ(Ⅴa状) しまりなし
2. 10YR2/2 黒褐色 Vc=Ⅳ(均-) しまりなし 鏡骨微量

ⅢH-06.HP



● 46.60m HP01

● 46.60m HP02

● 46.60m HP03

● 46.60m HP05

● 46.60m HP06

● 46.60m HP07

HP06

1. 10YR2/1 黒色 Ⅲb=Ⅳ(均-) 砂質 しまりなし
2. 10YR2/2 黒褐色 Ⅲb+Ⅳ(Ⅴa状) しまりなし

HP07

1. 10YR3/1 黒色 Ⅲb=Ⅳ(均-) しまりなし



図Ⅲ-3 ⅢH-06 付属遺構平面及び断面図

表Ⅲ-2 ⅢH-06付属遺構属性表

挿図 番号	図版 番号	遺構名	グリッド	層位	タイプ	平面形	規模(cm)			灰・骨 片の有 無	備考
							長軸	短軸	厚さ/深さ		
Ⅲ-3	2-5	HP01	AJ-58	V	地床炉	長楕円形	110	50	10	有	
Ⅲ-3	2-7	PT01	AK-58	V	-	楕円形	(60)	47	18	無	集石

表Ⅲ-3 ⅢH-06柱穴属性表

挿図 番号	図版 番号	遺構名	規模(cm)			傾き (度)	タイプ	備考
			上端	下端	深さ			
Ⅲ-3	-	HP01	10	0	54	15°	打込み	
Ⅲ-3	3-1	HP02	11	0	62	14°	打込み	
Ⅲ-3	3-2	HP03	12	0	44	6°	打込み	
Ⅲ-3	-	HP05	10	0	50	13°	打込み	
Ⅲ-3	-	HP06	8	0	19	4°	打込み	
Ⅲ-3	-	HP07	8	0	20	0°	打込み	

土坑(ⅢⅢ-3・5 図版2-7):住居南隅に60×47cmの楕円形を呈する土坑を検出した。半截したところ深さ18cmある土坑内から79点の構成礫を検出した。礫の出土状態平面図を記録して取り上げた後土坑の完掘をして調査終了とした。坑底面に折り重なるようにまとまって出土する礫は、長短比が2.0を超えるものが少なく棒状よりはやや楕円に近い形状をなすものが多い。

柱穴(ⅢⅢ-3 図版3-4・5):柱穴は住居壁面に沿うようにして6本検出している。HP01~03・05は外踏ん張りまでVI~VII層まで達している。HP06・07はほぼ垂直に打ち込まれている。住居周辺の外柱穴は検出されていない。

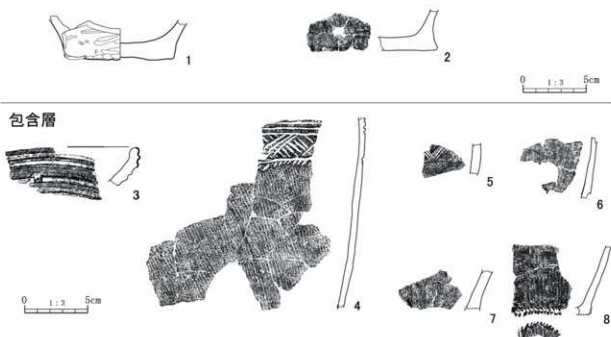
出土遺物(ⅢⅢ-4-1・2 ⅢⅢ-5 図版5):1は底径8.5cmの甕底部で僅かに括れをもって外傾して立ち上がる。器表面は横、縦方向にミガキ調整が、内面は不規則に弱いミガキが認められる。底面には製作時に敷いたと思われる葉状の痕跡が認められる。2はPT01から出土する底部片で、底部立ち上がりは括れが明瞭でそのまま外傾する。器表面、内面ともに弱いミガキで整形される。

時期:掘り上げ土の基底面の観察と、堅穴の窪みにB-Tmが堆積していないことから、B-Tm降下以降の年代であると考えられる。また、炉跡から採取した炭化種子でAMS年代測定法分析を行ったところ10世紀後半から11世紀前半という結果を得ている(第5部 第2章 第2節)。(奈良)

第2節 包含層出土土器(ⅢⅢ-4-3~8 図版5-1-2~8)

3はVII群B3f類に分類した甕の口縁部片で、外傾して口縁部直下で垂直に立ち上がる。両面ともミガキ調整で地文は横走沈線のみである。4はVII群B3c類に分類した胴部片で、今回の接合資料で一番大きな個体である。器形は外傾して立ち上がり、器厚は4mmと薄く作られている。器表面はハケメ調整後、胴部文様帯に「X」状の沈線を施文し、これを区画するように上下に横走沈線が施され、下は更に連続した刻みが施される。内面は不規則なミガキの後、縦方向にミガキが認められる。5~7は焼成から同一個体と考えられる胴部~底部片である。器表面はいずれもミガキ調整が施されるが、5の細い2条の横走沈線文は線が潰れているためミガキ調整前に施されている。横走沈線文の上位には3条1対の浅い鋸歯状沈線文が施されている。内面はいずれも弱いミガキ調整が認められる。8は胴部下半から底部にかけての資料で、変換点でやや括れて外傾して立ち上がる。器表面は縦方向に強いミガキ調整され、底部変換点には矢羽根状に刻みが連続して施される。(奈良)

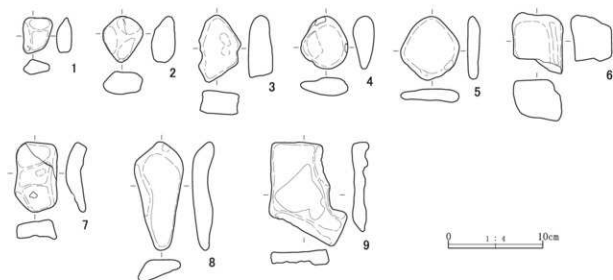
ⅢH-06



図Ⅲ-4 ⅢH-06 及び擦文文化期 包含層出土土器

表Ⅲ-4 ⅢH-06及び擦文文化期 包含層出土土器属性表

神岡 番号	図版 番号	個体 名称	分類	遺物番号	グリッド/遺構名	層位	器種	部位	器面調整		点数	備考
									内側	外側		
Ⅲ-4-1	5-1-1	9SP07	VMB3	46014~17,46020, 46021,45355	ⅢH-06	2b	甕	底部	ミガキ	ミガキ	7	
Ⅲ-4-2	5-1-2	9SP04	VMB3	45383	ⅢH-06	4	甕	底部	削ミガキ	削ミガキ	1	
Ⅲ-4-3	5-1-3	9SP03	VMB3f	45240,45225	AK-59・A1-60	ⅢbL	甕	口縁部	ミガキ	ミガキ	2	
Ⅲ-4-4	5-1-4	9SP01	VMB3c	45239,45243,45226, 45246他4点	AK-58~60	ⅢbL	甕	胴部	ミガキ	ミガキ	8	
Ⅲ-4-5	5-1-5	9SP06A	VMB3e	45349	AK-60	ⅢbL	甕	胴部	ミガキ	ミガキ	1	
Ⅲ-4-6	5-1-6	9SP06B	VMB3c	45235-1~5	AK-60	ⅢbL	甕	胴部	ミガキ	ミガキ	5	
Ⅲ-4-7	5-1-7	9SP06C	VMB3c	45281,45282	AK-60	ⅢbL	甕	底部	ミガキ	ミガキ	2	
Ⅲ-4-8	5-1-8	9SP02	VMB3	45245,45227	AK-58-60	ⅢbL	甕	底部	ミガキ	ミガキ	2	



図Ⅲ-5 ⅢH-06.PT01 出土礫

表Ⅲ-5 ⅢH-06.PT01出土礫属性表

挿入 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	層位	状態	計測値(mm)				長短比	長短比 標準 偏差	重量 (g)	被熱	材質	備考		
						長軸 標準 偏差	短軸 標準 偏差	厚さ	標準 偏差								
-	Ⅲ-2	-	45300	5	完形	71.5	7.2	25.3	-11.9	28.8	6.1	2.0	0.6	57.6	-	Mud.	
Ⅲ-5-7	Ⅲ-2	-	45319	5	完形	73.8	9.5	43.7	-3.5	24.2	1.5	1.7	0.3	92.5	-	Mud.	45322接合
-	Ⅲ-2	-	45369	5	完形	53.6	-10.7	51.2	4.0	16.6	-6.1	1.0	-0.3	53.5	-	Mud.	45388接合
-	Ⅲ-2	-	45315	5	完形	81.8	17.5	51.0	3.8	17.7	-5.0	1.6	0.2	87.9	-	Sa.	
-	Ⅲ-2	-	45310	5	完形	47.3	5.0	31.0	-16.2	17.2	-5.5	2.2	0.8	37.5	-	Sa.	
-	Ⅲ-2	-	45330	5	粘土片	53.5	-10.8	44.2	-3.0	29.3	6.6	1.2	-0.2	70.1	-	Sa.	
-	Ⅲ-2	-	45333	5	完形	65.8	1.5	47.9	0.7	26.7	4.0	1.4	0.0	93.2	●	Mud.	
-	Ⅲ-2	-	45328	5	完形	49.9	-14.4	38.0	-9.2	19.1	-3.6	1.3	-0.1	44.6	●	Sa.	
Ⅲ-5-1	Ⅲ-2	-	45339	5	完形	37.1	-27.2	31.2	-10.0	16.3	-6.4	1.2	-0.2	21.0	-	Sa.	
-	Ⅲ-2	-	45331	5	完形	78.9	14.6	46.9	-0.3	17.9	-4.8	1.7	0.3	75.4	-	Sa.	
-	Ⅲ-2	-	45327	5	完形	63.5	-0.8	41.1	-6.1	21.0	-1.7	1.5	0.2	59.2	-	Sa.	
-	Ⅲ-2	-	45314	5	完形	68.1	3.8	43.6	-3.6	17.1	-5.6	1.6	0.2	44.7	-	Mud.	
-	Ⅲ-2	-	45338	5	完形	45.7	-18.6	42.6	-4.6	17.8	-4.9	1.1	-0.3	29.5	-	Mud.	
-	Ⅲ-2	-	45344	5	完形	50.1	-5.2	40.7	-6.5	15.2	-7.5	1.5	0.1	40.9	-	Sa.	
-	Ⅲ-2	-	45358	5	完形	56.2	-6.1	45.0	-2.2	38.7	16.0	1.3	-0.1	102.9	-	Sa.	
-	Ⅲ-2	-	45362	5	完形	80.8	18.5	64.5	17.3	22.8	0.1	1.3	-0.1	180.4	-	Sa.	
Ⅲ-5-3	Ⅲ-2	-	45373	5	完形	55.0	-9.3	51.8	4.6	25.1	2.4	1.1	-0.3	96.3	-	Sa.	
Ⅲ-5-5	Ⅲ-2	-	45375	5	完形	57.9	-6.4	56.9	11.7	13.4	-9.3	1.0	-0.4	63.2	-	Sa.	
-	Ⅲ-2	-	45379	5	完形	46.1	-18.2	29.0	-17.4	15.4	-7.3	1.5	0.2	29.1	-	Sa.	
Ⅲ-5-9	Ⅲ-2	-	45382	5	完形	115.0	30.7	50.3	3.1	21.8	-0.9	2.3	0.9	126.5	●	Sa.	
-	Ⅲ-2	-	45387	5	完形	66.1	3.8	44.6	-2.6	14.3	-8.4	1.5	0.1	46.1	●	Sa.	
-	Ⅲ-2	-	45394	5	完形	63.7	-0.6	52.8	5.6	14.1	-8.6	1.2	-0.2	57.5	-	Sa.	
-	Ⅲ-2	-	45345	5	完形	53.1	-13.5	48.3	1.1	22.8	0.1	1.1	-0.3	44.7	-	Sa.	
-	Ⅲ-2	-	45374	5	完形	41.9	-22.4	44.4	-2.8	27.4	4.7	0.9	-0.4	49.8	-	Sa.	
Ⅲ-5-4	Ⅲ-2	-	45377	5	完形	55.4	-8.9	49.4	2.2	22.6	-9.1	1.1	-0.3	50.7	●	Sa.	
Ⅲ-5-6	Ⅲ-2	-	45385	5	完形	65.0	0.7	57.3	10.1	44.6	21.9	1.1	-0.3	174.7	-	Sa.	
-	Ⅲ-2	-	45389	5	完形	74.4	10.1	60.0	12.8	21.7	-1.0	1.2	-0.1	113.4	-	Sa.	
Ⅲ-5-2	Ⅲ-2	-	45396	5	完形	50.1	-14.2	41.5	-5.7	25.8	3.1	1.2	-0.2	55.1	●	Sa.	
-	Ⅲ-2	-	45398	5	完形	54.7	-9.7	34.5	-12.7	33.7	11.0	1.6	0.2	64.3	-	Sa.	
-	Ⅲ-2	-	45360	5	完形	75.0	10.7	62.8	15.6	32.0	9.3	1.2	-0.2	150.7	-	Sa.	
Ⅲ-5-8	Ⅲ-2	-	45308	5	完形	110.0	45.7	80.0	32.8	22.4	-9.3	1.4	0.0	180.0	-	Sa.	
完形合計						1994.0	1464.3	785.5		43.0				2403.1			
完形平均値						64.3	47.2	22.7		1.4				77.5			
遺物総重量														5214.2			

第IV章 縄文時代の調査

縄文時代の調査は、平成20年度の工事立会で調査することができなかったV層黒色腐植土からの遺物回収したものを対象としている。調査は平成20年度にV層を堆積しておいた排土山からジョレン、移植ゴテを用いて遺物を回収した。調査は平成21年7月16日～10月30日の間で8日間行った。遺物は種別ごとにコンテナに分け、雨天時に水洗を行った。遺物は総数で8,385点出土し、内訳は土器356点、礫石器267点、剥片石器77点、フレイク・チップ163点、礫7,522点である。主体となる時期は縄文時代前期中葉の円筒下層a式並行期の土器群で、遺構は平成19年度の調査から小土坑の分布が予想されたが、立会工事であったため遺構調査は行っていない。(奈良)

第1節 包含層出土遺物

1. 土器 (図IV-1・2 図版6・7)

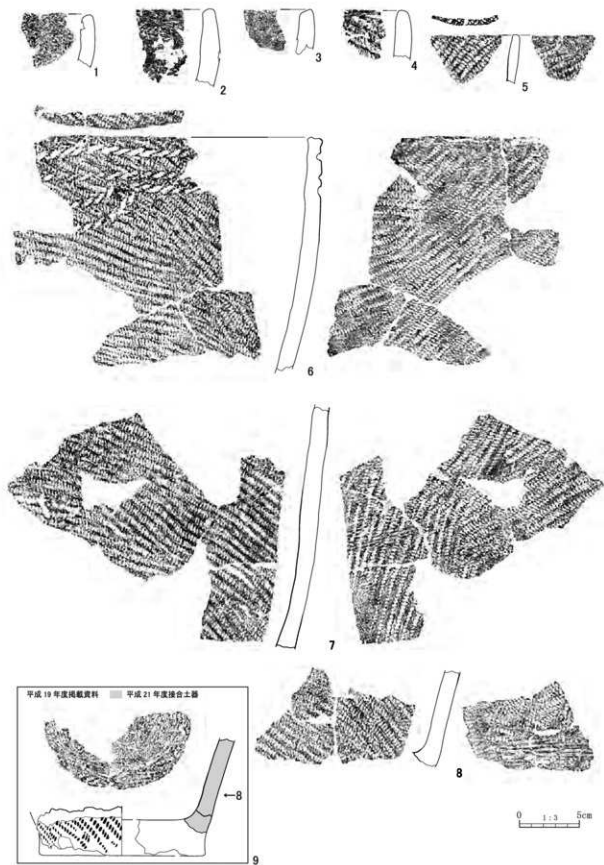
本遺跡で出土した土器はⅡ群A2a類38点、Ⅱ群A2b類106点、Ⅱ群B1類198点、Ⅲ群B2a類4点、碎片のため不明10点の総数356点である。種別ではⅡ群B1類が最も多く全体の56%を占める。

以下に種別ごとに詳細を述べる。

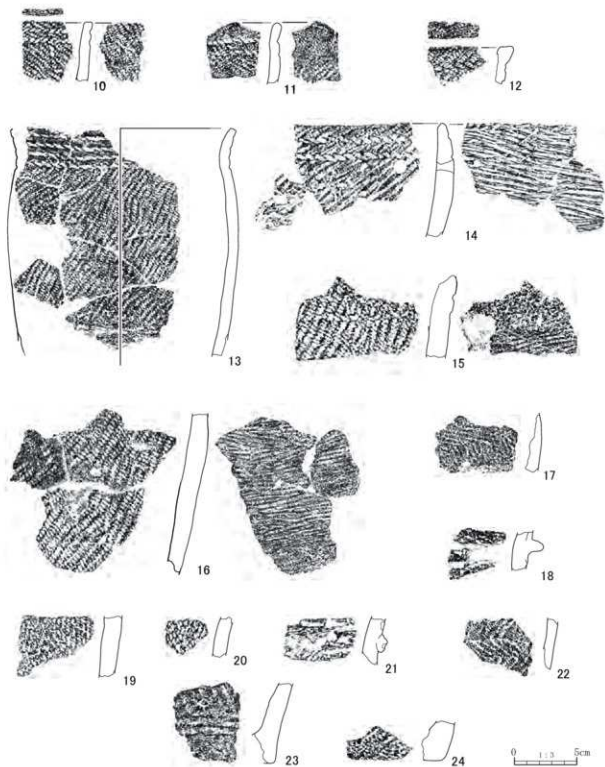
Ⅱ群A2a類 (図IV-1-1) 1は口縁部で直立からやや内湾気味に立ち上がる。器表面は弱くナデが認められ地文は判然としない。胎土に滑石を含み器表面はヌメヌメとした手触りである。

Ⅱ群A2b類 (図IV-1-2～4) 2～4は口縁部で2はやや内湾気味、3・4は直立して立ち上がる。口唇部は隅丸角状から角状に整形され、3は内削ぎされている。本群は器厚が約1.5cmと厚ぼったい資料が多く、器表面の文様は2・3が無文、4は浅くRL斜行縄文が認められる。胎土はいずれも繊維を中量から多量に含む。

Ⅱ群B1類 (図IV-1-5～9・2-10～20) 5～11は内面に縄文が施される資料で、5～7・10・11の口縁部は直立、8はやや外傾して立ち上がる。5はLR斜行縄文の同一原体で器表面、口唇部も施文している。6～8は同一個体と考えられる資料で、RL斜行縄文によって器表面、口唇部も施文している。6は口縁部直下に2条の縄線文と、その下位に横走・弧状の縄線文が一部施文されている。内面は縄文施文後にナデが認められる。8は底部立ち上がり部分で、平成19年度に報告を行った9の底部と接合する。8の内面は底部付近の変換点で横方向のミガキが認められ、その後斜位または横位の縄文が施文されており、9の底面へ続く。10は平縁で口唇部は隅丸角状、11は小突起が認められ口唇形状は丸状を呈する。10の口唇部は同一原体のRL斜行縄文が、器表面には2条の横走する縄線文と「U」字状の縄線文が施される。11の口縁部直下には縄線文が2条施文される。胎土にはいずれも砂粒を少量～中量、5・10・11は繊維も極少量～少量含んでいる。12は平縁で口唇部は角状に整形される。文様はLR斜行縄文施文後、口縁部直下に2条の縄線文が施される。口唇部は不明瞭であるが同一原体で施文していると思われる。胎土は砂礫中量、繊維を極少量含む。13は口縁部から胴部下半にかけての復元個体で、口唇部は隅丸角状、器形は胴部がほぼ直立し、頸部がやや括れて口縁部がやや外反する。地文はLR斜行縄文で、口縁部直下に4条の縄線文が施される。内面の調整は認められず、胎土に砂礫少量、繊維を極少量含む。14～16は内面に条痕が認められる。14は口縁部でやや内湾して立ち上がる。文様はLR斜行縄文の地文施文後に器表面に弱くナデと、縄線文が2条施文されている。15・16は胴部片で、15はLR斜行縄文後に2条の縄線文が施されている。



図IV-1 縄文時代包含層出土土器 (1)



図IV-2 縄文時代包含層出土土器 (2)

表IV-1 縄文時代包合層出土土器属性表(1)

属性表記載において、下記の認識のもとに行っているが、「部位」・「器形」・「胎土」の記載については、相対比較によるもので製作者の主観による。

【器物名称】 同一層位にアラビア数字、破片資料にアルファベットを付番した。

【分類】 【第1部】第3章 第1節 1. 土器に記載している。

【器形等・文様】 各部位の形態を示した。「口縁」は口縁部器表面、「底部側面」は底部器表面、「変換点」は底部と底面との状態を記載した。

【器形等】 各部位は反る状態。「外傾」は直線的に反る状態を示している。

【文様】 以下の認識で記載した。

記載順序: 部位の口縁→胴部; 口縁部→胴部への記載順、部位の底→胴部; 底部→胴部への記載順となっている。

記号: + ; 文様要素の重複文様 ** ; 文様要素の組み合わせは、充填構成

文様要素

2段異原体羽状溝文: 器口の異なる2段の原体(U-R+R)による羽状溝文

突引文: 器面に対し施文工具が斜め方向に突刺され、水平方向に連続して動く。文様の縁として、圧痕が深く施文が連続している。

押引文: 器面に対し施文工具が垂直方向に押し当てられ、水平方向に連続して動く。文様の縁として、圧痕が深く施文が連続している。

半載竹管工: 器具による施文:()内に器面に当てた工具面を記載している。(内)は半載竹管の内側、(外)は竹管の外側を用いて施文されたもの。

調練文: 器表面に対し、2段以上の調練原体の圧痕。 縦刻文: 貼付帯や口唇等の面に対し、直交あるいは斜位に圧痕するもの。

貼付帯1A: 口唇直下の幅広の貼付帯 貼付帯1B: 口唇直下の幅の細い貼付帯 貼付帯2: 貼付帯1以外の胴部に連続する貼付帯。

重複溝文: 器口の異なる原体を新旧重複して施文する。文様の縁として、糸が交差状に見える。

【胎土】 組織: 被断面や断面面に観察できる、依次的な平行な割れ目組織。(花岡 1992)

種別 番号	図版 番号	個体 名称	分類	部位	遺物番号/調査区/層位	器形等		文様		胎土	備考
						口縁-口唇/胴部/ 底側面-変換点-底面	口唇-口縁-内面/胴部-内面/ 底側面-内面				
IV-1-1	6-1	9JP10	IIA2a	口縁部	46308,46312/ - / V	平縁・直立・隅角状	ナデ? - 無文	滑石多量 磁石少量			
IV-1-2	6-2	9JP18	IIA2b	口縁部	46444/ - / V	平縁・直立・隅角状	ナデ	磁石多量			
IV-1-3	6-3	9JP17	IIA2b	口唇部	46280/ - / V	平縁・直立・隅角(内傾)	ナデ	磁石中量			
IV-1-4	6-4	9JP16	IIA2b	口唇部	46086/ - / V	平縁・直立・隅角状	RI斜行溝文	磁石中量			
IV-1-5	6-5	9JP13	II B1	口縁部	46139,46417/ - / V	平縁・直立・隅角状	RI斜行溝文・RI斜行溝文	磁石少量			
IV-1-6	6-6	9JP01A	II B1	口縁部	46033,46034,46077,46188,46306, 46316/ - / V	平縁・直立・隅角状	RI斜行溝文・RI斜行溝文・調練文(一部弧状) + RI斜行溝文	磁石少量			
IV-1-7	6-7	9JP01B	II B1	胴部	46305,46335,46072,46305,46414, 46198,46075,46117,46197,46172/ - / V	やや外傾	RI斜行溝文・RI斜行溝文	磁石少量			9と接合 平成10年度調査資料
IV-1-8	6-8	9JP01C	II B1	胴部下平	46342,46039,46027/ - / V	やや外傾	RI斜行溝文・RI斜行溝文	磁石少量			
IV-1-9	6-9	9JP08A	II B1	底部	AI-56-1-11,AH-56-3-37,AH-56- 3-47/V	平縁・直立・隅角状	RI斜行溝文・RI斜行溝文	磁石少量			
IV-2-10	6-10	9JP11	II B1	口縁部	45272/ - / V	平縁・直立・隅角状	RI斜行溝文・RI斜行溝文・調練文・RI斜行溝文	磁石少量			
IV-2-11	6-11	9JP20	II B1	口縁部	46113/ - / V	平縁・小突起・直立・隅角状	RI斜行溝文・調練文・RI斜行溝文	磁石少量			

表IV-2 縄文時代包舍層出土土器属性表(2)

所属 番号	図版 番号	器体 名称	分類	部位	遺物番号/調査区/層位	器形等		文様		胎土	備考
						口縁-口唇/胴部/ 底面-突起点-底面	口唇-口縁-内面/胴部-内面/ 底面-内面	口唇-口縁-内面/胴部-内面/ 底面-内面	口唇-口縁-内面/胴部-内面/ 底面-内面		
IV-2-12	6-12	9JP08	II B1	口縁部	46076/- / V	平縁-直立-角状		LR斜行縄文-LR斜行縄文-縄線文	織裡極少量 砂粒中量		
IV-2-13	7-13	9JP02A	II B1	口縁部~胴部 下半	46331, 46005, 46239, 45985, 45991, 45983, 45979, 45991, 46341, 46007 他あり / V	平縁-やや外反-隅丸角状/直立		LR斜行縄文-縄線文	織裡極少量 砂粒少量		
IV-2-14	7-14	9JP22	II B1	口縁部	46039, 46313 / - / V	平縁-やや内湾-角状		LR斜行縄文+ナグテ-縄線文-条直文	織裡中量 砂粒中量		補修孔
IV-2-15	7-15	9JP07	II B1	胴部	46355 / - / V	やや外傾		LR斜行縄文-縄線文-条直文	砂粒少量 砂粒少量		
IV-2-16	7-16	9JP03	II B1	胴部	46339, 46083, 46346 / - / V	直立		LR斜行縄文-条直文	織裡少量 砂粒少量		
IV-2-17	7-17	9JP19	II B1	胴部	46148 / - / V	直立		LR斜行縄文? + 短縄文(縦位)	織裡中量 砂粒少量		
IV-2-18	7-18	9JP04	II B1	胴部	46166, 46552 / - / V	直立		貼付帯	砂粒中量 織裡少量		
IV-2-19	7-19	9JP06	II B1	胴部	46254 / - / V	直立		LR斜行縄文	織裡少量 砂粒中量		接跡
IV-2-20	7-20	9JP05	II B1	胴部	46423 / - / V	直立		LR斜行縄文	織裡少量 砂粒少量		接跡
IV-2-21	7-21	9JP21	III B2a	胴部	45766 / - / V	やや外傾		押引文・貼付帯+押引文	織裡少量 砂粒少量		
IV-2-22	7-22	9JP12	III B2a	胴部	46265 / - / V	直立		異原体羽状縄文	織裡極少量 砂粒少量		
IV-2-23	7-23	9JP14	III B2a	底部	46556 / - / V	やや外傾		縦北・極止縄文(原体深くて不明)	織裡少量 砂粒少量		
IV-2-24	7-24	9JP15	III B2a	底部	46559 / - / V	直立-丸状-平底		LR斜行縄文	織裡少量 砂粒少量		

内面の条痕文はいずれも横位もしくは斜位に認められる。胎土は14が繊維、砂粒を中量、15が砂粒多量、砂礫中量、16が砂粒、繊維少量、砂礫極少量含む。17は胴部片でRL縄文が斜位及び縦位に施文される。胎土は繊維中量、砂粒少量含んでいる。18は貼付帯部分で地文は判然としないが円筒下層 a 式並行期のつばを持つタイプであると思われる。胎土は砂粒中量、繊維少量含む。19・20は胴部片でLRL複節斜行縄文の資料である。胎土は繊維、砂粒を少量、20は砂礫も極少量含んでいる。

Ⅲ群 B2a 類 (図IV-2-21~24) 21は貼付帯を有する胴部片で、貼付帯上と器表面に横方向の押引文が認められる。22は異原体羽状縄文で3段構成である。胎土は21が繊維極少量、砂礫少量、22が繊維極少量、砂粒少量含む。23・24は底部片でやや外傾して立ち上がる。23の文様は原体が浅くて不明であるが、縄文を縦位に施文後、底部変換点付近で横位に施文している。24は平底と思われる資料で、僅かにLR斜行縄文が認められる。胎土には繊維と砂粒を少量含む。(奈良)

2. 剥片石器 (図IV-3-1~15 図版8)

V層包含層からは剥片石器77点、剥片163点が出土した。内訳は石鏃7点、石槍29点、つまみ付きナイフ27点、スクレイパー9点、ピエス・エスキュー1点、石核1点、RF・UF3点である。剥片石器の石材は黒曜石19点、珪質頁岩39点、珪化岩13点、メノウ5点、チャート1点である。平成19年度の調査で出土していた石鏃は出土していない。剥片の石材は黒曜石113点、珪質頁岩13点、珪化岩1点、メノウ1点、チャート1点、緑色片岩23点、片岩11点である。緑色片岩・片岩は石斧の調整に関わるものと考えられる。

石鏃 (1~3)

1・2は凹基無茎(B2類)、いずれも珪質頁岩である。1・2は長軸4.0cm以上のもので、石鏃としては大型である。裏面を先とする粗雑な両面剥離により器体が整形された後、軽微な調整で尖頭部が作出され、平面は二等辺三角形を呈する。素材面はみられない。器体を整形する際の平坦剥離に先立つ縁辺の打面調整が施されないのが特徴である。1は裏面の基端→右側縁→左側縁、表面の右側縁→左側縁→基端、尖頭部の順に調整がみられる。身部側縁はやや外湾し、基端は内湾する。2は裏面基端→右側縁→左側縁、表面基端→左側縁→右側縁、尖頭部の順に調整がみられる。身部側縁はやや凹凸が残るが直線的で、基端はごくわずかに内湾する。1・2のような無茎三角鏃は平成19年度の調査で石鏃の約半数を占めており、遺跡の特徴を示す形態といえる。3は茎が不明瞭な木葉形のもの(D2類)で黒曜石製。裏面を先とする粗雑な両面剥離により器体が整形されている。身部・基端は外湾する。表裏面に素材面が残る。

石槍 (4~8)

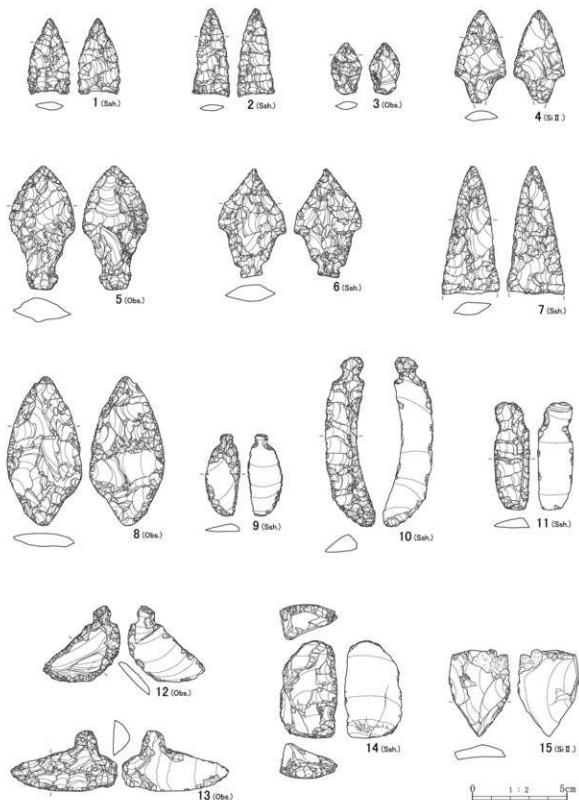
4~6は有茎のもの(A類)、7は茎が欠損により不明、8は茎の不明瞭なもの(B類)である。4は珪化岩II、5・8は黒曜石、6・7は珪質頁岩である。4は茎部の挟入がないもの(A1類)。薄手・幅広で、裏面に素材剥片の腹面が残る。裏面を先とする両面剥離により器体整形が施された後、表面の両側縁及び裏面右側縁の剥離調整で尖頭部が作出されている。縁辺調整による微細剥離痕がみられる。尖頭部作出後、やや逆刺の強い茎部が作出されている。5・6は茎部の挟入があるもの(A2類)。5は厚手でやや幅広のものである。両面剥離による器体整形、側縁調整による尖頭部の作出後、逆刺の弱い茎部が作出されている。茎部断面は半月形である。茎部下半には錯向剥離による挟入調整が施され、浅い「挟り」が付けられている。部分的に縁辺調整がみられる。6は基端に素材面を

残す薄手・幅広でやや歪な形態のものである。両面剥離による器体整形の後、交互剥離もしくは両面剥離で肩部縁辺が内湾する尖頭部を作出している。器体下半より両面剥離で逆刺の強い幅広の基部が作出された後、裏面側への挟入調整で、深い「挟り」が付けられている。基部断面はレンズ状である。7は下半を欠損するが薄手・細身の大型な柳葉形(B1類)と考えられる。両面剥離による器体整形後、表面左側縁、裏面左側縁からの錯向剥離で尖頭部が作出されている。部分的な縁辺調整が施され、肩部縁辺及び側縁は直線的である。8は木葉形(B2類)で、薄手・幅広のものである。素材面は残っていない。両面の平坦剥離により、大まかな器体整形が施されたのち、縁辺調整で尖頭部が作出されている。基端側縁にも調整が施されている。肩部縁辺は他に比べてやや丸みを帯びるが縁辺の磨減等はみられなかった。

A2類に分類した5・6のような挟入部を有するものは平成19年度調査で173点中84点が出土し、遺跡の主體的な形態であることが判明している。

つまみ付きナイフ(9～13)

9～11は縦型(A類)、12・13は横型(B類)である。9～11は珪質頁岩、12・13は黒曜石である。10～13は素材剥片の変形度が高いもの、9は素材剥片の変形度が低いものである。9は刃部のほかに部分調整が施されたもの(A1b類)で、素材剥片は極めて薄く、背面の剥離痕は他の剥離痕と風化が異なる。刃部は右側縁に施され、器体上半は平坦に近い剥離、下端は急角度である。背面左側縁下端に部分的な器体調整がみられる。つまみ部は浅い挟入調整がみられる。頭部は未調整である。裏面縁辺に微細剥離痕が連続してみられる。10は片面を調整(A2類)した、縦長・幅狭で薄いものである。素材剥片は大型のものと考えられる。左側縁からの調整後、右側縁に急角度の刃部が施されている。背面には刃部と概ね並行する稜線が形成され、断面は三角形を呈する。器体調整及び刃部調整後に作出されているつまみ部は素材剥片の末端側に位置し、背腹面の両側縁から器体短軸方向で対となる挟入剥離が施されている。つまみ頭部も円形に調整されている。側面視は腹面側に強く湾曲している。両側縁に微細剥離痕が観察される。11は端部に搔器状の刃部が作出されたもの(A4類)である。素材剥片は薄手で、片面調整が施されていることから、刃部作出以前はA2類に分類されるものである。刃部は右側縁に位置する。左側縁から器体調整が施され後に、右側縁に急角度の刃部が作出されている。つまみ部は素材剥片の打面側に位置する。背腹両面に挟入剥離が施され、浅い「挟り」がつけられている。つまみ頭部は未調整で器体整形時の剥離痕が残る。下端には直線的な急角度の刃部が作出されている。12は周縁調整のもの(B1a類)、薄手の剥片を素材とする。調整は背面側の右側縁、左側縁、下縁に施されている。このうち左側縁は剥離痕が一定で縁辺が直線的なことから刃部に相当し、右側縁～下縁は縁辺に凹凸があり、剥離痕が不揃いことから器体整形と理解できる。ただし、右側縁～下縁にも微細剥離痕が観察され、刃部としても使用されている。つまみ部は素材剥片の打面側に位置する。挟入剥離は両面に施され、やや深い「挟り」が付けられている。つまみ頭部は小型の円形に整形されている。なお、周縁調整のものは、器体整形と刃部の区別が製作段階で一応可能であるが、使用段階では厳密には区別出来ないことを意味しており、形態と機能は分けて考える必要がある。13は片面調整のもの(B2類)である。素材剥片の短軸上につまみ部が位置し、長軸縁辺に器体整形及び刃部が作出されている。背面及び腹面の器体整形は両側縁から施され、断面は三角形を呈する。つまみ部は両面からの挟入剥離によりわずかに「挟り」が付けられている。つまみ頭部は不整形な円形に調整されている。



図IV-3 縄文時代 包含層出土剥片石器

表IV-3 縄文時代 包含層出土剥片石器属性表

採回 番号	図版 番号	グリッド	遺物 番号	遺物名	分類	層位	計測値(mm)			重量 (g)	材質	備考
							長軸	短軸	厚さ			
IV-3-1	8-1	-	46239	石 鏃	B2	V	40.2	22.6	5.2	4.44	Sh.	石材同定No.86
IV-3-2	8-2	-	46241	石 鏃	B2	V	46.3	19.6	3.8	3.38	Sh.	石材同定No.87
IV-3-3	8-3	-	46235	石 鏃	D2	V	27.2	16.0	6.5	2.29	Obs.	
IV-3-4	8-4	-	46236	石 槍	A1	V	(49.8)	27.0	6.3	(7.19)	Sh.	石材同定No.88
IV-3-5	8-5	-	46068	石 槍	A2	V	65.4	35.0	12.1	21.34	Obs.	
IV-3-6	8-6	-	46246	石 槍	A2	V	57.8	35.8	8.6	15.36	Sh.	石材同定No.89
IV-3-7	8-7	-	46079	石 槍	B1	V	(67.7)	30.6	7.7	(15.1)	Sh.	石材同定No.90
IV-3-8	8-8	-	46210	石 槍	B2	V	78.8	39.5	8.9	24.98	Obs.	
IV-3-9	8-9	-	46203	つばみ付きナイフ	A1b	V	43.3	18.1	3.3	2.93	Sh.	石材同定No.91
IV-3-10	8-10	-	46066	つばみ付きナイフ	A2	V	89.8	18.3	8.3	16.26	Sh.	石材同定No.92
IV-3-11	8-11	-	46202	つばみ付きナイフ	A4	V	57.7	18.7	5.7	7.18	Sh.	石材同定No.93
IV-3-12	8-12	-	46200	つばみ付きナイフ	B1a	V	39.3	45.7	5.0	6.42	Obs.	
IV-3-13	8-13	-	46251	つばみ付きナイフ	B2	V	32.1	56.2	10.5	14.37	Obs.	
IV-3-14	8-14	-	46250	スクレイパー	B1	V	51.6	30.0	14.5	20.90	Sh.	石材同定No.94
IV-3-15	8-15	-	46252	スクレイパー	C1a	V	46.2	32.7	7.1	11.58	Sh.	石材同定No.95

平成19年度調査ではA1類とした側縁調整のものが約30%、A2類とした片面加工のものが約50%、その他が20%出土している。形態的にも薄手の剥片を利用した側縁調整のものと、狭長で片面加工が施されたものなどがあり、基本的な組成に変化はない。今年度の調査ではB類とした横型の刃部を持つものが追加されたが、点数が少なく遺跡の主体を占めるものではない。

スクレイパー (14・15)

14は長幅比1.0～2.0未満のエンドスクレイパー(B1類)で、珪質頁岩製。背面加工のもので、素材剥片は背面左側が急峻で、断面は三角形を呈する。背面には二重パティナが観察され、刃部及び側縁調整以外は古い剥離痕である。両側縁に器体調整、素材剥片の打面及び末端側に90°に近い刃部が作出されている。刃縁は背面側に微細剥離痕がみられ、肉眼観察で上端の刃部と側縁の一部にわずかな磨滅光沢を確認した。15は長幅比2.0未満の側縁加工のサイドスクレイパー(C1a類)である。珪化岩IIである。器体整形は行われず、背面側への刃部のみが作出されている。素材打面が残る幅広の剥片を横位に用いて、素材下縁に刃部が作出されている。刃部はやや急角度である。

3. 礫石器 (図IV-4・5・6・7 図版9・10)

V層包含層からは礫石器267点、礫7,522点が出土した。内訳は石斧35点、石斧片13点、石斧原材2点、たたき石113点、すり石80点、すり石片1点、砥石17点、石皿2点、台石2点、石錘1点、加工痕ある礫1点である。石材は緑色片岩42点(アオトラ型緑色岩含む)、片岩7点、片麻岩20点、安山岩19点、砂岩176点、凝灰岩1点、チャート1点、不明1点である。礫の石材は砂岩5936点、泥岩198点、片麻岩961点、花崗岩12点、安山岩312点、メノウ16点、珪化岩23点、チャート2点、石英片岩2点、蛇紋岩27点である。蛇紋岩としたものは、緑色片岩に含まれる可能性がある。

石斧 (1～10)

1～8は磨製石斧(I類)、9・10は未成品(II・III類)と分類したものである。1は青色片岩、2は頁岩、3～8は緑色片岩、10は片岩である。1・2は小型のもの。1は厚さ3.6mmの薄い剥片を素材とする。表裏面と側縁に研磨調整が施され、器体は短冊形に整形されている。上半が欠損している。2は扁平な小型の転礫を素材とする。研磨調整が施され、器体は撥形に整形されている。

1・2ともに刃縁に微細剥離痕が観察される。3は上端が欠損するノミ状のもので右側面の両面に擦切痕が残る。全面に研磨調整が施され、断面多角形を呈する。器体表裏面の研磨痕が擦切痕に切られていることから、石斧の完成品を擦切によって分割したと考えられる。分割後、擦切痕が残る面に研磨調整が施され、幅1cm程の刃部が形成されている。4は上端部に欠損面が残る刃部片に剥離調整が施されたもの。刃部側と欠損面側から剥離調整が施されていることから、再加工作と判断されるが、製作放棄されたものと考えられる。5は扁平礫の破片を素材とし、側面と刃部に研磨調整が施されたもの。素材礫形状を利用して整形している。6・7は剥離調整後、研磨調整が施されたもの。上端の自然面及び節理面以外はほぼ全面が研磨され、各面の稜が明瞭である。6は被熱により赤色化し、器表面には焼けはじけが多く見られる。ともに刃部が欠損している。8は剥離・敲打調整後、研磨調整が施されたもの。自然面が残る大型剥片を横位に用い、側縁の剥離・敲打調整によって棒状に整形し、背腹面の刃部が研磨されている。刃部は素材剥片の末端形状を利用している。被熱により赤色化している。9は刃部の形成に至っていないもの。剥離・敲打調整後、器体のほぼ全面に研磨調整が施されている。刃部となる下端は敲打調整痕と敲打時の剥離痕が残されている。剥離痕稜線上が磨滅していることから、刃部の研磨調整が施されたと考えられるが、厚みを持っていたために、製作放棄されたものと考えられる。10は部分的な剥離・研磨調整が施されたもの。片理に沿って割れた薄手の大型剥片の側面及び下端から剥離調整が施された後、素材背面と左側面に研磨調整が施されるが、製作放棄されたものと考えられる。

たたき石 (11~28)

11・12は葉状礫を素材とするもの(I類)。11は緑色片岩、12は砂岩である。11は礫の側縁稜上に敲打痕が形成されている(IC類)。表裏面に研磨調整が施されており、石斧製作途中のものを利用した可能性がある。表面側には敲打時の剥離痕がみられる。左側縁上半の節理面縁辺にも細かい剥離痕がみられるが、剥離されたものか、敲打時のものかは判別しがたい。12は平坦面と左側面、下端、右側面上端に敲打痕が形成されている(ID類)。平坦面は窪みの深い円形の敲打痕の重複、左側面はやや浅い円形の敲打、下端、右側面上端は平坦な浅い敲打痕がみられる。13~16は柱状礫を素材とするもの(II類)。13・14・16は砂岩、15は凝灰岩で、13は平坦面に浅く狭い敲打痕が形成されている(IIA類)。14・15は礫の稜線上に敲打痕が形成されている(II C類)。14は正面の敲打により上下端が欠損した。15は上縁から側縁の稜線上に狭い敲打痕と剥離痕が形成されている。16は表裏左右に深い円形の敲打痕が重複して形成されたもの(II D類)。敲打時の衝撃で破損したと考えられる2点が接合した。17・18は盤状礫を素材とするもので(III類)、いずれも砂岩。17は右側縁稜上に狭い敲打痕、18は下端に平坦な敲打痕が形成されている(III C類)。19は球状礫を素材とするもの(IV類)、玄武岩である。右側縁から下縁の稜上に幅の狭い敲打痕が形成されている(IV C類)。20~25は礫片を素材とするもので(V類)、いずれも砂岩である。20は器体裏面に欠損している。21は両面の平坦面、22は側縁、23は下端、24・25は両面の平坦面と下端に敲打痕が形成されている。25の敲打範囲は広く平坦である。26~28は他器種からの転用及び複合したもの(VI類)で、いずれも砂岩である。26は平坦面と側縁に敲打痕が形成されている。右側縁はすり面が形成されていたと考えられ、敲打痕も均一で平坦である。27は台石からの転用である。裏面が台石の使用面に相当し、円形の敲打範囲と断面V字状の線条痕がみられる。表面はたたき石として使用された際の円形の浅い敲打痕が形成されている。28は北海道式石冠の端部片を使用したもので欠損面は風化が

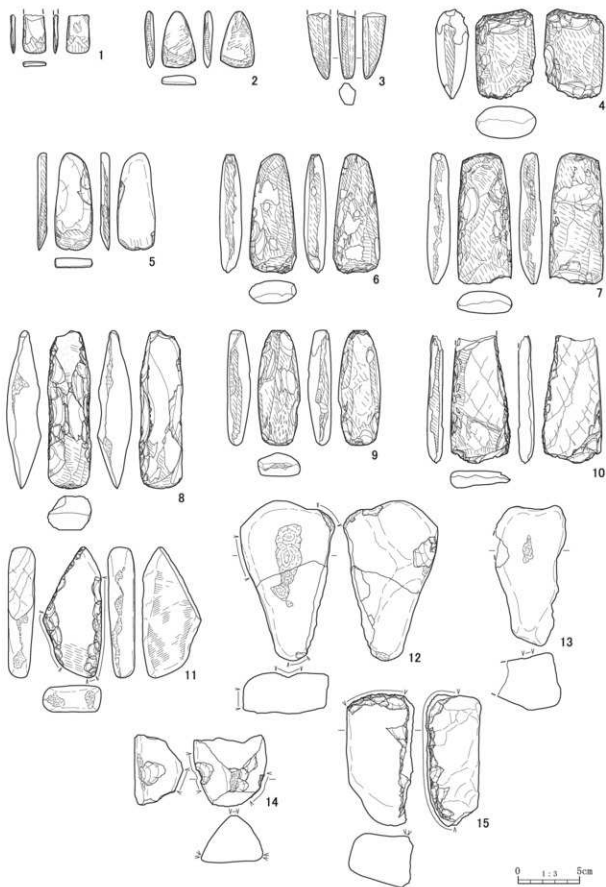
著しい。下面のすり面に円形の敲打痕が形成されている。

すり石 (29~33)

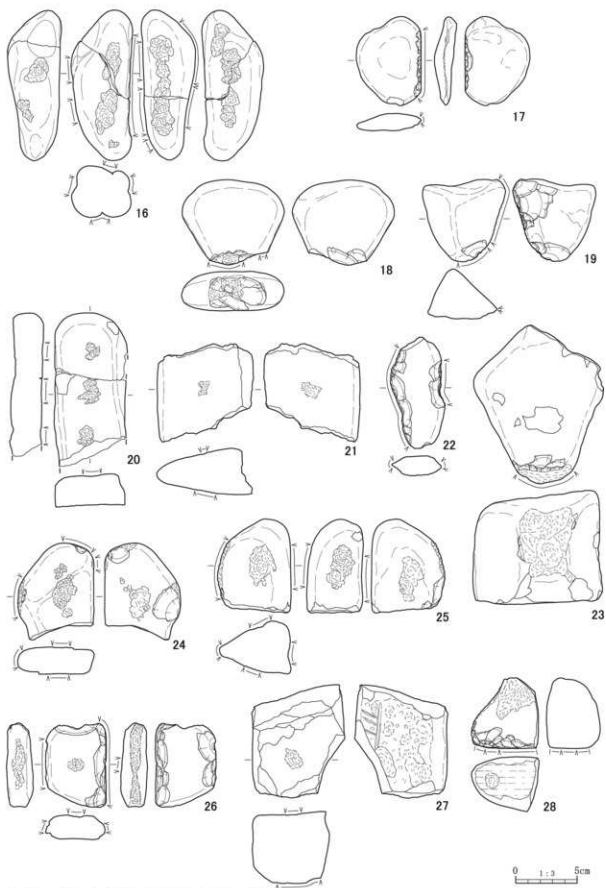
29~33は北海道式石冠(IV類)である。29・30は片麻岩、31・33は砂岩、32は安山岩である。29~31の敲打調整は上面→表裏面→側面の順に新しい。29・31はほぼ全面に敲打調整が施されたものである。29は左右に分かれた1面が中央で切られる計2面、31は1面のすり面が形成されている。29はすり面及び上面に円形の敲打痕が形成されていることから、たたき石としても使用されている。表裏面は平坦であるが、側面がわずかに窪む把握部が作出されている。31は被熱により器体の裏面半分が欠損している。上面の敲打調整を切り、わずかに窪む把握部が作出されている。30は素材礫面を残し、把握部と上面に敲打調整が施されたものである。すり面は左右2面が中央の1面を切る計3面が形成されている。円形の敲打痕はすり面に切られている。敲打調整は上面の後、表裏面から側面にかけて浅く窪む把握部が作出されている。32は器体側縁のみに敲打調整が施されたものである。被熱により器体右半が欠損し、器表面及びすり面に焼けはじけが観察される。すり面は残存部分で1面がみられる。盤状の円礫を素材とし、左側縁の表裏面の敲打調整で把握部が作出され、下面の敲打後、すり面が形成されている。33は未成品及び失敗品である。表面に素材礫面を残す礫片を素材とする。左側面を剥離調整により整形し、表裏面に深く窪む把握部と部分的な敲打調整が施されている。下面は素材礫面が残り、敲打による剥離痕が縁辺をめぐるが、すり面の形成には至っていない。器体右半が欠損している。

砥石 (34~39)

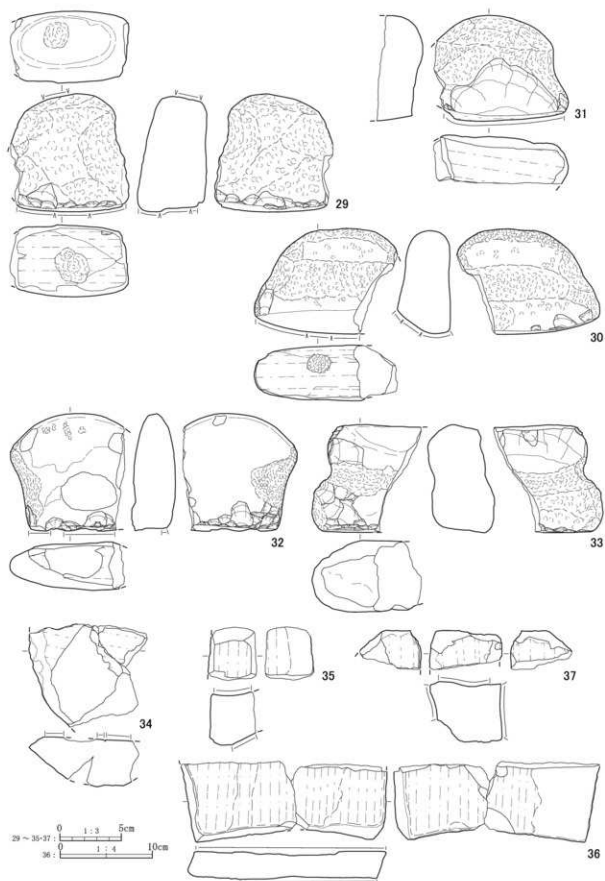
34は垂角礫の1面に砥面が形成されたもの(IA類)である。裏面は自然破砕面である。2点が接合した。器体全面及び欠損面にも赤色化が認められることから、被熱破砕した可能性がある。砥面は焼けはじけがみられ、器体の約半分以上が欠損していると考えられる。砥面は平滑で、残存する器体の短軸方向の擦痕が観察される。35・36は垂角礫の表裏2面に砥面が形成されたもの(IB類)である。35は器体の約半分以上が欠損する。砥面は両面とも同一方向の擦痕が観察され、表面は湾曲し、裏面は平滑である。36は盤状礫が素材で、2点が接合したが器体上半は約半分以上が欠損しているとみられ、完形品は大型のものと推察される。砥面は表裏とも同一方向の擦痕がみられ、表面は平滑、裏面は中心がわずかに窪んでいる。被熱による赤色化がみられる。37は3面に砥面が形成されたもの(IC類)である。器体下半の半分以上が欠損しているとみられるが、柱状の垂角礫が素材と考えられる。上面は自然破砕面である。砥面は表面、左右側面とも同一方向の擦痕が観察され、浅く窪んでいる。被熱による赤色化がみられる。38・39は破片(III類)である。38は垂角礫の表面と右側面に砥面が形成されたもの(IIIC類)である。表面・右側面の一部と左側面に素材礫面、その他の面は破砕面であることから、礫片素材のものである。砥面は2面とも皿状に窪んでおり、器体長軸方向の擦痕が観察される。表面は3面の砥面が重複し、他の2面を切る幅度の1面の中央には断面V字状の線条痕がみられる。また、砥面形成以前の敲打痕がみられる。右側面は表面と比べ湾曲が狭い。V字状の線条痕が形成される要因は、先端が鋭角となる対象物が想定される。39は平滑な砥面とこれを切る溝状の砥面が形成されたものである。溝状の砥面は3面が重複している。砥面幅は約1cmである。明瞭な線条痕も2単位観察され、うち1条は断面V字状のものである。すべて砂岩である。



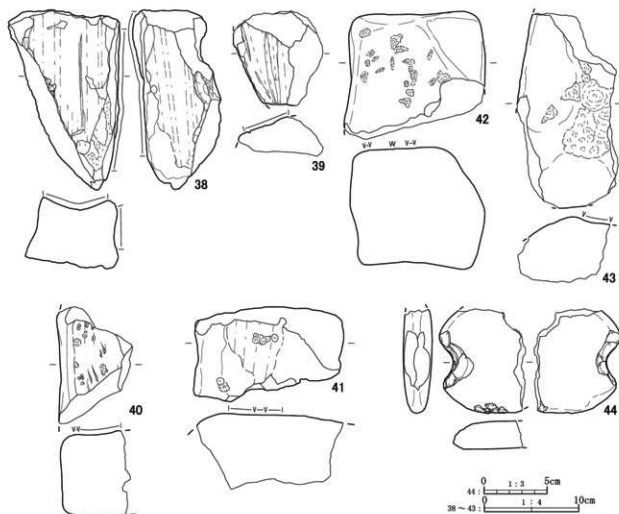
図IV-4 縄文時代 包含層出土礫石器 (1)



図IV-5 縄文時代 包含層出土礫石器 (2)



図IV-6 縄文時代 包含層出土礫石器 (3)



図IV-7 縄文時代 包含層出土礫石器 (4)

石皿 (40・41)

40は亜角礫を素材とするもの (I類)、41は破片 (III類) で、いずれも砂岩製。40は表面にすり面と擦痕、散漫な敲打痕が観察される。擦痕方向は一定しないが器体長軸方向のものが多く、41は表面の平坦面にすり面と擦痕、部分的な敲打痕が観察される。すり面範囲は狭いが、集中的に使用されている。

台石 (42・43)

42は柱状の亜角礫を素材とするもの (I類)、43は亜円礫を素材とするもの (II類) である。いずれも砂岩である。42は表面の平坦面に散漫な敲打痕が形成されている。敲打痕は浅く小さい。下半が欠損している。43は台石の破片である。表面に面的な敲打痕が形成されている。浅い敲打を主体とするが、器体中央にはわずかに窪む円形の敲打痕がみられる。

石錘 (44)

44は片麻岩の扁平な円礫を素材とする石錘である。素材礫は厚さ2.2cmと薄手である。左側縁の両面に裏面を先とする抉入調整が施され、やや深い抉りが施されている。縁辺に潰れがみられる。また、表面の下端にも剥離痕がみられる。器体右半が欠損している。(山田)

表IV-4 縄文時代 包含層出土石器属性表

採回 番号	図版 番号	個体 名称	グリップ	遺物番号	遺物名	分類	層位	計測値(mm)			重量 (g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
IV-1	9-1	-	-	46377	石 斧	I	V	(30.8)	18.6	3.6	(1.0)	B-Sch.	石材同定No.96
IV-2	9-2	-	-	46597	石 斧	I	V	45.8	6.4	6.8	10.0	Ss.	石材同定No.97
IV-3	9-3	-	-	46370	石 斧	I	V	(51.1)	18.7	13.5	(20.4)	Gsh	
IV-4	9-4	-	-	46360	石 斧	I	V	68.6	48.2	26.0	141.7	Gsh	
IV-5	9-5	-	-	46096	石 斧	I	V	76.3	30.6	6.8	33.9	Gsh	
IV-6	9-6	-	-	46059	石 斧	I	V	94.1	37.5	17.5	110.8	Gsh	被熱
IV-7	9-7	-	-	46062	石 斧	I	V	106.2	43.6	17.4	148.5	Gsh	
IV-8	9-8	-	-	46555	石 斧	I	V	129.0	33.0	25.9	163.4	Gsh	被熱
IV-9	9-9	-	-	46361	石 斧	II	V	93.8	34.1	18.8	97.8	Gsh	
IV-10	9-10	-	-	46357	石 斧	III	V	(103.3)	48.7	12.4	(85.5)	Sch.	
IV-11	9-11	-	-	46098	たたま石	I C	V	106.7	46.7	29.3	158.6	Gsh	
IV-12	9-12	VST02	-	46568 46622	たたま石	I D	V	131.9	38.4	36.5	384.0	Sa.	被熱
IV-13	9-13	-	-	46582	たたま石	II A	V	115.6	58.5	47.0	(353.0)	Sa.	
IV-14	9-14	-	-	46381	たたま石	II C	V	96.5	58.8	38.9	148.7	Sa.	石材同定No.98
IV-15	9-15	-	AK-58	45400	たたま石	II C	IV	108.0	54.2	43.0	415.0	TC	石材同定No.99
IV-5-16	9-16	VST03	-	46459 46482	たたま石	III D	V	121.6	48.8	44.9	302.0	Sa.	被熱
IV-5-17	9-17	-	-	46583	たたま石	III C	V	73.0	33.3	14.4	61.1	Sa.	
IV-5-18	9-18	-	-	46479	たたま石	III C	V	69.6	40.6	31.4	225.0	Sa.	
IV-5-19	9-19	-	-	46466	たたま石	III C	V	67.2	68.3	43.1	216.0	Gsh.	石材同定No.100
IV-5-20	9-20	VST01	-	46055 46570	たたま石	V	V	124.2	59.6	26.0	280.0	Sa.	被熱
IV-5-21	9-21	-	-	46603	たたま石	V	V	100.2	82.0	39.3	275.0	Sa.	被熱
IV-5-22	9-22	-	-	46520	たたま石	V	V	(90.7)	41.3	14.9	(59.8)	Sa.	
IV-5-23	9-23	-	-	46571	たたま石	V	V	134.1	105.2	89.9	1,303.0	Sa.	被熱
IV-5-24	9-24	-	-	46382	たたま石	V	V	71.7	62.5	22.7	150.7	Sa.	被熱
IV-5-25	9-25	-	-	46464	たたま石	V	V	78.7	60.3	44.1	250.6	Sa.	
IV-5-26	9-26	-	-	46578	たたま石	VI	V	48.6	66.9	20.8	98.2	Sa.	
IV-5-27	9-27	-	-	46426	たたま石	VI	V	(96.8)	83.2	69.2	(518.0)	Sa.	
IV-5-28	9-28	-	-	46481	たたま石	VI	V	50.7	39.7	43.0	182.6	Sa.	
IV-6-29	10-29	-	-	46639	すり石	IV	V	96.8	(93.1)	57.5	(920.0)	Gd.	
IV-6-30	10-30	-	-	46638	すり石	IV	V	114.0	(88.0)	41.3	(655.0)	Gd.	
IV-6-31	10-31	-	-	46642	すり石	IV	V	86.9	(114.0)	34.4	(490.5)	Sa.	
IV-6-32	10-32	-	-	46433	すり石	IV	V	95.3	(92.4)	37.3	(490.0)	AmI.	被熱
IV-6-33	10-33	-	-	46641	すり石	IV	V	77.0	(90.5)	56.1	(430.0)	Sa.	未成品
IV-6-34	10-34	VST06	-	46628 46636	砥 石	I A	V	(87.0)	(94.7)	45.4	(270.0)	Sa.	被熱
IV-6-35	10-35	-	-	46682	砥 石	I B	V	38.7	(37.8)	37.1	(93.3)	Sa.	
IV-6-36	10-36	VST05	-	46432 46617	砥 石	I B	V	(85.4)	(228.0)	29.5	(826.0)	Sa.	被熱
IV-6-37	10-37	-	-	46681	砥 石	I C	V	58.0	(47.8)	31.7	(97.1)	Sa.	被熱
IV-7-38	10-38	-	-	46401	砥 石	II C	V	151.0	(90.0)	59.4	(690.0)	Sa.	
IV-7-39	10-39	-	-	46681	砥 石	III	V	75.2	74.7	31.6	135.3	Sa.	
IV-7-40	10-40	-	-	46605	石 皿	I	V	(98.0)	(70.7)	69.7	(385.0)	Sa.	
IV-7-41	10-41	-	-	46663	石 皿	III	V	77.0	126.0	61.5	490.0	Sa.	
IV-7-42	10-42	-	-	46662	台 石	I	V	(120.0)	103.0	94.2	(1,590.0)	Sa.	
IV-7-43	10-43	-	-	46662	台 石	III	V	(130.3)	80.8	50.3	(745.0)	Sa.	
IV-7-44	10-44	-	-	46600	石 餅	-	V	93.6	(65.4)	22.4	210.0	Gd.	

ニタツプナイ遺跡(2)

写真図版

図版1



1. 現道下盛土除去状況(E→)



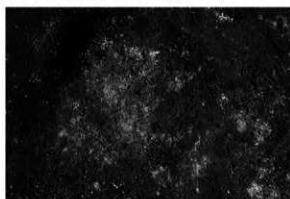
2. 平成20年度作業状況(SE→)



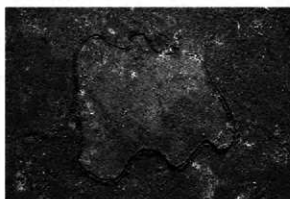
3. 火山灰除去後(S→)



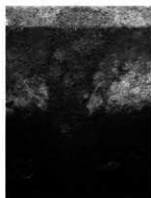
4. 基本層序(S→)



5. IIIAS-16検出(W→)



6. IIIAS-17検出(W→)



7. IIIKP-61断面(S→)



8. IIIKP-62断面(S→)



9. IIIKP-63断面(SW→)



10. IIIKP-65断面(NW→)

図版2



1. ⅢH-06断面1 (E→)



2. ⅢH-06断面2 (SE→)



3. ⅢH-06断面3 (E→)



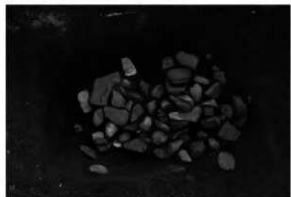
4. ⅢH-06掘り上げ土断面 (E→)



5. ⅢH-06.HF01検出 (W→)



6. ⅢH-06.HF01断面 (W→)



7. ⅢH-06.PT01集石出土状態 (N→)



8. ⅢH-06屋根土及び礫出土状態 (N→)

図版3



1. ⅢH-06完掘(S→)



2. 屋根土及び炭化材断面(W→)



3. ⅢH-06床面炭化材(SE→)



4. ⅢHP-02断面(NW→)

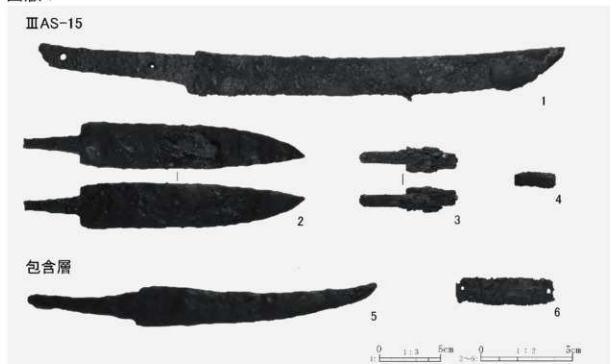


5. ⅢHP-03断面(NW→)



6. 平成21年度遺物回収状況

図版4

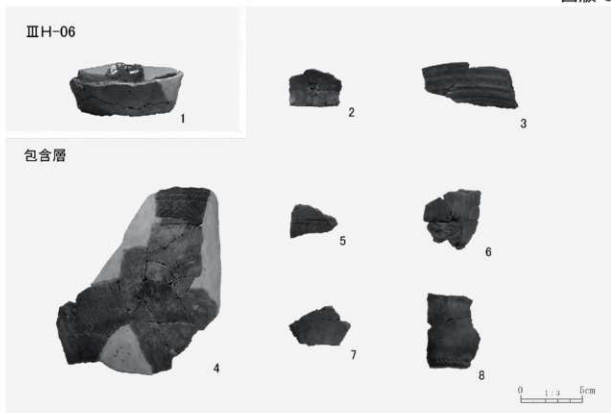


1. アイヌ文化期 出土金属製品



2. ⅢSB-08出土鏢

図版 5



1. III H-06及び擦文文化期包含層出土土器



2. III H-06 HP01出土礫

図版6



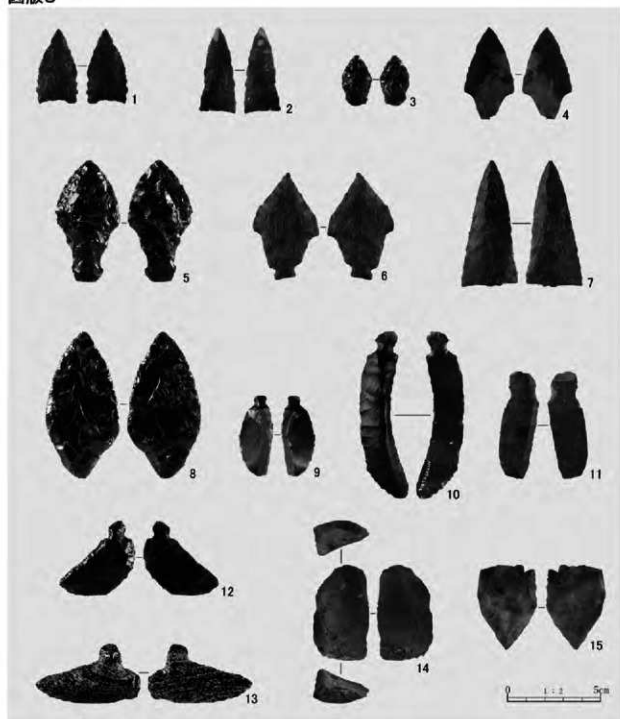
1. 縄文時代包含層出土土器(1)

図版7



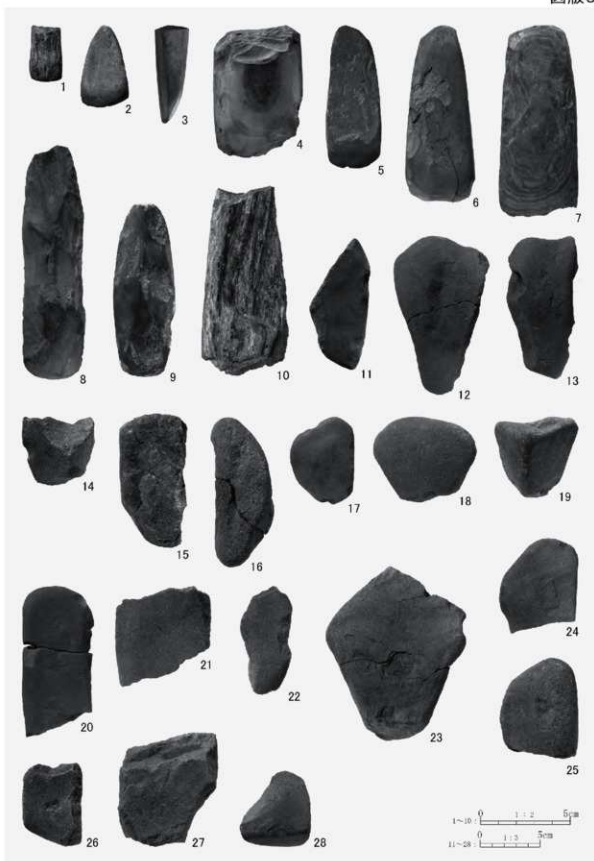
1. 縄文時代包含層出土土器(2)

図版8



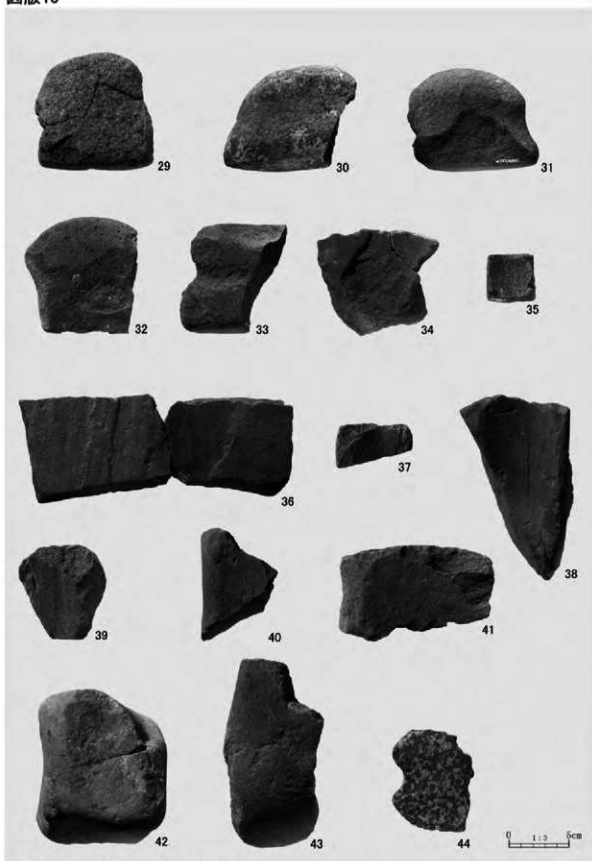
1. 縄文時代 包含層出土剥片石器

図版9



1. 縄文時代 包含層出土礫石器(1)

図版10



1. 縄文時代 包含層出土礫石器(2)

第5部

自然科学的分析

第 I 章 理化学的分析

第 1 節 幌内5遺跡、富里2遺跡、ニタツナイ遺跡における放射性炭素年代(AMS 測定)

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

幌内5遺跡の測定対象試料はY-27 区出土炭化クルミ (1 Y-27 : IAAA-91602)、W-18 区出土炭化クルミ (2 W-18 : IAAA-91603)、合計2点である。

富里2遺跡の測定対象試料はⅢAS-01 出土炭化クルミ (3 ⅢAS-01 : IAAA-91604)、ⅢF-01 出土炭化クルミ (4 ⅢF-01 : IAAA-91605)、ⅢF-02 出土炭化材 (5 ⅢF-02 : IAAA-91606)、ⅢF-07 出土炭化材 (6 ⅢF-07 : IAAA-91607)、ⅢF-08 出土炭化材 (7 ⅢF-08 : IAAA-91608)、ⅢF-03 出土炭化材 (9 ⅢF-03 : IAAA-92989)、ⅢF-05 出土炭化材 (10 ⅢF-05 : IAAA-92990)、合計7点である。

ニタツナイ遺跡の測定対象試料はⅢH-06 出土炭化種子 (8 ⅢH-06 : IAAA-91609) 1点である。

2 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- (2) 酸処理、アルカリ処理、酸処理 (AAA : Acid Alkali Acid) により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸 (80℃) を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では1Nの水酸化ナトリウム水溶液 (80℃) を用いて数時間処理する。なお、AAA 処理において、アルカリ濃度が1N未満の場合、表中にAaAと記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸 (80℃) を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- (3) 試料を酸化銅と共に石英管に詰め真空下で封じ切り 500℃で30分、850℃で2時間加熱する。
- (4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素 (CO₂) を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出 (水素で還元) し、グラファイトを作製する。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

3 測定方法

測定機器は、3MV タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS 専用装置 (NEC Pelletron 9SDH-2) を使用する。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOxII) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

4 算出方法

- (1) 年代値の算出には、Libbyの半減期 (5568年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。
- (2) ¹⁴C年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。この値は、 $\delta^{13}C$ によって補正された値である。¹⁴C年代と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤

- 差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2%であることを意味する。
- (3) $\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差 (‰) で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ を測定した場合には表中に (AMS) と注記する。
- (4) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。
- (5) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは 2 標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal10 データベース (Reimer et al 2004) を使い、OxCalv4.1 較正プログラム (Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001) を使用した。

5 測定結果

梶内 5 遺跡出土試料の ^{14}C 年代は、Y-27 区出土炭化クルミ 1 Y-27 が $5390 \pm 40\text{yrBP}$ 、W-18 区出土炭化クルミ 2 W-18 が $5330 \pm 40\text{yrBP}$ である。いずれも縄文時代前期に相当する年代を示した。

富里 2 遺跡出土試料の ^{14}C 年代は、ⅢAS-01 出土炭化クルミ 3 ⅢAS-01 が $320 \pm 30\text{yrBP}$ 、ⅢF-01 出土炭化クルミ 4 ⅢF-01 が $290 \pm 30\text{yrBP}$ 、ⅢF-02 出土炭化材 5 ⅢF-02 が $810 \pm 30\text{yrBP}$ 、ⅢF-07 出土炭化材 6 ⅢF-07 が $900 \pm 30\text{yrBP}$ 、ⅢF-08 出土炭化材 7 ⅢF-08 が $810 \pm 30\text{yrBP}$ 、ⅢF-03 出土炭化材 9 ⅢF-03 が $1010 \pm 30\text{yrBP}$ 、ⅢF-05 出土炭化材 10 ⅢF-05 が $770 \pm 30\text{yrBP}$ である。暦年較正年代 (1σ) で見ると、3 ⅢAS-01 と 4 ⅢF-01 が 16 世紀から 17 世紀前半頃でアイヌ文化期、5 ⅢF-02、7 ⅢF-08、10 ⅢF-05 が 13 世紀頃、6 ⅢF-07 が 11 世紀から 12 世紀頃、9 ⅢF-03 が 10 世紀から 11 世紀頃で、擦文文化期に当たる範囲が示されている。

ニタツブナイ遺跡ⅢH-06 出土炭化種子 8 ⅢH-06 の ^{14}C 年代は $1000 \pm 30\text{yrBP}$ である。暦年較正年代 (1σ) で見ると、11 世紀前半頃の確率が高く、擦文文化期と見られる。

炭素含有率はすべて 60% を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-91602	1 Y-27区	梶内5遺跡	炭化クルミ	AAA	-24.41±0.47	5,390±40	51.12±0.24
IAAA-91603	2 W-18区	梶内5遺跡	炭化クルミ	AAA	-22.53±0.50	5,330±40	51.53±0.23
IAAA-91604	3 ⅢAS-01	富里2遺跡	炭化クルミ	AAA	-24.04±0.40	320±30	96.04±0.36
IAAA-91605	4 ⅢF-01	富里2遺跡	炭化クルミ	AAA	-23.04±0.77	290±30	96.43±0.36
IAAA-91606	5 ⅢF-02	富里2遺跡	炭化材	AAA	-23.60±0.74	810±30	90.40±0.34
IAAA-91607	6 ⅢF-07	富里2遺跡	炭化材	AAA	-25.31±0.56	900±30	89.42±0.32
IAAA-91608	7 ⅢF-08	富里2遺跡	炭化材	AAA	-24.16±0.72	810±30	90.40±0.34
IAAA-91609	8 ⅢH-06	ニタツブナイ遺跡	炭化種子	AuA	-28.79±0.43	1,000±30	88.32±0.32
IAAA-92989	9 ⅢF-03	富里2遺跡	炭化材	AAA	-25.30±0.35	1,010±30	88.23±0.32
IAAA-92990	10 ⅢF-05	富里2遺跡	炭化材	AAA	-25.13±0.38	770±30	90.87±0.32

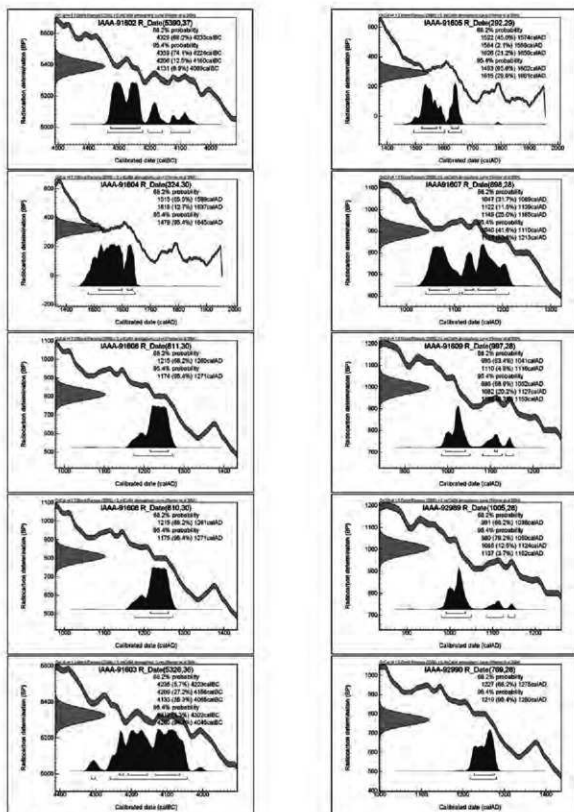
[#3248~3250, 3490]

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-91602 Y-27 区	5,380 \pm 40	51.18 \pm 0.23	5,390 \pm 37	4329BC - 4233BC (68.2%)	4339BC - 4224BC (74.1%) 4206BC - 4160BC (12.5%) 4131BC - 4069BC (8.9%)
IAAA-91603 W-18 区	5,290 \pm 40	51.79 \pm 0.23	5,326 \pm 36	4235BC - 4223BC (5.7%) 4209BC - 4156BC (27.2%) 4133BC - 4065BC (35.3%)	4312BC - 4302BC (1.3%) 4260BC - 4045BC (94.1%)
IAAA-91604 III AS-01	310 \pm 30	96.23 \pm 0.35	324 \pm 30	1515AD - 1599AD (55.5%) 1618AD - 1637AD (12.7%)	1479AD - 1645AD (95.4%)
IAAA-91605 III F01	260 \pm 30	96.82 \pm 0.32	292 \pm 29	1522AD - 1574AD (45.0%) 1584AD - 1588AD (2.1%) 1626AD - 1650AD (21.2%)	1493AD - 1602AD (65.6%) 1615AD - 1661AD (29.8%)
IAAA-91606 III F02	790 \pm 30	90.66 \pm 0.32	811 \pm 30	1215AD - 1260AD (68.2%)	1174AD - 1271AD (95.4%)
IAAA-91607 III F07	900 \pm 30	89.36 \pm 0.30	898 \pm 28	1047AD - 1089AD (31.7%) 1122AD - 1139AD (11.5%) 1149AD - 1185AD (25.0%)	1040AD - 1110AD (41.6%) 1116AD - 1213AD (53.8%)
IAAA-91608 III F08	800 \pm 30	90.56 \pm 0.31	810 \pm 30	1215AD - 1261AD (68.2%)	1175AD - 1271AD (95.4%)
IAAA-91609 III F06	1,060 \pm 30	87.64 \pm 0.31	997 \pm 28	995AD - 1041AD (63.4%) 1110AD - 1116AD (4.8%)	986AD - 1052AD (68.9%) 1082AD - 1127AD (20.2%) 1136AD - 1153AD (6.3%)
IAAA-92989 III F03	1,010 \pm 30	88.18 \pm 0.31	1,005 \pm 28	991AD - 1036AD (68.2%)	980AD - 1050AD (79.2%) 1085AD - 1124AD (12.5%) 1137AD - 1152AD (3.7%)
IAAA-92990 III F05	770 \pm 30	90.85 \pm 0.32	769 \pm 28	1227AD - 1275AD (68.2%)	1219AD - 1280AD (95.4%)

[参考値]

参考文献

- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19, 355-363
- Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37 (2), 425-430
- Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43(2A), 355-363
- Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43(2A), 381-389
- Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058



[参考] 暦年較正年代グラフ

第2節 富里2遺跡出土ガラス玉・ニンカリ・漆片の自然科学的調査結果

A. ガラス玉

赤沼 英男 (岩手県立博物館)

1 はじめに

北海道勇払郡厚真町富里2遺跡は厚幌導水路建設事業に伴い、平成21年7月から10月に発掘調査された遺跡である¹⁾。調査の結果、縄文時代後期・晩期、擦文文化期、およびアイヌ文化期に比定される遺構が検出された。近世アイヌ文化期の遺構からは青色を呈するガラス玉の破片が出土した。

自然科学的調査によって、鉄および銅を着色剤とする鉛ガラスであることが判明した。以下に調査結果を報告する。

2 調査資料

調査資料は図1に示すガラス玉(No.1:本報告書第3部 図II-5-7・カラー7-3a)である。風化しているものの、側面および上面にはカットの跡がみられる(図1a)。

3 調査方法

資料表面を蒸留水に浸し、超音波洗浄して、表面に固着する土砂を除去した。資料を99.95%エチルアルコールに浸し、自然乾燥した後資料表面の約3mm²を除き、他をアルミホイルで覆った。露出部分をカーボン蒸着し、蒸着面をエレクトロン・プローブ・マイクロアナライザー(EPMA)で分析した。EPMA分析終了後蒸着面を、エチルアルコールを含ませた綿棒でこすり、蒸着膜を取り除いた。

4 調査結果ならびに考察

図1b₁は露出面のEPMAによる反射電子組成像(BEI)である。主として明灰色領域、やや暗灰色を呈する領域、および暗灰色領域によって構成される。b₂はb₁の枠内部を拡大した写真である。b₁で確認されたやや暗灰色を呈する領域および暗灰色領域は明灰色領域に比べ凹凸が顕著で、大きな亀裂もみられる。図1c₁₋₄は図1b₁領域(①-④)のEPMAによる定性分析結果、図2は図1b₂に含有される元素濃度分布のカラーマップである。領域(①-④)には鉛(Pb)、カルシウム(Ca)、カリウム(K)、ケイ素(Si)、アルミニウム(Al)、錫(Sn)、および酸素(O)がほぼ全域に分布する。とりわけ、明灰色領域①およびやや暗灰色を呈する領域②には、SiおよびOが高濃度に分布する。領域②からは微量の銅(Cu)も検出されている。

表1は領域(①-④)のEPMAによる定量分析結果である。4領域とも化学組成はほぼ同じで、SiO₂は64.5-68.5mass%、PbOは16.5-21.3mass%、Al₂O₃は6.37-6.99mass%、CaOは1.01-1.07mass%含有されている。図1の定性分析結果および図2のカラーマップとよく整合する結果である。領域(②-④)の3領域は①に比べPbOが約4mass%低レベルである。風化によりPbOが溶出したことに起因すると思われる。

EPMAによる分析結果は、調査資料が鉛ガラスであることを示している。青色の着色剤はFeおよびCuで、図1c₁₋₄に示す定性チャートでわずかに検出されたSnは、FeおよびCuの還元剤として作用した可能性がある。この点については類例の蓄積を重ね検討する必要がある。

註

- 1) 厚真町教育委員会・奈良智法氏からのご教授による。
- 2) 作花済夫編『ガラスの辞典』株式会社朝倉書店、pp.244-246、1993
- 3) 成瀬 省『ガラス工学』朝倉書店、1986

表1 調査資料のEPMAによる定量分析結果

測定箇所	化学組成 (mass%)												合計
	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	TiO ₂	Cl	Na ₂ O	MgO	K ₂ O	MnO	FeO	PbO		
1b ₂	①	64.5	6.73	1.07	0.08	0.10	0.16	0.13	0.18	0.01	0.77	21.3	95.03
	②	68.5	6.99	1.04	<0.01	0.08	0.10	0.08	0.18	0.01	0.71	16.5	94.19
	③	67.8	6.74	1.02	<0.01	0.12	0.13	0.09	0.26	<0.01	0.68	17.2	94.04
	④	66.3	6.37	1.01	0.02	0.15	0.15	0.10	0.24	0.01	0.61	16.5	91.46

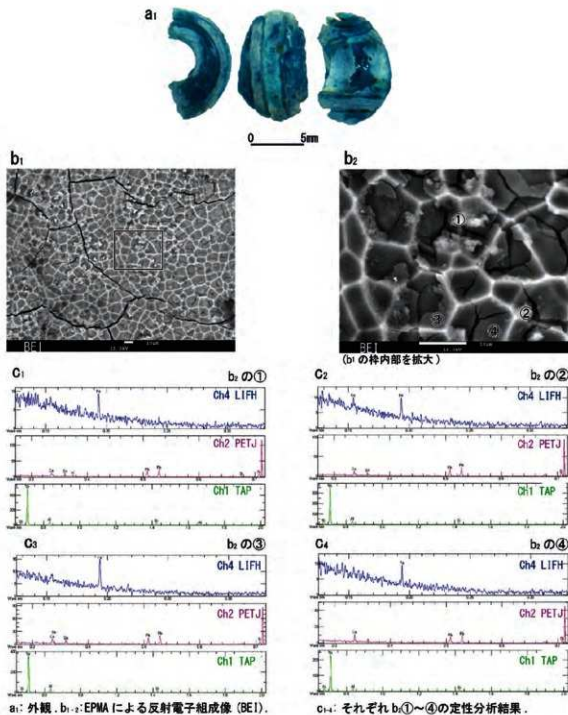


図1 調査資料の組織観察結果

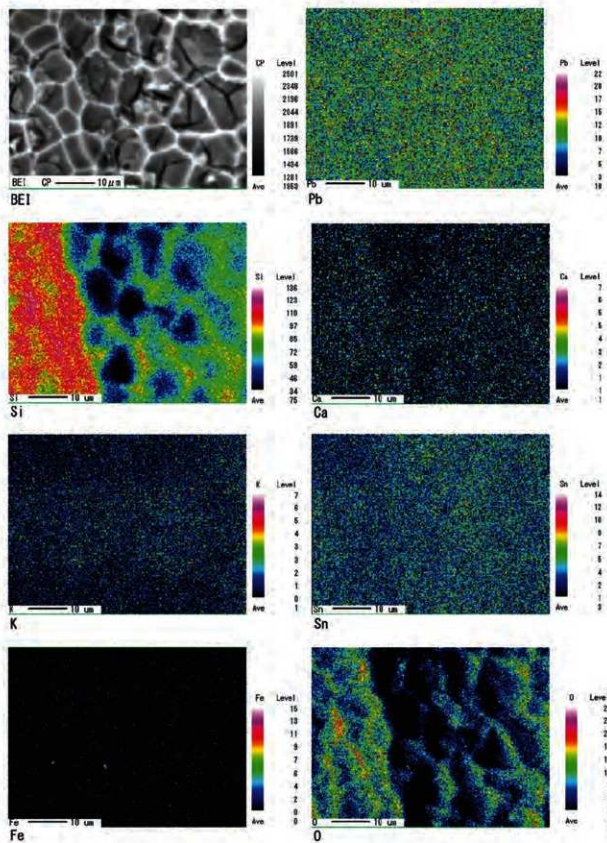


図2 EPMAによる含有元素濃度分布のカラーマップ

赤沼 英男 (岩手県立博物館)

B. ニンカリ

1 はじめに

北海道勇払郡厚真町富里2遺跡は、厚幌導水路建設事業に伴い、平成21年7月から10月に発掘調査された遺跡である¹⁾。調査の結果、縄文時代後期・晩期、擦文文化期、およびアイヌ文化期に比定される遺構が検出された。擦文文化期の焼土(ⅢF-09)上位からは、黒褐色を呈するニンカリが出土した。保存処理の過程で抽出した試料片の自然科学的調査によって、錫製であることが判明した。以下に調査結果を報告する。

2 調査資料

調査資料は図1(1)a₁に示すニンカリ(No.1:本報告書第3部 図Ⅲ-7-4・カラー7-6)である。出土時は8個に分かれていたが、保存処理の過程で接合・整形した。表面は黒褐色を呈し、酸化が進んでいる(図1a₁)。

3 調査方法

抽出した試料断面を観察面となるよう、エポキシ樹脂に埋め込み、固定した。エメリー紙で荒研磨し、ダイヤモンドペーストで仕上げ研磨した後、研磨面をカーボン蒸着し、エレクトロン・プローブ・マイクロアナライザー(EPMA)で分析した。

4 調査結果ならびに考察

図1(1)b₁は抽出した試料の macroscale 組織である。資料表面は錆層で覆われているが、内部にはメタルが残っている。 macroscale 組織領域(Reg.1)内部には、メタル中に微細な白色領域[図1(1)e_{1,2}]および暗灰色領域が点在した組織が確認された[図1(2)d₁①]。EPMAによる分析によって、メタルは錫(Sn)[図1(1)e₂①]、白色領域[図1(1)e₂②]は酸化鉛(Pb-O系領域)、暗灰色領域[図1(2)d₁①]は銅-錫(Cu-Sn)合金であることが分かった。EPMAによる含有元素濃度分布のカラーマップも、上記分析結果とよく整合する。

上記一連の分析結果は、調査資料が錫製ニンカリであることを示している。製品または素材の入手ルートについては、列島外からの製品または素材搬入を考慮に入れ検討する必要がある。

註

1) 厚真町教育委員会・奈良智法氏からのご教授による。

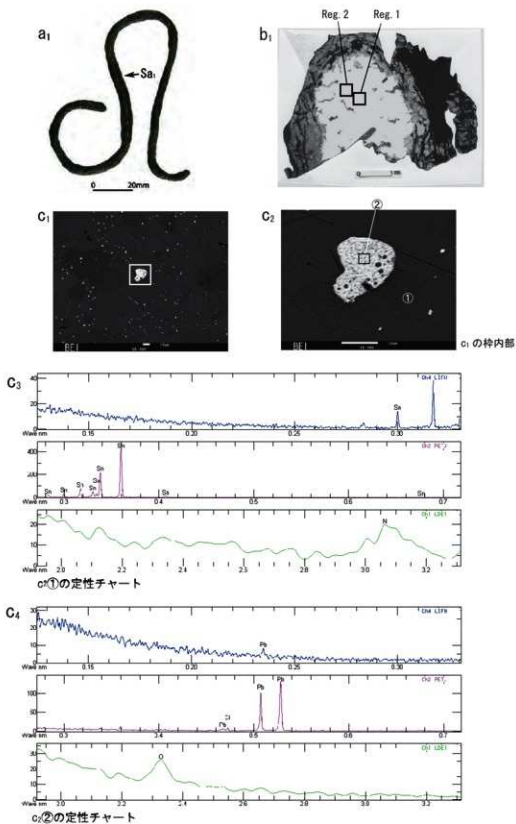


図1(1) ニンカリから抽出した試料の組織観察結果

a1: 外観、矢印は試料採取位置。b1: 採取した試料のマクロ組織。c1, c2: b1領域(Reg. 1)内部のEPMAによる反射電子組成像(BEI)。c3, c4: それぞれc1およびc2のEPMAによる定性分析結果。

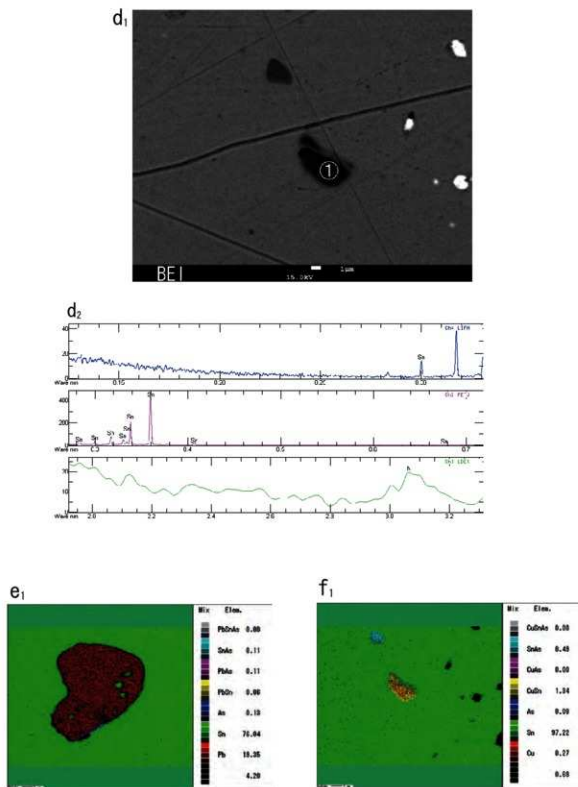


図1(2) ニンカリから抽出した試料の組織観察結果

d₁: マクロ組織領域 (Reg. 2) 内部のEPMAによる反射電子組成像 (BEI)。d₂: d₁①のEPMAによる定性分析結果。e₁: e₂に含有される元素濃度分布の複合カラーマップ。f₁: d₁に含有される元素濃度分布の複合カラーマップ。

C. 漆片

赤沼 英男 (岩手県立博物館)

1 はじめに

北海道勇払郡厚真町富里2遺跡は、厚幌導水路建設事業に伴い、平成21年7月から10月に発掘調査された遺跡である¹⁾。調査の結果、縄文時代後期・晩期、擦文文化期、およびアイヌ文化期に比定される遺構が検出された。アイヌ文化期の包含層(区画遺構の掘り上げ土上位)からは、赤色に塗彩された漆片が出土した。

漆器については漆膜の組成に加え、塗膜断面構造、とりわけ下地調整技法を明らかにし、資料の来歴と製作技法の変遷を解明しようという研究が実施されはじめている(Takeda・Akanuma・Tsuchiya 2009)。北海道における中・近世漆器の塗膜断面構造解析例は少なく、製作技法上の比較・検討は難しい。ここでは中・近世漆器の下地調整技法に関する基礎データを得ることを目的として、出土漆片の自然科学的調査を実施した。以下に調査結果を報告する。

2 調査資料

調査資料は2009年度の調査によって出土した漆塗膜片である。体部は喪失しており、製品形状の推定は難しい。

3 調査方法

塗膜片の中から比較的残存状況が良好な1点を選別し、調査資料とした(図1a₁)。資料を真空凍結乾燥器で減圧乾燥した後2分し、一方については切断面が観察面となるよう、エポキシ樹脂に埋め込み、エメリー紙を用いて荒研磨した。次にダイヤモンドペーストを使って仕上げ研磨した後、カーボン蒸着し、EPMAで断面構造、混和された色材料の化学組成、および塗膜断面構造について調査した。もう一方についてはKB r 錠剤法によるFTIR分析に供した。

4 調査結果および考察

外面および内面から抽出した試料のEPMA反射電子組成像(BEI)によると、赤色塗彩層(1₁)の上に塗膜層3層(1₂₋₄)が重ねられている(図1c₁)。赤色塗彩層の下は厚い樹脂層(1₂)、少量の微小鉱物が混在した暗灰色の薄層(1₃)、樹脂層(1₄)、および少量の微小鉱物が混在した暗灰色の薄層(1₅)によって構成されている(図1b₁、図2a₁)。赤色塗彩層(1₁)の反射電子組成像には、白色を呈する微細粒子、および左記微細粒子を内包する暗灰色鉱物相が観察される(図1c_{1,3})。微細粒子は酸化鉄を主成分とする(図1c₁)。暗灰色鉱物相は酸化ケイ素(石英と推定される)からなる(表1)。

EPMAによる含有元素濃度分布のカラーマップによると、薄層(1₂および1₃)には、炭素(C)、ケイ素(Si)、アルミニウム(Al)、カルシウム(Ca)、カリウム(K)、および酸素(O)が高濃度に分布する(図2c_{1,2}、図3)。1₄層にはFe-Ca-K-O系鉱物が見出されている(図2b_{1,2})。1₅層には他に、斜長石(P1)(表1)および火山ガラス片(G1)も確認されているが、いずれも炭素を主体とする暗灰色層に固定されてはいない(図2d₁)。これらは埋蔵環境からの富化された可能性が高い。

塗膜層の赤外吸収スペクトル(図4a₁)には、3400cm⁻¹付近にOH伸縮振動、2927cm⁻¹および2856cm⁻¹にオレフィンによるCH伸縮振動、1712cm⁻¹にカルボニルによるC=O伸縮振動、および1459cm⁻¹の芳香環伸縮振動による吸収がみられる。1086cm⁻¹にブロードな強いケイ酸塩化合物に起因すると推定される吸収帯が観察される。図には、採取後4年を経過した日本産黒目漆のFTIR吸収スペクトルを示した(Takeda・Akanuma・Tsuchiya 2009)。ケイ酸塩化合物に起因すると推定されるピークを除き、2試料のFTIR吸収スペクトルパターンは、ほぼ一致する。上塗層

に使用された樹脂は、漆の可能性がきわめて高い。

上記調査結果に基づけば、調査資料の塗彩に使用された赤色系色材料は、赤色の泥岩またはチャート（以下、赤色チャートと呼ぶ）（赤沼 2002;2003;2006）²⁾の粉末と推定される。FTIR による分析の結果、使用された樹脂は漆の可能性が高いことが判明した。下地層は炭素を主成分とする炭粉下地である。塗膜断面組織結果をふまえると、調査資料は、少量の粘土状物質を含む炭粉層のうえに漆層、少量の粘土状物質を含む炭粉層、そして漆層を重ね下地としている。その上に漆に赤色チャートを混和した樹脂を塗布し、さらに漆層を少なくとも3層重ね、塗膜としている。青森県青森市三内丸山遺跡出土資料にみるように、本資料において使用が確認された赤色チャートは、縄文時代前期の赤色系塗彩資料において確認されているが、古代および中世の列島内出土漆器においては未確認である。今後、同時期に比定される資料の調査を行うことによって、アイヌ文化期における漆器に関する物質文化交流の様相がみえてくるにちがいない。

表1 調査資料に見出された鉱物相のEPMAによる定量分析結果

図	測定点	構成鉱物	化学組成(mass%)											合計	
			Na ₂ O	SiO ₂	CaO	TiO ₂	V ₂ O ₅	MgO	Al ₂ O ₃	P ₂ O ₅	K ₂ O	FeO	MnO		
	1c ₂	①	Qtz	0.02	98.4	0.01	<0.01	<0.01	0.03	0.24	0.03	0.02	0.72	0.05	99.52
	2d ₁	①	Pl	5.52	61.9	5.84	<0.01	<0.01	0.02	22.6	<0.01	0.43	0.66	<0.01	96.97

註

- 1) 厚真町教育委員会・奈良智法氏からのご教授による。
- 2) 赤色チャートの岩石・鉱物学的判定は、岩手大学教育学部・土谷信高博士による。なお、青森県今別町砂ヶ森赤根沢では赤鉄鉱を含む赤色チャートが産出され、津軽藩政時代には顔料として利用されていたことが知られている（見玉 2002）。

引用参考文献

- 赤沼英男 2002 「三内丸山遺跡における赤色塗彩材料の使用状況について」『特別史跡 三内丸山遺跡年報5』青森県教委、pp.36-41
- 赤沼英男 2003 「三内丸山遺跡における色材料の製作と使用に関する研究」『特別史跡 三内丸山遺跡年報6』青森県教委、pp.43-49
- 赤沼英男 2006 「出土資料の組成からみた三内丸山遺跡縄文時代中期における塗彩技術の流入と展開」『特別史跡 三内丸山遺跡年報9』青森県教委、pp.62-69
- 見玉大成 2002 「縄文時代におけるベンガラ生産の一様相—宇都遺跡出土赤鉄鉱の考古学的分析—」『青森県考古学第135号』青森県考古学会、pp.83-109
- Takeda, A., Akamune, H., Tsuchiya, N., 'Analysis of Admixtures Found in Ground Layers of Twelfth-Century Urushi WorksStudies', Studies in Conservation, 54(2009)197-217

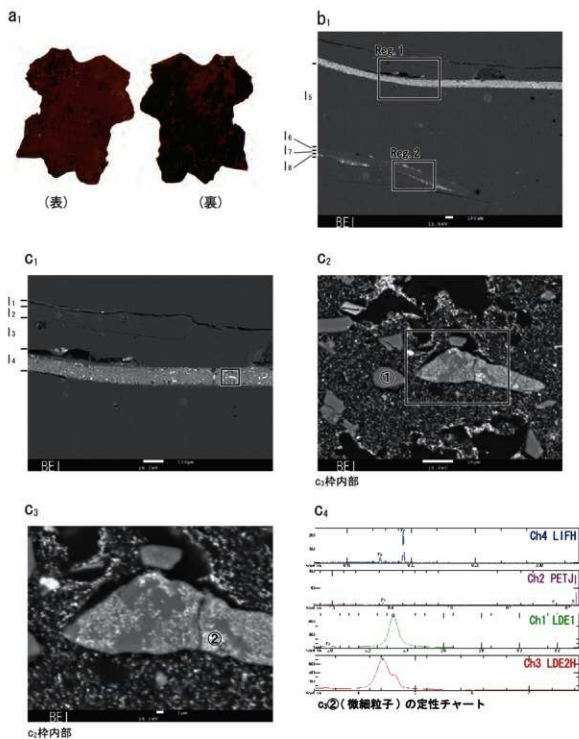


図1 調査資料の組織観察結果

a₁: 外観。b₁: 抽出した試料のマクロ組織。c₁₋₂: それぞれb₁領域(Reg. 1)内部、c₁枠内部のEPMAによる反射電子組成像 (BEI)。c₃₋₄: c₂枠内部の反射電子組成像と微細粒子(c₂②)の定性分析結果。

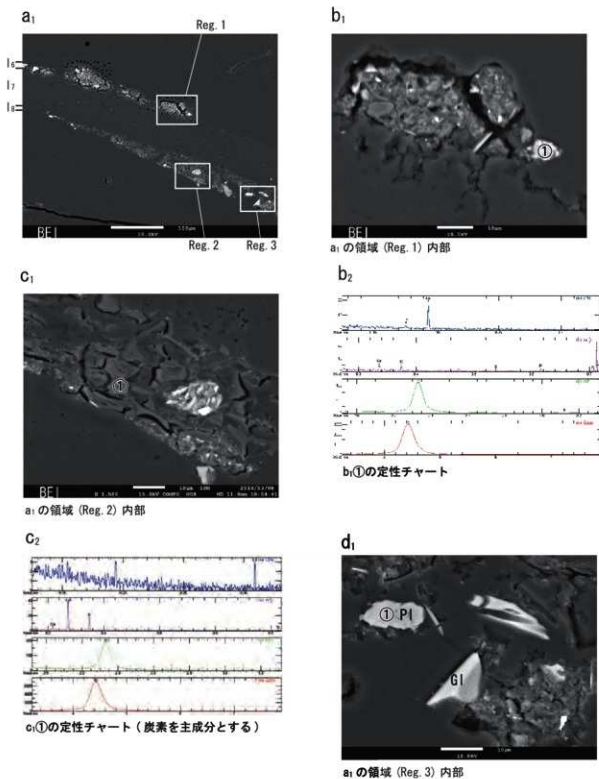


図2 調査資料の組織観察結果

a₁: 図1b,領域(Reg. 2)内部の反射電子組成像。b_{1,2}: a₁領域(Reg. 1)内部の反射電子組成像とb₁①の定性分析結果。c_{1,2}: a₁領域(Reg. 2)内部のEPMAによる反射電子組成像とc₁①の定性分析結果。d₁: a₁領域(Reg. 3)内部のEPMAによる反射電子組成像。GI=火山ガラス片、PI=斜長石。

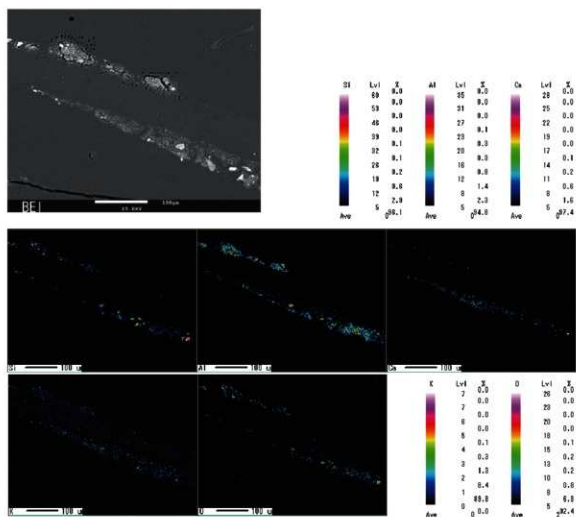


図3 抽出した試料に含まれる元素濃度分布のカラーマップ
測定箇所は図1b₁領域 (Reg. 2) 内部。

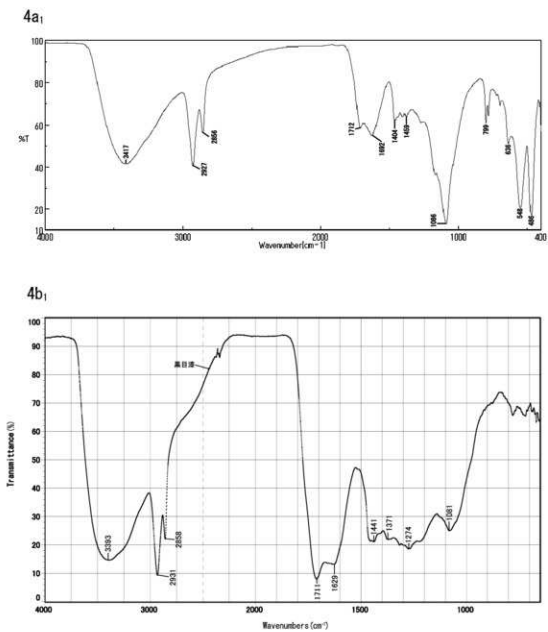


図4 抽出した資料のFTIR吸収スペクトル

第3節 富里2遺跡出土柱材の樹種同定

富里2遺跡出土木材の樹種

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

富里2遺跡では、アイヌ文化期の遺構が検出されている。このうち、住居跡ⅢH-01、ⅢHP-12では、柱材が生木の状態で残存している。今回の分析調査では、この柱材の樹種を明らかにするために樹種同定を実施する。

1. 試料

資料は、住居跡ⅢH-01、ⅢHP-12より出土した柱材1点である。

2. 分析方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を複製し、ガム・クロラル（抱水クロラル、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレバートを作製する。生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称と特徴は、島地・伊東(1982)やWheeler他(1998)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)を参考にする。

3. 結果

柱材は、落葉広葉樹のバラ科ナシ亜科に同定された。解剖学的特徴等を記す。

・バラ科ナシ亜科 (Rosaceae sibfam. Maloideae)

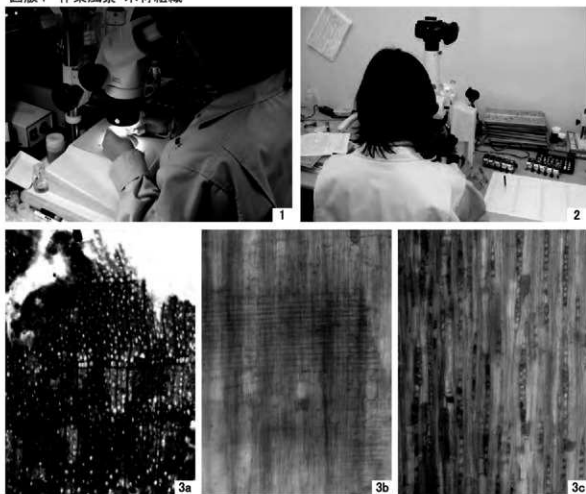
散孔材で、管壁は中庸～薄く、横断面では多角形、単独および2-5個が複合して散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-2細胞幅、1-20細胞高。

4. 考察

アイヌ文化期の住居跡から出土した杭は、広葉樹のバラ科ナシ亜科に同定された。ナシ亜科は、北海道ではナナカマド属等があり、木材は比較的重硬で強度が高い。ナナカマド属等、落葉広葉樹林内で普通に見られる樹木を含むことから、本遺跡周辺に生育していた樹木を利用したことが推定される。

なお、アイヌ文化期におけるナシ亜科の利用状況を見ると、ユカンボシC15遺跡で建築部材、丸木材、枝材(財団法人北海道埋蔵文化財センター, 1998, 2002)、美々8遺跡で、挟入付棒、魚突き鉤台部、回転式離頭鋸中柄・魚突鉤鋸台、袋式鉄斧柄片、斧柄状木製品、母屋、垂木、柱、横木、挟入付丸棒状材、横樋片、挟入部付有孔丸木材片、軸状製品等(財団法人北海道埋蔵文化財センター, 1991, 1992, 1993, 1996, 1997)の報告例が知られている。

図版1 作業風景・木材組織



1.切片作成

2.生物顕微鏡による樹種同定

3.バラ科ナシ亜科(ⅢKP-12;柱材) a:木口, b:柁目, c:板目

300 μ m:3a
200 μ m:3b,c

引用文献

- 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集, 京都大学木質科学研究所.
- 伊東 隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東 隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東 隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東 隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東 隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 島地 謙・伊東 隆夫, 1982, 図説木材組織, 地球社, 176p.
- Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩 (日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].
- (財)北海道埋蔵文化財センター, 1991, 美沢川流域の遺跡群 XIV 一新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書一, 北埋調報 69 集, 469p.
- (財)北海道埋蔵文化財センター, 1992, 美沢川流域の遺跡群 XV 一新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書一 第2分冊, 北埋調報 77 集, 377p.
- (財)北海道埋蔵文化財センター, 1993, 美沢川流域の遺跡群 XVI 一新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書一, 北埋調報 83 集, 264p.
- (財)北海道埋蔵文化財センター, 1996, 美沢川流域の遺跡群 XVIII 一新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書一, 北埋調報 102 集, 390p.
- (財)北海道埋蔵文化財センター, 1997, 美沢川流域の遺跡群 XX 新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 第1分冊(本文・挿図・表) 北埋調報 114 集, 745p.
- (財)北海道埋蔵文化財センター, 1998, 千歳市 ヌカンボシ C15 遺跡(1) 一北海道横断自動車道(千歳-夕張)埋蔵文化財発掘調査報告書一, 北埋調報 128 集, 500p.
- (財)北海道埋蔵文化財センター, 2002, 千歳市 ヌカンボシ C15 遺跡(5) 一北海道横断自動車道(千歳-夕張)埋蔵文化財発掘調査報告書一, 北埋調報 176 集, 391p.

第4節 厚真町幌内5遺跡・富里2遺跡他出土の石器石材同定

アースサイエンス株式会社 加藤 孝幸

肉眼鑑定結果

凡 例

[火成岩 他]

Da:デイサイト(石英安山岩) And:安山岩 Po:ひん岩 Gb:はんれい岩
Gbs:玄武岩(緑色岩化) Gdo:ドレライト(粗粒玄武岩, 緑色岩化) Ser:蛇紋岩

[火砕岩 他]

Pm:軽石 LpTf:火山礫凝灰岩 Tf:凝灰岩 Wtf:溶結凝灰岩

[堆積岩]

Sa:砂岩 Sh:頁岩 Di-Mud:珪藻質泥岩 Che:チャート Dsp:固結蛇紋岩質砕屑物
Aga:メノウ(化学的沈澱岩。晶洞に沈澱したので、周囲の母岩はあるが、置換した原岩はない。
透明感強い。)

[熱水変質岩]

Si I:珪化岩 I (“メノウ質頁岩”に相当。透明感強い。原岩を置換するが、詳細不明。)
Si II:珪化岩 II (透明感にやや乏しい。原岩を置換するが、詳細不明。または沈澱物であるが、
透明感に乏しい。) Ssh:珪質頁岩(原岩が泥質岩。)

[変成岩]

Amp:角閃岩 Qu-Sch:石英片岩 Bl-Sch:青色片岩 Gsh:緑色片岩(片理発達)
Gsh-ao:アオトラ型緑色岩(変成度は緑色片岩相だが片理発達せず。原岩は玄武岩質の粒子か
らなる凝灰質砂泥質岩)

[その他]

Ftr:木化石

[鉱物]

Qz:石英 Pl:斜長石 Ab:曹長石 Bi:黒雲母 Hb:普通角閃石 Am:角閃石 Chl:緑泥石
Ep:緑れん石

考 察

1. この肉眼鑑定は対象とした石材資料が任意に選ばれているため、総計処理にはなじまない。
2. 鑑定した資料のうち、以下のものに注目し、今後の課題としたい。
 - 1) 軽石 (Na85) は支笏火砕流などが起源という想像がつく。これをデータとして確定するためには、その火山ガラスの屈折率測定や、EPMA によってガラスの化学分析を行うことが望ましい。Na78 も同様の分析対象になる。
 - 2) 珪質頁岩については、最近化学分析から供給源の特定を目指す試みが始まっており(例えば森町教育委員会, 2006)、破壊または非破壊により、代表例数点の分析をしておきたい。このことは、供給源の大まかな推定へ向う可能性をつくることになる。

3. 今回の鑑定対象外の遺物について

1) 「蛇紋岩」製品

従来「蛇紋岩」とされてきた遺物は、最近大部分が蛇紋岩などを起源とはするが、蛇紋岩やはんれい岩類が熱水変質を受けて生成した「緑泥石岩」であることがわかってきた(岡村ほか 2003; 岡村ほか, 2008)。非破壊の蛍光X線分析により、このことを確かめる。

2) 土器

土器の胎土分析に関連して、薄片を作成して偏光顕微鏡観察を行う。タルク片を使用しているものがあるが、これを含めて、岩片・鉱物片の鑑定によって、土器の原料の供給源について、考察することができる。

引用文献

- 森町教育委員会 (2006) : 茅部郡森町埋蔵文化財調査報告書「鷲ノ木4遺跡」(分冊)「自然科学等による諸分析」。
- 岡村 聡・加藤孝幸・寺崎康史 (2003) : 今金町美利河1遺跡から出土した玉類の石質と起源。「北海道考古学会」, 39, 77-82。
- 岡村 聡・菅原いよ・加藤孝幸・加藤欣也・立田 理 (2008) : 根室市初田牛および常呂川河口遺跡から出土する玉類の石質と起源。北海道教育大学紀要, 59, 19-29。

石材同定結果一覧

表-1 境内5遺跡(1)

No.	探検番号	遺物番号	グリッド	遺構名	器種名	層位	岩石名記	岩石名	色調	特徴
1	Ⅱ-3-1	327	Y-30	-	石 鏝	Ⅱe	B-Sch.	青色片岩		
2	Ⅱ-4-7	5220	Y-17	VFCB-01	R F	Vbl.	SⅡ.	珪化岩Ⅱ		白色・灰・黒色部が結核構造をつくるが変形。
3	Ⅱ-4-5	12228	-	VFCB-01	石 鏝	V	Sch.	珪質頁岩	暗灰色	
4	Ⅱ-7-2	7717	W-26	V5B-01	砥 石	V5M	Sa.	砂岩		中粒。
5	Ⅱ-7-3	6333	W-26	V5B-01	砥 石	V5M	Sa.	砂岩		粗粒。
6	Ⅱ-7-4	7713	W-26	V5B-01	砥 石	V5M	Sa.	砂岩		中粒。
7	Ⅱ-8-6	7718	W-26	V5B-01	石 皿	V5M	Sa.	砂岩		粗粒。
8	Ⅱ-8-7	7721	W-26	V5B-01	石 皿	V5M	Sa.	砂岩		粗粒。
9	Ⅱ-8-8	7719	W-26	V5B-01	台 石	V5M	Sa.	砂岩		粗粒。黒色泥岩粒を散在。
10	Ⅱ-8-9	7716	W-26	V5B-01	台 石	V5M	Sa.	砂岩		中粒。
11	Ⅱ-13-9	6323	X-26	-	石 鏝	V5M	Agg.	メノウ		
12	Ⅱ-13-17	7208	W-17	-	石 鏝	Vc	Sch.	珪質頁岩	(準肥)灰色	
13	Ⅱ-13-23	9307	Y-17	-	石 鏝	Vbl.	SⅠ	珪化岩Ⅰ	白色	透明感あり。
14	Ⅱ-13-28	9017	W-16	-	石 鏝	Vbl.	Sch.	珪質頁岩	灰色	
15	Ⅱ-13-29	6386	Y-27	-	石 鏝	V5M	Sch.	珪質頁岩	黒色	黒灰色部が少量。
16	Ⅱ-13-30	8397	Z-27	-	石 鏝	V5M	Sch.	珪質頁岩	黒灰色	
17	Ⅱ-13-33	1423	W-26	-	石 鏝	Vbl.	Sch.	珪質頁岩	黒灰色	
18	Ⅱ-13-36	2032	Y-27	-	石 鏝	Vbl.	Agg.	メノウ		ない。珪化岩Ⅰ。
19	Ⅱ-13-37	1741	Y-28	-	石 鏝	Vbl.	Sch.	珪質頁岩	灰色	
20	Ⅱ-13-40	67	Y-27	-	石 鏝	Vbl.	Sch.	珪質頁岩	暗灰色	
21	Ⅱ-13-43	905	W-17	-	つばみ付きナイフ	Vc	Sch.	珪質頁岩	灰色	
22	Ⅱ-13-46	9529	X-17	-	つばみ付きナイフ	Vc	Sch.	珪質頁岩	灰色	
23	Ⅱ-13-47	3978	Y-27	-	つばみ付きナイフ	V5M	Sch.	珪質頁岩	準肥灰色	メノウのブールあり。
24	Ⅱ-13-48	6755	X-18	-	つばみ付きナイフ	Vc	Sch.	珪質頁岩	黒色	
25	Ⅱ-14-30	392	W-27	-	つばみ付きナイフ	Vbl.	Sch.	珪質頁岩	灰色	
26	Ⅱ-14-51	12100	Z-28	-	つばみ付きナイフ	Vc	SⅡ.	珪化岩Ⅱ	黒色/白色	
27	Ⅱ-14-55	3309	Y-28	-	つばみ付きナイフ	Vbl.	Sch.	珪質頁岩	暗灰色	
28	Ⅱ-14-56	6168	W-27	-	つばみ付きナイフ	V5M	Agg.	メノウ		
29	Ⅱ-14-57	6993	Y-18	-	つばみ付きナイフ	Vbl.	SⅠ.	珪化岩Ⅰ	灰白色	
30	Ⅱ-14-60	2027	W-26	-	つばみ付きナイフ	V5M	Sch.	珪質頁岩	黒色	
31	Ⅱ-14-61	529	W-17	-	つばみ付きナイフ	Vbl.	Dn-Mud.	珪藻質泥岩	灰白色	
32	Ⅱ-14-62	6984	Z-18	-	つばみ付きナイフ	Vc	SⅠ.	珪化岩Ⅰ	赤褐色	透明感大。
33	Ⅱ-14-67	7151	W-17	-	スクレイパー	Vc	Sch.	珪質頁岩	準肥暗灰色 (チャコール灰色)	
34	Ⅱ-14-70	9703	X-16	-	スクレイパー	Vbl.	lgTt.	火山礫凝灰岩	白色	流紋岩質か?
35	Ⅱ-15-72	7372	Z-19	-	スクレイパー	V	Agg.	メノウ	白色	塊状。珪化した凝灰岩の母岩付き。
36	Ⅱ-15-74	5081	X-17	-	スクレイパー	Vbl.	SⅠ.	珪化岩Ⅰ	準肥灰	透明。
37	Ⅱ-15-75	6321	X-26	-	スクレイパー	V5M	Agg.	メノウ		
38	Ⅱ-15-77	2001	Z-28	-	スクレイパー	Vbl.	SⅡ.	珪化岩Ⅱ	白色	不透明。
39	Ⅱ-15-78	5076	Y-27	-	スクレイパー	Vbl.	SⅠ.	珪化岩Ⅰ	白色	透明感やや少。
40	Ⅱ-15-79	8316	Z-28	-	スクレイパー	Vc	SⅡ.	珪化岩Ⅱ	白色	黄鉄鉱が立つ。黄鉄鉱化した泥片が散在。
41	Ⅱ-15-80	2286	X-19	-	スクレイパー	Vbl.	SⅡ.	珪化岩Ⅱ	白色/白色(不透明)の塊状。泥岩物だが、これに含めた。	
42	Ⅱ-15-83	7217	W-18	-	スクレイパー	Vc	Agg.	メノウ	準肥灰色	
43	Ⅱ-15-86	6366	X-27	-	スクレイパー	V5M	Sch.	珪質頁岩	準肥暗灰色 (チャコール灰色)	
44	Ⅱ-15-87	3376	W-26	-	スクレイパー	V5M	Agg./SⅡ.	メノウ/珪化岩Ⅱ		メノウの部分は珪化岩Ⅱ(準肥色)中の細粒mmの径。
45	Ⅱ-15-90	3885	X-27	-	スクレイパー	Vbl.	Sch.	珪質頁岩	暗灰色	
46	Ⅱ-15-93	5018	Z-27	-	スクレイパー	V5M	Sch.	珪質頁岩	暗灰色	
47	Ⅱ-16-95	9156	Y-17	-	石 鏝	Vbl.	Agg.	メノウ	白色	透明。結核構造には乏しい。
48	Ⅱ-16-96	1839	Y-29	-	石 鏝	Vbl.	SⅡ./Agg.	珪化岩Ⅱ/メノウ		白色・緑色・赤色が入り混じる塊状珪化岩片散在。 局所的に塊状の化礫構造あり。SⅡの母岩は既 知な凝灰岩?
49	Ⅱ-16-97	9800	X-16	-	R F	Vc	Agg.	メノウ	白色	
50	Ⅱ-17-1	6300	Y-17	-	石 鏝	Vc	Gab.	緑色片岩	緑灰色	
51	Ⅱ-17-2	6354	W-26	-	石 鏝	Vc	Gabran.	アオトウ型緑色岩		
52	Ⅱ-17-3	11285	Z-18	-	石 鏝	Vc	Gabran.	アオトウ型緑色岩		
53	Ⅱ-17-4	7092	X-17	-	石 鏝	Vc	Gab.	緑色片岩	緑灰色	微結晶発達。
54	Ⅱ-17-5	6333	W-26	-	石 鏝	Vc	Gabran.	アオトウ型緑色岩		

表-II 標内5遺跡(2)

No.	探検番号	遺物番号	グロッド	遺構名	器種名	層位	岩石名記号	岩石名	色調	特徴
35	III-17-8	8391	Y-17	-	石 弁	Va	Gbr.s.	アオトウ型緑色岩		
56	III-17-9	7564	X-18	-	石 弁	Vc	Gbr.s.	アオトウ型緑色岩		細砂サイズ。
57	III-17-11	1139	X-28	-	石 弁	Vbl	Gbr.s.	アオトウ型緑色岩		
58	III-17-13	5481	Z-18	-	石 弁	Vbl	Gbr.s.	アオトウ型緑色岩		中砂サイズ, Ch+Ep.
59	III-17-4	11335	Y-15	-	石 弁	Vbl	Gbr.s.	アオトウ型緑色岩		
60	III-17-16	9679, 3199	Z-18	-	石 斧頭材	Vc	Gdo.	ドレライ石(緑色岩化)	緑灰色	
61	III-17-17	9157	Y-17	-	石 斧頭材	Vbl	Gbr.s.	青トウ型緑色岩		細砂/シルト互層, Ch+Ep.
62	-	4267	W-17	-	たたき石	Vbl.	Pa.	ひん岩	緑色に変質	
63	-	9487	Z-17	-	ヤウ石	Vbl.	Gb.	はねいれ岩	緑灰色化、輝石がアタクチ閃石化している。	
64	-	2696	Z-27	-	鏡	Vbl.	Chs.	チャート	赤色	
65	-	2737	Y-28	-	鏡	Vbl.	Chs.	チャート	赤色	
66	-	7272	W-18	-	鏡	Vc	Dsp.	鏡面粒状岩質岩質		固結した粒状岩地帯への堆積物の可能性が高い。
67	-	7746	Z-27	-	鏡	Vbl	Da.	ダイヤ石		Pt, Qz, Bx. 石基は緑灰色に変質。
68	-	9129	W-17	-	鏡	Vc	Pir.	木化石	黒色	炭化-炭化。
69	-	11737	Y-15	-	鏡	Vc	Dsp.	鏡面粒状岩質岩質		固結した粒状岩地帯への堆積物の可能性が高い。

表-III 富里2遺跡

No.	探検番号	遺物番号	グロッド	遺構名	器種名	層位	岩石名記号	岩石名	色調	特徴
70	II-14	947	I-21	III-01	鏡	IIIbl.	Asp.	角閃岩		緑色角閃石なし。アタクチ閃石化。ボロシロフェイオライト帯山梨の可能性。
71	II-12-22	7428	G-19	III-02	清灰面ある鏡	IIIbl.	Da.	ダイヤ石		
72	II-12-23	7928	H-19	III-02	清灰面ある鏡	IIIbl.	Da.	ダイヤ石		
73	II-12-24	7266	H-19	III-02	加工面ある鏡	IIIbl.	Qz-Sch.	石英片岩		
74	-	934	J-21	III-01	加工面ある鏡	IIIbl.	Agp.	メノウ		
75	-	957	J-21	III-01	鏡	IIIbl.	Asp.	角閃岩		角閃石は黒光り。
76	II-12-25	732	H-19	III-02	鏡	IIIbl.	Ser.	蛇紋岩		風化作用により赤酸化(コロンゲイナリ)
77	II-12-26	733	H-19	III-02	鏡	IIIbl.	Qz-Sch.	石英片岩	赤色/白色	赤酸化-石英片岩, チャート紋層。
78	III-9-10	1321	H-19	-	砥石	IIIc	Wf.	扇形粒状岩	灰白色	塊状, Qz, Kmgと互層, 流紋状。
79	IV-4-4	1565	H-19	-	石 楯	Vbl.	Agp.	メノウ		
80	IV-4-6	2028	AK-27	-	石 弁	Vbl.	Gbr.s.	アオトウ型緑色岩	緑色	砂質。緑色片岩相の鉱物を含むが、変形が少ない。
81	IV-4-7	2079	J-22	-	石 弁	Vbl.	Gbr.s.	アオトウ型緑色岩	緑色	砂質互層。緑色片岩相の鉱物を含むが、変形が少ない。
82	IV-4-8	1236	I-21	-	石 弁	IIIbl.	Pr-Sch.	青色片岩		細粒均質で片理発達。
83	IV-4-10	1732	K-23	-	たたき石	Vbl.	Sa.	砂岩		中粒。
84	IV-5-18	1962	M-24	-	ヤウ石	Vbl.	Sa.	砂岩		石英-長石を多量に含む粗粒砂岩。

表-IV ニタツナイ遺跡

No.	探検番号	遺物番号	グロッド	遺構名	器種名	層位	岩石名記号	岩石名	色調	特徴
85	II-3-1	4508	AI-60	III-08	鏡	IIIal.	Pa.	輝石		直径10cm. 繊維状ガラス, QzおよびHblの長柱状結晶を含む。
86	IV-3-1	4620	-	-	石 楯	V	Sch.	柱状頁岩	暗灰色	
87	IV-3-2	4624	-	-	石 楯	V	Sch.	柱状頁岩	暗灰色	
88	IV-3-4	4626	-	-	石 楯	V	Sl.B.	柱状岩II		透明感に乏しい。磨面はあるが不明。
89	IV-3-6	4646	-	-	石 楯	V	Sch.	柱状頁岩	灰色	透明感に乏しい。
90	IV-3-7	4670	-	-	石 楯	V	Sch.	柱状頁岩	暗灰色	
91	IV-3-9	46293	-	-	つばみ付きナイフ	V	Sch.	柱状頁岩		黒色/灰白色風化部。
92	IV-3-10	46066	-	-	つばみ付きナイフ	V	Sch.	柱状頁岩	黒色	
93	IV-3-11	46292	-	-	つばみ付きナイフ	V	Sch.	柱状頁岩	灰色	
94	IV-3-14	46250	-	-	スタレイバー	V	Sch.	柱状頁岩	灰色	
95	IV-3-15	46252	-	-	スタレイバー	V	Sl.B.	柱状岩II	灰白色	透明感に乏しい。
96	IV-4-1	46377	-	-	石 弁	V	Pr-Sch.	青色片岩		Chl+An+Ep+Ab.
97	IV-4-2	46397	-	-	石 弁	V	Sa.	頁岩	暗灰色	
98	IV-4-14	46384	-	-	たたき石	V	Sa.	砂岩		非変形の中粒砂岩。
99	IV-4-15	45480	AK-38	-	たたき石	Vc	Tl.	輝石岩		帯緑灰色に色変質。メノウアールあり。
100	IV-5-19	46466	-	-	たたき石	V	Gbr.	玄武岩(緑色岩化)		

第II章 動植物遺存体同定

第1節 北海道勇払郡厚真町厚幌導水路建設事業調査遺跡出土の動物遺存体

1. 北海道勇払郡厚真町幌内5遺跡出土の動物

高橋 理 / 千歳市埋蔵文化財センター

遺跡の概要

遺跡名：厚真町幌内5遺跡（ほろない5いせき）

調査原因：国営土地改良事業勇払東部（2期）地区厚幌導水路建設

調査主体：厚真町教育委員会

調査担当者：奈良智法 乾 哲也

調査期間：平成21年5月14日～7月16日

調査面積：1,554㎡（工事立会700㎡）

主な時代：縄文時代前期前葉

出土動物

幌内5遺跡出土動物はすべてシカであった。表1に出土動物を示した。

哺乳綱 Mammalia

クジラ偶蹄目 Cetartiodactyla

シカ科 Cervidae

ニホンジカ *Cervus nippon*

所見

Y-30区およびZ-31区のIIIa層よりシカのみが回収されている。ハンドピック作業による。

角は落角（春季）で、角坐から角幹の長さ390mmが残っている。角幹は全周せず半裁された可能性はあるが、その痕跡は明確にできない。第二・三足根骨、中心第四足根骨（？）が関節した中足骨近位端があることから、素材として底側を分離する作業が行われなかった可能性がある。他の中足骨が背側のみであること、上腕骨に動物の咬痕らしき痕跡があることより、これらは人為によらない散布のあり方を示すのかもしれない。

なお、下顎骨は臼歯摩耗状態より、3～4歳の個体であったと推定される。

分析の機会を与えられた厚真町教育委員会各位に心より御礼申し上げます。

表1 幌内5遺跡 包含層出土動物遺存体ハンドピック資料同定一覧表

調査区	層位	種別	出土動物	数量	注目	
Y-30	IIIa	1	シカ	7箇所 第二小臼歯～第三小臼歯および下顎骨	L	
		2	シカ	上腕骨 遠位端内側	L	8.1.31.1.3.知4.知5・・・3歳から4歳
		3	シカ	中足骨 近位骨端	L	他1点不明
		4	シカ	中足骨?第二・三足根骨、中心第四足根骨? 近位端	L?	
		5	哺乳綱	種別不明 歯片		
		6	シカ	上顎骨 歯冠一部	L	
Z-31	IIIa	7	シカ	角(落角) 角幹から角坐	♀	落角・・・春季(4-5月)

2. 北海道勇払郡厚真町富里2遺跡出土の動物

高橋 理/千歳市埋蔵文化財センター

遺跡の概要

遺跡名:厚真町富里2遺跡(とみさと2いせき)

調査原因:国営土地改良事業勇払東部(2期)地区厚幌導水路建設

調査主体:厚真町教育委員会

調査担当者:奈良智法 乾 哲也

調査期間:平成21年7月17日~10月30日

調査面積:770 m²

遺構:アイヌ文化期:平地式住居跡1軒・建物跡2軒・炉跡(ⅢF)1ヶ所・灰集中(ⅢAS)

4ヶ所・礫集中(ⅢSB)3ヶ所・獣骨集中(ⅢBB)3ヶ所

アイヌ~擦文文化期:区画遺構(溝跡1条・溝状遺構1条)

擦文文化期:焼土(ⅢF)9ヶ所・土器集中(ⅢPB)2ヶ所・

礫集中(ⅢSB)1ヶ所

統縄文時代:土坑1基・焼土1ヶ所

縄文時代:Tピット1基

主な時代:近世アイヌ文化期・擦文文化期・統縄文時代・縄文時代晩期・後期

はじめに

富里2遺跡は厚真川中流域の富里地区に所在し、厚真川左岸の標高約33mの河岸段丘上に立地している。段丘は厚真川に沿って張り出す。調査区は段丘縁辺を幅3.2m、総延長160mと細長く巡る。平成19年に調査が行われたニタツナイ遺跡に近い。

分析の機会を与えられた厚真町教育委員会各位に心より御礼申し上げます。

出土動物

富里2遺跡出土の哺乳類のすべてがシカであった。また、ウバガイ(イガイ?)、ホタテガイ(?), エゾタマキガイなどの貝類、魚類ではニシン科(?), サケ科・サケ属、コイ科ウグイ属、両生類カエル目の1種が認められた。表2~6に地点別の出土動物を示した。それらは次のように分類、整理される。

二枚貝綱 Pelecypoda

カキ目 Osteoidea

イタヤガイ科 Pectinidae

ホタテガイ *Patinopecten yessoensis* (?)

タマキガイ科 Glycymeridae

エゾタマキガイ *Glycymeridae yessoensis*

マルスダレガイ目 Veneroidea

バカガイ科 Mactridae

ウバガイ *Pseudocardium sachalinensis* (?)

条鰭綱 Actinopterygii

ニシン目 Clupeiformes

ニシン科 Clupeidae (?)

サケ目 Salmoniformes

サケ科 Salmonidae

サケ属 *Oncorhynchus*

コイ目 Cypriniformes

コイ科 Cyprinidae

ウグイ属 *Tribolodon*

両生綱 Amphibia

カエル目 Salientia

哺乳綱 Mammalia

クジラ偶蹄目 Cetartiodactyla

シカ科 Cervidae

ニホンジカ *Cervus nippon*

考察

回収された動物骨は、フローテーション法およびハンドピック作業による4綱7目であった。

貝類はすべて二枚貝の仲間で、いずれも熱を受けて灰白色化が進んでいた。タマキガイ科の1種はエゾタマキガイである可能性があり、かつ貝製品ではなかったかと推定される。

サケ科・サケ属は比較的多く認められた。鯉が回収されていることから頭胸部を含む全身が遺跡内に持ち込まれ、解体加工されていたらしい。

哺乳類はすべてシカであったが、角坐がある資料がすべて落角である点が町内他の遺跡と比較して特徴的である。また、その落角から素材を獲得する加工痕跡があることから、春季の角落ちからほどなく獲得（回収）されたことがわかる。また、上顎歯や頭蓋骨が皆無であったことより、遺跡内にはシカの頭蓋は持ち込まれることはなかったらしい。このことは、頭蓋が遺跡の他所においてまとめられ、送られていた可能性を強く指示すると考える。

一方で30点もの下顎骨は非常に対照的である。これは頭蓋から早い段階で分離されていたことを示し、したがって送りの対象は下顎骨を除く頭蓋に限られていたと推察される。身近のニタツプナイ遺跡におけるシカ頭蓋骨集積のあり方と富里2遺跡は矛盾するものではない。

下顎骨の萌出、後臼歯摩耗状態からは、3歳から4歳の個体が多めで、2歳未満や6ヶ月ほどのごく若い個体も多少みられる。8歳以上はごく少ない。四肢骨は扁平変形や風化が著しく、良好な保存が保たれていた例は多くないが、肩甲骨、上腕骨や橈骨などで骨端が未癒合の例は見られず、歯による年齢推定とは親和的である（大泰司 1980, Purdue 1983, Carden and Hayden 2002, 高橋 2009）。

(註1)

なお、富里2遺跡においてヒグマ骨は検出されなかったことを付記しておく。

(註2)

シカの歯の摩耗状態と年齢との相関関係は歯の諸条件や個体の咀嚼動、索餌量などにより当然変動する。また、骨端の癒合年齢はニホンジカを基礎研究としたものではないことから、これらはあくまで相対的指標の一つと認識された。

表2 富里2遺跡 遺構出土動物遺存体ハンドブック資料同定一覧表

遺構番号	種別	%	出土動物	部 位	1対	備 考	遺構番号	種別	%	出土動物	部 位	1対	備 考
近鉄アース文化層 教育集字4 富里04	富里	454	シカ	2頭骨？ 骨節破片	♀		近鉄アース文化層 教育集字5 富里03	富里	263	シカ	中手・中足骨 遠位骨節	♀	
		455	シカ	椎骨 第三腰椎	♀				265	シカ	椎骨 第四腰椎	♀	
		456	シカ	尺骨 肘部付突起中心 排車跡上部	♀				267	シカ	中手・中足骨 遠位骨節破片	♀	
		457	シカ	椎骨 中腰骨	♀	%437-459同一個体			373	シカ	肋骨	♀	中々大型
		458	シカ	椎骨 末腰骨	♀				376	シカ	下顎骨 第三臼歯、第一～三臼歯骨及び歯槽一部	♀	W.M2-5, M3-7 ***2歳1ヶ月心臓6ヶ月 %6.79同一個体
		459	シカ	椎骨 末腰骨	♀				379	シカ	下顎骨 第二・三臼歯、第一～三臼歯骨及び歯槽一部	♀	W.M1-5, M2-5, M3-7 ***2歳1ヶ月以上
		460	哺乳類	部位不明 破片	♀				382	シカ	下顎骨 第一～二臼歯臼歯 および歯槽	♀	W.M2-5, M3-5, ...2歳6ヶ月 心臓心臓6ヶ月以上
		142	シカ	角？ 角節破片	♀				383	シカ	下顎臼歯？ 第二？後臼歯？	♀	
		145	シカ	肩甲骨 腕節部～肩甲節	♀	肩甲後面の表面に深い 陥凹・カマト1色			388	シカ	肋骨 骨体前部	♀	観察済し
		154	シカ	肋骨 骨体下部	♀	観察・褐色化			392	シカ	下顎骨 第二？三臼歯臼歯 および歯槽	♀	W.M2-5, M3-5, ... 2歳6ヶ月心臓6ヶ月
157	シカ	肋骨 骨体下部欠く	♀		398	シカ	下顎骨 PM2(第一～M3) および臼歯	♀	W.M1-4, M2-5, M3-6, ... 2歳6ヶ月以上				
184	シカ	椎骨 近位骨節後面	♀	非常に大型 椎骨後面保 護蓋し 椎1点不明	398	シカ	肋骨 骨体前部	♀	観察済し				
190	シカ	中手骨 近位骨節骨節	♀		398	シカ	中手・中足骨、脛骨？	♀	観察済し(詳細不明)				
191	シカ	椎骨 13椎宛	♀	扁平変形 観察開始の骨 節不明	398	シカ	下顎骨 PM2(第一～M3) および臼歯	♀	W.M1-4, M2-5, M3-6, ... 2歳6ヶ月以上				
193	シカ	肩甲骨 腕節部～肩峰高部	♀	肩甲後面前面部に深い カマト1色(数本の集合)	398	シカ	肩甲骨？ 肩甲節～骨体	♀	中々小型				
194	シカ	椎骨 第三腰椎～第四腰椎	♀	大型	近鉄アース文化層 教育集字5 富里03								
144-147-152-155-160-169	哺乳類	部位不明 破片	♀		364-387-390-391-393	哺乳類	長管骨 不明	♀					
140	哺乳類	長管骨？ 不明破片	♀		384	哺乳類	長管骨？ 不明	♀					
140-143	哺乳類	長管骨？ 不明破片	♀		385	哺乳類	長管骨？ 不明	♀					
141-143-150-163-165-166-169-170-171-172-180-187-192-192	哺乳類	部位不明 破片	♀		389	哺乳類	長管骨？ 不明	♀					
	哺乳類	部位不明 破片	♀		392	哺乳類	部位不明	♀					
174	哺乳類	部位不明 破片	♀		391	哺乳類	部位不明 破片	♀					
181	哺乳類	部位不明 破片	♀		374-377-380-381-388	哺乳類	部位不明 破片	♀					
181-188-170-185-185-194	哺乳類	部位不明 破片	♀		374	哺乳類	部位不明 破片	♀					
	不明	部位不明	♀		390-368-370	不明	遠位骨節・骨片により取上げ不可	♀					
143-148-149-156-159-161-164-167-171-173-175-176-178-180-182-183-189-190	不明	遠位骨節・骨片により取上げ不可	♀		近鉄アース文化層 教育集字5 富里03								
	不明	遠位骨節・骨片により取上げ不可	♀	W.M3-6...2歳前後	496	哺乳類	部位不明 破片	♀	観察済褐色化				
189	シカ	臼歯 第二・三臼歯	♀		497	シカ	椎骨？ 肋骨骨？ 遠位骨？	♀	褐色化				
200	シカ	椎骨 近位骨節内側	♀	2点観察状態で出土	500	哺乳類	部位不明 破片	♀					
201	シカ	尺骨 尺骨 尺骨 尺骨	♀	非常に大型 椎骨骨節切斷後	近鉄アース文化層 教育集字5 富里03								
202	シカ	椎骨 近位骨節内側	♀	2点観察状態で出土									
203	シカ	尺骨 尺骨 尺骨 尺骨	♀	非常に大型 椎骨骨節切斷後									
209	シカ	肋骨 外側面多少欠く(臼歯付)	♀	小骨									
214	シカ	中足骨 骨節破片	♀	観察開始前									
216	シカ	尺骨 尺骨 尺骨 尺骨	♀	非常に大型 椎骨骨節切斷後									
217	シカ	尺骨 尺骨 尺骨 尺骨	♀	非常に大型 椎骨骨節切斷後									
218	シカ	椎骨 近位骨節	♀	観察開始前									
219	シカ	肩甲骨 腕節部～肩甲節	♀	非常に大型 椎骨骨節切斷後									
220	シカ	尺骨 尺骨 尺骨 尺骨	♀	非常に大型 椎骨骨節切斷後									
225	シカ	肩甲骨 腕節部～骨体中位	♀	大型									
229	シカ	椎骨 近位内側	♀	近位骨節切斷？ 骨節切斷 後あり(カマト1色)									
230	シカ	椎骨 遠位端	♀	大型 観察開始前不明									
236	シカ	椎骨 遠位端	♀	扁平変形									
233	哺乳類	長管骨 不明破片	♀	扁平変形									
282	哺乳類	長管骨 不明破片	♀										
232	哺乳類	長管骨 不明破片	♀										
208	哺乳類	部位不明	♀	中々大型・カマト1色									
211-212-221-222-224-227-228-231	哺乳類	部位不明 破片	♀										
213	哺乳類	部位不明 破片	♀										
213	不明	部位不明 破片	♀										
203-205-207-216-223-228	不明	遠位骨節・骨片により取上げ不可	♀										

表3 富里2遺跡 包含層出土動物遺存体ハンドピック資料同定一覧表(1)

調査区	層位	背%	出土動物	部位	LR	備考	調査区	層位	背%	出土動物	部位	LR	備考			
F-18	Bss	1	シカ	下顎骨 PM1-M3および骨体断片	R	WJ.M1.4.M2.5.M3.6 +++2歳6ヶ月ほど	1-30	Bss	424	シカ	脛骨 脛骨近位部より上肢骨断片	L	Nu.411同一個体?			
		2	シカ	下顎骨 PM3-M3および骨体断片	R	WJ.M1.4.M2.5.M3.6 +++2歳6ヶ月ほど			430	シカ	脛骨 脛骨近位部	L	430			
		3	シカ	下顎骨 PM2-M3および骨体断片	R	WJ.M1.2.M2.2.M3.3 +++4歳6ヶ月以上			438	シカ	脛骨 脛骨近位部	L	438			
	C-17	Bss	453	シカ	中足骨 骨節骨断片	?	端→ニゾウ切断面	10-11	Bss	39-41	39-43	434	シカ	脛骨 脛骨近位部	L	434
			349-350	哺乳類	部位不明 破片	?				42-43	不明	遺存状態不良に上肢骨上げ不可				
			4-18	不明	遺存状態不良に上肢骨上げ不可					80	シカ	中足骨 骨節(近位?)	?	骨節(骨節1と骨2)		
			506	シカ	上顎骨 遠位部	R	頰化(遠位?)			92	シカ	中足骨 骨節(近位?)	?	骨節(骨節1と骨2)		
			507	シカ	脛骨 骨節(脛骨近位?)	R	大形 前縁合欠片(脛骨)脛骨断片不連続			93	シカ	脛骨 脛骨外側縁欠片	R	Du.24.9		
			508	シカ	前骨 臼歯(臼歯)	R	D3			94	シカ	脛骨 第一跗骨(一部)・第二跗骨(一部)	L	第三跗骨は前跗骨突起→腕状突起部		
			809	シカ	脛骨 第一跗骨	R	D4 変形する4歳ほど			97	シカ	上肢骨 骨節(骨節1)	L	腕状突起部		
510	シカ	中足骨 近位部	L	端部切断面あり	98	シカ	前骨 脛骨近位部欠片(脛骨)	R								
519	シカ	脛→五趾骨 基節骨(近位)	L		100	シカ	下顎骨 M1-M3および骨体断片	R	WJ.M1.3.M2.3.M3.5 +++3歳6ヶ月前後							
G-19	Bss	511	哺乳類	長骨骨(脛骨?) 脛骨一部?	?		102	シカ	下顎骨 M1-M3および骨体断片	L	WJ.M1.3.M2.3.M3.5 +++3歳6ヶ月前後					
		352	シカ	下顎骨 M1-M3および骨体断片	R	WJ.M1.3.M2.3.M3.5 +++3歳6ヶ月前後	103	シカ	下顎骨 M1および骨体断片	L	WJ.M1.3.M2.3.M3.5 +++3歳6ヶ月前後					
		353	哺乳類	部位不明 破片	?		104	シカ	脛骨 脛骨近位部	L	104					
		354	不明	遺存状態不良に上肢骨上げ不可			105	シカ	脛骨 脛骨近位部	L	105					
		8	シカ	脛骨 脛骨近位部	R	脛骨に切断面あり	106	シカ	中足骨	L	大形					
		6	シカ	下顎骨 PM3-M3および骨体断片	R	WJ.M1.4.M2.5.M3.6 +++2歳6ヶ月前後	107	シカ	脛骨 PM1(PM1?)-M3および骨体断片	R	脛骨(大形)					
		8	シカ	下顎骨 PM2-M3および骨体断片	R	WJ.M1.4.M2.5.M3.6 +++2歳6ヶ月ほど	108	シカ	脛骨 脛骨近位部	L	WJ.M1.4.M2.6-3歳6ヶ月前後					
		9	シカ	大腸骨 遠位骨断片	L		109	シカ	中足骨? 骨節(脛骨近位?)	L	脛骨(大形)					
		9	シカ	下顎骨 PM2-M3および骨体断片	R	WJ.M1.3.M2.3.M3.5 +++5歳6ヶ月以上	110	シカ	下顎骨 前臼歯-臼歯および下顎骨一部	R						
		G-19	Bss	10	シカ	下顎骨 PM1-M3および骨体断片	R	WJ.M1.2.M2.2.M3.3 +++4歳6ヶ月以上 保存状況が不明Ca&P-同一個体か?	234	シカ	脛骨 近位部	L	大形 脛骨(大形)			
12	シカ			下顎骨 M2.M3および骨体断片	L	WJ.M3.6-3歳前後	238	シカ	脛骨 近位部	L	大形 脛骨(大形)					
13	シカ			下顎骨 PM2-M3および骨体断片	R	WJ.M2.5.M3.7-2歳11ヶ月ほど	236	シカ	前骨 脛骨近位部全欠片	L						
14	シカ			下顎骨 M1.M2.M3および骨体断片	R	WJ.M1.3.M2.3.M3.5 +++3歳6ヶ月前後	248	シカ	中足骨 骨節(脛骨)	L	109					
16	シカ			脛骨 近位骨節	L		248	シカ	中足骨 近位部(中足)	L	近位部(中足)の骨節					
21	シカ			中足骨 近位部(脛骨)	L		257	シカ	脛骨 脛骨近位部	L	109					
26	シカ			脛骨 脛骨近位部	L		257	シカ	脛骨 脛骨近位部	L	109					
29	シカ			角 中央-第一尖、角節下部	R	角節(4-5月) 角化なし(角節)角節(4-5月) 角化なし(角節)に切断面多数あり、採集した箇所から素材確保	268	シカ	脛骨 脛骨近位部	L						
35	シカ			下顎骨 M1.7.M2.1.M3.2および骨体断片	R	WJ.M3.5-5歳6ヶ月前後	361	シカ	脛骨 脛骨近位部	L	近位部(脛骨)の骨節					
C-20	Bss			19-20	哺乳類	脛骨骨 骨節	?		368	シカ	脛骨 脛骨近位部	L	脛骨(大形)			
		22	哺乳類	長骨骨(脛骨?) 脛骨一部?	?		369	シカ	脛骨 脛骨近位部	L	脛骨(大形)					
		718-744	147-304-356	哺乳類	部位不明 破片	?		370	シカ	脛骨 脛骨近位部	L	脛骨(大形)				
		25	不明	部位不明 破片	?	?	371	シカ	脛骨 脛骨近位部	L	脛骨(大形)					
		19-23	24-28	不明	部位不明 破片	?		372	シカ	脛骨 脛骨近位部	L	脛骨(大形)				
		11-17	358	不明	遺存状態不良に上肢骨上げ不可			373	シカ	大腸骨 脛骨近位部(脛骨)脛骨断片	R	腕状突起部				
		27	シカ	下顎骨 臼歯および骨体断片	R	破片(遠位?)	376	シカ	脛骨	R	近位部(脛骨)脛骨断片					
		480	シカ	下顎骨 p1,p2,p3(PM)破片(成体)M1,M2,M3(前歯遠位)および骨体断片	R	成体(中足) g5底下にPM3破片(成体)M2,成体(前歯)M1,成体(前歯)M2,成体(前歯)M3,成体(前歯)M4,成体(前歯)M5,成体(前歯)M6,成体(前歯)M7,成体(前歯)M8,成体(前歯)M9,成体(前歯)M10,成体(前歯)M11,成体(前歯)M12,成体(前歯)M13,成体(前歯)M14,成体(前歯)M15,成体(前歯)M16,成体(前歯)M17,成体(前歯)M18,成体(前歯)M19,成体(前歯)M20,成体(前歯)M21,成体(前歯)M22,成体(前歯)M23,成体(前歯)M24,成体(前歯)M25,成体(前歯)M26,成体(前歯)M27,成体(前歯)M28,成体(前歯)M29,成体(前歯)M30,成体(前歯)M31,成体(前歯)M32,成体(前歯)M33,成体(前歯)M34,成体(前歯)M35,成体(前歯)M36,成体(前歯)M37,成体(前歯)M38,成体(前歯)M39,成体(前歯)M40,成体(前歯)M41,成体(前歯)M42,成体(前歯)M43,成体(前歯)M44,成体(前歯)M45,成体(前歯)M46,成体(前歯)M47,成体(前歯)M48,成体(前歯)M49,成体(前歯)M50,成体(前歯)M51,成体(前歯)M52,成体(前歯)M53,成体(前歯)M54,成体(前歯)M55,成体(前歯)M56,成体(前歯)M57,成体(前歯)M58,成体(前歯)M59,成体(前歯)M60,成体(前歯)M61,成体(前歯)M62,成体(前歯)M63,成体(前歯)M64,成体(前歯)M65,成体(前歯)M66,成体(前歯)M67,成体(前歯)M68,成体(前歯)M69,成体(前歯)M70,成体(前歯)M71,成体(前歯)M72,成体(前歯)M73,成体(前歯)M74,成体(前歯)M75,成体(前歯)M76,成体(前歯)M77,成体(前歯)M78,成体(前歯)M79,成体(前歯)M80,成体(前歯)M81,成体(前歯)M82,成体(前歯)M83,成体(前歯)M84,成体(前歯)M85,成体(前歯)M86,成体(前歯)M87,成体(前歯)M88,成体(前歯)M89,成体(前歯)M90,成体(前歯)M91,成体(前歯)M92,成体(前歯)M93,成体(前歯)M94,成体(前歯)M95,成体(前歯)M96,成体(前歯)M97,成体(前歯)M98,成体(前歯)M99,成体(前歯)M100,成体(前歯)M101,成体(前歯)M102,成体(前歯)M103,成体(前歯)M104,成体(前歯)M105,成体(前歯)M106,成体(前歯)M107,成体(前歯)M108,成体(前歯)M109,成体(前歯)M110,成体(前歯)M111,成体(前歯)M112,成体(前歯)M113,成体(前歯)M114,成体(前歯)M115,成体(前歯)M116,成体(前歯)M117,成体(前歯)M118,成体(前歯)M119,成体(前歯)M120,成体(前歯)M121,成体(前歯)M122,成体(前歯)M123,成体(前歯)M124,成体(前歯)M125,成体(前歯)M126,成体(前歯)M127,成体(前歯)M128,成体(前歯)M129,成体(前歯)M130,成体(前歯)M131,成体(前歯)M132,成体(前歯)M133,成体(前歯)M134,成体(前歯)M135,成体(前歯)M136,成体(前歯)M137,成体(前歯)M138,成体(前歯)M139,成体(前歯)M140,成体(前歯)M141,成体(前歯)M142,成体(前歯)M143,成体(前歯)M144,成体(前歯)M145,成体(前歯)M146,成体(前歯)M147,成体(前歯)M148,成体(前歯)M149,成体(前歯)M150,成体(前歯)M151,成体(前歯)M152,成体(前歯)M153,成体(前歯)M154,成体(前歯)M155,成体(前歯)M156,成体(前歯)M157,成体(前歯)M158,成体(前歯)M159,成体(前歯)M160,成体(前歯)M161,成体(前歯)M162,成体(前歯)M163,成体(前歯)M164,成体(前歯)M165,成体(前歯)M166,成体(前歯)M167,成体(前歯)M168,成体(前歯)M169,成体(前歯)M170,成体(前歯)M171,成体(前歯)M172,成体(前歯)M173,成体(前歯)M174,成体(前歯)M175,成体(前歯)M176,成体(前歯)M177,成体(前歯)M178,成体(前歯)M179,成体(前歯)M180,成体(前歯)M181,成体(前歯)M182,成体(前歯)M183,成体(前歯)M184,成体(前歯)M185,成体(前歯)M186,成体(前歯)M187,成体(前歯)M188,成体(前歯)M189,成体(前歯)M190,成体(前歯)M191,成体(前歯)M192,成体(前歯)M193,成体(前歯)M194,成体(前歯)M195,成体(前歯)M196,成体(前歯)M197,成体(前歯)M198,成体(前歯)M199,成体(前歯)M200,成体(前歯)M201,成体(前歯)M202,成体(前歯)M203,成体(前歯)M204,成体(前歯)M205,成体(前歯)M206,成体(前歯)M207,成体(前歯)M208,成体(前歯)M209,成体(前歯)M210,成体(前歯)M211,成体(前歯)M212,成体(前歯)M213,成体(前歯)M214,成体(前歯)M215,成体(前歯)M216,成体(前歯)M217,成体(前歯)M218,成体(前歯)M219,成体(前歯)M220,成体(前歯)M221,成体(前歯)M222,成体(前歯)M223,成体(前歯)M224,成体(前歯)M225,成体(前歯)M226,成体(前歯)M227,成体(前歯)M228,成体(前歯)M229,成体(前歯)M230,成体(前歯)M231,成体(前歯)M232,成体(前歯)M233,成体(前歯)M234,成体(前歯)M235,成体(前歯)M236,成体(前歯)M237,成体(前歯)M238,成体(前歯)M239,成体(前歯)M240,成体(前歯)M241,成体(前歯)M242,成体(前歯)M243,成体(前歯)M244,成体(前歯)M245,成体(前歯)M246,成体(前歯)M247,成体(前歯)M248,成体(前歯)M249,成体(前歯)M250,成体(前歯)M251,成体(前歯)M252,成体(前歯)M253,成体(前歯)M254,成体(前歯)M255,成体(前歯)M256,成体(前歯)M257,成体(前歯)M258,成体(前歯)M259,成体(前歯)M260,成体(前歯)M261,成体(前歯)M262,成体(前歯)M263,成体(前歯)M264,成体(前歯)M265,成体(前歯)M266,成体(前歯)M267,成体(前歯)M268,成体(前歯)M269,成体(前歯)M270,成体(前歯)M271,成体(前歯)M272,成体(前歯)M273,成体(前歯)M274,成体(前歯)M275,成体(前歯)M276,成体(前歯)M277,成体(前歯)M278,成体(前歯)M279,成体(前歯)M280,成体(前歯)M281,成体(前歯)M282,成体(前歯)M283,成体(前歯)M284,成体(前歯)M285,成体(前歯)M286,成体(前歯)M287,成体(前歯)M288,成体(前歯)M289,成体(前歯)M290,成体(前歯)M291,成体(前歯)M292,成体(前歯)M293,成体(前歯)M294,成体(前歯)M295,成体(前歯)M296,成体(前歯)M297,成体(前歯)M298,成体(前歯)M299,成体(前歯)M300,成体(前歯)M301,成体(前歯)M302,成体(前歯)M303,成体(前歯)M304,成体(前歯)M305,成体(前歯)M306,成体(前歯)M307,成体(前歯)M308,成体(前歯)M309,成体(前歯)M310,成体(前歯)M311,成体(前歯)M312,成体(前歯)M313,成体(前歯)M314,成体(前歯)M315,成体(前歯)M316,成体(前歯)M317,成体(前歯)M318,成体(前歯)M319,成体(前歯)M320,成体(前歯)M321,成体(前歯)M322,成体(前歯)M323,成体(前歯)M324,成体(前歯)M325,成体(前歯)M326,成体(前歯)M327,成体(前歯)M328,成体(前歯)M329,成体(前歯)M330,成体(前歯)M331,成体(前歯)M332,成体(前歯)M333,成体(前歯)M334,成体(前歯)M335,成体(前歯)M336,成体(前歯)M337,成体(前歯)M338,成体(前歯)M339,成体(前歯)M340,成体(前歯)M341,成体(前歯)M342,成体(前歯)M343,成体(前歯)M344,成体(前歯)M345,成体(前歯)M346,成体(前歯)M347,成体(前歯)M348,成体(前歯)M349,成体(前歯)M350,成体(前歯)M351,成体(前歯)M352,成体(前歯)M353,成体(前歯)M354,成体(前歯)M355,成体(前歯)M356,成体(前歯)M357,成体(前歯)M358,成体(前歯)M359,成体(前歯)M360,成体(前歯)M361,成体(前歯)M362,成体(前歯)M363,成体(前歯)M364,成体(前歯)M365,成体(前歯)M366,成体(前歯)M367,成体(前歯)M368,成体(前歯)M369,成体(前歯)M370,成体(前歯)M371,成体(前歯)M372,成体(前歯)M373,成体(前歯)M374,成体(前歯)M375,成体(前歯)M376,成体(前歯)M377,成体(前歯)M378,成体(前歯)M379,成体(前歯)M380,成体(前歯)M381,成体(前歯)M382,成体(前歯)M383,成体(前歯)M384,成体(前歯)M385,成体(前歯)M386,成体(前歯)M387,成体(前歯)M388,成体(前歯)M389,成体(前歯)M390,成体(前歯)M391,成体(前歯)M392,成体(前歯)M393,成体(前歯)M394,成体(前歯)M395,成体(前歯)M396,成体(前歯)M397,成体(前歯)M398,成体(前歯)M399,成体(前歯)M400,成体(前歯)M401,成体(前歯)M402,成体(前歯)M403,成体(前歯)M404,成体(前歯)M405,成体(前歯)M406,成体(前歯)M407,成体(前歯)M408,成体(前歯)M409,成体(前歯)M410,成体(前歯)M411,成体(前歯)M412,成体(前歯)M413,成体(前歯)M414,成体(前歯)M415,成体(前歯)M416,成体(前歯)M417,成体(前歯)M418,成体(前歯)M419,成体(前歯)M420,成体(前歯)M421,成体(前歯)M422,成体(前歯)M423,成体(前歯)M424,成体(前歯)M425,成体(前歯)M426,成体(前歯)M427,成体(前歯)M428,成体(前歯)M429,成体(前歯)M430,成体(前歯)M431,成体(前歯)M432,成体(前歯)M433,成体(前歯)M434,成体(前歯)M435,成体(前歯)M436,成体(前歯)M437,成体(前歯)M438,成体(前歯)M439,成体(前歯)M440,成体(前歯)M441,成体(前歯)M442,成体(前歯)M443,成体(前歯)M444,成体(前歯)M445,成体(前歯)M446,成体(前歯)M447,成体(前歯)M448,成体(前歯)M449,成体(前歯)M450,成体(前歯)M451,成体(前歯)M452,成体(前歯)M453,成体(前歯)M454,成体(前歯)M455,成体(前歯)M456,成体(前歯)M457,成体(前歯)M458,成体(前歯)M459,成体(前歯)M460,成体(前歯)M461,成体(前歯)M462,成体(前歯)M463,成体(前歯)M464,成体(前歯)M465,成体(前歯)M466,成体(前歯)M467,成体(前歯)M468,成体(前歯)M469,成体(前歯)M470,成体(前歯)M471,成体(前歯)M472,成体(前歯)M473,成体(前歯)M474,成体(前歯)M475,成体(前歯)M476,成体(前歯)M477,成体(前歯)M478,成体(前歯)M479,成体(前歯)M480,成体(前歯)M481,成体(前歯)M482,成体(前歯)M483,成体(前歯)M484,成体(前歯)M485,成体(前歯)M486,成体(前歯)M487,成体(前歯)M488,成体(前歯)M489,成体(前歯)M490,成体(前歯)M491,成体(前歯)M492,成体(前歯)M493,成体(前歯)M494,成体(前歯)M495,成体(前歯)M496,成体(前歯)M497,成体(前歯)M498,成体(前歯)M499,成体(前歯)M500,成体(前歯)M501,成体(前歯)M502,成体(前歯)M503,成体(前歯)M504,成体(前歯)M505,成体(前歯)M506,成体(前歯)M507,成体(前歯)M508,成体(前歯)M509,成体(前歯)M510,成体(前歯)M511,成体(前歯)M512,成体(前歯)M513,成体(前歯)M514,成体(前歯)M515,成体(前歯)M516,成体(前歯)M517,成体(前歯)M518,成体(前歯)M519,成体(前歯)M520,成体(前歯)M521,成体(前歯)M522,成体(前歯)M523,成体(前歯)M524,成体(前歯)M525,成体(前歯)M526,成体(前歯)M527,成体(前歯)M528,成体(前歯)M529,成体(前歯)M530,成体(前歯)M531,成体(前歯)M532,成体(前歯)M533,成体(前歯)M534,成体(前歯)M535,成体(前歯)M536,成体(前歯)M537,成体(前歯)M538,成体(前歯)M539,成体(前歯)M540,成体(前歯)M541,成体(前歯)M542,成体(前歯)M543,成体(前歯)M544,成体(前歯)M545,成体(前歯)M546,成体(前歯)M547,成体(前歯)M548,成体(前歯)M549,成体(前歯)M550,成体(前歯)M551,成体(前歯)M552,成体(前歯)M553,成体(前歯)M554,成体(前歯)M555,成体(前歯)M556,成体(前歯)M557,成体(前歯)M558,成体(前歯)M559,成体(前歯)M560,成体(前歯)M561,成体(前歯)M562,成体(前歯)M563,成体(前歯)M564,成体(前歯)M565,成体(前歯)M566,成体(前歯)M567,成体(前歯)M568,成体(前歯)M569,成体(前歯)M570,成体(前歯)M571,成体(前歯)M572,成体(前歯)M573,成体(前歯)M574,成体(前歯)M575,成体(前歯)M576,成体(前歯)M577,成体(前歯)M578,成体(前歯)M579,成体(前歯)M580,成体(前歯)M581,成体(前歯)M582,成体(前歯)M583,成体(前歯)M584,成体(前歯)M585,成体(前歯)M586,成体(前歯)M587,成体(前歯)M588,成体(前歯)M589,成体(前歯)M590,成体(前歯)M591,成体(前歯)M592,成体(前歯)M593,成体(前歯)M594,成体(前歯)M595,成体(前歯)M596,成体(前歯)M597,成体(前歯)M598,成体(前歯)M599,成体(前歯)M600,成体(前歯)M601,成体(前歯)M602,成体(前歯)M603,成体(前歯)M604,成体(前歯)M605,成体(前歯)M606,成体(前歯)M607,成体(前歯)M608,成体(前歯)M609,成体(前歯)M610,成体(前歯)M611,成体(前歯)M612,成体(前歯)M613,成体(前歯)M614,成体(前歯)M615,成体(前歯)M616,成体(前歯)M617,成体(前歯)M618,成体(前歯)M619,成体(前歯)M620,成体(前歯)M621,成体(前歯)M622,成体(前歯)M623,成体(前歯)M624,成体(前歯)M625,成体(前歯)M626,成体(前歯)M627,成体(前歯)M628,成体(前歯)M629,成体(前歯)M630,成体(前歯)M631,成体(前歯)M632,成体(前歯)M633,成体(前歯)M634,成体(前歯)M635,成体(前歯)M636,成体(前歯)M637,成体(前歯)M638,成体(前歯)M639,成体(前歯)M640,成体(前歯)M641,成体(前歯)M642,成体(前歯)M643,成体(前歯)M644,成体(前歯)M645,成体(前歯)M646,成体(前歯)M647,成体(前歯)M648,成体(前歯)M649,成体(前歯)M650,成体(前歯)M651,成体(前歯)M652,成体(前歯)M653,成体(前歯)M654,成体(前歯)M655,成体(前歯)M656,成体(前歯)M657,成体(前歯)M658,成体(前歯)M659,成体(前歯)M660,成体(前歯)M661,成体(前歯)M662,成体(前歯)M663,成体(前歯)M664,成体(前歯)M665,成体(前歯)M666,成体(前歯)M667,成体(前歯)M668,成体(前歯)M669,成体(前歯)M670,成体(前歯)M671,成体(前歯)M672,成体(前歯)M673,成体(前歯)M674,成体(前歯)M675,成体(前歯)M676,成体(前歯)M677,成体(前歯)M678,成体(前歯)M679,成体(前歯)M680,成体(前歯)M681,成体(前歯)M682,成体(前歯)M683,成体(前歯)M684,成体(前歯)M685,成体(前歯)M686,成体(前歯)M687,成体(前歯)M688,成体(前歯)M689,成体(前歯)M690,成体(前歯)M691,成体(前歯)M692,成体(前歯)M693,成体(前歯)M694,成体(前歯)M695,成体(前歯)M696,成体(前歯)M697,成体(前歯)M698,成体(前歯)M699,成体(前歯)M700,成体(前歯)M701,成体(前歯)M702,成体(

表4 富里2遺跡 包含層出土動物遺存体ハンドブック資料同定一覧表(2)

調査区	層位	骨%	出土動物	部位	LR	備考
I-22	Bss	276	シカ	椎骨 第二腰椎骨体		鑑定済中心ウ 羽茂集団山崎跡みりウ
		279	シカ	肩甲骨 関節面～尾端基部	R	肩平変形
		277-279-281	シカ	中手骨 遠位端部、背側骨節	?	肩平変形
			不明	部位不明 破片	?	
		118	シカ	中手骨 背側基部	?	
		288	シカ	下顎骨 下顎体2/3CFM1～MD一部	R	鑑定済しい 大型 R 3.MD 4.MD 5 ***4歳6ヶ月か6歳6ヶ月
		325	シカ	中足骨 背側骨節破片	L/R	
		327	シカ	椎骨 第二腰椎骨体～外側関節面上に骨体痕跡		軸心上腕骨?背骨一部
		329	シカ	中手骨 近位端	L	中心大型 肩平変形
		329	シカ	下顎骨 PM1-2および下顎体一部	R	耳上基骨はないが咬合面準列歯みはほぼ一面 軸心3M1 歯列破片
J-21	Bss	322	シカ	肩甲骨 関節面～骨体中位		
		341	シカ	椎骨 第10～11椎骨	L	鑑定済しい
		443	シカ	鳥 鳥	?	
		460	シカ	肋骨 肋骨～肋骨	L	肋骨基部癒合
		467	シカ	椎骨 第三腰椎?椎体-左后部		
		470	シカ	椎骨 頸椎上後部頸突起		
		471	シカ	指総骨 末節骨		完形
		472	シカ	指総骨 中節骨近位端		
		473	シカ	指総骨 末節骨		
		475	シカ	肩甲骨 関節面～肩平部	R	関節上腕骨関節
K-23	Bss	477	シカ	指総骨 中節骨遠位端		
		479	シカ	中足骨 背側基部	L	
		323	シカ?	肩甲骨? 後部一骨?	?	323と同一個体?
		342	シカ?	肩甲骨? 背側基部破片?	?	
		476	シカ?	上腕骨? 近位骨骨節端部	R?	
		324-444	哺乳類	長骨等? 不明	?	
		337	哺乳類	長骨等? 不明破片	?	
		113-250-331-340-343-474	哺乳類	部位不明 破片	?	
		287-326	不明	部位不明 破片	?	
		468-469	不明	部位不明 破片	?	
J-22	Bss	112-114-326-334-335-338-339	不明	遺存状態不良により取り上げ不可		
		122	シカ	上腕骨 遠位端内側	L	背側切痕
		117-118-125-137-135-137-282-283	哺乳類	部位不明 破片		
		119-123-124-128-139-131+133-134-443	不明	部位不明 破片		
		120	不明	部位不明 破片		
		122-130	不明	遺存状態不良により取り上げ不可		
		128	哺乳類	部位不明 破片	?	
		129	哺乳類	部位不明 破片	?	
		45-46-441	不明	遺存状態不良により取り上げ不可		
		K-23	Bss	49	シカ?	椎骨? 背側基部?
50	哺乳類			長骨等 不明破片	?	
418	哺乳類			部位不明 破片	?	7 跡類黒色染色
68-417	不明			部位不明 破片		
47-48-47	不明			遺存状態不良により取り上げ不可		
53	シカ			中心-近位内側骨	R	鑑定済しい 後部なし
439	シカ			肋骨等 中手骨?遠位端		
52	シカ?			肩骨? 骨体基部?	?	
55-69-71	哺乳類			部位不明 破片	?	
51	不明			部位不明 破片		鑑定したシカ角片?
L-23	Bss	94-60-74-77-421-440-441	不明	部位不明 破片-破片		
		70-72	不明	遺存状態不良により取り上げ不可		
		72-420	不明	遺存状態不良により取り上げ不可		
		68	シカ	椎骨 頸椎近位上位骨体	L	肩平変形
		75	シカ	椎骨 遠位端	L	肩平変形 大型
		76	シカ	中手-中足骨 遠位端第一節	?	高型?
		81	シカ	椎骨 遠位端第一節	L	
		82	シカ	椎骨+尺骨体一部 掌骨	R	大型 尺骨骨体下部癒合
		83	シカ	椎骨 骨体外側後部一部完全ウ	L	骨高型 近位肩平変形
		88	シカ	椎骨 近位端	R	骨端内側に深いV字3条
M-24	Bss	56	シカ?	肋骨 関節面骨節端	?	
		79	哺乳類	骨等? 破片一骨?	?	
		80-83	哺乳類	部位不明 破片	?	
		57-60-76	不明	遺存状態不良により取り上げ不可		
		84	不明	遺存状態不良により取り上げ不可		
		85	哺乳類	部位不明 破片?肩甲骨?寛骨?	?	
		86	哺乳類	部位不明 破片	?	
		87	不明	遺存状態不良により取り上げ不可		
		61	シカ	上腕骨 遠位端	R	大型 関節面骨体共に2条の中心長いV字
		N-26	Bss	63	シカ	大腿骨 遠位骨節
64	シカ			中手骨 背側基部		
416	シカ			椎骨 骨体中央部のみ	R	鑑定済しい
432	シカ			角 角根～角幹	?	骨角***春季(4-5月) 後部部に加工痕なし
62	不明			遺存状態不良により取り上げ不可		
438	シカ?			角? 角幹?	?	
407-409	哺乳類			部位不明 破片	?	
410	シカ?			上腕骨? 遠位端内側?	R?	
411	シカ			椎骨 椎体左前部突起 および周辺	L	椎1点不明破片
412	シカ			肋骨		椎1点不明破片
P-26	Bss	413	シカ	椎骨 第一腰椎骨体のみ		
		414	不明	遺存状態不良により取り上げ不可		
		414	不明	遺存状態不良により取り上げ不可		
		414	不明	遺存状態不良により取り上げ不可		
		414	不明	遺存状態不良により取り上げ不可		
		414	不明	遺存状態不良により取り上げ不可		
		414	不明	遺存状態不良により取り上げ不可		
		414	不明	遺存状態不良により取り上げ不可		
		414	不明	遺存状態不良により取り上げ不可		
		414	不明	遺存状態不良により取り上げ不可		
T-28	Bss	418	シカ	下顎骨 下顎体関節面～	L	

表5 フローテーション法 動物同一一覧表(1)

時期	遺構種別 /グリップ・層位	FL.TNo.	土量(m)	回収 重量(g)	出土動物	部位	L/R	重量(g)	備考
近世 アイヌ 文化期	1号平地式 住居跡炉跡 ⅢF-01 /J-21・ⅢbU	1・2・4・ 20・30	12.5	134.9	シカ	第二・五指趾骨 末節骨		1.29	
					哺乳綱	部位不明 破片・細片		131.9	
					サケ属	椎骨 尾椎		0.06	1点
					サケ属	椎骨 破片		0.28	34点 白色・灰白色 ・褐色化
					サケ属	鯉肥		0.01	1点
					サケ科	歯 脱落歯		>0.01	1点
					コイ科?	椎骨 破片		0.03	2点
					魚綱	担鰭骨		>0.01	1点
					魚綱	鰭棘・肋骨 破片細片		1.09	
					ホタテガイ?	殻 破片		0.27	放射肋
近世 アイヌ 文化期	平地式住居? 炉跡灰層 ⅢF-12 /G-20・ⅢbU	44~49	8.0	273.3	シカ	下顎歯 切歯	R	0.19	
					シカ	下顎歯 切歯歯冠	?	0.21	
					シカ	尺骨 滑車切痕一部	L?	-	白色化
					シカ	踵骨 踵骨隆起一部	?	1.11	白色化
					シカ	第二・五指趾中節骨		0.14	白色化
					シカ	中節骨? 近位端		0.25	白色化
					哺乳綱	部位不明 破片・細片		267.65	
					サケ属	椎骨 破片		0.08	22点 白色・灰白色 ・褐色化
					ニシン科?	椎骨		0.01	白色化
					コイ科	下鰓蓋骨	?	0.04	
					魚綱	鰭棘・肋骨 破片		0.8	白色・灰白色・褐色化
					ウバガイ (イガイ?)	殻 殻片	?	2.36	被熱灰白色・剥落
					近世 アイヌ 文化期	灰集中1 ⅢAS-01 /M-25・ⅢbU	3・5・ 11・15・ 26~ 28・37・ 38・42	36.1	270.1
哺乳綱?	指趾骨 末節骨		-						
哺乳綱	部位不明 破片		259.46	白色・灰白色・黒変ほか 変色ないものあり					
カエル目	上腕骨 遠位端~骨幹中央	R	0.03						
カエル目	椎骨		0.01						
サケ科	椎骨 破片		0.74	多数					
サケ科	鯉肥		0.42						
サケ科	棘		5.33						
サケ属	椎骨 破片		0.74	63点					
コイ科	第一頸椎		0.05	2点					
コイ科	椎骨 破片		0.42	14点					
魚綱	椎骨 破片		1.22	11点					
魚綱	鰭棘・肋骨		0.95	白色・灰白色・褐色					
エノタマキガイ	殻 殻片		0.64						
近世 アイヌ 文化期	灰集中2 ⅢAS-02 /M-25・ⅢbU	8・18・ 32	8.2	41.5	シカ	第二・五指趾中節骨		0.62	
					シカ	副手根骨	R	1.6	
					哺乳綱	部位不明 破片		38.65	
					サケ属	椎骨 破片・細片		0.11	12点
					サケ属	遊離歯		>0.01	1点
					コイ科	主上顎骨	R	0.03	1点
					コイ科	主鰓蓋骨 関節面		0.01	1点
					コイ科	角舌骨		0.02	1点
					コイ科	咽頭骨 前枝?	R?	0.06	
					コイ科	椎骨		0.03	3点
					魚綱	下鰓蓋骨? 破片		0.07	4点
					魚綱	鰭棘・肋骨		0.27	
					ホタテガイ?	殻 殻片	?	0.02	灰白色化

表6 フローテーション法 動物同定一覧表(2)

時期	遺構種別 /グリップ・層位	FL.TNo.	土量(m)	回収 重量(g)	出土動物	部位	L/R	重量(g)	備考
近世 アイヌ 文化期	灰窯中3 ⅢAS-03 /L-24・ⅢbU	16・33・ 39	3.3	5.4	哺乳綱	部位不明 破片		5.36	
					サケ属	椎骨 破片		>0.01	1点
					コイ科	椎骨 破片		0.01	2点
					魚綱	部位不明 破片		0.03	5点
近世 アイヌ 文化期	灰窯中4 ⅢAS-04 /I-21・ⅢbU	17・22・ 25・31・ 40・43	5.1	2.6	鳥綱	部位不明 長管骨破片		0.52	1点
					哺乳綱	部位不明 破片・細片		1.74	
					サケ属	椎骨 細片		0.04	12点
					魚綱	鰭棘・肋骨		0.29	
近世 アイヌ 文化期	灰窯中1 ⅢSB-01 /J-21・ⅢbU	29	2.0	1.2	サケ属	椎骨 破片		0.01	2点 白色化
					哺乳綱	部位不明 破片・細片		1.21	3点
縄縄文 文化期	灰窯中4 ⅢBB-04 /G-19 ・ⅢbU～ⅢbL ※ⅢF-02に伴 う焼骨片集中	7・13・ 14・24・ 34・36	25.2	388.0	シカ	中手・中足骨 遠位滑車		1.71	2点
					シカ	中足骨 骨幹骨側破片		1.95	
					シカ	種子骨		0.23	
					シカ	第二・五指趾末節骨		0.37	
					シカ	基節骨 滑車側面		0.45	
					哺乳綱	部位不明 破片・細片		383.29	
縄縄文 文化期	焼土2 ⅢF-02 /G-19・ⅢbL	23・35	5.6	203.8	哺乳綱	顎骨? 歯槽破片?		0.44	
					哺乳綱	部位不明 破片・細片		203.4	
縄文 文化期	焼土3 ⅢF-03 /K-23・ⅢbL	6	1.1	0.0	サケ科	椎骨 破片		0.01	3点
					魚綱	部位不明 破片・細片		0.02	6点
縄文 文化期	焼土5 ⅢF-05 /L-24・ⅢbL	10・41	2.0	0.3	哺乳綱	部位不明 破片		0.15	1点
					コイ科	椎骨		0.04	6点
					サケ属	椎骨 細片		0.01	3点
					魚綱	鰭棘・肋骨 細片		0.05	16点
					不明	部位不明 微細片		0.03	8点
縄文 文化期	焼土8 ⅢF-06 /F・G-19・ⅢbL	12	1.0	1.3	哺乳綱	部位不明 破片		1.25	5点+微細片
					サケ属	椎骨 破片		0.01	1点
					魚綱	部位不明 破片		>0.01	1点
					魚綱	鰭棘・肋骨		0.01	5点
縄文 文化期	焼土7 ⅢF-07 /F-18・19・Ⅲ bL	19	0.6	2.1	哺乳綱	部位不明 破片		2.08	10点+細片
縄文 文化期	焼土8 ⅢF-08 /G-19・ⅢbL	21	2.4	0.5	哺乳綱	部位不明 破片		0.52	8点
					サケ属	椎骨 破片		>0.01	1点
縄文 文化期	焼土9 ⅢF-09 /G-19・ⅢbL	27	0.1	0.1	哺乳綱	部位不明 破片		0.06	3点

引用文献

大森司紀の1980「遺跡出土ニホンジカの下顎骨による性別・年齢・死亡時期査定法」『考古学と自然科学』13, pp. 51-73

高橋 理 2009 「第2節 平成19年度厚真町ニタツナイ遺跡出土動物」『ニタツナイ遺跡(1)』

厚真町教育委員会 pp245-264.

Carden, R. F. and Hayden, T. J. 2002

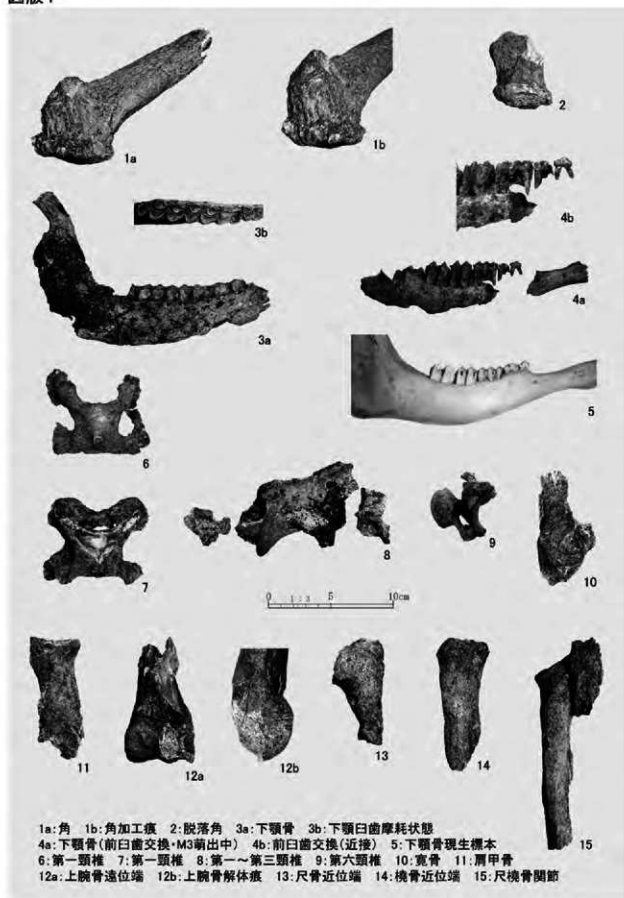
Epiphyseal Fusion in the Postcranial Skeleton as an Indicator of Age at Death of European Fallow Deer (*Dama dama dama*, Linnaeus, 1758)

9th ICAZ Conference, Durham 2002

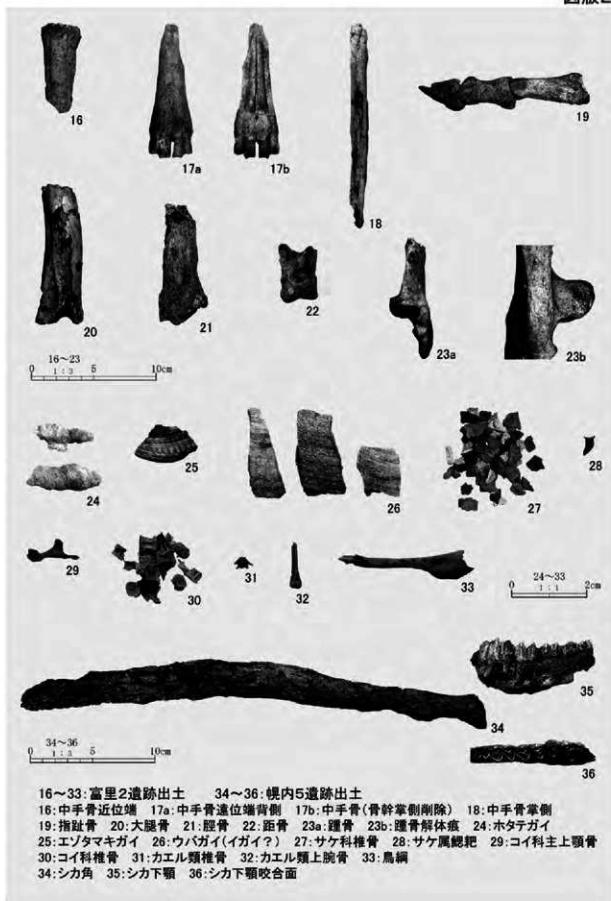
Recent Advance in Ageing and Sexing Animal Bones, 227-236 Oxbow Books

Perdue, J. R. 1983 Epiphyseal closure in white-tailed deer. *Journal of Wildlife Management* 47(4), 1207-1213.

图版1



図版2



第2節 北海道勇払郡厚真町厚幌導水路建設事業調査遺跡出土の炭化種子

1. 厚真町幌内5遺跡から検出された炭化植物種子

札幌国際大学博物館 客員研究員 椿坂恭代

1. 遺跡の所在と性格

遺跡名 : 幌内5遺跡 (J-13-57)

所在地 : 北海道勇払郡厚真町字幌内

調査担当者 : 奈良智法 乾 哲也

調査期間 : 平成21年5月14日～同年7月16日

調査面積 : 1,554m² (うち立会工事700m²)

遺跡の立地 : 幌内5遺跡は厚真川の中流域の幌内地区に所在し、厚真川左岸の河岸段丘上に立地する。

主な時代 : 縄文時代前期前葉～中葉

その他検出遺構・遺物などの詳細については本編を参照されたい。

2. 扱った資料

分析対象として扱った資料は、縄文時代前期前半と考えられる炭化物集中、フレイク・チップ集中、包含層から土壌採取し、フローテーション処理を行い、その後、第1次選別で炭化植物種子などを抽出し送付されてきたものである。資料は実体顕微鏡で観察と撮影を行った。検出された植物種子の出土表は表1に示しておく。

3. 縄文時代前期の遺構から検出された植物種子

ブドウ科 VITIDACEAE (図版1-1a : 1号炭化物集中から出土)

1号炭化物集中から2片出土。出土資料は破片であったが、ブドウ科の特徴である種子腹面の稜の両側に針形の凹みが観察できたことからブドウ科と判断される。細片のため詳細な分類は出来なかった。

クルミ属 *Juglans* L. (図版1-3 : 3号炭化物集中から出土)

各遺構からすべて破片で出土。核表面には縦に浅い溝状の模様がある。これらの特徴からオニグルミ *Juglans sieboldiana* Maximと判断される。いずれも破片のため計測はしていない。

不明果実破片 (図版1-2 : 3号炭化物集中から出土)

3号炭化物集中から1片出土。破片の状況からキハダ属の果実に似るが、資料の保存状態が悪いので、分類は出来なかった。その他に保存状態が窮めて悪いために分類できなかった資料を不明として扱った。

4. まとめ

この遺跡から出土した植物遺体はブドウ科種子が1片のほかは、クルミ属の内果皮の破片であった。北海道におけるクルミ属の出土状況は、縄文時代早期から近世アイヌ文化期まで連続と出土しており、利用の多い食糧資源であることを示している。クルミを食する場合、知里によると核を火にあぶって割れ目が開くのを待って刃物でこじ開けて胚を食べたという（知里 1993）。以前に筆者は現生クルミで半割にする実験を試みたことがある。やはり火であぶるにより容易に半割にすることができ、子葉（胚）を取り出すことができた。

山田悟郎氏によると「縄文時代から出土するクルミ核は丁部、底部、側部のいずれか欠損しており、部分的に炭化した状態のものが多い。食するにあたり、加熱した後に凹石、敲石などを利用して核の部分に打撃を加えて割っていたことを物語る」という観察結果が報告されている（山田 1993）。今回、炭化物集中から纏まってクルミ内果皮の破片が見つかった。こうしたクルミ処理法のプロセスを得て廃棄されたことが推測される。

今回、包含層（Y-27区）に伴出したクルミ属内果皮片から $5,390 \pm 40$ yrBP、包含層（W-18区）に伴出したクルミ属内果皮片から $5,330 \pm 40$ yrBP の ^{14}C 測定値が得られている。この詳細については本編表1を参照していただきたい。

その他に、1号ブレイク・チップ集中遺構からヒエ属種子が1粒検出された。ヒエの形態は栽培型を示すことから、土壌のサンプリングとその処理などの再検討を行った。調査担当者の所見では、サンプリング層位の混入はないという。フローテーション処理作業は、各遺跡から採取した土壌を同じ場所で行っており、今回、他の遺跡からヒエ属種子が多数出土していることなどから、混入の可能性も十分考えられるという。

北海道においてヒエ属種子は縄文時代早期から近世アイヌ文化期まで連続と出土しており、年代を追って粒形が大きく丸くなることが知られている（吉崎 2003）。出土したヒエは栽培形で、「縄文ヒエ」の範疇に分類できない粒形である。

以上のことから、今回、出土した1粒のヒエはフローテーション処理作業、あるいは回収された炭化物の選別作業時に混入した可能性が極めて高いと考える。

参考文献

- 知里真志保 1993：分類アイヌ語辞典 植物編・動物編 184-186 知里真志保著作集 別巻I 平凡社
 山田悟郎 1993：「北海道の遺跡から出土した植物遺体について」- 堅果類を中心として-『古代文化』185-194 第45巻第4号 財団法人 古代学協会
 吉崎昌一 2003：「先史時代の雑穀」-ヒエとアズキの考古植物学-『雑穀の自然史』52-70 山口裕文・河瀬眞琴 編著 北海道大学図書刊行会

表1 幌内5遺跡炭化植物種子出土表

委託No.	種子番号	遺構名/ グリッド	名称	層位	推定年代	ヒエ属 (粒)	ブドウ科 (片)	クルミ属 (g)	不明堅果 (片)	不明 (片)
17		VCB-01	1号炭化物集中	VbM	縄文時代前期		2	61.000		
18		VCB-02	2号炭化物集中	Vc	縄文時代前期			15.000		
19		VCB-03	3号炭化物集中	VbM	縄文時代前期			21.600	1	
20		VFCB-01	1号フレイク・チャップ集中	Vbl.	縄文時代前期	1		5.750		2
21		W-18	包含層	Vc	縄文時代前期			0.069		
22	4							0.379		
29	11	不明	包含層	V	縄文時代前期			0.246		
56	44							0.210		
								0.835		
23	5							0.010		
24	6	X-28	包含層	Vbl.	縄文時代前期			0.048		
47	33							0.019		
								0.077		
25	7	Z-28	包含層	Vbl.	縄文時代前期			0.037		
26	8	X-26	包含層	VbM	縄文時代前期			0.346		
27	9	W-27	包含層	VbM	縄文時代前期			0.112		
28	10	X-18	包含層	VbM	縄文時代前期			0.298		
30	13	X-26	包含層	VbM	縄文時代前期			0.424		
31	15							0.434		
32	16							1.161		
33	17							0.645		
35	20							0.949		
36	21							0.483		
37	22							0.853		
38	23							0.153		
39	24	X-27	包含層	VbM	縄文時代前期			0.119		
40	26							0.094		
41	27							0.787		
42	28							0.205		
43	29							0.227		
49	35							0.263		
51	37							0.275		
52	38							0.215		
								6.863		
34	19							0.207		
44	30							0.449		
45	31	Y-27	包含層	VbM	縄文時代前期			0.038		
53	39							0.639		
54	40							0.300		
								1.333		
46	32	X-28	包含層	VbM	縄文時代前期			0.040		
48	34	Y-27	包含層	Vbl.	縄文時代前期			0.034		
50	36							0.749		
55	41	W-26	包含層	VbM	縄文時代前期			0.126		
								0.875		

は合計重量

図版1

梔内5遺跡



1a

ブドウ科破片



1b

内面



2

不明果実破片

3



クルミ属内果皮片

2. 厚真町富里2遺跡から検出された炭化植物種子

札幌国際大学博物館 客員研究員 椿坂 恭代

1. 遺跡の所在と性格

遺跡名 : 富里2遺跡 (J-13-106)

所在地 : 北海道勇払郡厚真町字富里

調査担当者 : 奈良智法 乾 哲也

調査期間 : 平成21年7月17日～同年10月30日

調査面積 : 770㎡

遺跡の立地 : 遺跡は厚真川中流域の富里地区に所在し、厚真川左岸の標高約33mの河岸段丘上に立地する。

主な時代 : 近世アイヌ文化期、擦文文化期、続縄文時代、縄文時代晩期・後期、その他の検出遺構・遺物などの詳細については本編を参照していただきたい。

2. 扱った資料

分析対象として扱った資料は、近世アイヌ文化期、擦文文化期、続縄文時代の各遺構から土壌を採取し、フローテーション処理を行い、その後、第1次選別で炭化植物種子などを抽出し送付されてきたものである。資料は実体顕微鏡で観察と撮影を行った。検出された植物種子の出土表は表2に示しておく。

3. 各時期の遺構から検出された炭化植物種子

イネ *Oryza sativa* L. (図版2-1a: 1号平地式住居跡から出土。2a: 12号焼土から出土。3a: 灰集中1から出土)

近世アイヌ文化期の遺構(1号平地式住居跡、灰集中1・12号焼土)から合わせて11粒と6片が出土。果実は長楕円形で腹面に胚があり、左右の側面にやや隆起した縦の稜線が2本ある。出土資料は2a, 3a、示した煮沸による変形したものが多かった。1aの計測値は長さ4.00×幅2.20×厚さ1.60 (mm)、2a: 長さ5.10×幅2.60×厚さ1.90 (mm)、3a: 長さ5.10×幅3.20×厚さ2.20 (mm)

オオムギ *Hordeum vulgare* L. (図版2-4a: 獣骨集中3から出土)

近世アイヌ文化期の遺構(獣骨集中3)から1粒出土。果実は紡錘状楕円形。腹面中央には縦溝があり、背面はほぼ平らで基部に楕円形の胚があり果実の表面は粗面である。出土資料の保存状態は極めて悪いが、腹面、背面に残る穎の剝離の痕跡が見られないことと粒形の特徴からみて、裸性のオオムギである(椿坂 1998)。計測値は長さ4.50×幅2.90×厚さ2.50 (mm)

アワ *Setaria italica* (L.) P. Beauv. (図版2-5a: 灰集中4から出土)

近世アイヌ文化期の遺構(1号平地式住居跡、灰集中4・12号焼土)から合わせて7粒と擦文文化期の7号焼土から1粒出土。穎果はやや球形。背面には果長の2/3ほどの胚があり、その反対側の腹面には小さなヘラ型のヘソがある(椿坂 1998)。出土資料は写真5aに示すように内・外穎のとれた穎果の状態のものがほとんどであった。計測値は長さ1.25×幅1.10×厚さ0.90 (mm)

ヒエ属 *Echinochloa* Beauv. (図版2-6a: 1号平地式住居跡から出土。7a・8a・9a: 灰集中1から出土、10a: 2号焼土から出土。)

近世アイヌ文化期の遺構(1号平地式住居跡、灰集中1・2・3・4、12号焼土、礫集中1)

から合わせて305粒出土。穎果は広楕円形。背面には果長の2/3ほどを占める楕円形の大きな胚があり、その反対側の腹面にはヘラ型状のヘソがある(椿坂 1998)。検出された資料は写真6a, 7aに示すように内・外穎のとれた穎果の状態のものがほとんどで、栽培型のヒエ *Echinochloa utilis* Ohwi et Yabunoの形態をもつ。中には8aに示した小穂や9aの煮沸による変形した状態のものが少数混在していた。また縄文時代の2号焼土から10aに示す栽培型のヒエが1粒出土。住居の炉跡、灰集中遺構からの出土数は多かったが被熱による変形が著しいので、一定数の計測はしていない。6aの計測値は長さ1.70×幅1.60×厚さ1.00 (mm)、7a: 長さ1.75×幅1.45×厚さ1.00 (mm)、8a: 長さ2.50×幅1.70×厚さ1.20 (mm)、9a: 長さ1.95×幅1.70×厚さ1.05 (mm)、10a: 長さ1.75×幅1.60×厚さ1.05 (mm)

キビ *Panicum miliaceum* L. (図版2-11a: 8号焼土から出土)

擦文文化期の遺構(5・8号焼土)から合わせて6粒出土。穎果はやや球形または広卵形。背面には果長の1/2ほどの胚があり、その反対側の腹面にはヘラ型状のヘソがある(1993 椿坂)。出土資料は、写真11aに示すようにすべて内・外穎のとれた穎果の状態で出土。計測値は長さ2.00×幅1.90×厚さ1.35 (mm)

シソ属 *Perilla* L. (図版3-12a: 1号平地式住居炉跡から出土)

近世アイヌ文化期の遺構(1号平地式住居炉跡、灰集中1・12号焼土)から合わせて12粒と、擦文文化期の遺構(5・8号焼土)から1粒ずつ出土。種子は扁平球形でその表面に大きな網目状の模様がある。この形態を持つ種子にエゴマ *Perilla frutescens* var. *japonica*とシソ *Perilla frutescens* var. *japonica*がある。両者とも形態と表皮の構造が類似している部分が多く、分類は困難である。計測値は長さ1.70×幅1.30×厚さ1.20 (mm)

マメ科 LEGUMINOSAE (図版3-13a: 12号焼土から出土)

近世アイヌ文化期の遺構(12号焼土)から1粒出土。種子は長楕円形。腹面には種子長軸に対して2/3ほどの広線形で平坦な形をしたヘソがある。13aに示した資料はヘソが剥離しており、また1粒のため初生葉の確認は出来なかったが、大きさや粒形の特徴からアズキ *Vigna angularis* Ohwi et Ohashiと判断される。計測値は長さ6.90×幅3.90×厚さ1.40 (mm)

ササ属 *Sasa Makino et Shibata* (図版3-14a: 灰集中1から出土)

近世アイヌ文化期の遺構(灰集中1)から1粒出土。果実は狭卵形でやや扁平で先端は細く尖っている。背面はわずかに曲線をなし、果実下部に半円形の小さな胚がある。腹面はよく湾曲する。これらの特徴はササ属 *Sasa Makino et Shibata*の種子と判断される。計測値は長さ5.70×幅3.40×厚さ3.00 (mm)

タデ科 POLYGONACEAE (図版3-15: 1号平地式住居炉跡から出土)

近世アイヌ文化期の遺構(1号平地式住居炉跡、灰集中1)からと縄文時代の遺構(2号焼土の焼骨層)から出土。瘦果は三角状紡錘形ものが出土。これらの特徴からタデ属 *Polygonum* L.に分類される。タデ属は形態の類似した種類が多いので詳細な分類は困難である。計測値は長さ1.80×幅1.00 (mm)

マタタビ属 *Actinidia* Lindl. (図版3-16: 1号平地式住居炉跡から出土)

近世アイヌ文化期の遺構(1号平地式住居炉跡)から出土。種子は長楕円形。種皮には凹点による網目模様がある。この仲間はマタタビ *Actinidia polygama* Planch. et Maxim.と

サルナシ *Actinidia arguta* Planch. があるが、両者の種子は形態と表面組織がきわめて良く似ているので分類は困難である。粒形の特徴からサルナシであろう。計測値は長さ1.90×幅1.20×厚さ0.85 (mm)

ニワトコ属 *Sambucus* L. (図版3-17a: 灰集中1から出土)

近世アイヌ文化期の遺構(灰集中1)からと擦文文化期の遺構(8号焼土)から出土。種子は狭楕円形で背面は凹みがあり、腹面は鈍稜をなす。種子は皺状に隆起した模様があり粗面である。これらの特徴からニワトコ *Sambucus racemosa* L. と判断される。ただし、日本では本州北部から北海道の林中にエゾニワトコ *S. buergeriana* var. *miquelii* (Nakai) Hara が分布すると言う。計測値は長さ1.30×幅1.40×厚さ0.60 (mm)

ブドウ科 VITIDACEAE (図版3-18a: 灰集中1から出土)

近世アイヌ文化期の遺構(1号平地式住居跡、灰集中1・2・4、12号焼土)からと擦文文化期の遺構(5号焼土)からと統縄文時代の遺構(2号焼土の焼骨層)から出土。堅果は広倒卵形、背面は凹みがあり、倒へら形の凹みがある。腹面の中央に稜があり、稜の両側に針形の凹みがある。形態の類似した種子にエビツル *Vitis ficifolia* Bunge var. *lobata* があるが、その分布域は北海道の南部に限られているという。形態の特徴からヤマブドウ *Vitis coignetiae* Pulliat であろう。計測値は長さ4.00×幅3.20×厚さ2.10 (mm)

キハダ属 *Phellodendron* Rupr. (図版3-19: 灰集中1から出土)

近世アイヌ文化期の遺構(灰集中1・2)から出土。種子は半横広卵形で表皮に浅い凹みによる網目模様がある。これらの特徴からキハダ *Phellodendron amurense* Rupr. と判断される。計測値は長さ4.00×幅2.30×厚さ1.30 (mm)

ウルシ科 ANACARDIACEAE (図版3-20: 灰集中4から出土)

近世アイヌ文化期の遺構(灰集中4)から出土。種子は歪んだ扁円形でやや扁平で先端は急に尖る。北海道ではこれらと類似した形態を持つ種子としてヤマウルシ *Rhus trichocarpa* Miq.、ツタウルシ *Rhus ambigua* Lavalley ex Dippel.、ヌルデ *Rhus javanica* L. がある。ウルシ科種子は形態の変異が大きいので種までの分類は困難である。出土資料はヤマウルシの形態に似る。計測値は長さ2.45×幅3.20×厚さ1.90 (mm)

ミズキ属 *Cornus* L. (図版3-21: 獣骨集中3から出土)

近世アイヌ文化期の遺構(灰集中4・獣骨集中3)からと統縄文時代の遺構(2号焼土の焼骨層)から出土。核は偏球形で浅い縦溝があり、先端に穴がある(写真では上部にあたる)。この特徴からミズキ *Cornus controversa* Hensley と判断される。計測値は長さ3.40×幅4.10 (mm)

サクラ属 *Prunus* L. (図版3-22a: 灰集中2から出土)

近世アイヌ文化期の遺構(灰集中2)からと統縄文時代の遺構(2号焼土の焼骨層)から出土。核は広楕円形で核面は粗面である。サクラ属の形態を示す。サクラ属は同じような形態が多いので詳細な分類は困難である。計測値は長さ5.00×幅3.50×厚さ3.00 (mm)

クマシデ属 *Carpinus* L. (図版3-23: 12号焼土から出土)

近世アイヌ文化期の遺構(12号焼土)からと統縄文時代の遺構(2号焼土の焼骨層)から出土。堅果は狭楕円形。北海道ではアカシデ *Carpinus laxiflora* (Sieb. et Zucc.) Blume. とサワシバ *Carpinus cordata* Blume が分布する。アカシデは十勝以西の太平洋岸に分布し、サワシバは渡島管

内に多く北部は少ないという。形態はサワシバの特徴を示す。計測値は長さ3.30×幅2.00×厚さ1.50 (mm)

クルミ属 *Juglans* L. (図版3-24a: 灰集中1から出土)

近世アイヌ文化期の遺構(1号平地式住居跡、灰集中1・2・3)からすべて細片で出土。核表面には縦に浅い溝状の模様がある。これらの特徴からオニグルミ *Juglans sieboldiana* Maximと判断される。いずれも細片のため計測はしていない。

冬芽 (図版3-25: 灰集中1から出土)

近世アイヌ文化期の遺構(灰集中2・4)からと縄文時代の遺構(2号焼土の焼骨層)から出土。手元に現生の比較資料がないので詳細な分類は出来なかった。計測値は長さ3.00×幅1.30 (mm)

不明1 (図版3-26: 灰集中1から出土、27a: 獣骨集中3から出土)

資料26: 近世アイヌ文化期の遺構(灰集中1)から出土。写真26に示した資料は卵状長楕円形。形はアサダ種子に似るが、種子の大きさと表皮の構造が異なる。資料27a: 近世アイヌ文化期の遺構(獣骨集中3)からと縄文時代の遺構(2号焼土の焼骨層)から出土。両資料とも手元に現生の比較資料がないので、分類は出来なかった。26の計測値は長さ4.50×幅2.00×厚さ1.55 (mm)、27a: 長さ4.30×幅3.10×厚さ2.60 (mm)

菌類? (図版3-28a: 灰集中2から出土)

近世アイヌ文化期の遺構(灰集中2・3・4、獣骨集中3)からと縄文時代の遺構(2号焼土と焼骨層)から出土。出土資料は同じ種類であるが、大きさがそれぞれ違う。種子や堅果類ではないようであるが、その実態は不明である。計測値は長さ7.60×幅3.50×厚さ6.00 (mm)

その他にアワ、ヒエ属のいずれかであるが変形と破損で分類できなかったものを不明ミレットとして扱った。また保存状態が窮めて悪いので分類できなかった資料を不明2として扱った。

4. まとめ

富里2遺跡の調査では、近世アイヌ文化期と擦文文化期、縄文時代の植物遺体が得られた。近世アイヌ文化期の遺構からは栽培植物のイネ、オオムギ(裸性)、アワ、ヒエ、アズキ、シソ属と野生植物では草本のササ属とタデ科、木本類のマタタビ属、ニフトコ属、ブドウ科、キハダ属、ウルシ科、ミズキ属、クマシデ属、サクラ属、クルミ属、冬芽である。擦文文化期の遺構からは栽培植物のアワ、キビ、シソ属と木本類のニフトコ属とブドウ科が検出されている。その他に縄文時代の遺構からはヒエ属と野生植物草本のタデ科、木本類のブドウ科、ミズキ属、クマシデ属、サクラ属、冬芽が検出された。野生植物は集落の周囲に一般的に認められる草本と木本のもので、総じて可食性あるいは利用可能のものが多い。栽培植物の組成は厚真川上中流域の近世アイヌ文化期、擦文文化期の遺跡に一般的に見られるものである。

今回、近世アイヌ文化期の遺構からイネが比較的多く検出された。イネについては、擦文文化期、中・近世アイヌ文化期からの報告例は増加してきているが、それが在地生産であるのかどうかは不明である。イネの出土分布は今のところ北海道西部、石狩平野に限られており、道東、道北部からは確認されていない状況である。

縄文時代の遺構から栽培型のヒエ属種子が1粒検出されている。調査担当者の所見では、サンプリング層位の混入はないという。北海道においてヒエ属種子は縄文時代早期から近世アイヌ文化期まで連続と出土しており、年代を追って粒形が大きく丸くなることが知られている(吉崎 2003)。

ヒエ属種子の粒形は統縄文時代から栽培型に類する特徴を示すものが多くなる(1998 吉崎・椿坂)。しかし地域によってはイヌビエの形態を示すものばかりの例もある(1995 吉崎・椿坂)。

検出された1粒のヒエはこの地域の統縄文時代の検出例はないので明確な判断はできない。またフローテーション処理作業、あるいは回収された炭化物の選別作業時に混入した可能性も考えられることから、今後、統縄文時代の資料の増加を待って検討したい。

今回、1号平地式住居跡に伴出したクルミ属内果皮片から320±30yrBP、灰集中1に伴出したクルミ属内果皮片から290±30yrBPの¹⁴C測定値が得られている。この詳細については第5部第1章第1節を参照していただきたい。

引用文献

- 椿坂恭代(1993)「アワ・ヒエ・キビの同定」吉崎昌一先生還暦記念論文集『先史時代と関連科学』261-281 吉崎昌一先生還暦記念論文集刊行会
- 椿坂恭代(1998)「オオムギについて」『道を辿る』245-250 石附喜三男先生を偲ぶ刊行委員会
- 吉崎昌一(2003)「先史時代の雑穀 -ヒエとアズキの考古植物学-」『雑穀の自然史』52-70 山口裕文・河瀬眞琴 編著 北海道大学図書刊行会
- 吉崎昌一・椿坂恭代(1995)「H317遺跡から検出された植物種子」『H317遺跡』238-253、図版92-97 札幌市文化財調査報告書46 札幌市教育委員会
- 吉崎昌一・椿坂恭代(1998)「茂別遺跡から出土した炭化植物種子について」『上磯町 茂別遺跡』第2分冊 84-99 北理調報121 財団法人 北海道埋蔵文化財センター

3. 平成20・21年度 厚真町ニタツナイ遺跡から検出された炭化植物種子

札幌国際大学博物館 客員研究員 椿坂 恭代

1. 扱った資料

分析対象として扱った資料は、平成20年度に道路部分の立会調査を行った際に、擦文文化期の竪穴住居跡1軒とアイヌ文化期の灰集中遺構と炭化物集中が検出された。各遺構から土壌を採取し、フローテーション処理を行い、その後、第1次選別で炭化植物種子などを抽出し送付されてきたものである。資料は実体顕微鏡で観察と撮影を行った。検出された植物種子の出土表と図版は表3、図版4に示しておく。

2. 検出された植物種子について

アイヌ文化期の遺構から検出された植物種子は栽培植物のヒエ属とアサ、野生植物では草本のタデ科、木本類のニワトコ属、マタタビ属、ミズキ属、ブドウ科、スモモ、コナラ属、クルミ属、冬芽であった。ヒエ属については図版4-7に示した内・外穎のとれた状態で、その粒形の特徴から栽培型のヒエ *Echinochloa utilis* Ohwi et Yabunoである(椿坂 1993)。

擦文文化期の遺構からは栽培植物のオオムギ、アワ、キビ、シソ属、アサと堅果類のクルミ属であった。この中でオオムギについては、図版4-1に示した腹面、背面に残る穎の剥離の痕跡が見られないことと、粒形の特徴からみて裸性のオオムギである(椿坂 1998)。両時期から得られた出土種子は平成19年度の発掘調査(椿坂 2009)で検出されたものばかりであった。

今回、竪穴式住居跡の炉跡から検出されたオオムギ3粒の放射性炭素年代測定(AMS測定)を行い、 $1000 \pm 30 \text{ yr BP}$ の測定結果が得られている。この詳細については第5部第1章第1節を参照していただきたい。

引用文献

椿坂恭代

1993:「アワ・ヒエ・キビの同定」『先史時代と関連科学』261-281 吉崎昌一先生還暦記念論文集刊行会

1998:「オオムギについて」『道を辿る』245-250 石附喜三男先生を偲ぶ刊行委員会

2009:「厚真町ニタツナイ遺跡から検出された植物種子」『ニタツナイ遺跡(1)』265-276

厚幌湧水路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査 厚真町教育委員会

図版2

富里2遺跡



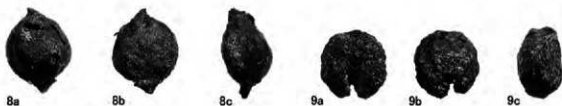
1a 1b 2a 2b 3a 3b
イネ腹面 側面 イネ腹面 側面 イネ腹面 側面



4a 4b 4c 5a 5b 5c
オオムギ? 背面 腹面 側面 アワ背面 腹面 側面



6a 6b 6c 7a 7b 7c
ヒエ属背面 腹面 側面 ヒエ属背面 腹面 側面



8a 8b 8c 9a 9b 9c
ヒエ属小穂外穎側 内穎側 側面 ヒエ属背面 腹面 側面



10a 10b 10c 11a 11b 11c
ヒエ属背面 腹面 側面 キビ背面 腹面 側面

図版3

富里2遺跡



図版4

ニタツナイ遺跡
縄文文化期

1 オオムギ背面

腹面

側面

2 アワ背面

腹面

側面

6号竪穴住居伊藤から出土
L4. 20×W3. 30×T2. 20(mm)6号竪穴住居から出土
L1. 55×W1. 30×T1. 10(mm)

3 キビ背面

腹面

側面

4 シソ属背面

腹面

5 アサ

6 クルミ属内核片

6号竪穴住居伊藤から出土
L1. 90×W1. 70×T1. 30(mm)6号竪穴住居伊藤から出土
L2. 30×W1. 70×T1. 35(mm)6号竪穴住居から出土 6号竪穴住居
から出土
L3. 40×W2. 80(mm)

近世アイヌ文化期



7

ヒエ属背面

腹面

側面

8

タデ科

9

マタタビ属

10

ニワトコ属

炭化物集中13から出土
L1. 50×W1. 50×T0. 70(mm)炭化物集中13から出土
L1. 65×W1. 05(mm)炭集中15から出土
L2. 10×W1. 55×T0. 75(mm)炭集中15から出土
L2. 60×W1. 45×T0. 80(mm)

11

ミズキ属

12

ブドウ科背面

腹面

13

スモモ内果皮片

内面

灰集中16から出土
L4. 00×W3. 50(mm)灰集中15から出土
L4. 70×W3. 70×T2. 90(mm)灰集中16から出土
L11. 80(mm)

14

ブナ科ヘソ

灰集中15から出土
L5. 00(mm)

15

冬芽

炭化物集中13から出土
L3. 30×W1. 90(mm)

16

不明I

同左
L4. 80×W2. 20(mm)

17

不明I

同左
L11. 0×W4. 30(mm)

18

菌類?

内面

同左
L4. 70×W4. 60(mm)

引用・参考文献

- 赤石慎三 1986 「道央部における縄文晩期後半の土器群について」『郷土の研究 5』 苫小牧郷土文化研究会
- 旭川市教育委員会 1991 『末広 7 遺跡』
- 厚真町 1986 『厚真町史』
- 厚真町 1998 『増補 厚真町史』
- 厚真町教育委員会 2002a 『鯉沼 2 遺跡』
- 厚真町教育委員会 2002b 『豊川 1 遺跡』
- 厚真町教育委員会 2004 『厚幌 1 遺跡』
- 厚真町教育委員会 2005 『鯉沼 3 遺跡』
- 厚真町教育委員会 2006a 『上幌内モイ遺跡 (1)』
- 厚真町教育委員会 2006b 『鯉沼 3 遺跡 (2)』
- 厚真町教育委員会 2007a 『上幌内モイ遺跡 (2)』
- 厚真町教育委員会 2007b 『鯉沼 3 遺跡 (3)』
- 厚真町教育委員会 2009a 『上幌内モイ遺跡 (3)』
- 厚真町教育委員会 2009b 『ニタツナイ遺跡 (1)』
- 厚真町教育委員会 2010 『厚幌 1 遺跡 (2)・幌内 7 遺跡 (1)』
- 厚真町幌内自治会 1997 『開基百年 幌内のあゆみ』
- 厚真村 1956 『厚真村史』
- 厚真村郷土研究会 1956 『厚真村古代史』
- 石狩町教育委員会 1975 『W a k k a o i - 石狩・八幡町遺跡ワッカオイ地点調査報告書-』
- 出穂雅実 2006 「第 III 章第 2 節 ジオアーケオロジー」『上幌内モイ遺跡 (1)』厚真町教育委員会
- 井上 巖 2006 「第 IV 章第 4 節 上幌内モイ遺跡出土土器の胎土分析」『上幌内モイ遺跡 (1)』厚真町教育委員会
- 恵庭市教育委員会 2000 『カリンバ 2 遺跡第 IV 地点』
- 大泉博嗣 1987 「第 2 章第 2 節 遺構の分類」『苫小牧東部工業地帯の遺跡群 II』苫小牧市教育委員会
- 岡崎克則 2003 「掘り起こされた大森林 100 年前の森を調べる」『ヒグマだって生きている』1997～2003 野生動物のすめる森づくり資料集 p94.95 野生動物のすめる森づくりネットワーク
- 小嶋 尚・小野有五 他 2003 『日本の地形 2 北海道』東京大学出版会
- 上ノ国町教育委員会 1987 『上ノ国漁港遺跡』
- 亀井喜久太郎 1956 「厚真出土の土偶」『先史時代 3』 先史学同好会
- 菊池俊彦 2009 「弥文時代後半からアイヌ文化初期に見られる北方交易」
『厚真町の発掘成果を語る会 アイヌ文化成立前後をめぐる 資料集』厚真町教育委員会
- 合地信生 2009 「第 VII 章第 9 節 厚真町上幌内モイ遺跡出土縄文土器の胎土分析」『上幌内モイ遺跡 (3)』厚真町教育委員会
- 静内町教育委員会 1985 『静内町清水丘における考古学的調査』
- 関根 達人 2009 「出土近世陶磁器からみた蝦夷地の内国化」日本考古学 第 28 号
- 早田 勉 2006 「第 IV 章第 1 節 上幌内モイ遺跡後期更新統の層序とテラフ」『上幌内モイ遺跡 (1)』厚真町教育委員会
- 高橋 理 2004 「第 V 章第 2 節 北海道勇払郡厚幌 1 遺跡の動物遺存体」『厚幌 1 遺跡』厚真町教育委員会
- 田近 淳・大津 直・八幡正弘 2004 「第 V 章第 5 節 厚幌 1 遺跡の地すべり堆積物」『厚幌 1 遺跡』厚真町教育委員会
- 千歳市教育委員会 1986 『梅川 3 遺跡における考古学的調査』

- 千歳市教育委員会 2002 『梅川4遺跡における考古学的調査』
- 苫小牧市教育委員会 1986 『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅰ』
- 苫小牧市教育委員会 1987 『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅱ』
- 苫小牧市教育委員会 1990 『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅲ』
- 苫小牧市教育委員会 1993 『美沢11遺跡』
- 苫小牧市教育委員会 2002 『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅵ』
- 三石町教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財調査センター 1988 『ショップ遺跡』
- 野澤 謙庵 1692 『蝦夷記』『續々群書類従第九』 國書図書館刊行会
- 花岡正光 2004 「第V章第4節 厚幌1遺跡の完新世テフラについて」『厚幌1遺跡』厚真町教育委員会
- パリナゲム株式会社 2004 「第V章第6節 厚幌1遺跡出土の炭化種子放射性炭素年代測定」『厚幌1遺跡』厚真町教育委員会
- 平取町遺跡調査会 1989 『イルエカシ遺跡』
- 平取町教育委員会 1996 『カンカン2遺跡』
- 平取町教育委員会 1996 『平取町田平取小学校植物園遺跡』
- 平取町教育委員会 1999 『平取町田平取小学校植物園遺跡』
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1981 『III 社台1遺跡』『社台1遺跡・虎杖浜4遺跡・千歳4遺跡・富岸遺跡』北理調報1
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1983 『千歳市ママチ遺跡』北理調報9
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1983 『栄丘遺跡』北理調報16
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1986 『エオイチャシ跡・ボロモイチャシ跡・二風谷遺跡』北理調報26
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1989 『小樽市忍路土場・忍路5遺跡』北理調報53
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1992 『美沢川流域の遺跡群 XV (第1分冊)』北理調報77
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1997 『美々・美沢-新千歳空港の遺構と遺物-』
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1998 『千歳市キウス5遺跡(5) A-2地区(第2分冊)』北理調報125
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2003 『厚真町浜厚真3遺跡』北理調報186
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2009 『白老町虎杖浜2遺跡(5)・ボンアヨロ4遺跡(2)』北理調報262
- (財)瀬戸市埋蔵文化財センター 2002 『瀬戸・美濃大室編年の再検討』研究紀要 第10輯
- (財)東京都埋蔵文化財センター 2000 『汐留遺跡Ⅱ』
- 益富 壽之助 1987 『原色岩石図鑑』(全改訂新版) 保育社
- 松浦武四郎・吉田常吉 1962 『蝦夷日誌 上 東蝦夷日誌』時事通信社
- 松浦武四郎・秋葉実・高倉信一郎 1985 『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』中 北海道出版企画センター
- 松野久也・石田正夫 1960 『1:50,000地質図幅説明書 早来』北海道開発庁
- 養島栄紀 2005 「松浦武四郎の旅程からみた胆振東部・日高西部の古交通路」『前近代アイヌ民族における交通路の研究(胆振・日高1)』苫小牧駒澤大学環太平洋・アイヌ文化研究所
- 吉崎昌一・橋坂岳代 2004 「第V章第1節 北海道勇払郡厚幌1遺跡の植物種子」『厚幌1遺跡』厚真町教育委員会

報告書抄録

ふりがな	あつまちょう ほろない5いせき(1)・とみさと2いせき・にたつがないいせき(2)
書名	厚真町 幌内5遺跡(1)・富里2遺跡・ニタツナイ遺跡(2)
副書名	国営土地改良事業勇払東部(二期)地区厚幌専水路建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	3
編著者名	奈良智法・乾 哲也・山田和史
編集機関	厚真町教育委員会
所在地	〒059-1601 勇払郡厚真町京町165番地の1
発行機関	厚真町教育委員会
発行年月日	2010年5月
ふりがな	ほろない5いせき、とみさと2いせき、にたつがないいせき
収録遺跡	幌内7遺跡、富里2遺跡、ニタツナイ遺跡
所在地	幌内5遺跡：勇払郡厚真町字幌内1032-1ほか 富里2遺跡：勇払郡厚真町字富里389-1 ニタツナイ遺跡：勇払郡厚真町字富里299-1ほか
市町村コード	01581
遺跡番号	幌内5遺跡：57 富里2遺跡：106 ニタツナイ遺跡：104
北緯	幌内5遺跡：42° 45' 06" 富里2遺跡：42° 45' 13" ニタツナイ遺跡：42° 44' 51"
東経	幌内5遺跡：141° 57' 28" 富里2遺跡：141° 55' 24" ニタツナイ遺跡：141° 55' 51"
調査期間	2009年5月14日～2009年10月30日
調査面積	幌内5遺跡：854㎡(工事立会700㎡) 富里2遺跡：770㎡ ニタツナイ遺跡：95㎡(工事立会)
調査原因	厚幌専水路建設工事
種別	幌内5遺跡：墳墓 富里2遺跡：集落跡 ニタツナイ遺跡：集落跡
主な時代	幌内5遺跡 縄文時代前期・後期。 富里2遺跡 近世アイヌ文化期、弥文文化期、縄文時代後期・晩期。 ニタツナイ遺跡 近世アイヌ文化期、弥文文化期、縄文時代前期。
主な遺構	幌内5遺跡 純縄文～弥文文化期：土坑1基、縄文時代：Tピット1基、土器集中1ヶ所、礫集中1ヶ所、レイクチップ集中1ヶ所、炭化物集中1ヶ所。 富里2遺跡 アイヌ文化期：平地式住居跡1軒、建物跡2軒、焼土1ヶ所、灰集中4ヶ所、礫集中3ヶ所、獣骨集中3ヶ所。純縄文～弥文文化期：土坑1基、焼土10ヶ所、土器集中2ヶ所、礫集中1ヶ所、溝跡1ヶ所、溝跡1ヶ所。縄文時代：Tピット1基。 ニタツナイ遺跡 アイヌ文化期：炭化物集中1ヶ所、灰集中3ヶ所、獣骨集中1ヶ所。弥文文化期：竪穴式住居跡1軒。
主な遺物	幌内5遺跡 春日町式・静内中野式・余市式・タブコブ式土器、石器、剥片類、礫。 富里2遺跡 挿棒、刀子、鈎状鉄製品、内耳鉄鍋片、ガラス玉、弥文土器、縄文晩期中葉土器、縄文後期堂林式土器、石器、剥片類、礫。 ニタツナイ遺跡 刀子、板状鉄製品、板状銅製品、弥文土器、縄文時代前期前葉～中葉土器
要 約	
<p>幌内5遺跡はⅢ層・V層ともに殆ど遺構が検出されていないが、縄文時代前期前葉起原の整地に伴うと考えられる排土層を検出した。本遺構については丘陵頂部に6ヶ所の沢根溝を掘り、範囲を確認したが明瞭な痕跡は認められなかった。富里2遺跡は近世アイヌ文化期の住居跡を検出したほか、台地の土成層を生活の空間にしていることがわかった。弥文文化期においては台地の先端に孤状の溝が認められるという、区画遺構を検出している。遺内では例がなく、規模は異なるが同町の上幌内モイ遺跡で類似する遺構が検出されている。このような区画遺構の検出はアイヌ文化期の成立に深く係わる問題として今後の課題となる。ニタツナイ遺跡は19年度に続き近世アイヌ文化期の遺物が多く出土するほか、カマドを持たない弥文文化期の住居跡が見つかっている。</p>	

厚真町 幌内5遺跡(1)・富里2遺跡・ニタップナイ遺跡(2)

—国営土地改良事業勇払東部(二期)地区

厚幌導水路建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3—

発行日 平成22年5月31日

編集・発行 厚真町教育委員会

〒059-1601 北海道勇払郡厚真町京町165番地の1

TEL(0145)-27-2495 FAX(0145)-27-3178

印刷 清文堂印刷株式会社